

---

# かいぜん！ ～異世界コンサル奮闘記～

---

秦本幸弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かいぜん！ ～異世界コンサル奮闘記～

### 【Nコード】

N0020C0

### 【作者名】

秦本幸弥

### 【あらすじ】

経営コンサルティング会社に勤める松田幸助は深夜残業中に異世界へ召喚されてしまった。

失望の中、旅をしているとある日懐かしい香りが幸助の鼻をくすぐる。

香りの元は閑古鳥の鳴くパスタレストランであった。

幸助はここで現代日本の知識を駆使し、給仕である少女サラと共に経営改善に取り組む。

その行動が国をも巻き込む切っ掛けになるとは知らずに……。

この物語は、幸助がサラリーマン時代の知識を駆使し異世界で様々な店舗の経営改善を行い、成り上がっていく物語である。

書籍化しました。3巻（完結）まで発売中です。

いちど完結しましたが、再び書き始めました。

## 1・行列のできないレストラン（前書き）

本文中に登場する手法は異世界固有のものです。

日本で通用するかどうかは分かりません。

特にパスタレストラン経営の方、参考にする際はご注意ください。

## 1 行列のできないレストラン

「はあ。今日も閑古鳥か……」

誰もいない客席に座り頼杖をつきながら、その店の給仕であるサラは大きなため息をついた。

ここはマドリー王国のとある地方都市にある、パスタを中心としたメニューを提供するレストランである。

今はランチタイムの真っ最中。

こじんまりとした店内にある六つのテーブルには客がひしめき合い、ひっきりなしに注文の声飛びにぎやかな状況が繰り広げられている……のが理想であるが、店内を見渡しても客は一人もいない。ランチタイムだけならまだしも、ディナータイムもこのような感じである。

「もう、暇で死にそう」

そんな状況が開店以来ずっと続いている。

いや、開店直後だけは近所の人に来てくれた。

しかしすぐに物珍しさも無くなったのか、人足はあっという間に遠のいていった。

ごくわずかの人は常連になってくれているものの、それだけでは店は回らない。

頼みの綱である新規客は全然増えてくれない。

たまに来る見ない顔は行商人だったり旅の人がほとんどで、常連になっしてくれはしない。

もちろん経営は火の車である。

家族経営なので、業績が悪いと家庭内も毎日ピリピリとした空気になってしまう。

食事もここ一ヶ月は残り物しか食べていない。

先日も仕入代金の支払いで両親は夫婦げんかをしていた。

思い切って大銅貨三枚もするスープを無料サービスにしたのが原因のようだ。

「何とかしなきゃいけないのに」

焦りはするものの行動には起こせない。

まだ十四歳のサラには何をどうしていいか分からないのだ。

いろいろ考え一時は店内に花を活けていたのだが、経費を理由にそれもできなくなってしまうた。

従って、彼女ができるのは来店してくれた客に笑顔で接客することだけである。

しかし来店客のいない今、それすらすることができない。

一緒に給仕をしていた母ミレーヌは、とうの昔に店の手伝いをやめてしまっている。

「何でかなあ。お父さんの作るパスタ、すっごく美味しいのに」

サラの父アロルドはローマリアン帝国で二十年間料理人として研鑽を積み、一年前に故郷であるこの地に念願の店を構えた。

その腕は宮廷料理人にならないかという誘いがあつたほどであるが、アロルドは自分の店を経営することに拘つたのだ。

トマトベースのソースに帝国産の輸入バジルをふんだんに使用したトマトバジルパスタが一番のオススメであり、それはサラの大好物でもある。

二十年来の夢が実現できるとあって、アロルドはかなり張り切って店づくりをした。

建物は予算の都合で妥協して小さなものとなったが、外装には拘った。

自ら大工に指示を飛ばしイメージと違えば壊してやり直しをさせた。

黒を基調とした壁には三十センチ四方の小ぶりな窓が四枚ついている。

窓にはこの世界では高級品である薄緑色のガラスがはめ込まれている。

重厚感のあるオークでできた扉の上に、小さく『アロルドのパスタ亭』と店名が入っている。

一言でいうならばその佇まいは「お洒落」そのものである。

「んーっ」

サラは声を出しながら両手を頭の上にぐっとやり、伸びをする。

真っ赤なポニーテールが少し揺れる。

ずっと何もしないのも、それはそれで疲れるものだ。

ふう、と言いつつ目を小さな窓の外にやる。

住宅街から市場へとつながるこの道は、人の往来が多い。

馬車や多種多様な人々が行き交っている。

(この中の百人に一人でも来店してくれたらなあ)

そんなことを考えていると、一人の青年が店の前で行ったり来たりしているのが目に留まる。

「あら、お客さんかしら」

サラは窓の外の様子を窺いつつその場から立ち上がり、給仕服である白と黒のエプロンドレスを整え、来店客を迎え入れる用意をする。

「黒髪の人なんて、珍しい」

青年は店の前をうろつろつしながら、時おりその小さな窓から店内を覗くようなそぶりをする。

ちよつと怪しい。サラが少しだけ緊張感を持ったその時、青年は意を決したのか一度頷いた後ドアに手を伸ばした。

ガチャ……。ギイ

重厚な音が静かな店内に響く。

小さな窓ゆえの薄暗い店内に明るい光が差し込む。不安を隠すように精一杯元気な声でサラは挨拶をする。

「いらつしゃいませ！」

青年とサラの眼が合う。

真っ黒な青年の瞳が一瞬見開かれたような気がしたが、サラはそれに気づかない。

少しだけ間が空いた後、青年が口を開く。

「あ、すみません、ここって料理屋さんですか？」

「はい、そうですよ」

「バジルの香りがしたんだけど……」

「あつ、はい！ ここはトマトバジルパスタがオススメの『アロルドの Pasta 亭』です」

「おつ、やっぱり美味しそうな香りの元はここだったんだ。それを



「ご馳走になるよ」

「はいっ。では好きな席にかけてお待ちください！」

そう言い残すと、サラは（強盗じゃなくてよかった）と安心しながらパタパタと急ぎ足で厨房へ向かう。

青年は厨房に一番近い席に座ると、店内に入り一層濃くなったその香りに目尻を下げる。

ほどなくすると厨房から声が聞こえてきた。

「お父さん、お客さんだよ！」

「うん？ なんだ、聞こえない！」

「だ・か・ら、お客さんだってば！」

「お、おう！」

「トマトバジルパスター人前、よろしくね！」

「あいよ」

（この時間に客は僕一人か。お洒落な店構えだったし入るのに勇気が要ったな。でもこのバジルの香り、友達のやってたパスタ屋さんを思い出すし期待大だ。それに今の娘可愛かったなあ。一瞬ドキツとしちゃったよ）

そんなこんなを考えながら窓の外を行き交う人や馬車をぼつと眺める。

光の加減で外から店内は見えなかったが、その逆はよく見える。

剣を下げた冒険者らしき人、ローブを身に纏った魔法使いらしき人、魔獣を連れたテイマー、騎士、商人、子ども、多様な人々が喧騒を織り成している。

「本当にいろんなことがあったなあ」

この世界に来てから半年、この街へは昨日着いたばかりである。ふう、と息をつきながら青年はこの半年間で身に起こっていたことを回想する。

青年の名は松田幸助という。

その名が示す通り生まれは日本、育ちも日本である。海外なんて行ったことは無い。

それがなぜ聞いたこともないような名前の国にいるのか。その理由は半年前に遡る。

「あ、召喚できちゃった」

それが幸助がこの世界で初めて聞いた言葉である。

さっきまで東京の経営コンサルティング会社でいつものように深夜残業をしていたはずであったのだ。

それが気づいたらレンガ造りの古びた部屋の中におり、目の前には薄汚れた白衣を着た推定三十歳くらいの女性がいたのだ。

後で聞いた話だがこの女性はフレン王国という国の筆頭魔法研究者だそうだ。

禁書庫からたまたま発見した召喚魔法を探究心の趣くままに試したところ、運悪く幸助が召喚されてしまったのだ。

「ごめんね。還す方法は見つかってないの」

召喚されたものの幸助は魔法が使えるわけでもなければ剣の才能もなかった。

無責任に召喚してしまったものの、国は幸助の処遇を決めかねて

いたのだ。

そこで幸助は召喚したことを不問とする代わりにこの世界で自由に生活できる保障を要求した。

それが認められ、国からいくらかの謝罪金と市民権をもらうこととなった

果たして幸助は異世界で自由な時間とお金を得ることとなった。

そして悩んだ末、社畜時代には実現することのできなかつた夢である旅に出ることにしたのだった。

文化や文明の違いに戸惑いつつも持ち前の柔軟さでそれを吸収しつつ、何となく決めた方角　西へと足を進めて半年。

国境を越えたどり着いたのがここマドリー王国のアヴィーラ伯爵領であった。

マドリー王国はトマトやワインの名産地である。

この世界では物流が発達しておらず、食べ物もワンパターンになりがちだ。

フレン王国での単調な食事に飽きた幸助は、マドリー王国の豊かな食材に心を癒されたのだった。

温暖な気候で生活もしやすいと住民からの評判も上々だ。

「お待ちせしました。当店自慢のトマトバジルパスタです！」

元気のいい声に幸助は回想から連れ戻された。

コト、とテーブルの上の置かれたその白い器には、燃えたぎるように真っ赤なソースに絡められたパスタが湯気を上げ、濃厚な香りを辺りにふりまいている。

ところどころ緑色のバジルが彩を加えている。

トマトとバジルの香りが鼻孔をくすぐると、おなかの虫がきゅくと鳴り「早く食べる」と催促をする。

「こちらはサービスのオニオンスープです。ではごゆっくり」

テーブルの上にサービスというスープが入ったカップを置くと、サラは厨房へ戻っていった。

「いただきます」

フォークを手に取りパスタを巻き、口へと送り込む。

こちらの世界でも食事は欧米と同様のナイフとフォーク、そしてスプーンで食べる。

「うまい、これは完全なイタリアンだ。トマトの酸味とバジルの香りだけじゃなく、オリーブオイルとニンニクも効いてる。

シンプルだがうまい。素材そのものがいいのか？

もしかしたら今まで食べたトマトソースパスタの中でも最高ランクに入るんじゃないか」

思いがけず訪れた幸せなひと時を幸助は味わう。

しかし幸せな時間はそう長くは続かなかつた。

一度食べたしたら手が止まらない。

あつという間にパスタを食べきった幸助は余韻に浸りつつも残念そうにフォークを置くと、左手にカップを取りスープを流し込む。

このスープも悪くないと幸助は思う。飲みなれたコンソメスープの味だ。この世界では贅沢品と聞いたベーコンも少量ではあるが入っていた。

最後のスープをゴクリと飲み干すと「ごちそうさま」と手を合わせる。

「ふう、美味しかったなあ。いい素材を使ってそうだもんな」

そうつぶやくと同時に頭の中に、はたと疑問が湧き上がる。その疑問を確かめるため、給仕であるサラを呼ぶ。

「ねえ、お嬢さん」

「えっ、ハイ！ 今行きます」

パタパタと音を立ててサラがやってくる。

「すごくおいしかったよ。トマトバジルパスタ」

「でしょ。うちの自慢ですもの！」

そう言いながらサラは小さな胸を張る。

「エッヘン」という声が聞こえてきそうである。

「で、気になるんだけど、これって相当値段が高かったりするの？」

そう、匂いにつられて店に入った幸助は、値段を確認せずに注文してしまったのだ。

これだけの味付けはここ半年間出会ったことがない。

それだけいい素材を使っているのかもしれない。

店構えもお洒落である。

この世界はぼったくりも当たり前のようにある。

流行ってない理由はその価格にあるんじゃないかと考える。

「いいえ、大銅貨八枚ですよ」

「それってこの辺の相場？この街に来たばかりでよく分からないんだけど」

「はい相場内です。どこもランチは大銅貨六枚から十枚くらいですね。それにウチでは先月からは無料でスープもつけてるからかなり安い方だと思いますよ」

この世界の通貨は金貨・大銀貨・銀貨・大銅貨・銅貨で構成され、それぞれ十倍刻みで換算する。

ちなみに銅貨一枚は日本円で十円くらいのイメージだ。もっとも日本とは物の価値も違うので、一日にかける食費で換算した場合であるが。

「うーん、値段が高いわけじゃないのか」

幸助は腕を組みながら考える。

(そうするとやっぱりこの見た目の印象が原因か。正直入りづらかったもんなあ)

「どうかされましたか？」

「いや、ね。余計な話かもしれないけど、こんなに美味しいのに何でこんな閑古鳥泣いてるのかな、と思って。てつきり価格が高いからだと思ってたよ」

「そうじゃ無いんですけどね。どうしてなんででしょう。実は、すごい悩みだったりします」

趣味でやっているから来店客は少なくてもいい、という店主をたまに見かけたことがあったので、幸助はこのパスタレストランもその類なのかと考えたが、どうやらそうでもないらしい。

「毎日こんな感じなの？」

「はい。恥ずかしながら……」

寂しそうに目を伏せるサラ。

そんな姿を見た幸助の心には、可愛い女の子の力にならねばという気持ちが湧き上がる。

幸助が日本で就いていた仕事は、経営コンサルティング業である。店舗の経営改善には何度も携わってきた。

もっともまだ二十五歳の幸助はほとんど先輩社員の言いなり状態だったが。

「こうすればもっとよくなるのに」という想いを押し殺す日々が続いていたのだ。

「あ、すみません。こんなことお客さんに話すことでは無かったです  
すね」

「うっん、全然。僕の方から聞いたことだし。それでねえつと…」

「私、サラって言います！」

解決できる方法があるかもしれないよ、と切り出そうとしたら突然名乗られた幸助。

名乗ってもらったのだからと、幸助も自己紹介する。

「それじゃサラ、僕は松田幸助。幸助って呼んでね」

「はい！ コースケさん」

「それでね、サラ。もしかしたらこの問題を解決できるかもしれないんだけど」

「えっ！ ほんとですか！！」

身を乗り出してその言葉にかじりついてくるサラ。

キラキラの碧い目から盛大な期待感が伝わってくる。

「え、えつとね。このお店はサラとお父さんの二人で切り盛りしてるのかな？」

「はい、本当はお母さんも手伝ってくれていたんだけどこの有様で今は内職をしてるの」

「そうか、そうしたらお父さんと呼んでもらってもいいかな？」

「うん！ ちょっと待っててね。呼んでくる！」

またパタパタと厨房へ走り去るサラ。

その後姿を見て、小動物みたいだなと一人ごちる幸助。

「なんだ、何の用だ？」

厨房からのそのそとガタイのいい男性がやって来る。

その顔は、いかにも『職人』という顔立ちだ。

年の頃は四十代半ばであろうか。身近な茶色の髪に少しだけ白髪が混ざっている。

腕は太く、多くのフライパンを振ってきたんだなという印象が伝わってくる。

「お父さん、もう、ぶっきらぼうなんだから。この方がコースケさんだよ」

「初めまして、松田幸助と申します」

「で、なんだって？ アンタが俺の店を繁盛させてくれるっていうのかい？」

一歩幸助に近寄り、凄んでくるアロルド。

なんでこんなゴツイ人から小動物みたいに可愛い娘が生まれるんだ？



そんなことを考えながらも幸助はアロルドに宣言する。

「はい。あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

## 2・店の問題点と強み

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

声も高らかにそう宣言した幸助。

困っているんだから受けてくれるだろう。絶対の自信をもってアロルドの返事を待つ。

（こつちに来てから目的もなくダラダラしっぱなしだったからな。もしかしたらこれでこの世界での自分の存在価値ができるのかもしれない）

毎日仕事づめだったのが、召喚されたことにより突然やる事が無くなってしまった幸助。

家族や同僚とも会えなくなってしまった。

しかもまだこちらの世界に来て、友と呼べる人もできていない。従って現在、絶賛人恋しいモードに入っている。

サラと仲良くしたいなという下心を抱いていないと言えばそれは嘘になる。

「断る」

「はい、ではその解決法……、えっ!？」

「だから断ると言っている」

「ちょっと、お父さん！ 何言ってるの？ お客さんが増えるって」  
「スケさんが言ってるんだよ！」

サラは黙っている、と言いながらアロルドは続ける。

「何バ力なこと言っただ。料理一筋二十年の俺の味でもこんな有様なんだよ。お前みたいなの若造に解決できるわけねえだろ。」

「だいたい、このソースは俺が十年以上かけて完成させたものだ。味を変えるつもりなんて毛頭ねえぞ。帰った帰った」

「ちよ、まつ、待つてください！」

アロルドは幸助の背中を押し、ドアへといざなう。

「ちゃんとパスタの代金は払ったか？」

「お代はまだ払ってませんし、話だけでも聞いてくださいよ。こんな素晴らしい料理を眠らせておくのは国にとっての損失ですよ！」

幸助がそう言うと、背中を押していたアロルドの手がぴたっと止まる。

「そう、アロルドは味を変えるつもりはないといっているが、幸助もまた同じ意見である。」

「それどころか、この世界で一番美味いとすら思っているのだから。」

「お前、今なんて言った？」

「で、ですから素晴らしい料理を眠らせておくのは国にとっての損失、と」

「恐る恐る繰り返す幸助。」

「ゆっくり振り返ると、アロルドの顔から険しさがみるみる消えていくところだった。」

「国にとっての損失？ お前は俺の料理をそこまで評価してるのか？  
ワハハハ、そうならそうと最初から言ってくれよ」

「今度はバシバシと幸助の背中をたたく。」

「コースケと言ったっけな。俺はアロルドだ」

「アロルドさん、せ、背中、痛いです」

「すまんすまん。そこまで評価してくれると嬉しくてな」

そう言つとアロルドは真面目な顔になる。

「だが、店舗経営の技術というのは門外不出というのが相場だ。それを教えるなんて高い金を請求してこないだろうな。第一、ウチには支払える金なんてねえぞ。材料すらツケの支払いを伸ばしてもらってるんだからな」

「お父さん、ちょっと情けない」

ガクツと頂垂れるサラ。

「そこは安心してください。報酬は頂きますが繁盛してからで結構です」

幸助が日本で勤めていた会社では着手金＋成功報酬という料金プランが人気であった。ちなみに全額後払いは無い。

どう結果が転ぶかわからないことは、やはり後払いが安心できる。そして今の幸助にはフレン王国からもらった謝罪金がある。まだ優に一年は暮らせる金額が残っている。

よって生活するには問題ないため、完全成功報酬プランを提示したのだった。

「何か裏がありそうだな。いや、いい。それならまずはお前の意見を聞こうか。いいか、まだ決めたわけではないからな」

そういつとアロルドはドアを開け、店名の入ったプレートを裏返

す。営業時間外を示すサインだ。

「コースケさん、ここに座ってください」とサラが先ほど幸助が食べていた席の隣のテーブルへ案内する。

遅れて幸助の正面にアロルドが座る。

サラは「お茶入れてくるね」と言い残し、幸助の食べ終わった食器を手に取るとパタパタと厨房へ入っていた。

「はい。では現状の問題点を説明します。まず、味についてですがこれは全く問題ありません。というか、人生の中で一番おいしいパスタでした」

「な、なんだ。面と向かって言われると照れるな」

目を逸らしポリポリと頬をかくアロルド。

「ところで質問なのですが、このお店に常連客はいますか？ そうですね、ひと月に二回以上来てくれているお客さんのことです」

「おう、もちろんいるぜ。隣の奥さんなんか週に一回はトマトバジルパスタを食べないと落ち着かないって言ってくれてな」

「ということは、味は受け入れられているといことの何よりの証拠ですね」

「そういうことなのか？ 俺はてつきりこの地方の人に受け入れられない味なのかもしれない、と思っていたんだが。違ったのか？」

「はい。問題は別なところにありますね」

（アロルドさん興味を持ってくれたみたいだ。懐柔作戦はひとまず成功かな。そろそろ核心へ掘り下げるか）

お茶の用意ができたようでサラがお盆を手にして戻ってきた。

幸助とアロルドそれぞれの前にカップを置き、自分用のカップを

アロルドの隣に置くと、その席へ腰かける。

「このお茶もアヴィーラ伯爵領の名産品なの」

「へえ、おいしそうだな。いただきます」

ズズズツとお茶を啜った後、幸助は話を再開した。

「味が問題ではないということは今お話しした通りです。では、何が問題かわかりますか？」

「全然わからん。味以外のことは考えたこともなかったからな」

即答したアロルドが隣を見るとサラもわからないと首をかしげる。しばし考えたのち、思い出したようにアロルドがポロつと言葉をこぼす。

「ああ、そうだ。値段かもしれないな。先月近所にカフェができてな。そのランチは大銅貨五枚つて値段だったぞ」

「そうだったね、お父さん。それが切っ掛けでスープの無料サービスを始めたもんね」

うんうんと頷きながらサラが続けた。

「そう、スープがついてましたね、パスタに。実はこれも経営を苦しめる要因の一つだったかもしれませんが」

幸助がそう言うと、とたんにアロルドの表情が険しくなる。

「何だって、お前はスープは美味くなかったって言うのか！」

「い、いやいや、そういうことではないですよ。スープも美味しかったです。しかも高級品であるベーコンまで入ってましたし」

「なんだ、紛らわしい言い方をするなよ。やっぱりお前は味の分かるやつだな。はははっ」

本当に職人<sup>かたぎ</sup>気質だなと思いつながら、幸助は今後の発言に注意しようとうと気を引き締める。

「スープは通常いくらで提供しているものですか？」

「ええと、大銅貨三枚ね」アロルドの代わりにサラが答える。

「ということは、実質パスタの価格は大銅貨五枚つてことで、近所のカフェと変わらないということになりますよね」

「そうなるのか？」

「はい、実質は。ということは、値段の問題でもないんです。サービスした結果客数が伸びていないならば、逆にスープのサービスは原価向上の要因になっていたんですよ。」

たぶんですが、隣の奥さんはスープのサービスが無くても毎週通つてくれたと思いますよ」

「ああ？ そんなもんか？」

「断定はできませんけどそうだと思いますよ」

「じゃあ、原因はいつたい何だつて言うんだ！」

「お父さん、もう少し落ちつこうよ」

(あ、アロルドさんがイラついてきた。そろそろ答えを言わないと)

「一番の問題は通行人に認知されていないということですよ」

「認知？ コースケさん、認知というのはどういう意味？」

「俺も聞いたことがない言葉だぞ」

幸助はそうですよねと言いつながら、表が見える小さな窓を指さす。

「表の通りを見てください。僕はまだ昨日この街に来たばかりなの

で詳しいことは分かりませんが、人通りが多いですよね」

「ああ、この道は住宅街と市場をつなぐ道でな、このあたりのメイストリートと言ってもいいんだよ。で、それがどうかしたのか？ 人通りが多いなんていつものことだが」

「はい。ではこの行き交う通行人の中でこのお店のことを知っている人はどれくらいいますか？」

しばし外を眺めながら考え込むアロルド。

……………。

……………。

数分間眺める。

しかし知った顔は一人も通らない。

「いないな」

その答えを聞き、少し間をあけから幸助が続ける。

「そういうことなんですよ」

「どういうことだ？」

「素晴らしい味と人通りの多い通り沿いという立地がこの店の強みです。逆に弱みはその立地を活かしていないことなんです。

要するに、ここにパスタを提供するレストランがあるということに皆、気づいてないんです」

この味を知らないなんて勿体ないことだと幸助は続けると、サラが何かに気付いたのか、はっと目を見開く。

「そうね！ まだ出会ったことのない味なんて評価できなくても当然ね。そうすると私たちが先ずすべきことは、前の道を通ってる人に『ここにおいしいパスタがあるよ』って教えることだね！」



「正解！」

パチパチと幸助は拍手をする。

サラはさらに嬉しそうに満面の笑みを作る。

アロルドはまだ納得していないようだ。うーんと唸りながら腕を組んでいる。

「アロルドさん、納得できない点があれば遠慮なく言ってください  
ね」

「いや、な。仮にその認知ってやつが原因だとしてだ。何をしているのかさっぱりわからん。店構えだって拘ったし、『アロルドの Pasta 亭』って名前だっついてる。これ見りゃ誰だっついて分かるんじゃないか？」

（ああ、アロルドさんがこの店舗の外観を考えたのか。となると、どこから説明したらよいものか……）幸助は考えあぐねる。

「ええとサラ、この街というかこの国の識字率はどれくらい知ってる？」

「識字率？ それってどういう意味？」

「ええっと、街の人が十人いたら、そのうち何人文字が読めるかっていう意味」

「ああ、それなら十人に三人くらいかな」

「なるほど」

突破口が見つかった、と心の中でガッツポーズをする幸助。

「アロルドさん、この国の識字率は十人に三人くらいだそうです」

「それがどうした？」

「ええ。そうなるって『アロルドの Pasta 亭』って読めてお店の存在

に気付く人は十人のうち三人しかいないってことですよね」

「あ、ああ。そうなるな」

「それで、往来が激しいこの道でこの文字が目にも留まる人ってどのくらいいるんでしょうか？ 小さい文字ですし気づかずに通り過ぎる人が多いんじゃないでしょうか」

「……」

アロルドは沈黙する。

「ほとんどいない……のかな」と代わりにサラが答える。

「そう、サラ。だから『アロルドの Pasta 亭』というプレートだけではお客さんは呼び込めないんだよ」

この答えにただでさえ赤かったアロルドの顔にさらに赤みが増す。

「もういい！ 分かったよ！ 認知については分かった。じゃあ、

どうすりゃいいんだよ！ でっかい看板つけるような金なんてねえ

ぞ！」

「お父さん！ 本当に落ち着こう。今はコースケさんの話を冷静に聞こうよ」

「安心して下さいアロルドさん。認知してもらうための手法はたくさんあります」

すぐにできる方法は三つあります、と言いながら指を二本見せる幸助。

「先ず一つ目。一番安価で手っ取り早いのは、道行く人たちに声をかけることです。」

ただ、実質二人で回しているこのお店では現実的な方法ではないかもしれません。しかも効率も悪いです」

うんうんとサラが食いつくように幸助を見る。

「二つ目は、チラシをまくこと。これは紙にお店の宣伝文句をかい  
て道行く人に配る、ということですよ。」

「これも紙の値段を考えると効率が悪いのかもしれない。」

そう、この世界ではまだまだ紙は高級品なのだ。

おいそれと配ることは適わない。

「最後に、これが一番オススメなんです。」

そういいながら、幸助は間をあける。

「立て看板を置くことです。」

そう言うと、アロルドが呆れた顔をしながら言う。

「は？ 立て看板？ さっきおまえ文字が読めるやつが少ないから  
文字は意味ないって言ったばかりじゃないか。」

「いや、立て看板の威力はバカにできないですよ。しかも看板に書  
けるのは文字だけではありませんし。」

「この道をずっと向こうに行ったところに武器屋さんがありました  
が、その看板はどうなってるか知ってますか？」

幸助はその職業柄、看板やディスプレイを歩きながら観察する癖  
がついている。

昨日たまたま見かけた武器屋の看板を覚えていたのだ。

「あ、私知ってる！ 剣と槍が交差している、一目で武器屋と分か

る看板だったよ」

「そう。ということとは立て看板には何を描けばいいのかな？」

「トマトバジルパスタの絵！」元気にサラが答える。

「そうなんです。絵を描くんですよ。誰でもわかるように。しかもこのくらいのサイズの看板に」

そついいながら幸助は立ち上がり、両手でその看板の大きさを表した。高さ一メートルくらいある。

「アロルドさん、この立て看板でまったく効果がなかったら僕はここから消えます。費用もこちらで建て替えますから、いちど試してもらえませんか？」

「そうだよお父さん、コースケさんを信じてみようよ。今まで私たちががんばっても何にも変わらなかったじゃない。今までやってなかったことをやる必要があるんだよ」

(サラ、あなたの姿が女神さまに見えてきましたよ)

「サラがそこまで言うなら……。その立て看板とやらだけ試してやる。これで効果がなかったら銅貨1枚たりとも払わないからな！」

「はい。それでもいいですよ。ならば早速やってみましょう」

「うん！ コースケさん、よろしくお願いします！」

こうして幸助はこの世界での初仕事「立て看板プロジェクト」を遂行することとなった。

### 3・初めての共同作業

幸助にとって異世界初の仕事である「立て看板プロジェクト」が決まったその翌日の朝。

幸助は宿で朝食を済ますと、朝九時にアロルドの店へ向かう。

「いい天気だな」

空には雲一つない青空が広がっている。時おり新春の柔らかな風が頬をなでる。

石畳が整然と並ぶ街のメインストリートを歩く幸助。

道幅は馬車三台が余裕で横並びできるくらいあり、道の両端には二階建てのこじんまりとした住宅が並ぶ。

ある家は白、その隣は緑、またその隣は赤と色彩豊かな外壁が連なる。

今日は日曜日。市場は休みなので、通りを行き交う人々は昨日よりかなり少ない。

ちなみにこの世界も1年は三六五日で、曜日や月の構成も現代日本と同じである。

二十分くらい歩くと黒いお洒落な建物が見えてきた。アロルドの店である。

重厚なオークの扉に掲げられている看板は裏返ったままである。そう、今日は定休日である。

ドアに手をかけるとカギは空いていた。そのまま手前に引くとギィツという音と共に開き、陽光が室内を暖かく照らし出す。

「あ、コースケさん！ おはよっ」

「おはよう、サラ。今日も元気だね」

「うん！ お客さんが増えるかと思うとワクワクしてきちゃって」

「そっか。期待外れにならないように僕も頑張らないとな」

（私服のサラも可愛いなあ）

今日は定休日なのでサラの服装は給仕服ではなく水色のワンピースである。

二人の声が聞こえたのか、厨房の奥からのそつとアロルドがやってきた。

「おう、来たか。なら早速おっぱじめちまおうぜ」

「は、はい。ではまず簡単な説明からしましょうか」

そう言つと幸助、サラ、アロルドの三人は昨日と同じ席へ座る。

「さて。では立て看板についてなんですけど、このくらいの大きさの板は用意できますか？」

そう言いながら昨日示した大きさと同じメートルくらいの長方形を手で表す幸助。

「それなら店の裏にこの店作った時の廃材があるぞ」

「わかりました。それなら丁度良かったです。その板をこうやって斜めにして自立するように足をつけていただけれますか？」

両手で「人」の文字を作りおおよそのイメージを伝える。

「そんなことなら任せろ。足になる角材も釘もある」

「さすがアロルドさん。僕はそういうのが苦手なので助かります」  
「お、おう」  
「ふふっ」

サラはニコニコしながら横に座っているアロルドを見る。  
普段なかなか見ることでできない父親の姿が新鮮なようだ。

「そうしたらサラ、絵を描くための絵の具や筆はあるかな？」

「絵の具って何？」

「絵の具って言わないのか。えっと、絵を描くための色のついたやつ」

「ああ、顔料のことね。うーん、ウチにはないかなあ」

「売ってる店は知ってる？ 僕が買いに行ってくるよ」

「うん。もちろん！ あ、でも、日曜日を開いてるお店はちょっと遠いかな」

うーんと唸りながら考え込むサラ。

そして数秒後。何か閃いたようで、ニパツと笑顔を作りながら口を開く。

「コースケさん、私がお店まで案内するから一緒に買いに行こ！」

お父さんはその間に日曜大工、よろしくねっ」

「えっ、サラ、おまえ」

「お代を立て替えてもらうんだから、それくらいしなないとねっ」アロルドの言葉が終わる前にサラがかぶせる。

「ぐぬっ……」

というわけで、幸助が異世界に来てから初めての共同作業は、顔料の買い出しに決まったのであった。

「では、行ってきます」

「行ってきます、お父さん！」

幸助は背中に何か視線が刺さるのを感じたが、それを無視して進む。

重厚なドアを開け、通りへ出る。

少し高くなってきた太陽からポカポカと春の陽気が伝わってくる。

「コースケさん、こっちです。いきましょ！」

サラはぐるっと振り返り幸助を見ると、西を指さした。

ワンピースの裾がふわっと広がる。

「商業街の中にお店があるの」

アヴィーラ伯爵領は人口五万人程度で、この世界では中堅どころの規模である。

戦争とは無縁の土地のため、国境の町と比べると町全体がのんびりとした雰囲気醸し出している。

北に領主の館を含む貴族や裕福な商人などが住む街があり、東に住宅街、西に商業街、南に工業街という分布となる。

それぞれの地区を結ぶように東西と南北に大きな道が通っている。アロルドの店は、ちょうど住宅街の西端に位置する。

「よし、行くか」

幸助が西に向かって歩き出すと、その左側にサラが並ぶ。

真っ赤なポニーテールが左右に揺れる。



「コースケさん、ここです！」

取り留めもない会話をしながら歩くこと一時間。

二人は目的の店に到着した。

古びた二階建ての建物を見ると『サンドラの画材店』という店名が掲げられている。

店の中に入ると、ホコリ臭さが二人の鼻を突く。

幸助は反射的に袖で鼻を覆う。

「ゴホ、ゴホ」

「すごい店内だなあ」

見渡すと、五坪ほどの狭い店内に所狭しと絵画用品が並んでいる。若い女性の絵が額に入り壁に飾られている。店主が描いたものだろうか。幸助は推察する。

奥の棚は長い間商品が入れ替わってないようで、分厚い埃がかぶっている。

店員らしき人は見当たらない。

「すみません！」

「すみませーん！」

二人で店員を呼ぶ。

奥から床のきしむ音が聞こえると、杖を突いた真つ白な髪のお婆がやってきた。

「なんじゃい、日曜日の朝っぱらから騒々しいのお」

老婆は二人を睨め回す。

「おや、珍しい。若いお兄さんとお嬢さんじゃないか。こんな店に何か用かい？」

「顔料を買いに来ました。このお店にありますか？」

「顔料？ そんなものいくらでもあるが、何に使うんじゃい？」

「えっと、看板を描くために必要なんです」

「ふうん、それなら水に濡れても落ちないものがよいかのう」

「はい、それをお願いします。あと、筆も一本ください」

老婆はゴソゴソとカウンターの下から瓶が入った箱を取り出す。

「して、何色が必要かね？ 今あるのはここに並んでいるだけじゃ」

「赤と緑、黒、白をください！」

「あと、黄色も要るな」

「黄色？ トマトバジルパスタには黄色は必要ないよ？」

何でという顔をしながら幸助を見る。

「まあ、帰ってから説明するよ」

「ふうん」

「あいよ。なら顔料が五色で大銀貨一枚と筆が銀貨二枚さ」

(結構するんだな)

懐から錢袋を出すと、銀貨をジャラっとカウンターに置く。

「まいどあじ」

顔料と筆の購入を済ませ二人が店から出た頃には、太陽はもう真南に近づいていた。

壁にかかっていた絵のことをサラが老婆に尋ねると、老婆の壮大な昔話が始まってしまったのだ。

若い女性の絵は老婆の若いころの姿だったそうで、今は亡き夫が描いてくれたそうだ。

(結構時間がかかったな)

時刻はもう十二時になろうとしている。

幸助はもう腹ペコである。

「サラ、せっかくだからこのままランチ食べに行かない?」

「うんっ! 行こ行こっ。私オススメのお店があるの。シチューがとってもおいしいお店。そこでもいい?」

「オツケー。ならそこに行こっ」

サラのオススメする店は、アロルドの店へ帰る途中にあった。

チリンチリン

軽めのドアを開けると、鈴の音が来店者があったことを告げる。

「いらっしやい。あら、サラじゃないの」

「こんにちは、マールさん」

二十歳くらいであろう店員が二人を迎える。サラとは顔なじみのようだ。

「久しぶりね。で、隣のさわやかな青年は、サラのいい人？」

悪戯っぽくマールが尋ねると、サラは顔を真っ赤にしながらぶんぶんと高速で手を振る。

「ふふふっ、冗談よ。空いてる席に座って待っててね」

「もー、マールさんったら……」

火照った顔を冷やすように手を団扇にして顔へ風を送る。

日曜日に開いている店は少ないせいか、店内は多くの客で賑わっていた。

二人は空いている席を見つけるとそこに腰を下ろす。

「流行ってるなあ」

「うん、いつもこんな感じだよ。マールさんの作るシチューは最高だから」

店内を見渡すと、来店客全員がシチューを食べていた。

開口部の大きな窓があるおかげで照明を焚かなくても店内は明るい。

窓にガラスは嵌められておらず、心地よい風が時おり幸助をなでるように通り抜ける。

「ここはシチューしか提供してないのか？」

「うん、そうだよ。だからオーダーをしなくてもいいの」

「ふうん、よっぽど自信があるんだな」

二人が着席してからほどなく、シチューが運ばれてきた。真っ白なクリームシチューである。

作り置きが利くから提供が早い。

「はい、おまたせ。シチューとパン、サラダのセットよ。今日のサラダはトマトがメイン」

マールはテーブルに皿を並べる。

「じゃあ、ゆっくりして行ってね」

そう言い残し、また厨房へ戻っていく。

「では食べようか。いただきます」

スプーンでシチューを掬い、一口食べる。

「うん、美味しい」

「美味しいねっ」

この街に来てから初めて乳製品を口にする幸助。

大きく切った野菜や鶏肉が入っており、実家の母親の味を思い出す幸助。

(ク アおばさんも顔負けだな、こりゃ)

食べながら幸助は店内を観察する。

店の入り口に人影が見える。新たな来店客のようだ。

隣の席の人はもう食べ終わったようで帰り支度をしている。

「それにしてもこの店、回転率がよさそうだなあ」

「何？ 回転率って」

「ええっと、簡単に説明するとお店の席数に対する来店客数のこと」  
「……。よくわかんない」

日本の会社では当たり前のように使っていた言葉だが、分かりやすく説明しようとするのが難しいことに気付く幸助。

「そうだなあ。たとえば席が一つしかないレストランがあったとするよ。お昼時にお店に入ってから注文して食べ終わるまでに二時間かかったとする。そうするとランチタイムの売り上げは一人分、ということになるよね」

「うんうん、そうなるね」

「そこで、仕込みや調理を工夫することで注文から食べ終わるまで一時間に短縮した場合どうなる？」

「もう一人ランチタイムで食べられる！」

「そういうこと」

「なるほどー、同じ大きさの店でも売り上げを増やすことができるってことだね」

「ま、アロルドさんの店はあまり気にしなくてもいいと思うけどね。まずは満席を目指さなきゃね」

「うん！」

入店から三十分と経たずして二人は食事を終える。

「美味しかったなあ」

「でしょ。最近なかなか行けなかったから久しぶりに食べられてよかったよ。コースケさん、ありがとう！」

「どういたしまして。そういえば、こんな時間になるってアロルドさんに言ってなかったけど、大丈夫かな？」

「平気へーき。今頃昨日の残り物食べてるよ。きつと」

「あはは。扱いが雑だな。さすが親子」

こうして二人がアロルドの店に帰ってきたのは午後二時前である。

「ただいま」

「お前ら、遅かったな」アロルドが出迎える。

「うん。画材屋さんのおばあちゃんの話が長くて」

「で、メシは食ってきたのか？」

「うん。久しぶりにマールさんのシチューを食べてきたの！」

「そ、そうか」少し寂しそうな顔をするアロルド。

幸助が店内を見ると、アロルドが作ったであろう立て看板が目に入った。

「アロルドさん、もう完成してたんですね。流石です」

「さっすがお父さん！」

「おっ、おっ」

無理やり話を逸らす二人。

「早速立て看板に絵を描きましょうか」

「絵は私に任せてね。でも、黄色って何に使うの、コースケさん？」

「何だと思う？」

サラの質問に幸助は質問で返す。

基本的に幸助のような立場の人間は、簡単に答えを言ってしまっ  
てはいけないのだ。

何でもすぐに答えを教えてしまうと相手が考えることを放棄して、今後も幸助に依存することになりかねない。

サラは腕を組み片手をあごの下にやり、考えるしぐさをする。

「うーん、セットのスープを描くとか？」

「はずれ」

「うぐう、分かんないよ」

「じゃあ、まずはパスタの絵を真ん中に大きく描いてみようか。上と下は隙間をあけておいてね。そこに答えが入るから」

「分かったと」

こうしてサラはパスタの絵を描き始めた。

その間、野郎二人は特にすることがない。

客席に腰かけ、時おりサラの進み具合を見つつ会話をしている。

「お前サラに変なことしたら、ただじゃおかないからな」

「大丈夫ですってアロルドさん」

少し空気が剣呑なようだ。

「やっぱり何か胡散臭いんだよな、お前。こんな簡単なことで客が増えるなんておかしな話だよ」

「大切なことは他にもいろいろありますよ。立て看板はその中の一つにしか過ぎません。でもやるとやらないでは違うんですよ」

「そんなものか」

「そんなものです」

「……………」

「……………」



「できたー！」

不穏な空気を破るように元気なサラの声が響く。  
アロルドからようやく逃げ出せると安堵する幸助。

「うん、上手いね！ これでパスタのお店っていうのは一目瞭然になっただよ」

「ありがと！」

「それで、通りがかった人がこの看板を見つけてパスタ屋の存在を知りました。今日はパスタにしよう。そう思った後、次に気になるのは何だ？」

「俺はわからん」

「うーん、私だったら値段かな？」

「正解！」

「やったー！」

「ということ、パスタの絵の下には大銅貨八枚の絵を描こう」

「はい。これなら文字の読めない人でもすぐにわかるね。流石です、コースケさん！」

「ぐぬぬ……」

そんなこんなで立て看板は完成した。

最後にパスタの上に文字で「店主自慢のトマトバジルパスタ 大銅貨八枚」と書いた。

「明日が楽しみね！」

「うん。そうだね」

元気なサラとは対照的に、幸助は久々の緊張感に包まれていた。

立て看板の効果があるのは日本で経験済みだ。だからといって全ての店で効果があったわけではない。

しかも、この世界は文化も環境も違う異世界だ。

本当ならば客の反応を見つつトライアルアンドエラーを繰り返して、ベストな形に持っていくことが理想だ。

しかし、アロルドとの約束はこの一回で決まる。

もし効果がなかったら次は無い。

(ふたを開けてみないと分からないな)

そして運命の翌日へと続く。

#### 4 ・ご褒美は魔物のステーキ

「よいしょ、よいしょ。これでよし、と」

翌日の朝、サラは立て看板を店の外に設置した。

昨日三人で一生懸命制作した看板だ。

大きな赤いパスタの絵の下には大銅貨が八枚並んでいる。  
祝福するかのような朝の陽光がサラをやさしく包む。

「これでお客さんたくさん来てくれるかなあ。うん、コースケさんを信じよう」

店内に戻り日課の掃除を始める。

テーブルと椅子をを一度隅に固めて床をふく。

もとの位置に戻すと今度はテーブルをふく。

時刻は朝十時。まだまだ開店までは時間がある。

「ふああ……。昨日なかなか寝られなかったなあ」

今日のこと期待と不安が混じりなかなか寝付けなかったサラ。

眠気が少しだけ残っている。

パンツと両手で顔をたたき、気を引き締める。

「よし、これで大丈夫」

残りの作業をしているうちに、待ちに待った開店の時刻である午前十一時が訪れる。

ドアのカギを開け、営業中を示すため店名の入ったプレートを表

向きにする。

「お願いです。お客さんいっぱいきてください！」

そう祈りながら客の来店を待つサラ。

待つこと十分。

「来ないなあ。みんな立って看板見てくれてるかな」

そわそわと店内をうろつく。

店の外からは通りを往来する人の声や馬車の音だけが聞こえてくる。

更に待つこと十分。

「来ないなあ。まだ時間が早いからだよね。きっとおなかをすかした人が看板を見たら食べたくなるもん」

不安が募るサラ。

用もないのにテーブル上の小物の位置を整える。右へやったり左へ戻したり。もう、十回以上整えなおした。

そして更に待つこと二十分。

店外から複数の声が聞こえてきた。

「あら、ここにこんなお店あったかしら？」

「新規オープンしたんじゃないかな。見たことないぞ」

「パスタが大銅貨八枚ですって」

「いいんじゃないかな。おいしそうだよ」

サラは期待に胸を高鳴らせる。

（お願い、来て頂戴！）

その直後、ギイという音とともに、明るい光が店内に差し込んできた。

「いらっしゃいませ！」

弾むようなサラの声が本日最初の客を迎える。

「こちらの席へどうぞ」

四名の客を席へ案内する。

「外に描いてあったトマトのパスタ、四人前ね」

「はい。ありがとうございます！ 一緒にオニオンスープもいかがですか？ セットなら大銅貨三枚のところ二枚になりますよ」

「どうする？」

「合わせて銀貨一枚か」

互いに顔を見渡す来店客。

銀貨一枚ということは、この街のランチでは許容範囲の上限金額だ。

「ベーコンも少しですけど入っていますよ」ともつひと押しするサラ。

「なら私、頂こうかしら」

「俺も」「私も」「じゃあ私も」

「ありがとうございます！ 少々お待ちください」

そう告げるとパタパタと厨房へ向い、注文を通しに行く。

ちなみに「ご一緒に」という接客用語も幸助と一緒に考えたものだ。

といつても幸助にとっては、普段よく行っていたファーストフード店の決まり文句を真似しただけだが……。

ギィ。

サラが厨房へ先ほどの注文を通した直後、また扉の開く音がした。今度は男性一人だ。

「いらつしゃいませ！」

「あおう、その看板に描いてある赤いパスタって、トマト味なの？」

「はい、そうですよ。当店自慢のトマトバジルパスタです」

「金額って大銅貨八枚で間違いない？」

「はい。間違いないです」

(そうか、この方は文字がわからない方なんだね。絵の効果抜群だ！)

「ならそれを一つもらおうか」

「ありがとうございます！ ご一緒にベーコン入りのオニオンスープもいかがですか？ セットなら大銅貨三枚のところ二枚になりますよ」

先ほどと同様にスープを押すサラ。

「スープはいらないや」

「はい。かしこまりました。では、こちらの席にかけてお待ちください！」

その後もパラパラと客の来店は続き、店内の客数がゼロになるとは無かった。

「ありがとうございました！」

昼の営業が終了した午後三時。

サラは最後の客を送り出すと、店名のプレートを裏返す。そしてその隣にある立て看板をそつとなぜる。

「ありがとう、看板さん」

その顔からは笑顔があふれている。  
プロジェクト成功なのは誰の目にも明らかだ。

ギィ。

サラがせつせと閉店後の片づけをしていると、幸助がやってきた。ちなみに幸助は通りの向こうから通行人の動向を観察していたので、おおよその来店客数は把握している。

「コースケさん！」

「その顔を見ると、うまくいったようだね」

「うん！ こんなにお客さんが来てくれたの、開店の時以来だよ。

コースケさん、本当にすごい！」

「いやいや、サラとアロルドさんが頑張ったからだよ」  
「ううん、私たちだけだったら絶対できなかったもん。それに、『一緒に』っていうあの言葉もすごい。別料金なのに十人もスープ注文してくれたんだよ。まるで魔法だね！」

本日の実績は二十名の来店であった。

満席には程遠いが、今までの状況からすると奇跡に近い実績である。

無料で提供していたスープをセットメニューにしたことで、客人当たりの売上である客単価も向上。

薄利だったメニューが適正価格になったことで、利益率も申し分ない。

常連だった隣の奥さんも来店してくれたが、スープが別料金になったことは何も咎められなかった。むしろ、無理してるんじゃないかなと心配してくれていたそうだ。

「すまん、正直おまえのこと疑ってた」

いつの間にかアロルドが厨房からやってきたようだ。

「いいんですよ。いきなり知らない人が来て変な提案をしたのに、アロルドさんはそれを受け入れてくれたんですから。僕が感謝したくらいです」

「そうか。そう言ってくれるなら助かる」

客席に三人が腰かける。

「それにしても、あんな立て看板一枚でここまで違うとはな」

「これが認知つてやつですよ。もう、街の皆にアロルドさんのパスは世界一って言って回りますよ。もっと認知されますよ」



「賛成！」

「そんな恥ずかしいことはやめてくれ」

「はは、冗談ですよ」

「それで、だな。コースケ、お前は看板以外にもできることが沢山あるとか言っていたよな」

（お、アロルドさん、挨拶の時以来初めて僕のことを名前で呼んでくれた！）

「はい。立て看板は小さなとっかかりにしか過ぎません」

「他にはどんな手があるんだ？」

「立て看板よりも簡単なことから店舗の改装、はたまたそれ以外にもいろいろありますよ」

幸助が本当にしたいと思っていることは店舗の改装だった。

照明器具を火に頼るこの世界では、夜は暗い。

それなのにアロルドの店はデザイン重視で窓が小さく、昼も暗い。だからいつそのこと壁を蛇腹にして、オープンテラスカフェっぽくしたかったのだ。

ただ、今の外装がアロルドの拘りということや予算のことを考えると完全に無理なので、具体的な提案をするつもりはなかったのだが。

「改装つて、店の外観は変えんぞ」

（そ、そうですねー）

「もちろん、改装はあくまで手法の一例ですし、取っつきやすいこともいっぱいありますよ」

「ならば昨日言っていた正式な契約とやらについてなんだが」

「はい。お店が儲かった時払いの契約のことですね」  
「おう。それはどうなった時にどれだけ払えばいいんだ？」

こうしてアロルドは幸助と諸条件を詰め、正式に店舗改善の仕事を請け負うこととなった。

大人の話なので契約の場にはサラは外れてもらっている。

この世界では、商業ギルドが銀行の役割も果たすため、報酬の受け取りはギルドを通すこととなった。

これであれば、いつでも報酬を振り込んでもらうことができる。

ちなみに幸助はフレン王国からの謝罪金を受け取った時、それを預けるため商業ギルドに口座を作っていたのだった。

商業ギルドの役割は銀行業務以外に、商売に対する課税、仕事の斡旋、技術指導など多岐に渡る。

「それにしても気前のいい奴だな。普通こういうのは前払いが相場だぞ」

「いいんですよ、アロルドさん。気にしないでください。好きでやっつてることですから」

(金に困ってないなんて、金に困っている人の前では言えないな)

「いつまでも儲からなかったつって払わないこともできるんだぞ」

「その時は僕の人を見る目がなかったと諦めますよ」

「どこまでも気前のいい奴だな」

幸助とアロルドが打ち合わせを終えた頃、表の通りを往く人々の影は長く伸びていた。

もうすぐ夜の営業時間が始まる時間だ。

店内は随所にランプが灯っており、店内をやさしく照らし出している。

「もう、夜の営業時間になっちゃいますね」

「おう、もうそんな時間か。ちょうどいい、コースケ。今日は俺が夜の特別メニューをご馳走してやる。食べていかないか？」

「え、いいんですか？」

「これから長い付き合いになるかもしれないしな。お礼代りにうまい料理を出してやる」

「お店が儲かったら僕は要らなくなるんですから、あまり僕との付き合いは長くしちゃだめですよ」

アロルドとの話で決めた幸助の役割は、店が黒字化するまで経営や企画に参画するということである。

従って、幸助が長く関わるということは避けなければならない。

「まあ、細けえことはいいんだよ。でな、ウチはパスタがメインだが、夜は肉料理もやってるんだ」

「そうなんですか？ パスタ専門だと思ってました」

「パスタだけだと客単価が高くないからな。ま、食べて行けよ」  
「では、お言葉に甘えます」

少し待つとけという言葉を残して、アロルドは厨房へ戻っていった。

入れ替わりに外のプレートを営業中に変えつつ外の掃除をしていたサラが戻ってきた。

「コースケさん。打ち合わせ、お疲れ様！」

「ありがとう、サラ。何か嬉しそうな顔してるね」

「うん！ 私、初めて仕事が楽しいって思えたかも」

「よかったじゃないか、サラ。それは大事なことだよ」

「それでね、これからお店がどうなるのかなあって考えたらすごいワクワクしてきたの。コースケさんウチに来てくれてありがとう！」

「いえいえ、と日本人流の謙遜をしていると、サラを呼ぶアロルドの声が厨房から聞こえてきた。

「はいと言いながらパタパタと厨房へ行くサラ。」

一人になった幸助は頭の中で今日の反省会を開く。

（それにしても立て看板一つですごい変化だな。それだけ今までこの店の存在が目に残ってなかったってことか。

今日の来店が二十人。ほとんど新規みただからそのうちの一人でもリピーターになってくれたらだいぶ楽になるな。

あと、スープを別料金にしたことによる反発も無かったみたいでよかった。ま、そういうことで反発する客はこの店にふさわしくないから今後一切来なくても問題ないか。

せっかくなにかいい機会をつかんだんだ。黒字化するまでに資金が尽きて廃業になることも避けなきゃな。あとは……）

深く考え事をしている幸助。

目の前に、ジュウジュウと音を立てている皿が置かれたこと思考を中断する。

「コースケさん、はい、これ。夜のイチオシメニュー、レッドボアのステーキだよ」

レッドボアとは広い範囲の森に生息する体長二メートルくらいの猪の野獣だ。真っ赤な毛並みが特徴である。

主に冒険者が狩ってきたものがギルドを通して市場に流通されて

いる。

「レッドボアって、魔獣の……？」

「そうだよ。食べたことなかった？」

「うん。これまであまり魔獣の肉を食べる機会がなかったからね」

無理もない。日本には魔獣なんて生物はいない。

この世界に来てからの半年間でも、動物の肉は食べたことがあったが魔獣は見たことがなかった。

「コースケさん、魔獣の肉を食べたことがなかったなんて、どこか遠い国の出身なの？」

（しまった！ 自分の設定を考えてなかった）

突然降ってきた難問に俄かに焦る幸助。

召喚されたということは内密にするという条件で謝罪金をもらっている。

本当のことを話すわけにはいかないし、仮に話したとしても信じてもらえないだろう。

（ああ、そういえばフレン王国の市民権は持っていたな）

謝罪金と同時に与えられたフレン王国の市民権のことを思い出した幸助は、そのままフレン王国出身という設定にすることにした。

「僕はフレン王国の人間だよ。ただ、名前すらないような田舎の漁村出身で肉はほとんど食べたことがなかったからね」

「ふうん、そうなんだ。じゃあ、冷めないうちに食べてね！ おいしーよ」

(ああ、サラは純真な娘でよかった)

幸助はいただきますと言うとフォークを手に取り、きれいな焼け目のついた肉に手を伸ばす。

一口サイズにカットされているので切る必要はない。

初の魔獣肉ということで一瞬とまどったものの、豚肉のようなものだなと思ってそのまま口へ放り込む。

奥歯で噛みしめると、じゅわつと口の中に肉の旨みと脂の甘みが広がる。そして香辛料がその味をピリツと引き立てる。

「うん。美味しい！」

「でしょ！ パスタ以外もお父さんの料理は最高なの！」

じゃあ私は仕事に戻るからと言うとサラは厨房に戻っていった。幸助は先ほどの反省会を再開しつつ、ジューシーな肉を味わう。そして食べ終わった頃には、外は完全に真っ暗になっていた。

(うまくいって本当に良かったなあ……)

幸助の心は美味しいものを食べた満足感と、自分の居場所が見つかった充足感に満ちていた。

## 5・ムダを省いた結果ハンバーグが生まれる

翌日のランチタイム後。

いつもの席で三人が談笑している。

打ち合わせが必要なときは、この時間を定例の時間とすることにしたのだ。

窓から入る陽光が、床やテーブルに小さな陽だまりを作っている。

「アロルドさん。昨日はステーキごちそうさまでした。すごいいい肉みたいでしたが……」

「いいってことよ。これから毎日お客が増えるんだったら、あんなもん屁でもないさ」

「今日は十八人もお客さん来てくれたんだよ！」

サラが淹れたお茶をずっと啜ると、幸助は切り出した。

「それでサラ、今日は何か気づいたことあった？」

「えっと、そういえば昨日も今日も、看板に描いてあるこの赤いパスタはトマト味かって聞かれたよ」

「そうなんだ。この辺で普段食べる物でトマト以外に赤色の食材ってあるの？」

「うーん、パスタに使うようなものはないかなあ」

「でも、そうやって聞かれるってことは他にも「トマト」って確証を得たい人がいるかもしれないから、看板にトマトの実を一個描いておこうか」

「うん。そうするよー！」

小さなヒントから改善を繰り返すことは重要である。

サラは早速立て看板にトマトの絵を描きに行った。  
今日もトレードマークの真っ赤なポニーテールが揺れている。

「それですね、アロルドさんにはお願いしたいことがあります」  
「うん？ 何だ」

「このお店の帳簿を見せてもらってもいいですか」  
「帳簿？ ああ、母ちゃんがつけてるやつだよな。ちよいと待ってろよ」

そう言い残すと厨房の奥へゆつくりと歩いていく。  
しばらくすると二階から足音が聞こえてきた。帳簿関係は二階にあるらしい。

三分ほどするとアロルドは一枚の紙を手に帰ってきた。

「これが先月分だそうだ」

そう言うとアロルドはテーブルの上に紙を置く。  
紙を節約するためか小さな数字や文字がびっしりと詰まっている。

「こつちが収入でこつちが支出ですね」

帳簿を手に取る幸助。

左側に仕入や光熱費などの経費、右側に売上が記載されている。  
幸助は暗算で仕入に該当する部分だけを拾い足していく。  
すると次第に表情が険しくなっていく。

「どうした？ そんな顔して」

「ええと……。赤字どころか売上より材料費の方が多いいじゃないですか。これでよくやってこれましたね」

「あ？ ひと言多いんだよ。詳しくはよくわからん。多少の蓄えは



あつたからな」

材料費だけで売上を上回るといふことは、水や火をたくための薪代といったものは完全に持ち出しである。

いつか回らなくなるというのは誰が見ても分かる。

「本当は経営が行き詰っている場合、最初にしないといけないのは資金の流出を止めることなんです」

「そうなのか？ それならツケは先延ばしにしてもらってるぞ」

「それも手法の一つではありますが、その場しのぎですよね」

「うぐっ」

「売り上げを増やすことと同じくらい経費を減らすことも重要なんです」

まあ、減らしすぎは逆に毒になる場合もありますが幸助は続けつつ、帳簿をテーブルに置く。

「なんだ、節約のことか。そんなものもう極限まで切り詰めてるぞ」  
「光熱費などの経費はそのようですね。しかし、売上より材料費の方が多いというのは異常です。何か原因があるはずです」

「残り物を俺らが食べてたからだろ。それに金が無くなったなら多少は商業ギルドが貸してくれると言ってたぞ」

「借金で当座をしのいだ後に安定的な収益が出るならばそれでもいいですが、今のアロルドさんの状況ならばしない方がいいですね」

幸助は見ててくださいねと言うと、テーブルの上に両手を広げゼスチャーを始めた。

「底に穴の開いた鍋があるとします」  
「そう言いながら鍋の形を手で描く。」

「鍋に水を入れるとどうなりますか？」

怪訝な顔をしながらアロルドは答える。

「そんなもん、水が穴から流れ出るだけだろう」  
「そうです」

そう言いながら手を広げテーブルと水平にすると少しずつ下に動かし水が減るさまを表す。

手のひらがテーブルに着いたところでその動きは止まった。

「では、その水をお金に例えます。鍋に注ぐ水が売上。そして穴から出ていくのが仕入れや経費といった支出です。そして鍋の中の水が現在手元にあるお金です。

今の状況は、鍋に注がれる水よりも穴から出ていく水の方が多いです。そうすると中の水はどうなりますか？」

「空っぽになるに決まってるだろ」

「そうです。それでツケを先延ばしにしたり借金をするということとは、鍋の中の水が一時的に増えるということですよ」

幸助は手のひらを上へあげる。

「でも、やっぱり出ていく量が多いから時間がたてばまた空っぽになってしまつんです」

そっぴいなながら手のひらをテーブルにつける。

「今は立て看板の効果で鍋へ注ぐ水は少し増えましたが、それでも流出する水の量が多い状況でしょう。まずはこの赤字體質を改善しましょう」

そこまで話したところでドアがキィという音を立てて開いた。  
サラの作業が終わったようだ。

「トマトの絵、描けたよ！　ってお父さん、難しそうな顔して、ど  
うしたの？」

「コースケの話が、よくわからん」  
「……」

今までの説明は何だったのか。ガクツと項垂れる幸助。  
気を取り直して、サラを交えて同じ説明をする。  
幸いサラはちゃんと理解してくれたようだ。

「お父さん、材料にも拘ってるもんね」

「ああ、そうだ。でなけりゃあの味は出ん」

「僕としても材料のランクを落として味が落ちちゃうっていうのは  
避けたいですね」

「ならどうしろと？」

アロルドは若干イライラしているようだ。  
コツコツとテーブルを爪で突いている。

「では、とりあえず厨房を見せてもらってもいいですか？　何かヒ  
ントが見つかるかもしれません」

「おう、ついてこい」

三人は厨房へ入る。

様々な大きさのフライパンが整然と壁に掛けられており、その向  
こうでは大きな鍋が魔道コンロにかけられている。

魔道コンロは魔力を熱に変換し加熱することができる魔道具なの

だが、使用するには動力源である魔石を定期的に交換する必要がある。

鍋からは湯気が上がっており、いつものトマトの香りをふりまいている。

幸助のその視線に気づいたようで、アロルドが説明する。

「魔道コンロは温度が一定でな。薪より費用は掛かるんだがこれだけは外せない」

「そうなんですね」

味にかかわる経費は極力外してはいけない。

味が落ち、さらに来店客が減るといふ悪循環に陥ってしまうからだ。

他に何かないと見回すと、食料庫が目にとまる。

「ここ、開けてもいいですか」

「おう。食材しか入ってないけどな」

開けてみるとアロルドの言う通り、数々の食材が所狭しと並んでいる。

料理の知識がない幸助にはどれが必要でどれがムダなのかよく分からなかった。

無言で食料庫の扉を閉め、その隣を開ける。

「そこはゴミしか入ってないぞ」

「はい。とりあえず見せてくださいね」

そう言つと幸助は中をのぞき込む。

確かに野菜の切りくずなどが箱に入れられている。ゴミのにおいを抑えるため扉付の場所に入れていようだ。

いくつか並んでいる箱をそれぞれ見渡す。

(なんだ、これは?)

アロルドの言う「ゴミ」の中に、違和感のある物が紛れ込んでいる。

それを取るため、手を伸ばす。

「これってゴミ……なんですか?」

幸助の手には一塊の肉が握られている。

一キロくらいありそうな塊である。それが何個もあったのだ。

「ああ、ゴミだ」

「確かに古くて変色はしていますが、古くなければ食べられない部位ではないですよ?」

「俺の出すステーキには向いてない。固いんだ」

どうやら昨夜食べたステーキから出た「ゴミ」という認識らしい。

「私たちの晩御飯、いつもこの固い肉ばかりなの。もういい加減食べ飽きちゃったよ」

家庭で消費したうえでこれだけ余るようだ。

「もったいないですよね……。ステーキに適した部位だけ仕入れることはできないんですか?」

「それはできない。定期的にまとめて買わないといい部位は確保できないんだ。肉屋だって商売だし、いい客にいい肉を出すんだよ」

「そうなんですね……」

ここに原因があったのかと一人ごちる幸助。

(この世界の商習慣を破ってまで良い部位だけ仕入れてとは言えないし、困ったな。固いといっている肉を活用する方向でいってみるか)

そう考えると幸助は肉を戻しアロルドを見る。

「そうしたら、この固い肉を使ってハンバーグを作ってみませんか？」

「ハンバーグ？」サラとアロルドがハモる。

「そう、ハンバーグです。これなら固い肉も美味しく食べられるかもしれません」

「聞いたことのない料理だな。お前の国では流行ってるのか？」

「はい。大人から子供まで大人気でしたよ」

「それで、どうやって作るんだ？」

アロルドが興味ありげに幸助へ聞く。

サラはキラキラと期待のまなざしで幸助を見ている。

少し間をあげると、幸助は両手を腰にやり自信ありげに答える。

「ズバリ」

「ズバリ？」

「わかりません！」

ガクつと頂垂れる二人。

仕方ないことだ。日本で幸助は一人暮らしはしていたものの、ほとんど自炊などしていなかった。

ハンバーグは外で食べるものと割り切っていたのだ。

「あ、だけとおおよその材料はわかりますよ」

「なら最初からそう言えよ」

「コースケさんのいじわる」

(しまった、サラの好感度を下げってしまった)

「ゴホン。ではですね、まず材料についてですが……」

幸助はアロルドへひき肉のことやその他の材料、おおよその作り方について知っている限り説明する。

「あとはアロルドさんのセンスにお任せします」

「ほとんど丸投げだな」

「料理の天才なんですから、僕が変に細かなことを言わない方がいいんですよ」

「そ、そうか。何か丸め込まれた気もするが……」

「気のせいですって」

こうして新メニューであるハンバーグを試作するということが決まり、その日の打ち合わせはお開きとなった。

数日後。

試作品が出来上がったということで、久しぶりに幸助はアロルドの店を訪れた。

幸助の顔を見ると待ってましたとばかりアロルドがハンバーグを

焼き始めた。

「コースケさん。試作品、すっごくおいしかったからね。楽しみにしててね」

「僕もハンバーグ食べるの久しぶりだからすごい楽しみだよ」

数分後。幸助とサラが近況などの会話をしているとハンバーグが焼きあがったようだ。

湯気の上る皿を手に、アロルドがやってきた。

「おし、これが俺の開発したハンバーグだ。食べてみる」

幸助の目の前に皿が置かれる。

ジュウジュウと音を立てているハンバーグ。

ゴクリ、と唾を飲み込む幸助。

隣で不安げな表情で幸助を見ているサラ。

「このソースをかけて食べるんだ」

そう言うとアロルドはハンバーグの上に赤いソースをかけた。

そう、いつもパスタに使っている自慢のソースである。

「いただきます」

右手に持ったナイフをハンバーグへ入れる。

ほとんど抵抗なくハンバーグへ吸い込まれていく。

そしてその断面からは肉汁がじわじわ溢れ出る。

一口大に切るとソースをたっぷりつけて口へ送り込む。

「!!!!!!」



幸助は目を見開く。

口の中は酸味のきいたトマトバジルソースと重厚な肉のうまみが絡み合い、えも言われぬ状況になっている。

無言で咀嚼すると、最後にそれらを飲み込む。

「……………」

「どうだ？」

「アロルドさん」

「なんだ」

「……………最高です！」

拍手をする幸助。

隣にいるサラも幸助に続き拍手をする。

「だろ。俺の手にかかればこんなもんさ」

「あんな少しのヒントしかなかったのに、素晴らしすぎますよ。故

郷のハンバーグ屋さんもビックリです、これは「

「でしょ。やっぱりお父さんの腕は最高なの！」

ポリポリと頬をかくアロルド。

まんざらでもない様子だ。

「もう、これは決まりですね。正式メニュー入り」

「おう、今夜から始めてみるよ」

「コースケさん、ありがとう！ 経営の知識もあるのにこんな珍しい料理を知ってるなんて、すごいよ！」

「ありがとう、サラ」

こうしてアロルドの Pasta 亭に新メニューが加わることとなった。

ステーキよりも安く気軽に食べられる肉料理として、ハンバーグがブームになるのにそれほど時間はかからなかった。

## 6・カルボナーラ大作戦

「ほらよ」

アロルドが一枚の紙を幸助の前へ置く。

今日は五月五日。日本であれば子供の日であるがここは異国、いや異世界。ごく普通の平日である。

従ってアロルドの Pasta 亭も営業日である。

しかし今は店内には三人しかいない。もちろん幸助とサラ、アロルドである。

時刻は午後三時。いつものミーティングタイムである。

「確認しますね」

幸助はその紙を手に取り、細かく書き込まれた数字に目を通す。

これは幸助が関わってから初めてできた四月の帳簿である。

仕入は前月より少し増えた程度だが、売上はかなり伸びている。

「あと少しで黒字ですね」

「ああ。母ちゃんが感心しきりだったよ。この変化の大きさによ」

「黒字になったら新しいワンピース買ってもらえるんだ！」

「よかったじゃないか、サラ」

「うん！」

一番大きな問題であった「肉」は夜の看板メニューであるハンバーグとなり、稼ぎ頭へと変貌した。

このままの来店客を維持できれば、特に手を打たなくても今月で黒字達成は確実であろう。

二人の表情も幸助と出会った頃より柔らかくなったようだ。

「でだな、今日は帳簿を見てもらうだけじゃなく、コースケに相談がある」

「はい、何ですか？」

「ウチはパスタレストランってのはもちろん知ってるよな」

「はい」

「でだな、そのパスタレストランの稼ぎ頭がハンバーグってのが腑に落ち無くてな」

生粋の職人であるアロルドは拘りが強い。その拘りは店舗の外装にも表れているが店名もそうだ。

『アロルドのパスタ亭』である以上、アロルドの中ではパスタが稼ぎ頭でなければならぬ。

そこは理屈ではなかった。

時には悪となる偏った拘りも、見方を変えれば店舗を特徴づける最強の武器になりえる。

だから幸助はそこに突っ込みを入れようとはしなかった。

「で、コースケ。お前に相談したいことなんだが」

「新しいパスタのアイデアですか？」

「あ、ああ、そうだ」

「新しいメニューを増やすというのはお客さんの選択肢が増えるし飽きにくくなるから、いいことだと思いますよ」

「だろ。トマトベース以外に何かあってもいいと思ってな。コースケならハンバーグみたい俺らの知らない味を知ってると思って」

「ええ、知ってます。ただ……」

「なんだ？」

「メニューを増やすと新しい食材の在庫が増えます。それが気にな

ったんです。肉みたいに売れずに腐って廃棄つてなると、また利益が減っちゃいますからね」

「その辺は俺の技術で美味しく作ってやるから問題ない」

「はあ、そうですか。では……」

まだメニューを増やすべきタイミングではないと幸助は感じている。

資金に余裕がない今、開発に失敗して経費倒れになるとダメージが大きいからだ。

ただ、この世界に来て食べられなくなった「あの味」を食べたいとも思ってたことも事実。

(アロルドさんならきつとあの味を再現してくれるはず。今こそ僕の欲求を出すべきタイミングかもしれない)

アロルドへ視線を向ける幸助。

と同時にガタツと立ち上がり、アロルドをビシッと指で指す。

そして己の欲望をぶちまける。

「僕は今、カルボナーラが猛烈に食べたいです！」

「お前の食べたいものは聞いてない!!」

「それはどんなパスタなの？」

アロルドがすかさず突っ込みを入れ、サラが助け舟を出す。

「クリームベースのパスタ。サラもきつと気に入ると思うよ」

「そうなんだ。ほんと色々知ってるんだね。さすがコースケさん！」

(おお、サラの中で俺の株価上昇は留まることを知らないようだ)

「それで。クリームベースの Pasta なんて見たことないぞ。どうやって作るんだ？」

「マールの店ではクリームシチューが提供されていたが、保存手段の少ないこの世界では市場で牛乳が流通することはほとんどない。

「幸助も今まで見かけた乳製品はチーズとバターくらいである。

「再び席にかけなおすと説明を再開する。

「材料ですが、生クリームとチーズ、卵、ニンニク、ベーコン、塩といったところでしょうか。ドロっとして Pasta にねっとり絡むイメージです」

「相変わらず抽象的な説明だな。で、生クリームってのは何だ？」

（やっぱりそこ来たか！ 全然わからないよ）

「脂肪分が濃くなった牛の乳……じゃないでしょうか」

「そりゃまた大雑把な」

「牛の乳からできていることは確実です。アロルドさんは、どこか仕入先の心当たりはありませんか？ 取り扱ってる人なら知ってるかもしれません」

「いや……、無い。ただ、街の西門から街の外に出るとすぐに酪農家があるぞ」

「アヴィーラ伯爵領は魔物除けのため高さ二メートルほどの外壁に囲われている。といっても普段魔物はそれぞれの生息域にいるのでほとんど襲ってこないが。」

「出入りするためには東西と南にある門を通らなければならない。

「東門を出るとその先には穀倉地帯が広がり、西門を出ると小規模な酪農家が点在する。」

「コースケさん、じゃあ明日一緒にそこに行ってみましょ！」  
「うん、そうしよう」

「明日の給仕はお母さんをお願いしておくね！」

「ちよ、またお前らだけで勝手に決めやがって」

「お父さんは朝から仕込みで忙しいもんねっ」

「ぐぬう」

翌日の朝。

晴れる日が多いこの地方の春にしては珍しく、空には雲が広がっている。

どんよりとした空は今にも泣きだしそうである。

幸助とサラは今、東西の通りを定期的に往復している乗合馬車に揺られている。

「いてて……。やっぱり慣れないなあ」

街の外れまで行くため、移動手段に選択したのだった。

日本でいうところの路線バスみたいなもので価格も銅貨五枚と安く、市民の大切な足となっている。

十二人乗りの座席は満席である。

「コースケさん、あと少し。我慢してね」

「がんばるよ、サラお母さん」

「お母さんじゃないもん！」

「あはは、冗談だよ。何か言い方が母親みたいだったからさ」

「もう、コースケさんったら」

頬を膨らまして怒る仕草をするサラ。  
プンスカという音が聞こえてきそうである。

揺られること三十分。二人は街の西門へ到着した。

「ふう、ようやく着いたよ」

「お疲れ様。コースケさん」

「それで、門の外を出たらすぐに見えるってアロルドさんは言っていたけど」

「うん。こっちだね！」

そう言うとサラは幸助の手を取り走り出すと、そのまま門を越える。

槍を手にした門番が二人いるが、一人ずつチェックを行うということにはしていない。

門の先には一本の街道が走り、左右にはなだらかな丘が広がっている。

街道を外れてゆるやかな丘を登ったところで二人は立ち止った。

「ここだね！」

「おお！ すげい」

二人の目の前には新緑を過ぎ濃厚な緑色となった広大な牧草地が広がっている。

間隔の粗い柵の向こうにまばらにいる牛が、マイペースに足元の草を食んでいる。

その牛たちはホルスタインのように白黒模様ではなく、茶褐色の



毛並である。

柵沿いにもう少し先に行つたところに小屋のようなものが建っている。幸助はその建物を指さす。

「あそこに人がいるんじゃないかな」

「うん。行つてみよ！」

二人は五分ほど歩くと小屋の前に着いた。

看板は無いが建物の中では牛の世話をしている四十過ぎと思われる男性がいた。

搾乳された牛乳を入れておく入れ物であろうか、木でできた樽が無造作に並んでいる。

「すみません！」

呼び掛けると男性はその声に気付いたようで世話をしている手を止め、幸助へ目をやる。

「何か用か？」

「はい。ちょっと伺いたいことがあります」

男性は幸助へと近づく。

「何だ？　ここはお前らみたいながきの来るとこじゃねえよ。俺は忙しいんだ」

「すみません、すぐ済みますので」

「ならさっさとしてくれ」

取っつきにくいなと思いつつ幸助は続ける。

「ええと、生クリームという牛の乳を加工したものを探しているのですが、ご存知ですか？」

「そんなもの知らんな」

「では、牛の乳をレストランに卸して頂けるところを探してるんですが」

「あん？ 売り先なんてみんな決まってるんだ。ウチだけじゃなくて他の牧場もな。帰った、帰った」

シッシと手を振るとまた自分の仕事へ戻ってしまった。

「そこを何とか」

「うるさいー！」

「……」

「コースケさん、もう行こ」

続いて隣の牧場も訪れてみたのだが、結果は変わらずであった。

もともと牛乳の需要が少なく生産量はそれに合わせて少ないため、売り先はすべて決まっているとのことだった。

結局何一つ得ることができずとぼとぼと元来た道に戻る二人。

気落ちしたサラを励ますように幸助は切り出す。

「まだ酪農家は他にもあるからさ。ちゃんと作戦を考えて違つところを探してみよう」

「うん……」

次の言葉が続かなかった。

朝よりも黒に近くなった空から、ポツポツと涙のような雨粒が滴り落ちてきた。

用意していた雨用の外套を羽織る。

「今日は帰ろう」

「うん……」

そして二人とも無言で歩く。

外套をたたく雨だけが空しく音を立てていた。

パシパシと幌をたたく雨の音が響く帰りの馬車の中。ここでも二人は無言のままだった。雨に濡れた体が冷える。

やることも無いので幸助はぼんやりと外を眺める。

雨に濡れた街にいつもの賑わいは無い。

薄暗く、色彩のない景色だけが流れていく。

しばらくそのような景色を眺めていると、幸助の眼に見たことのある店が飛び込んできた。

その瞬間、幸助の頭の中に一筋の光が差し込んだ。

「しまった！ 僕としたことが、何でこんなこと忘れてたんだ！」

「うん？ どうしたの、コースケさん」

「マールさんに仕入先を紹介してもらえないかな。サラなら付き合いも長いし、教えてくれるんじゃないかな？ 紹介だとかなり話が通りやすくなるよ」

「それいいかも！」

幸助は日本での仕事で、紹介の重要性をひしひしと感じていた。

紹介というきっかけが一つあるだけで、普段会えない社長に会えたり二つ返事で取引をしてもらったこともある。

だが紹介する側は、する方される方双方に対して責任を持たなければならぬので、そう簡単に紹介してはいけない。

下手な人を紹介して逆恨みを買われてしまつと目も当てられないからだ。

早速二人は馬車を降り、マールの店へ行く。

いつでも停まってくれる乗合馬車は便利である。

ドアを開けるとチリンチリンと鈴の音がする。

ランチタイムより少し早いせいかな雨のせいかは分からないが、店内に客はいない。

程なくしてエプロン姿のマールがやって来た。

「なんだいサラとこの前のお兄さんか。こんな雨の日はどうしたんだい？」

「マールさん。今日はお願いがあつてお店に来たの」サラが答える。

「なんだい？ サラは妹みたいなものだ。できることなら聞いてやるよ」

そう言うマールは席へ二人を案内する。

幸助とサラが隣に並び、サラの向かいにマールが座る。

「マールさんのクリームシチューは牛の乳を使つてるよね？」

「うん、そうだけど。それがどうかしたの？」

「仕入先を紹介してほしいの！ 実はお父さんが牛の乳を使ったパスタを作りたいて言つてて」

「そうか……。いいよ、教えてあげる」

えっ、という顔をするサラ。

そんなに簡単に教えてもらえとは思っていなかったのだ。

ただしと言いながらマールは続ける。

「紹介はするけど仕入れられるかは分からないよ。一応私からもお

願いの手紙は書いてあげるけど、生産量自体が限られてるからね」「いえ、それだけでも助かるよ。ありがとうございます！」「ありがとうございます」幸助もサラに続く。

その後マールのシチューを食べ身も心も温まった後、アロルドの店へ戻った。

そのまま紹介してもらった牧場へ行こうか少し悩んだが、急いでるわけでもないので天気の良い日に改めようということになったのだ。

そして三日後。

アロルドの店は定休日である。天気も上々。西へ向かう馬車の中にはサラと幸助、そしてアロルドもいる。

「なんでお父さんもついてくるの」

サラは少しだけ機嫌が斜めである。

「新メニューの胆となる食材の買い付けだ。お前たちだけに任せはおけん」

「とか言っただけホントのところはどうなの」

「だからお前たちだけに任せてはおけんと言っただけ！」

「まあまあ、二人とも」

「コースケ（さん）はどっちの味方なんだ（なの）！」「サラとアロルドがハモる。

「今日は天気がいいなあ」「わざとらしく外を見る幸助。

店のためとはいえサラが幸助と二人きりになる時間が増えるとい

うのは、父親として許せなかつたようだ。

西門に着くと前回訪れた牧場を横目にさらに先へ足を進める。

一時間くらい歩くと、白に塗られた倉庫のような建物が見えてきた。

「あ、あの建物だね！」

「うん。間違いない。マールさんの行つてた通り白い建物だ」

建物の入り口に着くと、扉には「御用の方は中に入り呼び鈴を鳴らしてください」と書かれたプレートが掲げられていた。

「こういうの親切だよねっ、コースケさん」

「うん。確かに」

中に入ると、木目のきれいなカウンターが三人を出迎える。

カウンターに置いてある鈴をカランカランと鳴らすと、一人の女性が出て来た。

「こんにちは。どのようなご用でしょうか？」

「こんにちは！ えっと、マールさんに紹介していただいたサラと言います。牛の乳のことで少し相談がございまして」

「あら、マールさんの。ちょっとお待ちくださいね。主人を呼んで参りますので」

そう言い残し奥へと消えていった。

待つこと五分。恰幅のいいオーバーオールを着た男性がやってきた。

「お待たせしました。牧場主のカウサンです。マールさんのご紹介と言つことですが」

「はい！ 手紙を預かってきましたので、まずは見ていただいていますか？」

「では皆さん、こちらへどうぞ」

そう言われて三人は応接室に通され、ソファへ腰を掛ける。

カウサンはふむふむと手紙を読む。

程なくして読み終わると顔を上げ、サラへ視線を向ける。

「なるほどですね。恐らく生クリームというのはバターを作る途中の状態の乳のことだと思えます」

「そうなんですか」

「はい。しかしどこも生産量が限られておりまして……」

カウサンがそう言い淀むと、やっぱりダメかとサラの眼が少し曇る。

「ただ」

「ただ？」

「チーズの生産が過剰気味になっていたので、その分をお回しすることはできるかもしれませんが」

「ほんとはですか！？」サラがテーブルに身を乗り出してカウサンに聞く。

「え、ええ」ちよつとひきつった顔をするカウサン。

「あと、チーズも必要なんです」

「そちらについては問題ありません。ウチのは二年熟成で美味しいですよ」

その後、生クリームとチーズをサンプルに少しだけ分けてもらい、店へ戻ることとなった。

幸助とサラの顔は今日の天気のように晴れやかだ。

そしてここまで一言も発していないアロルドは完全なオマケ状態だ。

「マールさんに感謝だね！ 今度報告しなきゃ」

「うん。そうしよう。あ、アロルドさん。カルボナーラはチーズの味が濃厚なのが僕の好みです。完成楽しみにしてますね！」

「お前また完全に丸投げしやがったな」

「僕の専門分野はあくまでも経営ですので。あ、言うの忘れてました。黒コシヨウも最後に散らしてくださいね」

「えっ、お前高級品だぞ、黒コシヨウ」

もう次の出番は試食の時ですねと言い残し、街の西門へ向かう。

「おいしいカルボナーラ、楽しみにしてるね！」

「おいつ、サラまで……」

カルボナーラが完成したのは、それから二週間後のことである。



## 7・サラの涙

「いただきます」

アロルドの Pasta 亭のテーブルに座っているのは幸助とサラ。

幸助の前には白い器に盛られたクリーム色の Pasta が湯気を立てている。

そう。アロルド苦心の作、カルボナーラが遂に完成したのだ。

ところどころ高級品である黒コショウが散らされている Pasta をフォークで巻く。

濃厚なチーズの香りをふりまくソースが滴ることなくねっとりとして Pasta に絡みついてくる。

Pasta を巻いたままフォークの先でベーコンを突き刺すと、口へ運び込む。

(!!! これはなんと濃厚な！ 今まで食べたカルボナーラと比べると違う味だけどこっちの方が美味しい！ ベーコンの塩加減とニンクの相性も最高だ)

幸助の口の中はそれぞれの素材がケンカすることなく融合しあい、得も言われぬ状況となっている。

それをじっくりと噛みしめ味わい、最後に飲み込む。

「うまい、またしても予想以上だ。サラはもう食べたのか？」

「ううん、お父さんの言う『完成形』はまだ食べてないの」

幸助はカルボナーラをサラへ渡す。

「食べてみなよ。これは美味しい」  
「うん！」

サラはためらうことなくカルボナーラを食べる。

「もぐもぐもぐ……。うんー、前より濃厚で美味しいよ！」

片手で自分の頬をなでながら悶えるサラ。

「アロルドさん、これまた本当においしいカルボナーラができましたね」

「ああ。あのチーズが相当に濃厚な味だな」

どうやら酪農家カウサンのチーズが相当な役者であったようだ。もちろん同じ生乳を使っている生クリームの役割も大きいであろう。

それらに加えて卵が織りなす濃厚な味に、ベーコンが旨みと塩気を加え、ニンニクが香りを引き立たせ、黒コショウがピリツと全体をまとめている。

なによりもそれらの素材を暗中模索しながら、まとめあげたアロルドの腕は特筆すべきものである。

「だが、な。原価がだいぶ高くなったぞ」

「販売するならどのくらいになるんですか？」

「大銅貨十枚だな」

「それでしっかりと適正利益は取れていますか？」

「……」

無言になるアロルド。

「まさか、トマトバジル Pasta よりも利益額が少ないってことは無いですよ？」

「……」

「はあ、そのまさかでしたか」

「……、ああ」

「ちなみに原価はどのくらいですか？」

「大銅貨八枚つてことだな」

「なら、最低でも大銅貨十二枚にする必要がありますよ」

本来なら五割は利益が欲しいところである。

しかし大銅貨十六枚となると誰も食べてくれなくなる可能性もある。反対に安くしすぎると後から値上げしにくい。値付けは難しい仕事である。

「大銅貨十二枚ならランチタイムの相場は越えますが、背伸びすれば払える金額じゃないでしょうか。ちょっとだけ特別な時に食べてもらえるかもしれませんよ」

幸助が頭の中に描いているのは『女子会』である。

ママ友たちが集まり、千五百円程度のランチに舌鼓を打ちながら取り留めもない会話をする。そんな使い方をしてくれたらなと考えたのだ。

「別に既存のメニューはそのままなんですから、今来てくれてるお客さんにはほとんど影響ありませんし、それでメニュー入りしてみませんか？」

「コースケがそう言うならやってみるか」

こうして『アロルドの Pasta 亭』に新しい Pasta メニューが追加

されることとなった。

カレンダーは六月に変わり、数日が経過したある日。

太陽は高く昇るようになり、今日はじっとりと汗ばむような陽気である。

幸助とサラ、アロルドはいつもの時刻、いつもの席に集合していた。

五月の帳簿ができたということで久しぶりに打ち合わせが開かれることとなった。

「これが先月の結果だそうだ」

アロルドは帳簿を幸助へ渡す。

いつも一枚の紙にびっしり書かれていたのが、今回は二枚に渡っているようだ。

心なしか文字や数字も大きい。

「では、見させていただきます」

幸助は渡された帳簿を読み取る。

そこから読み取れるのは、文句なしの黒字という結果であった。

売上から食材の仕入れや光熱費などの経費を引いても、一家が生活するには十分な利益が残っている。

立て看板による認知向上、スープ無料サービス廃止による粗利率改善、ハンバーグによる廃棄削減が複合的に作用し合い、このような成果をもたらしたのだ。

ちなみに今のところカルボナーラは始めたばかりなので、帳簿を引き立てるような仕事はしていない。

「完璧です」

帳簿を置き、笑顔でパチパチと拍手をする幸助。

サラがそれに続く。

受け止めるアロルドの顔は誇らしげである。

しばらくして拍手している手を止めると幸助が真面目な顔に戻り、アロルドへ視線を送る。

「僕の仕事はこれでお終いですね」

「ああ、そうなるな。感謝するぜ」

「えっ、コースケさん。それはどういうこと？」

「あのね、サラ。僕の仕事はこのお店を黒字化するっていうことだったんだ。これでお店は黒字になった。だから僕はもう今までみに関わることはないんだ」

「そ……そんな」

幸助とアロルドが契約の条件などを詰めているとき、サラはその場にいなかった。

従って、黒字化したら幸助の役割が終了ということを知らなかったのだ。

「サラと一緒に仕事するのはこれでお終い、かな」

「お終いだなんてやだよ。ずっとコースケさんと一緒にお店を良くしていきたいよ……。新しい料理、また一緒に作りたいよ」

プルプルと体を震わすサラ。  
一筋の煌めくものが眼から溢れてきた。

「でもね、サラ。いつまで僕に頼ってちゃいけないんだよ。もうお店だってサラたちだけでちゃんと経営できるはずだしね」

「で、でも……、またお店には来てくれるよね」

「もちろん。僕だっておいしいパスタは食べたいしね」

幸助はサラの涙をそっと拭く。

「ほら、お別れじゃないんだからさ」

「う、うん。分かった」

まだ客として来てくれるということにサラも少しは落ち着いたようだ。

「そうだ、アロルドさん」

「うん？ なんだ」

「せっかくだから黒字達成を記念して皆でパーティーをしませんか？」

幸助はアロルドへ打ち合上げをしないかと提案したのだ。

この世界にそのような文化があるかは知らない。だが、プロジェクタの終わりは打ち上げと相場が決まっている。幸助の中では。

立て看板、ハンバーグ、カルボナーラ。

たった二ヶ月ではあったが、見知らぬ世界に来て孤独だった幸助が初めて仲間と一緒に成し遂げたのだ。喜びもひとしおだ。

「おう、それはいいな。俺が腕によりをかけてご馳走を作ってる」

「ありがとうございます。サラもパーティーでパツと楽しもうよ」

「うん！」

そして次の定休日。

「……乾杯！！」「……」

夜の帳が下りた頃、店名プレートが裏返っているアロルドのパス  
タ亭にカップを合わせる音がした。

グラスの中身はサラはジュースで大人達はワインだ。

店内は火の灯ったランプが店内を淡く照らし出している。

「コースケさん、どう？」

そう言うとサラはワンピースの裾をつまんでポーズをする。

黒字化達成記念に新しく買ってもらったワンピースである。白い  
生地で腰には大きなリボンがついているシンプルで清楚なデザイン  
だ。

「うん、すごく似合ってる。可愛いよ」

「あ、ありがとっ！」

可愛いという言葉で頬を朱に染めるサラ。

だが、照明が暗いので幸助はそれに気づかない。

テーブルには様々な料理が並んでいる。

まるでクリスマスパーティーのようだ。

レッドボアのステーキ、ハンバーグ、サラダ、カルボナーラ、異  
世界特有の得体のしれない食べ物。

もちろん真ん中はトマトバジルパスタである。

「うん、美味しい!」

「おいしいねっ。さすがお父さん」

「まあな」

一心不乱に食べる二人。

「おいおい二人とも、ゆっくり食べても食いもんは逃げてかないぞ」  
「いいの、お父さん。出来立てで美味しいうちに食べるのが一番なの!」

幸助はサラダを食べた後、きれいな焼け目のついた肉に手を伸ばす。

レッドボアのステーキだ。

「相変わらずジューシーでおいしいな」

幸助がステーキに舌鼓を打っていると、その横にアロルドの妻であるミレーヌがやってきた。

サラと同じ真っ赤な髪の子ミレーヌの顔にも笑顔があふれている。

この世界は結婚が早い。母とはいえ三十代前半であるミレーヌには若々しさがある。

幸助はその姿を見てアロルドもげてしまえと何度思ったことが。

「コースケさん、本当にありがとうね」

「いえいえ、自分の仕事をしただけですから」

「あと少して店を畳まなきゃいけないかったのよ。一家を救ってくれて本当に感謝してるわ」



まだ内職をしているためあまり店には顔を出していないが、経理だけはずっとやっていたため一番数字の変化を感じていた。

「こちらこそありがとうございます。久しぶりに充実した時間を過ごせました」

「あのね、コースケさん。お父さんとお母さん、ほとんどケンカしなくなっただよ」

「サラは余計なこと言わなくていい」

「うう……、だって本当のことだもん」

「あはははは、よかつたじゃないか」

両親がケンカしなくなった。サラにとっては大きなことである。

働いている人間は得てして仕事の良し悪しを家庭に持ち込んでしまう。これは仕方ないことである。

だからこそ仕事が充実しお金に困窮することが無くなれば、家庭内も明るくなるものである。

その逆も然り。

家族経営である『アロルドのパスタ亭』では、それが顕著に表れていた。

アロルドは材料に拘り、ミレー又は資金に拘る。だからお互いの主張は平行線となっていた。

味を落としたら客足は減るし資金が尽きれば営業できなくなる。

どちらの主張も正しいのだ。

そこに突然登場した幸助が、短期間で見事に解決してみせたのである。三人とも思いもつかない手法を駆使し。

だからこそ、サラの中で幸助は救世主でありヒーローのように見えていたのだ。

店から漏れる賑やかな声は、その後数時間続くこととなった。そして宴もたけなわ。お開きの時間がやってきた。幸助を見送るために皆ドアの前に集まっている。

「アロルドさん、ご馳走様でした」

「おう。いろいろ世話になったな。また食べに来いよ」

「もちろん。あと、来月から報酬の支払、忘れないくださいね」

「この雰囲気ですれを言うか！ 大物になるな。お前、いや、コースケは」

「また遊びに来てね、コースケさん」

「はい。また来ます、ミレーヌさん」

「コースケさん!!」

ガシツと幸助に抱き付くサラ。

髪の毛からふわつと石鹸のいい匂いが香ってくる。

控えめだけれど柔らかい何かが当たる。全神経をそこへ集中する幸助。

「コースケさん、毎日パスタ食べに来るんだよ」

「ま、毎日は無理だけどできるだけ来れるようにするよ」

「絶対、ぜったい、ぜえっただよ!!」

「うん。約束する」

ポンポンと頭を優しくたたくと、サラは幸助から離れた。瞳には今にもこぼれそうな涙を溜めている。

「サラはそんなに泣き虫さんだっけ？」

「そんなことないもん！」

言葉とは裏腹にこぼれ出る涙。

いつの日かと同じようにサラの涙を拭う幸助。

「ありがとう、コースケ」

「また、ね。サラ」

「それでは皆さん、お世話になりました」

頭を下げるとギィと重厚なドアを開け、外へ出る。

ドアを閉めようとするとサラが手を振っていたので振り返し、その場を後にする。

日中とは違う涼しげな風がアルコールで火照った頬を撫でてくれる。ちなみに頬が火照っている原因は他にもあるのだが。

少し歩くと振り返る幸助。

店の小さな四つの窓からは淡くも暖かい光が漏れている。

(みんな、本当にありがとう)

たった二ヶ月間の出来事であったが、幸助にとってはとても内容の濃い時間となった。

サラ、アロルドと出会い店舗改善を完遂し、初めて自分の存在価値を確認することができたのだから。

無責任に召喚され右も左もわからなかった異世界。何の目的も持たずにただただ旅をし、ダラダラと過ごしていた半年と比べると雲泥の差である。

宿へ帰る道すがら、社畜時代にくすぶっていた感情が湧き上がった

てくるのを感じる。

(そういえば勤務時代にずっと抱いていた夢があったんだよな。い  
ずれ自分の会社を持って、より多くの人の役に立つんだって。

具体的に何をするっていうのは決めてなかったけど、もしかした  
らここで今してきたことなのかもしれないな。

よし、この世界でその夢を叶えてみよう！)

そう心に誓う幸助。

この決心が今後、国をも巻き込んだ壮大な展開になることを幸助  
はまだ知らない。

## 7・サラの涙（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

これで第一章はおしまいです。

幕間を一つはさんで次章は食料品販売店編となりますが、今後もサラやアロルドの店は登場します。

幕間：伯爵令嬢

ランチタイムも終わりに近い午後二時。

アロルドの Pasta 亭は最も忙しい時間を終えたところである。

一応店は三時まで開いているが、二時以降に来店する客は稀だ。先ほど最後の客を見送ったサラはテーブル拭きに勤しんでいる。

「ふう。今日もお客さん、いっぱい来てくれたなあ」

心地よい疲れに包まれているサラ。

本日の来店客は初めて30人を超えた。

そろそろ一人で給仕を務めるのも限界である。

家計を支えるため内職をしていた母ミレー又は来月からフルタイムで手伝ってくれるので、それまでの辛抱だ。

カルボナーラの影響か、最近では裕福な家の子女であろう良い仕立ての服を着た客たちも来店するようになった。

皆、カルボナーラとオニオンスープのセットを注文し、楽しそうな女子トークを繰り広げながら食べている。

話に夢中になり滞在時間が長くなりがちだが、客単価は順調に上昇中だ。

最後のテーブルを拭き終える。

さて次は皿洗いだと厨房へ行こうとした時、馬車が停まった音に気付く。

「あれ、誰だろう？ こんな時間に」

小さな窓から外を窺うサラ。  
耳に聞こえた通り、やはり馬車が店の前に停まっていた。  
その馬車を見てはっと息をのむ。

今までも馬車で来店する客はいたが、今日の馬車はいつもと少し違うのだ。

くどくない程度に華美な装飾が施されており、ひと目で身分の高い人が乗るものだと解る。

そして何より目を引いたのは、領主であるアヴィーラ家の紋章が刻み込まれていたことである。

「あわわ……、りよ、領主様の馬車!？」

アヴィーラ家の紋章が刻まれているということは、領主一家とそのお伴しか乗ることはできないということとはサラも知っている。

この街で一番身分の高い人がこんなちっぽけな店に何の用なのか。不安で胸いっぱいになるサラ。

先に降りたピシツとした黒服を身に纏う初老の男性が馬車のドアを開けると、サラと同じくらいの年であるう銀髪の少女が降りてきた。

二人が何か会話をしている。サラはその会話に耳を傾ける。

「お嬢様、こちらにございます」

「ここなのですね。最近市井で噂の『かるぼなあら』とやらを出しているお店は。お洒落な佇まいですこと」

「どうぞお入りください」

会話から、来たのは領主ではなくその令嬢と推察するサラ。

どうやらカルボナーラが目当てのようである。

それを聞いて少し安心する。

黒服を着た男性がドアに手をかけるとギィと音がし、店内に光が差し込む。

そしてシンプルだが仕立ての良い水色のドレスを纏った少女が店内に入ると、その後に男性が続く。

「い、い、いらっしやいませっ！」

慌てて礼をしようとするが作法がわからない。

領主家など、サラからしたら雲の上の存在である。

領主どころか下級貴族とすら何の接点もない。

ワタワタと慌てていると、少女は微笑みながら言った。

「畏まらないくださいませ。本日はお忍びですので」

「は、は、はい！」

「あなたのお店、『かるぼなあら』という素敵なパスタを食べさせてくれると友人の中で話題で持ちきりですよ。わたくしも食べたくなって来てしまいましたの」

「は、はい！ ではこちらの席へどうぞ！」

貴族や富裕層は通常、街の北側にある貴族街にあるレストランを使う事が多い。

従って、平民が使うこのような店に行くことは滅多にない。

ましてや今日来店したのは領主の令嬢である。

サラが慌てるのも無理はない。

「セバスチャンもご一緒してくださいませ。わたくし一人で食べるのも寂しいですから」

「畏まりました、アンナお嬢様。では失礼します」



伯爵令嬢の名前はアンナ・アヴィーラである。

領主であるアルフレッド・アヴィーラ伯爵の五女で、サラと同じ  
14歳。

普段は徴税担当の官吏に同行し地方の村を巡察したりする行動派  
である。

アンナはここ最近、友人の集まる茶会で何度もカルボナーラとい  
う聞いたことのないパスタの名前を耳にしていた。

聞いたことのない名前のパスタ、しかもおいしいと評判である。  
居ても立っても居られなくなり、わざわざ足を運んだのだ。

「どんなお料理か楽しみですね」

「ええ。何でも牛の乳とチーズをふんだんに使用しているそうです  
よ」

「まあ、それは珍しいですね」

しばらく待つとパスタが出来上がったようである。

サラが手に二枚の皿を持ち、二人の座るテーブルへやってきた。

「お、お待たせしました！」

「こちらが、か、カルボナーラです。ごゆっくりどうぞ」

サラの緊張はまだ解けないようである。

配膳を終えると足早に厨房へ戻ってしまった。

「まあ、何ておいしそうなパスタですこと。早速いただきましょ  
う  
か」

「はい。そう致しましょう」

アンナは上品な仕草でフォークを手に取ると、パスタを絡め取り小さな口へ運ぶ。

それを見届けるとセバスチャンも続く。

「こ、これは。何と濃厚な味ですこと。屋敷でもこのような味、食べたことないです」

左手を握り頬の横で上下し、美味しいという仕草をする。

その行為をセバスチャンが窘めようとしたが、今日はお忍びということで見なかつたことにする。

「ええ、これはすごいですね」

「牛の乳とチーズだけではこのように濃厚にはなりません。どのような工夫を凝らしているのでしょうか」

「申し訳ありませんお嬢様。私も解りかねます」

味の決め手はチーズと生クリームである。

しかし生クリームは一般には流通していないので、分からないのも無理はない。

「皆さんがおいしいと口をそろえておっしゃるのが、よく分かりますね」

「そつでございますね」

濃厚な味に手が止まらなくなったようで、黙々とパスタを口に運ぶアンナ。

あつという間に完食してしまった。

「おいしかったわ。またすぐにも食べに来たいですね」

「お嬢様、あんまり自由に歩出しては、この私め領主様に顔を合わ

せられなくなつてしまいます」

行動派のアンナは時に屋敷を抜け出して街をぶらつくことがある。本人は息苦しい貴族同士の付き合いから抜け出せる息抜きのつもりであるが、貴族という身分上誘拐などの危険も考慮せねばならない。

そのたびに父である領主から叱られるのは教育係でもあるセバスチャンなのである。

「そうですね。次に来られるのはいつになるんでしょうか」

両手を頬にあて物憂げな表情をするアンナ。

余程気に入ったようだ。

それを横目に会計を済ませるためセバスチャンがサラを呼ぶ。程なくしてパタパタとサラがやってきた。

「とても美味しかったわ。かるぼなあら」

「ありがとうございます！」

「ところで、このような創造性に溢れるパスタ、どのように考え出したのですか？」

料理店にそのままレシピを聞くのは失礼にあたると思い、遠回しに聞く。

「えっとですね、これはコースケさんが教えてくれたんです。他にもいろいろお店のために教えてくれたんですよ」

「はて、コースケさん。聞いたことのないお名前ですね」

「フレン王国出身でこの街には最近来たばかりなんです」

「そうでしたか。ありがとうございます」

期待していた回答とは違ったが別の情報が手に入ったため、そこで切り上げるアンナ。

話が終わったことを察し、セバスチャンが会計の銀貨を三枚渡す。

「お釣りを持ってきてます。少々お待ちください」

「いえお嬢さん。お釣りは取っておいてください。この年で久しぶりに感動的な体験をさせて頂きましたので」

「えっ、でも」

「いいんですよ。また美味しい料理を街の皆さんに提供してくだされば」

「は、はい！　ありがとうございます！」

ようやく緊張が解けたようで、笑顔で二人を見送るサラ。

こうして領主令嬢の来店という『アロルドの Pasta 亭』開店以来の大きな出来事は幕を閉じた。

帰りの馬車の中。

「セバスチャン。フレン王国では牛の乳を食事を使う文化はあったかしら？」

「いえ、お嬢様。私は聞いたことがありません」

もともとこの辺り一帯の国々は温暖な気候のため、酪農自体あまり行われていない。

アヴィーラ伯爵領が少し特殊なのである。

「それなのにフレン王国の方に教えてもらったというのは気になりますね」

「ええ。しかし、こちらに来て自ら発想されたのかもしれませんが」  
「そうですね。コースケさんとおっしゃっておりますか。そのお名前、一応覚えておきましょう」

こうして幸助の名は領主令嬢の耳へ届くこととなった。

## 1. どこにでも売っている小麦（前書き）

本文中に登場する手法は異世界固有のものです。

日本で通用するかどうかは分かりません。

特に食料品販売店経営の方、参考にする際はご注意ください。

## 1. どこにでも売っている小麦

「おわつ、すごい金額だな。アロルドさん無理してるんじゃないか」

『アロルドの Pasta 亭』の任務が完了してから一か月。  
幸助は、商業ギルドに来ていた。

石造りで二階建ての立派な建物は商業街の中心にある。

長いカウンターでは多くの商人らしき人が何らかの手続きをしている。

日本の銀行のような光景である。

カウンターの向こう側には受付嬢がいる。皆顔立ちの整った若い女性ばかりである。

採用基準は間違いなく顔だなと幸助は推察する。

二階は大小さまざまな会議室があり、ギルド主催の勉強会や商人同士の商談に使用されている。

ちなみに幸助はまだ二階には行ったことがない。

始めて商業ギルドに来た時に、説明で聞いただけである。

暦は七月を迎えた。

外ではギラギラと真夏の太陽が照り付けている。

しかし湿気は高くない。

従って、石造りで直射日光が遮られているギルド内は汗ばむほどではない。

幸助が商業ギルドに来た目的は二つある。

一つはアロルドからの報酬が振り込まれているか確認すること。

もう一つは事業者登録をするためである。

現在幸助のいるマドリー王国で営利目的の事業を行う場合、必ず事業者登録を行う必要がある。

そして業績により所定の税金を納めなければならない。

農業は収穫高の五割。

幸助のような商業の場合は利益の五割である。

ここで言う利益とは「売上から仕入を引いた金額」すなわち粗利のことである。

日本の企業のように粗利から人件費や光熱費などの経費を引いた後に残った金額に対して課税されるわけではないので、税率はかなり高いものである。

しかしこれでも周辺の領地と同等か少し低いくらいなのだ。

もともと、正確な収益を把握することはできないため、商業の場合ほとんど申告制のようなものとなっているが。

ただし稀に抜き打ち検査はあるようだ。

事業者登録を済ました幸助はもう一つの目的である口座残高の確認のため、カウンターで手続きをしていた。

残高の確認は専用の魔道具に身分証でもあるギルドカードをかざすだけである。

幸助がギルドカードをかざすと、アロルドから金貨三枚分の入金があったことを示した。

これは一般家庭の一月分以上の生活費である。

幸助が驚くのも無理はない。

「これだけ支払えるってことは固定客も定着してきたのかな。またパスタ食べに行かなきゃ」



手続きを終え商業ギルドを後にする。  
外に出ると再び真夏のキラキラした太陽が幸助を迎える。

「さて、と。何をしようかな」

商業街のメインストリートを歩く幸助。

今日も様々な商店が軒を連ね、来店客と賑やかな喧騒を作り出している。

その中を特に当てもなく歩く幸助。

あれ以来、事業を立ち上げると決めたものの具体的な仕事はしていない。

いや、顧客に出会ってないと言い換えることもできる。

そうそう幸助を頼ってくれる人は現れないものである。

「パスタ以外の美味しいものが食べたいなあ。できれば米とか。ただこっちに来てから米に出会ってないんだよなあ」

幸助は故郷の懐かしい味を思い出していた。

何にでも合う白い米。

粒がツヤツヤ光る麗しい米。

どこかに売ってないものかと思案する。

幸助が召喚されたお隣の国フレン王国には米は無かった。

麦を粥のようにして食べる食事はあったが。

そういえばマドリー王国ではまだあまり探していない。

とりあえず今日の目的を米探しに設定する幸助。

牛丼親子丼天丼など考えつつ歩いていると、穀物屋らしき店舗が目にとまった。

米への淡い期待を持ちつつ店に入る。

「らっしやい、旦那。今日はどのような用向きで」

店員であろう細身の男性が声をかけてきた。

小麦や大豆などが狭い店内に所狭しと並んでいる。

中央には大きな秤がある。

この国の穀物は量り売りが基本である。客が必要量を店員に告げ、店員がその量を量り袋などに詰めるという方式だ。

ざつと見たところ米はなさそうである。

物は無くてもせめて情報が得られればと思い、幸助はとりあえず店員に聞く。

「すみません。ここにお米っていう穀物がありますか？」

「お米？ ヘッ、そんなの聞いたことあ無いな」

米という単語自体が通じないのかもしれない。

そう思い別の言葉で表現する。

「このくらいの粒で炊くとモチモチしておいしんですが」

「ヘッ、知らねえな。あんさんこの辺の人じゃないだろ？」

「ええ、そうですか」

「この辺じゃ穀物は小麦って相場がきまつてるんだよ」

「そうですか、ありがとうございます」

やっぱり無いか、と諦め店を出る幸助。

「なんも買ってくんねーのかよ、ヘッ。冷やかしなら他所でやってくれよな！」

先ほどの店員が幸助に聞こえるように悪態をつく。  
幸助は不快感に目を細める。

(何だよ、感じの悪い店だな)

日本でそんな態度だったらあつという間にネットで炎上するぞと思いつながら通りを歩く。

イライラしているのか足を進めるペースがやや早くなる。

しばらく歩くと先ほどとは別の穀物屋が目に入った。

通りに面する部分が全面的に開放されてるので、この界隈の店は何屋か分かりやすい。

店頭に置かれている小麦を目にすると、幸助は暇が故に余計なことを閃く。

(そうだ！パンを自分で作ってみよう。

こっちのパンは固くて美味しくないからなあ。

白くてフワフワのが食べたいや。

パンなら小さいころに母親と焼いたことあるし、できるかもしれないぞ。

うまくできたらトマトバジルパスタとセットで食べるのもいいな)

思い立ったら吉日とばかりに早速穀物店に入る。

出迎えてくれたのは、しっとりとした紫色の髪を腰まで伸ばしている女性だ。

歳は二十代後半であろうか。

大人の色気を感じ、ドキっとする幸助。

「あら、いらっしやい。見ない顔ね」

「ええ。最近この街に来たばかりですの」

定番となったやり取りを交わす。

やはり典型的な日本人顔の幸助は、ヨーロッパ人のような外見の人が多い国では目立つようだ。

「それで、何を探してるのかな。お兄さん」

「小麦粉を一キロ頂こうと思ひまして」

「あひよ。小麦は何に使うんだい？」

本当のことを言おうか悩んだが、別に隠す必要もないことに気が付き素直に答える。

「はい。パンを作ろうと思ひまして」

「ふふつ。パン作りだなんて可愛いことするのね」

突然笑われたことで戸惑う幸助。

「ああ、ゴメンゴメン。あのね……」

店員の説明によると、この世界では仕事以外で男性が料理をすることは珍しいようだ。

アロルドの姿ばかり見ていたので、その常識には気づかなかつた幸助。

特にパン作りは女の子の趣味ですることが多いそう。

「そ、そうなんです。この辺では食べられないパンを作ってみようと思ひまして」

「へえ、そうなんだ。頑張つてね、お兄さん」

そう言いながら秤で一キロ分に取り分けた小麦を袋に詰める。  
代金である大銅貨二枚を店員に渡すと、代わりにその袋を受け取る。

「そういえば、向こうにも小麦を売ってる店がありましたけど、品種とか何か違うものを扱ってるんですか？」

そう言いながら今来た道を指さす幸助。  
店員の顔に少し影が差したように感じる。

「ああ、あの店ね。扱ってる商品も値段もみんな同じだよ。  
商業街で売ってる小麦はみんなこの辺で採れたものだからね。  
ウチより安いのは大抵古い麦だから気をつけなよ」

(そういえば古い小麦のせいでアレルギーのショック症状が出るってテレビで見たことあるな。)

製造年月日を書いてあるわけじゃないから気を付けないとな)

「貴重な情報、ありがとうございます。あ、あと一つ質問があるんですがいいですか？」

米の話聞いてなかったことを思い出した幸助。  
ダメ元で店員に聞いてみる。

「お米っていう穀物は知ってますか？ 炊くとモチモチして美味しい穀物なんです」

「うっん、この辺では聞いたことないわねえ」

やはりこの店員も知らないようである。

「そうですか。ありがとうございます」  
「いいえ。また来てね」

穀物屋を後にすると、そのまま宿へ向かう幸助。  
途中の屋台で大きな焼き鳥を五本買い、昼食代わりにする。

「お、らっしゃ！ いつもの五本でいいかな？」  
「はい。それをお願いします」

もう常連である。

焼き鳥とは言ったものの、実際には何の肉かはよくわからない。  
塩だけというシンプルな味付けだが柔らかくておいしいので、幸助のお気に入りである。

屋台の前で手早く焼き鳥を食べ終わると串を捨て、再び宿へ足を向ける。

宿に入り受付でカギを受け取る。

もう三か月も同じ部屋に泊まっている。  
従って完全に顔パスである。

「ふう。疲れたな」

二階に上がり部屋に着くと、もわつとした熱気が幸助を出迎える。  
ばすつと乱雑に小麦の袋を机へ置き窓を全開にする。  
涼しくはないが心地よい風が部屋に流れてくる。  
それと同時にすぐ前の通りの喧騒も部屋に流れてくる。

「さて、と。早速パンづくり計画だ」

そう言いベッドへ腰掛ける。  
そして母と行った昔のパン作り体験を、深い記憶の海から手繰り寄せる。

「ええと、確か小麦粉に水を入れてイースト菌を……」

「……」

「……。イースト菌って何だ？」

「天然酵母食パンってのがあったよな。酵母とイースト菌って関係あるのか？」

「発酵させればいいんだよな。どうしたらいいんだ？」

「goggrks。だができない」

「せめてオフラインウィキ ディアでもあったらな」

ありもしないものを望む幸助。

どれだけ文明の利器に頼り切っていたのか実感する。

「仕方ない。諦めよう。小麦粉はアロルドさんにあげよ」と

諦めも早かった。

そしてふと、自宅のクローゼットにしまえばなしの作りかけのプラモのことを思い出したのであった。

## 2・善意の害悪

幸助がパン作りをしようとした翌日。

パン作りを諦めた次の日のこと、とも言える。

空には雲がかかっているので昨日と違って過ごしやすい。

時刻は午前十一時。ちょうどアロルドの Pasta 亭が開店する時間だ。

ギィ。聞きなれたドアの開く音。

いつもと変わらないバジルの香り。

心なしかホツとする幸助。

「あ、コースケさん、いらっしやい！」

厨房からサラがパタパタと駆け寄る。

尻尾があるなら全開で振られていそうである。

トレードマークの真っ赤なポニーテールも揺れている。

「サラ。今日も元気だね」

「うん！ コースケさんが来てくれたからね」

「ありがと。それでこれ、アロルドさんにお土産」

そう言うと幸助は紙袋をサラへ渡す。

「何、これ？」

「どこにでもある普通の小麦粉。せっかく買ったんだけど使い道無  
くって。お店で使ってたよ」

「何で小麦粉なんか買ったの？」



「えっと」

もっともな質問である。

昨日穀物屋の店員さんに笑われたので本当のことは隠すことにしていた。

「ちょ、ちょっとした研究に使おうと思って。でも、うまくいかなかったからその残りの使い道に困ってね」

「そうなんだ。いろいろ物知りの幸助さんなのに、研究もしてるなんてすごいね！」

(パン作りに挫折したなんて口が裂けても言えないな。それにしても何の研究に使えるんだろう。粉塵爆発とか?)

「あ、ありがとう」

トマトバジルパスタを食べに来たんだと言いながら客席に着く幸助。

ちょうどそこへアロルドがやって来た。

「元気そうだな」

「アロルドさんも」

「ああ、おかげで毎日順調だな」

相変わらずその表情は職人の厳しい目つきではあったが、口角は上がっている気がする。

「報酬ありがとうございました。結構な額が振り込まれましたけど、無理してません？」

「ああ？ そんなことで見栄張るわけねえだろう！」

「そ、そうですね」

「よし、パスタは今から作るからな。ちょっと待つとけよ」

「はい、よろしくお願ひします」

キッチンに帰ろうとしたアロルドは足を止めて振り返る。

「あ、あとよ。もしまた他の味のパスタを知ってたら、今度教えてくれよな」

「はい。僕が食べなくなったらその時お願いに来ますよ」

「またお前の好みか！」

このやりとりもいつも通りである。

ま、その好みのおかげでウチは儲かるようになったんだ。たとえ言い残し厨房へ戻るアロルド。

十分ほど待つとサラが幸助の前にプレートを置く。

いつも見慣れて白い皿でなく、長方形のプレートだ。

そこには、トマトバジルパスタとサラダ、小さめのハンバーグが乗っている。

プレートの横は見慣れたオニオンスープのカップが置かれた。

「お、ワンプレートランチを始めたの？」

「ううん、まだ始めてないんだけどね。まずはコースケさんに見てもらいたくて」

「すごいじゃないか、サラ。自分たちだけで新しいことを考えられるなんて」

僕の故郷でもこうしたセットメニューは流行ってたよと伝えると、サラは顔をほころばせる。

「ありがとう！ これ、私が考えたの！」

「そうなんだ。さすがサラ。値段次第では人気メニューになると思  
うよ」

既存のメニューを組み合わせせてセットにし、新しいメニューにする  
という手法はなかなか使える手である。

飲食店だけでなく小売店でも使える手法だ。

ジャパ ットた たがよい例である。

組み合わせることによりその店独自の商品となる。

単価が上がるだけでなく、価格の比較がされにくくなるというメ  
リットもある。

教え子の成長に喜びを感じつつ、セットメニューを食べる幸助。

組み合わせられてはいるが、それぞれの味は流石のアロルドクオリ  
ティである。

あつという間に食べ終わる。

食べ終わったところには続々と客が来店し、まだ十二時前というの  
にほとんど満席である。

「幸助さん、またね！」

ランチを食べ終わると、サラに見送られ店を後にする。

やはりこのトマトバジルパスタが一番美味いなどこちる幸助。  
ちなみに支払った会計は大銅貨十二枚である。

空を見上げると、来た時よりも雲が厚い。

このまま宿に帰るか商業街をブラブラするか悩む幸助。  
することがないなど、社畜時代には考えられないことである。

(とりあえず腹ごなしに商業街でも歩くか)

幸助の宿は商業街にある。

雨が降ったらすぐに帰ればいいという判断から、今日もいろいろなお店を見て回ることにしたのだ。

東西に走るメインストリートと南北に走るメインストリートの交差点を超える。

交差点はロータリー式になっており、中央にはちょっとした公園がある。

程なくして毎日泊まっている宿も通り過ぎる。

さて、何屋に入ってみようかなと考えながら歩いていると、女性と目が合った。

「あら、昨日のお兄さん」

「あ、穀物屋の店員さん。昨日はどうも」

「穀物屋だなんて、ウチは『ルティアの小麦店』っていうんだよ。ちなみにあたしがそのルティア」

「ルティアさんですね。僕は幸助っていいいます」

よろしくお願ひしますと言いながらルティアへ視線を送る。

薄着の上に麻でできた厚手のエプロンをしている。

改めて見ると、エプロンの大きなふくらみに気付く。

E、いや、Gはあるかと推察する幸助。

一瞬だけ目をやると、すぐに視線を逸らす。

女性は胸を見る男の視線にすぐ気付くと聞いたことがあるからだ。

「ふふつ。それでコースケ、美味しいパンはできたのかしら」

お姉さんも食べてみたいなとイタズラっぽい視線を幸助へ送る。

先ほどの視線は既にバレていたのかもしれない。

「あ……、あのですね」

「なあに？」

幸助は慌てて思考を巡らせる。

まだ作っていないと言えば嘘になるし、諦めたとも言いつらい。

それなら試行錯誤中ということにしよう。そう決めて返事をしようとした時、店の前に馬車が停まった。

商人がよく使用する荷馬車である。

御者台から、一人の男性が降りてきた。

「サンチヨスさん」

男性に声をかけるルティア。

どうやら知り合いのようである。

「おやおや、今日は珍しく来客中でしたか。お話はまた後ほどの方がよろしかったでしょうか？」

来客中と言った時に幸助を値踏みするように見る。

どうやら自分のことが邪魔なようだと言われ幸助。

「コースケ、すぐ話は終わるからちょっと待っていてね」

取り立ててルティアと話をするようなことは無かったが、暇である幸助はそのまま待つことにする。

「割り込んでしまったようで申し訳ありませんね」

「いえ、お気になさらず」

サンチヨスと呼ばれた男性は、幸助に一言だけかけると幸助に背を向けルティアと向かい合う。

後頭部はだいぶ寂しくなっている。

五十歳は越えているのだろうと幸助は推測する。

「それで、今月はどれくらい必要になりますか？」

「先月よりも百キロ減らしてちょうだい。まだ在庫がすっかり残ってるの。」

サンチヨスは小麦の卸売商であった。

今日の訪問目的は、ルティアに今月の仕入れ量を聞くことだ。

「おやおや、今月も減らすのですか。あちらのお店は絶好調で伸びていますよ。」

「あちら」というのは、昨日幸助が訪ねたもう一軒の穀物屋のことである。

昨日の不快な出来事を思い出して顔をしかめる幸助。

(あんな店主でも業績が伸びているのか。

世の中分らないものだな。

僕だったらあんな店、二度と行かないぞ。

もしかして悪いことでもしてるんじゃないか)

日本の買い物体験に慣れている幸助は、昨日のことをまだ根に持っている。

ツッターでもあつたら、すぐにでもつぶやきたいと思ったくらいなのだから。

「これ以上取扱量が減ると、単価が上がってしまいますよ」  
「知ってるよ。そんなこと。売れてないんだから仕方ない」  
「困りましたねえ。私としても大切な小売店さんに儲けて頂かないと」

売り先が無くなつては困りますからねとイヤミつたらしく続けるサンチヨス。

サンチヨスは周辺の農家から小麦を買い取り小麦粉などに加工し小売店に卸している。

卸価格は一か月間の取扱量で変動するという設定だ。  
多ければ単価は安くなるし、少なければ高くなる。  
至極当たり前である。

「先代がされていたように、住宅の戸別訪問販売をされてみてはいかがでしょう？」

「それはしないと云っている」

「ルティアさんのことを思っているのですがねえ……。まあ仕方ありません。また来週小麦を持ってきます」

先代からのお付き合いなんですからお店をなくさないでくださいねと言い残し、サンチヨスは去って行った。

「つたく、もう。訪問販売なんてきょうび流行らないよ」

馬車から巻き起こった生ぬるい風が砂埃を立てる。

ため息をつきながら幸助の元にやってくるルティア。

「よかつたんですか？ 僕ここにいて」

「いいんだよ。誰かに聞いてもらわないとやってられないよ。ほんとうに」

唇をかみしめるルティア。

何か大変みたいですねと幸助が続けると、ルティアが店内の隅にある小さな席へ幸助を誘う。

「まあ、立ち話もなんだからここにでも座つてよ」

「あ、はい」

案内されたのは丸椅子二つに八十センチ四方くらいの小さなテーブルという、こじんまりした場所だ。

買い物に来た客と会話するのに使っているであろう。

「さつき話題に出てた業績の伸びてる店って、昨日の話題に出た店のことですよね？」

「そうなの。あいつつたらさ、ウチのお客さんに声かけて、ウチよりも少し安く売ってるらしいの。表向きの値段はウチと同じなんだけどね」

「イヤな奴だとは思ってましたが、そんなことしてるんですか」と憤る幸助。

「ウチは去年亡くなった父の代から買ってくれてるお客さんがほとんどなんだけどね。お客さんも世代が変わると今までの付き合いなんて関係ないし、安い店に流れちゃうんだよ。扱ってるものは同じだしね」

「確かに、扱っている商品はほとんど同じみたいですね」

小麦や豆類その他の雑穀まで、商品ラインナップはほとんど同じである。

この街の「穀物屋」という標準的なスタイルなのであろう。

取り扱い品目が同じで価格も同じとなると、店主と客との付き合いの長さや深さが重要になる。



しかし、ルティアは父の急死で店を継いでまだ一年である。客との信頼関係もこれから構築せねばならない。

もちろん先代からお世話になってるからと買ってくれる客も多いが、価格につられて例の店へ流れてしまう客も多い。

ルティアからは諦めのような雰囲気伝わってくるのも無理はない。

「それでね、さっきのサンチョスさんは気を使ってくれているんだけど、そのアドバイスが古くて」

「訪問販売って言ってましたね」

「そうなの。訪問販売はまだこの商業街に市場ができる前の手法なんだよね。いまだき訪問販売なんかしたら怒鳴り返されるだけだよ。あの人はそれがうまくいった時から商売してる人だから。仕方ないんだけどね」

そういうことかと納得する幸助。

先代がやっていたことが今もうまくいくとは限らない。

自分たちが同じことをやっていても周りが変化し続けるからだ。

得てして人は善意のつもりで自分の意見を言いたがる。

しかし善意のアドバイスだったとしてもそれが正しいとは限らず、害悪になることもある。

自分が経験した環境と相手が置かれている環境は違うからだ。

聞く側は鵜呑みにせず、そのアドバイスを自分の中で一度咀嚼しなければならぬ。

「まあ、そういう訳で今度仕入単価が上がったら、もうやっていけないんだよ」

「そうなんですか。それは困ってしまいますね」

「そうなの。何かお客さんが戻ってくれるいいアイデアがあったらしいんだけどねえ」

ため息をつきながらテーブルへ頬杖をつくルティア。

それにより形成された谷間に幸助の視線が吸い込まれる。

と同時に、サラの時と同様の正義感が湧き上がってくる幸助。

「ルティアさん」

「うん？ なんだい」

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

### 3 . どこにも売ってないオリーブオイル

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

そう力強く宣言する幸助。

それを聞いたルティアの顔がほころぶ。

しかし、目は笑っていない。

「ふふつ。面白いこと言うのね」

「僕は本気ですよ」

「あら、何で赤の他人のお店を手伝ってくれるのかしら」

自分の仕事のことをどうやって説明しようか思案する幸助。

この世界ではコンサルティング業というカテゴリは存在しない。

だから一言で説明ができないのだ。

「えつと、ルティアさん。この道を住宅街の方へ行つたところにある『アロルドの Pasta 亭』ってご存知ですか？」

まずはアロルドの店でやったことを紹介することに決める。

この仕事は実績が大切である。

もちろん、アロルドの許可はもらっている。

「ああ、知ってるよ。最近噂の Pasta レストランね。一回だけ行ったことあるよ。ただ、あたしの店がこんなだし、一回しか行ってないけどね」

巷でアロルドの店は噂になっているようだ。

幸助は店の認知がどのように変化したか知りたくなり、ルティアへ質問する。

「ちなみにいつ頃そのお店が開店したか知ってますか？」

「うん？ ここ最近のことじゃないのか？ それまで全然耳にしたことなかったよ」

「実は、一年以上前なんです」

「へえ、そうだったのね」

やはり店の存在自体、当初は知られていなかったようだ。

「それでそのパスタレストランがどうかしたのかい？ ご馳走だったら遠慮なく受けてあげるけど」

「あ、ご馳走はまたいずれ」

「なんだあ。残念ね」

ふふつと笑いながら紫色の髪をかきあげる仕草をする。

チラツと見えるうなじがセクシーである。

「実は『アロルドのパスタ亭』も三か月前まではルティアさんみに困っていたんです」

「うそ。あれだけ流行ってるのに？」

「本当です。それまでは閑古鳥が鳴いていたんですよ。たまたま匂いにつられて店に入ったら困っているということでしたので、僕が少しだけ手伝ったんです」

「へえ。何を手伝ったの？」

少し興味を持ってもらえたようである。

「立て看板を設置したりメニューを変えたり……、といったところ

ですね」

「ふうん、それだけで繁盛店になるなんて、ホントかしら」

やはり俄かには信じられないようである。

いろいろ試行錯誤したのにも関わらず、言葉にするととても軽く感じる。

しかし幸助は今回も報酬は後払いプランを提案する予定であった。そのあたりの説明をすれば試してもらうことはできるだろうと踏む。

そう言おうとすると、それより早くルティアが口を開く。

「じゃあコースケ。あたしの店ではどんなことできるのかしら」

思いがけず、ルティアの方から願ってもない質問をしてくれた。

「そうですね……」

幸助は悩む。

アロルドの店の場合、要となるパスタの味は一級品であった。

そのため「店に来てもらう」というハードルさえクリアすればよかったのだ。

調子に乗ってカルボナーラを開発してもらったりもしたが。

しかしルティアの店の取扱商品は本当にどこにでもある商品ばかりである。

ライバル店と同じと卸売商から仕入れているため、品質で勝負することもできない。

そもそも小麦の販売は免許制のため仕入先を変えることもできないのだ。

しかも、原価は絶賛上昇中。

小麦以外の取扱商品も豆や雑穀ばかりである。

これらもどこにでもある商品である。

サラが考えたセットメニューを応用することも適わない。

(これは困ったなあ)

ルティアの店には「店」としての特徴がない。

どこにでもある商品しかなく、他の店でも代替がきくのである。

ルティア自身も若く、店を継いで間もないためノウハウも少ない。

「あなたの店から小麦を買う理由はなに？」という質問に答えることができないのだ。

アロルドの店ならば「ここでしか食べられないトマトバジルパスタが食べられる」と答えることができるのに。

勇み足で店を流行らせるなんて宣言をして少し後悔する幸助。

「ルティアさん、穀物や豆類以外に取り扱ってる商品は無いですか」  
「ああ、無いねえ」

想像通りの答えが返ってきた。

「ならルティアの店に」という何かを探したかったのだが、初っ端から頓挫してしまいそうである。

再び考え込む幸助。ふと正面を見ると、ルティアが何か言いたそうにしているのに気づく。

「……………」

「どうしました?」

「ああ、あのね」

そう言いながら店の奥から小さな瓶を取り出すルティア。

「ウチは小麦店だからおかしな話なんだけどね。こんなのがあるんだ」

瓶をテーブルの上に置く。

ふたを開けると中には液体が入っていた。

ふわっと香りが幸助へ届く。

幸助にとっては懐かしい、日本でよく行っていた店の香りだ。

「これってオリーブオイルですか？」

「ああ、そうだよ」

「味見してみても？」

そういうとルティアは瓶から少量のオリーブオイルをすくい、幸助の手のひらにたらす。

幸助は手を顔に近づけ香りをかぐ。

透き通った黄色いオイルから芳醇な香りが溢れている。

十分に香りを味わった後、それをなめる。

「美味しいです。こんなにいいオリーブオイル、この街で初めてです」

一般的な小売店にもオリーブオイルは売っている。

パスタを扱っているアロルドの店にも当然置いてあった。

しかし、味も香りもかなり悪い。

だからアロルドにペペロンチーノを作ってもらうことができなかったという経緯もある。

「でしょ。このオリーブオイルは他とちょっと違うんだ」

「ですね。でも何で目立つところに置いてないんですか？　これは売れそうですよ」

「何でつてコースケ。小麦屋がオリーブオイルを売るなんておかしな話じゃないか？」

「えっ？　全然おかしくないと思いますよ」

「いや、おかしいよ」

どうやらルティアの中では、小麦屋はオリーブオイルを売ってはいけないことになっているらしい。

「小麦が中心ですが豆類は置いてあるじゃないですか」

「それはいいんだよ」

「何ですか？　豆だって小麦じゃありませんよ」

「……………」

「……………」

「そう言われるとそうだな。何でだろ？」

凝り固まった思い込みに気付いたようである。

「法律でダメと決まってるじゃないならば、何だって品揃えしてもいいんですよ」

一貫性やコンセプトも無くやみくもに増やすのはダメですがね、  
と云い幸助は続ける。

「でも何でこんなに質のいいオリーブオイルがあるんですか？」

「うちのところがオリーブ農家でね、一番いいところを卸してもらってるんだ。と言うか、向こうも持て余してるみたいだね。趣味でやっているようなものだからかなり安く買わせてもらってるの。ただ、いくらでも売ってくれて言われてるんだけど、本当に仲のい



「お客さんにしか出してないんだ」

その後幸助はルティアにこの世界のオリーブオイル事情を聞く。その話によると、国内でオリーブオイルはほとんど生産されていないようである。

ほとんど隣のそのまた隣のローマリアン帝国から輸入しているそうだ。

流通経路が長かったり保管の方法に問題があり、マドリー王国に到着するころにはかなり劣化している。

それでも上質な原料を使ったものは貴族や富裕層へ流通する。

一般市民に流通するものは、もともとから品質の低いオリーブの搾りかすなどから無理やり搾り取ったものである。

これではオリーブの香りは期待できない。

この話を聞き、そういえば日本でもオリーブオイルの質で名前に違いがあったなと思いつく幸助。

スーパーマーケットでは主に「エクストラバージン」と「ピュア」というものが並んでいる。

「エクストラバージン」はルティアが扱っているものと同じである。

「ピュア」は、名前を聞くと何だか良い品質に感じるが、結局は搾りかすから溶剤を使って科学的に抽出（溶出）した精製オリーブオイルに少量のバージンオイルを混ぜたオイルのことである。

味も香りもほとんど無い。

「最高品質のものが安く入る。これですよ！ ルティアさん。まさにブルーオーシャンです」

「ブルーオーシャン？ なあに、それは」

「ええと、競合相手のいない領域のことです」

幸助の勤めていた会社では、誰も競合相手のいない市場や業種のことを「ブルーオーシャン」と表現していた。

その対義語は血みどろの競争が繰り広げられる「レッドオーシャン」である。

ちなみに、ただの小麦屋は競合だらけの「レッドオーシャン」である。

「なるほどね。でも、オリーブオイルだけで店が何とかなるのかしら？」

「それはやってみなきゃ分かりませんよ。でも何もやらなかったら先は見えてるんですよね？」

「まあ、それもそうね」

「当たり前に揃えなければいけない商品はちゃんと揃える。ルティアさんの場合小麦や豆類のことですね。でも、それだけでは利益が期待できない場合、利益を稼げる商品を探し、それに力を入れて売り込むといいんです」

なければならぬ商品をちゃんと揃える。

これは普通の店である。

普通の店に「無くてもいいけれど、あると幸せになれる商品」が加わることで特徴のある店になる。

しかもそのような商品は競争相手が少ないため安売りしなくてもよい。

ちゃんと適正利益を稼ぐことができるのである。

「コースケは色々知ってるのね」

「ええ。別の国でも色んなお店の改善を手伝ってきましたからね」

「そうなんだ」

そう言うトルティアは少し間を置く。

その表情からは少しだけ寂しさが漂っている。

「でも、やっぱりお願いはできないかな」

「それはどうしてですか？」

「だって、あたしコースケにお給料支払えないもの」

「それなら心配いりませんよ」

ここにきてようやく幸助の想定していた話題になった。  
もちろんアロルドの店と同じく後払いにするつもりである。

基本的に商品やサービスを購入してもらうためには二つの壁がある。

一つ目は商品やサービスが「欲しいか欲しくないか」という壁である。

必要か必要でないかと言い換えることもできる。

もう一つの壁は、一つ目の壁を越えた後に訪れる。

それは「買えるか買えないか」ということだ。金額的に。

だから高額な自動車や住宅にはローンというサービスがある。

それを知っているから幸助も儲かった後の支払いとしている。幸

助の場合、お金に困ってないからというのも大きいのだが。

これが当てはまるのは高額な商品だけではない。

オリーブオイルのような食品でも同様である。

たとえば次のような場合に。

いつもより高品質なオリーブオイルを見つけた。

これを使えばいつもの料理が貴族の食卓のようになる。

欲しい。とても欲しい。  
でも買えるかな。

毎月食材の予算は決まってる。  
オリーブオイルはいつもの三倍の価格である。  
ちよつと厳しいかも。

でも待てよ。

主人のお酒を一本減らせば買えるかも。

それでいいや。

買ってしまったら。

お酒を減らされた旦那様はご愁傷様である。

あくまで一例であるが、このような心のやり取りが行われた後、  
購入に至るのだ。

幸助とルティアの会話へ戻る。

「心配いらないうつていうのは？」

「はい。僕の給料はルティアさんが儲かってからでいいですから」

「そんなのダメよ。ずっと払えないかもしれないじゃないの」

「いいんですって。それを払えるようにするのが僕の仕事ですし、  
別の収入もあるから心配しないでください」

別の収入とはもちろんアロルドの店から入る収入のことである。

「本当に？ 甘えちゃっていいのかしら」

「はい。大丈夫です」

「ならお願い……してみようかしら」

「ありがとうございます」

その後の話し合いの結果、幸助の報酬は、オリーブオイルからも

たらされた利益の一割ということになり、契約が成立した。

「では販売するための作戦を練るのは明日ってことでいいですか？」  
「いいよ。今日はもう遅くなってきたからね」

まだ暗くはないが、太陽はだいぶ傾いている。

「ではルティアさん明日の朝また来ます。それまでに何でもいいですからオリブオイルを売るための計画を考えておいてください」  
「計画？」

「はい。商品の形態とか価格、販売方法などです」  
「分かったわ。分かってないかもしれないけど」

ではまた明日と言い残し、幸助は店を後にする。  
一人残されたルティアは幸助の背中を目で追う。

「面白い子と出会えたじゃないの。このお店、もう少しだけ頑張ってみようかな」

そうつぶやくとせつせと店じまいの準備を始めるのであった。

その後、閉店後の店舗の二階からは夜遅くまで明りが漏れていた。

#### 4・脳みそに汗をかく

翌日の朝。

幸助は宿で朝食を済ますとルティアの店へ向かった。

商業街のメインストリートにいつもの喧騒は無い。

そう、今日は日曜日である。

昨夜は雨が降ったため、石畳の通りは所々水たまりを作っている。朝とはいえ強い日差しが石畳を温め、空気中の水分濃度を上げている。

「今日は蒸し暑いなあ」

背後から照り付ける太陽の熱を感じながら通りを歩く幸助。

この夏切つての蒸し暑さに顔をしかめる。

日本の夏では当たり前だった蒸し暑さであるが、やはりこたえるものである。

「ルティアの店が近くてよかったよ」

幸助の泊まっている宿とルティアの店はそれほど離れていない。

徒歩で五分程度であろうか。

約束していた店の裏手に回ると、裏口のドアをノックする。

「おはようございます。幸助です！」

「はいはい。ちょっと待っててね」

建物の二階から声が聞こえてきた。

程なくして足音が近づき、裏口のドアが開く。

「おはよ。コースケ」

「おはようございます。ルティアさん」

今日のルティアは白い薄手のチュニックだ。

紫の髪の毛とのコントラストがさわやかである。

エプロンをしていないので、その豊かな双丘がよりくつきりと見える。

昨日よりも素早く視線を逸らす幸助。

「さ、中に入って。冷たい飲み物も用意してるからね」

ルティアに促され、裏口から建物の中へ入る。

薄暗い室内に充満している小麦の匂いが幸助を迎える。

「在庫がいっぱいありますね」

店舗の裏側は倉庫になっていたようだ。

小麦が入っているのである。大きな麻袋が、うずたかく積み重ねられていた。

女性がこれを出し入れするのは重労働であろう。

「すごいでしょ。在庫」

「ええ、これはどれくらいで捌ける在庫量なんですか？」

「そうねえ。三ヶ月分くらいかしら。仕入単価を維持するために沢山買わざるを得なかったのよね」

なるほどと頷きながら考える幸助。

(在庫の回転日数が三か月か。小売店でこれはキツイなあ)

在庫の回転日数とは、今手元にある在庫が空っぽになるまでに何日かかるかという指標の一つである。

適正値は商品により変わってくるが、三か月は長すぎである。

在庫を増やしすぎると、もちろんその分の仕入に対する支払いも増えるので、手持ちの現金が減ってしまう。

何とかしようにもこればかりは頑張って売るしかないので特に何も言わない幸助。

そのままルティアの後を追いつ店舗側へ出る。

窓が開けられている店内は倉庫より明るい。

昨日も座っていた小さなテーブルには木のカップが二つ置かれていた。

「どうぞ、座って」

「はい」

「冷たい飲み物どうぞ。といっても冷却庫の魔石がもうすぐ切れそうだからあまり冷えてないけどね」

カップへお茶らしきものを注ぐルティア。

「気を使っていたいただいて、ありがとうございます」

「なーに言ってるの。これから二人三脚で商売するっていうのに、そんなに畏まらないでよ」

サラリーマン時代の癖がまだ抜けないようである。

「いただきます」



ここまで歩いたのと強い日差しで喉がカラカラの幸助。  
飲み物はアイスティーだった。

キンキンに冷えてはいないが十分に冷たいと感じるアイスティーが喉を潤す。

「ぶはあ」

一気に飲み干してしまった。

「はは。いい飲みっぷりね。おかわりいる？」

「はい。いただきます」

追加分を注いでもらい一息つくと、本題へ入る。

「それで、オリーブオイルについてですが、今はどんな販売方法をしてるんですか？」

昨日は仲のいいお客さんに売ってるということだけしか聞いてなかったので、とりあえず聞く幸助。

「そうね。欲しいっていうお客さんには容器を持ってきてもらってるの。それで、このお玉でその容器に入れてあげるの」  
「値段はいくらですか？」

「よくある家庭用のオイル瓶一杯で銀貨二枚をもらってるの。その辺に流通しているオリーブオイルの二倍くらいかな」

「こんな高品質なのに、それで利益出てるんですか？」  
「どうだろ。ほとんど利益は無いと思うなあ」

どうやら親戚の不良在庫をさばくという義務だけで販売しており、利益は度外視しているようである。

「ルティアさん、まず大前提の話なんですが」  
「なあに？」

「このオリーブオイルは絶対に素晴らしい品質のものです。自信をもって販売しましょう」

「そうね。そうするよ」

「それですね、何かよい販売計画は思いつきましたか」

幸助は昨日の帰り際にルティアへ課した宿題の提出を求める。

アロルドの店で行った時と同様に、幸助がアイディアを出す前にまずはルティアに考えてもらおうとしたのだ。

日々の業務を流れ作業のようにこなしているだけだと、新しいアイディアも湧きにくくなる。

まずは考える癖をつけるのも大切である。

これに慣れてしまえば、サラのようにワンプレートランチのような新しい発想ができるようになる。

「それがね。一生懸命考えたんだけど……」

「どんな小さなことでも構いませんよ」

ポケットから小さなメモを取り出し目を通すルティア。

「まずは、小麦を買ってくれた人全員にオリーブオイルはどう？  
って声をかける」

「うん。それは大切ですね」

「それと、オリーブオイルの瓶を見やすいところに置く」

「うんうん。いいですね」

「店の名前を『ルティアの小麦とオリーブオイル店』に変える」

「あはは。それは斬新ですね」

ルティアの意見を肯定的に聞く幸助。

この会話以外にも、どうにもならないアイデアが色々出たが、今は「考えた」という事実を評価している。

最初から考えることが億劫になることを防止するためだ。

「それで、どのくらいの値段で販売しますか？」

「それはオイル瓶一杯銀貨二枚のままでいいんじゃないのかしら？」

「それだと儲けが出ませんよ」

「あ、そうね。そうだったねえ」

うーん、と腕を組み悩むルティア。

双丘が強調される。眼福である。

「今までよりは高くする必要があります」

「そうね。コースケはどのくらいがいいと思う？」

ルティアはこのオリブオイルをそのまま売るといふ発想しかない。

しかし幸助はもう少し捻ったアイデアを考えていた。

「えっとですね、単純に値段を高くするだけでは、販売が難しくなると思います」

「それで、どうするのいいのかしら？」

「はい。ではちょっと視点を変えてみましょう」

そう言うと幸助はカバンからオイル瓶を取り出す。

陶器でできたシンプルな瓶で、この辺りの家庭では標準的なものである。

「これは昨日買ってきたオリブオイルです。瓶は銀貨二枚しまし

たが中身は銀貨一枚でした」

「うん。この辺でよく見かけるものだね」

「まずはこれと同じ値段で少しだけいい品質の商品を用意しませんか？ 安価なオイルにこの美味しいオイルをブレンドしたものを」

市場に出回っているオリーブオイルは、もともと品質の悪いオリブから絞られたオイルが長期間の流通で劣化したものである。

安価なオイルに少量の高品質オイルを混ぜるだけで、一般的なものより上質なオイルとなる。

「それはどうして？」

「今までも通常の二倍くらいの価格で販売してたんですよ？ そうすると欲しくても高くて買えないってお客さんもいたんじゃないですか？」

「よくわかったね。確かに買ってくれたのは声かけた人の十人に一人くらいしかいなかったね」

「なら、品ぞろえ商品として置いた方が親切だし売上にも貢献してくれると思います」

「なるほどね。なら、あたしはそれを用意して売ればいいのね？」

その答えに幸助はまだそれだけではありません、と続ける。

「あと二種類の商品を用意します」

「一つはブレンド割合を変えて品質を良くした中級品。もう一つはこの搾りたてそのものの最高級オイルです」

これのことと言いながらポンポンと卓上の瓶をたたく幸助。

「仮に高品質のものは通常の倍くらいの価格に設定するとします。これだけ見ると価格が高く感じてしまいます」

「うん。今でも十人に一人しか買ってくれてないしね」

「その隣に通常の五倍くらいの価格の最高品質のオイルが並ぶとどう感じますか？」

「ああ、割安に見えるね！」

「そう。それが狙いです」

実際に背伸びしたい人は無理して買ってくれるかもしれませんがね、と続ける。

二種類しかないと高い方はあまり売れない。

だが、さらに上の価格のものを置くと今まで売れてなかった高い方が売れ出すものだ。

「では、商品に関してはこのような感じでいいでしょうか？」

「ええ」

返事をしながらルティアは大きく伸びをする。

伸びながら発する「んんっ」という声の色っぽい。

「なんだか普段しないことをするもの疲れるものね」

「確かに疲れましたね。考えることも労働のうちですから」

幸助の会社ではこのようなことを「脳みそに汗をかく」と表現していた。

運動すれば体に汗をかくことによる対比表現だ。

窓から外を覗くと太陽はほぼ真上に来ていた。

集中して話し合っていたので時間がたつのが早い。

「もうお昼も近いですし食事にしましょうか？」

「ええ、そうしましょう」

「本当はアロルドさんのパスタを食べに行きたいところなんですが残念ながら今日は定休日なので」

「あたしが作ってあげようか。簡単なものになっちゃうけれどね」「いいんですか？ ではご馳走になります！」

ちよつと待つててねと言い残し、二階へ行くルティア。

宿屋の一階で営業している食堂にでも誘おうとお思っていた幸助。思いがけずルティアがもてなしてくれることになり少しだけ喜ぶ。することがなくなった幸助は思考の世界に入り込む。

(どんな料理か楽しみだなあ。

プロ以外の手作り料理が食べられるのは何か月ぶりだろうか。こつちに来てからは初めてかもしれない。

あ、そうか。

東京にいた頃も彼女と別れてからは手料理なんて食べてなかったや。

それにしてもオリーブオイル、どうやって販売するかだよなあ。たぶん売れるのは安価なものと中級品がせいぜいだろつな。そもそもオイル自体が小麦とかと比べると高いしな)

そんな考え事をするこ十五分。

階段を降りる足音が聞こえてきた。

ルティアである。

両手にお盆を持っている。

お盆の上にある器からは湯気が出ている。

お盆をそのままテーブルに置く。

「お待たせ。豆とトマトのスープよ。豆はウチで売ってる豆なの」

「おいしそうですね。いただきます」

やはりこの地方はトマト料理が多いようである。  
ルティアのトマトスープはシンプルであるがたっぷりと豆が入っ  
ており、ポリユーム満点だ。

添えられた固いパンをちぎりながら食べる幸助。

「うん。美味しい！ ホツとする味ですね」

「ありがとう。こんな料理でも喜んでもらえたら嬉しいよ」

「あ、そうだ。この上に少しだけオリーブオイルを垂らしてみませ  
ん？」

「スープにも使えるのか？」

「はい。美味しいと思いますよ」

イタリア料理店のスープのことを思い出し提案する幸助。  
オリーブオイルならいくらでもある。しかも高品質なものが。  
瓶から少量をすくい、器へ回しながらたらす。

トマトスープの上にオリーブオイルが浮き、模様を作る。  
スプーンでスープをすくい、恐る恐る口へ運ぶルティア。

「うん！ これはいけるね」

「でしょ。オリーブオイルは何にでも使えますからね」

「他にはどんな使い方知ってるの？」

「サラダとかパンとか。とりあえず何でもつけてみるといいですよ」  
「へえそうなんだ。コースケって物知りだから、ホント話してて飽  
きないよ」

「ありがとうございます」

こうして楽しい食事の時間は過ぎていった。

作戦会議は午後へと続く。

## 5・試食販売で不良在庫が大活躍

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

食事を終えた二人は午後のミーティングに入る。

若干の眠気を感じるが、最初が肝心だ。幸助は頬をたたいて気合を入れる。

片づけを終えたルティアが小さな丸椅子に腰かけたタイミングでミーティングは再開された。

「さて。午後からは販売方法についてです」

「うんうん。どうするの？」

幸助の話聞きもらさないとはばかり、身を乗り出しそんな勢いで幸助に問うルティア。

だいぶ幸助の評価点が上がってきているようである。

「まずは昨日ルティアさんが考えてくれたこと、もう一回聞かせてもらってもいいですか？」

それを聞きポケットからサツとメモを取り出すルティア。

しわくちゃの紙切れを引っ張り伸ばし、半回転させると読み上げる。

「ええと、小麦を買ってくれた人全員にオリーブオイルはどう？  
って声をかけることね」

「はい。まずはそれをベースにしようと思います」



アロルドの店と同様、ルティアの店が「オリーブオイルを扱っている」と認知してもらわないと始まらない。

幸助は立て看板のことも考えたのだが、オリーブのイメージが湧かなかったのでまずは声かけから始めることにした。

「それですね、さっきスープにオリーブオイルを入れて食べましたよね。その時どう感じました？」

少量ならただけでその味が激変したスープの味を思い出すルティア。

つい先ほどのことなので、その時の感情はすぐに戻ってきたようだ。

「そうね。美味しいってのと、こんな食べ方あったんだということかしら」

「そう。品質のいいオリーブオイルだからできたことなんですよね」「ええ。目からうろこだったよ」

「ではここで質問です。まだこのオリーブオイルの味を知らない人に「美味しい」って思ってもらうにはどうしたらいいでしょう」

人差し指をあごに当て、斜め上を見ながら考えるルティア。

答えは先ほどの会話の中に隠されている。

幸助がそのように流れを作ったからだ。  
十秒ほど考えるとゆっくりと口を開く。

「味見させてあげる……ってことかしら」  
「正解」

パチパチと拍手をする幸助。

正解したことで笑みをたたえるルティア。

「というわけで、試食販売をしましょう」

そう言うと幸助は店の裏側を指さす。

大量の在庫が保管されている倉庫の方だ。

「お店には大量の小麦が余ってますよね」

「ええ。残念なことに」

「パン屋さんに小麦を預けてパンを焼いてもらうことは可能でしょうか？」

「それなら大丈夫だと思うよ。でも、コースケが焼いてくれてもいいんだよ」

食べたことの無い美味しいの作ってるんでしょ、と視線を投げかける。

昨日は小麦商のサンチョスが来たことで上手くかわせた幸助は焦る。

(まさかここで掘り返されるとは……)

今回は逃げ場がない。絶体絶命である。

はぐらかしたところで、この年上のお姉さんには敵いそうにない。腹をくくって正直に言うことにする幸助。

「小麦以外の材料のことがわからなくて、挫折しました……」

「うふふ。そんなことだろうと思ったよ。酵母は門外不出だからね」

「酵母のこと知ってたなら教えてくださいよお」

「だって、聞いてこなかったじゃないの」

「うぐう……」

幸助がさんざん悩んでいた酵母のことをルティアは知っていた。やはり思い付きで行動はよくないと反省する幸助。

「仕方ないなあ。じゃあこれで許してね」

なぜか頭をよしよしされる幸助。

完全に手玉に取られてしまっている。

「うう、僕はもう子供じゃないんです」

「うふふ。ちよつとからかってみただけよ。朝からずっとコースケの独壇場だったからね」

確かに、三種類の商品展開をすることやスープにオリーブオイルを使うことなど、常に幸助のペースで流れていた。

その流れを少しだが崩せたことに満足するルティア。商売とは全く関係のないところではあるが。

気を取り直して説明を再開する幸助。

「ええと、それですね。お昼を食べているときにパンにも合うって話をしましたよね」

「そうだったかしら」

「はい。なので、来店してくれたお客さんや店の前を通ったお客さんに声をかけて、オリーブオイルをつけたパンを食べてもらおうんです」

「でもタダで食べさせてあげたら儲けが無くなっちゃうんじゃないの?」

もっともな心配である。

「返報性の法則っていつのがあるからそこまで心配しなくてもいいと思いますよ」

「返報性の法則？ それはなあに？」

知らないのも無理はない。

現代心理学の分野であるのだから。

「何かしてもらった人は、お返しをしなければならぬという感情を抱くんです」

「うんうん」

「試食販売の場合、パンを食べさせてもらったからお礼に買わなきゃという感情になるんです」

「なるほどねえ……」

半信半疑のようである。

「まあ、全員がそうなるわけではありませんが」

お金を払えるかという問題もありますしね、と続ける。

「何もしないよりもはるかに購入してもらえる確率は上がります」

しかも小麦はどれだけ使っても大丈夫そうですしね」

「それは余分」

さっきの仕返しができたと心の中でガッツポーズする幸助。

小さい男である。

その後、備品の手配など細かな方針を練る二人。

最終的に、今週は準備期間とし来週の月曜日に試食販売をするこ

とに決まった。

通りを往く人の影がだいぶ長くなったころ、ミーティングはお開きとなった。

そして翌週の月曜日。

記念すべき日を祝福するように抜けるような青空が広がっている。今日は試食販売を行う日である。

朝早くから幸助とルティアは準備に勤しんでいる。

「ちわー。パン屋です。焼きたてのパン、お届けに上がりました！」

「ありがとうー。そこに置いといて！」

「はいさー！」

焼きたてのパンも届き、役者はそろったようである。

夏の暑い日差で劣化しないようオリーブオイルは店内に静置し、店頭には市民におなじみのオイル瓶だけ並べてある。

これだけでも「オイルが置いてある」と気づく人はいるかもしれない。

ちなみにオイル瓶は幸助が陶器商から買い付けた。

「いよいよね」

「うん。頑張ろう」

店頭が一番目立つところに空き箱を置き、その上にお盆を載せる。試食用に即席で詠えた試食台だ。

盆の上には小さくカットされた山積みパンとオリーブオイルの

瓶、そして小皿を置いた。準備は完了だ。

時刻は午前八時。

日本ではまだまだ買い物には早い時刻だが商業街の朝は早い。道を往く人々が徐々に増えてくる。

幸助は店内から店頭の様子を観察する。

基本的に営業そのものには手を出さない方針だからだ。

「さて、がんばらなきゃね」

もう開店の時間は過ぎてているが、いつも通りルティアの店にはなかなか客が来ない。

しかし、これに関してはまだ問題ではない。

早朝に賑わうのは生鮮食品を販売する店なので、穀類を求める客が来るのももう少し後になる。

そんな矢先、店頭到人影が現れた。

「あ、ミアさん。いらっしやいませ」

本日初めての来店だ。

「ルティアちゃん、いつもの小麦五キロよろしく」

「はい。すぐ用意しますね」

いそいそと小麦袋へ向かうルティア。

話しぶりからすると常連のようである。

秤で五キロを計量すると来店客の持ってきた袋に詰める。

「はい。銀貨一枚ね」

「ありがとうございます！」

商品を渡し代金を受け取ると、そのまま客は帰ってしまった。

「あ、試食してもらったの忘れちゃった」

その後もちらほらと来店はあるものの、ルティアは試食の声をかけをするタイミングをうまく掴むことはできなかった。

店頭の試食台に気付き客から声をかけてくることもなかった。試食という行為自体に慣れがなかったためである。

「コースケえ。誰も食べてくれないよお」

店の奥に戻つてくると幸助に弱音を吐く。

開店してから三時間くらいたった。  
時刻は午前十一時前である。

まだ一人も試食をしてもらったことができないでいる。

「うーん、困りましたね……」

「何だか図々しく感じて声がかけてにくいの」

「ま、慣れてないことをやろうとすると最初はそんなもんですよ」

最初から何でもできる人などいない。

練習して場数を踏んで、ようやくコツを掴んでいくものだ。

「なら、これから僕がサクラをやりませよ」

「サクラ？ なにそれ」

「店頭でオリーブオイルを試食して、美味しいって演技をする人のこと」

「あはっ、面白いこと思いつくのね」

日本では当たり前前であるが、この世界ではそのような概念は無いらしい。

「僕がおいしそうに食べている姿を見れば、ほかの人も気になって食べてくれますよ。それにお腹が空いてくる時間ですしね」

「なら、早速やってみよ」

「じゃあ、僕は裏口から表に回りますね」

そして店頭へやってきた幸助。  
早速試食コーナーへ向かう。

「いらつしやい！」

「あれ？ 試食販売してるんだ。食べていい？」

「どーぞ、どーぞ」

「これは何ですか？」

「オリーブオイルなの。パンにつけて食べてね」

「はい。いただきます」

違和感ありまくりである。

だが、幸助やルティアに演技力は期待してはいけない。

二人とも商売人なのだから。

道行く人に見えやすい体勢でパンを手取る。

小皿のオリーブオイルにパンをつけ、しみこませる。

そして口へ放り込む。

「……………」



「お、おいしいぞ!!」

幸助渾身の美味しいコールが通りに行きわたる。  
幾人かがそれを聞きつけ、試食コーナーへやってきた。

「何だなんだ？」

「それ、食べていいのかしら？」

「オリーブオイルの味見ができるみたいですよ。パンをこっしてオイルにつけてパクツと」

幸助が実演して見せる。

周りの人がそれに続く。

「おいしい！」

「食べたことない風味ですこと」

「本当にオリーブオイルか？ これ」

「うん！ お母さん美味しいね！」

「ええ。美味しいわね」

人が人を呼び、一気に大盛況となるルティアの小麦店。  
頑張つてねという意味を込め、幸助はルティアの背中を押し接客を促す。

「いらつしゃいませ。あたしの店にしか置いてない新鮮で高品質なオリーブオイルいかがですか？」

「本当に美味しいわね。お幾らなのかしら？」

「容器代は別で、銀貨五枚です」

「うーん、美味しいけどそれは高すぎて買えないわねえ」

市場に出回っている一般的なオリーブオイルの五倍の価格である。

無理もない。

しかし、この展開に対応するための筋書きは用意してある。

「奥さん、こちらのオリーブオイルでしたら銀貨二枚ですよ」

一般的なオリーブオイルの二倍の価格である中級品を勧めるルテ  
イア。

「あら、それなら買えそうね。さっきのとはどう違うの？」

「通常のオリーブオイルとこの特別なオリーブオイルを混ぜています。  
香りも味も普通のオイルより格段にいいですよ」

「そう。ならそれを頂こうかしら。容器もつけて頂戴ね」

「ありがとうございます！」

こうして、用意したパンが無くなるまで人だかりは途絶えること  
はなかった。

この日の販売本数は、一般・中級品・最上級品それぞれ十本・二  
十一本・三本である。

これは試食代の経費を差し引いても、いつもの小麦の利益を軽く  
超えている。

試食販売は、大成功で幕を閉じた。

「コースケ、すごいじゃない！こんなに売れたよ」

太陽もだいぶ傾いた頃。

店じまいの準備を手伝おうと幸助が店頭へ出ると、ルティアは興  
奮したように幸助へ話しかける。

「ルティアさんの頑張りが実を結びましたね」

「コースケのおかげだわ。誰も穀物屋がオリブオイルを扱ってることに疑問を持ってなかったみたいだし」

「でしょ。そんなものですよ」

「いところにもつとオリブオイル送ってって手紙書かなきゃ」

二人が今日の成果について話しつつ片づけをしていると、見かけたことのある細身の男がやってきた。

例の競合店の店主だ。

ルティアに近づくと、イヤミつたらしく話しかける。

「おやおや、何か変わったことを始めたと聞いて見にくれば、オリブオイルですか。もう小麦店はやめてしまわれたのですか？」

「どうやらこの店主も穀物屋の凝り固まった考え方があるようだ。ルティアは強気で返す。

「あら。敵情視察ですか？ おかげさまで大繁盛でしたよ。いつまでも穀物屋にとらわれても仕方ないですからね」

男の態度が急変する。

「へっ。常識外れのことしやがって。せいぜい頑張るがいいさ。小麦の売れない店は価値なんてねえよ」

「でも、お客さんは喜んでくれましたのよ。常識って何のことなのかしら」

「せいぜい足掻いてろ！」

ルティアの返答にカチンと来たのか、捨て台詞を残しその男は去って行った。

「ルティアさん、あの人が何したかったんですかね？」

「さあ、散々つぶしにかかった店が儲かってそうだから悔しかったんじゃない？」

「可哀そうなヤツですね。そういうヤツに限ってすぐに真似を始めたりするんですけどね」

「これは真似できないけどね」

「ですね。ルティアさんの一番の強みですよ」

こうしてオリーブオイルの販売は順調な滑り出しを見せることとなった。

## 6・因果応報

「アロルドさん。はい、コレ」

「何だ？ オリーブオイルか。在庫なら間に合ってるぞ」

「これは普通のオリーブオイルとはちょっと違うんですよ」

「何だ。怪しい言い方だな」

「まあ、騙されたと思って味見してみてくださいよ」

ルティアの店で試食販売を行った翌日、幸助は開店前の『アロルドの Pasta 亭』に来ていた。

アロルドの顔を見るや否や、ルティアの店から持ってきたオリーブオイルを渡す。

目的は一つ。

アロルドにペペロンチーノを開発してもらったためである。

「この辺のオリーブオイルはどれも一緒だぞ」

オイル瓶を受け取ったアロルドは中身を手にたらし、味見する。芳醇な香りが、そして懐かしい味が口に広がる。

「な、何だこれ！ 帝国産並み、いやそれ以上かもしれないぞ！」

アロルドはオリーブオイルの名産地であるローマリアン帝国で料理の修業をしていた。

だからこそ幸助の持ってきたオイルの味に驚愕する。

「コースケ。お前どこでこんなの手に入れたんだ」

「それは企業秘密です」

「あ？」

「……というのは嘘で、商業街の穀物屋に売ってるんです」

「商業街にあったのか。今まで全然聞いたことなかったぞ」

「『アロルドのパスタ亭』と一緒に認知されてなかったんですよ」

「そうか。なら仕方ないな」

その後幸助はアロルドヘルティアのことやその取り組みについて話した。

親戚にオリーブ農家がいること、今までこっそりと売っていたこと、幸助が販売を手伝っていることなどである。

とそこへ、ちょうど二階から降りて来たサラが幸助の姿に気付किパタパタと駆け寄る。

トレードマークの真っ赤なポニーテールは幸助と出会った頃よりも大分伸びている。

「あ、コースケさん！ おはよ！」

「おはよう、サラ」

「今日はどうしたの？」

「アロルドさんに新しいパスタを作ってもらおうと思ってね」

ニヤリとしながらアロルドへ視線を送る幸助。

「ちよ、その話は全然聞いてないぞ」

「今から言いますね、ペペロンチーノの材料」

「ペペロンチーノ？」

また聞いたことがない料理名が出てきたと頭を抱えそうになるアロルド。

「たっぷりのオリーブオイルにニンニクと唐辛子、ベーコン、塩で

す

「……」

「それをパスタに絡めて完成！ 簡単ですよ」

「また丸投げか！ って、今回は簡単にできそうだな。今までオイルの質が良くなかったから出来なかっただけで」

アロルドがローマリアン帝国で修行していた頃は、素材をオリーブオイルで煮る料理もよく作っていた。

現代のメニューで言えばアヒージョのことである。

そのレシピに似ているので、カルボナーラほど苦労はしなさそうと踏んだのである。

「へー、いいオリーブオイルが手に入ったんだ」

「そうなんだ、サラ。また新しいメニューが増えてよかったね」

「うん！」

「まだ試作も作っとらんがな！」

来週完成品を食べに来ますねと言い残し、幸助はアロルドの店を後にする。

そして翌週のとある日。

太陽が傾き商業街の人通りも少なくなった頃。

似たような店舗が並ぶメインストリート沿いの店舗には、鼻唄交じりで少しだけ早めの店じまいをしているルティアの姿があった。

「今日はコースケと一緒にデート。楽しみだなあ」

ルティアの店で試食販売をしてから一週間が経過した。

試食販売は初日のみで、それ以降はしていない。

食べることで目が当たっての人が湧いてくるのを防止するためだ。

そのため爆発的な成果は出ていないが、それでも中級品が毎日数本売れている。

仕入に強みがあるため、適正価格で販売してもしっかりと利益は稼ぎ出せている。

そんな折、幸助から自分が販売するオリブオイルを使ったパスタの試食に誘われたのだ。

業績が上向きで、久々の外食ができる。

機嫌がいいのも無理はない。

いつもより手早く片づけを済ませると精一杯のお洒落をし、約束の場所である幸助の宿へ向かう。

今日の服装は以前と同じ白い薄手のチュニックだ。

数少ない余所行きの服の一つである。

少しだけ早足で歩く。

夕方ではあるがまだまだ暑い。

じわりと額に浮かぶ汗をハンカチでぬぐう。

宿屋までは歩いて五分。すぐに到着だ。

幸助は宿の前で待っていた。

「コーズケー！ おまたせー！」

手を振りながら幸助に駆け寄る。

たゆんだゆんと大きな何かが上下に揺れる。

「こんにちは、ルティアさん。思ったより早かったですね」

「うん。何かワクワクしてきちゃってね」



二人は合流すると肩を並べてアロルドの店へ向かう。  
店まではおよそ十分くらいだ。

南北に走るメインストリートとの交差点であるロータリーを越え  
ると黒い外壁の店舗が見えてきた。

店頭には立て看板が変わらず立っている。

サラの力作だ。

「コースケの言ってた立て看板はこれのことね。確かに分かりやすいかも」

「でしょ。これだけで大分流れが変わったんですよ」

以前言葉で伝えようとしてうまく伝わらなかった立て看板のことが、パツと見ただけで伝わった。

まさに百聞は一見に如かず、である。

重厚なドアに手をかけ開ける。

ギィ。

薄暗い店内には既にランプの明かりが灯っている。

それに気づいたサラがパタパタと駆け寄る。

「あ、コースケさん！ いらっしやい！」

「こんばんは、サラ。ペペロンチーノ食べに来たよ」

そう言いながら店内に入る幸助。

その後ろからルティアが続く。

(えっ、コースケさん、女の人と一緒に？ しかも美人。誰なの？)

想定外の出来事に戸惑うサラ。

恐る恐る幸助に尋ねる。

「えっと、そちらの方は……？」

「ルティアさんっていつて、例のオリーブオイルを売ってる方だよ」

そして幸助は振り返りルティアを前へ通す。

「ルティアさん、この娘が表の看板を描いたサラです」

「サラちゃん、ルティアよ。よろしくね」

「は、はい。よろしくお願ひします」

二人がテーブルに腰かけると、厨房からアロルドがやってきた。

そして幸助の隣にどかっとな腰を下ろす。

サラは遠巻きにその様子を見ている。

「おう、コースケ。珍しいな。今日は二人か」

「はい。例のオリーブオイルを販売してる方を紹介しようと思いま  
して」

「始めまして。ルティアです」

「俺はアロルドだ。お宅のオリーブオイル、試させてもらったよ。  
すげえ高品質だな」

「ありがとうございます」

「で、一つ聞きたいんだが。まとまった量を定期的に買わせてもら  
うことは可能か？」

「それはもちろん！」

思いがけぬ展開に喜びを隠せないルティア。

飲食店であれば使用量はけた違いだ。

しかも継続購入が期待できる。

「よし、商談成立だ。なら今度とりあえず十本分持ってきてくれ」

「アロルドさん、金額の話してないですよ」  
「そ、そうだったな」

相変わらずのアロルドである。

その後口頭ではあるが条件などを三人で詰め、話はまとまった。  
アロルドはペペロンチーノを作ってやるから待つてるよと言いつつ、厨房へ帰って行った。

サラは変わらず遠巻きから二人の様子を窺っている。

その表情は少し不安げである。

その視線に気づくルティア。

「あら、サラちゃん。どうしたの？」

「い、いえ！ 何でもありません」

「うふふ。コースケを取って食べたりしないから安心して」

「そそそ、そんなんじゃないやありませんから！」

顔を真っ赤にして厨房へ駆け込むサラ。

「サラちゃん。可愛いわね」

「はい。小動物みたいで可愛いですよね」

「コースケのこと、かなり慕ってるみたいだけど？」

「何だか妹みたいなんですよね」

「妹？ ……そっか。そうなんだ」

（あれ？ 何か変なこと言っちゃったかな）

微妙な空気になってきたので幸助は話題を変える。

「それよりも、ルティアさん。アロルドさんとの取引決まってよか

ったですね」

「うん。本当によかったよ。紹介してくれてありがとう」

「いえいえ。これも僕の役割ですからね」

今回は幸助の関わった二つの店舗での相乗効果が期待できる。幸助の人脈が広がれば、こういったことも増えるのである。

その後、次回の試食販売の予定などを立てていると、パスタが出来上がったようである。

サラではなくアロルドが皿を二枚手にし、やってきた。

「これが俺の作ったペペロンチーノってやつだ」

二人分の皿をそれぞれの前へ置くアロルド。

ふわりとオリーブオイルとニンニクの香りが漂う。

ニンニクはみじん切りだ。

ところどころ輪切りになった真っ赤な唐辛子が色彩のアクセントにもなっている。

「オリーブオイルがいいからな、うまいぞ」

「うん。美味しそうですね。さっそくいただきます」

二人とも同時にフォークを手に取り、パスタを食べる。

「……」

「うん、最高！」

先に口を開いたのはルティアだ。

「シンプルに見えるのにこんなに美味しいなんて」

「お前のオリーブオイルがなかったら出せなかった味だぞ」

今までもアロルドはこの辺りに流通しているオリーブオイルの質の悪さに嘆いていた。

作りたくても作れない料理が多かったからだ。

これからはオイルソースパスタだけでなく他のレシピの幅も広がる。

従ってアロルドは上機嫌だ。

「あたしのお店でも宣伝しなきゃね。このオリーブオイル使ってる店があるってね」

「おう、是非たのむぞ」

試食ということで無料サービスしてもらったが、金額はトマトバジルパスタと同じ大銅貨八枚にするようである。

食べ終えた二人は店を後にする。

「コースケ、またね！ あと、えっと、ルティアさん。ありがとう！ オリーブオイル」

先ほどの赤面はおさまったのであろう。

帰り際にサラが見送りに来てくれた。

「またね、サラ」

「サラちゃん、ばいばい。またオリーブオイル持ってくるね」

その後、約一ヶ月が経過した。

ルティアの店ではオリーブオイル目当ての客が、ついでに小麦も買ってくれるようになった。

そのため一定量の販売見込みが立ったため、小麦の仕入値上昇を防止することができた。

「あーあ、また暇になっちゃったな」

幸助はまた暇を持て余していた。

ルティアの店も軌道に乗ってさえしまえば、幸助が特に手出しをすることは無い。

報酬の入金を待つだけである。

しかも今回の契約では、オリーブオイル販売利益の一分が永遠に幸助に支払われる契約だ。

印税のような権利収入である。

今後の幸助の支えとなることであろう。

今日、幸助は次の働き口を探すため商業街を歩いている。

しかし季節は夏のピークのため、なかなか捗らない。

日本のかき氷を懐かしく想う日々である。

「あれ？ 何だかにぎやかだな」

当てもなくブラブラ歩いていると、知った店の前が賑やかなことに気付く。

人だかりの先はルティアの競合店である。

十数名の野次馬と、この街の警察役を司っている騎士が数名店頭にいる。

「俺は悪くねえ！ 仕組まれたんだよ！」

店主らしき人の叫び声が聞こえる。  
ちやうど騎士に両脇を抱えられ連れ出されるところのようだ。

「何やってるんだろ。ま、僕には関係ないか」

せつかくだから騒ぎを報告がてらルティアの店に行くことにする  
幸助。

数分で到着すると、今日もルティアは頑張つて店を切り盛りして  
いた。

ルティアは近づいてきた幸助の顔を見るや否や、興奮気味に話し  
出す。

「ねえねえコースケ、大ニユースよ！ 聞いた？ アイツの店、摘  
発されたんだって」

「そうなんだ。そういえば店の前が賑やかなことになってたけど、  
何かあったの？」

「どうもね、今年の小麦に五年も前の古いのを混ぜて売ってたんだ  
って」

この街のルールでは、小麦は生産年度を明示して販売しなければ  
ならないことになっている。

そして混ぜることは違法である。

ルティアの客を引つ張り店頭価格より安くして売っていたその裏  
側は、ゴミを混ぜて人を欺いていたということだ。

似たような事件が日本でもあったなと思ひ出す幸助。

「でね。ただ混ぜるだけなら見つからなかったかもしれないんだけ  
ど、その小麦を食べて病気になる人が何人も出たんだって」

「へえ、それは酷い話だなあ」

「でしょー」

アレルギー反応が出てしまったのかなと幸助は推測する。

「病気が出たとなるとアイツの店、無くなるかもね」

「因果応報だよ」

「因果応報？」

「良い行いをすれば良い結果が返ってくる。悪い行いをすればその逆ってこと」

「そうね。私も気をつけなきゃ」

その後、例の店主は収監されることになり、店は予想通り廃業となった。

その影響でルティアの店へ客が戻ってきたことは言うまでもない。こうして幸助は、ルティアの店の改善を成功裏に終えることとなったのだ。



## 6 ・因果応報（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

これで第二章はおしまいです。

幕間を一つはさんで次章は武器屋編となります。お楽しみに。

## 幕間：伯爵令嬢2

「まあ、なんと香り豊かなドレッシングですこと！」

ここはマドリー王国アヴィーラ伯爵領にある領主の館。分厚い絨毯が敷かれた部屋は三十畳ほどの広さがある。

中央には二十人は座れるであろう長いダイニングテーブルが置かれ、卓上には豪華なキャンドルが灯る。

壁際には侍女が一人と執事が一人立っており、主の指示を待っている。

椅子に腰かけているのは少女一人だけだ。

伯爵令嬢であるアンナ・アヴィーラである。

訪問者との会談が長引いたため、一人で遅めの夕食を摂っているところである。

卓上にはサラダとスープが置かれている。

上品な手つきでサラダを食べると目を閉じその味をかみしめる。

名残惜しそうにそれらを飲み込むと、侍女を呼び指示を出す。

「この味の決め手が気になりますね。コックを呼んでくださいませんか？」

「少々お待ちくださいませ」

そばで控えていた侍女はその言葉を聞き、静かに部屋を後にする。

「見たところオリブオイルと果実酢のようですが、それだということと変わりませんね。不思議ですわ」

どう見てもいつも屋敷で食べている定番のサラダである。しげしげと器を見まわしフォークでサラダを刺し口へ運ぶ。半分ほど食べた頃、静かにドアが開きコックを連れた侍女が戻って来た。

「お嬢様、いかがなされましたか？」

「このサラダに添えられたドレッシング。今まで食べたことのないほど香り豊かなのですが、どのような工夫をされたのですか？」

探究心豊かなアンナはどのような工夫がされているのか、気になるって仕方ない。

アロルドの店で提供されているカルボナーラもレシピが気になっ  
て仕方ないくらいなのだから。

ちなみにコックに再現することを命じているのだが、今のところ満足のいくカルボナーラはできていない。

「いいえ、お嬢様。いつもと同じレシピで作っております」

コックの答えは、アンナの予想と百八十度反対のものであった。そんなはずはないとアンナはコックに食らいつく。

「では、なぜこのような芳醇な香りがするのでしょうか？ 今までと比べ物にならないくらい美味しいですよ」

「実はですね、とても品質の良いオリーブオイルが入ったのです。いつものオリーブオイルと変えただけでこの味が出せました」

「お、オリーブオイルを変えただけ……？」

「続きは私めが代わりにさせて頂きます」

コックが説明を始めたところ、別の男性の声が割り込む。

声の主は執事のセバスチャンだ。  
今日も変わらずピシツとした黒服を着込んでいる。

「実はですね、お嬢様。市井でこのようなものを見つけてまして」

セバスチャンの手にはオイル瓶が握られている。

アンナの様子からオリーブオイルの実物を見せる必要があると読んで、事前に用意していたものだ。

段取りの良い男である。

「見たところ、どこにもあるオイル瓶のようですが？」

セバスチャンの手にあるオイル瓶をしげしげと眺めるアンナ。

これはどこにももある一般的なオイル瓶なので、判断はつかない。

「はい。ですが、中身が別物なのです」

そう言つと小皿にオイルを垂らすと一口大のパンを添える。

それを音を立てること無くアンナの前に置く。

「どうぞ、お試しくださいませ」

アンナは出されたオリーブオイルをまずは目で評価する。

透き通った黄色のオイルが表面張力で丸みを帯びている。

「美しい色ですこと。それに粘り気も強いように思われます」

そして真っ白なパンを手に取りオリーブオイルをしみ込ませる。

十分なオイルを吸ったパンには黄色のグラデーションがかかり、しっとり重みを増す。

香りを楽しんだのち、それを口へ誘う。  
じつくりと味わうアンナ。

「臭みやイヤなべとつきが全くありませんね。味も香りも素晴らしいです」

「我が領地のオリーブオイルは全てが帝国からの輸入でございます。従って輸送途中に劣化してしまうのです。しかし、このオリーブオイルはとても新鮮です。近くで栽培されていると推察致します」  
「そうなのです。それで、どこでこのオリーブオイルを手に入れたのでしょうか？」

つい先ほどまで眠くなるような会談をしていたアンナ。  
突然降ってわいた興味深い情報に目を輝かす。

「それがですね……」  
「どうかされましたか？」

セバスチャンの声に首をかしげるアンナ。

「コースケという名の男が関わってありました」  
「あら、またコースケさんの名前を聞きましたわね。今回はどのように関わってらっしゃったのですか？」

『アロルドの Pasta 亭』でカルボナーラを食べた時にも聞いた名前である。

ますます興味深そうな表情をするアンナ。

「オリーブオイル自体は商業街の『ルティアの小麦店』という店で販売されておりました」

「聞いたことのないお店ですね」

「はい。どこにでもある穀物屋でございます」

領内には穀物屋は何件もある。

そして特に目立つ店舗がないのも事実である。

「以前よりオリーブオイルの取り扱いはあったそうなのですが、ほとんど売れていなかったそうです」

「これほどの品質ですから、市民の方々に手の届く値段で販売することは難しそうですわね」

「はい、その通りでございます」

実際には一般的なオリーブオイルの二倍の価格設定だったが、ルティアが販売そのものに消極的だったため、市民に届くことはほとんど無かったのである。

「しかしその価値を見出し、市場に知らしめたのがコースケということでした」

「それはどのようにして？」

ここから先は一部私の推察も混ざりますが、と前置きしながらセバスチャンは続ける。

「普及品、中級品、そしてこの最高級品の三段階の品質を用意することで、買いやすさが演出されておりました」

「あら、何でわざわざ同じものを三段階に分けたのでしょうか？」

アンナが疑問に思うのももつともである。

今までの感覚からすると、オリーブオイルはオリーブオイルではないのだから。

「品質により価格を変えることで最高級品は買えなくても、中級品には手が届くよう絶妙な価格設定がされておりました」

「最高級品が買えなくても中級品なら買えるというからくりですか。素晴らしい工夫ですね」

「はい。それとですね」

「それと？」

「試食販売を行うようも指導したそうです」

「試食販売、ですか？」

「ええ、今お嬢様に試して頂いたことと同様にです」

言われて先ほどの味見のことを思い出すアンナ。

確かに自分であったら味見をした後は買わずにはいられないだろうと感ずる。

「素晴らしいです。その手腕、ますます興味がわきますわ」

可能なことならば領地が抱えている問題を相談してみたいとも思うアンナ。

しかしまだ決定的な要素がないため、もう少し様子を見ることに決める。

「それはそうと、セバスチャン。そのオリーブオイル、我が屋敷でも一定量が確保できるように手配をお願いします」

「畏まりました、アンナお嬢様」

アヴィーラ伯爵領の夜はゆっくりと更けていく。

## 1・初めての……（前書き）

本文中に登場する手法は異世界固有のものです。

日本で通用するかどうかは分かりません。

特に武器屋経営の方、参考にする際はご注意ください。



## 1・初めての……

時は幸助がこの世界へ召喚される半年ほど前。  
場所は工業街の一角にある鍛冶工房。

キン、キン、カン！  
キン、キン、キン、カン！

鍛冶工房からは今日もリズムカルに鉄を打つ音が外まで漏れ聞こえる。

この界隈の風物詩ともいえる音だ。

中を覗くと一人の男が一心不乱に槌を振るっている。

窯にはメラメラと火が燃えたぎっている。

相当暑いのであろう。額に浮かぶ汗が幾筋もの線となり床へ滴り落ち、土を固めただけの床に丸い染みを作る。

キン、キン、キン

打ったものを今度は持ち上げ角度を変えながらしっかりと見る。  
形状からすると両刃の剣のようである。

まだ熱が落ちておらず薄らと赤みを帯びている。

納得がいったのか一度頷くとそれを置き、隣の台に置いてある水を一気にあおる。

「ふう」

タオルで汗をぬぐうとそれを団扇のように仰ぎ、火照った体を冷ます。

鍛冶師の名はホルガーである。  
身長は低いが体格は良く、立派なひげをたたえている。  
寡黙な男であるが、仕事は丁寧だ。  
この腕一本でやって来たという自負もある。

もともとホルガーは故郷のエッセンバツ八王国に店を構えていた。

この街に鍛冶師がいなくなってしまったからと知人に頼まれ、引っ越してきたのが十年前。

今では伯爵領の騎士団にも剣と槍を卸しており、商売は順調そのものである。

ユーザーである騎士からの信頼も厚い。

最愛の妻には三年前に先立たれた。

子宝には恵まれなかったが、五年前に保護した子を娘として大切に育てている。

海辺の町に武器の納品へ行った際、海岸に漂着していたのを見つけたのだ。

海の間ごうには誰も行ったことのない国があるようで、嵐の後など稀に異国人が漂着する。

いや異国人というよりは……。

「パパ、お客さんなの！」

十歳くらいであろう小さな少女が育ての親であるホルガーを呼びに来た。

血がつながってないとはいえ、実の子のように育てている娘だ。  
目に入れても痛くない。

妻に先立たれてからはまだ幼いながらも、併設された武器屋の店番を手伝ってくれている。

普段ホルガーは鍛冶工房にいたることが多いので、重要な戦力である。

といっても計算などはできないので来客があつた場合に告げに来てもらうだけだが。

「ありがとう、パロ。すぐ行く」

返事を聞くとパロと呼ばれた子はホルガーがやって来るのを待つ。時おりサラサラで茶色い髪の上に乗っている猫の耳のようなものがピコピコと動く。

パロは猫獣人と呼ばれる種族である。

ここマドリー王国や周辺国には彼らの国や集落は無いが、どの町にも大抵一人くらいは獣人がいる。

西の海が近いこの界隈に住んでいる獣人は、パロのように流れ着いた者がほとんどだ。

ホルガーはタオルを首にかけなおし、表の武器屋へつながる通路へ歩く。

パロはその後ろをトテトテと続く。

「おう、お前か」

店頭で待っていたのは伯爵領騎士団の購買担当者であつた。

注文やメンテナンスがある場合、彼が連絡の窓口となっている。隣には見たことのない顔の男がもう一人いる。

「こんにちは、ホルガーさん」

「どうした？ 今日はい」

「実は私、王宮の官吏試験に合格しまして、王都へ引っ越すことになったんです。それで後任の者を連れてきました」

「そうか」

その後二人は引き継ぎ事項など簡単な打ち合わせを行った。だが打ち合わせといってもほとんど顔合わせのみが目的だ。すぐに終了する。

しかし、その後一ヶ月経っても二ヶ月経っても新任者からの連絡は無かった。

騎士団も魔物の討伐を行っていることもあり、最低でも月に一度はメンテナンス依頼が来るはずである。

火をくべられることが無くなった窯や工具をメンテナンスするだけの日々が続く。

時おり冒険者が来店するが、大抵たいした金を持ってない者ばかりなのでなかなか購入へはつながらなかった。

半年が経ったある日のこと。

とうとうホルガーはしびれを切らし、購買担当者の勤め先である領主の館を訪れ新任者を呼び出す。

幸い新任者はここにいたようだ。

薄笑いを浮かべながらホルガーへ近づき対峙する。

晩秋の乾いた風が二人の間を駆け抜けると、落ち葉を巻き込み力サカサと音を立てる。

「ああ、ホルガーさんですか。ご無沙汰しています」

「あれから連絡が無いが。メンテナンスをしないと剣がだめになる。どうしているんだ、騎士団は？」

「メンテナンス？　しっかりとしてますよ」

「いや、そんなはずは無い。」

半年間、剣一本のメンテナンスすらしていないのだからとホルガーは憤る。

「どういうことだ！」

「メンテナンスや調達は、別の武器屋に任せることにしました。お宅の半額で済みましたので」

冒険者の方々からも安いと人気のようですよ、と新任者は続ける。それを聞き怒りで手を強く握りしめるホルガー。

確かに他の鍛冶師がこの街に武器屋を開いたことは知っていた。

だが、何の断りもなく切り替えるのは許せなかった。

しかも自分が打った「我が子」ともいえる剣を他人がメンテナンスしていることも耐えられない。

第一、自分たちの生活もある。

呼吸は荒くなり、胸が大きく上下する。

ホルガーはプルプルと振えるその腕を上げようとしたが、理性がそれを抑える。

「勝手にしろ！」

そう言い残すと領主の館に背を向け、来た道を帰る。

請われてこの街に来たのに裏切られたという思いがホルガーの胸を満たしていた。

時は現在に戻る。

日差しは柔らかくなり、朝晩は涼しさを感じるようになってきた。

ここはアヴィーラ伯爵領の商業街にある宿屋。

幸助はいつもの部屋で着替えをしていた。

「うーん、最近太って来たか？ズボンがキツイぞ。これは間違いなくアロルドさんのせいだな」

自分の食欲を棚に上げアロルドのせいにする幸助。  
無理やり前ボタンを閉めると腹をポンと叩く。

「せっかくだし、カルボナーラでも食べるに行くか」

寝坊して宿の朝食を食べそびれた幸助。

時刻はもうすぐで十一時。

『アロルドのパスタ亭』の開店する時刻である。

最近ではランチタイムには行列ができており、早めに行くか遅めに行くかしないと待ち時間が長くなってしまふのだ。

待つことを嫌う幸助はすぐに店へ向かうことにした。

それほど時間もかからずアロルドの店へ着く。

いつもの立て看板が幸助を迎える。

しかし幸助はある違いに気付いた。

トマトの色が鮮やかになっていたのだ。

「ちゃんと描きなおしてるんだ。忙しいだろうに、えらいな」

ギイ。

重厚なドアを開く。

「あ、コースケさん！ いらっしやいませ！」

「こんにちは、サラ。立て看板、描きなおしたんだ」

「うん！ 気づいてくれたんだ」

「もちろん」

「ずっと使ってて色が変わってたからね」

夜間は店内に片づけている看板であるが、昼間は日光や風雨にさらされるので、どうしても劣化してしまう。

文句も言わずに毎日しっかりと働いてくれる看板だからこそ、メンテナンスは大切だ。

「サラ、今日はカルボナーラを食べに来たよ。あ、ハンバーグもセツトのやつで」

決めていたオーダーをする幸助。

ただでさえ高カロリーのパスタをセットメニューで注文する。だから太るのである。

「はい。ちょっと待っててね」

くるっと回れ右をするサラ。

真っ赤なポニーテールがふわりとたなびく。

キッチンへ向かったサラを見届けると、幸助は一番お気に入りの席に腰かける。

小さな窓から通りを行き交う人が見える場所だ。いつものようにボーッと外を眺める。

今日も様々な人や馬車が行き交っている。

(今日は食べ終わったら何をしようかなあ……。うん?)

幸助は自分の思考の中へ入り込もうとしたとき、キッチンからアロルドがやって来るのに気づく。

どかっとな幸助の正面に腰かけると話し始めた。

「コースケ、メシの前にちよつと相談があるんだが」

「相談ですか？ 新作パスタのネタはありませんよ？」

アロルドが幸助にする相談事は大抵メニューのことである。

ラインナップにペペロンチーノも加わり、幸助の個人的満足度もだいぶアップしている。

欲を言えば海鮮系のパスタも食べたかったのだが、生憎海辺の町まで馬車で一週間くらいかかる。

鮮度を維持することが難しいこの世界ではあまり期待できない。

「今日はそうじゃない」

しかし今日はそうではないらしい。

どのような相談が気になり聞き返す。

「どんな相談ですか？ お店は繁盛してるみたいですし」

「うちのことじゃないんだ。この前、商業ギルドで知り合いに会ってな。かなり商売に困ってるみたいなんだ。よかったら助けてやっ



てくれないかな、と」

その言葉に幸助は心の中でガッツポーズをする。

この仕事を始めてから初めての紹介である。

ある程度実績ができると、そのあとはほとんど紹介だけで成り立たせることもできる商売だ。

紹介してもらえるということは、幸助の能力が評価されたことに他ならない。

大いなる躍進だ。

嬉しさでにやけそうになるのを必死に抑えつつアロルドに質問をする。

「ちなみに業種は何ですか？」

「武器屋だ」

「ぶ、武器屋……ですか？」

思いがけない業種に戸惑う幸助。

武器屋など当然日本には無かった。

しかもこの世界に来てから剣を取るようなことも無かった。

召喚されたときに適性がないと判断されていたからだ。

だから武器屋の存在は目に留まっていたが買ったことも入ったことも無い。

「ああ。俺の店は何で流行ったのかと聞かれてな。そいつは流行ってなかった頃の俺の店を知ってるんだ」

「変化を目の当たりにしたんですね」

幸助がアロルドと出会った頃と今では業績は雲泥の差だ。

市民の間で美味しいという評判も立っている。

それでいてベースとなるトマトバジルパスタは全く同じなのだか

ら、同じ商売人の眼からすると不思議に見えるのであろう。

「ああ。だから今の俺の状況に驚いてな。繁盛のコツを聞かれたから説明も面倒くさいし、お前の名前を出したんだよ」

「……」

「そしたら是非会ってみたいとさ」

「そうなんです。面倒くさいといつところが引っかけられますが、ありがとうございます」

（ありがたいけど武器屋なんてわかんないぞ。大丈夫かな）

あごに手を当て考え込む幸助。

（武器屋は基本的にアロルドさんと同じ職人の商売に分類されるよな。

アロルドさんみたいに技術があるといつのは大前提だけど、武器の質なんてわからないし。

その判断は僕にはできないぞ）

「ところで、その方の腕は確かですか？」

「ああ、間違いない。去年まで騎士団の注文を一手に受けていたくらいだからな」

それを聞いて安心する幸助。

「それなら間違いなさそうですね。でも何でその取引が無くなったやつたんですかね？」

「競合店に取られたんだと」

購買担当者が変わった途端、半額で提供するという武器屋に取引

のすべてを奪われている。

アロルドもそこまで把握しているわけではないが、競合店に取られたという事実のみは聞いていた。

「いずれにしても話を聞いてみて、それからの判断ですね」

「ああ、できるできないの判断はお前に任せる。とりあえず話だけでも聞いてやってくれ」

「分かりました。ちょうど今はこの店にも関わっていませんので、紹介よろしくお願いします」

幸助がそう告げると、遠巻きに話を聞いていたサラがアロルドの隣にやってくる。

「あのね、コースケさん。私も一緒に武器屋さんに行くの！」

「えっ、それはどうして？」

サラの言葉に戸惑う幸助。

ついてくること自体は問題ないが、店の仕事も忙しい折にアロルドが許さないだろうと考える。

「俺がついていけって言ったんだ。武器屋の顔も知ってるからな」

「アロルドさんがそう言うならいいですけど……」

どうい風風の吹き回しであろうか。

今まで幸助とサラが二人で行動するのを嫌がっていたように見えた。

それが今、全く正反対のことを口に出しているのだ。

不安げな幸助の表情に気付いたのか、アロルドが再び口を開く。

「それにだな。お前はいつか大物になりそうだ。サラにもしがない

パスタレストランだけじゃなくて、もっと多くの世界を体験してもらいたいと思ってな」

思いがけずアロルドから大物になると評価され、驚くとともに嬉しさがこみ上げる幸助。

店のことは心配するな、とアロルドは続ける。

「そうですか。アロルドさんの考えてる世界に行けるかは分かりませんが、頑張ります」

「おう、よろしく頼んだぞ」

「よろしくね！ コースケさん」

こうして幸助の商売に初めての仲間が加わることとなった。

## 2・ターゲットインクのミスマッチ

翌日の朝、アロルドの店で合流した幸助とサラは工業街にあるホルガーの店を目指す。

今日のサラの服装はよそ行きの白いワンピースだ。

東西と南北のメインストリートが交差するロータリーを南へと向かう。

「あのね、コースケさん。ここが冒険者ギルド」

サラの指さす先には、石造りの三階建ての建物が見える。

幸助は何度もこの前を通ったことはあったのだが、朝に来るのは初めてだ。

入り口からはひっきりなしに冒険者たちが出入りしている。

剣を腰に下げている者、槍を持っている者、魔獣を連れている者など、そのスタイルは自由そのものである。

「賑わってるね」

「うん。朝依頼を受けて、夕方には帰ってくるっていうスタイルが多いみたいだよ。だから朝と夕方は賑やかなの」

「なるほどね」

今回の依頼が武器屋なので、何らかのヒントがあるかもしれないと冒険者たちの装備に気を留める幸助。

ひとえに剣といっても大きいものから小さいの、太いものから細いものまでいろいろあるようだ。

剣だけでなく槍や大斧など、その装備は様々だ。

稀にしか見かけないが、ローブを纏った魔法使いらしき冒険者は

杖を持っている。

「冒険者は自分に合った武器を使う、魔獣を連れる、魔法を使うといったところか。魔法ねえ……。そういえばサラは魔法使えるの？」

幸助は何気なくサラに尋ねる。

自身はこの世界に召喚された時に魔法の能力は無いと判断されている。

だから使うこと自体あきらめていた。

だが、せっかく魔法のある世界に召喚されたのだから少しくらい使ってみたかっと思ったことは何度もある。

「私は使えないよ」

「やっぱり限られた人しか使えないんだ」

「うん、そうだね。あ、でもちよっと見ててね」

そう言うとサラは立ち止り人差し指を上に向けると、んーっと力む。

顔がすこし赤くなる。

すると数秒後、指先にポツと赤くて小さい火が灯るが、一瞬で霧散する。

「うおっ！ 今の、魔法？」

「うん。そうだよ！ これじゃ何の役にも立たないけどね」

幸助の反応に嬉しさを笑みをたたえるサラ。

「いいなあ、僕は全く使えないからな」

この世界では、十人に一人は魔法を発動させることができる。

しかし、実戦で使えるレベルに達する人はその中の百分の一である。

サラのように「ちょっとした魔法」程度でほとんどの人が終わるのだ。

従って、有能な魔法使いは国や貴族に雇われるか有名な冒険者として荒稼ぎしている者が多い。

「うん？ なんだろあれ」

再び歩き出そうとしたところ、正面から何かが近づいてくることに気付く幸助。

「どいてどいて！ 誰か治療術士を呼んでくれ！！」

幸助の眼には一人の少年が荷車を曳きながら全速力で走って来る姿が映る。

その表情は鬼気迫るものである。

何事かと少年の曳いている台車を見ると、怪我をしているであろう。装備を血で染めた少年が運ばれていた。

傍らには彼が使っていたとみられる真ん中から折れた剣が置かれている。

「魔物にやられたのかな？」

「そうかもしれないね」

「冒険者は命がけだなあ。こんな朝っぱらから怪我なんて。僕には無理だよ」

「コースケさんは違う能力があるから大丈夫だよ」

「ありがと、サラ」

改めてここは異世界なんだなと感じる幸助の耳に、先ほどの光景を見ていた野次馬の声が届く。

「最近若い人の怪我が増えたわねえ」

「そうねえ。ギルドの治療術士さんも大忙しみだよ」

「若いのに命張って魔物退治してくれてるんだから感謝しないとね」

どうやらギルド周辺ではよく見られる光景のようだ。

少年が冒険者ギルドに入っていくのを見届けると幸助とサラは再び歩き出す。

冒険者ギルドから歩くこと十五分。

幸助とサラは目的の武器屋へ到着した。

「ここがホルガーさんの店だよ！」

サラが立ち止った前には個人商店にしては珍しく石造りで二階建ての店舗が建っていた。

外壁には幸助が以前にも見たことのある剣と槍が交差している看板が掲げられおり、小さく『ホルガーの武器店』と書かれている。

幸助がアロルドへ認知の説明をする際、例に使った看板だ。

入口は開かれていますのでそのまま中へ入る。

店内には誰もいないようだ。

「こんにちはー」



サラが声をかける。

「うん？ お客さんなの？」

カウンターの向こうから声がする。

しかし、人影は見えない。

その代わり小さな猫の耳だけがカウンターの上からちょこんと出てきた。

その耳がカウンターを横にスライドし端に達すると、その全身が露わになる。

「いらっしやいな」

茶色の髪の上に猫の耳が乗ったホルガーの娘、パロが二人を出迎える。

（おお、獣人！ しかもめっちゃ可愛いじゃないか！）

幸助は今までも獣人と呼ばれる人を見たことはあった。

しかし残念ながら筋肉ガチムチの狼獣人しか見たことがなかったのだ。

しかも襲われかけたこともある。「やらないか」という誘い文句とともに。

だからこそパロの愛くるしさに目を見開く。

「こんにちは。ホルガーさんはいるかな？」

腰を下げパロと視線を合わせ問いかけるサラ。

サラは何度か会ったことがあるので別段驚いた様子はない。

「うん、ちょっと待っててなの」

そう言い残しトテトテと奥へ消えていくパロ。

「今の娘、可愛いなあ」

「うん。ホルガーさんの娘さんだよ。血はつながってないんだけどね」

「へえ。そうなんだ。獣人ってゴツイ人ばかりだと思ってたよ」

「なにそれ。変なイメージ」

「今までに会ってきた人がみんなそうだったからさ」

「ふうん……」

ホルガーを待つ間、店内を見回す幸助。

壁には剣や槍など様々な武器が掛けられている。

それぞれの武器の下には値段が書かれた札が置いてある。

「ほとんどが金貨五枚以上か。武器って高いんだな」

「うん。結構するんだね」

金貨二枚あれば四人家族が一ヶ月は生活できる金額である。

長く使えるものとはいえ、駆け出しの冒険者にとっては装備を整えるのも一苦勞である。

「待たせたな」

奥からホルガーがやって来た。

その後ろからパロもついてくる。

「ホルガーさん、こんにちは」

「初めまして、幸助といます」

「ああ、待ってたぞ」  
「私、パロって言うの」

ホルガーの後ろにいたパロが横から顔を出し自己紹介する。

「僕は幸助だよ。よろしくね」  
「うん。コースケ」

パロは甘えているのか、名前を名乗るとサッとホルガーの後ろに戻る。

自己紹介が済むとホルガーはカウンターの奥からゴソゴソと丸椅子を取り出す。

それを店内の空きスペースへ四つ並べる。

「ここに座れ」  
「では失礼します」

各々が椅子に腰かけると幸助が話を切り出す。

「では早速。アロルドさんから少しだけ話は伺いましたが、改めて今の状況を教えて頂いてもいいですか？」  
「おう」

それからホルガーはここ一年間の出来事を淡々と説明する。  
騎士団の購買担当者が変わったこと、それ以来注文が無くなったこと、競合店に取られたこと、そこが半額でやっていること……などである。

口数の少ないホルガーからゆっくりと紡がれる言葉は重みをもつて幸助とサラへ届く。

「許せない！」

ダンと床を踏み鳴らす音が店内に響く。  
パロはビクっとしてホルガーの後ろに隠れる。  
怒りを露わにしたのはサラだ。

「その武器屋を徹底的にやっつけちゃおうよ！」

「ダメだよサラ。感情に任せてそんなこと言っちゃ」

「だって！」

「競合とこつやってしのぎを削るのも商売だよ。相手が悪いことをしてるとは限らないんだしさ」

幸助に窘められると唇をかみ下を向くサラ。

サラ自身も商売で苦勞をしたので思うところがあるだろう、そしてこの感情の起伏を見て初めてアロルドと親子なんだなと感じる幸助。

「それで今はどうやって生計を立ててるんですか？」

「冒険者を相手にしてる」

確かにこの場所は冒険者ギルドからもそれほど遠くない。

ギルドで受けた依頼をこなすため南門から街の外へ行くときも店の前を通るはずである。

「売上は足りてますか？」

「ダメだ」

「どのくらいダメですか？」

「まったくダメだ」

会話がかみ合わない。

アロルドも職人気質であったが、ホルガーは別の意味で一癖ある男である。

切り口を変えて再度質問する幸助。

「ここに金貨五枚の剣がありますが、これは先月から今日までにどのくらい売れましたか？」

そう言いながら先ほど店内を見回したときに目に入った、おそらくこの店内で一番安いであろう剣を指さす。

「一本も売れてない」

「他の剣や槍はどうですか？」

「一本も売れてない」

「一本も……ですか？」

「一本もだ」

要するに最低でも一か月間、売上はゼロということだ。

アロルドの店は仕入が売上を上回るといふ状況だったが、こちらも状況は逼迫しているようだ。

どうしたらよいのか幸助が考えていると、珍しくホルガーの方がら口を開く。

「あいつらは金がない。だからなまぐらしか買わない」

「なまぐらって？」サラが尋ねる。

「焼きも入ってない。铸件も売ってる。粗悪品だ。すぐダメになる」

それを聞いて先ほどのギルド前で見た光景を思い出す幸助。

若い冒険者の横には真ん中から折れた剣が置かれていた。

「確かに、先ほどもケガして運ばれてる若い冒険者を見ました」

「それに、最近よく見かけるって言うたよ」「サラが続ける。  
「ああ。武器つてのは、いいものを、ちゃんと面倒見て、長く使う  
ものだ……」

（若い冒険者はお金がないから粗悪品を買う。）

粗悪品を買うから怪我が増えた……ってことか。悪循環だな。

でもホルガーさんの武器は高く買って買えない、と）

「ホルガーさん、その粗悪品を売ってる店ができるまでは若い冒険  
者は何を使ってたんですか？」

「上級者のお下がりだな」

「ああ、なるほど。新品は買えないから中古ってことですね」

「そうだ」

納得する幸助。

お下がりであれば古いけれどそこそこの質の剣が手に入るとい  
うことである。

安い粗悪品が出回ったことでその文化が無くなってしまったのか  
もしれないと幸助は推測する。

「若い冒険者はお金がないから安いのを買っているということは分  
かりました。ところで上級者はどこで買ってるんですか？」

「他の街だ」

「わざわざ買い付けに行くんですか？」

「この街には上級者向けの仕事がない。だから出ていく」

「ちなみにホルガーさんの剣はどのランク向けの剣ですか？」

「騎士団向けだ。冒険者なら上級者だ。それしかやってない」

ここで合点のいく幸助。

ホルガーの扱っているのは精鋭集団である騎士団向けの武器ばか

りである。

冒険者でいえば上級者向けということだ。

おいそれと初心者が手を出すことはできない。

しかし、この街にはホルガーの武器を買える上級者はいない。

「もしかしたらターゲティングのミスマッチかもしれないね」

幸助は社畜時代によく使ったワードを口にする。

今までにもそのような事例はよく見てきた。

若者の多い街で高齢者向け商品を売ったり、高性能なソフトウェアを零細企業向けに開発したりといった具合だ。

「ターゲティング？ ミスマッチ？ コースケさんどういう意味？」

（あれ、僕つてもしかして意識高い系に見えるかも？

ま、いつか。いずれこの世界をイノベータータイプなソリューションでカイゼンするんだからな）

「ターゲティングっていうのは、自分のお店の商品を誰に向けて売るかを決めること」

「うんうん」

「それで、この街の冒険者に対する武器の需要は初心者向けなんだ。だけどホルガーさんのお店には上級者向けしか置いてない」

ここまで聞くとサラは理解したようで、手をポンとたたく。

「初心者向けを置かないといけないってことだね！」

「正解。よくわかったね」

「やった！」

サラの頭をポンポンとする幸助。  
そして真面目な顔に戻り、ホルガーへ向き直り告げる。

「ということなんです、ホルガーさん。まだ調査してないので断定はできませんが、恐らくはこのミスマッチが原因です」  
「だろうな」

やはりホルガーもそう感じていたようである。

「やっぱりコースケさんすごいよ！ 武器のこと知らないって言うたのに、もう原因がわかつちゃうなんて」  
「ありがとう、サラ。まだ断定ではないけどね」

ミスマッチが原因となると、店の運営方針を根本から変えなければならぬ。  
そして方針が変えられないならば上級者がいる街へ引っ越さなければならぬ。  
幸助は商売の核心に迫る質問をする。

「ホルガーさんは、これからもこの街で商売を続けたいと思ってますか？」

一瞬だが頬が引きつるホルガー。  
店主に商売を続けたいという意思がない場合は何を手伝っても無駄なため、失礼なことを承知の上で確認する幸助。  
ここで戸惑うようであれば、手助けはできない。

「もちろんだ」

「店をつぶさないためには素晴らしい高品質な武器ばかりでなく、初心者が手の届く武器も作らないといけなくなりますよ？」



「ああ。こいつの友達、この街にたくさんいる。だから」

そう言いながらパロの頭をなでるホルガー。  
それにつられ、ピコピコとパロの耳が動く。

「パパのお店、無くなっちゃうの？」

「ううん、パロ。大丈夫だよ。心配しないで」

「そうだよ、パロちゃん。コースケさんなら大丈夫だから！」

(こんな小さな子が店のことを心配してるんだ。この子のためにも  
頑張らないとな)

ホルガーの意思とパロの想いを聞き、何とかしてあげたいという  
責任感が湧き上がる幸助。

しかも今や仲間ともいえるアロルドからの紹介でもある。  
何としてでも改善を成功させなければならない。

「ホルガーさん」

「何だ？」

視線の合う二人。

幸助はいつものセリフを声高らかに宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

### 3・冒険者ギルドと競合店

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

声高らかに宣言する幸助。

そしてホルガーの反応を窺う。

アロルドの場合はこの後断られ、ルティアの場合は笑われた。今回はどのような返事が返ってくるのか気になる幸助。

「ああ、頼んだぞ」

杞憂であった。即答である。

そもそもホルガーは最初から頼むつもりでいたのだ。やはり紹介の力は偉大である。

「ありがとうございます。では今後の予定についてなんですが……」

何はともあれ武器の知識がない幸助。

まずは勉強も兼ねて市場調査をすると説明する。

「コースケさん、市場調査って何？」

「この街の人がどんな武器を必要としているか調べることだよ。あとはどんな武器が売ってるかってとこだね」

「さっきのターゲットイングと関係のある話だね！」

「そう！ さすがサラ」

「えへへ」

ほとんどの日本人がそうであるよう、幸助も武器屋など行ったこ

とがない。

だからここはしっかりと足を使って調べた方が得策だと幸助は考えた。

「それでホルガーさん、いろいろ質問があるのですが……」

幸助は武器についての話を聞こうとする。

しかしホルガーは極端に口数が少ない。

結果、種類や材質のことくらいしか聞き取れず、この日は一旦お開きとすることにした。

幸助とサラは翌日の朝にまた来ることを言い残し、店を後にする。

「ホルガーさんのお店、流行るようになるといいね」

「そうだね、サラ。僕たちの働き次第だから一緒に頑張ろうね」

「うん！」

肩を並べ来た道を帰る幸助とサラ。

太陽は大分高くなっているが、まだランチタイムが始まるまでには時間がある。

アロルドは店のことは気にするなと言ってくれている。

しかし人を雇う余裕はまだ無い。

従って幸助は、可能な限りランチタイムにサラが店に入れるように配慮することにしたのだ。

取り留めもない会話をしながら歩を進めること十数分。

ちよつと冒険者ギルドの前に差し掛かったところで幸助がサラへ提案する。

「そつだ。ちよつと冒険者ギルドに寄つていかない？」

「うん！ いいよ」

開け放たれた冒険者ギルドの入り口をくぐる二人。

「ここが冒険者ギルドか」

「思ったより広いね」

中に入ると石造りの広い空間が二人を迎える。

前にサラが言った通り、日中の冒険者ギルドは人が少ない。

正面には受付カウンターがあり、一人の女性が新たな訪問者の様子を窺っている。

左手にはテーブルと椅子が並んでおり、数名の冒険者が早めの朝食が遅めの朝食をとっている。

まだ駆け出しなのであろう。

幼さの残る少年が身に着けている皮の鎧には、汚れや傷などがほとんど無い。

右手の壁面には、何か書かれた紙が所狭しと掲示されている。タイトルからは「討伐依頼」「採取依頼」といった文字が読み取れる。

「とりあえず受付の人に聞いてみよう」

そのまま正面へ進む幸助とサラ。

受付嬢が営業スマイルで二人を迎える。

「こんにちは、本日はどのようなご用件ですか？」

「すみません、冒険者ギルドのことで質問があるんですが、いいで

すか？」

「新規登録をご希望でしょうか？」

少し首を傾げながら返答する受付嬢。

商業ギルドに負けないくらい、こちらも美人である。

「あ、いや……。いずれはするかもしれないですけど今は話だけ」  
「畏まりました」

冒険者登録するつもりは無かったのだが、話の流れで冒険者志望となった幸助。

受付嬢に聞いたところ、要点は次のようなことであった。

まず、この街の冒険者について。

ホルガーの言っていた通りこの街の周辺には凶暴な魔物はおらず、初級から中級者向けの依頼しかないそうだ。

従ってある程度の腕を積むと、別の街へ旅立つ人が多いとのこと。

そしてホルガーの競合店について。

現在この街に武器屋は三軒ある。

そのうちの二軒がかなり安い価格で武器を提供しているらしく、実質初心者を選択肢はその店一択のようである。

ただ、やはり価格相応またはそれ以下の品質だそうだ。

ギルドとしてもそれにより起きる事故を問題視しているとのこと。しかし商業への口出しはいろいろと制約があるようで、根本的な解決には至っていない。

その後いくつかの質問をすると幸助は話を切り上げる。

「ありがとうございます」

「いえ。次は冒険者登録をお待ちしていますね」  
「はっ、はい。いずれまた……」

営業スマイルをたたえる受付嬢に背中を向け、冒険者ギルドを後にする。

その後アロルドの店へ戻りランチを食べる。  
今日はペペロンチーノだ。

具材が工夫されているようで、今日は鶏肉のようなものが入っていた。

「ごちそうさま。じゃあ行ってくるね」

「コースケさん、いつてらっしゃい！」

白と黒のエプロンドレスに着替えたサラに見送られ、幸助は先ほど冒険者ギルドで聞いた競合店へ向かう。

参考にするために武器を購入するつもりだ。

「ええっと、この辺って言うってたかな」

幸助は再びメインストリートを南に下る。

秋の入り口に入ったとはいえ、昼の日差しはまだ強い。  
額に浮かぶ汗を短い袖で拭う。

「おっ、これが防具店か」

冒険者ギルドで聞いた目印となる防具店を通過すると、その次の路地を左へ入る。

建物の影を歩くことができホッとすする幸助。

しばらく歩くと、剣と槍の交差した看板が目に入る。

武器屋の看板として定番のデザインのようだ。

開かれている玄関をくぐり店内に入る幸助。

「らっしやい！」

細身だがしつかりと筋肉のついた店主が笑顔で幸助を迎える。  
最初の印象は悪くない。

店内にはホルガーの店よりも多種多様な武器が並んでいる。

「あの、僕に合う武器を探してるんですが……」

「うん？ 武器を持つのは初めてか？」

「はい」

「なら剣か槍がメジャーどころだが、どちらがいい？」

「まだ決めかねてます」

「そうか。本当は買う前に錬成所で適性を見てもらった方がいいんだがな。まあいいや、槍なら間違いないだろう」

そう言つと店主は店頭の在庫から一本の槍を取り出す。

その長さは軽く幸助の背を超えている。

「もう体格は大人みたいだからこれでどうだ？」

穂先を上に向け、ひよいと渡す店主。

それを両手で受け取る幸助。

「うわっ」

渡された槍は幸助の手から滑り落ちる。

石突きが床に当たり、ゴンツという音を立てる。

「槍つて重たいんですね……」

「何だ。軟弱だなあ、お前」

再び槍を持ち上げてみる幸助。

ずしつとその両手に重みがのしかかる。

「これは振り回せそうにないですね」

「ならこれはどうだ？」

店主に槍を返すと今度は少し細身のものを持ってきた。

これでもずしりと重みを感じるが持てないほどではない。

「大丈夫そうですかね」

「よし、こつやつて動かしてみろ」

店主の身振りを真似して槍を扱う幸助。

それを見ながらうんうんと頷く店主。

「よし、決まりだな」

「いくらになりますか？」

「大銀貨五枚だ」

想定外の価格に驚く幸助。

ホルガーの店では最安値の商品でも金貨五枚であった。

初心者向けとはいえ、安くても金貨二枚は必要だと思っていたのだ。

「そんなに安いんですか？」

「初心者向けだからな。あと、これはサービスだ。またうちの店を



使ってくれよな」

そう言うと店主は槍の穂先に木製の鞘を取り付ける。

「ありがとうございます」

「いいってことよ。それより怪我をしないように頑張れよ」

代金を店主に渡し店を後にする幸助。

ちようど入れ違いで冒険者らしき客が店へ入っていく。

「おっちゃん！ 前と同じ槍をくれ！」

「なんだ、もう壊したのか。もっと上達しろよな」

店の外へ漏れ聞こえる会話を聞きつつ、その場を後にする幸助。

(それにしても、かなり感じのいい店だったぞ。

やっぱり実際に買ってみたいとわからないものだな。

商品の品質はよくわからないけど、これなら繁盛するわけだ)

商売人が競合店を視察するとき、どうしても経営者側の視点で店を視察してしまう。

そうなると思いつくのは商品そのものだったり価格など「物」に行きがちになってしまう。

ただ視察するだけでなく、幸助のように純粹に客として購入を体験することであるいろいろな見えてくることもあるのだ。

そして翌日の午前。

約束した通り前日と同じ時間に幸助とサラはホルガーの店を訪れた。

幸助の手には昨日買った初心者向けの槍が握られている。

「おはようございます、ホルガーさん。パロもおはよう」

「おはようなの」

今日は二人とも店頭にいた。

幸助とサラを待っていたのであろう。

「ホルガーさん。これ、例の店で買ってきました。見てもらってもいいですか？」

「ああ」

幸助は持ってきた槍をホルガーへ渡す。

受け取ったホルガーはその槍を手にした途端、顔をしかめる。

穂先を覆っている鞘を無言で外すと、コツコツと自分の拳で叩く。

「鋳物だ。柄も柔らかい」

槍を床に置くとホルガーは幸助へ尋ねる。

「これ、壊れてもいいか？」

「はい、問題ありませんよ。使い道もありませんし」

その回答を聞くとホルガーは幸助たちに背を向け、工房へ通じる通路へ向かう。

しばらく待つと槌を手にして戻ってきた。

普段剣を叩いている槌である。

「少し離れて見てみる。大きい音がするぞ」

ホルガーの言葉で、槍から距離を取る三人。  
パロは耳をピタンと閉じ、サラの後ろに隠れながらそのワンピースの裾をキュツと握る。

三人が槍から離れたことを確認すると、ホルガーはその手に持った槌で槍の穂先をたたく。

ガギンツ

金属同士がぶつかる鈍い音がすると、もの見事にその槍の穂先は割れてしまった。

ホルガーの様子からして、全力で叩いたようには見えない。

「割れちゃったの」

「こ、こんなに脆いんですか？」

「ああ。すぐ入ってる。こんなものだ」

幸助が購入した槍は、相当な粗悪品だったようだ。

ただの鋳物というだけでなく、すぐ入っているということは普通の鋳物よりも脆いということだ。

二つに割れた穂先の周りには細かな粉も散らばっている。

「これじゃあ実際に使ってもそう長くは持ちそうにありませんね」

「ああ」

(だから僕の後からあの店に来た冒険者は同じのを買っていたのか。まるで消耗品みたいだな)

「安かろう悪かろう……ってことか。店のイメージは悪くなかったんだけどな」

「お店はよかつたんだ？」

「うん。愛想もいいし色々アドバイスしてもらって、この槍を買ったんだ」

店主の表情を思い出す幸助。

終始真剣に幸助の武器選びを手伝ってくれたという印象が残っている。

だからこそメインストリートに面してなくても繁盛しているのだと感じたのだ。

「そっか。接客が良くて安いから駆け出しの冒険者から支持されているのかな？」

「そうだろうね」

「で、どうする？　これから」

ホルガーの言葉に、時間を確認する幸助。

「続きはまた明日にしましょう。明日の要点は駆け出しの冒険者でも買える武器についてです」

「ああ」

「ホルガーさんは初心者向けの武器についてどんなのが提供できるか考えてみてください」

「分かった」

ルティアの場合、本人にオリブオイル販売の方法も考えてもらった。

しかしホルガーはアロルド以上に職人気質だ。

従って、幸助が考えることのできない「商品」そのものだけを考

えてもらったことになったのだ。

「また明日なの」

「バイバイ、パロちゃん」

サラがパロに手を振ると小さな手を振り返すパロ。  
耳が手と連動してピコピコ動く。

#### 4・冒険者の事情

その日の夕方。

東西を貫くメインストリートは、雲の切れ目から姿を現した夕日で真っ赤に染められている。

長い影を曳いた人々が足早に家路へ急いでいる。通りの店は多くが閉まり、昼間の賑わいはもう無い。

しかし、外が暗くなるにつれ賑わいを見せる場所がある。宿屋の一階である。

この世界では宿屋の一階に食堂が併設されるのが定番だ。宿泊者の食堂も兼ねている場所であるが、夕方以降は酒場として営業している。

ランプで淡く照らされた店内は喧騒で包まれている。冒険者や商人など多種多様な人が酒杯を交わしている。とあるテーブルでは依頼に成功でもしたのか中央に骨のついた大きな肉が置かれ、体格の良い冒険者たちが我先にとその肉をつついてる。

カウンター席に目を向けると、一人の男の背中が見えた。幸助である。カウンターに置かれたジョッキを持ち上げると一気にそれを傾ける。

飲み切ったのか「プハア」と息をつく、席を立ちあがり喧騒の中心地へと向かう。

特に用事がない場合、大抵幸助はアロルドの店がこの酒場で夕食

を撰っている。

普段であればこのままカウンター席でさつと夕食を済ませるのだが、今日は違う。

勇気を出して冒険者たちの酒宴に顔をはさみ、武器についての意見を聞こうとしているのだ。

「こんばんは」

大きな肉が置かれたテーブルを訪れると勇気を振り絞り声をかける幸助。

四人の冒険者につつかれた肉は、既にその半分が骨だけになっている。

声をかけた相手はは三十歳くらいであろうスキンヘッドの大男だ。装備の上からでも、その体が立派な筋肉の鎧で包まれていることがわかる。

男の隣には彼の武器であろう、大ぶりの剣が立てかけられている。

「お？ 兄ちゃん珍しいな。いつもあつちで一人寂しく食べてたよな。今日はどうした？」

声をかけた相手は、同じ宿に泊まっている冒険者である。

会話は初めてであるが、酒場や廊下ですれ違っているので顔くらいはお互い知っていた。

しかし、ぼっち認定を受けているとは露ほども知らなかった幸助。少し凹む。

「あ、はい。いつも一人っていうのも寂しくて……。よかつたら混ぜてもらえませんか？」

「おう！ いいぞ。いつも同じ顔ばかりだと飽きるからな。兄ちゃん酒いけるよな？」

「はい。大丈夫です」

「こいつら飲めないから丁度良いや。おーい！ こっちにエールをもう一杯！」

程なくして幸助の前にエールが運ばれると各々がジョッキやカップを手に取る。

「乾杯！！！」

エールがなみなみに注がれた木製のジョッキをガシツと合わせると、その勢いで少しだけ中身がこぼれる。

それを気にせず幸助は一気に半分ほど煽る。

「いい飲みっぷりだな！ じゃあ自己紹介といこうか。まず俺はランクDの冒険者、ランディだ」

「僕は幸助といます」

「こいつらは俺のパーティーメンバーだ」

そしてランディのパーティーメンバー三人とも自己紹介を交わす幸助。

ランディ以外は皆ランクFの冒険者であった。

ちなみにこの世界の冒険者はその実力でランクAからFに分類されている。

ランクFが初心者、ランクAは大ベテランである。

「ランディさんとはこの宿屋でよくすれ違いますが、ずっとアヴイーラ伯爵領を拠点にしてるんですか？」

「ずっとではないがな。今は拠点にしてる」

「ランディさん、後輩の面倒見がいいんすよ。こないだも……、あてっ！」



「お前は余計なことを言うな」

若い冒険者を軽くはたくランディ。

どうやら褒められることが苦手なようである。

「僕ら近くの村出身なんです、ランディさんに鍛えてもらってるんです」

この世界の田舎は働き口が極端に少ない。

畑など家督を継ぐことができる者はよいが、そうでない者の方が多い。

従って冒険者登録ができる十二歳を過ぎると、冒険者ギルドのあるこの街へ近隣の村々から駆け出しの冒険者が集まってくるのだ。

ランディはそのような駆け出しの冒険者をパーティーメンバーに迎え入れ、依頼をこなしながらある程度成長するまで面倒を見ているのだ。

「それでコースケ。お前は何をしてるんだ？」

「今はわけあって知り合いの武器屋を手伝ってます」

「ふーん、珍しいことしてるんだな。ちなみにどこの武器屋だ？」

「冒険者ギルドを越えて十五分ほど行ったところにあるホルガーさんって人がやってる武器屋です」

ランディは顎に手を当て少しだけ思索する。

数秒経つと思いついたのか幸助へ視線を送る。

「ああ、あそこな！ 騎士団向けの武器ばかり置いてあるところだ」

「はい。そこです」

やはり騎士団向けの店というイメージが強いようだ。

「また、何でだ？」

「最近、粗悪な武器の破損で駆け出しの冒険者の怪我が増えてるって聞きました。だから丈夫で長く使える初心者向けの武器を作ってもらおうとしてるんです」

本当は騎士団の仕事が無いというところは端折り、これからの予定を話す幸助。

「ほう？」

眉がピクツと動くランディ。

思いがけない幸助の言葉に興味を惹かれたようだ。

右手に持っているジョッキの中身を一息にあけると隣を通りかかった給仕へ「もう一杯」と言いながらそれを渡す。

そして真面目な表情になり幸助へ質問をする。

「初心者向けの武器か。質はどの程度になる？」

「僕は武器のことはまだ詳しくわかりませんが、鋳物ではなく焼きの入った鍛造になるはずです」

「おお！……！」

ランディ達がどよめく。

全員が同様の反応なので、余程のことなのだろうと幸助は推察する。

とそこへエールを持つ給仕がやってきた。

ランディはジョッキを受け取るとそのまま豪快に喉を鳴らしながら胃へとエールを流し込む。

「でも、質はよくてもあまり高いと僕は買えないよ」「若い冒険者が口を開く。

「それはそうだな。駆け出しの冒険者は貧乏つつつのが相場だ」

幸助もそれは把握している。

だからどのくらいなら買えるか調べることも今回の目的の一つである。

「確かにそうですよね……。ちなみに皆さんは一年間で武器代にどれくらいお金をかけてますか？」

考え込む四人。

そして一番若い青年が最初に口を開く。

「僕はランデイさんから譲ってもらった剣を使ってるからメンテナンス代くらいかな」

「自分は弓だけとよく憶えてないなあ」

「僕は大銀貨五枚の槍を三回は買ったかな。ランデイさんからの借金がなかなか減らないよ」

「お前よく壊すもんな」

「わははは！ 確かに」

「槍が脆いだけだよ！」

冒険者たちが口々に自分の装備について発言する。

ランデイは剣を使い、ほかの冒険者はそれぞれ剣、槍、弓という構成であった。

具体的な金額について得られた情報は大銀貨五枚の槍が三本というところだけであったが、それでも幸助の参考にはなる。

「ちなみに普段どこの武器屋を使っていますか？」

この質問の回答は一人を除き例の競合店であった。弓使いの一人だけは弓や狩猟道具を揃えているもう一つの武器店を使用していた。

幸助は知らなかったのだが、アロルドが包丁を購入しているのもこの店である。

「ありがとうございます。参考にしますね」

「お前も言った通り、初心者向けの武器が悪くてな。戦闘中に破損すると命にもかかわる」

「そうですね」

「売り出すことが決まったら俺にも教えてくれ」

「わかりました」

「よし、固い話は終わりにしよう。コースケも遠慮せずに食べ！」

その後も酒を交えた語らいは続く。

初心者は何本もの武器を使いつぶして買い換えるのが当たり前になっっていること。

ランディが武器屋にかけあっても初心者向けの武器の質は上がらなかったこと。

剣よりもリーチの長い槍の方が冒険者の受けが良いこと。

ここ最近魔物の数が増えていること。

ギルドの受付嬢の好みなこと。

ランディの女癖が悪いこと。

……などなどである。

こうして、意気投合した幸助と冒険者たちとの夜は更けていった。

「あたた、痛つてー。昨日、飲みすぎたな」

幸助はベッドから起き上がると頭を手で押さえる。

テーブルにある水差しからカップへ水を注ぎ、一気に飲み干す。どろっとした感覚の残る胃に、冷たくも暖かくもない水が染み渡る。

昨日、結局幸助はその後数時間にわたりランディ達と飲んでいて。まだ若干の酒が残っている。

ちなみに代金はランディが払ってくれると言ったのだが、情報の礼として幸助が全て払った。

「こんだけ飲んだのはアロルドさんの店で打ち上げをした時以来かな」

朝食を食べる時間も胃の余裕も無いので、身支度をするらずぐにサラを迎えに行く。

「おはよ！ コースケさん？」

「おはよう」

「コースケさん、顔色悪いよ？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫。昨日武器の話聞くために冒険者たちと一緒に遅くまで飲んでたからね。ちょっと飲みすぎただけ」

冒険者たちに武器のことを聞いていたこと。

その後意気投合して遅くまで飲み明かしたことなどを話しながらホルガーの店へ向かう。

「そっか。コースケさんはやっぱり働き者だね！ 夜遅くまでお疲れ様！」

「あ、ありがとう」

（サラの中では頑張って仕事したって評価なんだ。九割以上は下世話な話だったとは口が裂けても言えないな）

幸助とサラはいつもの時間より少し遅れてホルガーの店へ到着した。

昨日と同様ホルガーとパロが二人を出迎える。

既にミーティング用の丸椅子も設置済みだ。

「おはよなの！」

「パロ、おはよう。今日は元気だね」

「うん！ パパがパロの好きな朝ごはん作ってくれたの」

「よかったじゃないか」

満面の笑みと一緒にピコピコと動く耳に癒される幸助とサラ。

定位置とばかりホルガーの横にちょこんと座る。

全員が腰かけるとミーティングが開始される。

「ホルガーさん、昨日冒険者に話を聞いたんですが、剣よりも槍の方が人気があるんですね」

「ああ。剣より使い勝手がいい」

幸助の中では刀の影響が強かったのか、武器といえば剣だと思い込んでいた。

だが、そう思っていたのは幸助だけだったようだ。

「やはり槍一択のようですね」

売上数を稼ぐには、使用者の多い商品や流行っている分野へ手を出すのが鉄板である。

斧専門店といったマイナーな武器に特化したポジショニングを取る手法もあるが、あまりにも市場規模が小さいので幸助の中で却下されている。

「それでホルガーさん。初心者向けの武器のイメージはできましたか？」

「ああ。昨日の槍。あれをベースにする」

昨日の槍とは幸助が競合店から買って来た粗悪な槍である。

「あの大きさを、穂先を俺の打ったものにする。使いやすさも工夫できる」

「分かりました。それでどのくらいの売価になりそうですか？」

「ここは重要である。」

アロルドの料理やルティアのオリーブオイルも、値付けにはかなり気を使っている。

安すぎれば利益が出ないし高すぎれば買い手がつかない。そして高くて利益が出ないのは論外だ。

「金貨一枚だ」

ホルガーから提示された金額は、彼のラインナップからすれば安いのだが、競合店の二倍である。

いくら品質の違いがあるとはいえこの差は大きい。

オリーブオイルの場合はブレンドすることにより低価格帯の商品もできた。

しかし槍の場合はその手法は使えない。  
悩みこむ幸助。

「金貨一枚ですか……」

「ああ。ここでは鑄物の倍以上が鍛造の相場だ」

二倍が相場と聞いても、金のない駆け出しの冒険者が買うには八  
ドルが高いと感じる幸助。

幸助も初めて自分のパソコンを買ったとき、本当は十万円近いも  
のが欲しかったのだが妥協して五万円のパソコンにしたことがある。  
結局その後ネットゲームに手を出して自分の選択を後悔すること  
になったのだが、買うときは値段を重視してしまった。

金がなかったのだから仕方ない。

冒険者のためにはできるだけ安くしたい。

しかし、安易に安売りするのはよくない。

フリーランスとして独立した人で、受注を取るために自分の技術  
を安売りした人を幸助は何人も見てきた。

その人たちは最初だけはよかったものの、その後忙しいけど儲か  
らないという状況に陥り苦しんでいたのだ。

「わかりました。ではその価格でいきましょう。それで、ホルガー  
さんと僕との契約のことなんです……」

その後ホルガーと幸助は報酬に関する細かな条件を詰める。

武器は購入サイクルの長い商品なので幸助が報酬を得るのも遅く  
なりそうであったが、ホルガーには現状の儲けがほとんど無い。

結果的にはアロルドの店と同様に経費は幸助の建て替えて、報酬  
は儲かった時払いということに落ち着いた。



## 5・パロの気持ちと幸助の悩み

キン、キン、カン！  
キン、キン、キン、カン！

時は幸助とホルガーとの契約が決まった翌日。  
場所は工業街の一角にあるホルガーの鍛冶工房。

この界隈の風物詩ともいえる音が久々に戻って来た。  
ホルガーが槍の穂先を打っている音だ。

久しく火をくべられることがなかった窯も、今日は喜びの炎を燃え滾らせている。

初秋の気温と窯の熱、それに槌を振うという運動によりホルガーは汗まみれであるが一向に気にする様子はない。

それよりも久しぶりに鉄を打てる喜びがホルガーを満たしている。まだ売れると決まったわけではない。  
しかし、打てることそのものが嬉しいのだ。

（パパが嬉しそうなの）

パロは久しぶりに槌を振っているホルガーの背中を見ている。  
久しぶりのホルガーらしい姿である。

リズムカルな音をBGMに、パロはここ一年の出来事を思い起す。

毎日工房で忙しそうに働いていたホルガー。

窯の熱気で暑い中、必死に槌を振る背中。

研磨している時の鋭い視線。

パロの中の父親像は「かっこいい」の一言で言い表せられる。

忙しいにもかかわらず、ちゃんと食事は作ってくれていた。

週に一回は広場へ連れてってもらい友達とも遊べた。

ぶら下がってもびくともしないその太い腕はパロの自慢だ。

しかしある日を境にホルガーは鉄を打つことが全く無くなってしまった。

パロの知っている客と、知らない客が一緒に来たあの日以来である。

ホルガーは仕事が無くなっても決してパロの前で弱音を吐いたり感情を露わにすることは無かった。

だが、ホルガーのかっこいい姿を見られなくなったのが、パロは少し寂しかった。

そして時が経つにつれて少しずつホルガーの顔から元気が無くなっていったのを敏感に感じ取っていた。

次の境目は乾いた風が吹く寒い日に訪れた。

パロの前では怒ることなどなかったホルガーが、激怒しながら帰ってくる姿を見たのだ。

パロには何があったのか分からなかった。

だが、怖かったということだけは覚えている。

そしてその日以来、大好きな父親が劇的に変わってしまったのだ。

まず、仕事が無いながらも毎日工房のメンテナンスをしていたのが、その日を境に全くやらなくなってしまった。

次第に道具に埃が重なっていくのを眺めるだけである。それならばパロが掃除をするというと、工房には入るなと怒られた。

そして夜に飲む酒の量が増えた。

部屋には空き瓶が散らかり、食事の質も落ちていった。

二人だけのささやかな団らんも無くなってしまった。

大好きなホルガーがどこかへ行ってしまうそう。パロは不安で不安で仕方がなかった。

こんな毎日が続くかと思うと辛い、寂しい、悲しい。

でも、きつと神様がホルガーを元通りにしてくれる。パロはそう信じていた。

「商業ギルドへ行ってくる」

ある日そう言い残して出かけるホルガーを見送った。

それから数日後にやって来たのは幸助とサラだ。

四人で話をしている時、ホルガーは嬉しそうだった。

他の人には気づかない程度の表情の違いだが、パロにはよくわかる。

ホルガーの眼に力が戻ってくるのをパロは感じた。

パロの好きなご飯も作ってくれた。

それから昨日、幸助とサラが帰った後。

埃にむせながら黙々と工房の掃除をするホルガーがいた。

その顔はパロの好きだった自信たっぷりの顔だ。

そして今日。

キン、キン、カン！

キン、キン、キン、カン！

（やっぱり神様はいたの）

一年ぶりに見られた自慢の父の背中。

一年ぶりに感じられる工房の熱気。

ようやく「いつも」が帰ってきたと感じるパロ。

次第にパロの視界が滲んでいく。

（パロも嬉しいの）

つーつと一筋の涙がパロの大きな目から零れてきた。

涙を袖で拭くと、踵を返して店番へと戻る。

「おはよー」

「いらっしやいなの！」

初心者向けの槍が完成したと聞いた幸助とサラは、一週間ぶりにホルガーの店を訪れた。

「パパを呼んでくるの」

そう言い残しトテトテと工房へ通じる通路へ向かうパロ。

「何か雰囲気明るくなった気がするね、コースケさん」  
「うん。最初と比べると表情がよくなったよね」

ますます販売を成功させなければと緊張感を持つ幸助。

「それでコースケさん、何かいいアイデアは思いついた？」  
「それが、まだ思いついてないんだ」

この一週間で幸助はいろいろと販売方法を検討していた。  
しかし、決定的なアイデアが浮かんでいないのだ。

「お待たせなの」  
「待たせたな」

ホルガーを連れたパロが戻って来た。  
いつの日かのようにホルガーの後ろには隠れず、手を引っ張りながら歩くパロ。

ホルガーの反対の手には一本の槍が握られている。

「これがホルガーさんの打った初心者向けの槍ですね」  
「ああ」

ホルガーの眼からは自信があふれている。  
初心者向けとはいえ、今までの武器と変わらず手をかけた作品だ。  
我が子と言ってもいい。

その作品を受け取る幸助。  
ずっしりと両手に重みがかかる。  
競合店の槍よりも少し重いようだ。

「綺麗だなあ」

「うん。綺麗だね！」

ホルガーの打った穂先を眺める二人。

やはり質のことはよく分からない幸助であったが、競合店で買った槍と比べて素直に美しいと感じることはできた。

「あとはどうやって販売するか……だよなあ」

ホルガーへ槍を返すといつもの丸椅子に腰かける幸助。

サラとパロもそれに続く。

少し遅れて槍を置いたホルガーが腰かける。

「では始めましょうか」

「おう」

「まず、初心者向けの槍を販売するにあたり、越えなければならぬ障害が三つあります」

そう言いながら指を三本立てる幸助。

「一つ目は初心者向けの良い槍があると認知してもらうことです」

「うちのお店で最初に取り組んだことと同じだね！」

「そうだよ、サラ」

ホルガーの店は冒険者の中では騎士団向けという認識を持たれていた。

まずはその存在を知ってもらわないことには始まらない。

「二つ目は、武器の性能について」

「うんうん」

「ホルガーさん、この槍はこの前僕が買ってきたのと比べると、攻撃力も耐久性も大幅に増えるんですよね？」

「あたり前だ。鋳物と比べるな」

可愛い息子をけなされた気分になったのであろう。  
眉間にしわを寄せるホルガー。

「す、すいません……」

反射的に謝る幸助。

社畜時代に培った技である。

「えっと、この槍の性能を知ってもらう必要があるんです」

「どうやって知ってもらうの？」

「やっぱり実際に触ってもらうのが一番だから、店頭で実演販売ができればいいんですが……」

そう言いながらホルガーへ視線を向ける。

ホルガーはそれに気づき、ゆっくりと口を開く。

「実演販売は、何をする？」

「武器の性能を体感してもらうのが目的です。たとえば標的を用意して冒険者に突いてもらったりすることです」

どれだけ丈夫か言葉で説明することも大切ですけどね、と幸助は続ける。

それを聞いたホルガーは、静かに首を横に振る。

「それは、無理だ」

「でもそうやって接客しないと売れるものも売れないですよ」  
「そんなこと、したことが無い」

ある程度予想していた答えが返ってくる。

騎士団を相手にしている時は決まった担当者が窓口になっていた  
ので、接客らしいことはしたことの無いホルガー。

もちろん、パロには聞くまでもない。

（やっぱりここがこの店のボトルネックだよなあ。

人を雇うこともできないし、どうしよう。

とりあえず今悩んでも先に進まなさそうだから次に行くか）

「わかりました。実演販売は今後の課題にしましょう」

幸助は気を取り直して話を進める。

「三つめはお金についてです」

「ここも大きな問題だ。

日本であれば高額品にはローンという手がある。

もしくはクレジットカードのリボ払いもできる。

ただし分割の対価として相応の金利が発生したり、ついつい買い  
すぎたりする。ご利用は計画的に。」

「冒険者に聞いた限りだと、初めての武器は例の大銀貨五枚でもギ  
リギリみたいです」

「武器が良いってわかっても、お金がなかったら買えないもんね」

「そうなんだよ、サラ」

この一週間で幸助はいろいろな可能性を考えてきた。



レンタルや返品保証、メンテナンスサービス、分割払いなどである。

しかし、レンタルはそのまま持ち逃げの可能性もあるし、自身身の所有物でなければ大切に使用してもらえない可能性もある。

そして武器の性能に満足できなかったら返品保証というのは、そもそもお金がない相手には無理だということに気付いたため却下。

メンテナンスサービスも同様だ。

従って、最後に残った分割払いの案をホルガーへぶつける。

「ホルガーさん」

「なんだ？」

「支払いを二回か三回くらいに分割することは可能ですか？ 初回の支払いを原価ギリギリに設定すれば、万が一が支払われなかったとしても損害は少なくて済みます」

「ダメだ」

即答であった。

「それで失敗した奴、知ってる」

「そうですね……」

そう言われると返す言葉がない。

幸助ははあとため息をつく。

暗い雰囲気室内を満たす。

幸助が提示した三つの壁のうち解決できそうなのは一つ目だけである。

ホルガーの性格や、置かれた環境からすると仕方ないのかもしれないが、それにしても……である。

「……………」

店内は静寂に包まれる。

居心地が悪いのかパロがごそごそ動く音だけが耳に届く。

「……………」

「……………」

「そうだ！」

室内の静寂を破るようにサラの声が響く。

「どうした？ サラ」

「私たちだけで考えるよりも、とりあえずその槍を冒険者に使ってもらったら？」

幸助はハッと目を見開く。

盲点であった。

幸助は三つの壁をどう解決するかばかり考えていたのだ。

良い武器は使ってもらって初めて真価を発揮する。

ならばモニターとして使ってもらえばいい。

その結果、ロコミを誘発するかもしれない。

そして新しい販売手法が見つかるかもしれない。

「そうだ、そうしよう！ ホルガーさん。その槍、信頼できる冒険者に貸してもいいですか？」

「別に構わないが」

幸助はランディのパーティーメンバーである若い槍使いへ貸すこ

とを思いついた。

顔見知りであるしランディは冒険者からも一目置かれているから安心だ。

「本当にすまない。俺のために、こんなになっけてくれて」

「気にしないでください、これが僕の仕事ですから」

「そう言ってもらえると、助かる」

幸助へ頭を下げるホルガー。

膝の上に置かれた手は、固く握りしめられている。

「そつだ、今日はウチのお店でみんなでランチしない？」

ホルガーが頭を上げるとサラがそう切り出す。

時刻はお昼前だ。

「気分転換にいいかもね。でもまたどうして？」

「あのね、小さい子向けのワンプレートランチを考えたの」

「へえ、こんな忙しいさなかに新しいメニューも考えてるんだ。偉いなあ」

「えへへ、ありがと！」

ホルガーへ視線を送る幸助。

「というわけですが、一緒にいかがですか？」

「新作の試食だからお金いらないうちにお父さん言ってたよ」

「パ口行きたいの！」

「……、わかった」

店の戸締りを済ますと、四人は連れだつてアロルドの店へ向かう。余程楽しみなのであるう。ホルガーと手をつないでいるパロは、スキップをしている。

ギイ。

ドアを開け店内へ入る四人。

昼の開店時間は過ぎていているが、まだ早いのか客は一人もいなかった。

給仕をしているサラの母ミレーヌが皆を迎える。

「お母さん、パロちゃん連れてきたよ。試作品、食べてもらおう」  
「分かったわ。ちょっと待っててね」

入れ違いでアロルドがやって来る。

「ホルガー、久しぶりだな」

「ああ。紹介、感謝するぞ」

職人同士の会話は極めて短かったが、お互い通じ合ったのであるう。

アロルドはすぐにキッチンへ戻っていった。

しばらく待つとミレーヌとサラが料理を持ってやってきた。

「はい、お待たせ。お子様ランチよ」

ミレーヌはホカホカと湯気を上げる小さなランチプレートのパロの前へ置く。

パスタとハンバーグ、サラダ、スープのセットだが、一つひとつが小ぶりである。

「くまさんなの!」

パロが喜びの声を上げる。

ハンバーグが熊の形をしているのだ。

「ふふっ、可愛いでしょ」

「うん。サラお姉ちゃん、ありがとなの!」

皆の前にもワンプレートランチが運ばれると、サラも同じテーブルへ座る。

「いただきます」

もきゅもきゅと、口いっぱいハンバーグを頬張るパロ。

「おいしいの!」

「ありがとう、パロ。足りなくなったら私の分もあげるから、いっぱい食べてね」

「うんなの!」

ホルガーの仕事が始めてから初めて訪れた穏やかな時間は、ゆっくりと過ぎていった。

## 6・ランディの活躍

ホルガー渾身の作品である初心者向けの槍が完成した数日後の夜。幸助はいつものように宿の一階で一人寂しくジョッキを傾けていた。

今夜のつまみは塩味のきいた豆だ。

この宿屋は、つまみのレパートリーはそれほど多くない。

幸助は、肴は炙ったイカでいい派なのだが、生憎まだこの世界でイカとは出会っていない。

仕方ないのでシンプルで素材の味が楽しめるつまみを選んでいる。

ホルガーから槍を預かった後、すぐにランディへ持っていきこうとした幸助。

しかし、なかなかその姿を見かけることができなかった。

仕方ないので毎日こうしてアイディアを脳内で練っているのだ。

「あーあ。何度考えても武器ってイメージ湧かないなあ。食べ物だったらいろいろ思いつくのに……」

様々な業界を見てきた幸助であったが、やはり武器屋はあまりにも環境が違いすぎた。

この世界で請けたアロルドとルティアの店は、いずれも食品関係だ。

環境が違えども、イメージはしやすかった。

もつとも、イメージするというよりは食べたいという欲求が強かっただけかもしれないが。

緑色の豆を手で二個つまむと、ぽいつと口へ放り込む。  
そして大して咀嚼しないうちに、それをエールと共に胃へ流し込む。

「はあ」

ため息をつく幸助。

二杯目のジョッキが空になった。

エールのお代わりをしようとして店員を探すと、入口から一人の大男が入ってくるのが目に入る。ランディだ。

幸助は声を張る。

「ランディさん！」

店内はいつもの喧騒に包まれていたが、幸助の声はランディへ届いたようだ。

幸助の姿を認めると、カウンターへやって来る。

「おう、コースケ。今日も一人で寂しそうだな」

「そ、それは言わない約束で……」

「仕方ない、俺がつき合ってやるよ」

手にしていた大きめの荷物を足元にボスツと投げ置き、そのまま隣の席に腰掛けるランディ。

ちょうどカウンター内に戻って来た店員へ声をかける。

「エールを一杯くれ」

「あ、僕もお代わりを一杯ください」

ゴトリ。

ほとんど待たずして木製のジョッキになみなみに注がれたエールが二人の前へ置かれる。

「乾杯！」

ランディは喉を鳴らしながら豪快にエールを飲む。それとは対照的にちびちびと啜る幸助。

「プハア！ 仕事の後の一杯はたまらんな！」

ランディが落ち着いたのを確認すると、幸助は話し始める。

「ランディさん、ここ二・三日見かけませんでしたね」

「ああ。野営の必要な場所まで討伐に行ってたからな。ちょうど帰って来たところだ」

「そうなんですね。お疲れ様でした」

幸助は自分の前に置いてあるつまみの皿をランディとの間へ移動させる。

「これ、つまみますか？」

「おう、悪いな」

ランディはその大きな手で豆を掴むと口へと放り込む。一気に皿の中の残りが少なくなる。

「パーティーメンバーの方は？」

「今回はちと難易度が高めでな。あいつらは置いてったんだ」  
「そうなんですね」



最近魔物の数が増えてきてな、と続けるランディ。  
幸助も何度か耳にしたことのある情報である。  
もつとも、戦闘力皆無の幸助にとってはどこか別世界の話に聞こえているのだが。

「それよりも、前話してた武器はどうなった？」

「あ、はい。僕もその話がしたかったんです。完成したものが部屋にありますので、取ってきますね」

そう言い残すと幸助は自分の泊まっている部屋へ槍を取りに行く。  
残されたランディは店員を捕まえ、追加注文をする。

「エールをもう一杯と、何か肉を焼いたものをくれ」

「あいよ！ ちょっと待っててね」

店には団体客がやって来たようで、店員はてんでこ舞いだ。  
待つこと約二分。

エールが運ばれたタイミングで、槍を手にした幸助が戻って来た。

「ランディさん、お待たせしました。これがその槍です」

「ほう」

幸助から槍を受け取ると鞘を取り、検める。

正面から、斜めから、拳で叩き、手のひらで撫で、その品質を  
認める。

その顔は真剣そのものだ。

その姿を緊張の面持ちで窺う幸助。

「どうですか？」

「……………」

「……」  
「いいじゃないか！ こりゃ一級品だぞ」

一気に破顔するランディ。  
そしてほっとする幸助。

ホルガーの腕を疑っていたわけではなかったが、実際に使う立場である冒険者の口から品質が裏付けられると安心できる。  
あとは実戦で試してもらおうのみである。

「ちなみに値段はどうなった？」

「金貨一枚です」

「そうか。初めて買うには高いかもしれないが、これだったら長く使える。トータルでは安くつきそうだな」

「はい。僕もそう思います。それでですね、この槍、ランディさんのパーティーメンバーに使ってもらいたいんです」

パーティーメンバーとは、以前ここで食事を一緒にした若い槍使いのことである。

他のメンバーからは武器壊しとも言われていた。

「アイツは金がないぞ？」

「いえ、モニターということでお金はいりません」

「モニター？ なんだそれは」

この世界ではなじみの無い言葉であったようだ。

「期間限定の無料貸し出しみたいなものです。一ヶ月くらい使ってもらえないですか？」

「それなら喜んで受けてやるよ」

「ありがとうございます」

では、と言いながら幸助はランディへ槍の鞘を預ける。  
それを受け取ったランディは鞘を装着すると自分の剣と並べて槍  
を置く。

「はい、鶏のステーキね。お待ちせ」

話の切りがついたところで、ちょうどランディが注文した肉が届く。

人の顔ほどもある鶏の骨付きモモ肉がジュージューと音を立てている。

幸助の喉がゴクリと鳴る。

「よし、コースケ。お前も食べ」

「はい。いただきます」

こうして一歩ずつ牛歩のごとくではあるが、ホルガーの店の改善は進んでいく。

数日後の午後。

ホルガーの店での用事を済ませた幸助は、街の南北を貫くメインストリートを歩いていく。

（それにしても進捗がゆっくりだよなあ。

勤めてた会社だったら毎日朝礼で追及されるとこだったよ。

ケータイもメールもないから連絡も大雑把だし。

最初は落ち着かなかったけど今はこっちの方が性に合うのかもしれないな)

当初はすぐに連絡が取れないことがストレスに感じていた幸助。しかし、今はもう慣れた。

逆に縛られない生活もなかなかいいのではと思うことすらある。社畜時代には、便利すぎることによる弊害も感じていたからだ。電話とメールの処理で多くの時間を費やし、企画を考えるのが夜になることも多かった。

それに激務に耐えかね漫画喫茶で息抜きをしたところ、会社支給のGPS内蔵スマホでバレたという苦い経験もある。

「おう、コースケ！」

「コースケさん！」

冒険者ギルドの前に差し掛かった時のこと。

幸助を呼ぶ声が耳に届く。

声のした方を向くと、ちょうどランディとパーティーメンバーが冒険者ギルドから出て来るところであった。

「あつ、ランディさん」

今日は四人とも揃っている。

皆、機嫌がよさそうである。

「コースケ。例の槍。ありやすげーぞ」

「初めて僕の攻撃がレッドボアに通じたんです！」

しかも大型のやつを、と槍使いは続ける。

まだ余韻が残っているのか興奮気味だ。

その手にはホルガーが打った槍が握られている。

「もちろんパーティーメンバー全員で力を合わせて討伐したんだが、まさかレッドボア相手にコイツが役立つとは思わなかったぞ」

「前に対峙した時は歯が立たなくて、穂先を折っちゃったんです」

「そうなんです。武器が役立つてよかったです」

「これで僕も初心者卒業ですね。あいてっ！！」

槍使いの頭にランディのげんこつが落ちた。

「ま、槍はいいんだが唯一の欠点はこいつが腕が上がったって勘違いしたことかな」

「あはははは、間違いない」他のメンバーが笑う。

これで武器の性能は証明された。

初心者向けの武器は脆く弱いという常識を覆したのだ。

あとは初心者が手に入れられる仕組みを作るだけである。

そこで、幸助はランディへ告げる。

これから考えていることはランディの協力なしでは考えられないことだ。

「ランディさん、今少しだけ時間いいですか？」

「ああ、今日の仕事はもう終わったからいいぞ」

立ち話もなんだからと、ギルド内の飲食スペースへ腰かける幸助とランディ、そしてパーティーメンバー。

時刻はまだ夕方には早い。

従ってギルド内はそれほど混雑していない。

飲食スペースでは所々酒を呷っている冒険者がいる。

ランディがメンバーの一人に銀貨を握らせると、小走りに飲食力ウンターへ向かう。

ここはセルフサービス方式である。

飲み物を買に行ったようだ。

程なくして盆にお茶を五つ載せて帰って来た。

「実はあの後いろいろ考えたのですが……」

「良いアイデアでも思いついたか？」

「良いかどうかの判断をお願いしたいんです」

何だ、と言うランディに真剣な視線を向ける。

ひと呼吸置くと、幸助は自身の考えを伝える。

「『ギルド認定武器』という制度ができないかなと思ひまして」

幸助は悩みに悩みぬいた末、冒険者ギルドを巻き込むことを考えた。

ホルガーの店は接客はダメ。接客はダメだが武器の性能はいい。武器の性能はいいが価格は高い。価格は高いが分割払いはダメである。

要するに店単独では売れる要素が全くなかったのだ。

だから『ギルド認定武器』という制度を設け、一定の便宜を図ってもらえないかと考えたのだ。

「それは具体的に？」

「はい。この槍のような優れた武器をギルド推奨の武器として認定してもらいます。その武器の購入ができない冒険者に対しては、ギルドが融資なり費用の一部負担をしてもらえないかなと」

「ギルドの負担が増えるぞ。何かメリットがあるのか？」

「討伐依頼の成功率が上がりますよね。今日のレッドボアのように」

そこまで言われてランディは気づいたようだ。

目を見開きテーブルをバンと叩く。

「そうか！ 良い武器が俺らの手に行き渡ればギルドにも利益が出る。そういう事だな！」

「はい。相乗効果が期待できます」

「よし。善は急げだ。ついてこい。ギルドマスターに掛け合っぞ」

お前らはここで待ってると言い残すと、受付カウンターへずんずん進む。

その後ろに幸助が続く。

受付嬢が営業スマイルでランディと幸助を迎える。

以前幸助がいくつかの質問をした受付嬢である。

「あら、ランディさん。先ほどはお疲れ様でした」

先ほどというのは、ついさっきレッドボア討伐達成報告をした時のことだ。

「隣の方は……、確かいつの日か来ていただいた方ですよ。いよいよ冒険者登録ですか？」

ニコリと幸助へ微笑む。

「い、いや、そうではなくてですね……」

幸助が返答に困っているとランディがストレートに用件を伝える。

「ギルドマスターに会いたい。いるだろ？」

「どのようなご用件でしょうか？」

「冒険者ギルド全体にかかわる大事なことだ」

「畏まりました。少々お待ちください」

通常であれば門前払いであろう面会理由であるが、受付嬢は取り合ってくれた。

ランディの信頼は相当厚いようである。

程なくして奥で何か確認していた受付嬢が戻ってきた。

「お待たせいたしました。二階の会議室にお越しく下さい」

受付嬢に案内され、石でできた階段を上り二階へ向かう幸助とランディ。

二十人は座れるであろう大きな部屋へ通されると、身近な椅子へ腰かける。

事務員らしき人がお茶を三つテーブルへ置く。

三分ほど待つと入口から細身の男性が入って来た。

「ランディさん、こんにちは。そちらの方は……？」

「初めまして、幸助といいます」

「私はギルドマスターのカミュと申します。本日はどのようなご用件で？」

自己紹介が済むと二人はギルドマスターへ用件を伝える。

駆け出しの冒険者が起こす事故のこと。

武器が原因の一つであること。

よい武器ができたこと。

ギルド認定制度のこと。



双方にメリットがあること……などである。

「いかがでしょうか？」

「……」

一通り伝えるとお茶で喉を潤す幸助。

コト、とカップを置くとき静寂が会議室を支配する。

一分ほど考え込んでいただろうか。

両手で肘をつきながら目を閉じていたギルドマスターがゆっくりと目を開けると幸助へ視線を送る。

「お話は分かりました。しかし生憎我々も仕事を多く抱えておりましてね……」

「双方にとってメリットのあることではないでしょうか？」

「いやあ、ですから……」

ダン！！！

ギルドマスターが言葉を濁していると、ランディの鋼のような拳が会議室のテーブルを叩く音が響く。

「今まで日和見してたから事故が増えてんだろ！ いい加減行動しろよ！ 冒険者の命を守るのもギルドの仕事だろ。職務怠慢と上に報告するぞ！」

語気を荒げるランディに、呆気にとられるギルドマスターと幸助。

「コースケ、行くぞ」

ランディにいざなわれ、幸助は会議室を後にする。

そこには未だに呆然としているギルドマスターだけが残されていた

た。

## 7・伯爵令嬢

それからのギルドの動きは早かった。

時あまり経たずして『冒険者ギルド認定装備』という制度ができたのだ。

渋々ながらもギルドマスターのカミュが認定制度のことを本部へ報告したところ、すぐにでも実行するようにとの通達が入ったからだ。

上層部では既に認定制度のことを検討していたのだ。

制度の内容は、ギルドが設けた基準以上の品質を持つ武器や防具を認定の対象に設定。

冒険者が認定商品を購入する場合、最大で半額の融資をギルドから受けることができるという制度だ。

融資には一定割合の利息が伴い、返済は討伐達成報酬からの天引きとなる。

まずはアヴィーラ伯爵領で試験的に導入し、その後他所へ展開する予定だそうだ。

ちなみにホルガーの槍がその認定第一号となった。

もちろん競合店も基準をクリアすれば認定されるので、これだけで胡坐をかくわけにはいかない。

制度の隙間を狙って不正を働く輩が出てくる可能性もある。

コソコソと信頼を重ねていくことが肝要である。

「これで改善の目途はついたのかなあ」

宿の部屋で寛いでいる幸助。  
ずずっとお茶を啜る。

窓からは心地よい秋の風が吹き込んでくる。

認定制度が始まり一ヶ月。

ちらほらとホルガーの槍は売れ始めた。

購入者からの評判は上々だ。

長期的な結果が待たれるところではあるが、今のところホルガーの武器を手にした冒険者は口々に魔物を仕留めやすくなったと言っている。

もともと買い替えのサイクルが長い商品だ。爆発的に売れることは無い。

しかしホルガーの魂に火をつけるには十分なきっかけだった。  
今度は初心者向けの剣を作ると息巻いている。

「ふわあ、眠いなあ」

緊張続きの仕事がひと段落し、ダラダラする幸助。  
ぐっと大きく伸びをしたところでドアをノックする音に気付く。

「誰だろ？」

幸助の部屋を訪れるのは宿のスタッフかランディくらいである。  
今回もそのどちらかと思いいドアを開ける。

しかし予想に反し、ドアの向こうにいたのは一人の騎士だった。

（騎士！？ 何でここに）

騎士はこの街での警察の役割も司っている。

以前不正を働いた小麦屋の前でも見かけたことを思い出す幸助。

(法に触れることでもしちやっただか?)

運転中にサイレンの音を聞くと運転手はドキッとする。

税務署から電話がかかってくるとう経営者はドキッとする。

何も悪いことはしてないのに。

そのような心境が幸助を襲う。

「あなたがコースケさんで間違いありませんか？」

「はい、そうですか……」

名前を確認すると騎士は幸助にお辞儀をする。

「私はアヴィーラ伯爵領騎士団のマルコと申します。領主様のご息女アンナ様より手紙を預かっておりますのでお届けに参りました」

そう言つと騎士は一枚の封筒を取り出し、幸助へ手渡す。

「ぼ、僕にですか？」

「はい、間違いありません。あなたにです。では私はこれにて失礼いたします」

手紙だけ渡すと騎士はすぐに帰ってしまった。

状況が飲み込めず、封筒を手にしたまま立ち尽くす幸助。

窓の外から吹き込んだ風が頬をなでると幸助は我に返る。

ドアを閉めベッドへ腰かける。

「領主令嬢って……、何の用だろ」

封筒をよく見ると、領主の紋章で封蝋が施されている。本当に領主家からの手紙で間違いないようだ。

この世界に来て約一年。封蝋の持つ意味は幸助も知っていた。

開封し中の手紙を取り出す。

柑橘系の香りがふわっと漂う。

「ん？ 領主の館での昼食会に招待？ 益々わけが分からないぞ」

「お父様、どうされたのですか？」

時はアンナが幸助へ手紙を差し出す少し前に遡る。

ここは街の北にある領主の館。

領主の娘であるアンナは、父親であるアルフレッド・アヴィーラ伯爵の執務室を訪れている。

アルフレッドはこの地を代々治める伯爵家の一人息子として生まれた。

高齢を理由に引退した父親に代わり、数年前から領主としてこの地を治めている。

机の上には書類が山のように積み重ねられている。

毎日激務なのであろう、顔は少しやつれて見える。

「冒険者ギルドから報告が上がってきてね。その中にちょっと気になる名前が見つかったんだ」

「あら、どなたのお名前でしょうか？」

小首を傾げるアンナ。

「コースケという名前なんだけど。この辺りでは珍しい名前だよ。聞いたことはある？」

「コースケさん！ 今度はどのような事をなさったのですか？」

「やはり知っていたのか。市井のことはアンナが一番詳しいな」

アルフレッドは報告書に書かれていたことを説明する。

そこには、幸助がホルガーの店で初心者向けの槍を提案したことからギルドの認定制度が始まったこと。

そして暫定情報ではあるが初心者への事故が減ったことなどが事細かに記載されていた。

「まあ、コースケさんったら私の胃袋を驚掴みにするだけではなく……、いえ、市民の食生活を豊かにするだけでなく冒険者の命まで救ってくださるとは」

「胃袋？ 何のことだい？」

「私たちの食卓に出るかるぼなあら、そして上質なオリーブオイル。コースケさんがいたからこそ食べられるのです」

「そうだったんだ」

そう。屋敷のコックは試行錯誤の末、カルボナーラを完成させたのだ。

そして上質なオリーブオイルは多くの料理に活用されている。

「しかも、それらを販売しているお店の経営改善まで成し遂げているのです」

「うん？ それは興味深い話だね」

アルフレッドの反応に、アンナの眼が鋭く光る。以前よりアンナは幸助の手腕を気に留めていた。そして可能なことならば領地が抱える問題を相談したいと思っていたのだ。

「お父様もそう思われます?」

「ああ」

「ではコースケさんを食事会に招待してもよろしいですか? 問題の解決手法など、いろいろお話を伺いたいです」

「彼をどこまで信じるかはさておき、話を聞いてみるのは良いと思うな」

「では早速コースケさんに手紙を認めますわ」

「すごいとこに来ちゃったなあ」

幸助は今、迎えの馬車に揺られ領主の館に到着したところだ。

住居だけでなく市役所の役割も担っている建物は石造りの四階建てである。

その姿は壮観の一言に尽きる。

「お待ちしておりました、コースケ様。どうぞ、こちらへお越しください」

迎えに出たメイドに続き、石の階段を十段ほど上り屋敷へ入る。

最初に幸助を迎えたのは直径二十メートルはあろうかという円形



のエントランスホールだ。

彫刻の施された力強い柱。品のよい調度品。  
その空気に圧倒される幸助。

厚みのある絨毯が敷かれた廊下を進むと、とある一室に通された。

「どうぞ。お掛けください」

「あ、ありがとうございます」

緊張で動きがぎこちない幸助。

椅子に腰かけると小さなため息をつく。

(やばい、緊張してきた。初めてクライアントの社長に会ったとき  
みたいだよ。

いや、呼ばれた理由が分からないからもっと緊張してるかも)

大きく深呼吸をしているとドアが開かれる。

仕立ての良い服を着た男女が入って来た。

アンナとアルフレッドだ。

反射的に立ち上がり名刺入れを取り出そうとする幸助。

ポケットに手を伸ばしたところで、ここは異世界だと気づく。

「コースケさん。本日はわざわざお越しいただきありがとうございます  
ます。私を手紙の差出人、アンナです」

「松田幸助と申します」

「私はアルフレッド・アヴィーラ。アンナの父です」

「りよ、領主様!？」

「畏まらなくていいよ。私は今日はおまけだから」

「は、はい」

手紙の差出人はアンナであった。

まさか領主も来るとは思わなかった幸助。  
自己紹介が済むとそれぞれが席に腰かける。

「お飲み物はいかが致しましょう。本日のお料理に合わせたワインも御座います」

メイドがタイミングよく幸助へ声をかける。  
ちなみにアンナの執事セバスチャンは壁際で待機中だ。

「じゃあ、そのワインをお願いします」

飲み物がそれぞれの前へ運ばれると食事は始まる。

「まずはコースケさんに感謝を」

「ええつとですね……。僕、何かしましたか？」

領主令嬢に感謝される覚えのない幸助。  
頭にはてなマークが浮かんでいる。

「何を仰るんですの。オリーブオイルにかかるばなら、私の……。いえ、市民の食生活を豊かにしてくださいました。それだけでなく冒険者の問題も解決してくださって」

「ここでもうやく今までの活動が領主の館まで届いていたことに気づく。

アロルドの店にアンナが来たことは聞いていた。

しかし、自分のことまで伝わっているとは思っていもいなかった幸助。

「いや、あれはほとんど店主たちの腕によるもので、僕はほんの少

しだけ手伝っただけですよ」

「まあ、謙虚な方ですわね。それでも感謝致しますわ」

「あ、ありがとうございます」

呼ばれた理由がわかり、緊張も少しずつほぐれて来た幸助は料理に舌鼓を打つ。

前菜、そしてトマトのスープ。どれも極上の味わいだ。

そして次のメインディッシュが運ばれると幸助は目を見開く。

魚と貝が皿に散りばめられた、アクアパッツアのような料理が出されたのだ。

海から少し離れているこの街には今の季節、塩漬けか干物しか無いはずだ。

幸助の反応を見たアンナが笑顔を浮かべながら口を開く。

「氷の魔法が使える方に運んでもらいましたの」

普段はなかなか出来ませんが特別なお客様が見える時はこうしていますの、とアンナは続ける。

「へえ、そうなんですな」

その後、領主の館流カルボナーラとデザートが続き、食事は終了した。

食後のお茶を飲みながらアンナは幸助に一番聞きたかったことを聞く。

「ところでコースケさん。変な質問をしてもいいですか？」

「はい」

「仮に大きな商会があったとして、それを魅力のある商会にするに

は何か必要だと思われませんか？」

本当は商会ではなく領地なのだが、そこはぼかしている。  
抽象的な質問にうーんと考え込む幸助。

「そうですね……。働いてる一人ひとりが、その仕事に誇りを持つようにすることじゃないでしょうか」

発言してから社畜増殖を助長しかねないと気づいた幸助。

生活に困らない収入と仕事以外の時間があることは大前提ですけどね、と続ける。

実際、仕事以外の時間を持つことは大切だ。

会社という閉鎖的な空間だけにいると、そこだけの「当たり前」に支配され思考が固まってしまいかねない。

外で遊んだり違う経験を積むことで発想力や感性が豊かになる。  
ひいては、それがまた仕事に活かされる。

「大変参考になりました。ありがとうございます」

こうしてドキドキの昼食会はお開きとなった。

「また別な機会にお話をさせて頂いても宜しいでしょうか？」

「僕でよろしければいつでも」

「ありがとうございます。ではごきげんよう」

馬車に乗り込む幸助を見送る親子。

「お父様、やはりコースケさんの力を借りてみてはいかがでしょうか」

「そうだね。素性など気になるときはあったけど、有能なことは間

「違いなさそうだね」

領地の抱える問題。

それはアルフレッドが領地を継いでから、有能な人材の流出が続いていることだ。

優柔不断なアルフレッドの方針を嫌い、先代はよかったのと言いつつ残し去っていく人が後を絶たない。

先日も騎士団でそれが露呈した。

支出を限りなく削減すれば評価されると思い込んだ新任の購買担当者、調達する武器の質を落としていたのだ。

実際支出は削減された。しかしそれにより低品質の武器を支給された騎士の士気は落ちた。

中には別の領地へ出て行ってしまふものもいた。

見かねた騎士団長が領主に直訴したことでようやく把握できたのだ。

騎士団だけでもこの有様である。

アルフレッドの仕事は日ごとに増え、状況は悪化するばかりであった。

そこへ突然現れたのが幸助である。

懸念事項の一つでもあった冒険者の事故について、解決の兆しが見えてきたのだ。

幸助の手腕に淡い期待を寄せるのは無理もない。

幸助は今後、この領地とどのように関わっていくのか。

改善はまだまだ続く。

## 7 伯爵令嬢（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
これで第3章は終了です。

## 1・領主肝いりの事業＝領主の起こした問題

秋は深まり、寒い日も多くなってきた。

街を東西と南北に貫く二本のメインストリートには時おり枯葉が駆け抜ける。

冒険者ギルドの武器認定制度はその後、順調に冒険者へ浸透していった。

ホルガーの槍だけではなく剣や弓、防具に至るまで認定された装備は多岐に渡る。

制度を悪用し融資を受けたまま行方をくらます冒険者もいたのだが、その都度制度を見直しブラッシュアップをしているようだ。

魔物討伐の成功率が向上しギルドの収支が改善されたことも、積極的な取り組みを後押ししている。

今日は日曜日。

東西のメインストリートを行き交う人はそれほど多くない。

通りに面した黒い外壁のお洒落な店『アロルドの Pasta 亭』も今日は定休日である。

しかし、本来であれば静寂に包まれているはずの店からは賑やかな声が漏れている。

「かんぱーい！」

カップを合わせる幸助たち。

店内では十五歳になるサラの誕生日パーティーが催されている。

十五歳になるということは、この国では成人の仲間入りをすると

いうことだ。

「誕生日おめでとう、サラ。はい、これプレゼント」

「ありがとう！ コースケさん」

笑顔で幸助からのプレゼントを受け取るサラ。

包の中身はマフラーだ。

「わあ、暖かそう！」

早速首に巻いて見せるサラ。

「うん。似合ってるよ」

「ありがとう！」

クルツとひと回りするサラ。

白いマフラーが真っ赤な髪を引き立てている。

色の選択は成功だったようだ。

「でも何でここに……」

マフラーを外すとサラはギギギッと横を見る。

そこには清楚で仕立ての良い服を着た、グレー髪の少女がいた。

領主令嬢のアンナだ。

「あら？ お友達がパーティーをするからと誘ってくださったのよ」

そう言いながら幸助を見るアンナ。

ここ最近幸助とアンナは仕事で頻繁に会っている。



騎士団の武器調達については政治的なことも絡むため多くは口出しできなかった。

だが、裏方の業務に関することは一般的な企業との共通点も多い。今はアンナを通して業務の標準化に取り組んでいる。

一人の優秀な人に頼ることなく誰でも一定以上の成果が上げられるようにするための仕組み作りだ。

そのような取り組みの折、ふとした会話の中でパーティーの話題になった。

新作料理も出てくると聞きアンナは食いついてきたのだ。

ちなみに武器屋のホルガーとパロも誘ったのだが、年中無休の冒険者相手に店を空けることができないため欠席となった。

「それに私も来月誕生日ですの。同い年同士仲良くしましょう。はい。これは私からのプレゼント」

「あ、あ、あ、ありがとうございます！ アンナ様！」

「あら、アンナ様だなんて他人行儀ですこと。もうお友達でしょ。呼び捨てでも結構ですよ」

領主令嬢などサラにとって雲の上の存在である。

おいそれと呼び捨てなどできない。

おもむろに幸助の方を向くと大丈夫という表情で頷く。

それを見てアンナの名前を呼ぶサラ。

「アンナ……さん」

「まあ、それでも良いですわ。それよりも早く……」

テーブルへ熱い視線を送るアンナ。

色とりどりの料理が並んでいる。

その中でも今まで見たこともないひとときわ目をひくものがあるの

だ。

白くて丸い何か。

そう、誕生日ケーキである。

誕生日パーティーをやるということで幸助がアロルドにイメージを伝えたところ、見事に再現してくれたのだ。

「よし、切り分けてやる」

そう言うと包丁を取り出し六等分に切り分けるアロルド。

小皿に乗せ、皆へ配る。

「いただきます！」

口にした途端恍惚な表情を浮かべる女子三人。

「おいしいね！ やっぱりお父さんの料理は最高だよ！」

「まあ、なんて素晴らしい味ですの！ クリームの甘みと中に隠れているフルーツの酸味が絶妙なマリァージュを醸し出していますわ」

二人とは対照的に黙々と食べるサラの母ミレーヌ。

瞬く間に三人の皿からケーキは姿を消す。

評判上々でアロルドも気分がよさそうだ。

しかしここで重大な問題が発生した。

パーティーの参加メンバーは五人。アロルド一家に幸助とアンナだ。

それに対して切り分けたケーキは六つ。

じー。

女子三人が最後に残った一切れに視線を送っている。  
激しい争奪戦のゴングは鳴った。

「私の誕生日なんだから当然これは私のものだよ！」

「私は滅多にここには来れないのですから食べる権利がありますわ」  
「ここは年長者を敬わないとね」

熾烈な攻防戦を啞然と見つめるアロルド。

幸助はヤレヤレという感じに首を左右に振ると声を出す。

「アンナさん、僕のケーキをどうぞ。だからその残ったケーキはサラが食べたらずら？」

食後には思いまだ手を付けてなかった皿をアンナに差し出す幸助。

「あら？ お気遣い頂かなくてもよろしかったのに」

言葉とは裏腹に、何の戸惑いもなくケーキを受け取るアンナ。

それを見たサラは、すかさずテーブルの上にある最後の一つ入手を伸ばす。遠慮はしないようだ。

「ありがとう！ コースケさん！」

そしてミレーヌはというと。

「……………」

「なんだよ」

ミレーヌから注がれる視線が激しく突き刺さるアロルド。

アロルドのケーキは既にその半分が胃に納まっている。

「わかったよ。俺のはお前と半分ずつな」

「あら。半分じゃなくて私に全部くれてもよかったのに」

「もう食べたものは戻らん！」

ケーキ騒動がひと段落すると、アロルドはキッチンから湯気を立てた大皿を持ってきた。

色とりどりの料理が並ぶテーブルが更に賑やかになる。

「これが今日のメイン。レッドボアの赤ワイン煮込み。新作だ」

幸助にもおなじみとなった魔物レッドボアが、今回は煮込み料理として登場した。

これも幸助が漏らした「肉の煮込みが食べたい」というリクエストをアロルドが実現してくれたのだ。

アヴィーラ伯爵領の名産品であるトマトや赤ワインをふんだんに使用した料理である。

「おいしそうですね」

「だろ。長時間煮込んだからな。こつというのはやっぱり魔道コンロを使うに限る」

「へえ、魔道コンロって便利なんですね」

「おう。もうこれが無きゃやってられないぞ」

魔道コンロといえば幸助がアロルドの店を経営改善する際に初めて見たものだ。

アロルドの店では一般的な火をくべる窯もあるが、煮込む必要がある料理にはこれが使用されている。

熱源は魔石である。

魔石には寿命があり、内包された魔力が枯渇すると使用できなくなるため、別の魔石に交換する必要がある。

「いただきます」

女性陣がレッドボア肉の煮込みを確保したのを確認すると、幸助も肉を自分の小皿へ取る。

大きな肉の塊にスプーンを入れる。

ほとんど抵抗なく肉は分断される。相当煮込まれているようだ。

黒に近い赤色のソースをたっぷり肉に絡めると、そのまま口へ送り込む。

「!!!!」

程よい酸味と赤ワインの深み。そして濃厚な肉の旨みが口に広がる。

そしてほろっと崩れる肉の柔らかさ。

「すごく……柔らかいです」

「だろ。昨日から用意してたからな」

「うん！ おいしいよ、お父さん！」

「これもまた素敵な味ですこと。屋敷のコックにも伝えなければ」

自分の世界に入る幸助。

頬に手を当て虫歯ポーズを決める女性達。

それぞれが口々にレッドボア煮込みの感想を漏らす。

その様子を見たアロルドは、レッドボアの赤ワイン煮込みをレギユラーメニユー入りさせることに決めるのであった。

「ところでコースケさん」

レッドボアの赤ワイン煮込みがほとんど皆の胃へ納まった頃、アンナは幸助へ声をかける。

「何ですか？」

「少しだけお仕事の話を宜しいでしょうか？」

「もちろん」

ここ最近の幸助とアンナの仕事は、領主の館に勤める人たちの業務標準化などだ。

その話かと思いい心の準備をする幸助。

「先ほど話題に出ておりました魔道コンロのことなのですが……」

「魔道コンロがどうかしましたか？ 屋敷でも導入したいとか」

「もちろん屋敷の調理場でも導入しております。そうではなくてです……」

そう言うとアンナは目を伏せる。

あまり良い話題ではないらしい。

意を決したのかゆっくりと幸助へ視線を戻すと言葉を紡ぎだす。

「実は魔道具の販売はお父様の思い付きで始まった事業なのです」

「うん？ それは公営の事業という意味ですか？」

「はい。そうです。しかし……」

それからアンナは幸助へ魔道具事業のあらましを説明する。

それによれば、領主であるアルフレッド・アヴィーラ伯爵は領地

継承後、町おこしとして魔道具の生産に力を入れたそうだ。

魔道具といえば、職人が依頼主から「このようなものが欲しい」という依頼を受け生産するのが常識である。

その常識を覆し、決まった規格の魔道具を大量生産し安価に販売する事業を始めたのだ。

便利な魔道具が普及することでまずは市民の生活を豊かにする。それを領地の特産品として他領へも売り込む。

このような計画であった。

領主肝いりの事業は即座にスタートされた。

まずは領内の魔道具職人を魔道具店の店長に任命。

そして予算をかけ国中から職人を招き開発に着手した。

しかし、完成したものは以前より実績のある魔道コンロと冷却庫のみで、新作はガラクタばかり。

更に悪いことに、魔道コンロと冷却庫も販売は芳しくなく、どんどん領地の予算、即ち税金を吸収していくばかりという状態が続いているそうだ。

「実は内政が手落ちになっていたのも、これが原因の一つなのかもしれないのです」

（こうやって話を聞くと魔道具ってのは現代でいう家電製品みたいなもんか。

となると内政の手落ちはさておき悪い取り組みには見えないよなあ。

便利な魔道具が普及すれば皆の生活が楽になるのに。

現にアロルドさんは欠かせないって言うくらい活用してるし。

やってることは画期的なんだけど何が足りないんだろ)

あごに手をやり考え込む幸助。

家電製品があふれる世界で生活していた幸助には、魔道具のメリツトはよくわかる。

しかし何かが原因で普及していない。領主がすっかり予算をかけているにもかかわらず。

サラが心配げな表情で二人の様子を見ている。

「何で領主様は町おこしに魔道具を選んだんでしょうか？ 名産品ならワインやトマトもあるのに」

「ワインやトマトは他の領地でもふんだんに生産しております」

アンナの言う通り、これらはアヴィーラ伯爵領の名産品というよりはマドリー王国の名産品である。

しかもトマトは生鮮食品なので流通網の整っていないこの世界では輸出には向かない。

「では何か魔道具に思い入れがあるとか……ですか？」

「ええ。お父様は昔から魔道具をさわることが好きだったようです」

(なるほど、趣味が高じて……というところか)

合点がいく幸助。

以前食事で会った時、領主の線の細さは印象に残っていた。

間違っても剛腕を振るうタイプの人間ではないと感じていたのだ。室内に籠って魔道具いじりをしながら育ったのだらうと幸助は考える。

「うまくいけば市民の生活が豊かになると私は考えているのですが」



「それは間違いないと思います」

幸助の言葉にアンナの顔は一瞬明るくなる。  
しかしそれは長く続かず、すぐに視線を下に落とす。

「しかしお父様も職人も、どうしたら良いのかわからず……。恥を  
忍んでご相談させていただいた次第です」

「状況はわかりました。できればもう少し詳しい話を聞きたいです  
ね」

「私は全く関わっておりませんでしたので、後日私と一緒に魔道具  
店へ行っていたいただいても宜しいでしょうか？」

「はい。ではそうしましょう」

幸助に礼を言いながら頭を下げるアンナ。

その動作一つひとつが洗練されている。

やはり育ちのいい人は違うんだなと幸助は一人ごちる。

「ごめんなさいねサラさん。誕生日なのにお仕事の話をしてしまい  
まして」

頭を上げたアンナはサラへ向かいそう言った。

「いえいえ！ とんでもないでしゅっ」

ぶんぶんと手を振るサラ。

言葉を囁んだ。

まだこの状況に慣れていないようだ。

「ほら、料理は肉だけじゃなくて他にもいろいろあるぞ」

アロルドの一言で場の雰囲気はパーティーモードに戻った。  
幸助はワインを飲み、アンナは次の料理へ狙いを定める。

「ふふっ。こちらの料理も美味しそうですね」

「僕、これまだ食べてなかったや」

「あ、それ私もまだ食べてなかったのに！」

こうして今度はカルボナーラをめぐる戦いが勃発するのであった。

## 2・残念な作品たち

「わあ、コースケさん。大きい建物がいっぱいだね！」

「あはは、テンション高いね。サラ」

誕生日パーティーを開催した数日後。

幸助とサラは問題の魔道具店へ向かうため馬車に揺られていた。

馬車はアンナから差し向けられたものだ。

幸助は何度か乗ったことがあるがサラは初めての乗車である。

従ってテンションが高めである。

「お迎いの馬車だなんて何だか偉い人になったみたいだよ！ 乗り心地もいいし」

「確かに乗り心地はいいよね」

市民の足となっている乗合馬車と違い、座席にはクッションがある。

領主一家が乗る馬車と比べると装飾は無く地味ではあるが、それでもその差は歴然だ。

「隙間風が入ってこないから寒くないねっ。それにこれもあるから」

そう言いながらサラは首に巻いた白いマフラーをきゅっと握る。

幸助から誕生日プレゼントとしてももらったマフラーだ。

空気はひんやりとしているが、馬車の中は風が当たらないのでそれほど寒くない。

だが、サラはマフラーを大切そうに巻いている。

幸助からもらったということが相当嬉しいようだ。

「あ！ あそこの家、庭に池があるよ。すごい！」

窓を流れていく景色にいちいち大きな反応するサラ。

右へ、左へ顔を振るたびに真つ赤なポニーテールも揺れる。

それを見て、東京へ遊びに来た姪を案内した時のことを思い出す幸助。

大きなビルやおしゃれな店が相当刺激的だったようで、サラと同じような反応をしていたのだ。

「サラはこつちにはあまり来ること無かったっけ？」

「貴族街なんて来る用事無いもん」

馬車は南北を貫くメインストリートを貴族街へ向かい北上している。

アヴィーラ伯爵領は、北に領主の館を含む貴族や裕福な商人などが住む街があり、東に住宅街、西に商業街、南に工業街という分布となる。

通り沿いの建物は最初は見慣れた木造の建物が多かったが、馬車が進むにつれ石造りの大きな建物が増えてきた。

一軒当たりの敷地面積も広く、一般市民の住むエリアにある密集感は無い。

日用品からぜいたく品まで、必要なものは全て貴族街にある店舗またはお抱えの商人で賄うことができる。

そのため、一般市民が貴族街へ行くことも、その逆もあまりない。貴族も来店するようになった『アロルドの Pasta 亭』という店もあるが、それは例外である。

景色の中に店舗が増えてくると、馬車はメインストリートを外れ

一本中の道へ入る。  
道幅は狭くなるが、それでも余裕で馬車がすれ違うことができる  
広さだ。

「もうすぐかな」

幸助がそうつぶやいた直後、馬車はとある建物の前で停まった。  
建物の前にはもう一台馬車が停まっている。アンナは既に到着し  
ているようだ。

「お待ちせ致しました。こちらの建物でございます」

御者が馬車のドアを開けると、幸助とサラは馬車から降り建物の  
前に立つ。

薄いグレーの石で造られた建物は二階建てだ。

こげ茶色の木製のドアには『魔道具店』という小さなプレートだ  
けがついている。

ドアを手前に引くと幸助は店内に入る。サラがその後ろに続く。

「こんにちは」

声をかけると同時に店内を見渡す幸助。

店内に商品の陳列棚は無く、黒色で重厚感のある二人掛けのソフ  
アークがテーブルを挟んで向かい合っている。

テーブルの上にはいくつか魔道具が置かれており、ソファには  
既にアンナが腰かけていた。

アンナの隣にはもう一人別の女性が座っている。

「こんにちは、コースケさんにサラさん。こちらへどうぞ」

アンナに促され、空いている席へ座る二人。

大きめの手荷物をソファアの横へ置くと幸助は向かい合うことになった初対面の女性を窺う。

歳は二十代後半であろうか。黒に近い茶色の髪を無造作に後ろで束ねている。

身に纏っている白衣はヨレヨレだが、この世界では高価な眼鏡をつけている。

「いらっしやいませ」

タイミングを見計らったように店員であろう別の女性が現れ、暖かな紅茶が運ばれる。

紅茶は領地の名産品でもある。幸助にもなじみの味だ。

女性が背を向けたところでアンナは口を開く。

「こちらの方が店長のニーナ・アロソンさんです」

「ニーナよ。よろしくね」

ニーナ・アロソンは、アロソン男爵の長女として生まれた。

幼いころ魔道具制作の能力を開花させ、数年前までは自宅で顧客より依頼された魔道具を細々と作成していた。

その製品は領主の館へも納品したことがある。

当然魔道具好きである領主の目に留まり、領主肝いりで始めたこの事業の店長に任命されたのだった。

逆にニーナがいたからこそ領主はこの事業を始められたという節もある。

「幸助と申します。よろしくお願ひします」

「サラです。コースケさんの手伝いをしてます」

サラは武器店であるホルガーの店の看板を描いたりアイデアを出したりと、少しずつ幸助の仕事を手伝えるようになっていく。先入観がなく何でもスポンジのように知識を吸収するので、幸助も将来を楽しみにしている。

「では早速ですが、現状を教えてくださいてもよろしいでしょうか？」  
「ええ。少し長くなるよ」

そう言うと、人差し指でメガネの位置を直しフツツと笑うニーナ。

「まずね、領主様の発案でこの事業が始まったの。それで私がその店長。そこまでは聞いた？」

「はい。アンナさんから」

「それでね、最初はよく作ったことのある魔道コンロと魔道冷却庫を製品化して販売したの」

「両方とも見たことはありませんね」

コンロはアロルドの店で。

冷却庫はルティアの店でそれぞれ見たことのある幸助。

「でね、コンロは少しだけ売れたの。冷却庫はもつと少しだけ。性能が悪かったからね。で、それからが続かなくて……」

「それ以外は何を作ったんですか？」

「フツツ。よくぞ聞いてくれたね」

キラリとニーナの眼鏡が光る。

テーブルの上に置いてある三つの魔道具のうち、ニーナは右端にある箱型の物を手にする。

「これはね、魔道金庫」

そう言うとニーナはふたを開けポケットから出した銀貨を一枚中に入れる。

ふたを閉じるとスイッチを押して幸助へ渡す。

「開けてごらん」

受け取った幸助は金庫のふたを開けようとする。

しかし、どれだけ力を入れてもビクともしない。

スイッチを触っても反応は無い。

意地になり全身の力を込めてこじ開けようとするがそれでも開かない。幸助の顔だけが赤くなった。

「はあはあ……。開かないですね」

荒れた息を整える幸助。

確実に運動不足である。

「スイッチを入れた人しか開けられない仕組みなの」

「へえ、便利そうですね」

「お店のお金をしまっておくのに便利そうだね！ コースケさん」  
サラも続く。

幸助がニーナに魔道金庫を返すと、ニーナはいとも簡単にふたを開けてみせる。

「でもね、問題があるの」

「それはどのような？」

「エネルギー源である魔石がね、一日で枯渇しちゃうの」

「魔石が枯渇するとどうなるんですか？」



「誰でもふたが開けられちゃう」  
「……」

開発する時は「これ画期的だねー」などと仲間内で盛り上がっていたのだからと推察する幸助。

しかし誰でも開けられるならば何の意味もない。しかも燃費が悪く運用コストがかさむ。

（あちゃー。こりゃ需要無視で自分の欲求に忠実型のエンジンだなあ。

この様子だと製品ありきで作ってから売ってみるってスタイルみたいだし、他の魔道具も怪しいぞ）

静まり返る室内。

サラは居心地が悪いのかテーブルから視線を逸らしている。

この残念な作品に誰かが突っ込まなければならぬ。

幸助は恐る恐る切り出す。

「なら、普通の鍵の方がいいですよね……」

「フツッ。その通り」

ガクツと頂垂れる幸助とサラ、そしてアンナ。

「ニーナさん、それならばこちらを説明してくださいませ」

気を取り直したアンナに促され、テーブルに乗っているもう一つの魔道具を手取るニーナ。

円筒形でペットボトルのような形だ。

「これはスゴイよ」

見ててねと続けるとニーナは魔道具を手に取りそつと上に向かって投げる。

三十センチほど飛んだところでその魔道具は突然風を吹き出し、勢いよく天井へ衝突した。

ゴングゴングゴゴゴゴ……。

数秒間天井に張り付くと、魔道具は力を失い床に落ちる。

「空飛ぶ魔道具、すごいでしょ」

「すごいですわ。私たちが鳥のように空を飛べる日も近づいたのですね！」

「空飛べるなんてすごいよ！」

女性二人の反応はすごぶるよい。

しかし幸助は腕を組み複雑な顔をする。

(うーん、これってどう見てもオモチャだよなあ。

とても今すぐ売り上げを作るための商品にはなりえないぞ)

玩具としての価値を一瞬考えた幸助だが、すぐにその考えを捨てる。

衣食住だけで所得のほとんどを使い切る世帯が多いこの世界。

高価になるであろう玩具が経営を立て直すほど売れるとは考えにくい。

そして幸助はニーナへ質問する。

「これって飛ばす方向や強さなどの制御はできますか？」

「……」

「そして何かを乗せて飛ばすほどの出力は出せそうでしょうか？  
それができれば輸送や軍事での需要はありそうですが」  
「そ、それはね……」

再び沈黙が店内を支配する。

ニーナは床に落下した魔道具を拾いソファへ戻ると口を開く。

「あと十年くらい……研究できれば可能、かも」  
「ならすぐに売り上げを作る材料にはなり得ませんね」  
「ぐう……」

確かに画期的な魔道具ではある。

軍事に力を入れている領地であれば、その価値を見いだささえすれば開発のための資金投入が期待できる。

しかし生憎ここは戦争とは無縁な土地だ。それは期待できない。

「他にはどんな魔道具があるんですか？」

幸助からの質問に俯くニーナ。

「実は、見せられるのはこれだけしかないんだ。他はガラクタばかりだね」

「光る魔道具は作ってませんか？ 夜の部屋を照らせると便利ですが……」

現代では照明は当たり前の存在である。

うまくいけば全ての建物に対して需要が期待できる。

「それも考えたんだけどね。温めるか冷やす、あとは爆発させるくらいしか成功してないんだ」

「そ、そうですか……」

爆発は失敗作じゃないのかという考えがよぎった幸助であるが、スルーする。

「やっぱり、店を続けるのは難しそう、かな？」

「いや、少ししか話を聞いてませんから。まだ断定はできないですよ」

そう言つと幸助は少し冷めた紅茶で乾いた口を潤す。

そして商売を続けるうえで重要なことを質問する。

「手元の資金はあとのくらい持ちそうですか？」

「このまま十分な収益が上がらなければ、あと三ヶ月も持たないね」

「三ヶ月、ですか……」

想像以上に逼迫していることに驚く幸助。

三か月間で良い兆しが見えたとしても資金が尽きればそれでお終いだ。

「新製品の用途は立ってますか？」

「全然。暖めるとか冷やすくらいなら術式がシンプルだから作りやすいんだけど、それ以外となると難しく……」

（となるとやっぱりこれで行くしかないか。

というよりも、うまくやれば絶対に売れるぞ、これ）

幸助はテーブルの上にある最後の一つの魔道具へ視線を向けながらそう考える。

「やっぱりダメかもしれないね……」

小さくつぶやくニーナの声を思考を中断する幸助。

皆の視線がニーナに集まるが、その姿に誰も話すことができない。膝の上に置かれた手は固く握られている。

少しの間沈黙が続いた後、ニーナが弱々しく語り始める。

「この店ができるまで、ずっと一人で魔道具作ってたね。実はちょっと寂しかったんだ。黙々と作り続けることがさ……。ううん、もちろん作ることができるだけで楽しいよ！でも、こんなのできたよって分かち合える人がいなかったからさ……」

黙ってニーナの言葉に耳を傾ける三人。

遠巻きに従業員も様子を窺っている。

「それでこのお店ができて、仲間ができて。すごい充実してたんだ。みんなと意見言い合ったり技術を教え合ったりして……。時には失敗もするんだけどね。でも失敗だってみんなで笑っちゃえばそれで終わり。また次を頑張ろうって思えるんだよね。こんなに楽しい毎日を送れるなんて思いもしなかったよ」

頷く幸助。

仲間がいることのありがたみは痛いほど知っている。

「でも、仲間と研究ができるのは領主様の資金、いや、市民の税金から来てることをすっかり忘れちゃってさ。コンロと保冷庫が少し売れてるからそれでいいと思ってたんだよね。あと数ヶ月で成果が出なかつたら打ち切りって言われたときに頭が真っ白になっちゃって……」

膝の上に置かれた手がプルプルと震えだす。

「店が続けられなくなるなんてのは……、いやだよ……」

眼鏡を外し、袖で目を拭うニーナ。

「ありがとうございます。話をしてくれて」

「うん……」

「僕はこのお店を繁盛させるためにやってきたんです」

「うん。そう聞いている」

「ニーナさん」

幸助の呼びかけにニーナは眼鏡をかけ直すとゆっくりと顔を上げる。

ニーナと視線が合う。

そして幸助は宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

### 3・特徴の無い魔道具？

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

幸助はそう宣言すると、ニーナの反応を待つ。

サラとアンナも不安げな表情でニーナの様子を見ている。

眼鏡越しの茶色い瞳からは戸惑いとも期待感ともとれる様子が窺える。

「まだ……、何とかなるの？」

「何とかするんです。皆で力を合わせて」

その言葉にハッと目を見開くニーナ。

今まで、店舗運営などよくわからないと研究開発に逃げていた。

いつまでも領主からの資金補填があると思いつ込んでいた。

そのツケが今やってきたのだ。

もう後は無い。

何もやらなかったら結末は見えている。

ならば、やるしかない。

「さっき仲間がいて嬉しかったって言ってましたよね」

「うん、そう言った」

「僕たちもその仲間に入れてください。今だからこそできることを一緒に考えましょう！」

「フフッ、そうだよね、そうしよう」

ニーナの顔に笑顔が戻ると、アンナも安堵の表情を浮かべる。

自分の父親が始めた事業だ。

店舗運営の経験がない二ーナに丸投げしたことに対する責任を少なからず感じている。

それに投入された資金は市民の税金だ。

当初の目的通り市民の生活を豊かにし、領地の名産品にしたいという想いは人一倍強い。

上品な仕草で紅茶を一口飲むアンナ。

カップをテーブルに置くと幸助へ言葉を投げかける。

「コースケさん。その様子ですと何かよい考えが浮かんでいるようですね」

「はい。これから新しい魔道具を開発するには時間的にも資金的にも余裕がなさそうです」

「そうですね。この二つの魔道具もそれぞれ開発に一年以上かかっているようですし」

「そうなんです。だから……」

幸助はそう言うとテーブルに視線を落とす。

テーブルの上には二ーナがデモンストレーションした残念な魔道具が二つと見慣れたものが一つ置いてある。

直径六十センチくらいの背の低い円柱形で、一見すると大きめの自動掃除機ルバのようにも見える。

側面には四つのスイッチがついており、それぞれ「止・弱・中・強」と書かれており、その横には真っ赤な魔石がはめ込まれている。

そう、魔道コンロである。

「これで勝負をかけましょう」

幸助が指差す先、魔道コンロへ皆の視線が注がれる。



その表情には一様に驚きの成分が含まれている。

「魔道コンロ……で？」

「最初は少し売れたけれど今はほとんど売れてないとおっしゃってましたわよ」

「そう、今は売れてない。特徴の無いただ温めるだけの魔道具だよ？」

「それはどうして？ コースケさん」

ニーナが少ししか売れなかったと言う魔道コンロ。

それで勝負をかけるという幸助へそれぞれが疑問を述べる。

「理由は二つあります」

そう言いながら指を二本立てて見せる幸助。

説明をする時に癖でよく使うポーズだ。

「一つ目。資金力の乏しい立ち上げたばかりの事業は一点突破が基本です」

多種多様な製品を開発し販売することができるのは理想ではある。しかし、あれもこれも開発していると資金が分散してしまう。

結果どれも完成できないうちに資金ショートという事態になりかねない。

魔道コンロだけに絞れば仕入れる材料も絞ることができるし、マーケティングもシンプルになる。

他の製品を開発するのはコンロから利益が稼ぎ出されてからでも遅くはない。

『吸 力の変わらないただ一つの掃除機』というキャッチコピーで躍進した掃除機メーカーがイギリスにある。

今でこそ扇風機など他の製品を手掛けているメーカーであるが、当初は掃除機一本であった。

「二つ目。魔道コンロは絶対に便利な魔道具です。それだけは自信を持って言えます」

当たり前のように日本では普及していたコンロ。

自炊することはほとんど無かったが、それでもコンロが無い世界に来てから初めてそのありがたみを知った幸助。

ここは異世界である。

しかし熱源が電力やガス、魔力の違いだけで製品の果たす目的は同じだ。

だからこそこの世界でも全世帯に対して需要が期待できる。

「お父さんがお店で使ってるから便利なのは知ってるけど……」

サラはまだ売れなかったという事実を大きく受け止めているようだ。

しかし幸助も日本では当たり前のように普及していたという説明はできないので、話を切り替える。

「便利なんだけど広まらない理由が何かあるかもしれないから、一度魔道コンロについて情報の整理をしてみましょう。ニーナさん、紙とペンはありますか？」

「ええ、設計で使ってるのがたくさんあるよ」

ちょっと待ってねと言い残し店の裏へ向かうニーナ。

その間にテーブルの上を紙を広げるために整理する幸助。  
ニーナはすぐにその手にペンと大きめの紙を持ち戻って来た。

幸助は受け取った紙をテーブルの上に置くと、中心に『魔道コンロ』と文字を書きマルで囲う。

「ではニーナさんに質問です。魔道コンロは今まで全く売れてなかったわけではないですよね？」

「ええ。貴族の家や料理店が買ってくれたね。ごくわずかだけど一般家庭もあつたかな」

「それはどのようなルートで売れたんですか？」

幸助がこの店を初めて見たとき、お世辞にも営業しているようには見えなかった。

アロルドの店は匂いをふりまいていたが、魔道具店はそれすら無い。

店の存在が分からないくらいだ。

だからクチコミや紹介などで売っていたのかもしれないと考えたのだ。

「貴族や飲食店お抱えの商會に売ってもらったんだ。あとは横のつながりで誰々さんが便利って言ってたから欲しいってのもあつたよ。貴族は見栄もあるからね。流行りそうなものはすぐに買っつて家も多いんだ」

「なるほど、商會に卸すのとクチコミということですね」

幸助の考えは半分が正解であつた。

ニーナの答えを聞いた幸助は、紙の中心に書かれた『魔道コンロ』の文字から線を引き、『販売方法』と書く。

そして更にそこから線を二本枝分かれに描き、それぞれの枝に『

商会へ卸す』『クチコミ』と書いた。

そして『貴族・飲食店が主な売り先』とその横に書き添える。

幸助が紙に書いているのはマインドマップだ。

情報整理のしやすさや関連するアイデアが出てきやすいことから、社畜時代にはよく使用していた手法である。

ネットで検索すると絵が描かれたカラフルな画像が多く出てくるが、幸助はシンプルに黒ボールペン一本で書く派であった。

自分のやりやすい方法で書くのが一番と先輩から教えられたからだ。

「では、次に魔道コンロのメリットについてです」

「魔道コンロを使うとこんなに便利になるってことだよな？」サラが尋ねる。

「そう、正解。では皆でできるだけたくさん挙げてみましょう」

そう言うとき幸助は紙の中心から線を一本引き『メリット』と書く。同様にまだ会話には出ていない『デメリット』も書く。

良いところばかり見ていると、そこから導き出されるアイデアも薄いものになってしまふからだ。

「そういえば屋敷のコックは火力が強く調理時間が短縮できるようになった、とおっしゃってましたわ」

「なるほど。それはコックさんにとっては大きなメリットですね」

そう言いながら『時間短縮』と書く幸助。

「サラはどうか？ アロルドさんがお店で使ってる様子を見て」

斜め上を見ながら考えるサラ。

普段からユーザー側として魔道コンロに接している。  
何かを思いついたようで、「あっ」と言いながら幸助へ視線を送る。

「お父さんは薪の火と違って火力が一定になるって言ってたよ！」

「火起こしする手間もないね」

「火を焚かないから灰も出ないし煙も出ないね」

堰を切ったように次々と挙がる声を幸助は紙に記載していく。

他にも温度調整が簡単、掃除が楽、子どもでも使える、火事になりにくいなどのメリットが書き出された。

「メリットはこんなところですかね？」

「あとはステータス感かな」

「ステータス感？」

ニーナの言葉に幸助は同じ言葉で聞き返す。

人差し指で眼鏡の位置を直すと、ニーナは続ける。

「ほら、さ。最先端の魔道具がある生活って素敵じゃない？ 置いてあるだけで嬉しいっていうかさ」

「ああ、そういうことですか。ならそれも書き足しておきましょう」

魔道コンロがなぜステータス、と疑問に思った幸助であったが、ニーナの言葉を聞いて納得する。

例えるならば、いち早く最新のスマホを持たた時のようなものである。

「一通り出尽くしましたね」

「そのようですわ」

「先ほどニーナさんは特徴のない魔道具とおっしゃってましたが、ユーザー視点で見るとこれだけメリットがあるんです」

ニーナは開発者視点で特徴が無いと思い込んでいた。だからこそ斬新な機能を持つ新しい魔道具を開発しなければと躍起になっていたのだ。

「そのようだね。目からうろこだよ」  
「では次はデメリットを挙げてみましょう。さっきとは逆のことで」

そう幸助が投げかけると、先ほどとは打って変わって静まり返る店内。

開発者にとっては特に目をそむけなくなるテーマである。そんな静寂を最初に破ったのはサラだ。

「そういえばお父さん、薪よりお金はかかるって言ってたかも」  
「あ、思い出したよ。友人の家に行ったら火力が強すぎて言われたな」

なるほどと言いながら幸助はデメリットを紙に記載する。

「他はどうでしょう？」

「コースケさん、魔道コンロがたくさん売れたら薪屋さんの売り上げが減っちゃうけど、これはデメリットになるの？」

「確かに薪屋さんは大変になるかもね。でもそれは魔道コンロのデメリットではないね」

「そっか。薪屋さんは何とかならないのかなあ」

「あのね、サラ。時代は常に変化し続けるんだ。その変化に応じて柔軟に商売も変化させる必要もあるから、生き残るかは薪屋さんの

努力次第じゃないかな」

そう言いながら幸助は日本のとあるフィルムメーカーのことを思い出していた。

デジカメやカメラ内蔵ケータイの普及でカメラフィルムの市場は激減した。

しかしそのメーカーは培ってきた技術を活かして見事に業態転換を遂げているのだ。

その反面、外国で同様の事業を行っていた企業は倒産の憂き目にあっている。

「そっか。じゃあ、薪屋さんが困ったら私たちが改善の手伝いをすればいいね!」

「そ、そうだね……」

満面の笑みを湛えるサラに苦笑する幸助。

少しだけ悪いことをしている気持ちが頭をよぎったのは内緒の話だ。

「他にデメリットは無いでしょうか?」

「……」

なかなか拳がらない。

「では一旦デメリットは終わりにします。途中で何か思いついたら教えてください」

そう言つと幸助はカップに少しだけ残った冷めた紅茶を口へ流し込む。

打ち合わせを始めてからも二時間は経過している。

「少し疲れたね……」

「そうですね。普段しないことをすると余計に疲れますよね」

頭を使うのは疲れるものである。

以前ルティアの店でオリブオイルについてミーティングをしている時も同様であった。

脳みそに汗をかく。そのような時は甘いものを食べるに限る。

「コースケさん、おやつにしよう！」

「うん。皆さん休憩にしましょう。実はケーキを持ってきたんです」

「まあ！ ケーキですって！」

幸助の言葉に大きな反応をするアンナ。

その目はキラキラ輝いている。

余程アロルドの店で食べたケーキがおいしかったのであろう。

幸助は手荷物の中から箱を二つ取り出す。

「スタッフのみなさんも食べられるように二つ持ってきました。サラ、切り分けをお願いしてもいいかな」

「うん！」

持ってきたのは先日の誕生日パーティーで食べたのと同じケーキだ。

ニーナに呼ばれたスタッフと共に店舗の裏へ向かうサラ。

「ところで、ケーキって何？」ニーナが質問する。

「白くて、甘くて、ふわふわで……、それでいてフルーツの酸味が良いアクセントになっている究極のお菓子ですわ」



頬に手を当てうつとりとした表情で答えるアンナ。

ケーキはまだアロルドの店でも販売していないので、知っているのはあのパーティーに参加したメンバーだけである。

幸助もこの世界で食べるのは二回目……、いや、前はアンナにあげたので、初めて食べることになる。

「お待たせしました！」

サラとスタッフが盆を手に戻って来た。

それぞれの前にケーキと新しい紅茶が配膳される。

一人当たりのケーキのサイズが小さい。

結構スタッフの人数が多いんだなと推察する幸助。

「いただきます」

サラが着席したところでケーキを食べ始める四人。

幸助もフォークで鋭角な先端から四センチほどを切り取り口へ運ぶ。

最初に濃厚な生クリームと強めの甘みが口に広がり、あとから果実の酸味が爽やかさを添える。

（懐かしい味だなあ。さすがアロルドさん、十分に再現できてるや）

幸助の好きな甘さ控えめタイプではないが、それでも久しぶりのケーキは美味しい。

そして初めてケーキを口にしたニーナはというと。

「う、これは……」

一口食べてから固まっている。

視線は宙を泳いでいる。

そしてようやく再起動したかと思うと残りを一気に食べ尽くす。

「どうですか？ お父さんの作ったケーキ」

「すごい」

「……？」

「すごいよこれは！ 歴史に残る大発明だ！！！！」

部屋中にニーナの声が響き渡るのだった。

#### 4・キャズムを超える！

「申し訳ありません。私はこれから別の用事がありますので本日はこれで失礼いたします。コースケさん、お店のことをどうぞよろしくお願いいたします」

短いおやつタイムが終わると、アンナは皆に見送られ店を後にする。

サラと同じ年とはいえ立場は領主令嬢。

地方視察や来客対応など、抱えている仕事は多岐に渡る。

重要案件とはいえ、魔道具店だけに時間を投入することは叶わない。

「では、続きを行いましょうか」

馬車が遠ざかる音を背にすると、幸助は仕切りなおす。

先ほどまでの打ち合わせで、店舗の立て直しは魔道コンロに委ねることにした。

メリット、デメリットはたくさん出た。

しかし、まだ情報は足りない。

もう少し現状把握を進めるため幸助はニーナへ質問する。

「ニーナさん、魔道コンロの在庫はどのくらいありますか？」

「在庫？ けっこうあるよ。ついてきて」

そう言うとニーナは立ち上がり、店舗の奥へ歩き出す。

幸助とサラが後に続く。

ひんやりとした薄暗い通路を奥へ進むと、すぐに大きなスペース

が広がる。

ルティアの店と同様、この店も店舗の裏が倉庫になっているようだ。

ただしその広さは比ではない。

「うわぁ、すごいですね。宝の山みたいです」

「ほんと、たくさんあるね！」

「フツッ。宝の山だなんて、良い表現ね」

倉庫には棚が整然と並んでおり、それぞれの棚には様々な魔道具や部品らしきものが収納されている。

幸助も男子である。メカ的なものには目を惹かれるのだ。

傍らでは従業員がせつせと何かを出し入れしている。

武骨なものや小さなものなどその姿は様々である。技術者の試行錯誤が詰め込まれているようだ。

その倉庫の中でもひときわ目を引くのが魔道コンロの多さである。同じ形のものがぎっしりと棚に詰まっている。

「この宝の山が現金化されてないことが問題なんだよなあ」

「うっ、コースケ。あなた涼しい顔しながら辛辣なこと言うのね」

「あっ、すいません。独り言のつもりだったのが聞こえちゃいましたね」

つい心から本音が漏れたことで焦る幸助。

素早く話題を切り替える。

「魔道コンロの在庫はどのくらいあるんですか？」

「そうね……。二百個以上はあるかな。少ないながらも一時売上が増えたことがあってね。たくさん作ったんだ」

その後はごらんの通りだけどね、と言いながらニーナは肩をすくめる。

（一時的とはいえこれだけ在庫を作るくらい売り上げが増えたところがあるんだ。

そうなるとうまう原因はあれに絞られてきたな）

「ついでに二階の研究室も見てみる？」

「あ、はい。是非お願いします」

倉庫横の階段を上ると廊下を挟んで左右にいくつもの部屋が並んでいる。

会議室を通り過ぎると、残りはすべて研究室だ。

幸助とサラは小窓越しに研究室の中を窺う。

ある部屋ではニーナ同様に白衣を着た研究者が部品を手に論議している。

別な部屋では何かの魔道具の実験が行われている。

「皆さん真剣に取り組んでますね」

「フフツ。魔道具オタクばかりが集結してるからね」

「みんなすごいなあ」

ボンツ！！！！

幸助たちが話をしていたその時、研究室の一つから大きな爆発音が響いた。

「キャツ！」

その音に驚いたサラから小さな悲鳴が漏れる。

間を開けずして発生源である研究室の扉が開かれる。

「ゴホッ、ゴホッ」

煙が漏れる部屋から一人の若い男性が這い出てきた。

元は白衣であったたろう服も顔も真つ黒である。

「だ、大丈夫ですか!？」

「大丈夫よ、あれくらい。ここではよく見かける光景よ」

「結構盛大に爆発したような気がしますけど……」

研究中の何かが暴走でもしたんでしょとニーナは続ける。

何も気にしない様子に呆気にとられる幸助とサラ。

「に、ニーナさんが大丈夫とおっしゃるのなら……」

「ええ、大丈夫よ。さ、下に戻りましょうか」

気を取り直した幸助とサラはニーナに続き店頭へ戻るとソファへ座る。

若干のトラブルはあったものの、現状はおおよそ把握できた。

次のテーマは便利な魔道具をどうやって売るかだ。

「では、続きを行います」

幸助は今まで得た情報から、魔道具販売が直面している現象を予想している。

そして頭の中ではその対処方法もイメージできた。

幸助は二人にそれぞれ視線を送ると説明を始める。

「恐らくなんですが魔道コンロは今、キャズムを迎えています」

「キャズム？」二人の声が八毛る。  
「キャズムというのは、先端技術を使った商品がある程度売れた後に訪れる、売れない壁のことです」

厳密にはキャズムとはハイテク業界において新製品・新技術を市場に浸透させていく際に見られる、初期市場からメインストリーム市場への移行を阻害する深い溝のことである。（\*1）

ただそれをそのまま説明してもピンと来ないだろうと思い、幸助は噛み砕いた説明をした。

「具体的には？」

「まずは新しい物好きの人。とにかく新しければ買うって人が一定数いるんです」

「なるほどね」

「たぶん最初は物珍しさで買ってくれた人も多いんじゃないでしょうか？」

ニーナは領主から魔道具店を任される前は、自宅で細々と魔道具の受託開発をしていた。

その時は先端技術好きや購入者からのクチコミで売れたことを思い出すニーナ。

「その次にお店を出してからです。その頃から実利を追求した人が購入し始めたのではないのでしょうか」

「確かに。店を始めてちよっとしてから、商人経由で飲食店へも売れ始めたよ」

「サラのお父さん、アロルドさんはパスタ店を経営してて魔道コンロを導入してるんですが、たぶんここに該当すると思います」

そう言うと幸助はサラを見る。

うんうんと頷いていたサラは幸助へ言葉を返す。

「うん。魔道コンロを買ったのは一年くらい前だからね！」

「アロルドさんは、安定した火力が出せる魔道コンロで味を追求しました。物珍しさよりも実利を求めた結果、買ってくれたんです」

「うーん、どうして見てもないことがわかるんだ？ 不思議だね」

「コースケさんは何でも知ってるんですよ！」

「いや、何でも知ってるってわけではないですけどね……」

色々勉強はさせてもらいましたと続けながらポリポリと後頭部をかく幸助。

サラからいつも過剰に褒められっぱなしだが、それでも嬉しいものである。

「問題はここから先です。実はここから先もっと多くの人へ売ろうとする場合、今までは違う販売手法が必要になるんです」

ここからが幸助の腕の見せ所である。

いかに直接答えを言うことなくサラとニーナからアイデアを引き出せるかだ。

「ニーナさん、さっきデメリットを挙げている時に、コンロのサイズについての話がありましたよね」

「ああ、あの話ね。その家は五人暮らしでお手伝いさんのいない家だからね」

こう見えても、という失礼になるがニーナも男爵家の娘である。自宅にはメイドなど数名の手伝いが勤めている。

「ここから先もっと多く販売するとなると、一般家庭をターゲット



にする必要があります」

「うん。貴族の世帯数は限られてるからね」

「それで質問ですが、この街の一般家庭でいうと五人暮らしっていうのは少ない方ですか？」

幸助からの質問にニーナは少し考えると、サラへ目を向ける。

それを察したサラは代わりに答える。

「普通だよ！ ほとんどの家が三人から六人くらいだから」

「なるほど。それで今売っている魔道コンロはどのくらいの人数が賄えるんでしょうか？」

「高出力を追求したからね。百人くらいスープが飲める大きな鍋でも平気だよ」

そこまで話すとサラが何かに気付いたようだ。

ガタツと幸助の方を見ると口を開く。

「あ！ そうするともっと小さな魔道コンロにした方が売れるんじゃないかな？」

「サラ、正解！」

「小さくするの？ せっかく高出力を追求したのに勿体ないじゃない」

ニーナは不服のようだ。

技術者として今まで高出力を追求してきたのだから。

「貴族の屋敷や料理店であれば大きな鍋を使うと思いますが、一般家庭はそうではありません」

「それは分かるけど……。火力ならスイッチで調整可能だよ？」

ニーナは大は小を兼ねるといふ認識のようだ。  
確かに今の魔道コンロでも出力の調整は可能だ。

「それでもやはり一般家庭には過剰性能だと思います」

そう言つと幸助は横を向きサラに問題を投げかける。

「サラ、魔道コンロを欲しいと思つてもらえたら次にクリアしないといけない壁は何だつたっけ？」

「えつと、買えるか買えないかだね！」

「正解！ よく覚えてたね」

幸助はサラの頭をポンポンする。

サラは「えへへ」とご満悦の様子だ。

「ということなんです、ニーナさん」

「どういうこと？」

「えつとですね、魔道コンロが欲しいと思つても価格が高ければ買えないつてことです」

「だからサイズや出力を小さくして価格を安くしなきゃいけないつてことね」

「そうです」

魔道具はそれなりに高価なものである。

量産で価格が下がったとはいえ、過剰な機能を排除することで更に安くできるのであれば、取り組むに越したことはない。

「言いたいことは分かつたよ。でも……」

「うん？ どうしました」

「あのさ、高出力を追求してきたのに今更小さなのを作れなんて、

みんな納得するかなあ」

「そこは目標になる軸を変えれば大丈夫だと思いますよ」

「軸？」

幸助が言っているのは技術者が魂を注ぐ技術の軸である。

自動車業界は、高馬力で最高速度を競っていた時代から低燃費にシフトした。

それと同様にコンロの高出力から高効率へシフトしてもらおうと考えたのだ。

数値的スペックの向上でしのぎを削っているのはどちらも同じだ。

「同じ魔石で稼働する時間を極限まで長くするんです」

「なるほど！ それだったら具体的な目標値も定めやすいね」

「ライバルは薪ですから、可能なことなら薪代よりも運用コストが安くなるのが理想です」

「フフツ、任せておきなさい」

ニーナは人差し指で眼鏡の位置を直す。

幸助の提案はニーナの技術者魂に触れることができたようだ。

キラリと光る眼鏡の奥からは、自信にあふれた瞳が窺える。

「そしてもう一つ。これは相談なんですけど……」

「なんだい？」

僕は素人だからよくわからないんですが、と前置きしながら幸助は続ける。

「魔道コンロ用の魔石を専用設計にして、この店で加工したものが装着できないようにできませんか？」

「そりゃできるけど、何でわざわざ？」

幸助がニーナに相談したのは消耗品ビジネスの可能性を探るためである。

ジェットモデルともいうが、幸助の頭の中ではインクジェットプリンタの交換インクをイメージしている。

本体をできるだけ安くたくさん販売して、消耗品で利益を稼ぎ出すビジネスモデルだ。

「消耗品である魔石で継続的に売上を作ることができれば、魔道コンロ本体は原価ギリギリまで安くしても大丈夫ですよね」

「おお、確かに継続的に利益が出るね！ そんな方法があるとは」

「コースケさん、すごいアイデアだね！」

「では、その方向で行ってみましょう！」

こうしてニーナたちは小型省エネタイプの魔道コンロを開発することになった。

「では試作品ができたらまた来ますね」

幸助とサラはニーナに見送られ帰途につく。

そして店に残ったニーナはというと……。

「さて、と。みんなにも伝えないとね」

足早に階段を上ると従業員に声をかける。

「みんな！ これから会議をするよ。すぐ集まってー！」

それほど大きくない会議室に従業員が集まる。

突然の招集に、察しの良い人は今後の方針を聞く準備をし、そう

でない人は隣の人と「なんだろう」と話している。

「揃ったね。これから大事な話をするよ」

その言葉にざわついていた室内が静かになる。

窓から注ぐ西日がニーナの白衣をオレンジ色に染めている。

「このお店は領主様から頂いている資金で運営していることは知ってるよね？」

会議室を見回すニーナ。

頷く従業員の姿を認めると続ける。

「あと三ヶ月で実績が出なかつたら、資金提供は終わり、この事業は中止になることが決まったよ！」

反応を窺うが、特に混乱は見られない。

この情報は既に皆へ行きわたっていたようだ。

「でも安心して。まだ事業を続けられる可能性が残っていたの」

再び室内を見回すニーナ。

若い男性従業員と目が合つと、その男性が発言する。

「それは、どんな可能性ですか？」

良い質問ねと言いながらニーナは言葉を返す。

「新型の魔道コンロ開発するの。みんな！ 今日から魔道コンロの開発に集中するよ！！」

ざわめく室内。

今までは次々と新しい魔道具を開発するということがミッションであった研究者たち。

正反対の方針が発表され、一様に困惑の表情を浮かべる。

「今までの魔道コンロとは違うよ。小型化と省エネを追求するのが新たなミッションなの」

取り組むことは単純だ。技術的には難しいのかもしれないが。

一つは小型化。

家庭の小さな鍋でちょうどいい出力に抑えてコンロそのもののコストを抑える。

もう一つは魔石からの熱変換効率を向上させ、運用コストを下げることだ。

「ライバルは薪。薪よりも運用コストが低くなるくらい魔力の熱交換効率を上げるんだよ！」

更にざわめきが増す室内。

熱交換効率の向上という具体的目標が出たことでスイッチが入った研究者が何人かいるようだ。

「地味な作業になっちゃうかもしれない。でもこれで魔道具が世界中に流行ったら、それは私たちの成果だって自慢できるからね！それにこれがうまくいったら、また好きな魔道具を開発できるんだから」

少し間をあけるとニーナは力強く声をかける。

「みんな、楽しい魔道具開発がこれからも続けられるよう、一緒に頑張りよう！」  
「はい！」

#### 4・キャズムを超える！（後書き）

（\*1）キャズムの説明はITメディア・情報システム用語事典より引用



## 5・寒い日はこれを食べるに限る

新型の魔道コンロを開発すると決めた一週間後。

幸助とサラは再び魔道具店を訪れる。

「それにしても一週間って、かなり早くできましたね」

ニーナから早くも新型コンロの試作品ができたという知らせが入ったのだ。

テーブルの上には直径三十センチくらいであろうか。以前と比べるとかなり小さな魔道コンロが置かれている。

見た目は武骨ではあるが、販売初期はこれでいい。

競合が出てきたらデザインや更なる省エネ化でしのぎを削ることになるであろう。

312

テーブルを挟み向かい合っているニーナの顔を見る幸助。眼にはくまができています。

この一週間、ろくに寝ず頑張っていたのだらうと考える。

「だって結果を出すまで三ヶ月しかないんだよ。開発に手間取ってられないよ」

「確かにそうですね。開発が早いのは助かります」

幸助は開発に一月以上はかかると考えていた。

最悪は燃費の悪い旧来品のまま売り出す覚悟もしていたのだ。

時間に余裕があればあるほど販売もじっくりと取り組むことができる。

「見たところ小型化には成功したようですね。省エネ性能の具合はどうですか？」

「フフツ、よくぞ聞いてくれたね」

ニーナは人差し指で眼鏡を直すと幸助へ鋭い視線を送る。

「なんと、もう少しで薪に勝てるどこまで来たよ」

「おお！」幸助とサラがハモる。

「すごいじゃないですか！ 流石は凄腕集団」

「フフツ、照れるねえ」

驚くことに、ニーナと研究者たちはこの短期間で無謀とも思われた目標にかなり近づいていたのだ。

旧来品のおよそ三倍の効率化である。

今後の改良次第では薪を超えることもできるかもしれない。

明確な目標を持った技術者集団は強し、である。

「それで、コンロ本体の値段はどのくらいになりそうですか？」

「ここは重要である。」

ターゲットが一般市民である以上、あまり高額なものは受け入れてもらえない。

「いろいろ計算したんだけどね。魔石で安定的な利益が期待できるから小売価格は大銀貨八枚でも大丈夫かな」

大銀貨八枚は日本円で八万円相当である。

絶妙な価格設定に唸る幸助。

「そんなに安くなるんですか？ 金貨数枚の世界だと思ってました」

「省コスト化を追求したら構造もシンプルになってね、部品点数も減ったんだよ」

「そうなんです。あと、直接販売だけじゃなくて商會を通すことにもなります。最終的な小売価格が大銀貨八枚ってことで大丈夫ですよ。ね？」

「もちろん。それも計算済みだよ」

そう言うとニーナはフフツと笑う。

いつもであればそれで終わりだが今日は笑いが止まらないようである。

「フフツ、それにしても家庭で消費する薪代が魔石の売り上げになると思うとフフフ……」

「に、ニーナさん、ちょっとキャラがおかしくなってますよ」

「おっと、失礼」

賢いニーナのことである。

寝ずに開発だけでなく収益の皮算用をしたのであろうと推察する幸助。

大変な現実や不安な将来ばかり考えているとどうしても商売が辛くなってしまうがちだ。

皮算用とはいえ、将来の良いビジョンを妄想することも大切である。

値段の話が落ち着くと幸助は新型のコンロを手取る。

上から横から、そして下から見回す。

スイッチ類や魔石を嵌める場所は大型のものと同じである。

部品を使いまわしたのであろう。

「贅沢を言えば一つだけ改善できたらなという部分があります」

「うん？ なんだい」

「このスイッチなんですけど……」

そう言うと幸助はコンロのスイッチ部分を二ーナに向ける。

そこには四つのスイッチがついており、それぞれ「止・弱・中・強」と文字が書かれている。

「ああ、それね。部品は使いまわしだよ」

「はい。これでも問題ないんですが、できれば文字を絵に変えて頂けませんか？」

まだ幸助の想定していたスケジュールと比べると余裕があるため、そう提案する。

幸助の言葉にサラは何か気づいたようで、声を上げる。

「あっ！ ウチの店の看板と同じだね！」

「そう。新型のコンロは一般家庭を主な販売ターゲットとします。そうすると文字を読めない人も多いので、絵で直感的に判断できると親切なんです」

「なるほどね。それは私たちでは気づかなかったよ」

魔道具研究者はそう簡単になれるものではない。

従ってここに努めている従業員は、研究者だけでなく事務員なども皆それぞれそれなりの教育を受けた者ばかりだ。

「ところで試作品つてどのくらいできてますか？」

「えっとね、三台だったかな」

「それって借りることはできますか？ 魔石も何個か合わせて」

「もちろんいいよ。せっかくだからすぐにスイッチの文字を絵にす

るね」

ちよつと待つててねと言ひ残すとニーナは従業員に指示を出しに店の奥へ向かった。

「コースケさん。新しいこのコンロ、ウチの店でも使ってみたいな」「うん？ お店には大きなのがあるよね？」

「あのね、大鍋で仕込んでる時は便利なんだけど一台しかないし、一人分の調理をするのは不便なんだ」

確かに魔道コンロ以外にも薪を使う窯があつたことを思い出す幸助。

営業時間中ずっと火を絶やすことはできない。

新型コンロを導入するだけでもかなり省コスト化できるかもしれないと考える。

「そつか。確かにずっと同じ大鍋が乗つてたもんね。なら一つはアロルドさん用だね」

「コースケさんありがと！ 私も最近料理を教えてもらつてるからいっぱい使つてみるね」

首を軽く傾げながら笑顔で答えるサラ。

その姿にドキつとする幸助。

とそこへ、店の奥から足早にニーナが戻つて来た。

「お待たせ！ 文字を絵にするのはあと三十分くらいでできるつてわかりました。では待つている間に販売プランの話しましょう」

そつ言つとテーブルの上に前回使用したマインドマップを広げる。その内容を指でなぞりながら幸助は話し始める。

「先日話したとき、今までの販売方法はクチコミか出入りの商人經由という話でしたよね？」

「ええ、そうだよ」

「僕たち一般市民は基本的に出入りの商人はいないし、貴族街まで買いに来ることもありません」

出入りの商人がいるのはそれなりの購買力のある富裕層や事業者だけだ。

良い商品があるとクチコミで知ったとしても貴族街にある店には行きづらい。

「だから今までは全く違う販売方法を取る必要があります」

「やっぱり魔道コンロも実演販売がいいよね！」

「そう。実演販売で体験してもらうのが一番です。よく思いついたね、サラ」

「えへへ」

ホルガーの武器屋では店主の性格上、槍の実演販売はできなかった。

結果、冒険者ギルド認定商品というかたちに落ち着いた。

それができたのも「槍」という武器から予測される機能についての認識があったからだ。

魔道コンロを導入することによるメリットは、先日の打ち合わせでたくさん挙がった。

しかし、それを言葉で説明するのは難しい。

だからこそ実演販売が必須だと幸助は考えている。

「実演販売ってどこでやるんだい？ さっきの話だとウチの店には

来てもらえないだろ？」

「はい。まずはサラのお父さんの店『アロルドの Pasta 亭』でやってみようと思います」

「ウチのお店？ コンロを使うのは厨房の中だから実演にはならないよ？」

サラの意見はもつともである。

しかし幸助はちゃんと考えている。

己の食欲を原動力にして。

これからもつと寒くなるこの季節。

日本人なら誰でも食べたくなる料理。

手間いらずで様々な食材を楽しめる料理。

皆でわいわいとつつく団らんを中心にある料理。

そう。鍋である。

テーブルの中央に魔道コンロと鍋を置き、熱々の料理を食べてもらおう。

そうすればコンロのメリットは一目瞭然だ。

そこでコンロをすぐに買う人は少ないだろうが、その存在とメリットを知ってもらうことはできる。

「アロルドさんに鍋料理を開発してもらおうと思います」

「鍋料理？」二人の声が重なる。

幸助は鍋料理のあらましを二人に説明する。

聞いたことのない料理に興味津々のようである。

だんだんサラの口元がゆるんでいく。

「なるほどね。それなら実演もできるし料理も売れるし一石二鳥だ

ね  
「私も早く食べてみたいな！ 鍋料理」

後でアロルドさんにレシピを説明するねと言うと幸助は続ける。

「あと実演販売の候補として小麦を売ってるルティアさんの店にも  
お願いしようと思います」

今回のコンロ販売は、幸助の持っている人脈を可能な限り活かそうと考えているのだ。

しかし、それを聞いたサラの顔が少し曇る。

「えっ、ルティアさんの店でもやるの？」

「え、何かまずかった？」

「いや、でも……」

「通りに面した小売店だし、実演販売には向いていると思うよ」

「うん。そうだけど……」

何か言いたそうだが口にしないサラ。

少し間をあけるとサラは続ける。

「ならコースケさんが行くときは私も絶対ついて行く！」

「わ、わかったよ」

普段から幸助の仕事についてきているサラ。

改めてわざわざ宣言しなくても感じる幸助であった。



「これが新型の魔道コンロか。確かに小さいな」

魔道具店での打ち合わせが終わると、幸助とサラは試作品を手に入れたアロルドの店へ戻ると早速披露する。

「今が魔石を毎月二十個ぐらい食うからこれなら六・七個で済むのか」

「最高出力が低いから大鍋には使えませんけどね」

口にしながら高出力の旧来品も省エネ化の取り組みをしなければと考える幸助。

「これからは小さいのを一人分の調理に使ってみようよ、お父さん」

「あ、厨房専用にするのは少し待ってもらっていいですか？」

「コースケさん何で？」

「サラ、大事なことを忘れてない？ な・べ・りよ・う・り」

「あつ、そうだったね！ 鍋料理食べるんだった」

鍋料理という単語はこの国には存在していない。

二人の会話についてこれないアロルド。

「うん？ 何だそれ？」

「コースケさんが食べたと言っててる料理だよ」

「またお前の好みか！」

やれやれという顔をしつつも幸助の口から出る新作料理のアイデアに期待するアロルド。

ハンバーグからカルボナーラ、最近のケーキなど幸助のアイデアは当たり前続きである。

当の本人は普段日本で食べていたものを食べたいと要求していただけなのだ……。。

「で、それはどんな料理だ」

「寒い冬という季節とこの魔道コンロがあればこそできる料理なんです」

「具体的には？」

「鍋にスープを入れて好みの肉とか野菜を煮ます」

頷きながら幸助の説明を聞くアロルド。

ここまでは馴染みのある調理法である。

「それで？」

「それだけです」

「ああ？」

アロルドの頬がピクピクする。

そしてその顔から送られる険しい視線にひるむ幸助。

ここで負けでしまつては美味しい鍋料理にはありつけない。

必死に言葉を続ける幸助。

「で、ですから、この魔道コンロをテーブルに置いて、温めながら食べるんです」

「それで？」

「肉も野菜も好みの火加減で食べられますし、最後まで熱々で身も心もポカポカになれますよ」

「そういうことが、面白いな。最初からそれを言えよ！」

バシバシと幸助の肩をたたくアロルド。

「で、味付けは？」

「お任せします！ 僕の故郷ではスープそのものがしっかり味のついたものと、薄味のスープにつけダレというパターンもありました」「肝心なところはまた丸投げか！」

まあいい早速作ってやるから待ってとけ、と言い残しアロルドは厨房へ戻る。

時刻は夜の営業時間が始まる頃だ。

小さな窓から見えるメインストリートを往く人の影は長く伸びている。

日が経つにつれ早まる夜の訪れに、行き交う人々の足も心なしが足早だ。

「サラは夜の営業手伝わなくても大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だよ。夜はお昼ほど忙しくならないからね」

それを聞いてホッとする幸助。

宿屋では冒険者ランディからポツチ認定を受けていた。

一人寂しくつつく鍋だけは避けたかったのだ。

しばらく待つと鍋を手にしたアロルドがやって来る。

「待たせたな。ベースは普段出してるスープを使ったぞ」

普段出しているスープとは、ランチでも出しているベーコン入りコンソメ風スープのことである。

鍋がコンロの上に置かれるのを確認すると、幸助はスイッチを入れる。

厨房で予め加熱されているので、すぐにクツクツと沸騰し始める。

鍋を覗くと薄い金色のスープに色とりどりの野菜と薄切りの肉が

詰まっている。

肉は恐らくいつもの魔物のものであるう。

「わぁ、おいしそうですね」

「だろ。そのまま食べてもいいがこれをつけて食べるのも美味いぞ」

そう言うとアロルドは幸助とサラの前に取り皿を二枚ずつ置く。

片方の皿には赤いソースがたっぷりと入っている。

アロルド自慢のトマトバジルソースだ。

「肉が足りなくなったら言ってくれ。ただしこの季節トマトが高いからソースはそれだけな」

そう言い残すとアロルドは厨房へ戻る。

「いただきます」

「フーフー。ハフハフ……。おいひいへ」

「うん、やっぱり寒い日は鍋に限るや！」

その後、鍋が空になるまで幸助とサラは談笑しながら舌鼓を打つ。来店した他の客に「これは何？」と尋ねられた時に、抜かりなく宣伝をしておいたことは言うまでもない。

## 6・久しぶりの……

「あら。久しぶりじゃないの、コースケ」

「お久しぶりです、ルティアさん」

「こんにちは！」

アロルドの店でプチ鍋パーティーをした翌日。

幸助は久しぶりに『ルティアの小麦店』を訪れた。

約束通りサラも一緒だ。

晩秋ということもあり三人とも服装は厚手だ。

ルティアは更にエプロンをつけているということもあり、その魅力的な部分は隠れてしまっている。

幸助が早く夏が来るといいのにと思ったことは、サラには内緒である。

「オリーブオイルの販売が軌道に乗ったとたんに来てくれなくなるんだから。もう私のことなんて忘れちゃったのかと思ったよ」

そう言いながら右手で紫色のしっとりとした髪をかき上げる。

定期的にあロルドの店へは納品しているルティア。

サラとは何度も顔を合わせていたが、幸助とは数ヶ月振りである。

「もちろん忘れてなんかいませんよ。あの後ちょっと忙しくなってます」

反射的に言葉を返す幸助。

ルティアとの仕事が落ち着いた後、確かにホルガーの武器屋で仕

事をしていた。

しかし、四六時中かかりつきりになっていたわけではない。  
ちよつと寄る時間くらいあった。

しかし幸助は用事がないと人に会いにいかないタイプである。  
だからぼつちになることが多いのだが。

「そうなの？ ま、いいや。それで今日はどうしたの？」

その言葉で幸助はカバンから魔道コンロを取り出す。

小型化に成功したので、持ち運びも便利である。

それでもずつしりと重みはある。

ただ、鍋を乗せた時の安定感を考えるとこれ以上軽くするのは危険である。

「これ魔道コンロなんですけど、お店で実演販売してもらえないかなあと思ひまして」

「あら、ずいぶんと可愛いサイズね。これでちゃんと沸かせるのかしら？」

「もちろん。機能は折り紙つきですよ」

「それで。実演販売すると私にはどんないいことがあるのかしら？」

商売人としてもつともな質問である。

実演販売という手間に対する対価が気になるのは当然である。

「売上が増える……かもしれせん」

「かも、なんだね」

「家庭ではあまり馴染みのない魔道具ですからね。オリーブオイルの時みたいに試行錯誤は必要になると思います」

オリーブオイルの時は三種類の商品をラインナップし、パンと合わせて試食販売を行った。

ちなみにルティアは今でも月に一回程度、試食販売を行っている。

「それで利益は？」

「本体は大銀貨八枚という小売価格に設定したんですが、利益は少ししかありません」

「残念。美味しい話じゃないのね」

「最初は、ですね。使い続けるにはこの魔石が一月に一個くらい必要になります。これは薪と同じく継続的な利益が期待できるんです」

「なるほどねえ」

もちろん魔石の消耗速度は使用頻度で変化する。

一ヶ月に一個はあくまでも目安である。

うーんと唸りながら腕を組んで考えるルティア。

厚手の布越しであるが双丘が強調される。

ルティアは実演販売がうまくできるか心配しているのだ。

未だに試食販売も苦手意識が残っているからだ。

「うん。決めた。世話になったコースケからの頼み事だしね。やってみるよ」

「ありがとうございます！」幸助とサラがハモる。

その後幸助は店頭の台にコンロを置くと、簡単な操作説明をする。

「ここに入れてください」

「えっ、うまく入らないよ？」

「そこじゃなくてこっちです。こことここを合わせて。そう……」

「あっ」

手の奥からカチツという音がする。

コンロに魔石が装着された音だ。

向きが分かりにくそうだったので改善の余地ありだ。

「はい。魔石はそれで大丈夫です。あとは火力に応じてこのスイッチを押すだけです」

「ふうん。簡単なのね」

手をコンロの上にさっとかざし、温度を確かめるルティア。

「温かいね。当たり前だけど」

「はい。家庭で使う分には十分な出力もありますからね」

コンロのスイッチを切り今後の予定を話そうとしたところ、一人の女性がルティアに近づく。

客のようだ。

「ルティアちゃん。いつものオリーブオイルちょうだい！」

「あ、はい。ちょっとお待ちくださいね！」

ルティアは客から瓶を受け取ると小走りに店の奥へ行き、オリーブオイルを詰める。

「お待たせしました」

「はい。銀貨二枚ね」

「ありがとうございます！」

どうやら中級品のオリーブオイルが売れたようだ。



客が帰るとルティアは幸助とサラの近くに戻って来る。

「オリーブオイル、順調そうですね」

「おかげさまでね。サラちゃんとも買ってくれるしね」

「ね！ いつも持ってきてくれてありがとう！」

「いえいえ。こちらこそいつも大量にありがとうね」

アロルドは毎月一定量の最高級オイルをルティアから購入している。

ペペロンチーノなど、それがなければ作れない料理があるほどだ。アロルドのプライド的に。

「あ、そうだ！ ねえコースケ、聞いてよ！」

「うん？ どうしました」

「オリーブオイル、なんと今じゃ領主様の屋敷にも卸してるんだよ。すごいでしょ」

胸を張るルティア。

もちろん幸助は知っている。

その領主本人とも会食したくらいなのだから。

「すごいですね！ 大躍進じゃないですか」

「でしょでしょ」

盛り上げることを優先して初めて聞いた体を装う幸助。

幸助の中では大人の対応をしたつもりである。

これが吉と出るか凶と出るか、今は誰も知らない。

「ウチの店もアンナさんが来てくれたもんね」

対抗するサラ。

大人の対応が裏目に出るかもしれない。  
にわかに慌てる幸助。

「アンナさんって領主令嬢のかい？ よかったじゃない。コースケと関わると面白いことがいっぱいだね」

「うん！」

（ルティアさん。大人の対応で助かりました！）

ホッと胸をなでおろす幸助。

話題がそれてしまったので軌道修正する。

「それで、販売方法についてですが……」

それから幸助はルティアへ予めニーナと決めておいた諸条件を説明する。

具体的な魔道コンロや魔石の卸価格。

修理の受付や代替品について。

発注してからの納期。

売れてから仕入代金を払う委託販売でよいことなどである。

「ではルティアさん。また明日来ますので今夜はユーザーとしてコンロを使ってみてください」

「わかったよ」

「また明日！」

そして翌日の午前中。

まだ早い時刻に店内の隅に置かれた小さなテーブルに三人が集まる。

もともと二人用のスペースに三人だ。

それぞれの肩が触れそうである。

テーブルの上には魔道コンロが置かれている。

「コースケ。コンロ使ってみたけど、これは便利ね！」

「よかったです。販売する人が便利って思えないものは売りにくいですからね」

そう言いながら幸助は社畜時代でなく就職する前にしていたアルバイトを思い出したのだった。

それぞれ職責に応じてノルマが課せられ、好きでもない季節商品の販売をしたのだ。

もちろん仕事だからちゃんと取り組んだが、気乗りしなかった記憶がある。

「それで、どうやって実演販売しようか？」

「サラ、何かいいアイデア考えてきた？」

「うん！ 考えたよ、コースケさん」

そう言うとサラはポケットからしわくちゃになった小さな紙を取り出す。

以前にも見たような光景だ。

「えっとね、ルティアさんの店は食品を実際に調理する姿が見せられるといいと思うの」

「うん。それはいいと思うな」

「で、何を調理するのかな？」

「えっとね……、お肉とか？」

他に拳がったのは芋を茹でてオリーブオイルと一緒に試食販売する。

屋台のようにスープを販売する。

取扱商品の豆を茹でてみせる、といったところだ。

「でも、そうするとコンロにかかりつきりで他のことができなくなっちゃうそつだよ」

「うーん、確かにそうかも……」

メモをしまうサラの顔には少し影が差す。

ルティアに現場のことを指摘されて考えが甘かったと感じたからだ。

「サラのアイディアはどれもいいと思うよ。コンロの機能がすぐにわかるしオリーブオイルのことまで考えられたからね」

「ほんと!?!」

「うん。ただ、やっぱり屋台ではないから、食べてもらうのはルティアさんの負担になっちゃうかな」

「そつか。そつだよね」

「僕は鍋から湯気が上がっててお湯が沸いてるってのが一目瞭然になれば十分実演になると思うんだ」

開発期間が短かったため、また時間には余裕がある。

トライアルアンドエラーを繰り返せばいいと幸助は考えている。

「ここで決めたことが絶対ではないし。ルティアさんの負担になってもいけませんから、取り敢えずただのお湯だけでやってみませんか?」

「うん。それなら気張らなくていいしやり易いよ」

その後幸助たちは今後のスケジュールについて話し合う。  
といても電話もメールもない世界だ。  
量産品が完成したら店に届くように手配するといった大雑把な話  
だけを交わすと、幸助とサラはルティアの店を出る。

ルティアの店を出ると二人は『アロルドのパスタ亭』へ帰る。

ギィ。

重厚なドアを開ける幸助。

厨房にいるアロルドの姿を見つけると開口一番に尋ねる。

「アロルドさん、できてますか？」

「おう。できてるぞ。でもこれ以上増やすなよ。カルボナーラを作  
れる量が減っちゃう」

いつもより小さめの木箱を受け取る幸助。

中身はごく一部の人にはお馴染みとなったケーキである。

この街では貴重な乳製品。

まだ十分な量は仕入れられないようである。

メニュー入りもしていない。

ただ、いざとなったらケーキを武器に牧場主の奥さんを取り込む  
作戦も幸助は考えている。

「じゃあね、コースケさん、行ってらっしゃい！」

サラに見送られ幸助は店を出る。

通りを西へ進むと大きなロータリー式の交差点を左折し、南に下る。

ここ最近では馬車に揺られながら北に行くことが多かったが今日は反対の方角だ。

冒険者ギルドを通り過ぎ、更に歩くこと十数分。

剣と槍が交差する看板を掲げた店の前に着く。

そう、ホルガーが経営する武器屋である。

「こんにちはー」

「いらっしやいなー！」

カウンターの奥からひよこんと顔を出すパロ。

しっかりと父であるホルガーの手伝いをしているようだ。

「あ、コースケお兄ちゃん。久しぶりなのー！」

「パロ、久しぶりだね。ホルガーさんはいるかな？」

待っててなのと言いつつ残し、トテトテと工房へ向かうパロ。

店内を見渡すと見慣れた初心者向けの槍の横に、小ぶりの剣が置かれていた。

初心者向けの剣も出来上がったのであろう。

二・三分待つとパロがホルガーを連れて戻って来る。

「久しぶりだな」

「お久しぶりです、ホルガーさん」

晩秋で気温は低いがホルガーは半そで一枚で首にタオルをかけている。

最近は毎日休む間もなく工房で作業をしているのだ。

「すみません、忙しかったですね」  
「いや、問題ない」

身近な挨拶を交わすと幸助は手土産のケーキを取り出し、カウンターに置く。

「これ、お土産です」  
「何だ？」

「ケーキというお菓子です。甘くておいしいですよ」

お菓子という言葉にパロの耳がピン！と張る。

「お菓子！ パロ食べたいの！」  
「はい。どうぞ」

ふたを開けてケーキを取り出し、パロの前に置く幸助。すぐに食べられるよう、既にカットされている。

「わぁ、真っ白なの！」

カウンターのの中からゴソゴソとフォークを取り出すと、そのまま食べ始める。

「ふわふわで甘いの！」  
「おいしいでしょ。ハンバーグを食べたお店覚えてる？ そのお店のアロルドさんが作ってくれたんだよ」  
「ありがとなの！」

ほのぼのとした時間はしばし続く。

ちなみにホルガーは甘いものが苦手だったようで、ホルガーのケ  
ーキもパロの胃に収まることとなった。

その後、幸助はホルガーに魔道コンロについての相談をする。

護衛などで長旅をする冒険者たちの需要はないか聞くためである。

ホルガーの回答は、火をたくことは魔物除けになるため微妙との  
ことであった。

ただ、実際にはどう転ぶかわからない。

取り敢えず目立つところに陳列しておくということでの日はお  
開きとなった。



## 7・動機づけ

「うわあ、今日は寒いなあ」

宿を出るとブルツと身震いする幸助。  
乾いた風が頬をピリピリと刺激する。

試作品が完成してから数週間後。

もう季節は冬である。

空は晴れているが日の出時刻が遅いため、外はまだ薄暗い。  
道行く人々も皆コートをしっかりと着込んでいる。  
太陽が高く昇るのを待ち遠しく感じる幸助であった。

「コースケさん、お待たせ！」

幸助が振り返ると胸に手を当てながらハアハアと息を切らしているサラの姿があった。

服装は地味なグレーのコートに真っ白のマフラーだ。

「そんなに慌てなくてもよかったのに」

「寒くて布団からなかなか出られなかったから……」

（その気持ちはよくわかるな。

これだけ冷えてくると僕もダメ人間製造機、いや、コタツが恋しいぜ。

コンロと同じ熱操作だから、ニーナさんすぐに作ってくれるんじゃないかな）

「コースケさん、どうしたの？」

突然考え込む幸助にサラが声をかける。

「いや、新しい魔道具のアイディアが浮かんでね」「すごい！ それはどんな魔道具？」

肩を並べて歩きながらコタツの説明をする幸助。向かう先は『ルティアの小麦店』である。

魔道コンロの量産品が届いたという知らせがあったので、実演販売を行うために行くのだ。

ちなみにアロルドの店では鍋料理のレギュラー販売が始まった。

そのために、立て看板の作成から取り組んだ。

昼はいつも通りのトマトバジルパスタ。

夜は鍋料理の絵という具合に昼夜で分けたのだ。

実際の販売は、売れない日の方が多かった。

常連が物珍しさで注文してくれるだけである。

この街では鍋料理の文化が無い。こればかりは仕方ない。

それでも一組注文してもらえれば、来店客全員の眼に触れることはできる。

そして拘りの強いアロルドは飲食店で魔道コンロを売ることに難色を示した。

ハンバーグや鍋まで始めたくらいだから何でもありじゃないかと聞くと、一貫性が無くなるとの回答が返って来たのだ。

確かに今のところアロルド自慢のトマトバジルソースが合うものだけがメニュー入りしている。

そのため、問い合わせがあった場合はルティアの店を宣伝しても

らことにした。

「あ、もう着いちゃったね」

寒いとはいえ、会話をしながらの移動は時が経つのが早い。

二人はルティアの店へ到着した。

道中サラに力説したコタツの魅力も十分に理解してもらえたようである。

まだ開店前なので店は閉まっている。

裏口へ回ると幸助はドアをノックしながら声をかける。

「おはようございます、幸助です！」

はいという声とともに二階から足音が近づいてくると、ドアが開く。

「おはよ。今日はまた一段と寒いね。さ、入って」

ルティアに促され裏口から入る幸助とサラ。

小麦の匂いが充満する薄暗い倉庫を通り抜ける三人。

在庫は以前見た時よりもだいぶ減っている。

仕入れと販売のバランスが取れ、適正量に調整できたのだろうと幸助は考える。

「あ、これですね。量産型の魔道コンロ」

幸助は店内に積まれていた木箱の姿に気付く。

そこには薄型の木箱が十個積まれている。

「こつちが魔石だね！」

サラの手には薄手の布袋に入れられた魔石が取られている。袋を開けて中を取り出すサラ。

小さな手のひらにルビーレッドに光る魔石が煌めく。

「それで、今日から販売を開始するのよね？」

「はい。その予定です。ルティアさんは大丈夫ですか？」

「ええ、もちろん」

ルティアはコンロが入っている木箱に視線を流すと続ける。

「それにしてもこの在庫、どれだけの期間で捌けるのかしらね」

「うーん、どうでしょう。全くの未知数ですね」

「あら。幸助でも想定はできないの？」

意外という目をするルティア。

一般家庭にはほとんど普及していない魔道具というカテゴリの商品。

幸助はそれがどれだけ受け入れられるのか心配しているのだ。

「便利なのは間違いないんですが……。その対価に大銀貨八枚の価値があるっていう判断をしてももらえるかは分かりませんね」

「ふーん、そっか」

「だから今日は僕とサラが中心になって実演販売をしますね」

武器よりはイメージしやすいものの、コンロも幸助自身が使う商品ではない。

実演販売を通してまずは感覚を掴もうと思っているのだ。

「いいの？ 外は寒いよ」

以前オリーブオイルの試食販売をした時は、ほとんど店内から様子を見ていた幸助。

その時はルティアのためにそうしたのだが、今回はお願いする立場だ。

「はい。大丈夫です」

「わかったよ。さて、そろそろ時間だしお店あけるね」

その声で開店準備に入るルティアたち。

店頭を大きく開けると冷たい風が店内に注ぎ込む。

夏と同様冬も商業街の小売店は開口部が広めである。

「うっ、まだまだ寒いなあ」

まだ太陽の高さはかなり低い。

ルティアはいつもの開店作業を行い、幸助とサラは店頭に実演セツトを設置する。

試食販売でも使用した台に魔道コンロを乗せる。

そしてその上に水が半分くらい入った鍋を置く。

鍋はルティアが普段使用している物だ。

使用感に溢れているがそれでいい。リアル感が伝わるから。

「早くコンロつけよ！ 暖まれるからさ」

「あはは、そうだね。本来の目的と違う使い方だけどとりあえずスイッチを入れようか」

そう言いながらコンロのスイッチを入れる幸助。

もちろん火力は強である。

「暖かいね！ コースケさん」

早速コンロに手をかざすサラ。

その姿を見ながら幸助は中学生の頃を思い出す。

理科の実験でアルコールランプに手を向け「ファイア！」とやって先生に怒られたことがあるのだ。

数分間加熱すると鍋の底からプツプツと小さな泡が出てきた。

それが大きな泡になり沸騰すると、水蒸気は真っ白な湯気となり青い空へ立ち昇る。

「うん。これだけ盛大に湯気が拳がっていると目立つな」

「そうだね！」

幸助はコンロの強さを弱にする。

デモ用の魔石はメーカー支給だが、無尽蔵にあるわけではない。

魔石の節約は大切である。

「さてと。サラ、始めようか」

「うん！」

幸助とサラは魔道コンロを挟み通行人へ声がけを始める。

「魔道コンロの実演をしています。よろしかったら見ていってくださいー！」

精一杯声を出したつもりだが幸助の声に反応は無くそのまま通り過ぎてしまう。

様々な店が軒を連ねる界限である。

声かけの競争も熾烈である。

幸助の声は雑踏にまぎれてしまったようだ。  
今度はサラが声を張る。

「料理に便利な魔道コンロです！」

幾人かへは声が届いたようでチラツと声の元　サラを見る。  
そしてその中の一人がコンロの前にやって来る。

「何の実演だつて？」

「魔道コンロという魔道具です」

「ふうん……。で、魔道具ってのは何？　おいしいの？」

（そこから説明が必要だったのか！）

幸助は頭を抱える。

「えっと、魔力を動力源にした便利な道具のことです」

「ふうん、食べ物じゃないんだ」

そう言い残すと立ち去ってしまった。

ちょうど入れ替わりで様子を見に来たルティアがやって来る。

「お客さん第一号を逃しちゃいました」

「ああ、あの人ね。試食の時だけ必ず来る人だよ。気にしない、気にしない」

気を取り直して声かけを続ける二人。

ターゲットである主婦に興味は持ってもらえるものの、なかなか販売には結びつかない。

昼が過ぎ、更に道往く人の影が長くなるとルティアは店を閉める。  
冬の営業時間は短い。

「はあ、疲れた。物を売るって大変だなあ」

「もー、コースケさんって意外と体力無いんだね！」

「うっ……」

「お疲れ様、二人とも。はいこれ、暖かいお茶」

ルティアから差し出されたお茶を無言で飲む幸助。

結局初日は一台も売ることができなかった。

想定していたとはいえ、売れないのは精神的にも疲れるものである。

そして翌日も初日と同様の結果になった。

「やっぱり高額品はそうそう売れませんね」

「そうみたいね」

片手で腰を押さえながら暖かいお茶を飲む幸助。

サラの顔にも疲労の様子が窺える。

明日もこのままでよいものかと幸助が悩んでいると、ルティアが口を開く。

「それで明日は月イチの試食販売の日だけど、どうする？」

「あっ！ それなら私、キノコのオリーブオイル煮がいいと思う！」

サラの言葉に幸助も大きな反応をする。

「それいいね！ オリーブオイルも試食できるしコンロも使えるし」

「それなら注文しておいたパンも使えるね」



マンネリ化してきた試食販売に変化がつけられる。  
ルティアも賛成のようだ。

そして翌日。

幸助とサラは早朝の市場で食材を調達すると、試食販売の準備を始める。

フライパンにオリーブオイルを張り、唐辛子、にんにくを入れコンロのスイッチを入れる。

少し待つと買って来たばかりのキノコとアロルドの店から持ってきたベーコンを少しだけ入れる。

最後に塩で味を調整すれば出来上がりである。

サラの手つきは慣れたものである。

ルティアは試食用の小皿とパン、木串を用意している。

幸助はその様子をぼうつと眺めている。

フライパンから香りが立ってくると、近くを通る人の足が止まる。  
ルティアが声をかける。

「今日は試食販売の日ですよ、いかがですか？」

「あら、もう一カ月たつのか？ 歳をとると時間が経つのが早いねえ」

「奥さんだったら冗談をつ。さ、食べてみてください」

ルティアが客と会話している間にサラが用意した小皿を渡す。

「まあ、オリーブオイルを贅沢に使って普通のキノコもこんなに美味しいのね」

「そうなの。ちょっと特別な日にかがかしら？」

人が人を呼び、瞬間に最初に用意した試食は無くなってしまった。

何人かは魔道コンロにも興味を持ったようで、幸助がその説明をする。

新しい試食を用意しているその時、一人の客が幸助に声をかける。

「あの、ルティアちゃんいるかな？」

「はい。いますよ。呼んできますね」

実演初日に幸助がコンロのデモンストレーションした客だ。

店の奥にいたルティアを呼ぶ幸助。

「あ、ミリアさん。いらっしやいませ」

常連客のようである。

「あの魔道コンロ、どうしようかなと思ってね。相談してきたの」

初めて具体的な商談のようだ。

幸助はルティアと客との会話を聞き洩らさないよう、耳をダボにする。

「コンロ、気になりました？」

「うん。でもね、最後の踏ん切りがつかなくて……」

どうやら初日に幸助のデモを聞いた後、二日間悩んでいたようである。

ルティアはユーザー目線で動機づけをする。

「重い薪を買いに行かなくてもよくなりますよ」

「うーん……」

「火事になりにくくなりますよ」

「でもなあ……」

「いつも家事を頑張ってる自分へのご褒美に」

「……………」

「……………」

「……よし、決めた！ 思い切って買っちゃおうかしら」

心の琴線に触れる言葉は人それぞれである。

いろいろ並べ立てたルティアの作戦勝ちである。

財布から金貨を一枚取り出す客。

普段から金貨を持ち歩くような人は少ない。

恐らくここに来る前から買うことを決めていたのだろう。

強引になるのはよくないが、時には迷っている人の背中をそっと

押してあげることでもある。

その先に必ず便利な未来が待っているのだから。

「ありがとうございます！」

三人に見送られ、客は来た道を帰る。

「あ、そうだ。購入者インタビューしてみよう」

突然思い立った幸助は、今しがた購入した客を追いかける。

なぜ購入してくれたのかという客の意見は、今後の販促に活用できるからだ。

「すみませーん！」

「ん？ 私かい？」

「はい。ちよつとだけお時間宜しいでしょうか？」

「ああ、ルティアちゃんのお手伝いさんね。どうかしたのかい？」

「もしよろしければ、コンロの購入の決め手を教えて頂いても宜しいですか？」

幸助の言葉を聞くと購入者の女性は視線を遠くにやる。

「そうね……本当に迷ったわ」

「ですよね。安くない買い物ですし」

「ええ。昨日主人と話したらね、私が便利になるんだったらいいんじゃないかって。それに……」

「それに？」

「新しい時代のおとずれだってさ。それで『乗るしかない、このビツグ エープに！』って言ってたわよ」

どこかで聞いたようなフレーズに苦笑する幸助。

世界は違えど購入の動機は同じようだ。

「絶対にいい買い物だと思います」

「そう？ 使うのが楽しみだわ」

「本当にありがとうございます！」

高額品を購入した後は「本当に買ってよかったのか」という想いが頭をよぎることもある。

だから、購入したことを肯定してあげること時には必要である。

閉店後。

「コースケ、お疲れ様」

「お疲れ様です。これで道筋が見えてきましたね」

「そうね。今日はいつも以上にオリーブオイルも売れたし。大収穫よ」

試食販売は大盛況で幕を閉じた。

結局コンロの販売台数は一台だけであつたが、大きな一歩である。

「またよろしくね」

「ではまた！」

今後の予定を打ち合わせし、ルティアの店を後にする。

肩を並べ歩く幸助とサラ。

二人の足取りは軽やかだ。

そんな二人の下にフワフワと白いものが舞い降りて来た。

「わあ、雪だよ！ コースケさん」

足を止め両手を前に出し雪を受けとめようとするサラ。

なかなかうまく受けとめられないようである。

「よし、僕が先にキャッチしてやる」

「私が先だよ！ コースケさんに負けないもん」

仲睦まじい二人の姿はアロルドの店へ帰るまで続くのであつた。

## 8・領主の館にて

魔道コンロの販売を開始してから二ヶ月が経った。

販売数は爆発的とは言えないまでも、順調に推移している。

まず『ルティアの小麦店』について。

最初の一台こそ試食販売の日に売れたが、その後は試食なしでも売れるようになった。

そのため、その後の実演はお湯を沸かすだけに留めている。

消耗品である魔石も少しずつ流通するようになっていく。

購入者に聞いてみたところ、ほとんどの人が実演を見てすぐにも欲しいと思ったそうだ。

商品力は間違いないということの何よりの証左である。

しかし価格が高い。

そのため一定期間悩んだ末、購入へ至るパターンが多かったようだ。

幸助はこの成果を引っ提げ、早速横展開を始めた。

とにかく魔道コンロの露出機会を増やし、事業継続が認められるだけの実績を作るためだ。

ここで言う横展開とは、魔道コンロとその販売方法をセットにして小売店に卸すことである。

ルティアの店で研究した実演販売方法と効果の高かった口説き文句がセットの対象だ。

それにより、販売方法を工夫するための負担を最小限にとどめることができる。

もちろん、反応をフィードバックしてもらいブラッシュアップすることも続けている。

手始めに、アロルドの伝手で包丁を販売している鍛冶屋に販売を依頼した。

キッチン用品つながりということもあり、すぐに受け入れてもらうことができた。

そして横展開した手法が他の店でも有効ということが判明した。主に店主の奥さんが実演を行ったのだが、ルティアの店同様の口説き文句が効いたようである。

反面、ホルガーの店での売上は芳しくなかった。

まだ冒険者への需要を開拓することはできていない。

価格が高いということもあるが、店舗の特性上実演販売が向かないということも原因の一つであろう。

そして幸助は、商業ギルドを通じ販売代理店の募集をかけた。

魔道コンロは、感度の高い商人にはすでに注目されていたため、かなり多くの手が挙がった。

メーカーが公営ということを得られる信頼感もそれを後押しした。

幸助はアンナ、ニーナと共に手が挙がった店舗の中から十店舗へ卸すことを決めた。

決め手は、他のコンロ販売店と距離が近くない、実演がちゃんとできそうという軸である。

各店舗への納品や説明、手伝いなどはニーナの魔道具店に勤めている従業員と手分けして行った。

それでもこの作業は幸助には相当の激務であった。

今まで増加傾向だった体重が減少したほどである。

もつとも、ぽっこり出ていた腹が引き締まって来たのは幸いである。

そうこうしている間に、タイムリミットである三ヶ月はあっという間に経過してしまった。

新年を迎え、寒さも一番厳しくなる季節。

領主の執務室には領主であるアルフレッド、令嬢のアンナ、魔道具店店長のニーナ、そして幸助が集まっている。

豪華なソファーに領主親子と向かい合って座る幸助とニーナ。奥にある執務机には相変わらず大量の書類が山積みになっている。暖炉には火がくべられており、時おり薪がパチツとはぜている。

ニーナはここ三ヶ月の取り組みをまとめた報告書をアルフレッドへ渡す。

報告書に目を通す姿を神妙な面持ちで見るニーナ。

あらかたの情報は事前に受け取っているアルフレッド。

さっと目を通すとニーナへ視線を送る。

ゴクリと生唾を飲み込むニーナ。

「抱えていた部品の在庫はかなり現金に変えることができたようだね」

「はい。不良在庫になっていた旧型の魔道コンロからも部品流用しましたので」

「本格的に売り出して二ヶ月程度でこれだけ市民に受け入れられるなんて、想定以上だよ」

「フッフ。ありがとうございます」



次にアルフレッドは幸助へ視線を移す。

「コースケ。この度の働き、心から礼を言う」

「とんでもないです。僕は自分のできることをしただけですから」

謙遜する幸助。

ニーナを始めとした技術者集団が改良に成功したからこそできたことだと思っている。

しかも魔道具店の経営はまだ黒字化していない。

すべきことはまだ沢山ある。

「それにしてもあのアイディアには感心しきりだったよ」

「アイディア、ですか？」

今回の改善でも様々なアイディアを出した幸助。

どれのことかと考える。

「魔石を専用品にしたってことと省コスト化するってこと。素晴らしいアイディアだったよ。魔道具開発の常識をあっさりと変えちゃったからね」

その言葉を聞いて、アルフレッドもニーナと同じく技術者肌だったなと思いつく幸助。

今までの魔道具はとにかく高出力を追求する傾向にあり、技術者たちもそれが当たり前と思っていた。

「しかも魔道具というものは贅沢品という認識だから、お金に余裕のある貴族や富裕層しか買ってくれないものだと思いついていたんだ」

「確かに店舗も貴族街にありますしね」

勤めている人たちも皆それなりの家の者たちである。

最初から富裕層をターゲットにしていたのだらうと幸助は考えていた。

「市民の方々が中心となって購入してくれるなんて、僕の夢だった町おこしに一步どころじゃなく十歩以上近づいたよ」

「過分なお言葉、ありがとうございます」

座ったまま小さく頭を下げる幸助。

「それにコースケさん、噂によるとコンロを活用できる鍋料理という料理も開発されたそうではありませんか」

いちど食べてみたいわと続けるアンナ。

それを聞き苦笑しながら幸助は答える。

「鍋料理は典型的な庶民向けの料理ですから、アンナさんには似合わないと思いますよ」

「あら。市民の皆様が普段から親しまれている料理を食べることも、また私の仕事ですわ」

「そ、そうですね……。でしたらまたアロルドさんの店へお越しの際は是非」

「あはは、アンナは相変わらず食ることが大好きなんだから」

実際には鍋料理はそれほど市民に浸透していない。

どこからその情報を仕入れたのかと感心する。

幸助とアンナが会話をすると、かなりの確率で食事の話題にそれる。

その後もレッドボアの赤ワイン煮込みやケーキの話題で軽く盛り上がる室内。

しかし、場の空気とは似つかわしくない表情をした人が一人いる。ニーナだ。

「盛り上がってるところ申し訳ないのですが、領主様。よろしいですか」

「なんだい？」

「在庫が現金化されて来月の資金繰りは大丈夫になりました」

「そのようだね」

「しかし、次の生産は在庫の部品で賄えなくなりますから来月からは仕人が発生します。魔石から継続的な収益が発生するまでに資金が尽きてしまいます……」

魔道具店には多くの従業員が勤めている。

その給料だけでも相当な資金が必要となる。

今までは領主からの資金投入が続いていたのでやりくりできていたが、それも終わってしまった。

売上げを稼ぎ出さなければ資金繰りが行き詰ってしまうのだ。

静かになった室内に暖炉の薪がバチツとはぜる音だけが聞こえる。

「ああ、そのことなら心配しないで」

「……とおっしゃいますと？」

きょとんとした表情を浮かべるニーナ。

アルフレッドは笑顔を作りながら答える。

「もう決めたんだけど、これから半年分の運転資金を融資することに決めたよ」

アルフレッドは悩んだ結果、追加の資金投入することに決めたのだ。

当初は今まで通り返済不要の資金投入をしようとした。

しかし側近から反対が上がった。

騎士団の武器のように、また他へしわ寄せがいくのを心配したのだ。

そのため、今までのような提供ではなく融資という形に落ち着いたのだ。

「せっかく花開きそうな魔道コンロを見捨てるなんて僕にはできないからね」

「あ、ありがとうございます!!!」

身を乗り出しアルフレッドの両手をガシツと握るニーナ。

リストラという苦渋の決断をしなければと考えていたのだ。

辛い宣告をせずに済むことに安堵する。

「それで、今のところ資金以外に何か困ったことや気づいたことはあるかな？」

アルフレッドの質問に幸助が答える。

「恐らくコンロが流通するにつれて何らかの問題が発生してくると思います」

「それはどんな問題？」

「開発者側の想定しえない使い方による事故や故障などです」

なるほどねと言いながらアルフレッドは頷く。

幸助は初期不良や継続使用による劣化など、具体的なことまで考

えている。

しかし、発想力豊かな使用者がどのような活用をするかは未知数だ。

日本でもカセットコンロを二つ並べて鉄板焼きをしたことにより、爆発する事故が起きている。

ちなみに模倣品については、参入障壁の高い事業のため今のところ心配していない。

「いち早くそれらの情報を把握して、商品の改善を続けることが必要になってくると思います。それと……」

「それと？」

「今後事業を安定されるためには魔石の安定供給が肝要となります」

せつかく薪代と競えるくらい省エネ化したのに、魔石の供給量が減り価格が上がってしまったことを幸助は心配していた。

「そこは心配しないでいいよ。領内から一定量の採掘ができることは確認済みだから」

「魔石が採れるからこそお父様は魔道具を伸ばそうとしたのですよ」

「あれ？ コースケは知らなかったんだ？」

どうやら知らなかったのは幸助だけのようである。

魔石は魔力の溜まっている場所を掘ることで採掘できる。

ただし魔力の溜まる場所には魔物がつきもののため、採掘には相應のコストが発生する。

「あ、そうなんです……。なら、安心です」

ガクツと項垂れる幸助。

なら実演販売でチマチマせずもつと湯水のように魔石を使えばよかつたという思考が頭をよぎる。

「それでね、今後の方針なんだけど」

アルフレッドは幸助とニーナの顔をそれぞれ見ると話を続ける。

「王都に魔道具の販売専門店を出すことに決めたとよ」  
「王都にですか？」幸助とニーナが八モる。

マドリー王国の王都は、幸助たちのいるアヴィーラ伯爵領から馬車でおよそ七日間の距離にある。

人口はおよそ三十万人。アヴィーラ伯爵領のおよそ六倍だ。規模は違えど東京と同じく流行に敏感な人々が多く集まっている。最先端の魔道具を売るにはもってこいの街だ。

幸助も召喚後、アヴィーラ伯爵領にたどり着くまでの道中で数日間滞在したことがある。

賑わいはこの街の比ではない。

「まだ店舗の選定もできてないから数カ月先になるけどね」

「王都を通して国中に広めることができるのですね。フフッ」

「それで、ニーナには王都の店を任せようと思うから。また苦労を掛けるけど、よろしくね」

融資に続いてもたらされた良いニュースに不敵な笑みを浮かべるニーナ。

「コースケ、引き続き君の力も借りることになると思っけど、よろしく頼むね」

「はい。こちらこそよろしく申し上げます」  
「コースケさん、私からもよろしくお願い申し上げます」

その後四人はケーキの話題でひとしきり盛り上がる。  
しかし食べたことの無いアルフレッドは置いてけぼりだ。

今回はアルフレッドにもお土産として持つてくることを約束し、  
幸助とニーナは領主の館を出る。

「ニーナさん。魔道具販売、どんどん発展していきそうですね」

「フフツ、そうだね。これからもいろいろと世話になるよ。よろしくね」

「こちらこそ！」

送迎の馬車へ向かい歩く二人。

気温は低いが柔らかな陽光が二人の背を優しく照らす。

こうして幸助は魔道具店の改善を行い、廃業の危機から救ったのだった。

しかし市場への本格的な普及はまだこれからだ。

魔道具店の改善は続く。

## 8・領主の館にて（後書き）

これで第4章は終了です。

お読みいただきありがとうございます。

魔道具販売はこれだけでは終わりません。

普及率が上がるとまた違う問題が発生するのは世の常。

次章では別の店舗改善を行い、その次あたりに魔道具店がまた登場します。

（5 / 14 追記：次の次の章になりそうです）



## 番外編：新年会

時おり雪がちらつく冬の午後。

ひらひらと舞い降りる雪は石畳へ落ちるとその姿を保つことなく小さな染みとなる。

いつもであればひっきりなしに人々が行き交うメインストリート。しかし今日はその賑わいが無い。

時おり外套を着込んだ人が早足に通り過ぎるだけである。

暦は一月一日。

新年の祝日である。

ちなみにこの国の新年は、暦が新しくなった一月一日のみが祝日となるだけである。

日本でいうところの冬休みは存在しない。

祝祭日は新年以外にも存在する。

初代国王の生誕記念日や建国記念日、収穫祭などだ。

特に収穫祭は大きく盛り上がる。

小麦の収穫が終わった夏の一週間、町中がお祭り騒ぎになるのだ。

当然、お洒落な外観のレストラン『アロルドの Pasta 亭』も休日である。

しかし、店内は暖かな賑わいに包まれている……。

「本年が我々にとって幸多き年になるよう。乾杯！」

「かんぱーい！」

「あけおめー！」

幸助はアヴィーラ伯爵領を訪れてから初めての新年をアロルドたちと共に迎えている。

本来は家族や親戚とともに新年を過ごすのがこの国の定番だ。

しかし、そうなると幸助は一人ぼっちになってしまう。

そのため、アロルドと一緒に新年会をやらないかと提案したのだ。

「コースケさん、今年もいい年にしようね！」

「うん、サラ。今年もいろいろ頑張って去年よりもいい年にしようね」

幸助はここ最近、必死に魔道コンロの販売代理店政策に走っている。

久しぶりに訪れる穏やかな時間に安堵する。

「で、コースケ。今のあけおめって何だ？」

「うん、確かに聞いたことないね。コースケさんの故郷の挨拶？」

アロルドとサラの疑問に幸助が答える。

「うん。そうだよ。あけましておめでとunggざいますの略。一般的な新年のあいさつだね」

「ふうん」

「あけおめなの！」

幸助の真似をし元気に声を上げたのは猫獣人の女の子、パロだ。

今日は父親であるホルガーと共に新年会へ訪れている。

年中無休の冒険者相手の商売に切り替えたホルガー。

しかし、流石に新年から武器屋の需要はないということで、参加してくれたのだ。

ちなみにルティアにも声をかけたのだが、新年は親戚と過ごすのが恒例とのことで、残念ながら欠席となった。

「それにしてもまさかな。新年をこんなに盛大に迎えられるとはな」「そうだな」アロルドの声に、ホルガーも続く。

アロルド、ホルガー共に、去年は幸助から多大な影響をもたらされた。

潰れかけの店を、みごとに立て直すことができたのだから。

もちろん影響をもたらされたのは店主だけでなく、サラ、母のミレーヌ、そしてパロたち家族でもある。

ごく一部、幸助の無茶振りで迷惑をこうむってるかもしれない人もいるのだが、それはご愛嬌。

「コースケさんのおかげだよ！」

「ありがとなの！」

「僕こそ、みなさん去年はありがとうございました。こんな僕が役に立てる機会をくださったって……」

「なに言ってるんだコースケ。今更謙遜なんてするなよ」

「そうよコースケ。もう仲間なんだからね」

皆の褒め殺しにポリポリと後頭部をかく幸助。

やはりこの場所が一番落ち着ける場所なんだと再確認する。

幸助自身も去年は大きな変化を体験した。

運悪くこの世界に召喚されて半年。

たまたま訪れた街。たまたま歩いていた道にバジルの香りが流れてなければこの出会いは無かったのだ。

サラの役に立ちたい。下心交じりの軽い気持ちから始まった経営

改善。

それが今では領主まで巻き込む一大事業になっている。一人ひとりの縁を大切にしろと社畜時代に先輩から教わっていたが、それにしても、である。

全てはこの店から始まったといっても過言ではない。

「しみりとした話はこれくらいにして食べましょう、これ」

「そうだね！」

「早く食べたいの！」

「そう急かすなよ。切り分けてやる、待ってる」

幸助たちの目の前には巨大な鳥の丸焼きが鎮座している。

以前幸助もランディと宿屋で食べたことのある鳥の丸焼きバージヨンである。

未だにどのような種類なのかはわかっていないが、ニワトリでないことは確かだ。

「ウチの新年はこれで始めるのが定番なんだ」

「今年のはとびつきり大きいけどね！」

ナイフを手にし鳥を切り分けるアロルド。

パリッと裂ける皮。断面から溢れてくる肉汁。

思わず生唾を飲み込む幸助。

ピクピク耳が動かし、待ちきれない様子のパロ。

皆の視線が鳥の丸焼きに注がれている。

「よし、ここが一番柔らかいからパロにやろう」

「ありがとなの！」

肉を小さく切り、腹の中で蒸し焼きになった野菜を皿に添えるとパロの前へ置く。

フォークを手にすると迷わず肉を刺し、口へ運ぶ。

「どう、パロちゃん？」

「おいひいお！」

もきゅもきゅと一心不乱に肉を頬張るパロを横目にせつせと肉を切り分けるアロルド。

その姿を見て、休日なのに働かせてしまってるみたいだなと少しだけ気にする幸助。

しかし自分の前に大きな肉が運ばれるとその考えをすぐに忘れる。

幸助に切り分けられたのはジューシーなモモ肉だ。

ナイフで小さく切ると、こんがりした皮と一緒に口へ放り込む。

「!？」

幸助は今まで味わったことの無い風味に目を見開く。

パリッと焼けた皮の香ばしさ。ジューシーな肉。

そして何より幸助が驚いたのは香草の風味だ。

「うまいだろ。普段は使わないが帝国産のハーブをたっぷり使ったからな」

「へえ、バジルだけでは無かったんですね」

「あつたり前だろ！ 何言ってるんだ、お前」

射抜かんばかり視線で幸助を睨むアロルド。

子犬のように小さくなる幸助。

「さ……、流石です」

「うん。お父さんやっぱり美味しいね！」

「ま、まあな」

サラの機転により危機を脱出した幸助。

にこりとほほ笑むサラに感謝の視線を送る。

「アロルドさん、早くこつちもやりましょうよ」

「その前に俺にも肉を食わせろ！」

幸助の視線の先にある物。

それは現在絶賛売り出し中の魔道コンロだ。

その上には土鍋が置かれている。

幸助はコンロのスイッチを「弱」にセットする。

「あ、お前つ。勝手にはじめやがったな！」

鍋が温まると予め用意されていたチーズが溶け出す。

焦って肉を食べるアロルドを放置し、幸助はゆっくりと鍋をかき混ぜる。

魔道コンロがあるからこそできる料理。

幸助の今年初のリクエスト料理。

それは、チーズフォンデュだ。

「ほら、パロ。こつちやってパンをチーズにつけて食べるんだよ」

幸助はチーズが良い頃合いになるとパンを串に刺し、チーズを絡め取りパロに手渡す。

「初めてみるの！」

「チーズフォンデュって言うんだよ。熱いから気を付けてね」

ふーふーと息をかけるパロ。

幸助は自分の分も手に取るとチーズを絡め取り、アツアツのまま口へ送り込む。

その様子を見たサラが幸助に続く。

「うん。美味しい。やっぱりこのチーズは最高だな」

「美味しいね！」

「あっ、あついの！」

どうやらパロは猫舌のようだ。

慌ててカップを手にとると、果実のジュースをクピクピと飲む。

「ほらお前ら、肉とパンばかりじゃなく野菜も食べるよ」

「はい」

それから皆、思い思いの食材にチーズを絡めて食べる。

ガタイの良いアロルドとホルガーの食欲は旺盛である。

あっという間にチーズは空になり、鶏は骨だけとなった。

「美味しかったですね」

「もう食べられないの」

腹をさする幸助とパロ。

動作は同じはずなのに幸助はオヤジ臭く、パロは微笑ましく見えるのは気のせいではないはずだ。

「まだアレがあるよ」

「アレって？」サラの言葉に幸助が聞き返す。

「もちろん、食後のデザート。ケーキだよ!!」

ケーキという言葉にパロの耳がピン! と張る。  
いつの日かと同じリアクションである。

アロルドのケーキはかなり中毒性があるようだ。

「はい、どうぞ」

ミレーヌが切り分けたケーキを皆の前に配る。

「んー、あまくてフワフワなの!」

どうやらパロにも別腹は存在したようだ。

当然とばかりホルガーの分もペロリと平らげる。

その後もお茶を飲みながらの歓談は続く。

幸助にとって、皆にとって良い一年となりそうな楽しいスタートを切るのであった。



番外編：新年会（後書き）

パロや番外編のリクエストをくださった方、  
チーズフォンデュのアイデアをくださった方、  
ありがとうございます。

## 1・隣町へ

「僕が隣町に納品に行くんですか？」

ソファーに腰かけている幸助は素っ頓狂な声を上げる。

季節は真冬。モダンな装飾が施された暖炉には火が焚かれている。

ここは貴族街。出されている茶器一つとっても上質なものが使われている。

向かい合っている眼鏡をかけた女性はフツツと笑うと幸助に応じる。

「悪いね。私たちは魔道コンロの生産に手いっぱい、猫の手も借りたいくらいなんだよ」

そう。幸助は魔道具店にいる。

店主であるーナナから、頼みたいことがあると呼び出されたのだ。話を聞くと、魔道コンロを隣町の商会へ納品してほしいということであった。

隣町とはボルトー子爵領のことである。

マドリー王国西端の町で海に面しており、人口はここよりやや少なめの三万人。

主な産業は漁業と製塩で、王都の塩はこの街が一手に担っている。猫獣人のパロがホルガーに保護された街でもある。

しかし、隣町とはいっても移動には馬車で一週間以上かかる。しかも季節はまだ寒さの厳しい冬である。

想定外の依頼に幸助は顔をしかめる。

「納品だったら僕じゃなくてもいいような気がしますが……」

幸助が言うことはもったもなことである。

両街間には荷馬車が定期的に往復している。

コンロの配達ならば不慣れが幸助が行うよりも慣れた人に任せただ方がよい。

「いや、今回はコースケじゃないとダメなんだよ」

「何故ですか？ 僕は旅に慣れていませんよ」

「今回初めて領外にコンロを売り出すの。王都の店は私たちが常駐予定だけど今回はそうじゃないでしょ」

ニーナの言葉を聞いた幸助は理解する。

「隣町の商会にも売り方を教えてほしい、ということですね」

「フフツ、話が早いね。そういうこと」

あとは現地の反応も見えてきてね、とニーナは続ける。

確かに、市場の反応を調査することも大切である。

やはり幸助が適任のようだ。

「それにしてもまた突然どうしてですか？」

「おかげで新型のコンロは販売が好調だね。その様子を知った隣町の領主様がウチの領主様と直接話をしたんだ。便利そうだからまともった数が欲しいってね」

「両領地のトップ会談があったんですね」

「そう。まずは百台。フフフツ。百台だよ。末端価格で金貨八十枚」

「そ……、そうですね」

どす黒い笑みを浮かべるニーナに若干引き気味の幸助。

末端価格という表現をされ、危険な白い粉の取引を思い浮かべる。

「道中は腕利きの護衛も頼みであるから。請けてくれないかな？」

「うーん、そうですね……」

「報酬もはずむからさ」

「それはもう十分頂いてますし……」

「水の町って言われてて街の雰囲気もいいし、何よりこの季節は海産物が美味しいんだよ」

「はい！是非行かせてください！」

海産物という言葉に幸助の心は瞬時に動く。

この世界に来てから干物や燻製以外の魚介類は食べていない。

唯一の例外は、領主の館でアンナと会食した時に出されたアクアパッツアだけだ。

「話は決まりね。はい、これ紹介状」

「さすが用意がいいですね」

「当たり前じゃない。何せ百台……。フフッ」

封蝋の施された封筒を受け取る幸助。

アヴィーラ家とは違う紋章が入っている。

恐らくニーナの家であるアロソン家のものだろうと推察する幸助。

「受けてくれてありがとね。先方にもよろしく伝えておいて」

「はい。では失礼します」

その後、日程や相手の情報などを聞いた幸助は魔道具店を後にす

る。

この世界に召喚されてから一年と数ヶ月。  
当初は目的もなく西へ向かって旅をしていたことを思い出す。  
今回の行先も西方だ。

そこは西の果てなのか。その先があるのか。どのような街なのか。  
そしてどのような食べ物と出合うのか。期待感が心の中で大きくなるのを感じる。

「久しぶりの旅、か。それはそれで楽しそうだな」

「そういう訳で、しばらくこの街を留守にしますね」

「どのくらい留守にするんだ？」

「最短だと三週間くらいだと思いますが、現地で何かあればもう少し長くなる可能性があります」

出発の前日。

幸助は『アロルドの Pasta 亭』を訪れる。

アロルドとサラにしばらく留守にすることを伝えるためである。

「それにしても突然だな」

「いや、少し前から決まっていたんですが、ちょっと忙しくて」

隣街行きが決まってから幸助は、既存の販売店へ情報収集に駆け回っていた。

現地での販売に活かすためである。

「お父さん、私も一緒に行つていい？」

「ダメだ。さすがに三週間店を空けられると困る」

「何で？ この前は店のことに気にするなつて言つてくれたじゃん！」

「あ？ 話が突然すぎる。ダメなもんはダメだ！」

その言葉に不満げな視線を向けるサラ。

確かにアロルドは過去に「店のことは気にするな」と言っていた。だが、いつもいる娘が突然三週間留守にすると言われて許せる親は少ないだろう。

「アロルドさんがダメつて言つてるから、今回はあきらめようよ、サラ」

「だつて！」

「今回はこの街でやつて来たことと同じ魔道コンロの説明をするだけで、すぐ帰つてくるからさ」

唇をかみ下を向くサラ。

ここ数ヶ月はいつも幸助と行動を共にしていた。

離れるのはどうしても嫌なようである。

これ以上話をして無理と悟つたのか、サラは席を外す。

「今回の件はさておき、アロルドさんもそろそろ弟子とかスタッフを雇つた方がいいかもしれませんね」

「そうだな。いつまでも家族三人で回し続けるつて訳にもいかないからな」

新作メニューの数々はさておき、パスタなどの既存メニューは堅調な売上を維持している。

家族以外のスタッフを雇う余裕も十分にある。

「アロルドさんと同じ味を出せる人が生まれたら、のれん分けでフランチャイズ展開もできますしね」

「のれん分け？ フランチャイズ？ 何だそれは。美味しいのか？」

ここで幸助がイメージしているのはカレーのチェーン店であるC  
C 壱番屋だ。

幸助の好みはロースカツカレーにチーズトッピングの二辛だ。

冬はロースカツがカキフライに変わる。カレーと混ざり合った貝の旨みがたまらない。

ここでは希望者は既存店で一定期間修行すると、のれん分け方式で独立することができる。

しかも、初期費用の借入金は本部が保証人になってくれるという至れり尽くせりの制度まであるのだ。

流石にそこまではできないにしても、いつかはアロルドの味を多店舗展開したいと幸助は考えている。

「食べ物じゃなくて店舗の展開方法のひとつです」

「なんだ。そうか」

新しいレシピを手に入れることができるかもと期待したアロルドは少しだけ落胆する。

幸助がもたらすレシピはアロルドにとって奇抜な発想ばかりである。

メニューとして提供できない料理だとしても、料理人マインドが刺激されるものがほとんどだ。

「で、晩飯は食べてくんだろ。今日は何にする？」

冬の昼は短い。

窓の外に目をやると、外は既に暗くなり始めている。

幸助は顎に手を当てながら少し考えると、アロルドにオーダーする。

「しばらくここにも来れませんから、原点のトマトバジルパスタを大盛りで！」

「わかったぞ。ちょっと待ってる」

そう言い残すとアロルドは回れ右をし、のそのそとキッチンへ行く。

そこへ、店頭のプレートを表にし営業中のサインにしたサラが戻って来た。

「コースケさん、本当に行っちゃうの？」

「うん。すぐに帰ってくるからさ」

「分かってるけど……」

それでもサラの額には「納得できない」という文字が書かれている。

不服そうな視線を幸助へ向ける。

「僕がいない間にサラもコンロの改善点とか新しい魔道具のアイデア、いろいろ考えておいてよ。今後、魔道具は絶対に大きな展開になるからさ」

「うん……」

「最近のサラのアイデアはすごく役に立つから、僕も助かってるよ」

その言葉にようやくサラの表情も和らいでくる。



口まで出かかった不安をぐっと飲み込み、笑顔を作る。

「うん！ わかったよ！」

その後幸助は過激なほど大盛りのトマトバジルパスタを何とか平らげる。

おまけでオニオンスープもサービスしてくれたので、腹ははちきれんばかりだ。

「サラ、それじゃまたね」

「うん。コースケさん、気を付けてね」

「アロルドさん、ご馳走様でした。今度大盛りを頼んだ時は、もう少し少なめで」

「なんだ！ せっかくサービスで超大盛りにしてやったのに」

交わす言葉はいつも通りだが、アロルドの視線は息子を案ずるような目であった。

そんな視線を背に、幸助は店を後にする。

ギイ、という音を立てドアが閉まる。

しかしサラはその場を動かさず、窓越しに幸助の姿を追い続ける。

「どうした？ サラ」

「うん……。何だかちょっとイヤな予感がしたんだけど。きっと気のせいだよね！」

そう言いながら頭を左右に振る。

この時サラは自分の予感が的中するなど、知る由もなかった。

そして翌日。

幸助は大きな背嚢を背負い早朝に宿を出る。

そして東西を走る乗合馬車に乗ると、約束の場所である西門を指す。

西門まで行くのは生クリーム探しに行った時以来である。

「ここでもいいのかな？」

西門に到着すると、門の先に二台の荷馬車が停まっていることを認める。

この街と隣町であるポルトー子爵領はこのような荷馬車が定期的に往復しているのだ。

幸助は門をくぐると馬車へと足を進める。

「お？ コースケじゃないか。どうしたんだこんな朝早くから」

聞き覚えのある声に呼び止められる幸助。

声の主を探すと同じ宿に宿泊している冒険者のランディであった。周りにはパーティーメンバーもいる。

「あれ？ 荷馬車の護衛ってランディさんのパーティーなんですか？」

「そうだが、何で知ってるんだ？」

「魔道具輸送の護衛に腕利きの冒険者を雇ったって聞きましたから」

ランディは状況が呑み込めていないようだ。

ツルツルの頭上にハテナマークが浮かんでいる。

護衛依頼には同行人物の名前までは伝わっていなかったようだ。それぐらい事前情報で伝えておいてもいいのと思う幸助。

「僕も荷馬車の荷物みたいなもんです。隣町で魔道具販売を手伝うんですよ」

「コースケ、武器屋の手伝いはどうしたんだ？」

「それはひと段落ついたので、今は魔道具店の手伝いをしてるんです」

「そういう事か。何だか見かけによらず忙しそうなのヤツだな。まさか護衛対象がコースケとは思わなかったぞ」

幸助とランディが会話をしているともう一台馬車が合流する。

コンロ以外にも定期便の積み荷が載せられている馬車もある。

今回は二頭立ての馬車が三台編成のようだ。

全員が集合し、顔合わせと大まかな予定を打ち合わせをする。

日程は八日間の予定で、途中は村や街道に整備された無人の小屋で夜を越すようだ。

打ち合わせが済むと、御者とランディのパーティーメンバーはそれぞれを受け持つ馬車へ向かう。

「コースケはこっちだ」

幸助はランディに案内された荷馬車に乗り込む。

所狭しと積まれた魔道コンロの合間に荷物を置くと、小さく腰かける幸助。

「やっぱり荷馬車だけに環境は辛そうだなあ……」

出発を待っているとランディも荷馬車に入ってくる。

狭苦しい車内に筋肉ガチムチの冒険者が加わることにより、密度が増す。

「あれ？ 護衛も車内で大丈夫なんですか？」

「俺らの役割は積み荷と同行人の護衛だからな。ここにいるのも立派な仕事だ。周りは他の奴らが見張ってるから安心しろ」

「そうなんですね。頼りにしてます……」

幸助がそう言ったところで馬車が動き出す。

徐々にスピードが乗ると、サスペンションの無いダイレクトな振動が全身を揺らす。

この揺れは未だに慣れない。

いずれは馬車屋の改善にも携わりたいなと思う幸助であった。

「それにしてもコースケ、出世したな。護衛の依頼主は貴族様だったぞ」

「いえ、残念ながら出世はしてないですよ。魔道具の販売を手伝ったらまたまた店長が貴族だっただけで、僕は平民のままです」

「でもすげえぞ。貴族様がコースケの力を頼ってたからな。よっぽど販売の腕があるんだろ」

確かに販売には自信のある幸助。

しかし販売するための商品は、関わった人たちの能力の賜物である。

「もともとの商品が良い物ばかりですからね」

「魔道コンロだったか？ 積み荷は」

「そうです。見てみますか？」

「ああ」

ランディの返事を聞くと幸助は積み荷ではなく自身の背囊からデモ用に用意したコンロを取り出す。

受け取ったランディはしげしげとコンロを見回す。

「小さいな」

「はい。ここに魔石をセットしてボタンを押すだけでお湯が沸かせるんです」

「こんな簡単にか。便利な世の中になったもんだなあ……」

「これって冒険者にも需要はありそうでしょうか？」

ランディがコンロに興味を持ったところで幸助はそう質問する。今のところホルガーの武器屋では一台も売れていない。

コンロを床に置くと腕を組んで考え込むランディ。

「貴族様だったら付き人が道中の料理をするから必要かもしれないが、俺らは要らないな」

「やっぱ火をたくことが大事だからですか？」

「ああ。調理中に魔物に襲われるのも鬱陶しいからな」

その後、道中幾度か魔物に遭遇するが、その度にランディのパーティーがサクサクと倒していく。

若い槍使いも立派に活躍しているようだ。

ホルガーの武器の恩恵に与る幸助。

物事は巡り巡って自分に返ってくるということを実感する。

ちなみに幸助は馬車に閉じこもり冒険者の活躍を見ることは無かった。

せっかく食べなれた愛着のある魔物の肉が食べられなくなるのを防止するため……でもある。

そして八日後。

ランディ達の活躍により被害もなく、幸助たちは無事ボルトー子爵領に到着した。

## 2・水の街での出会い

「わお、すごい景色だなあ！」

馬車での移動の最終日。

幸助達は広大な穀倉地帯を抜け、街の入口に到着した。

「コースケは初めてか？」

「はい。初めて来ました。それにしてもすごい眺めですね！」

「なら宿まで俺が案内してやる。護衛の依頼はここまでだが、俺らもしばらくは街にいる予定だからな」

「ぜひ！」

馬車を降りた幸助は、眼の前に広がる景色にテンションを上げる。懐かしい潮の香りが景色と重なり、海まで来たということを実感させる。

「島が街になってたんですね」

「そうだ。ここから先は船で移動するぞ。ついてこい」

海岸からそれほど離れていないその先に島が見える。

島までの最短距離はおよそ百メートル程度であろうか。

島には建物がひしめき合っており、ひっきりなしに小型の船が往復している。

沖には大きめの船も一隻見える。

ボルトー子爵領は別名「水の街」とも言われている。

その名が示す通り、街の大部分はこの島にあるのだ。

大陸側には馬車を駐車させるための施設や乗船の待機場など、最低限の機能しかない。

船着き場は、大勢の人が織りなす喧騒に包まれている。長旅を終えた商人やこれから旅に出る一般市民らしき人。警備をしている騎士。そしてマツチヨな男たち。

交易品や農作物はここで全て船に積み替えられる。マツチヨな男たちがせつせと積み荷を抱え、馬車へ船へ荷物を運んでいる。

幸助はここで一旦積み荷である魔道コンロとお別れだ。専門の運搬業者が受取人である商会まで運んでくれる。従って幸助は後日、体一つで商会まで行くだけでよい。

慌ただしい光景を横目に、ランディに率いられた幸助たちはぐんぐん進む。

途中、係員に声をかけると示し合わせたように一艘の小船へ案内される。

「先に待つてる方がいるみたいですけど、いいんですか？」

「ああ、コースケのおかげで俺たちは貴族様の使者扱いだ。優先して乗せてもらえる」

昼食を食べてからかなり経つ。

このまま待つていたら乗船するまでに日が暮れていたかもしれない。

ニーナに感謝である。

ここで若干の優越感を味わえる幸助、やはり小市民である。ぐらぐら揺れる足元に転びそうになりながら乗船する。



「全員お揃いですね。では参ります」

長い棹を持った船頭が声をかけると船は静かに離岸する。

海底を棹で突いて進む方式のようだ。

波もなく穏やかに滑るように船は進む。

あつという間に街が近づく。

しかし船頭は対岸の船着き場へ船を寄せず、その横の水路へと船を向ける。

「あれ？　ここで降りるんじゃないんですか？」

「いや、宿屋まで送ってもらおうように頼んである」

「えっ、もしかして宿屋まで船で行けたりするんですか？」

「そっだぞ」

「へえ、水の街って言葉がこんなに似合う街は初めて来ましたよ」

幸助たちの乗った小さな船は、建物に挟まれた幅十メートルくらいの水路へ入る。

建物はどれも三階から四階建てくらいの高さがあり、密集感がある。

建物の間を縫うように進む感覚は、まるでテーマパークのアトラクションのようである。

建物と水路の間には歩道が整備され、時おり歩道から船へ乗り込む人の姿が見える。

ここがメインストリートの役割を担っているのかもしれないと幸助は考える。

「ランディさん、あの塔は何ですか？」

幸助の指さす先。

建物の隙間から遠くに灯台のような白い塔が見える。

「あれは魔物の監視塔だ」

海で隔てられているため陸上の魔物はやってこないが、海の魔物に対する対応は必要なのだ。

その後も船は複雑に入り組んだ水路をぐんぐん進む。

「迷子になりそうですね」

「初めての奴はみんなそう思っらしいな。でも船頭に目的地を告げれば迷うことはないぞ」

「なるほど。それがこの街の攻略法ですね」

幸助はランディという案内役がいることに感謝する。

召喚された直後は作法が分からず困ることがよくあったものだ。

その後、橋を何本かくぐると建物の一階に店舗が増えてきた。

「おっ、もうすぐ着くぞ。ここが宿屋だ」

船が停まり接岸すると幸助たちは歩道へ降りる。

ランディは船頭に何か渡している。運賃のようだ。

「すみません、運賃のことまで気が回りませんでした」

「気にするな。もともとここに来る予定だったし、コースケがいてもいなくても値段は変わらないからな」

幸助たちは宿屋に入ると受付でそれぞれの部屋を取る。

ちなみに幸助は最上階の五階を取った。景色がよさそうという理

由である。

その後幸助がこの世界にはエレベーターが無いということを出すのに、それほど時間は要らなかった。

翌日。

旅の疲れで朝寝坊した幸助は、遅めの朝食を終えると外へ出た。朝食はパンにサラダ、スープというこの国の標準的なものであった。

幸助はランディに聞いた通り、宿屋の前で流しの船を捕まえると目的の商会を告げる。

船に描かれたカタツムリのようなマークがタクシー船を示すマークだ。

ポルトー子爵領は島の中心に貴族街があり、それを囲むように一般市民が生活する街がある。

目的地は貴族街との境目にあつた。

人口密度の高い小さな島だ。あっという間に到着する。

「まいど。銀貨一枚ね」

船頭に料金を払い船を降りると、幸助は石造りで四階建ての建物の前に立つ。

この街の中ではかなり大きな建物だ。

かなり有力な商会かもしれないと幸助は考える。

一階は日用品の販売店になっている。  
店頭では女性が店番をしている。他に客はいないようだ。  
幸助は店番に近づくと声をかける。

「こんにちは、幸助といいますが魔道コンロの説明に参りました。  
アルセニオさんはお見えですか？ これ、紹介状です」  
「はいよ。呼んでくるからちょっと待っててね」

紹介状を受け取ると女性は店の奥へ行く。  
待っている間、幸助は店内を観察する。

台所用品や工具。恐らく釣り用品であろう竿や網。  
海の街ならではの品揃えである。

奥には板状に加工された木材など幅広い商品が陳列されている。  
日本でいうところのホームセンターのようである。

「お待たせ。あんたがコースケか？ 結構若いんだな」

幸助の前に現れたのは仕立ての良い服を着た四十代と思しき男性  
だ。

「こんにちは、僕が幸助です。ニーナさんからの荷物はもう届きま  
したか？」

「届いてるよ。魔道コンロ百台に修理用部品一式」

「それで、販売方法についての説明は今からでも大丈夫ですか？」

「もちろん。この日を楽しみにしてたからね」

その後、幸助は実演販売方法をアルセニオへ説明する。

相手はもともと多種多様な商材を扱っている商会のトップである。

サクサクと話は進む。

そして一通りの説明と雑談も終わり幸助が帰ろうとしたその時、一人の客がアルセニオに声をかける。

「アルセニオっち。やっほー」

「ああ、ウィルゴか」

顔見知りのようである。

黄色の短髪で細身のウィルゴと呼ばれた客がアルセニオに近づくと一瞬幸助はその見た目で女性かと思ったが、低い声は男性そのものである。

「ちょうどいいところにいたわ。いつもの木材、よろしくねっ」

「注文してもらるのは嬉しいが、店のことは解決したのか？」

「うーん、それは言わない約束よっ」

唇の前に人差し指を当てて首をかしげるウィルゴ。

完全に語尾にハートマークがついている仕草である。

しかし、会話からすると造船関連の仕事をしているようだ。

幸助の用事は終わっていたが、興味の赴くままその場に続ける。

「船を造るよりも先にすることがあるんじゃないか？」

「それは気にしない、気にしない。それよりアルセニオっち、このかわいい男の子は誰なのかしら？」

そう言うとウィルゴは幸助へ視線を流す。

その視線に本能で危険を感じる幸助。

無意識に尻へ力が入る。

「コースケって言ってな、アヴィーラ伯爵領から今度販売する魔道具を持ってきてくれたんだ」

「へえ、カワイイ名前ね。あたしはウイルゴ。ウイルちゃんって呼んでね」

「は……はあ」

どう相手してよいものか苦慮し横へ視線を向けると、アルセニオは苦笑しながらフオーローする。

「コースケ、こいつはな古くからの友人でな、造船工房を経営してるんだ。こつ見えて男だぞ」

「まあ、アルセニオっちつたらあ。一言よ・ぶ・ん」

国は違えど、いや、世界は違えどお姉系キャラはいるんだなと妙な納得をする幸助。

アルセニオはウイルゴと幸助を交互に見遣ると何か思いついたように、手をパチンと合わせる。

「そうだ！ ウイルゴ。コースケはこの若さで隣町の領主様も認める凄腕の経営改善請負人だ。一度話でも聞いてみたらどうだ？」

「えー、そんなの別にいいよお」

「コースケはどのくらいこの街にいる予定だ？」

「しばらくは観光がてら滞在する予定です」

「こいつ、こんな樂觀的な顔してるが悩みも多いんだ。もしよかつたら話を聞いてやってくれないか？」

「僕は構いませんが……」

そう言いながらウイルゴの表情を窺う。

先ほどよりも少し影が差しているように感じる幸助。

「アルセニオっち、善意の押し売りはよくないぞっ」

「今押し売りしなくていつするんだ？ せっかくの機会だぞ」

うんうん唸りながら考え込むウイルゴ。  
悩み事の扱いは慎重にせねばならない。

アルセニオの押しはやや強引だったが、幸助はウイルゴが断つた  
らすぐに引こうと考えていた。

「経営改善って、コースケちゃんはどんな店を今までしてきたの？」  
「ええっと、レストランに食品販売店、武器屋に魔道具店ですね。  
あとはアヴィーラ伯爵領の内政にもほんの少しだけ」  
「あら、そんなとこまでしてるんだ。幅広いのね」

再び考え込むウイルゴ。

数秒の後、ウイルゴは幸助を見ると口を開く。

「うん、決めた。コースケちゃんは可愛いからあ、まずはお茶でも  
しましょ」

「決定理由はそれかよ！ まあいい。コースケ、こいつは安全だと  
俺が保証する。よろしく頼む」

「はい。わかりました。知らない街でこうやって出会うのも何かの  
縁ですから。こちらこそよろしくお願ひします」

「じゃ、行こつ。コースケちゃん」

アルセニオとの話が終わると、幸助とウイルゴはカフェへ徒歩で  
向かう。

雑談をしながら水路沿いの歩道を十分ほど進むと、大きく開かれ  
たオープンテラスのカフェに到着する。

寒い冬にもかかわらずコートを着込んだ人たちがワイワイとそれ  
ぞれの時間を楽しんでいる。

アヴィーラ伯爵領では見られない光景だ。

「お洒落な店ですね」

「でしょ。あたしのお気に入りの」

二人が席に着くとウェイターが注文を取りに来る。

幸助は温かい紅茶を、ウィルゴはミックスジュースを注文する。

「それで早速なんですが、ウィルゴさんはどんなことを悩まれてるんですか？」

「息子のことなの。あたしの一番の悩みは」

息子さんがあるだなんて意外だなと失礼なことを考えつつも会話を続ける幸助。

「息子さん、ですか？」

「そうなの。将来はお店を継いでもらいたいんだけどね。造船なんて古くてダサイ。魔道具がイケてるんだって言うんだよ」

十二歳にもなつて何やつてるんだかとウィルゴは続ける。

幸助は魔道具という言葉が出たことで苦笑する。

今回持ち込んだ魔道コンロが普及すれば、息子さんの想いは間違いないく加速してしまう。

「他に継げる兄弟とかお弟子さんはいないんですか？」

「長女がいるんだけど十五歳で嫁いだからね。弟子もいないし、坊主に継いでもらいたいの。あたしは」

「そうですか。でも何で造船がダサイってなっちゃうんですかね？

この街の主要産業にも見えますけど……」

「でしょでしょ！ コースケちゃんの話の分かるオトコで良かったよー」



両手をお祈りポーズに組みクネクネしながらグイグイと幸助へ近づくウイルゴ。

丁度そのタイミングで、ひきつった顔のウェイターがドリンクを持ってくる。

幸助は冷えた手をカップに添え温めつつ質問をする。

「若者の中で魔道具が流行ってるんですか？」

「ううん、全然。ありやお貴族様の道楽に見えるよ。あたしにはね」

確かに二ーナの店にいる魔道具研究者は、家督を継ぐことのできない貴族の子息・息女が多い。

高度な教育が必要かつ開発そのものにも膨大な金が必要だからだ。

幸助は他にも質問を投げかけるがどれも問題の原因には繋がらなかった。

そもそも幸助の専門領域は店舗の売上アップだ。

事業継承は経験が無い。

ただ、事業そのものが魅力的でない場合、なかなか後継者が見つからないということは聞いたことがある。

紅茶がすっかりアイステイーになってしまった頃、幸助はウイルゴへ切り込む。

「ウイルゴさん。もしかして本当の悩みは船が売れないことだったりしません？」

「ありや、わかっちゃう？」

「何でアルセニオさんが僕を紹介してくれたのかを考えると、それが一番自然かなあ、と」

「やだなあ、さすがお貴族様も認めるオトコね」

息子の話題が出た時に幸助は違和感を感じていた。

やはりそうかと思いつつ、幸助はカップに残ったアイステイーを流し込む。

「お店はどんな状況ですか？」

「それがねえ……」

それからウィルゴの話は一時間に渡り続くことになる。  
要約するところだ。

この街は観光も重要な産業の一つである。  
デザイン性豊かな船が溢れたら見た目にも楽しかろう。  
その想いからウィルゴは持ち前のセンスを活かし、カラフルな船を造るようになった。

しかし、商業ギルドの下部組織である造船組合がそれを良しとしなかった。

理由は「今までの慣例と違うから」である。

それが原因で組合長から「異端」と呼ばわりされてしまう。

組合長と大げんかの末、捨て台詞を吐きつつ造船組合から脱退。  
それがきっかけで客足も遠のいてしまったそうだ。  
それほど組合の力は強いらしい。

「そんな事情があったんですね」

「あたしの目指すところと組合の目指すところが違っちゃってるの」「デザイン性の高い船は良いと思うんですけど……」

同じ機能を持っていたとするならば、奇抜すぎる物はさておきデザイン性が高い方が商品価値は高まる。

だからこそ将来的には、デザイン性を追求した魔道コンロも開発

してもらおうと幸助は考えていた。

「そんなこと言ってくれるの、コースケちゃんだけだよ」

「そんなはずないと思いますよ。きっと」

「コースケちゃん、ウチみたいな異端って言われちゃう店でも何とかなるのかな？」

造船はこの街の主要産業だ。

たとえ異端と言われようが必要な機能を満たしているならば販売の工夫で解決できる。

業界の常識と消費者のニーズは往々にしてずれることもある。「異端」が「常識」となる日も来るかもしれない。

幸助は大丈夫と確信する。

「ウイルゴさん」

「なあに？」

その言葉で、幸助とウイルゴの目が合う。

そして幸助は宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます!」

### 3・美味！ 海の魔物

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

幸助がそう宣言すると、ウィルゴは間髪入れずに反応する。

「コースケちゃん。そんなストレートに言われたら、あたし照れちゃう」

ウィルゴは再びお祈りポーズでクネクネし始める。

つい先ほどまでの憂いを含む眼はどこへいつてしまったのか。

「え、ええつと……、ウィルゴさん？」

「何年ぶりかしら。そんなにズバツとストレートな言葉を刺されたのは。キュンとしちゃった」

そう言つとウィルゴはウィンクをする。

趣旨がちゃんと伝わってないかもしれない。そう思った幸助は言葉が続ける。

「ええつと……、先ほどのお話し通りデザイン性の優れた船っていうのは素晴らしいと思います。そんな船がたくさん水路を走っている姿を想像するとワクワクしますよね」

「いいねいいね、コースケちゃん。これだけあたしのアイデアを肯定してくれた人、初めてだから嬉しいな」

今いるカフェはお洒落なのに、船のお洒落がダメなわけではない。幸助はそう考えている。

「もしこれが軌道に乗ったら息子さんもカッコいい仕事って思ってくれるかもしれせんし。僕と一緒にお店の改善を試みませんか？」

「もちろん！ 何だか楽しそうなことになりそうだからねっ」

「はい。楽しいことも待つてるかもしれせんね。これからもよろしくお願いします」

座りながら頭を下げる幸助。

こうして幸助は、初めて別の街で改善を請けることとなったのだ。

「いつの間にかだいぶ時間が経っちゃいましたね……」

周りを見回しながらつぶやく幸助。

時刻はすでに夕方。

背の高い建物に囲まれた水路はすでに暗くなり始めている。

あれほど賑わっていたカフェの客も、今はまばらにしかない。

「まずはお店の様子を見たいんですが、続きはまた後日の方がいいですか？」

「その方がいいよ。日が沈むと流しの船はいなくなっちゃうからね」

既に幸助は自分の居場所を見失っている。

船がなければ宿まで帰る自信がない。

従ってここで切り上げることにする。

「では次回はウィルゴさんのお店に行きますので、いろいろ教えてください」

「おっけー。『ウィルゴーゴー』ってのがあたしの店の名前ね。船頭さんに言えば連れてきてもらえるから」

店名のセンスに幸助では理解しがたい芸術性を感じつつ、次回の約束をすると幸助とウィルゴは帰路に着く。

幸助が宿に着いたのは、もう日が暮れそうな時刻であった。

宿屋の入り口をくぐると、併設された酒場の喧騒と海鮮料理の香りが幸助を迎える。

遅めの朝食を食べてから何も食べてない幸助。たまらず腹の虫がなる。

ぐるっと店内を見渡すと見知った顔が豪快に大きなエビをついている姿を見つける。

ランディ達のパーティーだ。

「お疲れ様です、ランディさん」

「おう、コースケか！　ここ空いてるから座れ」

ランディに促され席へ座る幸助。

テーブルにはエビ以外にも様々な海鮮料理が並んでいる。料理も気になるがまずは酒だ。

近くにいた給仕を呼び、とりあえず注文をする。

「すみません、エールを一杯お願いします」

「俺ももう一杯！」

しばらくお待ちくださいと言葉を残し、給仕は背を向ける。ほとんど待たずして、二杯のジョッキが運ばれる。

「かんぱーい！」

幸助は喉を鳴らしながらエールを流し込む。  
昨夜は旅の疲れで、部屋についた途端寝てしまった。  
久しぶりのアルコールに目尻を下げる。

「ぶはあ、久しぶりの酒は美味しいですね」

「冬でもやっぱり酒はエールに限るよな」

ランディはエール派のようだ。

幸助はアルコールが入っていれば何でもいけるタイプだ。

「これ、食べてもいいですか？」

「おう、じゃんじゃん食べていいぞ。コースケのおかげでこいつらの討伐率も上がってるからな。今日は奢ってやる」

その言葉を聞き、ではお言葉に甘えてと遠慮なしに端から料理をつつく幸助。

まずは巨大なエビ。

この世界に来てから初めて食べる。

シンプルに塩味で焼かれているだけの身を口へ放り込む。

「甲殻類万歳！」

ぷりぷりの身と海の香り。そしてそれらを引き立てる適度な塩。  
たまらず幸助はジョッキを傾ける。

「いい食いつぶりだな、コースケ」

「すごい久しぶりに食べるもんですから、つい」

「おう、まだほかにも注文してあるからどんどん食べ」

ちょうどそこへ給仕がジュウジュウと音を立てた魚の切り身である。ろうステーキを持ってくる。

これもまた巨大だ。

思わず生唾を飲み込む幸助。

魚を切り分けると、すかさず口に放り込む。

「なんだこれっ!？」

口の中でしつかりと脂が乗った身とソースの濃厚な味が、とろけ、混ぜり合う。

今までに経験したことの無い味わいである。

「これ、すごい美味しいですね」

「これはソードヘッドシャークつつつて、海の魔物なんだがこの通り美味だ」

「魔物なんですか？」

「僕たち今日はこの魔物を狩ってたんですよ」

ランディの代わりにパーティーメンバーの槍使いが答える。

ソードヘッドシャークとは、この辺りの近海一帯に生息するサメの魔物だ。

一匹当たりの脅威度はそれほど高くないが、群れると危険な魔物である。

故に冒険者や騎士団が日常的に狩りをしている。

その肉はこうして市民の胃に収まり、鋭い頭の骨は武器の素材となる。

脂が乗っているが故、足が速い。鮮度が命である。



だから領外へ出荷されることはない。

「へえ、陸のレッドボア。海のソードヘッドシャークってところですね」

「お前の食べ物基準だとな」

「あはは……」

空腹も落ち着きほどよくアルコールも回った頃、幸助はランディへ別の話題を振る。

「ランディさんは明日からはどんな予定ですか？」

「俺らはしばらくこの街の依頼をこなしてみる。コイツらにも海の魔物相手に経験を積ませたいからな」

そう言いながらパーティーメンバーを見るランディ。

やはり面倒見のいい男だなと幸助は感じる。

「すばしっこいからなかなか銚が当たらないんですよ」

「そっか、海だから違う武器を使わないといけないんですね」

「おう、残念ながら例の槍はこの街ではあまり使えないんだ」

塩水で劣化が早くなるからなとランディは続ける。

場所が変われば武器も変わる。

隣町でもこれだけの違いである。

他にはどんな街が広がっているのか想いを馳せる幸助。

「で、コースケはどんな予定だ？」

「とりあえず本来の目的はほぼ終了しました。あとはコンロ販売中の様子を見るだけです」

「なら帰るのはもうすぐだな」

当初の予定は一週間ほどの滞在であった。  
観光が済んだら、両街間を定期的に往復する荷馬車に便乗して帰るつもりであったのだ。

しかし、思いがけず造船工房の店主と出会った幸助。  
キャラは強烈であったが、商売に困っている人を知ったからには黙っていられない。  
従って今のところアヴィーラ伯爵領へ帰る目途は立っていない。

「本当はあと少しだけ観光して帰る予定だったんですが、こっちの街でも店舗改善の仕事を請けまして」  
「まったく忙しい奴だな。どこでそんな仕事を仕入れてくるんだ」  
「たまたま魔道具の納品先で出会ったんです」

今回の出会いも本当に偶然である。  
もともと幸助は小さな出会いを大切にしているタイプであるがそれにしても、である。

「で、武器屋と魔道具屋の次は何屋だ？」  
「造船工房です」  
「生活基盤にもなってる船か。また大変なとこの仕事を請けたな」

幸助は頷くとジョッキを傾ける。  
残り僅かな胃の隙間にエールが染みこんでいく。

「役に立つかは分らんが、この街の冒険者ギルドとか他の冒険者の知り合いもけっこういる。困ったら言ってくれよな」  
「はい。頼りにします！ ランディ兄さん」  
「兄さんってなんだよ……」

そう言いながらスキンヘッドの後頭部をポリポリ掻くランディ。  
相変わらず褒められるのは苦手なようだ。

「よし、明日も朝が早い。今日はこの辺でお開きにしよう」

こうして海辺の街ならではの宴会は終わる。

すっかり大量に食べた幸助。自分の分は払うと言ったが相当儲かっているようで、最初の約束通り奢ってもらえることとなった。

翌日の朝。

幸助はベッドから起き上がると部屋の窓を開ける。

「うわぁ、相変わらず寒いなぁ」

窓から吹き込むキリッと冷えた風に一瞬身震いする。

宿屋は周辺の建物よりも頭一つ高い。

幸助はその宿屋の最上階に部屋を取っている。

昇り降りは大変だが、眺めはかなりいい。

窓の外をぼうつと眺める幸助。

密集した市民街の向こうには大きめの建物が並ぶ貴族街が見える。  
ひとときわ大きい建物が領主の館であろう。

さらに奥。島の端には白い監視塔が朝日をたっぷりと浴び、オレ  
ンジ色に染まっている。

沖に目を移すと一隻の帆船がゆっくりと動いているのが見える。

ランディの話によると、この船も魔物の監視船とのことだ。

「さて、さつさとご飯を食べてウィルゴさんの店に行くとするか」  
身支度を済ませると昨日同様の朝食をとり幸助は外へ出る。

「せめてスープはエビの頭でダシを取ればいいのに」

そうぼやきながら水路へ向かう幸助。  
宿の前にはたくさんの船が待機していた。  
ホテルの前にいるタクシーのようだ。

「お兄さん、どちらまで？」

「えっと、造船工房のウィル……『ウィルゴーゴー』までお願いします」

幸助は一艘の船へ乗るとウィルゴに聞いた店名を告げる。  
それを聞いた船頭は怪訝そうな顔をして答える。

「お兄さん、船を買いに行くのかい？ だったら他の店を勧めるよ」  
思ってもない返事に戸惑う幸助。  
悪評でも蔓延ってるのかと邪推する。

「どうしてですか？ まさか沈みやすいとか……？」  
「いやいや、そうじゃないよ。あそこって確か組合に加盟してないでしょ？ だから便利な組合の補助が受けられないんだ」

ウィルゴとの会話で、造船組合を脱退したところまでは聞いていた幸助。

しかし、組合を脱退することによるデメリットまでは聞いていな

かった。

「補助っていうのは何ですか？」

「あれ、それも知らなかった？ あ、そうかごめんごめん。宿屋からの乗船だもんね。この街の人じゃなかったんだね」

そう言うと、船頭は棹を操り船を進める。

「はい。そうです。観光がてらいろいろ見て回ろうと思ってまして」

「そうなんだ。組合に入ってる店から船を買うとね、無利息で購入費用を分割払いにしてもらえるんだよ」

「なるほど……」

分割払いと聞き、冒険者ギルドの認定武器制度を思い出す幸助。ホルガーの武器を売るために冒険者ギルドに取り入れてもらった制度である。

ただし、冒険者ギルドの場合は利息が伴っていたが。

「あとは組合の保証がつくことかな。確か買って一年は無料修理が受けられたと思うよ」

「へえ、それは確かに便利ですね」

「でしょ。その補助が受けられないし店も個性的だからね。最近は大変そうって専らの噂だよ」

「そうなんですか」

船頭の話では、街で噂になるほど流行ってない店のようだ。

思いがけず船のユーザーから情報を仕入れられた幸助。

これは大変な仕事になるかもしれないと幸助は気を締めめる。

「はい、お兄さんお待ちせ。ここが『ウィルゴーゴー』だよ」

「ありがとうございます」

幸助は船を降りると店の前に立つ。  
建物は三階建てだ。

この界限では標準的である。  
ただし工房なので間口は広い。

何より目を引くのは外壁の塗装である。

この街の建物はほとんどが石の素材そのままの外壁である。

しかしウィルゴの店は、一階部分が少しだけ黒みを帯びた赤で塗られている。

そこに黄色の文字で店名が書かれている。「ゴーゴー」の文字が躍っているようだ。

単体で見ると確かにお洒落ではあるが、浮いている感は否めない。

「人が個性的ならば店も個性的だなあ」

そうつぶやきながら幸助は足を進めると、店内へ入る。

その頃『アロルドの Pasta 亭』にて。

「あら、サラちゃんどうしたの？ 元気ないね」

店にはルティアがオリーブオイルの納品に来ていた。

当初は幸助の思い付きで使用量に大きなばらつきがあったが、現在は安定している。

従って今では月に一度の配達が定例となっている。

「うん。コースケさんがね、隣町に行つてて……」

「そういえばそうだったね。コンロの納品に行くつて聞いたよ」

そう言つとルティアはニヤツと笑いながら続ける。

「はーん。もしかしてコースケがいなくて寂しいんだ」

「ちつ……、違います！」

手をぶんぶん振りながら慌てて否定するサラ。

頬が朱に染まっている。否定になっていない。

「コースケはすぐに帰つてくるつて言つてたよ」

「そうなんだけど何だかイヤな予感がずっと続いてて……」

「なあに心配することがあるの？ 隣街も安全な街だから、事故とか事件に巻き込まれる心配なんてほとんどないよ。ほら、元気出して」

そう言つとルティアはサラの頬を両手で挟む。

「わひやりまひた！ ルティアさん！」

ルティアから解放されると、ようやく表情が明るくなるサラ。

「うん。それでいい。サラは元気でなくっちゃ。じゃ、また来月来るから」

「はい！ ありがとうございます」

#### 4・「じだわり」を別の言葉で言い換える

ウイルゴの店へ入ると、ふわつと木の香りが幸助の鼻をくすぐる。まだ午前の早い時刻である。

客はもちろん、ウイルゴの姿も見当たらない。

「こんにちはー、幸助です！」

声を張ると「はいはい」と言いながら一人の女性がやって来る。ウイルゴのように細身ではない、しっかりとした安定感のある女性である。

「コースケさんですね。話は伺っております。主人を呼んで参りますのでしばらくお待ちください」

「はい。よろしくお願いします」

丁寧な対応を受ける幸助。

この世界の商売人にしては珍しい。

育ちがいい女性なのかもしれないと幸助は考える。

ウイルゴを待つ間、幸助は店内の様子を観察する。

掃除が行き届いた店の中央には、製造途中の船が台座に乗せられている。

形はよく見るスタンダードなものだ。

壁面には船を動かすための棹や乗客が座る椅子などの部品が並んでいる。

大きな布は雨の日に使う幌用であろうか。



そして店の一番奥。

そこには幸助が一番目を惹かれたものが並んでいる。色とりどりに塗られた船の在庫だ。

店舗の外装と同じ赤や深緑、紺などの濃い色からパステルカラーのものまで。

パツと見て把握できないほどの在庫量である。

（確かにこの船が水路にあると、さらに街が華やかになるかもしれないなあ。

でもこの在庫はどうなんだろう。

造船工房の目安は知らないけど多すぎじゃないか）

ルティアの小麦店やニーナの魔道具店も大量の在庫を抱えていた。この世界の商店は、在庫に対する認識が幸助のそれとは違うのかもしれない。

「お待ちせつ。コースケちゃん」

「おはようございます、ウィルゴさん」

今日のウィルゴの服装は眩しいほどの黄色だ。上下とも。チカチカしたその姿に目がくらみそうになる幸助。

「お洒落なお店ですね」

「でしょでしょ。外装の赤と黄色がウチのイメージカラーなの」

ヴィヴィッドな赤と黄色の場合ファーストフードをイメージさせる。

だが、ウィルゴのイメージカラーには黒味も混ざっているので安

っぱさは無い。

「だったら服も蛍光色ではなくイメージカラーに合わせればいいの  
にと思う幸助。」

「それでそれで、今日は何をするの？」

「とりあえず色々質問をしてもいいですか？」

「もちろんっ」

そう言つとウイルゴは店の奥にあるテーブルへ幸助を案内する。  
薪ストーブが焚かれているので奥は暖かだ。

この世界の商店は、大抵奥が暖かく表に近くなるほど寒くなる。  
店頭を開け放たないと客が入りにくくなるためだ。

「温かいお茶です。どうぞ」

「ありがとうございます」

腰を下ろしたタイミングでウイルゴの妻が紅茶を持ってきた。

ひと口飲み喉を潤すと、幸助は始める。

「まず現状についてですが、以前と今とで販売数はどのくらい変わ  
りました？」

「うーん、そうね……」

顎に人差し指を当てながら考えるウイルゴ。

「一番いい時は毎月二艘売れてて、今は半年に一艘かな」

「だいぶ減ったんですね。生活は大丈夫ですか？」

「それは大丈夫。昔はすごい儲かってたからね。蓄えはあるの」

毎月二艘が半年に一艘ということとは単純計算で十二分の一である。

それでも生活ができていくということとは、本当に昔は繁盛店であったようだ。

腕は確かであることの裏付けでもある。

「それにしても在庫がすごいことになってますよね」

「うーん、そうなの。作り続けないと腕がなまっちゃつような気がしてね」

こういうところは職人っぽいなと感心する幸助。

「ちなみにこの状況が続くとどうですか？」

「それはねえ、今年いっぱいには持たないかも……。最低毎月一艘は売らないとね」

やはり現状が続くと行き詰ってしまうようだ。

手持ちの現金が在庫へと変化し続けている状態である。

早急に在庫が継続的に現金化できる仕組みを作らなければならぬ。

「次は造船組合のことです。今朝知ったんですが、脱退するとお客さんは便利な制度を受けられなくなるんですね」

「あれ、それも調べちゃったんだ。さすがコースケちゃんね。その通りだよ」

早速幸助は船頭から聞いた情報を確かめる。

無利息融資と一年間の保証が受けられる、という話であった。

「それで、無利息の分割払いという制度は、どのくらいのお客さんが使ってたんですか？」

「うーん、ほぼ全員かなあ」

「ほぼ全員、ですか……」

確かに魅力的な制度ではある。

幸助も、もし自分が買うなら使っていたらうと考えていた。

それにしてもほぼ全員とは思ってもいかなかった幸助。天井を仰ぎ見「うーん」と唸る。

「それならば組合に戻れば問題は解決するんじゃないですか？」

「それはイヤよ。だってあいつら皆あたしのことバカにするんだもん。特に元組合長、アイツのことを思い出すだけでも怒りが込み上げてくるよ」

前日の話で異端と呼ばれたということは聞いていた幸助。

組合との溝はそこまで深いのかと推察する。

「元組合長ってことは今はどうしてるんですか？」

「もう引退して組合も脱退したよ。後継者がいなかったんだよ。ざまあって感じよね」

「そ、そうなんです……」

意外と根に持つ性格が判明し、苦笑する幸助。

あまり触れてほしくない話題かもしれない。組合について必要な情報は得られた。

そう考えた幸助は次の質問をふる。

「ちなみに一艘どのくらいの値段で販売してるんですか？」

まだ幸助は船の相場を知らない。

自動車一台分なのかパソコン一台分なので対策は変わってくる。ウィルゴは横を向くと、工房で加工中の船を指差し答える。

「この六人乗りのが一般的なんだけどね、これで金貨十枚よ」  
「金貨十枚ですか。やっぱり結構するんですね……」

金貨十枚といえば一般家庭が五カ月生活できる金額である。  
相場的には自動車に近い。

そうになると、やはり販売するためには何らかの分割手段を用意しなければならぬ。

しかし幸助は、その難しさを身に染みるほど感じている。

だからこそホルガーの武器屋はギルド認定制度という解決手法になったのだ。

目の前の壁の高さに黙り込む幸助。

いつも口に出している「買えるか買えないか」という壁が今回は果てしなく高い。

商品は客のニーズまたはウォンツを満たさないと売れない。

ニーズは商品の必要性だ。これがないと生活できなかつたり困る物などがこれにあたる。

ウォンツは欲しいという欲求だ。趣味の購入などはこちらにあたる。

もちろん両方が混在する場合もある。

この街で船はニーズのある商品である。

しかしウィルゴの店はニーズはあるのに買ってもらえない状況なのだ。

次の言葉が出せなくなる幸助。

「……………」

「……………」

「ど、どしたの？ コースケちゃん」

沈黙に耐えられなくなったウィルゴが声をかける。  
対する幸助は、腕を組み遠くを見ながら考え込む。

（どうしよう。本当に困ったな。組合に加盟する以外、解決方法が  
思いつかないや。

店単独で分割払いを受け付けるなんて自殺行為だし、ギルドは巻  
き込めないし……。

うん。これ以上考えても仕方ないから決済手段は後回しにして別  
の話に切り替えるか）

「コースケちゃん？」

ウィルゴは幸助の目の前で手を振る。

思考の世界から帰ってきた幸助はゆっくりと口を開く。

「あ、すいません。考え込んでいました。聞きたいことはおおよ  
そ聞きましたので、今度は船を見せてもらってもいいですか？」  
「もちろんっ。ついてきて」

そう言くとウィルゴは立ち上がり、在庫の並んでいる場所へ移動  
する。

改めて数を拾うと、ちょうど二十艘だった。

在庫日数、実に十年分だ。

食品ではないので消費期限は存在しない。

しかし材料は木である。

全く劣化しないということは無いであろう。

「あまり長く在庫しておく劣化しちゃいませんか？」

「それは気にしなくても大丈夫よ。この塗装、オシヤレなだけじゃなくて耐久性もアップするの。出荷前に塗りなおせば新品にも見えるし他所の船より長持ちよっ」

その代わり少し値段は高いんだけどねとウイルゴは続ける。

形はほとんど他所の船と同じである。しかしお洒落で耐久性は高い。

意外な強みが分かり、幸助はテンションが上がる。

「へえ、そうなんですか。それはかなりの強みですね！」

「でしょでしょ。少し高くても長く使えるから結果的には安く済むんだよ」

幸助の判断基準から考えれば、この船を買わない理由が存在しない。

ますます問題は決済手段に絞り込まれていく。

「それで、数は少ないにしても買ってくれる人はいるんですよ？  
どんな人が買ってくれてるんですか？」

「ここ最近で買ってくれたのはアルセニオっただけかな。だいぶ前なら他の商会も買ってくれたけど」

「なるほど。まとまったお金のある商会だから買ってくれたってことですね」

「そうそう。だからそれ以外の売上はゼロね」

もしかしたら家庭用をやめて業販一本に絞れば打開策が見つかるかもしれない。

そう思い幸助はウイルゴへ尋ねる。

「ならば大きめの商会にターゲットを絞って売り込んだらどうです

か？」

「無理ね、それは」

「何故ですか？」

「だって、大きな商会なんて2・3件しかないもん」

ガクツと項垂れる幸助。

客先が存在しなければ売ることはできない。

やはり一般的な客層に買ってもらえる手段を探さなければならぬ  
いようだ。

この問題については幸助の中では後回しにすると決めているので、  
別の話題を振る。

「そういえばウイルゴさんは昔から塗装した船を売ってたんですか  
？」

「ううん、昔は他と同じのを造ってたよ。こだわり始めたのはここ  
数年ね」

「ということは、方針を変更したきっかけが何かあったんですよね」

生活のためであれば同じことを続けていればよかった。

ウイルゴの魂を刺激した何かがあったはずである。

組合と喧嘩別れするくらい強い動機になる何かがある。

質問の狙いは「こだわり」を明文化することだ。

幸助は社畜時代に売り手から「この商品はこだわっている」とい  
う言葉をよく聞いていた。

その都度「こだわり」を別な言葉で表現してもらっていたのだ。

そこに買い手が共感するストーリーが隠れていることが多いから  
である。

「もちろん。あの衝撃的な出会いは五年くらい前だったかしら……」



堰を切ったようにウイルゴの一人語りが始まる。  
その話によると、衝撃的な出会いとは塗料との出合いのことであ  
った。

たまたま行商人が持っていた塗料を面白半分で船に試したそう  
だ。その結果、船がお洒落になり、さらには塩水に強いという特性も  
判明し、耐久性が増したのだ。

この塗装を施したほうが船を買ってくれる客のためになる。

そして水路が賑やかになれば観光客も楽しくなる。

結果、街全体が豊かになる。

そう思った。

それ以来、ずっと塗装済みの船のみを造っているそう  
だ。

「ウイルゴさん、すばらしい考えですよ！」

「ほ、ほんとに？」

ウイルゴの「こだわり」は客だけでなく街全体を考えての  
ことであつた。

想像以上の収穫に幸助のテンションは更に上がる。

「本当です。何とかして街の至る所でウイルゴさんの船が  
見られる状態にしましょう」

「うう、コースケちゃん。あたし、がんばるよ」

「はい。一緒に頑張りましょう！」

幸助とウイルゴは固い握手を交わす。

他人が仲間になった瞬間だ。

時間もだいぶ経過した。

決済手段という大きな壁はここで考えても解決できそうにない。その後、次回打ち合わせの日程だけ調整すると、幸助はウィルゴの店を後にする。

「はあ、あんなこと言っちゃったけど、どうしたらいいんだろう」  
ウィルゴの店を出ると、水路沿いの歩道を幸助は歩く。  
先ほどまでのテンションと打って変わって今は気分が下降中だ。  
決済手段のことを考えると頭が痛い。

やはりプライドを捨ててもらってでも組合に戻ってもらおうか。  
それとも新たな決済手段を考え出すか。  
結論の出ない問答が頭をぐるぐると巡る。

「こういうときにサラがいてくれたら、僕の考えつかないアイデアを出してくれるのになあ……」

一度思考の壁にぶつかるとなかなかそこから抜け出せなくなる幸助。

ホルガーの武器をどうやって販売するか悩んでいる時にも、とりあえず冒険者に使ってもらおうと言ってくれた。

魔道コンロの時はユーザーとしての意見を出してくれた。  
サラがいないことでサラに助けられていたことに気付く幸助。

「気分転換に何か美味しいものでも食べるか」

時刻はもう昼を過ぎている。

早く何か食べないと腹の虫が騒ぎ出しそうである。

この街の店舗は大抵水路沿いにある。  
水路の無い裏道はほとんど住宅だ。

ブラブラと歩くこと十五分。  
魚とフォークが描かれた看板の店を見つけると、ドアを開け店内に入る。

「らっしやい！」

店内を見渡すとテーブルが十席ほどあり、数名の客が料理に舌鼓を打っている。

「ここのお勧めは何ですか？」

「今朝獲れたばかりの新鮮なソードヘッドシャークだな。パンとスープとセットで銀貨一枚だ」

昨夜ランディと食べた最高に美味だった魚、いや、魔物の名前を聞き即決する幸助。

「じゃあ、それをお願いします。ついでにエールも一杯」

「あいよ！好きな席で待っていてくれ」

サラリーマンだった幸助には未だに背徳感がぬぐえない昼間の酒。  
この世界に来てからもまだそれは変わらない。

しかし気分転換は必要だ。

知らない街で観光気分でもある。

「お待ち！」

しばらく待つと料理がやって来た。

昨日と同様ジュウジュウと音を立てている。

エールをグイッと飲むと、ソーダヘッドシャークを口へ放り込む。

「うん。やっぱり最高だな、これ」

その後しばらく幸助は悩みを忘れ、満ち足りた時間を過ごすのだった。

## 5・ウィルゴの息子

「なんだ、街を案内してほしいって？」

海鮮ランチを堪能した日の夜。

幸助はランディの部屋を訪れる。

当初一週間程度の予定だったこの街での滞在期間は、ウィルゴとの出会いにより無期限延長となった。

街を歩くことで、ウィルゴの船を販売するための解決策を見つけられるかもしれない。

幸助はそう考えた。

だが問題がある。

一人だと寂しいのだ。

観光案内マップなども無い世界である。

ましてや幸助は社会人になってから旅行など行ったことがない。うまく街をめぐる方法が分からない。

そして何より失敗が怖い。

この世界に召喚された直後は特に苦労した。

物の買い方ひとつ分からなかったのだから。

当然失敗もあった。

ぼったくられたり騙されそうになったり……。

そこで頼りがいがあり、この街の地理感のあるランディへ相談したのだった。

「はい。街の見どころか美味しい料理屋さんとか。一人だとなかなか回り切れそうになくて」

「うーん、案内してやりたいのはやまやまなんだがなあ……」

腕を組み渋い顔をするランディ。

基本面倒見のいい男である。

予定の合間に時間が作れないか考えているのだ。

「思い付きの相談なので、できれば大丈夫です」

「そうか。なら悪いな、討伐依頼を入れちまってるから今はそっちに集中させてくれ」

「わかりました。すいません、夜にお邪魔しちゃって」

それでは、と言い残し部屋を後にする幸助。

「あ、コースケ！」

ドアが閉まりかけた時、何かを思い出したようでランディが幸助を呼び止める。

「はいつ？」

「流しの船を一日貸切すると観光案内もしてくれるぞ。船頭は地元の人間だし俺よりも詳しいからいいんじゃないか？」

ポルトー子爵領は観光にも力を入れている街だ。

確かに幸助にはぴったりのサービスである。

「それは良さそうですね！ そのサービスを使ってみます。いい情報ありがとうございます！」

「おう。気をつけんだぞ」

翌朝。

空には雲がかかっているが、青空も少しだけ見える。

放射冷却が無かったおかげか、震えるほどの寒さは無い。

夜まで天気は大丈夫と踏んだ幸助は、朝食を済ますとホテルの前で船を拾う。

「あ、昨日のお兄さん。毎度っ」

見覚えのある船頭が幸助へ声をかける。

昨日と同じ時間に同じ場所である。

これがこの船頭の勤務パターンなのであろう。

「おはようございます。今日は一日貸切をお願いしてもいいですか？」

「荷物運び？ それとも観光案内？」

「観光案内です。お勧めのスポットとか食べ物を教えて頂きたくて」

「それならお任せ！ 大銀貨二枚、前払いね」

幸助は船へ乗り込むと船頭へ料金を支払う。

「それで、どんな所に行きたいの？」

「そうですね。まずはこの街に来たら絶対に行っておかなきゃって場所がありますか？」

「もちろん！ 街が一望できる絶景スポットがあるよ」

「なら最初はそこをお願いします」

はいよつと言いながら船の操作を始める船頭。  
するすると音もなく滑るように船が動き出す。

「お兄さん、昨日は造船工房で何してたの？ 観光するには渋い選  
択だよね」

「船についていろいろ教えてもらってたんです。たまたま知人の紹  
介がありました」

個別の内容に触れるわけにはいけないので、内容をぼかして説明  
する幸助。

「そうなんだ。それで、いろいろ勉強になったかい？」

「まだまだですね。船の世界も深いんだなって思いました」

ちょうどそのタイミングで船は水路にかかる橋に差し掛かる。

船頭と橋との隙間はギリギリだ。

背の高い船頭は頭をぶつけそうである。

橋を抜けると幸助は改めて船を観察する。

今乗っているのは至る所で見かける、いわゆる標準型の船だ。

一部腐食している部分や、周りと違う真新しい板が張られている  
場所もある。

真新しい板は補修の後であろう。

そして昨日ウィルゴの店で話したからこそ気になる部分がある。  
塗装である。

ウィルゴも言っていた通り、塗装することで船の寿命は増す。

しかし、足元を見ても塗装などが施された形跡はない。

「ん？ お兄さんどうした。やっぱり船が気になるか？」



「あ、はい。ちょっと……。船って防水のための塗装はしないのかな  
と思いでして」

「裏側は油を加工した防水剤が塗られてるよ。定期的に塗らないと  
すぐにダメになっちゃうからね」

結構大変なんだよと船頭は続ける。

確かにこれだけの大きさの船をメンテナンスするのは大変そうであ  
る。

「ちなみにどのくらいの頻度で塗り直しをしてるんですか？」

「二ヶ月に一回くらいかな。その度に工房へ一週間くらい預けない  
といけないんだ」

「へえ、それは大変そうですね……」

一週間預けるということは、その間船で稼ぐことはできなくなる  
ということだ。

しかもその都度費用も必要になる。

ウィルゴの塗装がどれだけ持つかは聞いていない幸助。

だが、あの話っぷりからすれば今よりは良くなるはずと考えてい  
る。

耐久性だけではなく、所有者を煩雑さからも解放してあげること  
ができる。

新たに見つけた強みをしっかりと心に刻む幸助。

「お兄さん、もうすぐだよ」

入り組んだ水路の両岸に並ぶ建物が途切れると景色が開ける。

ここから先は公園のようだ。

それと同時に公園の中心にそびえ立つ白い塔が幸助の視界に入る。

「もしかして、絶景スポットって魔物を見張る塔のことですか？」

「そうだよ。あれ？ もしかしてもう行ってた？」

「いえ。登れるとは思わなかったの。」

船から降りると改めてその景色を確認する幸助。

塔の向こうには広大な海が広がっている。

今来た水路は海までつながっており、海との境目には水門のようなものが見える。

嵐のときなどは閉めるのであろうと幸助は想像する。

「では行ってきます」

「はいよ。ここで待ってるからゆっくり行ってきてね」

船を降りると幸助は塔へ足を進める。

公園には観光客であろう家族連れが何組もいる。

ベンチからのんびりと海を眺める大人。

歓声をあげながら走り回る子供たち。

結局肝心なところは独りぼっちになってしまった幸助……。

「久しぶりだな。こんな背の高い建物」

塔をふもとから見上げる幸助。

高さはおよそ五十メートルくらいはある。

東京では大したことのない高さだが、この世界では今のところ最大である。

この塔も他の建物と同様に白い石が積まれてできているようだ。

入口から螺旋状になった階段を上る幸助。

「はあはあ……。運動不足が身に染みるな」

後ろから駆け上がったいく子どもたちに抜かれつつも、一歩ずつ階段を踏みしめる幸助。

息も絶え絶えにようやく最上部まで登ると、バルコニーのようになつた展望台へ出る。

そこに広がる景色に幸助は息をのむ。

「わお、確かに絶景だ。観光案内があつたら表紙の写真はここで確定だな」

雲が広がっているのは残念だが、街が一望できるその景色は圧巻である。

絨毯のように広がる屋根、そして屋根。

その隙間に時おり見える水路と人々。

遠くに目をやると、大陸の奥へ伸びている街道まで見える。

反対側に回ると監視員が一人、海へと目を光らせている。

景色は一面の海だ。視界内には島すら見当たらない。

唯一見えるのは帆を張つた大型の船が一隻だけだ。

回れ右して塔の内側を見ると、そこには大きな鐘がぶら下がっている。

魔物の脅威が発生した時に打ち鳴らされる鐘だ。

「さて、戻るか」

十分に景色を堪能すると幸助は船へ戻る。

その後、船頭の案内で製塩所や漁港、海鮮ランチなど島の名物を堪能する。

残念ながら刺身を食べる文化は無かった。

「はあ、疲れたなあ」

主な観光名所を一通り回った幸助。

まだ帰るには早いですが、時間よりも先に体力の限界が訪れたため、宿へ船を向けてもらっている。

座りながらパンパンに張った足をほぐしていると、既視感のある場所に差し掛かる。

「あれ？　ここ見たことのある景色だな」

しばらく景色に目を向ける幸助。

船が水路のカーブを抜けると赤い外壁の建物が目に入る。  
ウイルゴの店だ。

船の上で立ち上がり店内を覗くと少年の姿が目に残る。  
空き箱に腰かけ頼杖をつきながらぼうつと外を眺めている。

（もしかしたらウイルゴさんの息子さんかも。留守番してるのかな？　ちよっと話してみよ）

「すみません、ここで一旦泊めてください」

「あれ、また造船工房に用事？」

「ええ、ちよっと思いついたことがあります」

船を降りると幸助は工房へ入る。

中央で作業中の船は、昨日と同じ姿のように見える。

「こんにちはー。ウイルゴさんいるかな？」

「誰？ 親父なら出かけてるよ」

「僕は幸助。ウイルゴさんと一緒に仕事をしてるんだ」

「見ない顔だね」

「この街には来たばかりだから」

少し疑われているようだと言っていると幸助は感じる。

初対面なので少年の反応はもっともである。

幸助は造船についてどう思っているのか聞こうとしている。

ウイルゴの話では造船は古くてダサイから継ぎたくないとのことであつた。

話を聞くには二人の距離を詰めなければならぬ。

魔道具に興味を持っていると聞いていたので、話のきっかけを魔道具で掴む。

「隣町から魔道具を持って来てね。その関係でウイルゴさんと知り合っただ」

「なに！ 兄ちゃん魔道具のこと知ってるの？ 話聞かせてよ！」

魔道具という言葉に一瞬で態度が変わる少年。

キラキラ目を輝かせ少年が幸助へ熱い視線を送る。

「俺、クレト！ よろしく！」

「改めて、僕は幸助だよ。よろしくね」

そう言いながら幸助は隣にあつた空き箱を裏返し、腰かける。  
場所はクレトの斜め横。

正面よりも心を開いてもらいやすい効果があるからだ。

「それでそれで、どんな魔道具を持ってきたの？」

「魔道コンロ。薪がなくてもお湯が沸かせる便利な魔道具なんだけ  
ど、見たことある？」

「うん！ あるよ！」

クレトの話では領内の料理店で魔道コンロを見たことがあるそう  
だ。

恐らく旧来の手法である受注生産方式で製造したものであろう。

「何でクレト君は魔道具に興味を持つてるの？」

「だって、すごいじゃん！ 魔法が使えなくても魔法が使えるんだ  
よ」

「確かに」

禅問答のような回答だが、幸助はその応えに共感する。

魔法が使えない人にとっては夢のようなアイテムであることは確  
かだ。

「コースケは魔道具作れるの？」

「ううん、僕は売る方がメインだから。でも作ってる人とは仲良し  
だよ」

魔道コンロも一緒に開発したからねと幸助は続ける。

作ってる人とはもちろん二一ナのことである。

「すげーなー！ それで、作ってる人ってのはどんな人なの？」

「そうだなあ。かなりマニアックな女性ってイメージかな。とてもお貴族様の娘には見えないよ。あ、親しみやすいつて意味だね」

そこまで話すと幸助はクレトの反応を窺う。

しかしクレトはというと、下を向いて黙ってしまった。

「どうしたの？ クレト君」

「やっぱり……、魔道具を作るには貴族じゃなきゃダメなの？ 親父は『お貴族様の道楽』ってよく言ってたんだ」

「うーん、小さな頃から魔道具の研究者になるために勉強してきた人ばかりだからね」

「そっか。なら俺はもう手遅れなんだ……」

深いため息をつくクレト。

歳はまだ十二歳だ。手遅れというわけではない。

だが、魔道具研究者になるためには教育のための資金が要る。

家庭環境も大切だ。ウィルゴは反対派である。

夢をかなえるには相当険しい道が待っているのは容易に想像できる。

ここで諦めろというのなら誰にでもできる。

だが、それではただのウィルゴの回し者でしかなくなる。

それでは余計な反発を生みかねない。

そこで幸助は話題を切り替える。

「クレト君は船を造ることはできるの？」

「もちろん。親父はなんて言ってるか知らないけど、将来のためにちゃんと手伝いはしてきたからね」

この言葉に幸助は安心する。

親の言葉に反発したくなる年頃だ。

クレトはちゃんと現実をとらえ、将来のことを考えているようである。

「それで、もしも将来的に魔道具で動く船が造れるようになったらどう思う?」

「それ、どういう意味?」

「棹を使わなくても、魔道具を操作するだけで自在に操れる船を造れるようになったらどう思うってこと」

魔道具店の将来的な展望として、幸助は熱操作の次に回転運動による動力を考えているのだ。

ニーナには口頭で打診しただけの状況ではあるが、できるだろうという回答は得ている。

馬車にモーターを。

船には船外機を。

活用の幅はかなり広い。

「……………」

「……………」

「めっちゃカッコイイよ! それ!」

「まだ研究もこれからだけど、実現できるといいね」

「うん!」

クレトとの話を終えると、幸助はウィルゴの店を後にする。

朝から曇り空であったが夕方になり、さらに雲の厚みが増す。

雨になるかもしれない。そう思いながら幸助は宿へ帰る。



その夜。

歩き回って疲れ果てた幸助は、軽めの夕食を済ますと部屋へ戻る。幸助が宿についた頃パラパラ降り始めた雨は勢いを増し、容赦なく建物を、水路を叩いている。

（はぁ、日中は天気がもってよかったなあ。それにしても今日は疲れた。明日に備えてさっさと寝よう）

そう思いなら幸助がベッドに入った刹那。

カン！　カン！　カン！　カン！  
カン！　カン！　カン！　カン！

街中に悲鳴にも似た鐘の音が響き渡る。

## 6 ランディが無双したらしい(前書き)

水の災害が連想される表現があります。

苦手な方はご注意ください。

## 6・ランディが無双したらしい

ガチャン！

「キヤツ」

「サラ！ 大丈夫か？」

時刻は夜の営業が終わった後のこと。

『アロルドの Pasta 亭』に、皿の割れる音が響く。

「大丈夫。ごめんなさい。お皿、割っちゃって」

「怪我がなきゃそれでいいが、ほんと大丈夫か？ 最近気もそぞろだぞ」

「だって……」

幸助が隣町に行くと聞いてから、サラの心の中には常にもやもやとした気持ちが蠢いていた。

それがただ寂しいだけなのか不安なのは、サラ自身にも分かっていたいなかった。

だが、今回は違う。

一瞬だが胸を突き刺すような痛みが走った。

幸助が何か危険なことに巻き込まれているのかもしれない。

不安は確信になる。

駆け付けたい衝動に駆られるが、今飛び出したとしてもすぐには到着できない。

今できることはただ一つ。

両手を胸の前で組み、サラは祈る。

(お願い！ コースケさんに、何事ありませんように！)

カン！ カン！ カン！ カン！  
カン！ カン！ カン！ カン！

雨の夜。

ポルトー子爵領では至る所で鐘の音が鳴り響いている。

「な、何が起こったんだ？」

ベッドから飛び起きると幸助は窓を開け、外を見る。

大粒の雨が吹き込んでくるだけで何も見えない。  
すぐに窓を閉める。

「鐘の音？」

ここで幸助は、魔物の脅威が発生した場合に鐘が鳴らされると聞いたことを思い出す。

目の前の現象と事前に聞いていた情報が結びつく。

「てことは魔物？ どうしよう、どうしたらいいんだ」

今まで経験したことのない状況に焦る幸助。

気温は低いのに、じわっと手に汗をかく。

ここで焦って変な行動をすれば悪手になりかねない。  
そう思い幸助は深呼吸する。

少し落ち着くと、街に到着したときにランディが言っていた言葉を思い出す。

「そういえば鐘の音が聞こえたらとにかく建物から出るなって言うてたな」

相手は水の魔物だ。

水路から離れた建物までは襲ってこない。

それは知っている。

だが不安で頭がおかしくなりそうな幸助。

「落ち着かない。他の部屋に行くくらいはいいよな」

階下に足を運ぶとランディの部屋を訪れる。

途中、廊下で不安そうな顔をした宿泊客と何人もすれ違っ

「ランディーさん。幸助です！」

ドアをノックしながらランディを呼ぶが反応は無い。

ノブに手をかけるが鍵がかかっている。

部屋にはいないようだ。

仕方ないので一階まで降りる。

まだ酒場は営業中であつたが、皆一様に不安げな顔をしている。  
ざわつく店内の客に向け、従業員が声を張っている。

「絶対に建物から出ないください！ ここは安全です。魔物はこ

「こまでは襲ってきません！」

やはり魔物の襲来で間違いないようだ。

魔物は建物まではやってこない。

ランディ、そして現地の人である従業員も同じことを言っている。

やはり部屋でじっとしているしかない。

そう考えた幸助は部屋へ戻る。

部屋に戻るとバスツとベッドへ身を投げる幸助。

もう鐘の音は止んでいた。

窓をたたく雨の音だけが部屋の中を満たしている。

「はあ、結局一睡もできなかったな」

翌朝。

宿の部屋から外を眺める幸助。

雨は夜半過ぎには上がった。

日の出とともに少しずつ状況が見えてくる。

建物などの町並みはいつもと変わらない。

唯一の違いは、雨でしっとり濡れていることくらいだ。

次いで視線を水路へ下ると幸助は息を飲む。

いつもであれば、日の出とともに船が活動を始め、ゆったりとした雰囲気醸し出す水路。

しかし、今日は違う。

まるで台風が通り過ぎた後の川のようにである。

水は茶色く濁り、至る所に木片やゴミのようなものが浮いている。船は一艘も見当たらない。

「こりゃ大変なことになったんじゃないか？」

身なりを整えると幸助はいつも通り宿の一階へ向かう。

状況がどうなっているか分からない。

何ができるわけでもないが、一人にいるのも不安なのだ。

長い階段を降り一階につくと、そこで展開されている光景に幸助は拍子抜けする。

朝食が提供されていたのだ。

一部の人は慌ただしく出入りしているものの、光景はほぼいつも通りである。

一気に心が落ち着く幸助。

こんな時でもサービス提供を止めない宿屋に心の中で感謝する。

ぐう……。

緊張がほぐれたことで、急に空腹感が幸助を襲う。

これ幸いと朝食を受け取ると、パンをかじりながら他の客の会話を耳を傾ける。

「昨夜は大変だったみたいだな」

「ええ、何でも水路まで来たのは二十年ぶりらしいわよ」

「俺らは運の悪いタイミングに来ちゃったんだな」

「でも、水の魔物だから水上にいない限りは安全っていうのは安心よね」

「ああ、そうだな」

観光客同士の会話のようだ。

皆、昨夜起こったことを話している。

話によると魔物はあらかた駆逐されたそうだ。

だが被害状況まではわからない。

自分の眼で確認するため、幸助は手早く朝食を済ませると宿の外へ出る。

「うわあ、こりゃ酷いなあ」

改めて水路の状況を見る幸助。

ゴミなどに混ざり、確実に船の破片であろう木片が多数いている。船の被害は大きそうである。

いつも宿の客待ちをしている場所に船は一艘もない。

もちろん昨日行動を共にした船頭もいない。

そのまま水路沿いを歩く幸助。

歩く場所は念のため一番水路から離れている場所だ。

あらかた駆逐されたと聞いてはいるが、何が起こるか分からない。

所々歩道に置かれている船を避けながら幸助は進む。

鐘の音を聞いて、慌てて陸に上げたのであるう。

時おり頭を抱え込んだ人や呆然と水路を眺める人もいる。

船を失った人かもしれないと幸助は考える。

「あれ？」

しばらく歩くと正面から見知った人影が近づくの気づく。

装備を身に纏ったランディ達である。



「ランディさん！」

「コースケ！ お前は無事だったか」

「ええ、ずっと宿にいましたので」

「まだ魔物が残ってるかもしれないぞ。こんな所で何やってんだ。」

お前は貧弱なんだから宿でじっとしてろよ」

「は、はい、すみません……」

ランディ達と共に宿へ戻る幸助。

歩きながら昨夜からの出来事を聞く。

ランディ達は鐘の音とともに行動を開始。

騎士団と連携し、数十匹のソードヘッドシャークを仕留めたとのことだ。

本来であれば群れが近寄ってきた場合、即座に水門が閉められる。そもそも群れができないよう日常的に討伐をしている。

しかし、今回は予想外の事態が発生。

特別大きな個体が、群れを率いて突然襲ってきたのだ。

鋼のような鋭い頭で頑丈な水門を破壊。

結果、群れの一部が水路へ侵入してしまったとのことだ。

特大の魔物が暴れた結果、多くの船が破壊されてしまった。

ただし、死者はいないようだ。

襲来が水路を使用しない夜間だったのが幸いした。

ランディが見聞きした範囲はここまでである。

「ランディさん、大活躍でしたね」

「おう。さすがに超特大のヤツには手こずったがな。とどめは騎士

団に持つてかれちまつたし」

「その超特大の魔物は肉として流通するのか気になりますね」

「こんな時に何言ってるんだ。そんなの研究に回されるに決まってるだろ」

「そ、そうですか……」

少しだけ大トロを期待した幸助は、肩を落とす。

翌日。

領主から安全宣言が出されると、街の人総出で水路の復旧が始まる。

水路の両岸から、壊れず残った船の上から、浮遊するゴミなどを取り除く。

幸助も午前中はその作業に参加する。

しかし水路の幅は十メートルくらいある。

船上からでなければできない作業が多く、午後からの作業は断念した。

（こりゃ失われた船を早めに補充しないと、経済にも影響が出そうだな）

この街では船が輸送の大部分を担っている。

人や物の移動が滞れば、生活に影響が出るのは容易に想像できる。

幸助はこの状況下で、自分自身ができることを考える。

（船といえばウィルゴさんか。今頃修理で忙しいかな？）

水路には全損ではなく一部だけ破損している船も見かけた幸助。修理すれば使える船も多いはずだ。造船工房は俄かに忙しくなっているだろうと想像する。

(うん？ ウィルゴさんといえば……)

ここであることを思い出す幸助。

ウィルゴの店の奥に所狭しと並べられていたもの。

腕がなまるからと売れもしないのに作り続けていたもの。

そう、カラフルな船たちだ。

「これだ！」

パチンと手をたたきながら声を上げる幸助。

ウィルゴの店にある在庫が役に立つかもしれない。そう考えたのだ。

思いついたら即行動である。

幸助は道順を思い出しながら早足でウィルゴの店へ向かう。

「あら、コースケちゃん。こんな時にどうしたの？」

案の定、ウィルゴと息子のクレトは船の修理に勤しんでいた。店内には所狭しと破損した船が並べられている。

「ここにある在庫の船について相談があります」

「在庫がどうしたの？」

「この在庫、もう買い手は決まっていますか？」

街からは多くの船が失われている。  
確実に需要が発生している状況だ。  
既に二・三艘くらい売れていても不思議ではない。

「決まってるよ」

「では、売れる見込みはありますか？」

「ダメだと思うな。個人の船頭じゃ、まとまったお金が用意できないからね」

「お金のある貴族は？」

「お貴族様は買わないわよ。もっと豪華な造りじゃないと」

やはり現状でもこの船を買えるのはそれなりの規模の商会だけのようだ。

そこで幸助はここに来るまでの間に考えていたことを相談する。

「一定期間有料で貸し出すってことは？」

「ダメよ、そんなの。しばらくは目が回るくらい忙しくなりそうだし、有料での貸出なんて制度、この街にはないよ」

「そうですか……」

ウイルゴも前例のないことを即断することに抵抗があるようだ。

「ウイルゴさん」

「なあに？」

「ならば割り切って考えて、一定期間だけ無償で貸し出してみませんか？」

何言ってるんだという顔を浮かべるウイルゴ。

構わず幸助は続ける。

「ウイルゴさん、塗装した船を造りはじめたきっかけは、色や耐久性から始まり、結果として街全体が良くなるってことでしたよね？」  
「そうよ」

「この状況下で一番街のためになることは、ここにある在庫を水路に放つことです。船にとつても、ここで眠っているより使ってもらえた方が幸せじゃないですか？」

「そりゃそうだけど……。借りられた人とそうじゃない人で揉めちゃわない？」

ウイルゴの言うことはもっともである。

だが、何らかの解決方法があるはずである。

ウイルゴに迷惑をかけず、街にとつて良いこととなる方法が。

ここで幸助は、今まで口にするのを避けていた単語を出す。

「造船組合を通せば、大陸との渡し船とか優先順位の高い場所に船を配置してもらえないでしょうか？ そうすればウイルゴさんに迷惑をかけずにできるかもしれません」

「うーん……。確かに組合ならやってくれると思うけど……。あたしは行きたくないよ」

「僕が行ってきます。行動は少しでも早い方がいいですから」

腕を組み考え込むウイルゴ。

クレトは不安げな表情で父の横顔を見ている。

「……………」

三十秒ほど沈黙が続くと、ゆっくりと口を開く。

「ならアルセニオっちを頼るといいよ。組合にも顔が利くから」

その後すぐ幸助はアルセニオを訪れると、二人で連れ立って造船組合を訪れる。

アルセニオも幸助の方針に共感してくれたので、すぐに行動してもらえた。

組合で幸助たちを迎えたのは若い事務員である。

「アルセニオさん。こんな時にどのようなご用ですか？」

「話はコイツから聞いてやってくれ」

「初めまして。幸助といいますが、船の修理で忙しいウィルゴさんの代わりに来ました」

「ああ！ ウィルゴさんとかね。それでどんな用だい？」

「実はウィルゴさんの店に二十艘の船があるんです。この状況が落ち着くまで無償で貸出できますので、その申し出に来ました」

「ホントに！ そうしてくれるとすっごい助かるよ！」

ウィルゴの船ということで、抵抗や門前払いを食らうかもしれないなと考えていた幸助は、その反応に拍子抜けする。

事務員の話によると、街の機能を停止させないため、組合員総出で船集めに奔走しているということだ。

しかし通常は受注生産の船。

そうそう余剰は無い。

今のところ用意できそうなのは領主所有の予備船が十二艘と他に八艘だけ。

数の少なさに困り果てていたところだったのだ。

「ところでウイルゴさん、元気にしてる？」

「はい。今日は一生懸命船の修理をしていますよ」

「それはよかった。気が向いたら組合に戻って来てくださいって伝えておいてね」

「えっ？ あ、はい。分かりました」

想定外の言葉をもらい、驚く幸助。

ウイルゴが組合を脱退して数年経つ。

組合内の状況も変わっているのかもしれないと考える。

その後、船の引き渡し方法を打ち合わせると組合を後にする。

そして翌日。

果たして水路には、二十艘のカラフルな船が放たれることになった。

## 7・彩のある街

魔物の襲来から十日後。

既に街はのんびりとした日常を取り戻している。

水路には最終的に五十艘の船が臨時投入された。

これにより、心配されていた人や物の停滞は最小限に留まる。

かき集められたのは、倉庫で長年埃をかぶっていたり退役して薪になる直前だったボロ船がほとんどだ。

しかし、投入された船の中でひとときわ異彩を放つ船が二十艘ある。そう、ウィルゴの船だ。

それ以来、水路の光景が少しだけ変わった。

白い建物に挟まれた水路に鮮やかな船。

コントラストが実にマッチしている。

市民の反応も上々だ。

大人は「これからは船もお洒落じゃなきゃね」と話題にし、子どもは「あ、赤の船みつけ!」とか「黄色が二回目だ、今日はラッキ―!」などという反応を見せている。

「こんなの船じゃない。今時の奴らは」という反応はごく一部の人のみからしか聞こえない。

まあ、そういう人に限って声は大きいのだが。

そして幸助はというと……。

「はあ、今回は結局何もできなかつたなあ」



宿の窓から水路をのんびりと眺める幸助。  
魔物の襲来があるまでは、ウイルゴが抱えている在庫の現金化を  
真剣に考えていた。

耐久性が強いという強みを前面に打ち出し、現金一括で買える客  
の開拓。

小型化し、安価なタイプの船を開発。

船頭に対するレンタルや、観光客に対する屋形船のようなサービ  
スの展開。

それらが非現実的であれば造船組合への直談判。

それが全てが計画倒れとなってしまった。

無理やり新製品の開発や決済方法を検討する必要が、ほぼ無くな  
ったからだ。

「ウイルゴさん、うまくやってるかなあ？」

今、ウイルゴは造船組合へ行っている。

再び組合へ加盟するためだ。

ウイルゴの船を無償貸出した後も、幸助は船の配置などの情報  
をもらうため何度か組合に出入りをしていた。

そこで、組合の現状を探っていたのだ。

結果、事務員の言葉通り、ウイルゴは再加盟できる可能性が非常  
に高いことが判明。

理由は組合員の世代交代にある。

ウイルゴが脱退してから程なく、ケンカ相手の元組合長は高齢に  
より引退。

その後、他の人も世代交代が進み、若い組合員が増加した。ウイルゴのことを異端扱いしていた層は多くがいなくなっていたのだ。

だから幸助は、改善の着地点を「組合へ戻る」ということに絞る。

船の修理で忙しかったウイルゴ。

店が落ち着きを取り戻した頃、幸助は組合の事務員から預かった言葉を伝える。

「組合に戻ってきてください」という言葉だ。

当初は幸助の予想通りウイルゴは激しい抵抗をした。

世代交代が進んだということを伝えても同じ。

しかし、ウイルゴの船は組合内でも評価されているという話を伝えると態度は変わる。

異端の原因となった船が評価されているとは思わなかったようだ。

結果、組合へ戻ることを決意する。

そして理事会が開催される今日、ウイルゴは組合に向かったのだ。

「以上、魔物襲撃以降の報告でした」

造船組合の会議室では、組合の理事会が開催されている。

本日の議題は主に二つだ。

一つ目は魔物襲撃による影響とその後の活動の報告。

二つ目は新規加盟希望者の承認だ。

「では、次の議題へ入ります。今月の加盟希望者は一名、ウィルゴさんです」

会議室のドアが開くと、神妙な面持ちのウィルゴが入室する。正面に立つと自己紹介をする。

「知ってる人も多いと思うけど、あたしはウィルゴよ」

ウィルゴにとっては二回目の経験である。手短に言葉を終えると司会へ視線を送る。

組合へ加入するには入会金や年会費に合わせ、組合理事の過半数の賛成が必要となる。

これからその判断が下されるのだ。

「それではウィルゴさんの加盟を承認する方は挙手してください」

ひとり、そしてまたひとり。

司会の声に合わせて、参加者が挙手をする。

過半数の手が挙げたことを確認すると、司会は続ける。

「六名手が挙がりました。賛成者多数でウィルゴさんの造船組合加盟を認め……」

「異議あり!!」

司会の言葉は大きな声で遮られる。

白髪交じりの男が異議を唱えたのだ。

「一度脱退した奴の再入会など認めない!!」

「会則にはそのような条項はありませんが……」

「だったら今その条項を加えればいい。緊急動議だ！」

「宜しいでしょうか？」

ここで別な女性が挙手をすると司会は「どうぞ」と指名する。

「何故再入会が認められないのでしょうか？ 具体的におっしゃっていただかないと」

「あいつの船は気に食わん！」

腕を組みながらそっぽを向く白髪男。

答えが答えになっていない。

「どのように気に食わないのですか。可決されたことに異議を唱えるのですから合理的な説明を望みます」

「そつだそつだ！」別の若い男性も加勢する。

議論が紛糾する。

既に司会の進行は役に立っていない。

呆気にとられながら成り行きを見守るウィルゴ。

「お前ら正気か？ アイツのやってる塗装をすると耐久性が増えるんだぞ。そうしたらメンテナンスで儲からなくなるだろ！」

「そのぶん装備を充実して単価を上げればいいんじゃないかしら。他にも考えれば色々見つかるでしょうに」

「客のメリットにも繋がってるし、街でも評判ですよ。ウィルゴさんの船」

「とにかく俺は認めん！」

「魔道具は進化してるっていつのに。だから造船は旧態依然としてるんだよ」

「そつだ！ 古い思考は組合の弊害だ！」

みるみる顔が赤くなる白髪男。

バン！ と机をたたくと立ち上がる。

「もう知らん！ 勝手にしろ！」

その言葉を残し、会議室から出ていってしまった。

しばらく室内が沈黙に包まれるが、己の職務を思い出した司会が仕切りなおす。

「ええつと、では改めまして。賛成多数でウイルゴさんの加盟を承認します」

パチパチと拍手が湧き上がる。

「待ってたよ！」というヤジも飛ぶ。

照れくさそうに頭を下げるウイルゴ。

「ではウイルゴさん。ひとことお願いします」

「初めましての人もお久しぶりの人も、改めてよろしくっ」

「異議も無いようですので、これで理事会を閉会します」

理事会が終了すると、続々とウイルゴの周りに人が集まる。

ウイルゴにとっては懐かしい顔が多い。

もちろんふてぶてしい顔で退室した人もいる。

加盟に反対した人たちだ。

「ウイルゴさん、お帰りなさい！」

「あらあたー坊、大きくなっただじゃない、横に。みっちゃん久しぶりね」

「ウイルゴさん、あのときはごめんね。ほら。前組合長は権力持ってたし反対できない雰囲気だったでしょ。だからあの時は同調するしかなかったんだ」

「うん。いいの。あたしもあの時は頭に血が上っちゃって、ちゃんとした判断ができなかったからね」

「それより、塗装した船。あれいいね！ 市民からも問い合わせが入ってるんだよね。あの素敵な船はどこで手に入るのかって」

「えー、もうそんな問い合わせがあるの!?!」

ウイルゴを中心とした賑やかな時間はそれからしばらく続くことになる。

こうしてウイルゴは、商売を継続するうえで最大の問題を解消したのであった。

「ウイルゴさん、明日には街を出ようと思います」

「コースケちゃん、もう帰っちゃうの？ 寂しいなあ」

ウイルゴの加盟が決まった翌日。

幸助はウイルゴの店でその結果を耳にすると、別れの挨拶をする。アヴィーラ伯爵領行きの馬車が出る日程をランディから聞いていた。

加盟が決まったらこれ以上幸助にできることは無い。

当初の目的である魔道コンロの販売も無事に始まった。だから帰ると決めていたのだ。

「クレト君も元気だね」

「うん！」

元気な返事をするクレトはウィルゴと目を合わせ、ニヤツと笑う。

「俺、工房を継ぐって親父に言ったんだ」

「そっか。偉いぞ、クレト君」

頭をガシガシと撫でる幸助。

「やめるよー」とクレトは言っているが、満更でもない様子だ。

「よかったですね、ウィルゴさん。後継者問題も解決ですね」

「んもお、コースケちゃんのおかげよ！」

「船の修理をしてる親父、カツコよかったんだ。お客さんがみんな喜んでくれてさ。こんなに人の役に立ってるんだって知ったんだよ。俺も親父みたいに立派な造船工になるよ！」

「ううう……クレトお」

ウィルゴが両手を広げ、ガシツとクレトに抱き付こうとすると、クレトはひらりと躲す。

「ちよ、ちよっと。何で逃げんのよ」

「やめるよ親父、恥ずかしいだろ！」

「あははは」

幸助が笑うとつられて親子も笑う。

「では僕はこれで。またいずれ遊びに来ますね」

「うん。コースケちゃん、元気でね！」

「にーちゃん、魔道具のこともよろしくね！」

「もちろん！」

「えっ、クレト。魔道具のことって？」

「それはこっちの話」

「ずるいよお、内緒」とは

ウィルゴの声を背後に幸助は『ウィルゴーゴー』を後にする。

店頭には組合加盟店の証であるプレートが掲げられていた。

そして翌日。

行きと同様ランディ達の護衛の下、幸助は帰途につく。

ランディ達も魔物襲来の報酬を受け取り、ひとしきりこの街を楽しんだようである。

アヴィーラ伯爵領に到着したのは、出発してから約一カ月後である。

夜、街へ到着した幸助はいつもの宿屋で夜を明かすと、ランチタイム前に『アロルドの Pasta 亭』へ向かう。

一カ月前と変わらず店頭には Pasta の立て看板が立っている。

毎日ちゃんと働いているようだ。

たった一カ月であるがひどく懐かしく感じる幸助。

ギイ。

ドアが開き、店内に光が差し込む。

トマトバジルソースの香りが幸助を迎える。

背中を向けせつせと開店準備をしているサラ。



来訪者に気付くと口を開きながら振り返る。

「まだ営業してません……。コースケ、さん？」

「久しぶり、サラ」

目が合う二人。

手にした布巾を落とすサラ。

みるみる表情が崩れていく。

「コースケさん……！」

幸助へ駆け寄るとガシツと抱き付く。

「もう、コースケさんのバカバカバカ………バカ」

「えっ、サラ？」

嗚咽しながらバカと繰り返すサラ。

状況が呑み込めない幸助は厨房からやって来たアロルドを見る。

「お前が隣町に行つてからずっと心配してたんだぞ」

「何か……、悪い予感がして……。それで、コースケさん、大丈夫  
かなつて……。心配してたんだから！」

ようやく理解する幸助。

両手をサラの肩に置き少し伸ばす。

顔はもう涙でぐしゃぐしゃだ。

「そっか。サラ、ありがとね」

そう言いながらサラの頭の優しくポンポンする幸助。

「うん……、無事でよかった。コースケさん」

「それにしても、やっぱりサラは泣き虫さんだな」

「ち……、違うもん！」

いつの日かのようにサラの涙を拭う幸助。

サラもようやく落ち着いてきたようで、幸助から離れる。

「コースケさん、何か忘れてる」

「うん？ お土産なら持ってきたよ」

「違うよー！」

出発前に何か約束してなかった必死に思い出そうとする幸助。  
しかし何も思いつかない。

「もしかして、帰りが遅くなったこと怒ってる？」

「違うよ、もう……。帰ってきたら何て言うの？」

サラの意図を理解する幸助。

ここまで聞いたら答えは一つしかない。

「ただいま、サラ」

サラは満面の笑みで答える。

「おかえりなさい、コースケさん！」

## 7・彩のある街（後書き）

というわけで、5章は終了です。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

## 1・お土産行脚

ある日の午後。

晴れ渡った空の下。

きりつと冷える空気の中。

アヴィーラ伯爵領のとある広場では、キャツキャと子ども達遊び、戯れている。

この広場は商業街と工業街の境目にある。

それほど広くはないが、冬でも葉を落とすことのない広葉樹やちよつとしたアスレチック遊具などが整備されている。

街の中央にあるロータリー広場と合わせ、数少ない市民の憩いの場だ。

「久しぶりなの！」

「久しぶりかな？ パロちゃん」

「久しぶりだね！ パロちゃん」

子ども達の中にパロがいた。

商売のターゲットを冒険者へ切り替えてからは、広場では見かけなくなつた姿である。

久しぶりの登場に、興奮気味に迎え入れられている。

「あつちであそぶ？ パロちゃん」

「あつちであそぼ！ パロちゃん」

「あそぶの！」

そう声をかけあうと、三人は大きな木の下へ手を繋いで走り出す。

パロを中心に、右に水色髪の子。左にピンク髪の子だ。背は頭半分パロの方が高い。

どうやら、かなり仲の良い友人同士のような様子である。

転げまわりながら追いかけてこをしたかと思えば地面に座ってごっこ遊びを始める。

パロの父ホルガーはそんな様子を暖かな眼差しで見つめる。しかし毎日遅くまで働き詰めだったホルガーを眠気が襲う。大きなあくびを一度すると、ベンチに腰かけたまま腕を組み目を閉じる。

……………。

どれくらい時間が経過しただろうか。

ホルガーが目を開けると日はだいぶ傾いていた。

「!? もう夕方か」

パロ達は相変わらずごっこ遊びをしているようだ。地面に引かれた線は部屋の壁のようである。ホルガーがパロの側により声をかける。

「パロ、帰るぞ」

「えー、もっと遊びたいの!」

「また連れて来てやる」

ごっこ遊びでお母さん役になり切っていたパロは、残念そうに耳を垂らす。

また遊んでやってくれと二人の友達に言い残すと、ホルガーはパロの手を引き家路へと向かう。

「アロルドさん。はい、お土産です」

幸助が隣街から戻り『アロルドの Pasta 亭』での再会を済ませた後のこと。

開店前の店内にて、幸助は土産の詰まった袋をテーブルへ置く。どすつと音を立てる袋。大きさは相当ある。スーパーに売っている十キロの米を軽く上回る。

「何が入ってるんだ、これ？」

「干し貝です」

袋の中にぎっしり詰まっていたのは、アサリのような貝のむき身を干したものだ。

袋を開けると中身を手に取るアロルド。

海鮮の香りが広がる。

造船工房であるウイルゴの店の改善は、魔物の襲撃により思わぬ方向に着地した。

幸助の改善案はどれも実行されることになかったため、報酬の受け取りを遠慮したのだ。

それでもウイルゴは、改善のめどが立ったのだから報酬を払うと言ってくれた。

だが、幸助は固辞した。

ならばせめて気持ちだけでもと渡されたのが、この干し貝である。

何でも奥さんの実家で取り扱っている商品だそう。

「どこからどう見ても干し貝だな」

「アロルドさん、これ、パスタの材料に使えませんか？」

「パスタにか？ そういえば陸の食材しか使ってなかったからな。面白いことになりそうだな」

もともと自慢のトマトバジルソースで勝負をしていたアロルド。パスタ以外の追加メニューも肉が中心である。今まで海鮮を扱おうとは微塵も思っていなかった。

「で、コースケ。お前は何が食べたいんだ？」

幸助との付き合いも長くなったアロルド。行動パターンが読めてきたようである。

「貝といえば……」

「貝といえば？」

「もちろん、ボンゴレです！」

「ボンゴレ？ 何だそれ」

「貝の旨みが出たパスタです。白ワインを入れて作るのが僕の好みです」

またしても大雑把な説明をする幸助。

もちろん食べる専門だ。作ったことは無い。

友人の経営する店で食べた時に、カウンター越しに作る姿を見たことがあるだけだ。

「僕が食べたことがあるのは生の貝を使ったもので、干し貝ではどうなるか分かりません。アロルドさん、あとはお任せします！」

「また丸投げか！」

「うんうん。やっぱりこれだよ！」

ここでサラが会話に入る。

いつものやり取りが戻ってきたことで、サラの顔に自然な笑顔が戻る。

ここでふと幸助は厨房を見ると、せっせと大鍋をかき回している青年がいることに気付く。

「アロルドさん、厨房にいる人は誰ですか？」

「ああ、あいつか。見習いを雇った」

「へえ、見習いですか」

隣町に出る前に、そろそろ見習いもと話していたことを思い出す幸助。

あれから一カ月しか経っていない。

アロルドのフットワークが軽いことに驚く。

「せっかくだから紹介する。おい、マルコ！ ちょっとこっちに来い」

アロルドが厨房に声をかけると、マルコと呼ばれた青年がやって来る。

まだ少しあどけなさが残る顔に茶色の髪。

年の頃はサラと同じくらいであろうか。

「アロルドさん、何ですか？」

「こいつを紹介する。コースケって言って、たまに無茶な料理のりクエストをしてくる奴だ」



「何ですか、その紹介。ま、いいや。僕は幸助だよ。よろしくね」  
「あ、ああ……」

幸助は目を合わせようとしないマルコに違和感を感じる。  
避けられる理由もない。人見知りなのかもしれないと考える。

「コースケさんはね、いろいろすごいんだよ！」

「そっか……。じゃあ、俺は仕込みがあるから戻るよ」

そう言うとマルコはそそくさと厨房へ戻る。  
覇気のない背中に三人の視線が注がれる。

「何だあいつ、不愛想だな」

「人見知りなんですかね？」

「そんなことなかったけどなあ」

首をかしげるサラ。

マルコの態度はあまりにも素っ気なかった。

混ぜていた鍋の具合が気になっていたのだからと幸助は考えることにした。

「そうだ。そういえばお前に味見してもらいたいものがある。飯食  
つていくよな？」

「もちろん。トマトバジルパスタを食べに来ましたから」

「ならパスタと一緒に持っていく。待ってる」

パスタが来るまでの間、幸助はサラへ土産話をする。  
もちろん話題の中心は魔物の襲撃のことだ。

「へえ。やっぱり私の悪い予感は当たってたんだ」

「まあ、半分かな。直接の脅威は無かったからね」

「でも船に乗ってたら危なかったじゃん！」

「そ、そうだね……」

幸助がサラの言葉にタジタジになったその時、アロルドが皿を手にやって来る。

コトリと幸助の前に置かれた皿は二つ。

一つはいつものトマトバジルパスタ。もう一つの皿には黄色のクリームのようなものが無造作に入っているだけだ。

幸助は謎の物体を指差しアロルドへ質問する。

「これは何ですか？」

「牛の乳と卵、砂糖を混ぜて作った甘いクリームだ。生クリームばかりだと飽きるってミレーヌが言うから作ってみた」

どうやらアロルドは妻から別なスイーツを要求されたようだ。業績が向上したらそれはそれで色々大変なようである。

幸助はスプーンでクリームを掬うと口へ入れる。

口の中で広がるのは懐かしいあの味であった。

「これは！」

「どうした？」

「紛うことなきカスタードクリームです」

「カスタードクリーム？　なんだ。お前の知っているものだったか」

残念そうな表情を浮かべるアロルド。

慌てて幸助はフォークする。

「僕は作り方まで知らないですから。すごい美味しいです！」

「そ、そうか」

「これって、たくさんありますか？」

「いや、試作だからもう無いぞ」

「ならお願いなんですが……」

そう言うと幸助は、カスタードクリームをパンの中に入れたものを幾つか作ってほしいとリクエストする。

そう、クリームパンである。

アロルドの快諾を受けると幸助はペロリとパスタを平らげ、店を後にする。

「ふう、やっぱりアロルドさんのパスタは最高だな」

久しぶりの味に満足する幸助。

メインストリートを西へ向かう。

行先は、小麦店であるルティアの店だ。

「こんにちはー、ルティアさん」

「あら、コースケ。帰ってきてたのね。サラちゃんには会った？  
だいぶ心配してたよ」

「はい。さっき会ってきました」

「そう。ならよかった。それで、今日はどうしたの？」

「隣町のお土産を持って来ました」

そう言うと幸助はルティアにも干し貝が詰まった袋を渡す。  
袋のサイズはアロルドへ渡したものよりもかなり小さめだ。

「なあに、それ？」

「干し貝です。炙ってよし。アヒージョによし。そのまま売っても  
よし」

「ふふ。せっかくコースケからもらったのに売るわけないじゃない。酒のあてにさせてもらうよ」

長くてしっとりした紫色の髪をかきあげながら、ありがとねと言  
うルティア。

「おかわりが必要だったらまた言ってください。いっぱいあります  
から」

「こんなにあつたら、すぐには食べきれないでしょ。もしかして、  
一緒に食べてくれるのかしら？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるルティア。

幸助は久しぶりのオトナの洗礼に慌てる。

「あ、それはその……」

「うふふ。冗談よ」

ルティアの手のひらで転がされてしまった幸助。  
必死に別の話題に振り替える。

「そ、それでルティアさんは、最近商売の方はどうですか？」

「オリーブオイルはもう供給不足ね」

「絶好調ってことですね」

オリーブを栽培しているのは親戚である。

もともとは生産過剰になっていたオリーブオイルをルティアの店  
で無理に扱ってもらっていた。

しかし、幸助が関わることにより人気に火がつく。

あっという間に供給不足になってしまったそうだ。

すぐに増産できるものでもない。

今では新規客の購入は受け付けてないとのことだ。

一通りの話が済むと幸助はルティアへ別れを告げる。

「それでは。ルティアさん」

「また来てね、コースケ」

翌日。

午前中に幸助は二ーナの魔道具店へ行き、隣街の報告を済ます。もちろん大量の干し貝持参だったことは言うまでもない。

ちなみに王都の店舗計画は、場所も決まり順調に進んでいるようだ。

今のところ幸助の手伝いは無くても大丈夫とのことであった。

午後になると幸助はアロルドの店で約束のクリームパンを受け取り、ホルガーの店へ向かう。

パンが少し硬めなのは残念であるが、出来上がったものは間違いなくクリームパンであった。

「こんにちはー」

「あっ、コースケお兄ちゃん。久しぶりなの！」

「久しぶり、パロ。ホルガーさんいるかな？」

「待っててなの！」

トテトテと奥へ行くパロ。

歩き方に少し違和感がある。  
足の怪我でもしたのかなと幸助は心配する。

店内を見渡すと、初心者用の槍と剣がかなり幅を利かせている。  
特に槍は幸助が必死に奔走した結果、製品化されたものだ。  
感慨深げに眺める幸助。

「おまたせなの！」

「久しぶりだな」

程なくしてパロはホルガーを連れて戻って来た。

「お久しぶりです、ホルガーさん」

「今日はどうした？」

「ちょっと隣町まで行ってましたので、お土産持ってきました」

そう言うと干し貝の詰まった袋をホルガーへ渡す。

家庭用の消費しか期待できないので、袋のサイズは手に乗る程度である。

お土産と聞いてキラキラの眼差しで袋をロックオンするパロ。

「何だ、これ？」

「干し貝です。そのまま炙って食べてよし。料理に使ってよし。いいツマミになりすよ」

「そうか。有難くいただく」

その様子を見ていたパロはしょぼんと耳を垂らす。  
期待した甘いものでなかったからだ。

「パロ。はい、これはパロへのお土産」

幸助に渡された包みを開くパロ。  
中から出てきたのは一見普通のパンである。

「パン……なの？」

「そうだよ。食べてごらん」

幸助がそう言うとパロはホルガーの顔を窺う。

黙って頷くのを確認すると、ハムツとパンにかぶりつく。

そしてモグモグと数回咀嚼するとパロは目を真ん丸に見開き、耳をピン！ と立てる。

「甘くておいしいの！」

「でしょ、クリームパンっていうんだ」

パロは一心不乱にパンへかぶりつく。

その姿を横目に幸助はホルガーへ質問する。

「ホルガーさん、さっきパロの歩きがおかしかったような気がしましたが、怪我でもしたんですか？」

「靴が合わなくて。広場で走り回ったら痛めた」

「そうなんですか。小さい子は成長が早いですからね」

「ああ」

今パロが履いているのはサンダルだ。室内用であろう。

「そういえば広場に行ったってことは、店を留守にできるようになったんですか？」

「見習いが来てる」

「てことは、商売は繁盛してるってことですね！」

「そうだ」

ホルガーの店にも見習いが来ているようだ。  
幸助の中では一番頭を悩ませた店だけに、喜びもひとしおだ。

「それを聞いて安心しました。では長居して仕事の邪魔をしてもいけないので僕はこれで」

「わかった」

「また来てなの！」

パロに手を振り幸助は店を後にする。



1 お土産行脚（後書き）

## 2・安売り合戦の果てに

「またしても暇になってしまったぞ……」

お土産行脚が終わった翌朝。

帰還後に決めていた予定もすべて消化し、やることの無くなった幸助は宿の部屋で暇を持て余していた。

部屋の隅には、まだ大量の干し貝が鎮座している。

一人では消費しきれない。アロルドの手腕に期待だ。

店を構えていれば毎日客が来る。

接客だけでなく、仕入れや店舗メンテナンスなど仕事は盛りだくさんだ。

たとえ閑古鳥しかいなくても、まだ見ぬ客を待ちわびつつ店を開けなければならぬ。

だが幸助のような仕事の場合、プロジェクトが動いていないと基本的にやることが無い。

会社であれば他のチームの手伝いもできるが、幸助は個人で動いている所謂フリーランスだ。

自分の行動は自分で管理しなければならない。

これがなかなか難しい。

「はあ。部屋にいてもつまらないし、たまには行ったことのない所でもぶらついてみるか」

基本的に行動パターンが決まっている幸助。

まだまだアヴィーラ伯爵領内にも行ったことの無い場所は多い。

街を歩けば何か収穫があるかもしれない。  
そう決めると幸助は身支度をし、部屋を出る。

宿屋で朝食を済ませ、メインストリートを西へと向かう。  
今朝も気温は低いが、日中は暖かくなりそうだ。  
春はもうそこまで来ている。

途中ルティアの店を通り過ぎ、更に歩くこと十数分。  
何となく気の向いた道を左折する。

「へえ、こんな道もあったんだ」

幸助が入った道は、馬車がぎりぎりすれ違える程度の幅だ。  
道の両側には、年季の入った木造の建物が建ち並んでいる。  
石畳の整った舗装は途中で途切れ、その先は土の道路が続く。

人通りはそれなりにある。

何か重要な場所に繋がっている道かもしれないと考え、幸助はぐんぐん進む。

「お、靴屋だ。結構大きい店だな」

しばらく進むと幸助は靴屋を見つける。  
一般的な商店と比べてかなり間口が広い。数軒の建物を横につな  
げたようだ。

店頭には多くの靴が並んでおり、数名の客が品定めをしている。

「あれ？ ここにも似たような店があるぞ」

斜向かいにも靴屋を見つける。  
先ほどの店同様、かなり広い間口を持っている。  
そのまま歩き進めると、小さな店の更さらに二店舗見つける。

「面白い場所だなあ……」

この狭い範囲に靴屋が四件である。  
街の面積や人口を考えると、かなりの密集具合だ。

幸助は知らなかったのだが、ここは通称「靴屋通り」と呼ばれている場所だ。

今でこそ閉じてしまった店が多いが、一世代前には十軒以上の靴屋が軒のきを連ね、鎚つちを削とっていた。

そして更にもう一店舗。

五店舗目となる靴屋が見つかった時、小さな女の子二人がその店へ入っていく姿が目に入る。

そこで幸助はあることを思い出す。

「そういえばパロ、足が痛いって言ってたな。せつかくだからこの店で話を聞いてみようか」

ホルガーの店へ土産を持っていった時、そこには足を痛めたパロの姿があった。

靴のサイズが合っていなかったことが原因だ。

もしもいい靴が見つかったらプレゼントしてあげようと思い、店へ入る。

最初に見た二店舗と違い、こじんまりとした店だ。

店の中央に設置された棚にいくつか靴が並べられているだけで、

壁面の棚には何も置かれていない。埃が積もっているだけだ。

幸助は一瞬入る店を間違えたと思うが、一度入った店だ。これも何かの縁と、とりあえず声をかけてみる。

「こんにちはー」

幸助は声をかけつつ狭い店内を見渡すが、誰もいない。先ほど店に入ったばかりの子ども達の姿も見当たらない。

このような場合、店員は店の奥にすることが多い。今度は大きく声を張る幸助。

「こんにちはー！」

今度は声を通ったようで、奥から「はいはい」という声が聞こえる。

姿を現したのは、四十歳くらいであろう細身の男性だ。

「ごめんごめん。待たせたね。どんな用かな？」

「えっと、子供靴を見たいんですが、ありますか？」

「もちろんあるよ。この辺りかな」

幸助は男性に促され、唯一商品が並べられている棚の裏側に回り込む。

そこには小さな靴がいくつか並べられていた。

サイズは小さいのだが、子どもが好む可愛らしさは無い。皮で作られた、しっかりとした印象を受ける靴だ。

「それで、靴を履く子はどこにいるんだい？」

「その子は家にいるので、今日は僕だけです」

「なら今度その子を連れて来て。本人がいないと靴は売れないよ」

「えっ、何ですか？」

「靴つてのは本人の足に合わせるものだからね。たとえ長さが一緒でも幅が違ったり甲の高さだって違うんだ。だから調整が必要なんだよ」

「へえ、そうなんですか」

サイズの見当はついていたので、成長を考えてそれよりも少し大きめの靴を買えばいいと幸助は思っていた。

だが、店主は本人がいないと売れないと言う。

ネット通販で靴を買うことに慣れていた幸助にとっては意外な対応であった。

しかしすぐに自分の感覚がずれていたことに気付く。

幸助も学生時代はちゃんと店頭で試着して購入していた。

通販で買うようになったのは、仕事が忙しすぎて買いに行く手間を減らしたかったからであった。

店主の言う通りだと納得した幸助は、本人を連れてまた来ますと告げると店を後にする。

「せっかくだし最初に見つけた大きな店にも行ってみるか」

幸助は来た道を戻ると間口の広い店舗へ入る。

丈夫そうなブーツから布でできた靴、はたまたサンダルなど品揃えは幅広い。

目当ての子供靴もすぐに見つかった。

カラフルで子どもが好きそうなデザインのものが多い。

「何だ。いっぱいあるじゃん。最初からこっちに来ればよかったな」  
そうぼやきつつパロに合いそうな靴を物色していると、女性の店員に声をかけられる。

「いらっしやいませ。子供靴をお探ですか？」  
「はい。十歳くらいの女の子のなんですけど……」  
「それでしたらこちらなんて如何でしょう？」

店員が手に取ったのは赤の可愛らしい靴だ。  
甲の部分に白い花がついている。  
幸助はこの靴を履いたパロの姿をイメージする。

(うん、似合うぞ。可愛いな)

「履く本人がいませんが、買って帰ることってできますか？」  
「もちろんですよ？」

なぜ当たり前のことを聞くのだという顔を浮かべる店員。  
店によって方針はバラバラのようである。

「これってサイズが合わなかったらどうなります？」  
「試着だけで未使用でしたら交換させていただきます」

親切な対応である。

「本人がいたら足に合わせて調整などはしてもらえますか？」  
「いえ、調整は承っておりますませんが、当店は品揃えが豊富です。きつとどれかは足に合うと思いますよ」

一瞬買っていきこうか悩むが、先ほどの店でのやりとりを思い出す。足が痛いと言っていたので、やはり本人の足に合わせた方がいいのではと考えたのだ。

「そうですか。やっぱりもう少し考えることにします」

そう言うと幸助は店を後にし、ホルガーの武器屋へ向かう。

「こんにちはー」

「いらっしやいなー!」

「どうした? 今日は」

ちょうど店内にはホルガーとパロ、そして一人の青年がいた。

ホルガーと同様、肩にタオルをかけている。

この人が見習いだらうと幸助は考える。

「ホルガーさん、パロを靴屋に連れて行ってもいいですか? 足に合わないって聞いて聞きましたから気になって」

「それは助かる」

「新しいお靴、買ってくれるの?」

「うん、パロ。一緒に靴屋さんに行く」

「行くの!」

ついでに昼もどこかで食べてきますねと言いつつ、幸助はパロを連れ再び靴屋へ向かう。

どの店へ行こうか悩んだが、パロの足のことを考えて最初に入った小さな店に決める。



「こんにちはー」

「あれ？ さっきのお兄さん。もう連れて来てくれたんだ」

「はい。この子の足に合わせてください」

「はいよ。じゃあお嬢ちゃん、ここに座って」

ちよつと緊張した面持ちで指定された場所に座るパロ。

とそこへ、先ほど来た時に見かけた二人の女の子が店の奥からやってくる。

髪の色が水色とピンク色という違いがあるだけで、顔や背格好は瓜二つだ。

「あれっ、パロちゃん？」

「あっ、パロちゃん！」

「ココちゃんミミちゃんなの！」

パロは立ち上がると、三人でキャツキャシ始める。  
意外な展開に少し驚く幸助。

「パロの知り合い？」

「広場のお友達なの！」

「へえ、そうだったんだ」

店主も、そうなんだと言いながら笑顔を作る。

広場へは母親が連れていたため、娘の友人までは知らなかったのだ。

その後幸助はテンションの上がるパロをなだめ、再び靴合わせに入る。

同じ靴を履いては脱ぎ、何かの器具で調整すること数回……。

「ぴったりなの！」

狭い店内を行ったり来たりしながら真新しい靴の感触を確かめるパロ。

「特にこの子は足の長さに対して幅が広めなんだよね。今までなかなか合う靴が見つからなかったんじゃないかな」

「そうなんですか、ありがとうございます。本人も困ってたみたいですし助かります」

そう言うと幸助は、また三人ではしゃぎ始めたパロを見る。

本当に仲が良いようだ。幸助の見たことのない手遊びをし始める三人。

幸助は店主に代金である大銀貨三枚を渡すと口を開く。

「成長してサイズが合わなくなったらまた来ますね」

「あつ……、そのことなんだけど……」

突然店主の顔に影が差す。

何か失言してしまったかと焦る幸助。

「あ、僕何か変なこと言っちゃいました？」

「ううん。えつとね……。サイズが合わなくなった頃には店は無いかもしれないんだ」

「えっ、どうしてですか？」

今日のパロに対する仕事ぶりを見ている限り、接客や技術は問題なさそうだ。

引越など別な理由なのだろうかと幸助は推察する。

店主はいちど子供たちの方を見ると、意を決したかのように言葉

を紡ぎだす。

「実は、だいぶ前から靴屋同士の競争が激しくなってね。ウチはもうやっけていけそうにないんだ」

「そうなんですか。この界限は靴屋ばかりですからね。ずっと昔から競争してるイメージには見えましたが……」

幸助が見ただけでも五店舗の靴屋があった。競争が激しいというのは想像に難くない。

「昔はそうでもなかったんだ。それぞれの店に固定客がついててね。でもあの店ができてから安売り合戦が始まっちゃってさ」

「あの店っていろいろのは？」

「メインストリートに一番近い店あったでしょ。大きい店」

あの店とは先ほど幸助が覗いた店のことであった。

確かに豊富な品揃えで、パ口用にと検討した赤い靴は銀貨五枚の価格設定だ。

素材が違つので単純比較はよくないが、六倍の価格差である。

「斜向かいにも似たような店がありましたよね」

「そうなの。あの店に追従しちゃったんだよね。それからだよ。同業者もほとんど店を閉めちゃって。靴屋通りつて名前も過去のものになりそうだよ」

そう言うと、はあと大きなため息をつく店主。

この店だけでなく、通り全体の問題のようである。状況が気になった幸助は、店主へ言葉を投げる。

「もしよかったら詳しく状況を教えてもらえませんか？　もしかし

たら力になれるかもしれません」

「うん、どうして？」

「実は……」

そう言うと幸助は、自身の仕事や開示できる範囲の実績について説明する。

もちろんパロの父、ホルガーの武器屋の話もだ。

最後に契約云々はさておき、とりあえず話すだけでも気が楽になりますよと告げる。

「そうなんだ。なら話だけでも聞いてもらおうかな。あっ、そういえばまだ名乗ってなかったね。僕はアラノ。あの二人は僕の娘でココとミニ。水色がココでピンクがミニ。双子だよ」

「僕は幸助です。あの子はパロ。先ほどお話した武器屋の娘さんです」

よろしくおねがいしますと頭を下げると幸助はアラノへ質問する。

「もう閉店の時期は決まってるんですか？」

「ううん、まだだよ。いつかまたお客さんが戻ってくるんじゃないかと思うと、なかなか決断できなくてね」

開業するときは夢も希望もあり勢いに乗れるのでそれほど苦にならない場合が多い。

だが、廃業するタイミングは難しい。

まだ何とかなるかもしれないという想いと「廃業」という後ろめたさが堅実な判断を邪魔するのだ。

全財産を失ってからでは廃業後の行動に大きな制約が出てしまう。特に借入金がある場合は、減るところか増える借入金を返済し続

けるため、廃業すら難しい場合もある。

廃業時には借入金を完済しないとイケない。だが、それができるだけの現金が無いからだ。

その後数十分、幸助とアラノの会話は続く。

話を聞く限り、アラノの店はまさに廃業という判断をしなければならぬギリギリの状況であった。

ここで幸助はホルガーの店でも聞いた質問をする。

「アラノさんはお店を続けたいと思ってますか？」

「そりゃ代々続いてきた店だし、娘たちのことを考えるとね」

そう言いながらキャッキヤと遊ぶ子ども達へ視線を送るアラノ。その視線に気付いたのか、三人が幸助とアラノの下へ戻ってくる。娘の頭を撫でるとアラノは続ける。

「この子の友達とも離れ離れになっちゃうし」

アラノもホルガーと同様のことを口にする。

子を愛する親の想いは異世界でも変わらない。

「ということ、店をたたんだ後のことは決まってるんですね」

「うん。妻の実家が別の村で農家をやっててね。もし店をたたんだら、そこを手伝う予定なんだ」

「そうですか……」

「ココちゃんミミちゃんと遊べなくなっちゃうの？」

パロの質問にアラノは辛そうな顔で答える。

「今すぐじゃないけどいずれは……ね」

ココとミニ姉妹も不安げな表情で父の顔を窺っている。

「おとーさん、パロちゃんと遊べなくなっちゃうの?」

「おとーさん、パロちゃんともっと遊びたいよ」

言葉が詰まるアラノ。

これは子ども達のためにも何とかしなければならぬ。  
強い想いが湧き上がる幸助。

「アラノさん」

「うん?」

視線の合う二人。

その様子を不安げにみる女の子三人。

幸助はいつものセリフを声高らかに宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます!」

### 3. ないない尽くし

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

幸助の言葉に、表情一つ変えずアラノは口を開く。

「コースケ君は今まで、僕みたいな店の経営改善をしてきたんだよね」

「はい、先ほどのお話とおりです」

自信をもって幸助は答える。

この街に来てからもうすぐで一年。

十分に実績と言える結果も出している。

「気持ちは嬉しいけど、僕の店は無理じゃないかな」

「それはどうしてですか？」

「だってあの店の値段見たでしょ。種類だって豊富だし」

確かにアラノの言う通りである。

単価は安い。種類は豊富。

革靴だけでなく、この店には無い布らしき素材でできた廉価な靴もあつた。

デザイン性もいい。

片やアラノの店に並んでいるのは革靴だけだ。

しかも種類は極めて少ない。

幸助も今のところ打開策は全く浮かんでいない。

だが改善方法はいくらでもあるはずだ。  
相手だって工夫に工夫を凝らし、今の業態になっているはずである。

それならば相手に真似されない何か、相手とは違うポジションで勝負すればいい。

幸助はそう考えている。

「今はまだ見つかっていないだけで、解決方法はあるはずですよ」「そうかなあ」

「パロのお父さんの店は、競合店との価格差十倍を克服しましたよ」

幸助とホルガーが出会った頃、ホルガーの販売する武器の最安値は金貨五枚、競合店は大銀貨五枚であった。

その価格差は実に十倍である。

悩んだ末に金貨一枚で販売できる武器を開発し、ギルド認定という制度を導入してもらったことで問題を解決した。

「価格差が何とかなくても品揃えも大変だよ。あれだけの在庫を用意するのは」

「それも何らかの解決方法があるはずですよ。現にホルガーさんは槍と剣それぞれ種類ずつだけで勝負してますし」

当初は初心者向けの槍一本であった。

その後、初心者向けの剣も用意したのだ。

「でもやっぱり何か事を起こすには手遅れだよ。お金だってほとんど残ってないし」

「必要経費は僕が立て替えます。そこは心配しないでください」

「……………」



「……………」

思いつく「やらない理由」が尽きるとアラノは無言になる。変えなければならぬという現実と、変化を恐れる無意識の抵抗がアラノの中で戦っているのだ。

幸助とアラノのやり取りを、少女三人が心配そうに見つめている。

「お店を続けたいってさっき言ってたじゃないですか」

「そうだね」

「娘さん達のためにも。もう一度頑張ってみませんか？」

「……………」

煮え切らないアラノに対し幸助がもうひと押ししようとしたその時、じつと様子を見ていたパロが口を開く。

「コースケお兄ちゃんはすごいの！ パロ、毎日おいしいご飯がたべられるようになったの！」

その瞬間、アラノはハツとした表情を浮かべる。

何か思い当たる節があるようだ。

皆の視線がアラノへと注がれる。

「……………」

十数秒は経過しただろうか。

心の整理がついたようで、アラノはゆっくりと口を開く。

「分かった……。分かったよ。もう一度だけ、頑張ってみよう」

アラノはそう言うと、パロへと視線を向ける。

「ごめんね、パロちゃんにまで気を使わせちゃって」

「ずっとココちゃんミミちゃんとお友達なの！」

「そうだね……。そうだよね」

そうつぶやきながら、アラノはパロの頭をなでる。

パロは気持ちよさそうな表情をしながら耳をピョコピョコと動かす。

「将来振り返った時に、この決断が最善の決断だったと思っていただけのよう頑張ります」

こうして幸助は、新たな改善に取り組むこととなったのだ。

「ではまた明日の午前に来ますね」

「うん。よろしくね」

「バイバイなの！」

次回訪問の約束を済ますと、幸助とパロは店を後にする。

靴を買うだけのはずが予定外に時間をかけてしまった。

パロのお腹の虫が暴れ始めてしまう。

足早にアロルドの店へ行くと、幸助はワンプレートランチを注文する。

もちろんパロにはお子様ランチだ。

残念ながらボンゴレはまだ完成していなかった。

「はい、パロちゃん。どうぞ」

「ハンバーグなの！」

サラがランチを持って来ると、間髪入れずハンバーグを取るパロ。熱い食べ物に苦手だ。

何度もフーフーしてから口に入れる。

「ほいひいの！」

「ゆっくりよく噛んで食べるんだよ」

「はいなの！」

翌日の午前。

幸助は一人でアラノの店へ向かう。

サラにも新しい改善が始まったことを伝えたのだが、今日は都合が悪く同行できないとのことであった。

「こんにちは、アラノさん」

「こんにちは。コースケ君、今日はよろしくね」

挨拶を交わすとアラノは幸助に着席を促す。

昨日パロがフィッティングに使っていた場所だ。

背もたれの無い少し幅広の、ベンチのような形状である。

「ごめんね。ここしか落ち着いて話せる場所がないから」

「いえ。僕はどこでも平気ですよ」

腰かけながら幸助は店内を見渡す。

「といつても狭い店内だ。  
昨日と同様、商品の無い寂しい棚と、そこに積もった埃が目に入るだけである。」

（ずっと掃除してないのかなあ。昨日からこの埃、変わってないぞ。あ、そういえば双子ちゃんの気配もないや）

「コースケ君、どうしたの？」

「えっと、今日は娘さんはいないんですね」

「うん。妻が広場に連れていってるんだ。今日は妻の仕事が休みだからね」

アラノの妻は自分の店ではなく外に働きに出ているようだ。

ということは子ども面倒と店番を一人でやっていることになる。何かと大変に違いない。

とりあえず埃については触れず、幸助は本題へ進めることにする。

「では早速始めますね。僕はまだ靴屋業界のことを全然知らないの  
で、まずは色々教えてください」

「うん、もちろん。それで、どこから話したらいいかな。とりあえず他の店のことでいい？」

「はい。それをお願いします」

話す内容を頭の中でまとめるアラノ。

少しだけ視線を宙に泳がすと、話し始める。

「靴屋通りには全部で五店舗の靴屋が営業してるんだ。その中で安  
売りしてる店は二店舗ね」

「二つとも結構大きめの店ですよ？」

「そうそう。もともとはウチと変わらないくらいの店だったんだけ

どね。隣が空き家になると、どんどん店を広げてさ」

やることが滅茶苦茶なんだよ、と首を左右に振りながらぼやくアラノ。

だが幸助は、規模を広げることには何ら疑問を感じていない。

単純に顧客のニーズに合わせた品揃えを増やし、必要に応じて店舗面積を拡大しただけのように見えるからだ。

昔ながらのアラノの靴屋と対照的に、規模の拡大というこの界限では新しい手法を取る靴屋。

奇しくもウイルゴの造船工房と逆の立場である。

もしかしたらウイルゴの塗装された船のことを異端呼ばわりしていた人は、アラノのような気分だったのかもしれないと幸助は感じる。

「それでその二店舗が競争しながら大きくなっていったんですね」

「うん。そんな感じかな。それで周りの店がバタバタ潰れていったの。ウチみたいないなタイプの店は全滅だよ」

「えっ？ 他にも小さなお店はありましたか……」

「そこはオーダーメイドの店なんだ」

靴にはサイズがあるので、同じデザインの商品でも在庫が多くなりがちだ。

その点オーダーメイドであれば在庫は極小に抑えられる。

メリットは大きい。

「それならばそのこと同じようにオーダーメイドにしたらいんじゃないですか？」

「それは無理。ウチの店は王都の工房から仕入れてるからね。他の二店舗は店主自身が職人なんだよ」

技術があるってのはいいよねえとアラノは続ける。  
どうやら小さな店舗で他所から仕入れた商品を販売しているのは、  
ここだけのようである。

「それなら受注してから王都の工房に発注すればいいんじゃないで  
すか？」

「それも無理。値段が高くなるし時間もかかり過ぎるからね。それ  
に今更金持ちの客を掴むのは不可能だよ。その二店舗は貴族に出入  
りしてる商人との伝手があるから残ってるんだ」

「そうですか……」  
「……」

ここで店内に静寂が訪れる。

幸助は居づらさを感じる。

だが、今は口を開くタイミングでない。

何か話したそうだが決めかねている雰囲気のアラノから感じ取っ  
たからだ。

アラノから言葉が出るのを幸助はじっと待つ。

そして一分後。

アラノはゆっくりと口を開く。

「実はね……」

アラノの口からぽつり、ぽつりと言葉が紡がれる。  
その話によると現状に至った事情はこうだ。

アラノは、当時この店を経営していた父親の長男として生まれた。  
兄弟には恵まれず、必然的に後継者として期待され育てられたそ

うだ。

父親には靴を作る技術があった。

そのため、現在も残っている他の二店舗同様、当時はオーダーメイドをしていたのだ。

当然後継者としてアラノも靴作りを学んだ。

しかし、アラノには才能が無かった。

どれだけ教えられても父親に認められる技術に達しなかったのだ。

そうこうしているうちに高齢となった父親は引退。

程なく店の将来を案じながら逝ってしまった。

老齢にムチ打ち働きすぎたのが原因のようだ。

作り手のいなくなった靴屋。

売る商品が無い。当然客も離れてしまった。

ちょうど双子の娘が生まれたばかりの頃だ。

アラノは何とか店を存続させようと必死に考えた。

そこで出会ったのが王都の製靴せいかに工房だ。

良質の靴を一定量仕入れられるようになり、客は少しずつ戻ってきた。

これで安心して生活できる。

そう思った矢先、例の安売り合戦が始まってしまったのだ。

「そんな事情があったんですね……」

アラノの話聞き、幸助は現在置かれている経営環境はかなり厳しいと感じた。

今まで改善してきた店は、ルティアの小麦店以外は皆、高い技術力を持つ店ばかりだ。

技術の無いルティアの店にも、そこでしか扱っていない高品質のオリーブオイルがあった。

だがアラノにはそれらが無い。  
ないない尽くしである。

またしても立ちはだかる大きな壁。

今のところどこから切り崩してよいか幸助にも分からない。

とりあえず今日は情報収集に徹しようと思われ、アラノへ質問する。

「アラノさん。昨日の靴、大銀貨三枚でしたけど利益はどのくらいありますか？」

「実はね、二割くらいしかないんだ」

想像以上に少ない数字に驚く幸助。

二割といえば薄利多売のスーパーマーケットに近い。

大量に売らなければ店の維持は難しい。

「二割ですか？ アラノさんの考える適正な利益はどのくらいですか？」

「そうだねえ、本当なら四割は欲しいところかな」

適正価格にするとますます競合店との価格差が広がる。

壁は高くなる一方だ。

「ということは大銀貨四枚ですか……。ちなみに靴の購入頻度というのはどのくらいですか？」

「うーん、人によって違うけどね。大人は二年から五年くらいで履きつぶして、子どもは成長にもよるけど一年以内かな」



「靴を複数所有して、服に合わせて履き替えたりすることはありま  
すか？」

「それは本当にお金の余裕がある人だけだね。安売り店の靴ならま  
だしもウチのお客さんには無理だね」

購入サイクルは長い。

ファッションの一部として靴を履くのは富裕層の一部のみ。

確かに、幸助は召喚されたときに与えられた靴をずっと履いてい  
る。

まだこの世界では一度も買っていない。

悩み込む幸助。

（困ったなあ。靴がこんなに購入頻度が低い商品だったとはな。だ  
から安売り店は安価な靴を作ったたくさん買ってもらえるように工  
夫したってことか）

今の商品を工夫して販売するのか、安価な商品を導入すればいい  
のか幸助は一瞬迷う。

だが、ここで安価な商品を導入すれば不毛な競争に自ら参入する  
ことになる。

小さな店では、大量に仕入れて原価を安くするというスケールメ  
リットは活かせない。

安売り路線は今から参入するには厳しすぎる環境だ。

これ以上話し込んで突破口は見つかりそうにない。

おおよその状況は把握できた。

幸助は頭の中を整理するため一旦切り上げることにする。

「今日はここまでにしましょう。また明日来ますね。日曜日ですけ

ど大丈夫ですか？」

「うん、もちろん。店の存続がかかっている大切なことだからね」

ではまた明日と言葉を交わすと、幸助は店を後にする。

#### 4・フロントエンド商品

「サラ、汚れてもいい格好に着替えてもらっていいかな？」

翌日の朝。

幸助はアロルドの店にサラを迎えに行くと、開口一番そう言う。

「えー、せつかくこの新しい服で出かけようと思ったのに」

頬を膨らませて不機嫌そうな顔をするサラ。

今日の服装は白地に花柄のワンピースとベージュのジャケットだ。春を先取りした爽やかな装いである。

次に幸助と出かけるときにと用意していた服だ。

「靴屋さんの大掃除をしようと思ってさ」

昨日幸助はアラノとの打ち合わせが終わった後、宿の部屋で今後の対策を考えた。

しかし何もアイデアはまとまらなかったのだ。

どう考えても安売り店の方が魅力がある。

しかもアラノの店は棚に埃が積もっていた。

店舗や店員に清潔感があることは、客を迎え入れることの最低条件だ。

それが満たされてない今、何をやっても最善の結果を得ることはできない。

だから今日は大掃除の日と勝手に決めたのだ。

「掃除……？ そんなの毎日してるんじゃないの？」

サラは不思議そうな顔を浮かべる。

自分自身は毎日開店前に掃除するのが日課である。

そう思うのも当然だ。

「それがさ、全くしてる形跡がないんだ。棚には商品じゃなくて埃が陳列されてるくらいだよ」

「そっか。それじゃ仕方ないね。でも……」

そこまで言うとなら口を閉じる。

自分の店が休みの日に、わざわざ他人の店の掃除に行くのはイヤだったかなと考える幸助。

無理強いはいしないでおこうと決め、聞き返す。

「でも？」

「でも掃除するって、事前に知っておきたかったな」

「そっか。ごめんね。その服はまた明日にすればいいからさ」

「明日はダメなの！」

「そ、そっか……」

その後、着替えを済ませたサラと一緒に幸助は掃除道具を用意する。

アラノの店に人数分の掃除道具があるか怪しかったからだ。

「じゃ、行こっか」

「うん！」

幸助は右肩にモップを担ぎ、左手に手桶を持つ。

手桶の中には雑巾が詰まっている。

二人はぐんぐん道を進む。

数十分歩くと、店へ到着する。

この界隈の店もルティアの店と同様、開店時は店の前面が開け放たれている。

だが、今日は休日だ。店頭はいつものように大きく開いていない。しかし幸助達を迎え入れるためであろう。端だけが小さく開いている。

そこから店内へ入る幸助とサラ。

「こんにちは」

「こんにちは……ってコースケ君、それは何？」

アラノは幸助の手にしたものをしげしげと見る。  
モップと手桶だ。

「アラノさん、今日は掃除をしましょう」

幸助はニヤツと笑いながら答える。

アラノに選択の余地はないと態度で現したのだ。

「そ……掃除？」

「清潔感のある店っていうのは、繁盛店の基本ですよ。このままアイディアを考えても埃臭いアイディアしか浮かびませんからね」

「け、結構厳しいこと言うんだね、コースケ君……。確かに最近は掃除なんて全然してなかったけど」

本人も掃除をしていないという認識はあったようだ。

その認識すら無かったらかなり危ないところであった。

幸助は少しだけ安心する。

「それで、そちらのお嬢さんは？」

「こんにちは、アラノさん。コースケさんのお手伝いをしてるサラです」

サラがそう自己紹介すると、補足するように幸助が説明を加える。

「サラには改善案を一緒に考えてもらったり、看板などを描いてもらったりしてるんです」

「そうなんだ。サラちゃん、よろしくね」

それぞれ自己紹介が済んだとき、奥からパタパタと足音が近づいてくるのが聞こえる。

ひょこつと顔を出したのは、アラノの双子の娘、ココとミミだ。幸助の顔を見るや否や、辺りを見回す。

「パロちゃんいないの？」

「パロちゃんいないね」

「ごめんね、今日は一緒じゃないんだ」

幸助の顔を見て期待したココとミミはシュンとする。残念ではあるが、いつも連れてくることは叶わない。

「初めまして、私はサラだよ」

「わたしはココ」

「わたしはミミ」

お互い自己紹介するとココとミミはサラの手を取る。

「サラおねーちゃん一緒にあそぶ？」

「サラおねーちゃん一緒にあそぼ」

残念ながら今日の目的は掃除だ。

サラは少しかがんで姉妹と視線を合わせると、優しく今日の目的を説明する。

「今日はね、お店の掃除をしに来たんだ」

「お掃除？」

「うん。私たちと一緒にやってみる？ ピカピカのお店にするんだ

よ

「やる？」

「やるー！」

「さて。みんなで手分けして、お店をピカピカにするぞー！」

「はーい！」

それから丸一日。

時おり懐かしい物が発見され思い出話で中断したり、ココとミミが疲れて途中退場するなどあったが、夕方には隅々まで店が綺麗になるのであった。

数日後、再び幸助とサラはアラノの店を訪れる。

サラは、例のおニユーの装いだ。

店内は綺麗な状態が保たれている。

大掃除をした日以来、今のところちゃんと掃除がされているようである。

幸助は前回と同様フィッティングに使用した椅子に腰かける。形状は幅の短いベンチのようなものだ。ギリギリ二人座れる幅である。

当然と言わんばかりにサラは幸助の隣に座る。

二人の距離は近い。

「今日はちよつと具体的な話をしますね」

「うん。よろしくね」

「アラノさんは、靴以外に扱ってる商品ってありますか？ たとえばサンダルとか靴のメンテナンス用品みたいなものです」

「いや、革靴以外は扱ってないよ。どうして？」

幸助は大掃除をしてから今日までの間、他店の状況や街の人が実際にどのような靴を履いているのか調べていた。

アラノの扱う商品は、魔道コンロのように市民にとっては高額な部類に入る。

それでいて、安売り店という無視できない競合がいる。

その環境下で何とかしなければならぬ。

当初は品揃えを充実する方法も考えたが、幸助が調べた範囲では靴の卸売りをしている商会などは見つからなかった。

安売り店は、自前の工房を構えているようだ。

今から靴を作ってくれるところを探すのは現実的でないし、先行投資もいる。

だから、今ある靴を売る方法を見つける必要があったのだ。

「フロントエンド商品があるといいんじゃないかなと思ひまして」



「フロントエンド商品？」

「コースケさん、フロントエンド商品って何？」

「えっとね、安くて気軽に買える商品のこと」

幸助の言葉に不思議そうな顔を浮かべるアラノが質問する。

「何でそんな商品が必要なの？」

「アラノさんの店には高額な靴しか置いてありません。全く知らない店でいきなり高額商品を買うのは心理的障壁が高いんです。だから買いやすい価格の商品を置こうと思うんです」

フロントエンド商品を置くことのメリットは、気軽に客に来店してもらえることだ。

住宅リフォーム屋の障子の貼り替えや、英会話教室でワンコインで参加できる交流会を開くなどもフロントエンド商品に当たる。

いちど店と客との付き合いが始まれば、高額商品を買ってもらうための壁はぐっと低くなる。

フロントエンド商品と対となるのがバックエンド商品である。

アラノの店では靴がそれに当たる。

もちろんデメリットもある。

いちど客となった人にうまくバックエンド商品をアピールする仕組みが無いと、フロントエンド商品だけを売っている店と思われるってしまうことだ。

「そっか。まずはお店に入ってもらえないと、靴も買ってもらえないもんね」

「そついでです」

そう言いながら表を指差すと幸助は続ける

「幸い目の前の道は人通りもあります」

「うん。工業街の人が市場に抜ける近道だからね」

「じゃあ、その人たちに向けて立て看板を使って、フロントエンド商品をアピールすればいいね！」

「おっ、サラ。今日は冴えてるね」

そう言いながらサラの頭をポンポンする幸助。

えへへーと言いながらサラは嬉しそうな顔をする。

「まずは定期的に購入してもらえる商品を用意して、お客さんに店へ通ってもらえるようにします」

「うんうん、それで？」

「靴の買い替えタイミングが近くなってきたときに来店してもらえれば、アラノさんの靴を買ってもらえる可能性が高くなります」

金額的に買えるかどうかはまた別の話ですけどねと幸助は続ける。アラノは、そんな考え方があったのかと唸っている。

購入サイクルの長い商品である。すぐに結果を出せる手法ではないが、今のところ他のアイデアは浮かんでいない。

「それでアラノさん、何かすぐに扱える安価な商品は無いですか？」

「うーん、すぐには思いつかないなあ」

「靴磨きはどうでしょうか？」

「それは絶対ダメ。靴磨き専門で生計を立てている人がいるからね。靴屋がその仕事を取ったら非難を浴びちゃうよ」

靴磨きは誰でも参入できる仕事だ。

店舗も必要ない。

靴屋が行うのが駄目なのはこの街の不文律なのだろうと幸助は推察する。

「では修理は？」

「靴底の貼り替えくらいはできるけど、修理は買った店に持ち込むのが相場だからねえ」

「そうですか……」

買った店に持ち込むのが相場ならば、まずは買ってもらわないと始まらない。

これも没である。

「中古の靴を扱うってのはどうでしょう？」

「人のお下がりはよくないんだ。履き癖がついてるから絶対にお勧めしないよ」

「うーん……」

安くて定期的に購入してもらえる商品だ。

簡単そうなのに、なかなか見つからない。

また時間を置いて考えよう。幸助がそう思った時、サラが何か思い出したように声を上げる。

「そくだ！ 魔道コンロを置くってというのは？」

魔道コンロの需要はうなぎのぼりだ。

コンロを買ってもらえれば、消耗品である魔石の需要が定期的に発生する。

商業街と工業街の中間地点であるこの界限にはコンロを売っている店は無い。

だが、アラノの店で取り扱うには問題がある。  
代理店を募集する際に、代理店の利益を守るため当面はこれ以上  
取扱店舗数を増やさないという約束をしているのだ。

「サラ、残念ながら取扱店を増やすことはできないんだ」  
「ならパロちゃんとこの取り扱いをやめて、こっちに持ってきたら  
？」

パロの父、ホルガーの武器屋も一応コンロの取扱店ということに  
なっている。

だが、寡黙な店主である。  
商品説明ができなかった。

冒険者への需要を開拓することもできていない。  
結果、一台も売ることができていないのだ。

(フフツ、少しでも多く売ればいいんだよ)

一瞬幸助の頭に魔道具店長ニーナの黒い笑みがよぎる。  
ぶんぶんと頭を振ると、それを掻き消す。

「こ、コースケさん、どうしたの。ダメだった？」  
「いや、サラ。大丈夫。それならいいと思うよ」  
「でしょでしょ！」

幸助の回答にサラはテンションを上げる。  
しかしそれとは対照的な表情のアラノが口を開く。

「うーん、魔道コンロって値段は高そうだから、そのフロントエン  
ド商品つてのにはならないんじゃない？」  
「確かに……」

アラノの言葉に呆気なく現実に戻されるサラ。  
コンロは高額である。

アラノの言う通りバックエンド商品のポジションだ。  
やはり時間を置いてじっくり考えねば、幸助がそう思ったとき、  
またしてもサラがアイディアを出す。

「魔石ならどうか？」

コンロ本体は普及し始めている。

店の前の道を通る人の中にも所有している人はそれなりにいるはずだ。

当初はコンロ本体を普及させるための実演販売が必要であったが、  
今なら消耗品である魔石を前面に出す手もありだ。

サラのアイディアに幸助は声を上げる。

「それだよ！ サラ！ アラノさん、魔石なら消耗品だから繰り返し来店してもらえますし安価です。フロントエンド商品になり得ますよ。どうですか？」

魔石は靴とは全く関係ない商品だ。

だが、幸助はそれでもいいと思っている。

目的は「店内に足を運んでもらう」ことだからだ。

実際に幸助の勤めていたコンサルティング会社を取り組んだ事例で、お菓子で集客する家具屋という事例があった。

気軽に来店してもらえる商品で店に足を運んでもらい、店主との人間関係を育む。

そうすることで、いざ家具の需要が発生したときに真っ先に思い出してもらえようになっただ。

「うん。魔道具を扱えるなんて、またとないチャンスだしね。是非お願いするよ」

「では、これで方針は決定ですね！」

ここまで話して幸助はふと、今後魔道具が爆発的に普及したら代理店の権利自体が大きな価値を持ちそうだと考える。

代理店権の扱いをどうするかも定める必要があるそうである。

「あと、アラノさん。バックエンド商品である靴を売るために準備してほしいことがあります」

そう言うと幸助はアラノへとある依頼をする。

用意できるまで時間がかかるものであるが、魔石でなく靴そのものを買ってもらうためには必要なことだ。

「うん。分かったよ。頑張ってみるよ」

「よろしくお願いします」

最後にそれぞれの役割分担を話し合っていると、その日の打ち合わせは終了となった。

## 5・選ばれる理由

時はしばらく経つ。

日に日に太陽が高くなり、葉を落とした木々からは新芽が顔を覗かせている。

ポカポカ陽気の午後、幸助は『アロルドの Pasta 亭』を訪れる。待ちに待ったボンゴレが完成したと聞いたからだ。

ギイ。

ドアを開けると光が店内に差し込む。

ランチタイムが終わる直前だ。

客席には誰もいない。

幸助に気付いたサラがパタパタと駆け寄って来る。

「コースケさん、いらっしやい！」

「お、サラ。今日も元気だね」

「うん！ 新作、すつごく美味しかったから」

「へえ、楽しみだなあ」

「今から用意するから待っててね」

そう言葉を交わすと幸助はお気に入りの席へ座る。

小さな窓から外が見える席だ。

道を行き交う人々の装いは日を追うごとに軽くなっていく。

足元を見ると、服に合わせて明るい色の靴を履いている人もちらほら見かける。

もちろん、アラノの店で扱っているような革靴を履いている人も多いのだが。

(みんななどの店で買ってるのかなあ……って、ほとんど安売り店二店舗で間違いないんだろっなあ)

アラノの話によると、この街には本当に靴屋通り以外に靴屋は存在しないそうだ。

例外として、貴族の屋敷に出入りする商人などが他の街から買い付けてくる場合はあるそう。

(これだけの人数を賄ってるんだから生産力も相当なものだよなあ。やっぱり真っ向から勝負するのは無理か。はあ、本当にどうしたらいいんだろっ……)

安売り店といっても価格が安いだけではない。

店の面積にふさわしい豊富な品揃えも魅力的である。

もちろんアラノの店に置いてある靴と似たようなものも陳列されている。

「コースケさん、お待ちせ！」

待つこと十数分。

サラの声で幸助は思考の世界から戻る。

目の前には皿が二つ置かれている。

一つはこの店では見慣れた真っ赤なパスタ。

もう一つは色のついていないパスタだ。皿には白く濁ったスープが薄く張っている。

どちらも幸助が土産で持ってきた貝が乗っている。ボンゴレに間違いなさそうだ。



「へえ、二種類作ったんだ。どっちも美味しそうだね」

「うん！ 美味しいからゆっくり食べてね」

「いただきます」

まず幸助が手に取ったのは白いボンゴレだ。

ツルツル滑るパスタにできるだけスープが絡むようフォークへ巻き、口へ運ぶ。

その途端、濃縮された貝の旨みが口に広がる。

「これだよ、これ！ 間違いなくボンゴレだ！」

懐かしい味に幸助は頬を緩める。

友人の店の味とは違うが、これもまた美味い。

二口、三口食べると次は赤いボンゴレにターゲットを切り替える。

いつものトマトバジルパスタに貝が追加されたように見える。期待を胸にフォークに取ると、口へ送り込む。

「うーん、この抜群の安定感」

トマトの酸味と海鮮の香り。絶妙なマッチング具合だ。

やはりアロルドの作るトマトソースは絶品である。

幸助の手と口は休むことなく動き続ける。

あつという間に平らげた時、厨房からアロルドがやって来る。見習いのマルコモも一緒だ。

それぞれ自身の賄いである料理を手まかなにしている。アロルドは幸助の正面にどかっと座ると口を開く。

「コースケ、どっちが美味かったか？」

「どちらも美味しかったですよ？」

「だから、どっちが美味かったかって聞いてんだよ」

正直どちらも美味しいと感じていた幸助。

甲乙はつけがたい。

しかし、当初幸助がリクエストしたのは白い方だ。

スープがわずかに残った皿を指差し、幸助は答える。

「うーん、強いて言えば白い方ですね……。僕のリクエストそのものでしたから」

その瞬間、アロルドの顔が鬼の形相に変化する。

「なんだ、お前！ 俺のトマトソースよりもこっちの方が美味しいって言うのか！」

アロルドの音量にビクツとなる幸助。

オロオロするマルコ。

やれやれという顔をするサラ。

「あのね、白い方はマルコ君が作ったんだ」

「いや、アドバイスを頂きながらですから、僕だけで作ったわけでは……」

「そういうことでしたか……。アロルドさん。トマトソースはもう美味しすぎて僕の中では良し悪しをつける範囲外なんです」

「何か白々しいぞ」

「どちらも美味しかったことに間違いはありませんから。新メニュー入り決定ですね！」

そう言うと幸助はガッツと立ち上がり、一目散にドアへ向かう。

試食と聞いていたから代金は要らないはず。食い逃げにはならな

いであるう。

「では、ごちそうさまでしたー」

「ちよ、お前、待て！」

「あ、コースケさん！」

「サラ、また来るねー」

それから数日後。

幸助とサラはアラノの店を訪れる。

店内には新たにテーブルと椅子四脚が設置された。

ガラガラの棚を放置しておくよりも見栄えが良いだろうと、一部の棚を撤去し設置したものだ。

今はそこで店主であるアラノと幸助、そしてサラがミーティングをしている。

「アラノさん、その後どうですか？」

「靴は相変わらずだね」

アラノの靴屋が魔石を取り扱い始めて一ヶ月が経つ。

店頭には立て看板が。

そして店内には真っ赤な魔石が陳列されている。

魔石そのものはぼちぼちと売れ始めた。

小麦店であるルティアの店でオリーブオイルを販売したときと同様、客は何ら違和感を持たず魔石を購入している。

近くで買えるようになってよかつたわという声も聞こえるほどだ。これだけでも閉店時期の先延ばしには貢献してくれている。しかし残念ながら靴の販売には貢献していない。

魔石の陳列場所は店の一番奥だ。

もちろん、途中の棚にある靴を見てもらったためである。だが、全ての人が素通りしてしまう。

もともと買い替えサイクルの長い商品である。

さらに競合店と比べると、あまりにもデザインを選択肢が少ない。今のところタイミングの問題なのか商品の問題なのか、はたまたフロントエンド商品からバックエンド商品へ繋げるための仕組みが悪いのか、原因は分かっていない。

だが、幸助は今のところこれでいいと思っている。

それはまだ、アラノの扱う靴を「誰」へ訴求するか決めていなかっただけからだ。

「それで、例のアンケートは取れましたか？」

一カ月前、幸助はにアラノに客からアンケートを取るよう依頼していた。

魔石を買いに来た客ではなく、靴を購入してくれた客が対象だ。

少ないながらもアラノの店から靴を購入してくれる客はいる。

それは何らかの理由があるからだ。

だから「数ある店の中でどうして自分の店から買ってくれているのか」を聞いてもらったのだ。

安いから。

おいしいから。

ここでしか手に入らないから。

技術力が信頼できるから。

店主との話が楽しいから。

バイトの女の子が可愛いから。

などなど……。

客の来店動機は様々である。

この質問をすることで、自分自身が思いもしない店の強みが見つかることがあるのだ。

その強みを重点的にアピールすることで売上アップにつながる。

ただしこのアンケートでは、一見強みに見えない意見が挙がる場合もある。

以前幸助が日本のとある地方都市の店で行ったところ、最も多い回答は「家から近い」ということだった。

品質や品揃えを工夫している小売店だ。

もっと違う回答を期待した幸助は脱力感を覚えた記憶がある。

だがそれも強みであると、一緒にプロジェクトを担当していた先輩から教えられた。

その店は特定地域に集中して出店するというドミナント戦略を取り入れていたのだ。

戦略が有効に作用している何よりの裏付けである。

「アンケート、取れたよ。たった五人だけどね」

「五人も回答を得られたんですか。すごいですね」

「そう？ 待つててもほとんど来てくれないから、家を知ってるお

客さんのところに聞きに行ってきたんだ」

幸助と出会った当初は、掃除すらできないほど気の抜けていたアラノ。

客の家へ出向いてまでアンケートを取るとは思ってもいなかった。いつの間にかやる気のスイッチが入ったようだ。

「それで、どんな回答が得られましたか？」

「えっとね、大きく分けると三つあって、一つ目は先代からずっと付き合っているから」

「ウチのお店はまだ二年なのに、長く続くのはすごいことですよね」

「ありがとう、サラちゃん」

長い付き合いができる客がいるということは大きな強みだ。ルティアの経営する小麦店にも先代からの客がついていた。

お互いの信頼関係が築かれていなければ世代の壁を超えることは難しい。

「二つ目は、オーダーメイドより安いってこと」

王都の工房では、同じデザインのものがある程度の数量生産している。

だから一足ずつサイズやデザインが違うオーダーメイドよりは安い。

ただしここには更に安い店がある。

これだけでは強みにならない。

「なるほど。それで三つ目はどうでした？」

「三つ目は微妙なんだよね……」

「どんな意見でも参考になりますから、とりあえず教えてください」  
「靴を足に合わせてくれる。要するにフィッティングをしてくれるからだって。靴屋だったら当たり前なのに五人全員がそう言ったよ」

「ここで幸助はふと疑問に思う。

自身が靴を購入した際、フィッティングをしてもらった経験はない。

せいぜい数種類のサイズを試し履きをして、足に合う合わないを自分で判断する程度だ。

この街の安売り店でもフィッティングはしていないと言っていた。

だが、アラノはそれが当たり前と言っている。

確かにパロの靴を購入したとき、足の形に合わせるため靴に器具を当てて調整していた。

あれがフィッティング作業であることは間違いない。

幸助はそれを確かめるため質問する。

「あつちの安売り店ではフィッティングをしないと行ってましたよ？」

「そりゃ数売らないといけないからフィッティングなんてやってられないだろうね。そもそも調整の利かない靴が多いし。オーダーメイドの靴では当たり前なことだよ」

確かに受注生産の靴は最初に客の足を計り、そのサイズにピッタリなものを作る。

それが当たり前なのは分かる。

だが、アラノの店は違う。

「アラノさんの売ってる靴は既製品ですよね？」

「既製品なんだけど、この王都の工房で作った靴は素材も作りもしっかりしてるんだ。オーダーメイドに匹敵するとは言わないけど、ある程度は調整できるんだよ」

だからこの工房の靴を取り扱ってるんだとアラノは続ける。

ここで幸助はパロのことを思い出す。

パロはアラノの靴を履くようになってから、足の調子が良くなっただと言っていた。

その姿を見て、幸助はフィッティングが強みではないかと薄々感じていた。

同じように靴が合わなくて悩んでいる人はいるはず。

アラノの店は、その人たちの救いになる可能性がある。予想が確信に変わった幸助は声を上げる。

「これですよ！ アラノさんの強みは！」

「えっ、何？」

「オーダーメイドの靴よりも安くフィッティングしてもらえる靴。ここでしか買えない強みです！」

「これでターゲットが決められるね！ コースケさん！」

ターゲットが決まれば、販売方法もより具体的に絞り込める。

魔道コンロは一般家庭にターゲットを決めたことにより、店頭での実演販売という販売方法を決められた。

それにより十分と言える成果を出すことができたのだ。

「本当にそれで大丈夫？」

「はい。ターゲットは、足に合う靴が見つからなくて困っているけれど、オーダーメイドは高くて買えない人。これで決まりです」



「ずいぶん絞り込むんだね。そんな人いるのかなあ？」

ターゲットが狭くなれば、より明確なプロモーションをすることができる。

あとは母数の問題である。

アヴィーラ伯爵領の人口は約五万人だ。

試してみる価値はある。

「先日僕が連れてきた子、パロもそうだったじゃないですか」

「ああ、確かにあの子は足の形が特殊だったからね」

「他にも同じ悩みを抱えた人がいるはずです」

幸助とサラは嬉しそうな顔を、アラノはまだ懐疑的な顔をそれぞれ浮かべている。

自分にとって当たり前のことを突然強みと言われたのだ。

そうなるのは仕方ない。

当事者と第三者では同じ事柄でも見え方は異なる。

「そうかなあ。でもコースケ君がそう言うんだったら……、試してみようかな」

「これで決まりだね！」

ようやく突破口が見つかりホツとする幸助。

ふと視線を落とすと自分の靴が視界に入る。

約一年半、同じ靴を履いている。ほつれや傷なども増えてきた。

これからの作業は、フィッティングのメリットを知らぬ未来の客へそれを訴求することだ。

アラノのフィッティングとはどのようなものか。

それを知るには、客として体感するのが一番である。

今の靴が合わなくて困っているという訳ではないが、何か得られることはあるはず。

そう思い幸助はアラノの方を見る。

「どうしたの？ コースケ君」

「僕の靴、かなり履き込んでるので、アラノさんの靴を新調しようかなと思ひまして。いいですか？」

「もちろん！」

そう言うとアラノは店の奥から数足の靴と器具を持ってくる。

パロの時と同様、何度も履いては脱ぎ中敷きを変えたり器具で叩いたり調整を繰り返す。

「はい、もう一回履いてみて」

靴べらを当て、かかとを靴へ滑らす。

その瞬間、シュツと空気の抜ける音がする。

「ほら。今、シュツて音がしたでしょ。これが足にぴったり合ってる証拠」

靴ひもを結ぶと幸助は店内を歩きながら感触を確かめる。

「へえ、確かにしつかりと支えられてる感じがしますね。つま先に余裕があるのに不思議な感じです」

「靴は足の甲とかかかとで支えるものだからね。脱いだり履いたりする時は、ちゃんと靴ひもをほどいてからするんだよ」

靴ひもなど、一度結んだらゆるくなるまで結び直すことなどなかった幸助。

心の中の面倒くさがり屋が顔を覗かす。

「え、面倒くさいことしないといけないんですね……」

「それも靴を長く使うためだよ。足の健康のためにもね」

「はい、分かりました」

「コースケさん、似合ってるよ！」

「ほんと？　ありがとう、サラ」

## 6・チラシ作戦

約一週間後、幸助とサラは再びアラノの店を訪れる。

店の強みが見つかり、ターゲットも決まった。

幸助はどうやって店のことをターゲット層へアピールするか考えていたのだ。

「コースケ君。それで、どうやって靴で困ってる人を探すの？」

「方法は三つ考えてきました」

そう言うと幸助は手を上げ、指を二本立てる。

「まず一つ目」

指を二本曲げ、人差し指だけ立てた状態にすると説明を始める。

「これは既に行っていることです。とにかく店に入ってもらい、フイッティングできる靴があることを知ってもらうことです」

「でも魔石のお客さんは誰も靴なんて気にも留めてないよ？」

確かに今はそうだ。

しかし幸助はアンケートの結果を聞き、その問題は解決できると確信している。

問題は、来店客がフイッティングしてもらえる靴の存在に気付いてないことだ。

その情報が無ければ、ここに陳列されている靴は「デザインの地味で価格の高い靴」でしかない。

そこで幸助は日本でおなじみのツールを提案する。

「ターゲットが決まったので、それに沿った内容のPOPを掲示しましょう」

「コースケさん、POPって何？」

「店内に設置する小さな看板みたいなものだよ。紙に商品の価格や特徴などを書いて、商品の近くに掲示するんだ」

そう説明をしながら幸助はB4程度のサイズの四角を宙に描く。大きさは適当だ。

訴求したい内容に合わせてサイズを調整すればよい。

重点的にアピールする必要がある商品にはその特徴を細かく記載したり、目を引くデザインにすることも多い。

日本の店舗では当たり前のことである。

しかし、この国ではよくて値札がついている程度だ。

「なるほどね。文字を読める人ならそれを見るだけで伝わるね」

商品の価格を伝えるだけならば簡単だ。

しかし、商品の価値を訴求するPOPを作るのは意外に難しい。

どのようにすると反応が良くなるのか、試行錯誤を繰り返すことが肝要である。

「時間があるときに色々作ってみてくださいね」

「分かった。いろいろ試してみるよ」

「あと、POPを見て興味を持ってくれたお客さんへの声かけも大切ですよ」

人の悩みはそれぞれ違う。

個別の悩み相談は、店主の仕事である。  
ちようど、店内にも雑談をすることのできるスペースができた。  
それを活用しない手はない。

「なるほどね。魔石を買いに来た人みんなに声をかけて売り込むと嫌われそうな気がしたけど、これなら大丈夫そうだね」

「はい。以上が足に悩みを抱えている人を見つけるための一つ目の手段です」

そう言いながら幸助が二つ目の説明に入ろうと指を二本立てる。  
その時、奥からココとミミがはしゃぎながら店内へやって来た。

「あ、サラおねーちゃんだ。あそぶ？」

「あ、サラおねーちゃんだ。あそぼ！」

パタパタとサラに駆け寄る双子。

残念だが今はミーティング中である。

サラがやんわりと断ろうとすると、アラノが声を上げる。

「今は大事な話をしてるんだ。ココミミはあつちで遊んでなさい！」

「ごめんねココちゃん、ミミちゃん。お話が終わったら遊ぼうね」

シユンとしたココとミミは、はあいと言いながら奥へ戻る。

遊びたい盛りの年頃だ。

母親も仕事に出ている。

寂しいのであろう。

だが、店が繁盛すれば母親は外へ働きに出る必要はなくなる。

四六時中亭主と一緒にいるのが嫌でなければ……だが。

そうなれば寂しい時間も減るであろう。

そう思いつつ二人の背中を目で送ると、幸助は説明を続ける。

「では二つ目。これはできるかどうか分からないですが……。アラノさん、治療院と提携することは可能でしょうか？」

「それはどういう意味？」

「靴が合わなくて足を痛めた人は治療院に行きますよね？ 治療術士からその患者さんへ、アラノさんの店を紹介してもらえないかなと」

日本でも顧客を共有、いや、協業できる他業種が提携する事例は多々ある。

幸助はそれができないかと考えたのだ。

「うーん、無理だと思っなあ」

「どうしてですか？」

「だって、足が痛くならなくなったら治療院の売上が減っちゃうでしょ。そんな不利益なことするわけないよ」

「そ、そうですか……。ならこれは諦めましょう」

意表を突かれる形となった幸助。

日本の場合、たとえば歯科医院であれば虫歯予防のため歯磨き指導をしているところも多い。

文化の違いは如何いかんともしがたい。

治療院へのコネも無い幸助は、この案を没にすることに決める。

「では三つ目です。今日の本題でもあります。経費は掛かりますが、やってみる価値のあることです」

「それはどんなこと？」

「チラシを撒くことです」

「チラシ？」

チラシとは「散らし」。  
即ちばら撒くことだ。

「紙にアラノさんの店や靴の特徴を書いて、道行く人々に配るんです」

「それってかなり費用がかかるんじゃない？」

「この世界の紙は日本よりも高価である。

闇雲にばら撒くことはできない。

だが、紙の値段については事前に調査済みだ。

食品と違い粗利額の高い靴ならば、強力なツールになる可能性はあると幸助は判断した。

「確かに費用はかかります。でも、適正価格で販売できれば利益は残るはずですよ」

「そうなの？」

「チラシをもらった人がみんな来てくれればいいもんね、コースケさん」

「サラ、流石にそれはないかな……」

広告業界には、千三つせんみつという言葉がある。

チラシ千枚に対して反応が三件得られるということを表した言葉だ。

反応が三件である。三人が買ってくれろという訳ではない。

だが、チラシが氾濫する日本では千三つは昔の話だ。

万三つや反応がゼロということも珍しくない。

だから非常にコストがかかる媒体ともいえる。



しかもチラシというのは撒くことが常態化すると、なかなか止められなくなる。

中毒性があるのだ。

スーパーマーケットなどの来店頻度の高い小売店では、どうしてもチラシを減らしつつも来店客数を維持できるか研究しているくらいである。

無計画なバラマキ、ダメ、絶対。

だがここは異世界。

チラシそのものに珍しさがある。

反応率は未知数だ。

挑戦する価値は十分にある。

いちど失敗してもリトライする時間は魔石が稼いでくれている。

「うん、誰もやってないから面白そうだね！ 具体的にはどんな内容をチラシに書くの？」

「それはこれから皆で考えましょう」

チラシを撒くことなら誰でもできる。

肝心なのはその中身だ。

幸助の腕の見せ所がやって来た。

「先日、チラシに使う紙を見繕ってきました」

そう言うと幸助はカバンから紙を取り出し二人へ見せる。

サイズはハガキくらいだ。

魔道具店で設計に紙を多用していたことを思い出した幸助は、二人から紙を取り扱う商人を紹介してもらったのだ。

「小さい紙だねえ」

「はい。費用のことを考えるとこれで試すのが一番だと思います。とりあえず千枚用意しました」

幸助の計算では、チラシを千枚撒いて大人向けの靴が二足売れば黒字となる。

三足売れば御の字だ。

「コースケさん、その紙に何を書くの？」

書きたいことはたくさんある。

だがサイズが限られている。

取捨選択をしなければならぬ。

「まず、一番伝えないといけないメッセージを大きく書きます」

「コースケさん、それは何？」

「何だと思う？ サラ」

首を傾げながら考えるサラ。

その答えが出る前に、アラノが口を開く。

「やっぱりフィッティングをやってるってこと？」

「それも大切です。でもこのチラシを手にとった人に、どのような行動をとってもらいたいかをまずは考えるんです」

「あっ、お店に来てねってことかな？」

「サラ、正解」

靴といえば安売り店二店舗のイメージが定着している。

アラノの店は眼中に入っていないと考えるのが順当だ。

だからこそ「ここに店があるから来てください」という情報を発

信する必要がある。

「まずはお店の場所が分かるよう地図と店名を書きます」

「でも靴といたら靴屋通りだから、そんな説明要らないんじゃないの？」

「恐らくアラノさんの店が靴屋通りにあると知っている人はかなり少ないと思います」

「うっ、そう言われると何も言えないや……」

「それに、靴屋通りの中どの店かも教えてあげないといけないですからね。だから地図は必須です」

掲載場所は紙の最下部でも裏面でも構わない。

チラシに記載したいことが沢山あると、どうしても地図のスペースが小さくなるか、無くなってしまいがちである。

それを防止するために最初にスペースを確保するという理由もある。

幸助は裏面の下半分に大きく丸を描き「地図」という文字を書く。詳細な地図を描くのは後からだ。

ちなみにこれが日本であれば、電話番号や住所なども必須である。

「これで『お店に来てください』という情報は記載できました」

「うんうん」

「次はお店に来てもらう理由を書きます。『お店に来てください。なぜなら……』に続く言葉がそれにあたります」

チラシの目的は店に来てもらうことだ。

それに対し、何で時間をかけてまでアラノの店へ行かなければならないか。その答えが訴求する内容となる。

「あつ、フィッティングをやってるってことだね！」  
「サラ、惜しい。どんな人にとって、フィッティングが必要かを表現するのが大切なんだ」

サラの言ったことは間違いではない。

だが、フィッティングをやっているというメッセージが来店動機につながるのは、フィッティングすることでどのような悩みが解決できるのか知っている人だけである。

だからもう少し噛み砕いた説明が必要だ。

幸助がヒントを出そうとしたとき、アラノが恐る恐る発言する。

「靴が足に合わなくて困っている方……かな」

「アラノさん、正解です。紙の表面はその言葉と合わせて『当店の靴で足の痛みを解消できます』と書き、足が痛がっている人と靴の絵も描きましょう」

そう言いながら幸助はキャッチコピーと人の絵を雑に描く。

文字が読めない人の方が多い街だ。

難題ではあるが、絵で説明するのは大切である。

「コースケさん、地図の上には何を描くの？」

「フィッティングについての説明と価格かな。アラノさん、ここは考えてもらってもいいですか？ 王都の工房を選んだ理由とか悩みが解決した人の事例なのです。僕が考えるよりも専門家の言葉の方がいいと思いますので」

「そうだなあ……。書くのに慣れてないから二、三日、時間をもらってもいいかな」

「はい。大丈夫ですよ。ただし、紙面も限られていますので、できるだけ短めをお願いしますね」

これでチラシの方向性は決まった。  
あとはアラノの原稿を待つだけだ。  
だがサラは何か思うことがあるようで、晴れない顔をしている。

「どうしたの、サラ？」

「これ、千枚配るんだよね……」

「全部同じにせず、数百枚ごとに違う内容を試すのもありだけど、買った分だけは試してみようと思ってるよ。どうして？」

「そんなにたくさん紙に書くの、大変だよ」

「それは版画にすればいいんじゃないかな」

「版画って？」

大きなキャッチコピーや絵は版画で。

細かい文字は手書きで書こうと幸助は考えていた。

紙はあるのに版画の文化は無いのであるうか。

幸助はアラノに聞こうとし視線を向けると、それを察したアラノは口を開く。

「絵描きさんが使ってるのを聞いたことはあるよ。木の板を削った版を用意して、そこにインクを塗って紙に写す方法だね」

「その方法です。サラは手先が器用だから木の板を削るのはお願いしてもいいかな？」

「うーん、やったことないけど頑張ってみるね！」

では今日の話はお終いですねと幸助が言ったとき、再び奥から「コとミミが顔を覗かす。」

話が終わるのを待っていたようだ。

「おはなし終わったかな？」

「おはなし終わったね」

「うん。終わったから遊ぼっか！」

そう言うとサラは立ち上がり、ココとミミの下へ行く。  
早速はしゃぎだす二人。

賑やかな声を背に、幸助は自分の靴の再調整をアラノへ依頼する。

「アラノさん、ちょっと踵かかとの上のところ当たるところが当たるとなっちゃいました。調整をお願いしてもいいですか？」

「もちろん。見てあげるからこっちに来て」

靴の調整をしてもらいながら、幸助はアラノと言葉を交わす。

「アラノさん。チラシの効果、楽しみですな」

「うん。何だかすごいことが起こりそうでワクワクしてきたよ。こんな気持ちいつ振りだろ」

手を止め、遠い目をするアラノ。

この状況に陥るまで何もせず手をこまねいていたわけではない。  
王都の工房だって見つけた。

戸別訪問だってやった。

だが、何をしても業績は向上しなかったのだ。

その状況でワクワクした未来が想像できなくなるのは仕方ない。

「集客がどうなるか、蓋を開けてみないと分かりませんが、アラノさんは自信を持ってくださいな」

「自信？」

そう聞き返しながらアラノは再び手を動かす。

「だってアラノさんの売ってる靴にフィッティング技術が合わされ

ば、本当に悩んでる人の救世主になりますよ」

「そう言ってもらえるのは本当に嬉しいよ。コースケ君に出会うまで、僕は全く技術なんてない使えない人間だと思い込んでたんだよね……」

「制作技術はなくても、フィッティングという違う技術があったという事ですよ」

「そうだね。コースケ君、ありがとう……」

ここでアラノは幸助の足を靴へ誘う。

調整が完了したようだ。

「うん。ぴったりです。さすがアラノさん！」

「もうこれで大丈夫だと思うけど、また調子が悪くなったら遠慮なく言ってね」

それから少し時は経つ。

印刷という細かな作業は困難と苦痛を伴ったが、まずは何とか五百枚用意できた。

アラノの想いが詰まったメッセージが長くなってしまったので、地図の上は手書きとなったのだ。

抜けるような青空が気持ち良い日。

商業街のメインストリートにはチラシを配る幸助とサラの姿があった。

## 7・存在意義

「靴屋からのお知らせです」

「よろしく願いします」

幸助とサラは、完成したばかりのチラシを配っている。

大きな文字や絵は版画で、そしてアラノの想いは手書きで五百枚作製した。

文字が読めなくてもおおよその内容は直感でわかるよう、最大限に配慮したチラシだ。

ちなみに文字が読める人向けに記載したアラノからのメッセージはこうだ。

「『もう他の靴は履けません』当店のお客様から頂いたメッセージです。オーダーメイドよりも安く、フィッティングー筋の店主があなたの足に合わせて靴を調整します。足の健康を全力でサポート。相談は無料」

短い文に詰め込みすぎで若干読みにくさはあるものの、要点はよく伝わる文である。

他店との差別化も明瞭だ。

「靴屋からのお知らせです」

「どうぞお持ちくださいーい！」

道を行き交う人は多い。

しかし皆足早のため、なかなかチラシを受け取ってもらえない。



「コースケさん、なかなか受け取ってくれないね」

「サラは何枚渡せた？」

「私まだ十枚だけ」

「僕なんて五枚だよ……。五百枚のノルマは厳しいかなあ」

厳密には幸助とサラのノルマは四百五十枚だ。

五十枚はアラノへ渡してある。

東京ではポケットティッシュというオマケをつけても受け取ってもらえないことが多い。

自分だって受け取らなかったことが多い。

彼らだって頑張つてノルマをこなしていたはずだ。

これくらいでへこたれるわけにはいかない。

幸助は通行人の一人に狙いを定め、歩きながら声をかける。

「こんにちはー、靴屋からのお知らせです。よろしかったらお持ちください」

「ん？ 何？」

「靴屋からのお知らせです。足に合う靴が無くて困っている人向けの商品を用意してます」

「あら、そうなの？ そういえば友達がそんなこと言ってたからもらっておこうか」

「ありがとうございます！」

コツが掴めてきたようである。

手元のチラシは少しずつ軽くなっていく。

場所は変わってアラノの店の前。  
店頭に設置した魔石の立て看板はいったん下げ、チラシに沿った  
内容の看板に差し替えている。

店内を見ると、そわそわと行ったり来たりするアラノの姿があった。

今頃幸助とサラはチラシを配っているはず。

チラシを手にした人が来るかもしれない。

そう思うと居ても立っても居られないのだ。

「パパどうしたの？」

アラノの娘ココが落ち着かない父の姿に問いかける。  
双子の姉妹ミミも不思議そうな表情を浮かべている。

「早くお客さん来ないかなあって考えてるんだ」

「きょうはお客さん、くるの？」

「コースケ君とサラちゃんがね、お客さんを探しに行ってくれてるんだよ」

「そっか。たくさんくるといいね！」

ココとミミの声が重なる。

「そっだね。ココ、ミミ」

アラノはそんな娘たちの姿に落ち着きを取り戻したようだ。

優しい顔で二人の頭をなでると店頭へ行き、自分自身も通行人へチラシを配る。

小さな紙に店の将来を託しつつ……。

午後遅めの時間。

チラシを全て消化した幸助とサラがアラノの店へやって来る。

サラは軽やかな足取りで。幸助は疲労感溢れる足取りだ。

普段立ち仕事をしているサラは、やはり幸助よりも体力がある。

「あ、コースケ君にサラちゃん。お疲れ様」

「お疲れ様ですアラノさん。お客さん、どうでしたか？」

幸助の質問にアラノはゆっくりと首を横に振る。

それだけで状況を察する幸助とサラ。

「ダメでしたか」

「うん。今のところまだ一人もね……」

本日の来店客はゼロであった。

もう夕方も近い。

恐らくこのまま閉店時刻を迎えるであろう。

「コースケさん、チラシの内容が悪かったのかなあ」

「まだそれは判断できないかな。オーダーメイドよりも安いといつても高価な商品だから、店に行こうって決断するのに少し時間がかかると思うんだ」

小麦店であるルティアの店で魔道コンロの実演販売をした時もすぐには売れなかった。

初めての購入者は、コンロの存在を知ってから数日後の購入であ

った。

家でさんざん悩んだ結果、亭主に背中を押され購入を決めたのだ。

「そっか」

「友人にチラシを渡すって言うてくれた人もいたから、しばらくは様子を見てみよ」

「うん。わかった！」

購入した紙はまだ半分残っている。

一週間程度様子を見て、来店客がいれば同じチラシを。いなければ切り口を変えたチラシを作ろうと幸助は考えていた。

結局その日は予想通り来店客はゼロであった。

そして翌日。

靴屋通りには小さな紙を手にしつつ、きよろきよろしながら歩く女性の姿があった。

安売り店二店舗の前を通過すると、さらに数店舗のオーダーメイド店の前を通過。

手にした紙と同じ絵が描かれた立て看板を見つけると、迷わず店内へ入る。

「すみません……」

「……」

「あのー」

「あ、はい。いらっしやませー！」

チラシの効果がゼロだった場合に備え、次のネタを考えていたア

ラノは、突然の来店に反応が遅れる。

「これってこの店で間違いないかしら？」

そう言いながら女性は手にした紙をアラノへ見せる。

そう、一生懸命考えたチラシだ。

「はい！ うちのことです。靴をお探しですか？」

「ええ。フィッティングして頂けると書いてあったから、その靴を見せて頂けないかしら」

「もちろん。ちなみに、足のことで何かお困りですか？」

「実はね……」

会話をしながらアラノは客をフィッティング席へ誘導する。

ベンチへ腰かけた客は言葉を続ける。

「足の形が左右で違ってて」

そう言つと客は靴と靴下を脱ぎアラノへ見せる。

アラノはその足を目視で確認し、器具で計る。

「確かに幅が左右でだいぶ違いますね」

「そうなの。それでね、大きい足に合わせて靴を買つてしょ。そうすると反対がどうしても緩くなつて……」

靴紐を固く結んでもダメなのよと客は続ける。

オーダーメイドでない限り、靴は左右同じサイズがセットで販売されている。

片方の足に合わせて購入するしかない。

従つて、きつくなるか緩くなるかのどちらかを受け入れなければ

ならないのだ。

「うーん、これは毎日大変でしたね」

「そうなの。普段立ち仕事をしてるから辛くて辛くて……」

そうですよねと言葉を返すと、アラノは奥から一足の靴を持って来る。

「あなたの足に合うのはこの靴です。フィッティングしてもよろしいですか？ その場合、お買い上げとなってしまうのですが……」

恐る恐る客へ提案するアラノ。  
言葉の後半が少し弱気である。

「紙に書いてあった価格で間違いない？」

「はい。大銀貨六枚です」

ここで店内に静けさが訪れる。

オーダーメイドより安いとはいえ、大銀貨六枚は高額だ。  
即決できる人は多くないであろう。

「本当に私の足にも合う？」

「大丈夫です。もし足に合わせられなかった場合、お代は頂きませ  
るので」

「……………」

「……………」

「……………なら、お願いしようかしら」

「ありがとうございます！」

この瞬間、チラシからの初めての売上が確定した。

このチラシを見て来店する客は、ほぼ何らかの悩みを抱えている人といってよい。

来店したときには購入することがほぼ決まっている。だから魔石目的の客とは違い、動機づけをする必要が無い。

「はい。もう一度履いてみてください」

何回かの調整を繰り返すアラノ。

幸助の時よりもだいたい時間がかかっているようだ。

「うん。大丈夫そうね」

客はペタペタと靴を触りながら足の感触を確かめている。

「では、店内を何周か歩いて頂いてもよろしいですか？」

その言葉に客は立ち上がると、狭い店内をグルグルと歩く。立ち止ったり小走りをしたりと、じっくり感触を確かめる。

「すごい！ 両足ともしつかりと支えられて歩きやすいわ」

「ではフィッティングはこれで完了ですね。これでしばらく様子をみてください。靴に不都合が出たらまた調整しますので気軽に来てくださいね」

「分かったわ。本当にありがとう。これで仕事も楽になりそうよ」

客は代金を支払うと、軽い足取りで店を後にする。

「ありがとうございましたー！」

久しぶりの新規客だ。  
しかも本業である靴の。  
客を見送るアラノの顔は充実感に満ちている。

「こんにちはー」

「あつ、コースケ君」

その日の夕方、幸助とサラはアラノの店を訪れる。  
状況を確認するためだ。

「アラノさん、その顔は手ごたえありって感じですね」

「うん。お客さん、来てくれたよ！」

「アラノさん、おめでとーございます！」

「ありがとう、サラちゃん」

幸助が今後の予定を話そうとしたその時、一人の男性が来店する。

「いらっしやませー！」

「あの、今朝友達からこれをもらって」

そう言いながらチラシを見せる男性。

早速クチコミも発生しているようだ。

「はい。それじゃあまずは足を見せてくださいね」

「お願いします」

「あー、これはハンマートウだねえ」

「ハンマートウ？」

「足の大きさに合っていない靴を履いてるとつま先がこうなっちゃう」



んだ。この靴かなり緩いでしょ」  
「そうだけど……、カツコいいからさ」

アラノの接客する姿に幸助とサラは安堵する。  
出会った当時は掃除ができないほど気が抜けていたアラノ。  
今はその面影すらない。

自分には技術があるんだと認められた。  
そして店の存在意義も確認できたようである。

「コースケさん」

「何、サラ？」

「アラノさん、立派な職人さんだね」

「うん。間違いない」

もう二人にできることは無い。  
この調子ならアラノの店は大丈夫であろう。  
幸助はアラノに目くばせすると、店を後にする。

ある日の午後。

晴れ渡った空の下。

ポカポカと暖かな空気の中。

商業街と工業街の境目にある広場では、キヤッキヤと遊ぶパロと  
ココ、ミミ姉妹の姿があった。

「今日はなにして遊ぶ？」

「今日はなににして遊ぶ」

「追いかけてこすの!」

そう言うとパロは勢いよく駆け出す。  
靴のサイズはぴったりだ。  
どれだけ走っても足は痛くならない。

「パロちゃんまってー!」

ココとミミが後に続く。

いつも通りの光景である。  
しかし数ヶ月前は、この光景が続けられない状況であった。

いつも通りが続けられるということは、素晴らしいことである。

## 7・存在意義（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
後日談など幕間を入れるかもしれないませんが、6章の本編はこれで終了です。

靴が足に合わなくて困っている方は、全国各地にあるシューフィッターのいる店へ。

7章は魔道具店編再びです。  
更新は7月中の予定です。

## 幕間：靴屋その後・サラの悩み

「ここ最近調子良さそうじゃない？」

「分かる？ 新調した靴がね、思いのほか調子よくなって」

ここはアヴィーラ伯爵領のとある倉庫。

せつせと何かを木箱に詰めつつも会話しているのは、ここに勤める女性二人だ。

茶髪の女性の足元は、決してお洒落ではないが真新しい綺麗な靴が輝いている。

同僚が興味深げにその足元を覗いている。

「へえ、よかったじゃない！ かなり悩んでたもんね」

「そうね。本当に転職も考えてたくらいだったから……」

茶髪の女性は、以前は立ち仕事の無い部署を担当していた。

しかし数ヶ月前に倉庫勤務へ異動。理由は人手不足だ。

もともと足に悩みを抱えていた女性は、一気に足の負担が増えてしまった。

元いた部署への異動も叶わず、長く務めたこの職場を退職することまで仄めかしていたのだ。

それがここ最近、足をかばうような動きが見えなくなった。

だから不思議に思い、同僚が声をかけたのだ。

「ちなみにどこで買ったの？」

「靴屋通りの店なんだけど。店主はええっと……、アラノさんっ

て言ったかしら」

「聞いたことのない名前だね」

「そうなの。その靴屋の案内が書かれた紙をもらわなかったら気づかなかったわよ。ほら、私の足にあう靴が無いつてずつと言ってたでしょ。その店はね、足に合わせて調整してくれるの」

「ってことはオーダーメイドで買ったの!? リッチだねえ」

やはりアラノの店は、まだ広くは認識されていないようである。靴屋といえば例の安売り店二店舗が強いという状況は今でも変わっていない。

目を真ん丸にして驚いている同僚も、安売り店以外の店はオーダーメイドと思い込んでいたようだ。

茶髪の女性は苦笑しながら答える。

「私の稼ぎなんて想像つくでしょ。同じ仕事してるんだから」

「まあ確かにそうだね。だけど……」

そう言うと同僚は作業している手を止め、再び相手の足元に視線を落とす。

見た目にもすっかりした作りである。

決して安物には見えない。

「この靴ね、オーダーメイドではないんだけど、私の足に合わせて調整してもらえたの」

「でも安くはないよね?」

やはり同僚は金額が気になるようだ。

小さくため息をつく、茶髪の女性はその質問に答える。

「まあ、ね。大銀貨六枚だから、かなり思い切って買ったわ」

「うわあ、やっぱり結構するんだ。それだけあったら贅沢三昧だよ！」

確かに大銀貨六枚といえば一カ月の生活費の三分の一くらいである。

同じ靴同士で比較しても、安売り店の十倍近い価格だ。

高級料理店で腹いっぱい食べてもお釣りがくる。

だが、オーダーメイドの靴は更に高い。

「それでもオーダーメイドと比べたら雲泥の差なの……」

「でも何だかもつたない気がするなあ」

「私にとっては大きなことなの。悩みが無い人が羨ましいわ。私なんてもう、あの靴屋さんが無くなったら困っちゃうくらいだよ」

少し語気が強くなる女性。

同じ悩みを抱えていない相手にはなかなか伝わらない話である。

「……そっか。ごめんね、言いすぎちゃった」

「ううん、いいの」

「それにしても靴でそんなに変わるとはね……。治療院でも解決できなかつたのに」

「治療院はね、受けたその時は良くなるんだけど、すぐにまた痛くなっちゃうの。痛くなる原因は合わない靴だったから。それを解決しない限りは通い続けなといけなかつたのよ」

「そっか。それを考えたらすぐに元は取れそうだね」

「そうそう、そうなの」

そう言つと女性は作業台に乗っている仕事へ目を向ける。

いつの間にか作業していた手は止まっていた。

仕事はまだまだ山のようにある。

残業代などという制度は無い。  
早く片付けるに越したことはない。

「さて、口だけじゃなくてそろそろ手も動かそうか」  
「うん。そうだね」

一世代前であればオーダーメイドが当たり前だった靴業界。  
今ではその面影はほとんど残っていない。

しかしこの女性のように、足に悩みを抱えている人は多くいる。  
だからこそその悩みが相談でき、さらには改善までしてもらえる  
アラノの店はこれからどんどん固定客が増えていくことである。

安売り店は、今のところ追従していない。  
それにかかるコストが見合わないと判断しているようだ。  
今のところ、うまく棲み分けができています。

ただし、まだまだ安心はできない。  
王都の工房から仕入れられなくなったら、競合店がフィッティングに参入してきたら……などリスクが尽きることはない。  
他店に浮気されなくらいの信頼関係をこれから構築していけるか、アラノの腕にかかっている。

時と場所は変わって、とある日曜日のこと。

とあるカフェではプチ女子会が開かれていた。

「はあ……」

「どうしたのサラちゃん。元氣無いじゃないの」

テーブルを挟みお茶を飲んでいるのは、サラとルティアだ。

オリブオイルという仕事上の繋がりがあり、定期的に顔を合わせていた二人。

一時は恋敵としてルティアを意識していたサラだが、思い過ぎしだと知ると一気に仲良くなる。

今ではこうして時おり女子会を開くくらいの仲だ。

しかし今日のサラからは、いつもの元氣さが窺えない。

何かに悩んでいる様子だ。

「うーん、ちょっとね……」

「ちょっとじゃ分かんないよ？」

「……」

「もったいぶってないで話しちゃお。話したって減るものは無いんだし」

「そうなんだけど……」

煮え切らない態度のサラ。

なかなか切り出しにくい話題のようだ。

お茶を飲むわけでもなく、手元のカップを手にとったり揺らしたりする。

「ほら、解決できるかは分からないけど、話したらスッキリすることもあるよ」



その言葉でサラは伏せていた顔を上げ、ルティアと視線を合わせる。

トレードマークの真っ赤なポニーテールが軽く揺れる。

「あのね、ルティアさん」

「なあに？」

「コースケさんってどんな人だと思う？」

「どんな人って、変な質問するのね。サラちゃんの方が一緒にいる時間が長いんだから、あたしより詳しいでしょ」

期待した答えが得られなかったサラは言葉を続ける。

「それはそうなんだけど、イマイチよく分からないことが多くて…」

「仕事はかなり優秀だしお金は持ってそうだし、顔はまあ……それなりだし。何が分からないの？」

「えっ、あ、その……」

ここで言葉に詰まるサラ。

慣れない話題を相談しようとしているため、うまく悩みが表現できていない。

どうやって答えようか悩んでいると、ルティアが先に口を開く。

「うふふっ、その様子だとコースケがサラちゃんのことどう思ってるのか気になってるんでしょ」

「うっ……」

凶星だったようだ。

ルティアは紅茶を一口飲むと、真面目な顔になり身を乗り出す。大きい何かが無言のうちに乗り強調される。

隣席の男性客がチラチラと視線を送るがルティアは気にも留めない。

「まだ進展してないの？」

「そう……なんです」

「こんな可愛いサラちゃんを放ったままなんて、コースケは罪な男ね」

ルティアは姿勢を戻すと紫色の長い髪をかきあげ、言葉を続ける。

「ちゃんとアピールしてる？」

「もちろん！ 手料理も食べてもらったしお洒落だったし……」

「お、努力してるね。えらいえらい」

「でも全然振り向いてくれないの。この前なんか久しぶりにコースケさんとお出かけだから精一杯お洒落したのに、開口一番『汚れてもいい服に着替えて』だよ！」

サラが言っているのはアラノの店の大掃除をした日のことだ。

事前に知っていれば別な日を楽しみにすることができたのに、当日いきなりである。

そして幸助のフォローといえは「明日着れば」だ。

気の利かない男と思われても仕方ない。

その顛末をサラは勢いよく説明する。

「あはは、そりゃ大変だったね」

「でしょでしょ！ それにいつも子ども扱いだし。私がたまにいいこと言つと頭ポンポンするんだよ」

確かに幸助はよくサラの頭をポンポンしていた。

サラはそれが嬉しかった半面、子ども扱いされているとも感じて

いたようだ。

「だから私思ったの」

「うん？ 何を？」

「コースケさんが……」

「……？」

「男に興味があるんじゃないかなって！」

男に興味がある。即ちアツー！ なことである。

もちろんこの世界にも性の多様性はあるが、それは少数派だ。想像の斜め上に行くサラの言葉にルティアは爆笑する。

「あははは、そんなことないよ。コースケが男好きなんて断じて……

ぷぷつ、あははははは

「ルティアさん、笑いきすぎ」

「ごめんごめん。だってサラちゃんが面白いこと言うから」

笑いきすぎで目尻に溜まった涙をハンカチで拭くルティア。

サラはというと不服そうに頬を膨らましている。

「もう、ルティアさんたら……。絶対にそうじゃないって断言はできないのに」

「断言できるよ」

「えっ？ 本当に？」

「だってあたしの胸元よく見てるもん。それが何よりの証拠だよ」

特に夏場はねと続けるルティア。

そしてサラはというと、プンスカと怒り出す。

「もう！ コースケさんつたら失礼な！」

「男はみんなそうだよ。コースケだけじゃないからさ、そこは怒らないで、ね」

「それでも！」

「まあまあ、これでサラちゃんの疑念は解消されたわけだからさ」

ルティアに窘められ、サラはようやく大人しくなる。

しかしまだ根本的なところは解決していない。

男好きではないとしたらサラ以外に意中の人がいるのか、はたまた故郷に許嫁いいなすけがいるのか。

そういえば故郷の話は出会った時に少し聞いただけで、詳しく聞いたことがない。

思考がグルグル巡り、混乱するサラ。

「うう、何だかよく分からなくなってきたよ」

溶けるようにテーブルへ伏せる。

その様子にルティアは困った表情を浮かべる。

ルティア自身も幸助に聞いたわけではないので本当のところは分からない。

人生の先輩として経験と予想で話すしかない。

「サラちゃん、なんだかんだ言ってるけど、コースケのこと好きなんでしょ？」

サラはゆっくりと顔を上げ、口を開く。

「それはもちろんそうだけど……」

「絶対にサラちゃんのこと意識してると思うよ。でなきゃそんな  
にいつも一緒には居てくれないでしょ。でも……」

「でも？」

「何か無理して意識してないふりをしてるように見えるんだよね」

「どういうこと？」

「うーん、何て言ったらいいかな。何かコースケ自身にルールがあるとかかな。何か目標があって達成するまでは恋愛禁止とか」

「それならいいんだけど……」

完全に想像の話ではあるが、少しは納得したようだ。  
手元にある紅茶を初めて啜る。

「まだ焦らなくてもいい年だし。じっくりと待ってみればいいんじゃない？」

「そうだね。そうするよ。お母さんが「いつコースケさんと引っ付くの」って煩いからちよつと焦っちゃったよ」

「確かに優良物件だからね、コースケは」

やっぱり私も猛アタックしてみよっかなとルティアは続けると、悪戯っぽい表情を浮かべる。

「えっ！……！」

「冗談だよ。うふふふ」

「もー、ルティアさんったら」

「ほら、これ食べてごらん。ここのクッキー、甘くて美味しいよ」

解せない表情をしているサラの口に無理やりクッキーを入れるルティア。

されるがままにクッキーを受け入れると、モグモグと口を動かす。その瞬間、サラの顔にパツと笑顔が咲く。

「うん！ 美味しいねっ！」

「でしょ。新作なんだって」

「へえ、そうなんだ！」

今度は自分でクッキーをつまむと、パクリと口へ放り込むサラ。かなり気に入ったようだ。

「それでねサラちゃん、この前のことなんだけど」  
「なになに？」

そのまま話題は別のテーマに移る。

二人の女子会は、しばらく続く。

## 1・新製品？

幸助がアヴィーラ伯爵領に来てから一年が経った。季節は一周巡り、新緑はその濃さを徐々に増しつつある。

今日も多くの人々がメインストリートの石畳を踏みしめ、西へ東へと向かっている。

そんな通りの様子を宿屋から見下ろしている男　幸助の姿があった。

（もう一年経つのか。それにしても濃い一年だったなあ）

幸助は部屋から外をぼうつと眺めながら物思いにふけている。頭の中ではこの一年間で起きた様々な出来事が巡っている。

サラとの偶然の出会いがきっかけで『アロルドの Pasta 亭』の経営改善に関わる。

その後も人との縁が続き、多くの店の経営改善に携わることができた。

一般市民の身分である幸助が、貴族からも仕事を頼まれるようになった。

この世界の文化からすれば異例の出世である。

（最初は食品関係でやり易かったけど、この世界ならではの業種もあつたりして大変だったよなあ。ま、就職してから初めて任されたスーパーマーケットのプロジェクトと比べたらどれも楽だったか。あれは本当に参ったもんなあ、トラブル続きで）

幸助がコンサルティング会社に就職してから初めて担当したプロジェクトは、スーパーマーケットの業務改善だった。

就職後、約一年経った頃のことだ。

まだコンサルタントとして半人前の幸助が先輩社員に助けられながら取り組んだのだが、トラブルの連続で徹夜続きだった記憶がある。

それと比べると、今は遥かに充実感に満ち溢れている。

何かあった時にかばってくれる上司や、最終的な責任を負ってくれる会社という組織はない。

しかし、それ以上に得られるものが大きい。

自分が考え、取り組んだことがダイレクトに成果となって返ってくる。

相手の生活が懸かっている仕事だ。責任は重大であるが、成功したときの達成感ほど心を満たすものはない。

だから幸助はサラリーマン時代以上にこの仕事にやりがいを感じている。

(そういえばこの世界で自分の商売を立ち上げて、多くの人の役に立って決めたんだよな)

幸助はこの世界で初めて取り組んだ仕事　アロルドの店の改善

が成功し、打ち上げが終わった後に自分に誓ったことを思い出す。

宿へ帰る道すがら、夜風のなか立てた誓いだ。

この世界に召喚されてから初めて人の役に立てた。

突然召喚されたことによる絶望の中、見えた光である。

その時のことはまだ心の中に強く残っている。



(順調な滑り出し、いや、順調すぎる滑り出しだよなあ)

今でも時折、家族や上司のことを思い出すこともある。それでも以前のような悲観はもう無い。

サラヤアロルドをはじめとする新しい仲間ができたからだ。

「みんなに感謝だな。さて、そろそろ時間だし、出かけるか」

そう言つと幸助は窓を閉め、出かける用意をする。

幸助は未だに宿屋暮らしをしている。

一時はアパートを借りることも考えた。

しかし家事の煩わしさと天秤にかけたところ、宿の利便性が圧勝したのだ。

幸いなところに今のところ資金は潤沢だ。

準備も終わり部屋を出ると、一階へ降りる。

まだ早い時刻だ。宿の食堂兼酒場は閑散としている。

幸助は顔なじみの従業員に挨拶をすると外へ出る。

向かう先は魔道具店だ。

新製品ができたという話を聞き、見に行くことにしたのだ。

この時代には数少ないハイテク製品である。

胸を躍らせつつ、足を進める幸助であった。

「ニーナさん、お久しぶりです」

「久しぶりだね。待ってたよ」

久しぶりに訪れる魔道具店。  
店構えは以前と変わっていないようだ。

ただし、人の出入りは以前よりも激しくなっている。

今までは、数時間店内で会話していても来客などなかった。

しかし今では、荷物を抱えたり書類を持った人達がひっきりなしに出入りしている。

製造拠点になっており、店としてはほとんど機能していないのではと推察する幸助。

「順調そうですね」

「おかげさまでね。隣街から追加の注文もあったし、もう笑いが止まらないよ。フッフッフツ」

「そ……それはよかったです。隣町まで足を運んだ甲斐がありました」

ニーナの黒い笑みに磨きがかかったように感じる幸助。

少し引きつつも、先ほど感じたことをニーナへ質問する。

「ここはもう店として使っていないんですか？」

「そうだね。一応は店のつもりだけど前から客なんてほとんど来なかったし、今は完全に研究開発と製造だけになっちゃったね」

貴族や店舗向けには出入りの商人を経由して販売。

一般市民向けにはルティアのような代理店で販売している。

よって店として存在する必要は、最早ない。

「造るだけならもっと安い立地でもいいような気がします……」

「ああ、そのことね。ここは技術者たちの家が近いんだ。だから研

究開発拠点としてこのまま残して、組立工場は別の場所に移そうと思ってるんだよ」

「なるほど。確かに技術者は貴族の人も多いですもんね」

「そうそう」

研究開発は相応の教育を受けた技術者でなければできないが、組立なら誰でもできる。

そこを分けるのは理に合っていると判断した幸助は、本題へ切り替える。

「それで、新製品というのはどれですか？　かなり楽しみにしてきました」

「フフツ、よくぞ聞いてくれたね」

ニーナの眼鏡がキラリと光る。

まあ立ち話もなんだからと促され、幸助はいつものソファーに腰かける。

テーブルには何やら魔道具らしきものが置かれていた。

形状からすると魔道コンロのようだが、幸助の見たことのないサイズだ。

しかも、ゴテゴテと趣味の悪い装飾が施されている。

「新製品って、これ……ですか？」

「うん。これも新製品の一つだよ。魔道コンロの改良型。これ、すごいんだよ」

そう言つとニーナはコンロを手に取り、側面を幸助へ向ける。そして自信たっぷりな声を上げる。

「見たまえ　魔石の三・連・装！」

でーんとニーナが示す先には、確かに真つ赤な魔石が三つ装着されている。

眼鏡の奥の眼からは自信がありありと窺える。

ゴトリとコンロをテーブルへ置くと、ニーナは更に言葉を続ける。

「家庭用と同様にエネルギー交換効率が高く、最高出力は当社比五倍。しかも魔石の三連装により交換サイクルも長くなった新型の大型魔道コンロ。どうだい？」

どうだいと言われても、どう反応してよいか分からず固まる幸助。魔石の三連装は良いアイデアだと感じた。

業務用に出力を大きくすればエネルギーの消費量も多くなる。当然、必要とする魔石の量も増える。

三連装にすることで交換サイクルが長くなれば面倒も減る。

問題はそこではない。

幸助はゴテゴテでキラキラの装飾が気になって仕方ないのだ。

シルバーをベースに、ゴールドの文様と色とりどりの石が散りばめられている。

まるで成金趣味だ。

「あ、あの……」

「うん、何だい？　感動して言葉にもならないのかい？」

「いや、そうではなくてですね。魔石の三連装は良いアイデアだと思います」

「でしょ。もつと褒めてくれてもいいんだよ」

「はい。とてもすごいです……。とてもすごいと思います。でも！」「でも？」

次第に言葉が強くなる幸助。

次の言葉を言おうか言わまいか少しだけ悩むが、言わずにはいられない。

「……………この趣味の悪い装飾はいったい何ですか！！！」

趣味が悪いと言い切ってしまった。これがニーナの好みだったらどうしようと、言ってから気付く幸助。

もしかしたら今まではコストをかけられなくて武骨な製品しか開発できなかった。

だが本当に開発したかったのは煌びやかな製品だったのかもしれない。

そうであればニーナを否定してしまうことになる。

だがもう遅い。

言葉は既に放たれている。

発言の撤回などという都合の良いことはできない。

幸助はドキドキしながらニーナの反応を窺う。

「フフツ。この装飾が気になったんだ。これは貴族向けのカスタマイズだよ。もちろん普通の厨房向けは家庭用と同じシンプルなデザインだから安心して」

「そうですか。それを聞いて安心しました……………」

ニーナの言葉に幸助は胸をなでおろす。

幸いなことにニーナの趣味でもなく、一般に市販されるものでもなかったようだ。

「でも趣味が悪いだなんて、これをデザインした子が聞いたら泣い

「ちやうよ」

「す………すみません」

やはり失言だったようだ。

幸助は即座に謝る。

サラリーマン時代に培ったこの能力は、異世界生活一年以上の今でも反射的に作動する。

「フツ、それでね。新製品なんだけど次が本命なの」

「他にもあるんですね、新製品！」

魔道具についてのアイデア交換は、既に何度もしている。

その際幸助は、日本で使っていた便利な家電製品などをよく例に挙げて話していた。

その中のどれが製品化されたのか、期待感が高まる。

「魔道コンロに次ぎ我が店での二つ目となる製品化………それはね」

「それは………？」

ニーナは立ち上がると部屋の隅に置かれている箱のような物体へ近づく。

幸助もそのあとに続く。

その箱は、大きさが幸助の腰の高さくらいある、縦長の直方体だ。外装は木を地味なグレーで塗ったものようだ。

前面には取っ手がついている。

幸助にとって既視感のある形状だ。

コンロ同様、日本では間違いなく必需品の一つである。

「冷却庫、ですか？」

「正解！」

やはり冷蔵庫、いや、冷却庫であった。

以前は効率が悪いと出来損ない扱いされていた魔道冷却庫。ルティアの店で見た物よりも数倍大きい。

見た目以外にどのような改善をしたのだろうか。

それが気になった幸助はニーナへ質問する。

「効率の問題は解決できたんですね？」

「もちろん。コンロを高効率化したのとほとんど同じ術式で行けたからね」

「なるほど……」

やはり熱を扱う魔道具は、温めるか冷やすかで技術的な差は少ないようである。

といっても魔道具の技術はちんぷんかんぷんな幸助。

ニーナに対して、頷くだけのリアクションにとどめる。

以前迂闊にも技術的なことを質問したところ、乗りに乗ったニーナに数時間拘束された経験がある。

それ以来、幸助は技術面で掘り下げないと決めているのだ。

「あと一つ工夫したところがあるんだ。何だと思う？」

嬉しそうな顔をしつつ、ニーナは幸助にそう聞く。

やはり魔道具の話をしているニーナは活き活きしている。

「うーん、分からないですね。大きさですか？」

「フツ、はずれだね。これはコースケには分からないかな。こっ、触ってごらん」

言われるがままに冷却庫に触れる幸助。  
特に何も感じるものはない。  
ただの塗装された木だ。  
率直な感想をニーナへ伝える。

「特に……何も感じません」  
「でしょ！ 凄いやと思わない？」

何も感じないと言ったのに、テンション高く喜ぶニーナ。  
意味が分からないが幸助は取り敢えず頷く。

「外は冷たくも何ともないのに、中はキンキンに冷えてる。これは革命だね」

そう言つとニーナはドアを開け、中から飲み物を取り出す。  
それを徐に幸助の頬へ当てる。

「わっ、冷たっ！」  
「でしょ。冷却庫の箱部分を今までと違う素材にしたら、同じ魔石でも長く冷やせるようになったんだ」  
「ああ、そういうことですか。断熱材が無かったから輪をかけて効率が悪かったんですね」  
「そうそう、飲み込みが早いね」

一通りの説明を聞くと、幸助はしげしげと冷却庫を観察する。  
容量は一人暮らし用の冷蔵庫よりも少なそうだ。  
だが、冷やすことは魔法か冬の氷に頼っている世界では、大きな需要が期待できそうである。



しかもこれから季節は夏へ向かう。  
夏に冷たい飲み物なんてほとんど出会ってない。  
一度だけルティアの店でほんのり冷えたお茶をもらっただけだ。  
絶対に宿の自室に設置しようと幸助は思うのであった。

「ニーナさん、これ、僕も欲しいです」  
「フツツ、お目が高いね。量産品が完成したら真っ先に納品しよう  
じゃないか。王都の店にも置く予定なんだ」  
「是非！」

ここで幸助は以前の話思い出す。  
領主の館でのミーティングの時に、領主であるアルフレッドがニ  
ーナへ王都の店を任すと言ったことだ。

「そういえばニーナさん」  
「うん、何だい？」  
「ニーナさんは王都の店を任されたのではなかったですか？」  
「ああ、それはね、他の街にも出店する計画が立ったから私は全体  
を統括することになったの。だから王都の店長は現地で雇ったスタ  
ッフの中から抜擢したんだ」  
「なるほど。だからここに居られるんでるね」  
「そういうこと。王都は簡単な修理設備しか無いからね。私は開発  
の最先端にいたかったんだ」

二人は会話しながら再びソファーへ腰かける。  
幸助は冷却庫から出された冷えたお茶で喉を潤す。  
久しぶりの冷たい飲み物が喉を通り胃へと流れるのを感じる。  
良く冷えている証拠だ。

「王都の店は順調ですか？」

「好調な滑り出しだよ。もともと魔道コンロの話も流れてたからね。情報に敏感な人はすぐに買ってくれたよ」

「やっぱり王都は違うんですね」

「うん。人の数も動くお金も桁違いだね。王都は行ったことなかった？」

「いや、あるにはあるんですが、ほとんど通過しただけでじっくりは滞在してないんです」

幸助はこの世界に召喚されてから約半年を、旅という名の無目的な移動に費やしていた。

王都も通過したのだが、あまり印象は残っていない。

しかしニーナの話聞き、俄然興味が湧いてきた。

以前滞在した水の街も新鮮な体験を数多くできた。

きっと王都にも新たな発見があるに違いない。

そう思った幸助は、ニーナへ訊く。

「王都の店、見に行ってもいいですか？」

「うん？ もちろんいいよ。突然どうして？」

「店を見てみたいのはもちろんですが、王都の雰囲気も味わってみたいなと思ひまして」

幸助の言葉にニーナは顎に当てる仕草をする。

何か考えているようだ。

数秒の後、幸助に視線を合わせるとニーナは口を開く。

「ちよう和良好的。ついでに王都の店で魔道冷却庫の販促もお願いしてもいいかな？ 価格が高いから販売の工夫も必要そうだしね。だからまずは王都で売ることにしたんだ」

今は何の案件も抱えていない幸助。

ただの観光の予定がついでに仕事もできる。

思っても無いオファーに幸助は二つ返事で引き受けることにする。

「もちろん、喜んで引き受けさせて頂きます！」

## 2・王都へ

「というわけで、王都へ行くことになりました」

二ーナの店での用事を済ませると、幸助はその足でアロルドの店へ向かう。

そして店に入るや否や王都行きのことを伝える。

時刻は夜の営業が始まる直前。

至る所にランプが灯り、薄暗い店内を淡く照らしている。

その店内のテーブルで三人が幸助の話を聞いている。

アロルドとサラ、そしてサラの母ミレーヌだ。

幸助の報告にまず声を上げたのは、幸助の隣に座るサラだ。

「今度こそ私も一緒に行く！ マルコ君も仕事任せられるようになつたし、いいでしょ？」

そう言いながら両親の顔を交互に見る。

見習いのマルコはここへ来て四カ月以上経過している。

調理は少々、ホールならば全てを任せることができる。

以前幸助が一人で隣町に行った時とは状況が違う。

「いいんじゃないサラ、行ってきなさいよ」

そう言ったのはミレーヌだ。

サラと視線を合わせると、二人でにつこりと笑顔を作る。

「えっ？ ミレーヌ。お前……」

その二人とは対照的に戸惑った表情をしているのは、もちろんア  
ロルドだ。

確かに見習いは育っている。

サラがいなくても店は回る。

だから店が回らないという反対意見は使えない。

それでも必死に行つてはいけない理由を探し、並びたてる。

「そんな話突然言われても」

「行くのは二週間後ですから、ゆっくり準備できますよ」

「足手まといにならないか？」

「仕事に関しては逆に僕が助けられているところもありますからね」

「そうだよお父さん！ 私、足手まといなんかじゃないもん！」

二人の言葉にアロルドはどんどん小さくなっていく。

「王都は危険だぞ」

「何かそういうデータはあるんですか？」

「……そんな気がするだけだ」

「では、それだけでは危険という理由にはなりませんね」

「そうよ。王都の方が整備されてここよりも安全じゃないの」

「それでも……」

「ねえお父さん、いいでしょ？」

「……」

アロルドはここで口を噤む。

必死に言葉を探すが出てこない。

「反対意見も無いみたいだし、決定ね」

「ぐぬう……」

迷えるアロルドに止めを刺したのは、妻ミレーヌだ。

アロルドもこれ以上反対はしなかった。

愛娘サラは十五歳。既に成人している。

アロルドもそろそろ子離れしなければならぬという自覚はあるのだ。

「やったあ！」

店内にサラの声が響く。

こうして二人の王都行きが決まったのだった。

「コースケさん、すごい！ 大きいよ！」

「うん。さすが王都だね」

馬車で移動すること数日、幸助とサラは王都のすぐ近くまでやって来た。

小高い丘を移動しているため、馬車の車窓からは王都が一望できる。

まず目に入るのは街の中央に所狭しと並ぶ石造りの建物だ。

どれも三階建て以上の高さがあり、統一された濃いオレンジ色の屋根が美しい景観をつくっている。

その建物の群れを高さ五メートルほどの城壁が囲っている。

さらにその周りには、納まりきらなかった住宅が無秩序に広がっ

ている。

一説によると人口は三十万人。  
幸助が訪れた街の中では最大である。

そして何よりも目を惹くのは北にそびえたつ城だ。  
山を背に一段高いところに建っているので、距離は離れているが  
その姿は圧巻だ。

「あのお城の中にお姫様がいるんだね！」  
「うん。きつとそうだよ」

サラは久しぶりに訪れる景色を楽しんでいるようだ。  
幸助も日本では味わえない景色をしばし堪能する。

翌朝。

二人はニーナに紹介された宿で一泊すると翌朝、目的の場所へ向かう。

「ここかな？」

「そうみたいだよ！」

まっすぐ整備されたアヴィーラ伯爵領と違い、細く入り組んだ道を歩くこと十数分。

幸助とサラはニーナに教えられた魔道具店へ到着した。

場所は住宅街の中でも貴族街に近い場所に位置する、比較的富裕層が多いエリアだ。

五階建ての建物の一階部分が店舗となっていた。  
事前情報では、ここで販売と修理を行っているとのことだ。

「こんにちは」

ドアを開け店内に入ると二人は声をかける。

店内に待機していた一人の女性がそれに気づき、近づいてくる。

「いらっしゃいませ」

「幸助といいますが、ニーナさんからの紹介でアリシアさんに会いに来ました」

「はい。お話は伺っております。こちらにかけて少々お待ちください」

幸助は案内された椅子に座ると店内を見回す。

すぐ横には幸助たちが掛けているものと同様のテーブルが二セットある。

商談や実演販売をするコーナーかもしれないと幸助は推測する。

「コースケさん、オシャレな店だね」

「うん。僕もそう思う」

この店はアヴィーラ伯爵領の店とは違い、カジュアルな造りだ。コンビンほどの広さの店内には白で明るい印象の棚が並び、そこには二サイズの魔道コンロが陳列されている。

将来を見据えてなのだろう、商品を陳列する場所は広い。

しかし今あるのはコンロのみで、冷却庫はまだ並んでいなかった。従って、売場はスカスカだ。

水を温めたり冷やすことのできるポットも、もうすぐできると聞



いていた。

様々な商品が並ぶ将来が待ち遠しい。

店内を一通り見回したところで、奥から一人の女性がやって来た。幸助は反射的に立ち上がりつつ、女性の様子を窺う。

紺色のショートヘアーに少し垂れた紺色の目。

年の頃は幸助よりも少し若いくらいであろうか。

背はサラよりも高く、すらっと細い。

しかも出ているところはしっかりと出ている。

ブルー基調の制服が、そのサイズを強調している。

「お待たせ致しました。私が店長のアリシアです」

自己紹介をするアリシアの声は、透き通るようだった。

見た目だけでなく声も麗しい。

幸助は鼻の下が伸びそうになるのをぐっと堪え、自己紹介する。

「ニーナさんから紹介して頂きました幸助です」

「サラです」

「話はニーナさんより伺っております。魔道コンロを人気商品にのし上げた立役者ですってね。何度もお話を伺っておりますので、初めてお会いしたようには思えません」

アリシアはそう言うにつこりとほほ笑む。

前評判はかなり高いようである。

「ありがとうございます！ 何より製品が良かったですからね。これからの展開が楽しみです」

「はい。これから少しずつ新製品が増える予定ですから、私も楽し

みです」

アリシアは花の咲いたような笑顔でそう答える。  
幸助の心拍数は高まる。

口はだらしなく開いたままだ。

サラからの肘鉄は飛んでこなかった。

二人はアリシアに促され再び椅子へ掛ける。  
まずは互いのことを知るための雑談からだ。

「アリシアさんもニーナさんみたいに小さな頃から魔道具に触れてらっしゃるんですか？」

「いいえ、魔道具に触れたのはここに来てからなんです」

そう言い始めたアリシアは、ここに勤めることになった経緯を説明する。

アリシアは商家の次女として育ち、最近まで家業を手伝っていた。しかし、商売はいずれ長男が継ぐことが決まっている。

長女はとっくの昔に嫁いだ。

家督を継ぐことのできないアリシアも、いつまでも家にいるわけにはいかなかった。

そのような状況の中、たまたま魔道具店が求人していることを知った。

商売については心得ている。

魔道具といえば今トレンドの成長産業だ。

この大きな波に乗れるかもしれない。

そう考えたアリシアは、迷わず応募したそうだ。

同じように考えるライバルは多かった。

しかしアリシアは持ち前の賢さを活かし、試験をくぐり抜ける。結果採用が決まり、さらには二ーナの代わりに店長へと大抜擢されたのだった。

「へえ、そんなに人気だったんですね。魔道具店」

「すごいです！」

「はい。ですので両親とも大喜びで。採用が決まった日はお祝い料理に鶏の丸焼きが出たくらいです」

日本で言えば勢いのあるベンチャー企業が、はたまた公営の事業なので公務員的な感覚なのか。

幸助にはアリシアの両親の気持ちは分からなかった。

だが、魔道具店がそれほど喜ばれる存在になったということは嬉しいことである。

「それにしても、アリシアさんのような方が店長で安心しました。

前はみんな技術畑で大変でしたので」

「うふふ、お世辞でも嬉しいですよ」

幸助はそんなやり取りをしながら、数ヶ月前のことを思い出す。

当時の魔道具店にいるメンバーの中には、営業ができる人間はいなかった。

結果、幸助は体重を削りつつ代理店政策に奔走することになったのだ。

「そういえば、王都内で魔道具を売っているのはここだけですか？」

「ええ。そうですね？」

そう答えながら小首をかしげるアリシア。

その可愛らしさに幸助は一瞬ドキツとするが、おくびにも出さない。いや、出せない。

「ということは、小売店には卸してないんですね」

「はい。その通りです。コンロの性能については認知されておりまして、今後商品が増えてくると兼業ではお店に負担がかかってしまいます。ですので改めて商品ラインナップが充実したときに、魔道具専門の代理店を募ることにします」

「なるほど。それは確かにそうですね」

具体的な回答が返ってきたことで幸助は安堵する。

ならば仕事は冷却庫の販売プランと一緒に考え、実績を作ること  
に絞られる。

これならば、王都観光もしつかりと楽しめそうだ。

「では本題ですが、アリシアさん。冷却庫はもう届いていますか？」

「はい。倉庫に試作品があります。ご覧になりますか？」

「私、見たことないから見てみたいです！」

まだ冷却庫を見たことのないサラの言葉で三人は席を立つ。

倉庫には大量のコンロと魔石が保管されていた。

しかし店頭と同様、スペースにはまだまだ余裕がある。

幸助はその倉庫の一角に、見覚えのある箱と見たことのない小さな箱があるのを見つける。

「へえ、小さいサイズも造ってたんですね」

「はい。暫定ですが大きい方が金貨五枚になってしまいますので、手が出しやすいよう小さなものも造ってもらいました」

幸助は小さな冷却庫に近づくとドアを開ける。

外觀以上に収納できるスペースは小さかった。

しかし冷やすものを限定するならば必要にして十分。

ビジネスホテル備え付けの冷蔵庫もこのくらいのサイズであった。宿の部屋に置くのは、この小さなものでもいいなと考える幸助。

「小さなのも便利そうですね。こっちの価格はどのくらいになりそうですか？」

「こちらは金貨二枚です」

小さな方でも金貨二枚。

ということは、魔道コンロの倍以上である。

「結構するんですね。ただ、大小で比較ができるから小さいのがあってよかったです」

幸助のこの言葉に、興味深そうに冷蔵庫を観察していたサラが声を上げる。

「オリーブオイルの時と同じだね、コースケさん！」

「そうだね、サラ。比較するものがあればオリーブオイルの時と同じで、アンカリングの効果が期待できるんだ」

「アンカリング……ですか？」

アリスアの頭上にはハテナが浮かんでいる。

アンカリングの手法は多くの店で用いられている。

千円の価格を横線で取り消し、五百円と表示するのもアンカリングを活用した手法だ。

こつすること商品そのものの価値に加え、割安だから買おうという別の動機が発生する。

ルティアの小麦店でオリブオイルを販売した際は、その品質に  
応じて松竹梅三種類の商品を用意した。

今までの相場は「梅」商品の価格だったが、「松」商品があるこ  
とで「竹」商品を安く感じてもらうことができた。  
もちろん相応の品質あつてこそである。

そして冷蔵庫のようにまだ馴染みのない商品は、最初に見た価格  
が冷蔵庫の「基準価格」アンカー」となるのだ。

基準価格に対して小さなものが割安と感じれば、それが購入動機  
にもなり得る。

「 という訳ですので、大きな冷蔵庫を一番目立つところに置き、  
奥に小さな冷蔵庫を陳列すると良いと思います」

幸助は二人へ説明すると、そう締めくくる。  
それを聞いていたアリシアは、感心しきりの表情で幸助を見つめ  
ている。

「なるほど。流石はコースケさんです。早々にお知恵を拝聴でき光  
栄です」

「ありがとうございます」

とはいえ店内に商品を並べただけでは冷蔵庫のような高額品は売  
りにくい。

冷蔵庫を使うことで生活にどんな素晴らしい変化が訪れるか。  
それを表現し、冷蔵庫に興味を持ってもらわなければアンカリン  
グも意味がない。

しかも、コンロは消耗品である魔石のコストは薪と置き換えられ  
た。

冷蔵庫の場合、魔石のコストが取って代わることはない。  
運用コストは純粹に家計の負担増につながる。

現状を踏まえたうえでしっかりと販売プランを練る必要がある。  
そのことを告げると幸助とサラは店を後にする。

「お店、好調そうだったね」

「うん。私たちがいる間にも何人もお客さん来てたもんね」

「アリシアさん、いい人だったからなあ。これからどんどん流行るんじゃないかな」

「うん。綺麗な人だったよね。コースケさん、ずっと嬉しそうだったもん」

サラの言葉に棘が含まれている。

だが、その眼は決して怒っていない。

ルティアと相談したことで、幸助に対する心の余裕ができたようだ。

しかしそうとは知らない幸助は、慌てて取り繕う。

「そ、そう？ い……いつもと変わらなかったと思うけど」

「何でもするの！」

「さて、早速冷蔵庫の販売プランを考えないとね」

「ちよつと、コースケさん！ もう……待ってよ！」

足早になる幸助の後を、サラは慌てて追いかける。

「さて、夕飯の準備をしなきゃね。今日は何を作ろうかしら」

ここは王都内のある住宅。

台所では女性が鼻唄交じりに夕食の準備を始めるところだった。今ある食材を一通り回し見すると、パチンと手を叩く。

「よし、決めた！ ポテトサラダにしましょう」

鍋をコンロにかけること数分。

鍋の水は一度は沸騰したものの、すぐに勢いが弱くなり沈黙してしまう。

「あら、魔石切れかしら。交換用は……あつたあつた」

女性はコンロのスイッチを切り使い切った魔石を取り外すと、新しい魔石をカチリと嵌める。

もう何度も交換している。

その作業は慣れたものである。

「さてと、気を取り直してもう一度」

そう言いながらコンロのスイッチを押した瞬間

バンッ！！！！

コンロが突然大きな音を立て爆発し、部品や熱湯が飛び散った。



### 3・解決できない問題は現れない

「うん。これで出来上がりだ」

「いい感じにまとまったね。コースケさん！」

ここは宿屋の一室。

机に置かれた書類を前に、幸助とサラはパチパチと拍手をする。

王都の魔道具店を訪れてから約一週間後。

「冷却庫の販売計画が完成したのだ。」

当初はランチの開拓や王都の観光などを挟みつつ、のんびりとうつもりだった。

だが残念ながら、天気が良かったのは最初の三日間だけ。

そのためここ数日は、宿に籠りっきりで販売計画を立てていたのだ。

結果、予想よりも大幅に早く計画書が完成した。

計画書を作成したのはサラだ。

もちろん幸助が全面的にサポートしたうえではあるが。

今までの改善案件は、極端にひどい状況を何とか立て直すことが多かった。

近い将来、潰れるのが目に見えている状況ばかりだった。

だからサラへ計画の立て方など教える暇が無かったのだ。

かといって目の前に案件が無い暇な時には、計画は作れない。

これは主に幸助のやる気の問題からである。

しかし今回は時間に余裕がある。  
純粹に冷却庫の販売だけに集中できるというチャンスが到来した。  
サラが今まで得てきた知識でも対応が可能そうな案件だ。  
そう考えた幸助は、サラへ販売計画の立て方を教えつつ冷却庫の  
計画を作成してもらったのだ。

「何だか懐かしいなあ」

「うん？ 何のこと、コースケさん？」

「あ、いや。ただの独り言」

幸助はサラリーマン時代のことを回想していた。

幸助もこうやって先輩から教えられ、必死に徹夜で計画書を作った記憶がある。

残念ながら幸助より後に新入社員が入社することはなかったため、会社で教える立場になることはなかった。

だが今、世界は違えど先輩である幸助が後輩のサラへこうして教えている。

先輩社員の気持ちがいさだけ分かった気がする幸助であった。

「コースケさん、今すぐお店に持っていく？」

「いや、持っていくのは明日にしよう。また明日見直すと、何だこれって所が見つかるかもしれないからね」

「ふーん、そうなんだ。それじゃあ、また夕食の時間にね！」

そう言うとサラは計画書を手に、部屋の外へ出る。

ここは幸助が借りている部屋だ。

サラの部屋は隣である。

こうして計画を練る時は、サラが幸助の部屋を訪れることになっている。

「今頃みんな何してるんだろうなあ」

部屋に一人残った幸助は、そう呟きながら再び過去のことを思い出す。

幸助が召喚されてから一年半。

当初のような悲観はもう無いが、それでも時折こっやって何かのきっかけで思い出すことはある。

「そろそろ僕のこととは忘れられてるのかな……。もう一年半だもんな。ま、あんまり考えてても仕方ないや。明日が本番。頑張らなきゃ」

特にアポを取っているわけではない。

アリシアがいなければまた後日となる。

そのあたりの感覚は日本と大きく違うが、幸助はもう慣れている。また日を改めて行けばよいだけだ。

企画書ができた翌日。

幸助とサラは再び魔道具店へ向かう。

「この企画、受け入れてもらえるといいね」

「良い企画だし、現場と乖離してない限りは大丈夫だと思うよ」

サラは企画書の入ったカバンをキュツと胸に抱く。

初めて一から考えた企画だ。

どのような反応になるのか気になって仕方ない。

空を見上げると、昨日と変わらず今にも雨が滴り落ちてきそうな色をしている。

しかし石畳を踏みしめるサラの足取りは軽い。

その足取りに合わせ、真っ赤なポニーテールが左右に揺れる。

歩くこと十数分。

あっという間に魔道具店へ到着する。

幸助がドアを開けようとしたその時、店内から勢いよくドアが開く。

「おわっ！ びっくりした」

店内から出てきたのは見たことのない女性だ。

上気した顔からは怒りの成分が窺える。

「もう、何なのよいったい！ 二度と来ないからね！」

店内に捨て台詞を投げつけるとバン！ と勢いよくドアを閉める。幸助とサラは呆気にとられながら、足早に去っていく女性の背中を見送る。

「コースケさん、何があったんだらうね？」

「いいことじゃないことは確かだ。店で話を聞かなきゃ」

「うん！ 早く行こっ」

幸助は不安を胸に、ドアを開けると店へ入る。

そこで目に飛び込んできた光景。

それは、お通夜のような雰囲気店内だった。

肩を落としているアリシアに、俯いている従業員。  
二人からは全く生気が感じられない。

「大丈夫ですか!？」

「何があつたんですか？」

矢継ぎ早に問いかける幸助とサラ。  
その声でようやくアリシアは二人が来たことに気付く。

「こ、コースケさぁん」

力なく二人の下へ寄るアリシア。

その眼には隈が浮かんでいる。

寝る時間が取れないくらい大変なことになっているのかと、幸助の不安は更に高まる。

「アリシアさん、どうしたんですか？ さっきの方、かなり怒って

たみたいですけど……」

「……………うっ……………うっ」

アリシアの瞳からは大粒の涙が溢れてきた。  
相当辛いことがあつたようだ。

「まずは座ってから落ち着いて話しましょうか」

「アリシアさん、あちらに行きましょう」

サラに肩を抱かれながらようやくテーブルへたどり着くと、椅子へなだれ込むように座る。

アリシアの隣にサラが。そして正面には幸助が座る。

「店長、これ飲んで落ち着いてください」

気を利かせた従業員が冷たい飲み物を持ってきた。  
アリシアはそれを一口飲むと、声を絞り出す。

「ばく……はっ……」

「爆発がどうしたんですか？」

「……………」

「……………」

「ば、爆発してしまったのです。魔道コンロが！」

「えっ!？」

想像だにできなかったアリシアの言葉に幸助は目を見開き、サラは  
口へ手を当てる。

爆発、それは即ち事故だ。

怪我人だっただけ出ている可能性は高い。

これが事実なら大問題である。

「怪我人は？」

「一人……………」

「幸いなことに命に別条はありませんでした」

アリシアの言葉に従業員が補足をする。

死者は出ていない。

そのことで幸助は少しだけ安堵する。

ここで幸助は、以前研究室を見学したときのことを思い出す。

開発中の何かが爆発したのを目撃した。  
あくまで研究中の過程でのことだが、ニーナは「よくあること」と言っていた。

だが爆発は爆発だ。

潜在的な欠陥があつたのかもしれない。

それを確認するため、幸助は質問する。

「爆発の原因は何だつたんですか？」

「……………」

アリシアは何も答えない。

沈黙しているアリシアの代わりに再び従業員が答える。

「それがまだ分かっておりません」

「ということは、また起こる可能性があるんですね」

「はい。既に三件の事故があつたという報告が入っていますので…

…

「三件も!？」

状況はかなり悪いようだ。

既に三件も発生しているということは、それ以上に増えると考えるのが妥当だ。

「もっと早く知らせてくれればよかったのに」

「街の掲示板に注意喚起する知らせも掲示されてしまいました、不安になったお客様が一気に押し寄せてしまったのです。その対応にいつぱいいつぱいでした」

幸助はここ数日宿に籠りっきりで、街の様子もほとんど把握して

いなかった。

それに初めての王都だ。

そのような掲示板があること自体も初めて知る。

アリシアや従業員たちは、幸助と出会って間もない。

だから幸助へ相談が行かなかったのは致し方ないことである。

「事故品の回収はしてありますか？」

「はい、お待ちください。一つだけ持ち込まれたものがありますので持って参ります」

そう言う従業員は店の奥から破損したコンロを持って来る。

テーブルに置かれたコンロの姿に、幸助とサラは息をのむ。

「コースケさん、これ……」

「うん。これはひどいね」

事故を起こしたコンロは、一応原形をとどめている。

しかし外装がえぐれて内部が丸見えの状態だ。

特に魔石部分の損傷が激しい。

爆発の衝撃は相当なものだったであろう。

「これを検証しても原因は分からなかったんですよね」

「ええ。詳しい技術者がいないため、ニーナさんの到着を待つまでは……」

「ニーナさんはいつ頃到着の予定ですか？」

「もともと六日後にはいらっしやる予定でしたので、その頃には「うーん、そうですね。困りましたね……」

初めて訪れる試練に幸助はどうしたら良いのか分からず、次の言



葉が浮かんでこなかった。

水を打ったように店内は静まり返る。

（まずいなあ。目の前の客に対応してただけで根本的な対策が何もなされていない状況か。こういうのは初動が大切なのに。二ーナさんが到着するまで六日間。それまでにできることを探さないと）

原因が分からなければ対策は打てない。

それまでにできることは何があるのか。

幸助が考えを頭に巡らしていると、突然アリシアが両手で頭を抱え早口でまくしたてる。

「あー、もうどうしたら良いのでしょうか。このままでは店が潰れてしまいます。せつかく順調にいったのに。せつかく入社できたのに。せつかく店のことはすべて任せてもらえたのに。このままでは首ですよ、クビ。これではお父様とお母様に見せる顔がありません。せつかく喜んでもらったのにどんな顔して帰れば良いのでしょうか。きつとお兄さんにもお姉さんに笑われてしまいます。そして言われるに違いません。一族の恥さらしって。もしかしたら私のせいで実家の商売までダメになってしまうかもしれない。うー、もうどうしたら良いか分かりません！」

そう言い切るとアリシアはプシューと力が抜けたようにテーブルへ突っ伏す。

難関をくぐり抜けての入社、そして店長への大抜擢。

喜び、応援してくれた両親。

そして目標を共にする店の仲間……。

アリシアは全てを裏切ることになってしまいそんな恐怖に襲われる。

だからといって、何もしない訳にはいかない。  
まずは原因を追究し改善策を立て、速やかに実行する必要がある。  
安全が確認できるまで販売はできない。

信用を積み重ねるには時間がかかる。

しかし積み重ねた信用は、一瞬で失われてしまうこともある。  
魔道具店は、今まさに急速に信用が失われつつある状況だ。

早く解決しないとアヴィーラ伯爵領での販売にも影響が出る可能性がある。

せつかくここまで成長した事業を潰すわけにはいかない。

製品開発からこの事業に関わってきた幸助。

自分のアイディアがこうして製品として形になっている。  
だから魔道具には愛着がある。

解決までどれだけ時間がかかるかは分からない。

だが幸助には、この問題解決に取り組まない理由など無かった。  
サラや従業員が心配そうに見守る中、幸助は口を開く。

「アリシアさん。ニーナさんが到着するまで待っていたら手遅れになるかもしれません」

「……………」  
「それまでに出来ることもあるはずですよ」

「……………」  
「こんなことで諦めたくないですよね？　せつかく縁のあった魔道具店なのに」  
「……………」  
「はい」

かすれるような声でアリシアは答える。

「トラブルは解決できる人の前に現れるものです。アリシアさんなら大丈夫。絶対に解決できますよ。きっと店が発展するためのほんの小さな試練に過ぎません。僕も精いっぱいお手伝いします。だから一緒に頑張りましょう！」

その言葉にアリシアは顔を上げ、幸助と視線を合わせる。涙や隈で顔はひどいことになっているが、眼の力は失われていない。

「お店は……潰れないで済みますか？」

「もちろんです」

「またいっぱいお客さん、来てくれるますか？」

「きっとそうなります。いや、そうなるようにします」

正直、幸助は解決方法の見当がついていない。

不安で仕方なかった。

だから先ほどアリシアへ伝えた言葉を自分自身にも言い聞かせる。問題は解決できる人の前に現れるものだ。

絶対にこの問題は解決できる。そして以前のように、いや、以前以上の人気店にすることができると。

「アリシアさん」

「はい……」

幸助は力強く宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

#### 4・事故原因調査

幸助の宣言を聞いたアリシアは、戸惑いとも期待感とも取れる表情を浮かべている。

今まで、あまり人を頼ることがなかったアリシア。

魔道具店へ就職を決めたのも、店長の座を勝ち取ったのもすべて自分で決め、自分で行動した結果だ。

問題が起きてからも、自分が魔道具店の責任者だ。だから自分で何とかせねばと考えていた。

だからこんなに安易に人を頼ってよいものかと迷っているのだ。

だが、焦りだけが先行して何もできていないのも事実。

魔道具事業をここまでの規模にした幸助ならば何とかしてくれそうである。

大先輩であるニーナだって幸助を頼ったのだ。ならば私も頼ってみよう。

そつ心の整理がついたアリシアは口を開く。

「お願い……してもよろしいのでしょうか？」

「もちろんです。問題を解決するだけではなく、今まで以上の繁盛店にしましょう。皆で力を合わせて」

「是非とも……、よろしくお願い致します」

力強い幸助の声に、アリシアの顔にも色が戻ってきた。

幸助へ深々と頭を下げる。

「私にとって、この仕事は生きがいです。悪いことばかりが頭をよ

ぎり、気を取り乱してしまいました。申し訳ありません」  
「誰にだって不安になるときはありますよ」

アリシアは店のすべてを任されている。

その権限はかなり大きい。

判断を仰ぐにも二ーナとの距離は離れているため時間がかかってしまっからだ。

限らない不安がアリシアの心を満たし続けていた時、やってきたのが幸助だ。

溜まった不安が溢れ出してしまったのは仕方ないのかもしれない。

「まだ何の対策もできておりません。私はつくづく仕事のできない女なんだなと思ってしまいました」

「不安に駆られたお客さんの対応は神経の磨り減る仕事です。それも立派な仕事ですよ。アリシアさんは頑張ってます」

結果はどうであれ、今まで仕事をさぼっていた訳ではない。

最善の行動をとっていた訳ではないが、誰もが経験したことのない状況だ。

程度にもよるが、行動したことそのものを認めることは大切である。

「ありがとうございます」

「これから新製品がどんどん増えていきそうです。こんなところで躓つまづいている場合ではないですからね。明るい未来を想像しつつ、最善の結果になるようにしましょう！」

「はい！」

ここでようやくアリシアの顔に笑顔が戻る。

やはりアリシアには笑顔が似合うと感じる幸助であった。

数分後。

短い休憩を挟むと幸助とアリシア、そしてサラがテーブルに着きミーティングを始める。

アリシア以外の従業員達は来店客対応のため待機だ。

「では、始めましょう」

「コースケさん。まだ爆発の原因も分からないのに、どうやって解決するの？」

最初に質問したのはサラだ。

確かにまだ原因は分かっていない。しかも三人とも技術者ではない。

だから幸助も具体的なことは全然イメージできていない。

「うーん、そこなんだよなあ。まだ圧倒的に情報が少ないから、まずは情報収集かな」

そう言うとき幸助はテーブルに置かれたコンロに目を落とす。

爆発と聞いて真っ先に疑ったのは偽物なのだが、これはどう見ても本物にしか見えない。

ただし精巧な偽物は地球にも存在している。

だから偽物かどうかの判断は二ーナの到着を待たなければならぬ。

「情報収集……ですか？」

「はい、情報収集です。多くの情報が集まれば思わぬ原因や解決策

が見つかるかもしれません」

「なるほど、確かにそうですね」

「まずはアリシアさんの知っている限りの情報を教えてもらってもいいですか？」

「はい。もちろん」

アリシアの話はこうだ。

最初に事故があったのは幸助達が魔道具店に訪れた二日後。城壁の外側にある一般的な家庭で起きたとのことである。

その翌日に立て続けに二件の事故が発生。

こちらも事故の現場は城壁の外。

無秩序に住宅が立ち並ぶ住宅街である。

テーブルに置かれている事故品は、そのうちのひとつだ。

それが持ち込まれて初めてアリシアは事故の発生を把握した。

そして一昨日、街中の掲示板に事故の記事が張り出された。

記事には事故の事実と併せて、コンロの使用を控えるメッセージもあつた。

残念ながら一方的な情報ばかりで、魔道具店の見解は載せられていない。

とは言っても、現状では何の見解も出せない状況である。

記事が掲載されると、それを見て不安を感じたユーザーが魔道具店へ押し寄せた。

しかしアリシア達は具体的な状況がまだ把握できていないため、記事と同様にしばらく使用を控えてくださいと言えなかった。

そのため先ほどの客のように、怒りをぶつけてくる人もかなりいたそうだった。

「以上が私が把握している経緯です」

幸助は腕を組みうーんと唸りながらアリシアの情報を整理する。事故は三件。そのいずれも城壁の外で発生している。ここに何らかの突破口があるかもしれない。そう考えた幸助はアリシアに視線を送ると口を開く。

「どれも城壁の外で起きた事故なんですね」

「ええ、今のところそのようです」

「というと、こういう言い方はあれですが、決して裕福ではない家庭が多いエリアですよな？」

「はい。皆がという訳ではありませんが、エリア的にはそのように考えても問題ありません」

「ちよつと気になる共通点ですね……」

このエリアだからこそ起きているのか。

それとも、たまたまなのか。

まだ母数が少ないので何とも言えない幸助。

再び腕を組んで悩んでいると、サラが口を開く。

「文字が読めなくて何か間違った使い方をしたのかな？」

「間違った使い方が……。操作自体は全然難しくくないしなあ」

「確かに魔石を嵌めたら出力に応じたスイッチを押すだけです。小さなお子さんでも間違えることはないと思うのですが……」

コンロの操作はシンプルである。

スイッチは火力の大小と停止スイッチのみだ。

文字が読めない人のためにスイッチの表記は絵となっている。アリシアの言う通り、この操作を間違えることはないだろう。



「操作で間違えようがないならば運用方法に原因があるのか？ うん？ そういえば……」

ここで幸助はかなり前に見た新聞記事を思い出す。

家庭用のカセットコンロを二個並べ、その上に鉄板を渡して使用した際に発生した事故の記事だ。

燃料となるカセットボンベが加熱され、爆発してしまったという事故である。

「どうしたの？ コースケさん」

「コンロ自体が加熱されて爆発してしまった可能性はないでしょうか？」

「加熱？」

サラモアリシアもきよとんとした表情をしている。

幸助は具体的な例を補足する。

「例えば何かを焼くためにコンロを複数並べてその上に鉄板を置くとします。鉄板が加熱されるとコンロ本体も加熱されることになり  
ます」

「何台も買えるのかなあ？」

幸助の言葉に疑問を呈したのはサラだ。

確かに、高価なコンロを複数所有するとは考えにくい。

持ちよりの可能性もあったが、幸助は話の方向を変える。

「では複数でなく、一台でも可能性としては考えられないですか？」

「鉄板を置くのも鍋を置くのも変わらないような気がします……。それに使用中が一番熱くなるのはもともとコンロですよ？」

アリシアはあごに人差し指を当てながらそう言う。  
その指摘はもっともである。

「魔石が加熱されたら爆発するとか……？」

「それは絶対にありません。魔石そのものは非常に熱に強いものですので」

「そうですか……」

アリシアは、そうきっぱりと言い切る。

熱源がガスと魔力では根本的に違う。

ここは異世界。自分の常識が通用しないこともある。  
だから幸助はそれ以上粘るのを諦める。

その後もあだこうだと話し合いは続くが、これといった原因は見つからない。

時間がかなり経過したとき、幸助は話題が脱線していることに気付く。

ミーティングのテーマは情報収集だ。

それがいつしか原因の究明になっていた。

それはそれで大切だが順序が違う。

少ない情報の中であれこれ考えていても無意味だ。

事件は現場で起きている。

どこかで聞いたことのあるフレーズが幸助の頭に流れる。

思い立ったらすぐ行動だ。

幸助はダンツとテーブルに手をつき立ち上がると、声を上げる。

「よし、決めた！」

二人の視線が幸助に注がれる。

幸助はアリシアに視線を送ると、言葉が続ける。

「アリシアさん、現場を見に行きましょう！」

「現場……ですか？」

「はい。事故があつた家を見に行くんです。使用状況を見たり使っていた人の話を聞けば、何か掴めるかもしれません。場所は把握してますか？」

「はい。把握はしておりますが……」

思いつきでテンションの高くなった幸助。

しかし、それとは対照的にアリシアの顔に影が差す。

「アリシアさん、どうしました？」

「あのですね……また怒られてしまつかと思うと気が重くなってしまいました……」

「そういう事ですか……。怒られるかどうかは僕たちの対応次第です。これも先延ばしにすると、更に状況が悪くなってしまいますよ」

幸助はアリシアの目をまっすぐ見て「だから今すぐ行きましょ」と続ける。

「そうですね。では、参りましょう」

魔道具店から歩くこと一時間。

王都の西門を出て更に一時間以上歩いた先に幸助とアリシアはいた。

空模様は相変わらずどんよりしているが、雨はまだ落ちていない。

城壁を出ると建物の高さは少しずつ低くなる。

この界限まで来ると、ほとんどが二階建てだ。

サラにはアリシアの代わりに接客要員として店に残ってもらった。クレームの対応を押しつけたことに幸助は心が痛んだが、接客が得意なサラの「任せて」という言葉に甘えた。

そして幸助はというと……。

「はあはあ、まだ到着しないんですか。王都ってやっぱり広いですね」

「あら、コースケさん。これくらいでへばっていたら王都民にはなれませんよ」

王都は広い。

しかも城壁の外側へ行くのだから、移動は馬車が理想だ。

だが残念ながら、急遽都合よく借りられる馬車は無かった。

時間に余裕があれば後日でもよかったのだが、性急な解決を要する問題である。

だから徒歩で向かうことにしたのだ。

「何だか僕が足手まといみたいになってしまいましたね」

「はい、その通りですね」

「うう、アリシアさん酷いです……」

「うふふ。冗談です。さ、あと少しです。頑張りましょう」

そう言いつつアリシアは幸助の背中を押す。

歩きつつも数時間ずっと他愛もない会話をしてきた。

二人はだいぶ打ち解けてきたようだ。

それからしばらく歩くとアリシアはとある建物の前で足を止める。

「最初に事故の起きたお宅はこちらです」

二人はとある建物の前で足を止める。

二階建てで一つの建物に玄関がいくつもついている、長屋のようなスタイルだ。

アリシアは右端のドアをノックすると声を張る。

「こんにちは。魔道具店の者です！」

待つこと数秒。

恰幅の良い女性が二階の窓から顔を覗かせ、二人を見下ろす。

幸助が事前に聞いた情報では、この家では事故はあったが怪我人はいないらしい。

「誰だつて？」

アリシアは上を向き、大きな声で答える。

「魔道具店のアリシアです！」

「ああ、アンタか。今更何しに来たんだ？」

「先日の事故の調査に参りました」

「ふんっ、何を今更！」

女性は腕を組みアリシアをキッと睨み付ける。

かなりお怒りモードのようだ。

反射的にお詫びをしたい気持ちに駆られる幸助だが、それはでき

ない。

原因が確定するまでは非を認めてはいけないとアリシアから釘を刺されたからだ。

「原因調査のため、事故を起こしたコンロを見せて頂けないでしょうか？」

「それがあれば問題解決につながる可能性もあるんです」

幸助もアリシアの後に続く。

話が聞けなかったとしても、事故品を持ち帰ることができれば今後の調査に使える。

「ゴミなんかとつくの昔に捨てたよ！」

「では事故を起こした時の状況だけでも教えて頂けないでしょうか？」

「んなもん目を離れた際にドカンだよ。それ以外に何を言えと？」

「そうですか……」

「アンタが絶対に便利になるってっから買ったのに、とんだ災難だよ。あたしゃもう用はないんだ。帰った帰った！」

そう言うのと窓の木戸をぴしゃりと閉める。

幸助とアリシアは呆然とその場に立ち尽くす。

通行人は何事かと二人の背中をちらつと見つつ通り過ぎていく。

「全く話ができなかったですね」

「そうですね……。やはり早急に訪問すべきでした」

「過ぎたことを悔やんでも仕方ありませんよ。気を取り直して次の家に行きましょう」

迅速な対応ができていたら、こうならなかった可能性もあると考

える幸助。

だが「たられれば」はない。現状はこうなのだ。

黒く厚い雲からはいよいよ雨が滴り落ちてきた。

二人の足は否応にも足早になる。

雨用の外套を羽織りつつ、足を進めること三十分。

二件目の家へ到着した。

この家で事故を起こしたコンロが魔道具店に持ち込まれたものだ。不運なことに怪我に繋がってしまったが、治療代は魔道具店が負担したとのことである。

先ほどの家とは違い既に一次的な対応は済んでいるため、門前払いとなることはなかった。

だが、残念ながら目新しい情報を収集することはできなかった。客の話では、新しい魔石に換えてスイッチをつけた瞬間の出来事だったそうだ。

時刻はもうすぐで夕方だ。

ここは城壁の外。今から宿へ帰っても完全に日は暮れてしまっただろう。

最後の一軒は翌日に持ち越すことにし、幸助とアリシアは一旦引き上げることにする。

翌朝。

宿の廊下には、幸助の部屋をノックするサラの姿があった。

幸助は日の出早々に魔道具店でアリシアと合流し、三軒目の客の家へ向かった。

だから部屋にはいない。

だが、サラはそれを知らない。

深夜に帰り、早朝に出るということはサラを起こしてしまつことになる。

そう気を使い、幸助はそのことをサラへ伝えなかったからだ。

「おかしいなあ。今日はどこかに行くつて話、聞いてないし。コースケさん、どこに行つちやっただろう」

今日、サラは特にやることがない。

魔道具店の接客も手伝わなくて良いことになった。

不安を抱えた客の来店は減少傾向にあり、従業員たちだけで賄えそうだったからだ。

「昨日は忙しかったし、まだ寝てるのかな？」

そう呟くとサラは自分の部屋へ戻る。

早朝に宿を出た幸助。

事故を起こした最後の家庭を訪れると、食器棚に置かれたあるものに目を奪われる。

幸助はそれを手に取り、アリシアへ見せる。



「アリシアさん、これって……」

「まあ、何ですの。それは？」

アリシアは口に手を当て目を大きくする。

幸助の手に取られていたもの。

それは魔石だ。

形はいつも見慣れた魔道具用の魔石に間違いない。

だがその魔石からは明らかかな違和感を覚える二人。

本来であればルビーレッドに輝いている魔石。

しかし幸助の手の上に置かれたそれは、輝きが弱く、濁っていたのだ。

## 5・すれ違い

「アリシアさん。この魔石、偽物かもしれませんね」

幸助の言葉にアリシアは目を真ん丸にし、開いた口を両手で覆い隠す。

「あわわわわ……。ど、どうしましょう。魔石が偽物ですって？」

そう言うと、狭い室内をパタパタと行ったり来たりするアリシア。普段は冷静で知的なアリシアだが、想定外の事態に陥ると混乱するタイプのようだ。

その姿に苦笑する客。

幸助はそれを横目に、客へ話しかける。

「この魔石、どちらで購入されたものですか？」

「えっとね……。言にくいことなんだけど……」

客はここで目を伏せる。

言にくい事情があるようだ。

ここで正しい情報が引き出せれば調査は大きく進む可能性がある。そう感じた幸助は穏やかな口調で客へ問いかける。

「これ以上事故を出さないためにも、本当のことを教えて頂いてもよろしいですか？」

「ええ……。そうね……。これはね、あのね、近くの市場で買ったのよ」

「市場、ですか？」

代理店制度はまだ行っていないとアリシアは言っていた。

しかも、魔道具店で加工した魔石しか動作しない設計になってる。なぜ魔石がそんなところで売っていたのか。

なぜ動作したのか。

幸助の頭の中は疑問で満たされていく。

「専用の魔石でないと動かないって説明は、購入時にありましたか？」

「ええ。聞いていたわ。でも、ここから魔道具店って遠いでしょ。だからつい近い近くの市場で済ましちゃったの。価格も安くて半信半疑だったんだけど、いざ使ってみたらちゃんと動くでしょ。だからそれから……」

確かに魔道具店は、城壁内の富裕層が住むエリアに立地している。ここから徒歩で片道一時間以上かかる場所だ。

しかも価格が安いとなると、偽魔石を買ってしまうのは仕方なかったのかもしれない。

消耗品は常にコストが発生し続ける。少しでも安いに越したことはない。

日本でも立地の近いガソリンスタンドは、一円単位で価格競争することも珍しくない。

だが、完全に「安物買いの銭失い」どころか、ケガにまでつながってしまっている。

偽魔石の撲滅はもちろんのこと、正規品の魔石を買いやすくする工夫も必要だと幸助は考える。

「そうですね。ありがとうございます。解決に向けて大きなヒント

が得られましたよ」

「そう。それならいいんだけど……」

「この魔石、お借りしてもいいですか？」

「もちろん。原因究明、よろしく頼むわ」

その後、幸助は市場の店の場所など詳細を聞くと、空気が抜けたように床にへたり込んでいたアリシアを再起動させ、市場へと向かう。

コンコン。

宿屋の廊下に、今日、何回目かのドアをノックする音が響く。

「もう、コースケさんったらどこ行ってるの」

あれから何度も幸助の部屋を訪れた。

しかし、二日経っても幸助が現れることはなかった。

早朝や夜に時間を変えてみても結果は同じだった。

「えっ、もしかして私を置いてどこかに行っちゃったとか？ そんなことはないよね。それとも……」

幸助が水の街に行った時に似た不安感がサラを襲う。

ブンブンと首を振ってそれを否定するサラ。

宿の従業員に確認したところ、ちゃんと出入りはしているのとのことだった。

だから事故には巻き込まれてないはずだ。

幸助が返ってくるのを待とう。  
サラはそう決める。

昨日は気分転換に宿の周辺をウィンドウショッピングした。  
だが、今日はそんな気も起きない。

二人一緒であれば知らない土地でも探検気分で見たいが、一人では寂しかったからだ。

やることはない。

そして寂しい。

しかし時が経ち夜になると、寂しさから訪れる不安は次第に怒りへと変換されていく。

「もう、私をほっぽり出して！ 夜になっちゃったよ！」

結局この日も幸助と会うことはできなかった。

( ようやく見通しが立ってきたなあ。 問題事の解決はさつさと終わりにして、早く前向きな冷却庫の販売をしたいや )

偽魔石を見つけてから三日が経った。

久しぶりに日が昇っているうちに宿の部屋へ帰ることができた幸助。

ベッドに横になりながらここ数日のことを思い返す。

(それにしても、あの国が関わってたとはなあ)

王都は広い。市場だけでも複数箇所ある。

三日間かけアリシアと市場を駆け回った結果、幸助は一つの結論にたどり着いた。

偽魔石は、隣国フレン王国産だったのだ。

フレン王国といえば、幸助が召喚された国でもある。

アリシアの話では、王都で流行った商品は、時経たずしてフレン王国から模倣品が流れてくることは多いとのこと。

無責任に召喚されたことに加え、模倣品の登場。更にフレン王国へ対する心証が悪くなる幸助。

何はともあれ情報は揃った。

一刻も早く公式の見解を出したいところではあるが、幸助たちに魔石が原因と断定できるだけの判断はできない。

コンロの使用を控えるようにというお触れは出回っているが、情報伝達が確實でないこの世界。徹底されているとは思えない。

だから既に出回った偽魔石で事故が起きないとも限らない。

ニーナの到着が待たれるところだ。

(ニーナさんが来るまでやれることはないから、久しぶりに王都観光が再開できそうだなあ。今日もこれから暇だし、サラとおいしい食べ物屋の開拓に行こっかな。まだアロルドさん以上の味に出会ってないんだよなあ。王都は店も多いし、アリシアさんにお勧めの店聞いておけばよかった)

コンコン。

ドアをノックする音で幸助は思考から戻る。  
ベッドから起き上がりドアを開けると、そこにはサラの姿があっ  
た。

「あつ、サラ。ちょうどよかった。これから」  
「ちょうどよかったじゃないよ！」

これからご飯に行かない、と言おうとした幸助の言葉を遮り、サ  
ラはそう強く言った。  
「ご機嫌斜めのようにだ。」

「……サラ。どうしたの？」  
「コースケさん、毎日朝早くから夜遅くまで、どこに行ってたの！」  
「どこって……事故のあったお客さんの家や市場での調査だけど。  
サラはどうしてたの？」  
「ずっと待ってたんだよ」  
「えっ、何を？」

ここ数日間、ずっとアリシアと共に事故原因の調査に奔走してい  
た。

待っていたと言われてもピンとこない幸助。

「コースケさんに決まってるでしょ！」  
「僕を……？ てことは何、もしかして今日までずっと部屋にいた  
だけ？」  
「そうだよ！ コースケさん、朝は早く行っちゃうし夜はノックし  
ても出てくれないんだから」

確かに事故が起きたと分かってから、幸助はずっと朝から晩まで  
出っ放しであった。

事故現場や市場は宿から遠く、移動には時間がかかる。だから朝早くに出て、日が暮れてから帰る日が続いていた。疲れて帰り、ボタンキューで寝る毎日を過ごしていた。

「ちよつとちよつと、サラ。僕がいなかったことで怒ってるの？」  
「そうだよ！　ずっと魔道具店のことばっかで、私のことほっぽり出してさ」

「ほっぽり出してたわけじゃないんだけどなあ」

初日こそサラへ店番を頼んではいたが、それから顔すら合わせない。

だが、サラも困っている魔道具店のために、何かしら忙しかったのではないか。幸助はそう思っていたため困惑の表情を浮かべる。

「ほっぽり出してじゃん！　何で私にもやること言ってくれなかったの！　何で一緒に連れってくれなかったの！　私だって魔道具店の力になりたかったのに……」

サラは事故という特殊な状況下で、何をしてもいいのかわからなかったようだ。

だが幸助自身、怒る客の対応や慣れない土地での調査に神経をすり減らしていた。

サラの言葉がどうにも我儘に感じ、声を荒げる。

「危機的状況だったんだから一から十まで指示なんてできないよ！　僕だって想定外のことですら必死に走ってたんだから」

「……………」

無言になるサラ。

ヒートアップしてきた幸助は、畳みかけるように言葉を続ける。



「何で自分でできることを探さなかったのさ。暇だったんでしょ。言われなきゃできないの？　そういうのを指示待ち人間っていうんだよ」

ここでサラは俯く。

固く握りしめた手は、プルプル震えている。

更に幸助が言葉を続けようとしたとき、サラは声にならないような声でつぶやく。

「バカ……」

「何？　聞こえない」

「コースケさんのバカ！！！」

そう言うとサラはボタン！　と勢いよくドアを閉め、部屋から出行った。

怒りが収まらない幸助は、部屋備え付けの椅子を蹴っ飛ばす。

乾いた音を立て、椅子が机とぶつかる音が部屋に響く。

「くそつ、何だよサラ」

サラと食事に行くはずだった予定が大きく狂った幸助。

ベッドへ荒々しく身を投げる。

（まさか何もせずに部屋にいただけとはな。それは百歩譲ったとしても、何なのさ。あの逆切れ）

頭の中に、先ほどのことがグルグルと駆け巡る。

自分が必死なときに暇を持って余していたということも気に食わなかったが、何よりもそれを棚に上げて自分が指示しなかったから何

もできなかったと言われたことが許せなかった。  
イライラした時間だけが経過していく……。

しかし夜も更けると、幸助は自責の念に駆られる。

ここ数日間で溜まったストレスを、怒りに任せてサラへぶつけてしまったように感じたからだ。

(言いすぎちゃったかなあ。しかもあの言葉を言ってしまうとは。僕もまだまだ未熟だったな)

幸助はサラリーマン時代に先輩から教えられたことを思い出す。

「何でできないの?」とか「言われなきゃできないの?」は社内では禁句だった。

そのようなことを言っても相手は萎縮するだけで、物事の解決にはつながらない。

個々の能力を見据えて、自発的に行動できる環境を用意してあげることにも上に立つ者の役割でもあった。

知識としては知っていたし、今までも使ったことのなかった言葉だ。

疲れていたとはいえ、感情が高ぶりつついつい言ってしまったことを幸助は悔やむ。

(明日、サラに謝らなきゃな)

眠れぬまま夜は更けていく。

数日後、ニーナが到着したということで幸助は魔道具店へ向かう。ケンカした日以来、サラとは顔を合わせていない。サラが呼び出しに応じてくれないからだ。

魔道具店に着くと、既にニーナは回収した偽魔石を調査しているところだった。

テーブルの上には何個もの魔石が置かれている。

幸助に気付くと調査の手を止めたニーナは、口を開く。

「フフツ、大変だったようね。いろいろとご苦労様」

「はい。王都観光のはずだったのが、本当にいろいろ大変なことになっちゃいましたよ」

最初の数日こそゆったりと過ごせたが、事故を知ってからは目の回るような日々だった。

拳句の果てにはサラとケンカまでしてしまった。

それもこれもテーブルに置かれている偽魔石のせいだ。

その魔石を睨み付けると幸助は続ける。

「それで、この魔石は偽物で間違いないですか？」

「うん。間違いないね。事故は偽魔石が原因だよ。術式が大雑把になってるの。これ、見てごらん」

そう言うとニーナは幸助へ魔石を見せる。

目の前に出された魔石を凝視すると、電気回路のような、しかしそれとは違う文様が見える。

「こつちはまだマシなんだけど、こつちの魔石見て。ここがおかしいでしょ。たぶんこの魔石は爆発するよ」

幸助の目には何がどう違うのか分からなかったが、とりあえず頷く。

「これを精巧に真似るなんて土台無理なんだよ。私たちの技術の結晶なんだからね」

「はあ、そうですか……」

「早速実験をしてみたいとこだけ……ここじゃマズイね。どこか広い場所に行こうか」

幸助とニーナ、アリシアは連れだって河川敷へ繰り出す。

王都内にある数少ない広いスペースのある場所だ。

爆発すると分かっていたので、実験にはここが最適とニーナが判断した。

この川は王都の北西から城の前を通り、南西の市民街へと抜けるように通っている。

王都の大切な水源の一つだ。

「うーん、気持ちのいい場所ですね」

透き通った声でアリシアは空を仰ぎ見そう言う。

数日前までとは違い、空は晴れ渡っている。

真っ青な空と所々浮かんでいる白い雲が、アリシアの紺色の髪を引き立てている。

「確かに。気持ちいい場所ですね」

そう返す幸助だが、言葉には気持ちがこもっていない。爽やかな表情をしているアリシアとは対照的に、心ここにあらず、という感じである。

「ほら、ぼーっとしてないで、実験するよ。用意はいいかい？」

「あ、はい。大丈夫です！」

幸助たちはコンロから少し離れた場所に移動する。

ひもを引っ張るとスイッチが入る仕組みに即席で改造されたコンロに、例の爆発するであろう偽魔石を装着している。

「フフツ。では、スイッチを入れるよ」

ひもを引っ張るニーナ。

カチリとスイッチの入った音が聞こえる。

その様子を不安げに見守る幸助とアリシア。

だが、何も変化がない。

スイッチを入れた途端に爆発したと言った客もいた。ちゃんとスイッチが入ってないのか心配する幸助。

「ニーナさん、反応ないですね」

「そう焦らないで。もう少し待っててごらん」

ニーナに窘められ、幸助は再びコンロへ視線を移す。そして観察すること約五分。

魔石の色が明るくなり始めたと感じた次の瞬間。

パァーン！

大きな音を立て、コンロは爆発してしまつた。  
四散する部品。

その様子を呆然と見つめる幸助とアリシア。  
二人とは対象的に、嬉しそうに不敵な笑みを浮かべるニーナ。

「爆発……してしまいましたね」

「あわわわわ、本当に爆発してしまいました」

「フッフッフツ。やっぱりそうでしょ。あの腐った術式じゃこんなもんよ」

コンロを見てみると、確かに以前見た事故品と同様、魔石を中心に大きく破損している。

これで事故は偽魔石が原因であることが確定した。

偽魔石は危険、そして本物の魔石ならば安全である。

早急に市民へ伝達する必要がある。

事故の際は、黙っていてもその事実が広く掲示されていた。

今度は魔道具店としてその情報を発信せねばならない。

だが、幸助はその術を知らない。

「ニーナさん」

「何だい？」

「街中の掲示板に、魔石のことを張り出してもらいたいんですが、誰が管理してるのか分かりますか？」

「フツツ。それなら任せておいて。発行所は知ってるから早速行つてくるよ」

「ならばニーナさんにそこはお任せしますね」

さすがは貴族子女。

技術だけでなく、このような場合にも頼りになる。

取り敢えず今回の爆発事故に関してはこれで解決だ。

アリシアはホツとした表情を浮かべている。

だが、幸助の表情は晴れない。

これだけ早く偽魔石が登場するということは、相手は商魂たくましいに違いない。

だから、将来に渡って偽物による問題が起こらない仕組みを構築する必要がある。

それに何より、まだサラとの関係修復ができていないからだ。

## 6・プランディング

コンコン。

部屋をノックする音と共に、サラを呼ぶ幸助の声が聞こえてきた。

(コースケさんだ。どうしよ、今日こそ出なきゃ!)

幸助と言い合いになってから何日も経つ。

当初こそやり場のない気持ちで心が満たされていたが、今は後悔ばかりが残っている。

幸助に対してバカと言ってしまったことを謝りたい。

あの日の態度は寂しさの裏返しだったと言い訳したい。  
できることならばあの直前に戻りたい……。

幸助は毎日来てくれている。

今日こそは出よう。そして謝ろう。

気ばかりは焦るが、体が動かないサラ。

(でも、今更……どうやって……)

間違いなく自分が原因だ。

疲れていた幸助のことを全く考えず、あんな言葉を言ってしまったのだから。

しかもサラは商売でいえば見習いの立場だ。

近すぎて感覚がずれていたが、幸助はコンサルティングの師匠でもある。



それなのにあんな態度を取ってしまった。

幸助だって怒っているかもしれない。

いや、あの日は確実に怒っていた。

普段は温厚な幸助。サラに対して怒ったことなど一度もなかった。

ドアを開けないといけないという理性を体が阻止する。

そうこうしているうちに足音が遠ざかる音がサラの耳に入る。

幸助は立ち去ってしまったようだ。

(はあ、今日も仲直りできなかった……。本当にどうしたらいいんだろう)

普段であれば相談相手にもなってくれる母親もいない。

サラはベッドに仰向けになったまま、無機質な天井をぼうつと見つめる。

河川敷で偽魔石の実験を行った翌日。

幸助は晴れない気持ちを引きずりつつも、今後の話をするため再び魔道具店を訪れる。

店に入ると、店内の雰囲気明るくなっていると感じる幸助。

ぐるっと見渡してみるが、内装など昨日と変わったところは特にない。

そんな幸助の姿に気付いたアリシアが、幸助の下へやって来る。

「コースケさん、こんにちは」  
「こんにちは。アリシアさん……。あつ、夏服に衣替えしたんですね」

青を基調とした従業員たちの制服が、夏服になっているのに気付く幸助。

紺髪のアリシアには、相変わらずよく似合うデザインだ。

「はい。もうすぐで夏ですからね」

「アリシアさん、よく似合ってますよ」

「うふふ。ありがとうございます」

そう言っているとクルツとひと回りして見せるアリシア。

フワツとスカートの裾が広がる。

激しい競争を勝ち抜いて射止めた魔道具店の店長という仕事。

一時はクビになるどころか、魔道具店が潰れてしまうことすら考えていたアリシア。

問題解決の進展に伴い、心も軽くなっているようだ。

店内にはニーナもいた。

ちなみにニーナはというと、相変わらずヨレヨレの白衣である。だが、それが似合っていると感じる幸助であった。

「ニーナさん、掲示板の件はどうでした？」

「大丈夫だよ。明日までにはコンロは安全ってことと、偽魔石に注意って記事が貼り出されるよ」

掲示板へ貼り出すだけでは情報の伝達は不十分かもしれない。

だが、王都ではこれが一番強力な情報の周知方法と聞いている幸

助は、ホッと胸をなでおろす。

「これで今回の事故は一応解決ですね」

「ようやく日常が戻って来るんですね」

事故の発生以来、アリシアたちはこれまでにないほど忙しく、辛い時間を過ごしてきた。

発生直後は、不安に駆られた客たちが怒涛の如く押し寄せて来た。今でも毎日数名は訪れて来る。

その度に「使用は控えるように」と伝えることしかできなかった。「ウチのは大丈夫なのか」「いつから使えるか」といった質問にも答えることができなかったのだ。

だがそれも昨日まで。

市民の中にくすぶる、魔道具そのものに対する不安感をすぐに払拭することはできないかもしれない。

それでも、「ウチの魔道コンロと魔石は安全です」と胸を張って言うことができる。

これは大きな進展だ。

だが、事故により明るみになった問題は、これで完全な解決とは言えない。

先ほど幸助は「今回の事故は一応解決」と言った。

それは即ち、また同様の事故が起こる可能性があるということだ。幸助は真剣な表情になると、二人へその話題を切り出す。

「ニーナさん、アリシアさん」

「うん？ 何だい」

「どうされたのですか、コースケさん？」

二人は改まった幸助の様子に不思議そうな顔を浮かべ、訊き返す。

「事故の件はこれで一応解決です。ですが、今後もまた偽魔石が流通する可能性があります。今回よりも巧妙に、色まで同じものが出回れば、市民の方々には判別が付きません。更には、魔石に限らず見た目そっくりな偽コンロ本体が出てこないとも限りません」

そもそもの原因は、隣国フレン王国から偽魔石が流入したことだ。この根本的な問題を解決せねば、将来また事故は発生してしまうであろう。

幸助の言葉にアリシアの顔は固くなり、ニーナは不敵な笑みを浮かべる。

「確かに……そうですね」

「フツ、その可能性はあるね。魔石の色なんて、採掘する場所が変わるから」

「だからこれから、この根本的な問題を解消するためのミーティングをしませんか？」

「もちろん」

三人はテーブルに着く。

従業員が「冷たいうちにどうぞ」とお茶を持ってきてくれた。

カップの表面に細かな水滴がついている。

見るからに冷たそうだ。

幸助は早速カップを手にとると、喉へ流し込む。

「すごく冷えていますね！」

「コンロみたいに出力を調整できるように改良したんだ。出力を高めれば氷だって作ることもできるのだよ。フフフツ」

ニーナの眼鏡がキラリと光る。

魔道具は日々進化し続けているようだ。

一刻も早くこの便利な魔道具も販売したいものである。

「では始めましょうか。今回の問題は、隣国から偽魔石が入ってきたこと。そしてその魔石が使えてしまったことが原因です」

「術式はお粗末なものだったがね」

幸助の言葉にニーナはすかさず突っ込みを入れる。

そもそも他の魔石で動いてしまったということが、技術者として許せないようだ。

センスのかけらもないなどとブツブツ文句を続けるニーナを無視し、幸助は続ける。

「あとは、魔石が安かったということと、魔道具店が遠いため市場で買わざるを得なかったという事情もありました。そのあたりを踏まえて、今後の改善策を練る必要があります」

幸助の言葉にアリシアはあごに人差し指を当て、何かを考えているようだ。

ニーナは相変わらずブツブツと何か言っている。

幸助自身もアイデアを考えつつ、二人のどちらかが発言するのを待つ。

数秒後、最初に口を開いたのはアリシアだ。

ニーナに視線を向けると質問をする。

「ニーナさん。術式をもつと高度にして、今度こそ真似されないようにすることは可能でしょうか？」

「……………」

「ニーナさーん」

ニーナからは何の反応もない。  
完全に自分の世界に入ってしまったっているようだ。  
腕を組み、遠い目をしている。

困った表情を浮かべるアリシア。  
必死に視線を送るが気づいてもらうことはできない。  
見かねた幸助がニーナの目の前で手を上下に振ると、ようやくそれに気づき幸助へ視線を向ける。

「うん、何だい？」

「アリシアさんから、魔石の術式をもっと複雑にできないかという質問がありました」

「フフフツ。ちょうどそのことを考えていたよ。もちろん今よりも高度に、そしてより複雑な術式を組み込むことは可能だよ」

ニーナの言葉にアリシアの表情はパツと明るくなる。  
術式を複雑にし、今以上に真似されにくくすることはできるようだ。

「ニーナさん、複雑にすることで魔石の加工時間は変わりますか？」  
「そうだねえ。今の倍くらい加工時間はかかるかな」  
「ということは、販売価格も高くなりそうですね。それではコンロの大きな魅力の一つが無くなってしまいます……」

製造コストが高くなるということは、客が使用するランニングコストも上がってしまう。

コンロの魅力の一つは、薪とほとんど変わらないランニングコストだ。

下がるならともかく、上がる可能性があるならばそれは避けたい。

「しかも今の術式が曲がりなりにも真似できたということは、いたちごっこに陥る可能性もありますし……」

「それは確かに可能性がありそうですね」

「うっ……。今度こそは……。今度こそは……」

術式を特許で守ることもできない。

今の術式を真似できたのだから、新しい術式も真似される可能性が高い。

ニーナは悔しそうな顔をしているが、現実はそうだ。

まだミーティングは始まったばかり。

他に良いアイデアが出るかもしれない。

そう思った幸助は一旦この案は保留にして、自分の考えたアイデアを提案する。

「コンロに安全装置をつけることは可能ですか？ 偽魔石を検知して異常があれば停止するような仕組みです」

「それは無理だね。魔力はちゃんと流れてるから異常は検知できないし、そもそも爆発したのは出来の悪い魔石そのものだよ」

「そうですか……」

ニーナにあっさりアイデアを否定され、無言になる幸助。

確かに爆発したのは魔石であってコンロではない。

ニーナでも無理と言うならば検知はできないのであろう。

それからもいろいろとアイデアは出るのだが、有効なものが出てこなかった。

領主権限で偽物を取り締まるというアイデアは、王都では効力

を發揮できないのでボツ。

最初から大量の魔石を内蔵し、交換は魔道具店でないとできないというのは不便すぎてボツ。

魔石を使わず使用者本人の魔力を注ぎ込むのは、現実的でないのでボツ。

魔石でなく幸助になじみ深いガスコンロにするのもボツ。  
ボツになったアイディアばかりが山のように積み重なる。

「はあ、なかなか良いアイディアは出てきませんね……」

ミーティングを始めてから二時間が経過した。

ぬるくなつたお茶を流し込むと、幸助は大きなため息をつく。

モヤモヤした頭の働きがイマイチのようで、良いアイディアが浮かんでこない。

技術的な解決をすればコストがかかり、運用面での解決は実現の可能性が低いことばかり。

対策を実行したとしても、いずれも完全に偽魔石の使用を防止することはできない。

（困つたなあ。今後よその魔道具で事故が起きても、アヴィーラの魔道具は安全つて示したいし。もっと決定的な何か欲しいよなあ。コストがかからず、なおかつ強力な効果のある何か。だいたい偽物なんて造る国があるからいけないんだよ。まるで日本とお隣の国との関係みたいだ。偽物はすぐに出てくるし爆発はするし。でもそんな人たちもお金があれば日本のブランドをこぞって買ってたし……。うん？）



ここで幸助はあることに気付く。  
そう、ブランドだ。

各メーカーはもちろんのこと、日本という国にも強力なブランド力があつた。

日本製といえば高品質という言葉がすぐに結びつくくらい強いものだ。

ここ数日固まっていた幸助の脳みそが俄かに活性化する。

もしかしたらこれで一気に解決できるかもしれない。

この世界ならではの強力なブランドを構築できる可能性がある。  
そう思った幸助は声を上げる。

「これだ！」

「どうしたんだい？」

「もしも可能でしたら……ですが、領主であり事業主でもあるアヴィーラ伯爵家の紋章を、魔石と魔道具本体に刻むことは可能でしょうか？」

鷲をモチーフにデザインされたアヴィーラ家の紋章。

幸助のアイディアは、それをアヴィーラ製の魔道具および魔石のすべてに刻み込むというものだ。

「それは領主様に聞いてみないと分からないが、そんなの意味があるのかい？」

「はい。大きな意味があります」

アヴィーラ伯爵は相当の資金と労力を投入し、事業を軌道に乗せた。

しかも日本でのコンサルティング知識を持っている幸助の力を借りて、ようやくである。

だから魔道具事業は新規参入障壁が高い事業といえよう。

だが、成功事例は公然の事実となっている。

旧来のコンロを細々と個人で造っている職人はいる。

間違いなく追従者は出てくるはずだ。

そうなるとやはり今のうちに第一人者として、「高品質」「最先端」「安全」といったブランドイメージを構築しておくのが良い。

ブランド力が高まれば多少高くても売れるし、「アヴィーラ印だから」ということが購入動機にも繋がる。

ブランドはもともと、牧場で自分の所有する家畜を見分けるため押した焼印が始まりと言われている。

今回提案したのはそれに近い原始的なブランディングだが、それだけでも効果は大きいと幸助は考える。

何故なら、そこにこの世界ならではの理由が隠されているからだ。

「貴族の紋章を勝手に使ったら、牢屋送りは確定ですよね？」

その瞬間、ニーナとアリシアの表情は一変する。

この世界での貴族の紋章の扱いは重い。

伯爵家のものを勝手に使おうものならば重罪は免れない。

だからこそアヴィーラ家の紋章入りの魔道具は絶対に真似できないことになる。

だが、それを商品に使うなど前代未聞だ。

この世界の慣例にとらわれない幸助だからこそ発想できたといえよう。

「フフフツ、相変わらず面白いことを考えるね」

「貴族様の紋章を製品に刻むだなんて、誰も思いつきませんよ」  
「ありがとうございます。欲を言うならば、術式そのものが紋章の形になりませんか？ そうすれば術式も絶対に真似できないですよ。ね。あ、もちろん製造コストは据え置きで」

明るい場所で魔石を見ると、表面ではなく少し奥に術式の文様が  
見て取れる。

「どうやって加工しているのか分からないのだが、その文様自体が  
術式になれば完全に真似は不可能だ。」

「伝統ある紋章を簡単に使わせてくれるとは思えないが、早速領主  
様に掛け合って実現してみせようじゃないか。フッフッフッ」  
「では方針も決まりましたし、今日はこんなところですね」

片づけて宿へ帰ろう。幸助がそう思った時、アリシアが徐に幸助  
へ質問する。

「そういえばコースケさん……」

「どうしました？」

「サラさんを最近お見かけしませんが、お元気ですか？」

「あ、サラはですね、元気だと思っんですが……いろいろありまし  
て」

言い淀む幸助。

まだサラとの関係は修復できていない。

それを察したのか、ニーナが会話に割り込む。

「フッフッ、ここ最近様子が変わったし、ケンカでもしちゃったのか  
い？」

「はい、名答です……」

「原因は何だったんだい？」

よかつたら聞こうじやないかとニーナは続ける。

幸助は一瞬とまどったものの、話せば少しは気がまぎれるかと思  
いニーナへざつと経緯を話す。

「フフツ、それは少しだけ責任を感じるね」

「いや、ニーナさんは全然悪くないですから……」

「あのね、良い物があるよ」

「良い物って何ですか？」

そう言うとニーナは自分のカバンから小さな箱を取り出す。  
お洒落な彫刻が施された木の箱だ。

「王都で行列のできる人気店のクッキー。おいしいよ」  
「……？」

きよとんとする幸助に対し、ニーナは更に続ける。

「フフツ。これ、あげるから、これで仲直りしなよ」

「あっ、そういうことですか。ありがとうございます……！」

## 7・体験を売る

コンコン。

宿に帰った幸助はサラの部屋をノックする。  
だが反応はない。  
まだ怒ってるのかもしれないと不安になる幸助。

「サラ。幸助だよ」

呼びかけてみるが、様子は今までと同じだ。  
部屋からは物音一つ聞こえない。  
もしかしたら、食事などで出ている可能性はある。  
いつもであればこれで引き下がっていたが、今回は違う。

コンコン。

再度ドアをノックする。  
今度はニーナからもらったクッキーのことを言ってみる。

「王都で人気の甘いお菓子、持ってきたよ。一緒に食べない？」

部屋の中から人が動く音がする。クッキー効果があったのかもしれない。

ガサガサという音を立てること数十秒。

ガチャリ。

ドアが少しだけ開き、狭い隙間からサラの顔が覗く。ようやくドアを開けてくれた。

緊張のせいか、久しぶりのその姿に幸助の胸の鼓動は高鳴る。

「お菓子って、何？」

「クッキーだよ。王都で行列ができるくらい人気店の」

ほら、と言いながら幸助はその箱を見せる。

高級店の雰囲気漂う彫刻された箱だ。

サラの視線はその箱に注がれる。

「あの時は僕も言いすぎちゃったし、仲直りしたいなって思って……。一緒に食べない？」

少し間が空く。

サラは幸助の顔をじーっと見ると、ゆっくりと口を開く。

「……うん」

ドアを大きく開け、サラは幸助を部屋へ招き入れる仕草をする。促されるがままサラの部屋へ入る幸助。

小さな丸テーブルにクッキーを置くと、サラと向き合う。

「サラ、この前はごめんね」

「ううん。私の方こそゴメンナサイ」

サラの口からも謝罪の言葉が出てきた。

これで和解成立だ。

全身から緊張感が抜け落ちると共に、ホッと胸をなでおろす幸助。

「あのね。あの時、びつくりしちゃって」

「びつくり？」

「うん。コースケさんでも怒ることがあるんだなって」

「ああ、確かにサラの前では初めてだったかも」

サラの前でなくても、感情に任せて声を上げることなどほとんどなかった幸助。

直前の仕事によるストレス、そして幸助自身の未熟さなど複合的な要素が絡まり合った結果である。

「でね。反射的にコースケさんに『バカ』なんて言っちゃったから。コースケさんが大変だったなんてこと全然考えずに。だから、どんな顔で会えばいいか分からなくなっちゃって。それで……」

「そっか。それでなかなか会ってくれなかったんだ」

黙って頷くサラ。

そして下を向きながら口を開く。

「私から謝りに行こうとも思っただけど……きっかけが掴めなくて。コースケさん、何回も来てくれたでしょ。それなのにずっと応えなかったからもう嫌われてるかもしれないって思ったの。だから今日も会いにくいなあ。怒られるんじゃないかなって思っただけど……」

「甘いお菓子の誘惑には勝てなかったわけだ」

「ち、違つよ！」サラはバツと顔を上げると両手をぶんぶんと振る。

「あはは。冗談だよ」

もう！と言いながらもサラの顔は笑顔だ。

幸助からも自然と笑みがこぼれる。

「ねっ、仲直りもしたんだし、早くこのクッキー、食べよ！」  
「うん。そうしよう」

サラはいつものサラだった。

幸助にとつて、この世界でのサラの存在は大きい。

この世界での自分自身の存在価値を認められる原点となっている  
のだから。

そのことを改めて感じる幸助。

「うわぁー、おいしそう！」

中には、全て違う色、形のクッキーが十数枚入っていた。

濃い色薄い色。四角いもの丸いもの。

どれもおいしそうで目移りしそうである。

サラは早速その中の一つを手にとると口に放り込む。

「うん。おいしい！」

さすがは王都の名店。

普段、凄腕アロルドのスイーツを食べているサラでも、おいしい  
と感じられるものだったようだ。

「あっ、これもおいしそう！」

そう言いながら別なクッキーを手取る。

赤い果実のジャムらしきものが乗ったものだ。

「あっ、それ僕が狙ってたのに」

「そうなの？ じゃあ、半分ずつね」



そう言うとパキッとクッキーを割るサラ。

かなり歪に、三対一くらいの大きさでクッキーが分裂した。

その片方を幸助へ渡す。

サラの手元に残っているのは、当然大きな方だ。

「うん。おいしいや！」

「でしょ！ おいしね。でも……せつかくだからおいしいお茶と一緒に食べたいよね」

「確かに。そしたら残りは取っておいてまた後から食べよ」

「うん！」

幸助はクッキーのふたを閉じる。

そこで壁際のデスクへ視線を移すと、あるものに気付く。

そこには、以前サラが幸助の指導のもと作成した冷却庫の販売計画書が置いてあった。

側にはペンが置かれている。何やら編集しているようだ。

幸助の視線に気付いたようでサラは口を開く。

「あのね、冷却庫の新しい販売計画を考えてたんだ。コン口の事故があったからやり方を変えなきゃなと思って」

元々は潤沢な予算に合わせて、派手に宣伝やイベントをする予定だった冷却庫の販売プラン。

だが、コン口の事故があった今、そのような切り口は市民の反感を生むかもしれない。

掲示板に貼り出された内容が周知されるには時間がかかるはず。

だから幸助もそれは考え直さないといけないと思っていた。

愛弟子の成長っぷりに頬が緩む。

「へえ、偉いじゃないか！ やっぱりサラは出来る子だよ」

久しぶりにサラの頭をポンポンとする幸助。  
サラも、えへへとご満悦のようだ。

「でもね、コースケさん」

「うん？ 何？」

「ここまででは考えたんだけど、この先がどうしたらいいか分からないんだよなあ」

「どれどれ」

計画書を覗き込む幸助。

それからしばらく、二人は仲睦まじく新しい計画を練るのだった。

翌日の午後。

幸助は再び魔道具店を訪れる。  
もちろんサラも一緒だ。

「こんにちはー」

店内にはニーナとアリシアがいた。

ニーナは幸助の姿を認めると側に寄り、小声で話しかける。

(その様子だと、うまくいったみたいだね)

(クッキー、効果てきめんでした。ありがとうございます)

幸助も小声でニーナへそう返す。

ニーナの機転が利かなければ、まだここにはいなかったはずのサラは、きよとんと二人の姿を眺めている。

ネタバレするような野暮なことはしまいとばかり、ニーナは話題を変える。

「そうそう。紋章の件、使ってもいいって」

「えっ、もう領主様に話をつけてきたんですか？」

ここからアヴィーラ伯爵領までは片道一週間かかる。

電話の無いこの世界。どうやってこんな短期間で話をつけてきたのか。

伝書鳩ならぬ伝書魔物でもいるのかなと推察する幸助。

「うん？ ああ、領主様は今、王都にいるんだよ」

「あっ、そういう事でしたか」

至極簡単な理由であった。

ガクツと肩を落とす幸助。

伯爵、しかも領主ともなれば王都での仕事も多い。

アヴィーラ伯爵領の領主であるアルフレッドも例外に漏れず王都に屋敷を所有し、一年の半分はここで過ごしている。

「それにしても、よくあつさりと許可してくれましたね」

「フツ、魔道具事業は領主様の人生をかけてるからね。これで偽物を排除できるならば安いものだったさ」

「そんなに気合が入ってるんですか……」

確かにアルフレッドは個人的にも魔道具好きだ。

騎士団の武器調達にしわ寄せが行くくらい資金も投下していた。人生をかけていると聞き、責任重大なことをしているのだと改めて身を引き締める。

「そういう訳で私は新しい術式の開発に戻るから、後はよろしくね」「あ、はい。いろいろとありがとうございます！」

ニーナは新しい術式の開発がしたく、うずうずしているようだ。幸助達に見送られ、そそくさと魔道具店を後にする。

「ニーナさんのおかげでとんとん拍子で話が進みましたね、アリシアさん」

「はい。あつという間に物事が進んでしまいましたね。感謝してもきれないくらいです。もちろん、コースケさんにも感謝です。私たちだけでは偽魔石まで辿り着けませんでしたから」

そう言うとアリシアは幸助に頭を下げる。

幸助は、いえいえと謙遜しつつも、ここ一週間の間起きたまめぐるしい日々を思い返す。

事故があつたと知ってから顧客の家、そして市場へと走り回った数日間。

待ちに待ったニーナの到着、そして河原での実験。

その間に起きたサラとの言い合い、そして仲直り……。

マイナスになった状況を元に戻すのはこれでお終いだ。

ようやく前に進むことができる。

お楽しみはこれからだ。

幸助は力強く切り出す。

「さて、これから今後の話をしましょうか。冷却庫の販売について、サラといういろいろ考えてきました」

「はい。是非お願いします」

立ち話していた三人はテーブルへと場所を移す。

幸助の隣にサラ、向かいにアリシアがかける。

「アリシアさん、お店はもう通常営業に戻りました？」

そう言うと幸助は店内の陳列棚に視線を移す。

そこには既に本日のテーマである冷却庫が陳列されていた。

以前幸助が説明した通り、入り口近くに大型のものが。そして奥にひっそりと小型のものが置かれている。

最初に幸助が訪れた時に言った、アンカリングの効果を活かすための陳列が実践されている。

「はい。掲示板には偽魔石のことが掲示されました。ですから本日より販売を再開します。ただ、ニーナさんからの指示で、領主様の紋章入り魔道具ができるまでは納品は控えることになりました」

「ということは、実演しかできないということですか？」

「はい。残念ながら……」

寂しそうに目を伏せるアリシア。

紋章入りの魔道具が完成するまでどれだけかかるか分からない。

ニーナが戻り、即座に完成させたとしても二週間はかかる。

ここで幸助とサラは顔を見合わす。

二人とももともと大々的な販売はできないと考えていた。

だから用意していた計画も、当面はデモンストレーションに徹するという内容だった。

自分たちの予測と店の方針が一致したことでニコリと笑顔を作る。

「……？ お二人とも、どうされましたか？」アリシアは交互に二人の顔を見る。

「実は、この状況を見越して販売計画を立ててきたんです」

「えっ、そうなのですね。納品ができない中、どのようなことができるのでしょうか？」

「はい、いろいろあるのですが、詳しくはサラから説明があります」

そう言うと幸助はサラの背中をポンとたたき、説明を促す。

今回はサラの教育も兼ねている。

だからアリシアへプレゼンするのは幸助ではなく、サラだ。

サラはカバンから計画書を取り出すと、アリシアへ向ける。

大きめの紙一枚でシンプルにまとめられた計画書だ。

大きく息を吸い、ふーっと吐き出すとサラは始める。

「え……えっつとでしゅね……」

初っ端から囁んだ。

緊張しているようだ。

仕切りなおしてサラは再び説明を始める。

「えっつとですね、冷却庫もコンロと同じで体験してもらうのが一番です」

それからサラは計画の概要を一気に説明する。

ただ会話で話すのと、企画を説明するのでは勝手が違う。

時々言葉に詰まったり、同じことを何回も話したりするサラ。

幸助は自分にもこんな時期があったなあと思わしく思い返す。

おおよその内容は実演販売と変わらない。

ただし、コンロの場合はコストが薪に置き換えられたが冷却庫はそうはいかない。

だからまずは富裕層を相手に、実演販売よりもゆったりとした体験会を催すといった内容だ。

その富裕層も、既にコンロを購入しており顔の分かる客に限定。コンロの安全性についての話も兼ねる予定だ。だからイベントとしては、こじんまりとしたものになる。

ちなみに貴族に対しては、コンロの時と変わらず出入りの商人を仲介するため、今回のプランからは外されている。

「 というわけで、『モノ』ではなく『体験』を売るんです」

サラのプレゼンは終了した。

最後の説明が少し分かりにくかったため、幸助が補足説明を入れる。

「コンロの時もそうでした。お客さんは『コンロを買うことにより、生活が便利になる』という体験を買ってるんです。だから冷却庫も、それがあること得られる生活をイメージしてもらえよう、ここで体験してもらってます」

もちろんコンロそのものが目当ての人はいましたが、と幸助は続ける。

魔道具オタクや新し物好きの場合はそうだ。

だが、多くの台所を預かる主婦は、この「体験」を買っていた。

「なるほど。お客様を招待し、体験会を開催し、その場で注文を頂くというプランですね」

「はい。まとめるとそういうことになります」

「では、具体的に体験していただく内容や、予約についての手順を決めなければなりませんね」

そのあたりの実務については、さすがは経験者のアリシア。  
実家での商売経験が活かされている。

その後三人は数時間にわたり意見を交わし、ミーティングは終了となった。

「では早速私たちは準備に入ります」

「予約をたくさん取り付けられるよう頑張りましょう！」

「はい！！！」



## 8・高原の夏

それから一週間後。

前日に雨が降り、じっとりとした初夏の朝。

幸助は果実水を手に魔道具店へ向かう。

朝とはいえ、少し歩くだけで額に汗が浮かぶ気温だ。

「体験会にはもってこいの天気だな」

幸助はそう呟きながら袖で額の汗をぬぐう。

雲の切れ目から太陽の光が差してきた。

昼過ぎには快晴になりそうである。

時間が経つにつれて不快指数は上昇するであろう。

「おはようございまーす」

幸助は魔道具店に着くと、ドアを開け店内に入る。

心なしかひんやりとした空気が幸助を出迎える。

今日は魔道冷却庫の体験会の日。

店内では、従業員たち数名がせつせと準備をしている。

お洒落ではあったが見る角度によっては無機質にも感じられた空間には、観葉植物が置かれることで柔らかな雰囲気醸し出している。

そして、それら観葉植物の葉が室内にも関わらず優しく揺れ続けている。

実は、ここに今回の体験会での幸助のこだわりが隠されている。幸助が初めて魔道具店へ行った際、風魔法を使う魔道具をニーナに見せてもらったことがある。

全く実用的ではなく、幸助にガラクタ扱いされた残念な魔道具だ。

それが、資金が潤沢になったことで研究が再開。

扇風機のように継続的に風を送り出せるまでになった。

相変わらず魔石の消耗は激しい。

だから製品化までは程遠い。

だが、扇風機などの可能性を示すデモ機として使うことがあるかもしれないと幸助は考え、ニーナに用意してもらっていた。

想定とは違う用途だったが、今日だけ開催するこの体験会にはお誂え向きだ。

その名前もない魔道具の前に、ニーナが持ってきた冷却庫五台をフル稼働させて作った氷を設置。

冷風扇のようにしている。

冷房のようにしっかりと冷えないが、氷越しの風に当たれば涼しさを感じられる。

氷には香草のエキスが混ざっているため、爽やかな香りも漂う。

体験会のテーマは「高原の夏」。

爽やかな緑とほんのりと涼しい風。

それに冷たい飲み物の提供。

短い期間で用意できたことは少なかったが、それでも普段とは違う演出ができています。

ちなみに幸助は風鈴も提案したのだが、それは誰からの理解も得られず却下となってしまった。

ここマドリー王国にも、貴族が別荘を構えるような避暑地がある。その避暑地のような時間を店内で体験してもらおうという企画だ。

「あ、コースケさん！」

買ってきた果実水をテーブルへ置いたところで、サラが奥からやってくる。

幸助の姿を認めるとパタパタと駆け寄ってくる。

今日はサラも魔道具店の従業員の一人だ。

青い爽やかな制服に身を包んでいる。

「おはようサラ。制服、似合ってるよ」

「ほんと？　ありがとう！」

サラはスカートの裾をつまむと、ちょこんとポーズを取る。

サラの碧い眼と制服の青がマッチしている。

同じ仕事着でもレストランの給仕服とは違う姿に、新鮮味を感じる幸助。

「コースケさん、おはようございます」

「おはようございますアリシアさん。準備万端ですね」

「はい。ですが……どれだけの方が来てくださるか、不安で仕方ありません」

「それはふたを開けてみないと分かりませんからね。今はうまくいくと信じて準備しましょう」

「はい、そうですね！」

アリシアたちは近所の上得意客を戸別訪問し、事故で心配をかけた挨拶と合わせ体験会の案内をした。

訪問先の件数はおよそ百件。  
分母としてはかなり少ない。

だが、ゆつたりとした体験会というイベントの性質上、混んでもいけないのでこの数となった。

戸別訪問をしたこともあり、「絶対に行く」という約束も何件か取り付けている。

だから坊主になることはないと思想している。

さて、幸助も準備に取り掛かるう。

そう考えた時、店のドアが開く。

「もう始まつてるかしら？」

「カルラさんにセリノさん。来てくださったのですね。ありがとうございます！」

本日初めての来客だ。

開店時刻より少し早いですが、店員たち全員で客を迎える。

やって来たのは中年の男女二人。

アリシアからすぐに名前が出るほどの客のようだ。

「こちらへどうぞ」

アリシアがテーブルへ客を案内する。

着席した客は何やらキョロキョロと店内を見回している。  
そして手をあちこちへかざす。

「何だか涼しいわね」

「はい。冷却庫で作った氷に風を送っております」

「まあ、氷を作るくらい冷やせるのね」

「気持ちいいな」

二人の客は顔を見合わせながら言葉を交わす。  
掴みはオツケーのようだ。

「冷たいおしほりをどうぞ」

おしほりを渡したのは給仕のベテラン、サラだ。  
青い制服の上から白いエプロンをしている。

「まあ、よく冷えてること。気持ちいいわね、あなた」  
「ああ」

男性客はお絞りで手を拭くと、今度は顔を拭きだした。  
おしほりを置くと、さっぱりとした顔をしている。  
気持ちよかったようで何よりだ。

「お飲み物のサービスもあります。果実水かお茶、どちらがよろしいですか？」

二人とも注文は果実水だった。  
注文を受けるとサラは客から見える場所で冷却庫から細かく砕かれた氷を取り出しグラスへ入れ、果実水を注ぐ。  
これも計画したデモンストレーションの一つだ。  
二人の客は興味深そうにその様子を見ている。

「お待たせしました。果実水です」

サラはそれぞれの前に手作りのコースターを置くと、その上にグラスを置く。

奮発して用意したガラスでできたグラスに氷が当たり、カランと

涼しげな音を立てる。

「ありがとう。早速いただくわね」

女性客はグラスの中をしげしげと眺め、果実水を口に含む。その途端、驚きの表情が広がる。

「暑い日に冷たい飲み物が飲めるなんて、素敵ね！」

果実水は持つてきたばかりだが、ちゃんと氷で冷えていたようだ。一方、男性客のグラスは既に空になっていた。その様子を遠巻きに見ていた幸助は手ごたえを感じる。

ちなみに幸助の役割は裏方だ。

すぐに切れる送風機の魔石を取り換えたり、溶けた氷を交換したりと意外に忙しい。

せつせと作業しつつも、来店客との会話に耳を傾けることは忘れない。

「便利な魔道具だなあ」

男性客はそう言うと席を立ち、興味深そうに冷却庫を前から、横から、後ろから眺める。

女性客もそのあとに続く。

「ドアも開けてみてください。手前に引くだけで開きますので」

男性客はその言葉を聞くとドアを開ける。

中の様子が見えると同時に、冷気が男性客を撫ぜる。

この冷却庫は氷を保存しているため、出力は最強だ。

「すごいな……これは」

冷却庫からこぼれ出した冷気は周りの空気を冷やし白くなり、床へと降りていく。

その冷気を両手で掬いながら、男性客は氷の詰まった冷却庫の中を眺める。

「これは、いくらになるんだ？」

「金貨五枚です」アリシアは笑顔で答える。

金貨五枚は王都での二ヶ月分の生活費に匹敵する。

富裕層であるこの客であれば一カ月分かもしれない。だがそれにしてもポンと買うには抵抗のある金額だ。

「贅沢のために金貨五枚は使えないよなあ」

その意見には女性客も同意のようで、そうねと相槌を打つ。

やはり高額品。欲しいと思ってもらえても、買えるかどうかの壁は決して低くないようだ。

「それでしたらこちらの小さな冷却庫もございます」

「えっ、小さいのもあるの？」

「はい！」

そう言うとアリシアは、シナリオ通りに店舗奥に設置している小さな冷却庫へ客を案内する。

缶ビールであれば六本くらいが入るサイズだ。

「小さいので冷却できる量は減ってしまうのですが、こちらでした

ら金貨二枚です」

使う魔石の量も減りますよとアリシアは続ける。  
その言葉に男性客の目が少年のように輝きだす。

「小さいけど、ちゃんと冷えるのか？」

「もちろんです。お茶を冷やすのも氷を作るのもお任せください」

「おい、これなら買ってもいいんじゃないか？」

財布のひもは女性客が握っているようだ。

男性客は必死に冷却庫があると便利になるであろうことを並べた  
てる。

「そうねえ。これであなたが仕事を頑張れるなら安い投資……なの  
かな。でも金貨二枚よねえ」

製品としては気に入ってもらえたが、まだ決め手に欠けるようだ。  
可能ならば幸先のよいスタートを切りたい。

アリシアは「今日決めるべき理由」を客へ説明する。

「本日決めて頂けましたら、魔石をサービスで三個お付けします」

「えっ、そうなの？ 主人の様子だと今日決めなくてもいざれ買っ  
てしまいそうだから………それなら買っわ」

「ありがとうございます！」

その後もパラパラと客の来店は続いた。

体験会の案内をした人数は少なかったが、そもそも今まで信頼関  
係が構築できていた客を中心に案内したのが功を奏したようだ。



最終的にこの日の来店客は二十名。  
大型の冷却庫一台に、小型の冷却庫三台の予約を取ることができた。  
かなりの成約率である。

今日決められなかった客も、いずれは注文してくれる可能性がある。  
体験会は大成功といってよいだろう。

「かんぱーい！」

ジョッキのビールを一気に流し込む幸助。  
これもキンキンに冷えてたらなと思いつつも、飲み慣れた味に笑顔  
顔を浮かべる。

幸助とサラ、そしてアリシアたち従業員は、王都のレストランに  
来ている。

もちろん体験会成功の打ち上げのためだ。  
店はアリシアのお勧めという店に決めた。

テーブルには色とりどりの料理が並んでいる。  
幸助が普段行くことのない格式が高めのレストランのため、器や  
盛り付けは小洒落こしゃわている。

だが、メニューはサラダに肉を焼いたものやピザなど、アヴィー  
ラ伯爵領と大きな違いはない。

幸助は空になったジョッキをゴトリと置くと、アリシアへ話しかける。

「体験会、うまくいきましたね」

「はい。こんなに皆さん喜んでくださるとは思いもしませんでした。コースケさんとサラさんの考えてくださった計画あってこそです」

体験会のテーマである「避暑地の夏」はすべての来店客が楽しんでくれた。

やはり夏なのに涼しいという体験は刺激的であったようだ。

夏は始まったばかり。

定期的に行えば、手堅く注文をもらえそうである。

「アリシアさんが、開店から今までお客さんと良い関係を築いてきたからこそです」

「そうなのですか？」

「はい。でなければこれだけのお客さんは来てくれませんよ」

「うふふ。ありがとうございます」

もちろん事故後の初動が悪く、信頼を失った客もいる。

だがここは<sup>ウレキ</sup>辛い場。

暗くなりそうな話題は一切口にしない。

「サラもよく頑張ったよ。一日立ちっぱなしで疲れてない？」

「コースケさんとは違うもん！」

「そ、そうだったね……。体力が無いのは僕の方だったよ」

試食販売の時もそうだったが先にバテるのは必ず幸助の方だった。これでは辛いになっていない。

「でもやっぱりサラは接客のプロだね。昼過ぎに混んだ時もサラがいたからスムーズに回せたと思うよ」

「ほんと？　ありがとう！」

それから幸助は他の従業員たちにも言葉をかける。

ここ数週間、苦楽を共にした仲だ。

話題はいくらでも出てくる。

それからワイワイと宴を楽しむこと二時間。

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

皿の上にはまだ料理が残っていたが、みな満腹のようだ。

幸助ここで打ち上げを締めることにする。

レストランの外に出る幸助たち。

昼間の蒸し暑さはだいぶ和らいでいる。

もう日が暮れたというのに、人の往来が絶えない。

至る所にかがり火が焚かれ、通りを淡く照らしている。

特に正面の大きな建物はまだまだ賑やかだ。

馬車がひっきりなしに人を乗せ、どこかへと向かっている。

「アリシアさん。かなり賑やかですが、あれは何の建物ですか？」

「あの建物の中にはですね、様々なお店が入っているのです。一ヶ所でも揃うと王都の方々からも評判です」

「へえ、そんな場所もあったんですね。さすがは王都」

「はい。もう閉店の時間を過ぎていますので今日は入れませんが、面白い場所ですよ」

ショッピングモールのようなものかと幸助は考える。  
まだまだ王都観光は十分にできていない。  
ここには絶対に来てみようかと心に決める。

「それでは、私たちはこれで失礼いたします。本当にいろいろお世話になり、ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます」

お互いに軽く頭を下げるとアリシアたちは幸助に背を向け歩き出す。

徐々に小さくなる背中を見送りつつ、幸助は王都で体験した様々な出来事を思い返す。

特に印象深かったのは、やはり魔石の爆発事故だ。

事故の対応はまずまずだったが、自分のことばかり必死になりサラのことを全く考えていなかった。

マーケティングの経験は豊富だったが、人のマネジメントは本を読んだ知識のみで、経験がなかった。

経験不足が故の過ちだ。

だが、失敗したと認識できたのならば、それは次に生かせばよい。そうやって人は成長していくものだ。

サラの教育を通して自身の成長も感じる幸助。

王都での経験がこれからどのような出来事に繋がるかは分からない。

だが、この経験が無駄になることは決していないだろう。

アリシアたちの姿が見えなくなると、幸助は隣にいるサラへ視線を送る。

「さて、僕たちも帰ろっか」  
「うん！」

肩を並べて歩き出す幸助とサヲ。

足取りは軽やかだ。

満天の星たちが二人を優しく見守っている。

## 8・高原の夏（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。ごさいます。

幕間が1つ入る予定ですが、とりあえず本章はこれで終了です。幕間にて紋章の後日談と王都に及ぼした影響などが入ります。

活動報告に7章の感想返しを掲載します。

幕間：避暑地が我が家にやって来た！

「おい、まだ届かないのか」

「もうあなた、ソワソワしすぎよ。夕方までには届くとお店の方は言ってるじゃない」

「あれから三週間も待ってるんだぞ。待ち遠しいに決まってるじゃないか」

ここは王都のとある家庭。

一家の主である男は、ソワソワと落ち着かなさそうに自宅のリビングを行ったり来たりしている。

もう夏真っ盛り。

額にたまった汗が、つーっと滑り落ちる。

人生四十余年。

男は余程のことでは驚かない胆力は身につけていたが、魔道冷却庫の体験は大いに驚いた。

今までも冷やすことのできる魔道具があることくらいは聞いたことがある。

だが、それも水をほんのりと冷やす程度だ。

余程の物好きでなければ買えない代物と聞いていた。

だから男は、新しい冷却庫の体験会が開催されると聞いた時、夕ダでお茶が飲めるなら行ってもいいかな。それくらいの感覚でいた。それがいざ店に行ってみると、驚きの連続であった。

まずはドアをくぐった瞬間感じられた、ほんのりと涼しい店内に頬をなせる風。

話に聞けば、冷却庫で作った氷と研究中の風魔道具を使っているというではないか。

次に席に通された直後に出された濡れタオル。手に取った瞬間、濡れているだけではなく、確実に冷たさを感じた。

つつい顔を拭いてしまったが、気持ちよかったのを男は記憶している。

そして給仕から出された果実水。

そこには小さく砕かれた氷が浮いていた。

しかもガラスのグラスだ。

見た目に何とも涼しげであった。

その冷却庫で作られた氷が入った果実水を一気に飲み干した。爽やかで冷たいものが喉を流れ、胃へと落ちていくのを男は感じた。

それから実際に冷却庫を見てみると、中は真冬の山のような感じ。こぼれてくる白い空気が気持ちいい。

全ての体験が男の欲求を強烈に刺激した。

欲しい、欲しい、欲しい。

絶対に欲しい。

だが値段を聞いて諦めかけた。

冷やすだけで金貨五枚は贅沢すぎる。

だが魔道具店はちゃんとそのようなことは考え済みだった。

金貨二枚という小型のものもあったのだ。



冷やせる量は少ないが、家族で使う氷を作るくらいならこれでも十分だ。

あとは妻をどうやって説得するか。

そればかりが超高速で男の頭を駆け巡った。

必死に説得した。

何を言ったかは覚えていない。

男の熱意が伝わったのか、妻はそれほど時経たずして購入を許してくれた。

そして今日。

待ちに待った魔道冷却庫の納品日だ。

ガンガン。

金属同士がぶつかる鈍い音が室内に響く。

玄関ドアのノッカーが鳴らされた音だ。

「来たぞ！」

バツと立ち上がると男は早足で玄関へ駆け寄り、勢いよくドアを開ける。

しかしそこには、良く見知った顔の女性が立っていた。

隣人のおばちゃんだ。

「こんにちは。お野菜沢山いただいたので、はいこれ。おすそ分け」

「ど……どうも」

残念ながら冷却庫ではなく野菜だった。

カゴたっぷりの野菜を受け取ると、男は肩を落としながら部屋へ戻る。

「あら、残念だったわね。それにしてもこんなにいっぱい。今度お返ししなくちゃね」

「ああ……」

心ここにあらずな男は、うわごとのように相槌を打つ。

それから更に待つこと三十分。

家の前に馬車が停まる音がした。

程なくして、ノッカーの音が響く。

今度こそ冷却庫の配達に違いない。

そう確信した男は、勢いよく玄関へ行くとドアを開ける。

そこには待ちに待った魔道具店の制服に身を包む女性が立っていた。

「こんにちは。魔道具店のアリシアです」

「おお、ようやく来たか！ 待ってたぞ！」

今度は間違いなかった。

玄関先に立っていたのはアリシアだ。

「俺の冷却庫はどこにあるんだ？」

「今からお持ちしますので、少々お待ちください」

アリシアが後ろを振り向くと、別の男性が馬車から冷却庫を抱えて持って来るところであった。

冷やせる量は少ないが、それでも筐体はそれなりの大きさ、重さ

がある。

小柄なアリシア一人では運べないのである。

男の指定する場所に冷却庫が設置されるのを確認すると、アリシアは説明を始める。

「まず魔石についてですが、ここに魔石は装着済みです」

こちらは当店からのサービスとなります、とアリシアは続ける。側面には真っ赤な魔石が三つ嵌め込まれていた。

その横には四つのスイッチがついている。

コンロと同様のものだ。

「こちらのスイッチで出力を調整します。コンロをお持ちですので詳しい説明は不要ですよね」

黙って男は頷く。

「待て」をされた犬のようにうずうずしているのだ。説明される時間など待つてられない。

「では、記念すべき初めてのスイッチをお入れください」

アリシアに促され、男はスイッチを入れる。

カチ、と音がする。

もちろん出力は「強」だ。

スイッチを入れても作動音などはしない。

ドアを開けたまま、中を観察する男。

手を入れてみると、早くもひんやりとした冷気を感じる。

奥のパネルそのものが冷えているようだ。

「おお、冷えてるぞ！」

興奮した様子で男は早速用意していた水を入れ、ドアを閉める。冷えるのも待ち遠しいがここからは再び我慢の時間だ。

「では、お手入れについてですが」

それから二人は霜がついた場合など、手入れの方法について説明を受ける。

とはいえ、それほど複雑な魔道具ではない。

説明は三分足らずで終了する。

「最後に、魔石についてですがこの通り新しい魔石となりました。使用済みとなった魔石が十個集まりましたら、次回魔石をお買い上げの際に魔道具店へお持ちください。新しい魔石一つと交換させて頂きます」

「そうか。ならば使った魔石はちゃんと取っておくようにする」

「何かご質問はありますか？」

「いや、大丈夫だ」

「それでは、私はこれで失礼いたします。お買い上げ、ありがとうございます」

そう挨拶するとアリシアは家を後にする。

その姿を見送ると、男は早速先ほど入れた水の様子を確認する。また凍るところか完全に液体の状態だった。

「良かったわね、あなた」

「ああ。ようやくだよ」

「ほら、そんなに開けたり閉めたりしていると、冷えるのが遅くなるわよ」

「そ、そうだな」

男はドアを閉めソファーに腰かけると、そこから見える場所に設置した冷却庫を嬉しそうに眺める。

その後、その家ではあらゆるものがとっかえひっかえ冷やされたとか。

「ふう、ようやく納品ができましたね」

アリシアは魔道具店に戻ると店舗裏の倉庫で冷たいお茶を飲み一息つく。

通常の配達であれば、専門の配達員だけで済ませるのだが、今日訪れた先は上得意客。

アリシアも挨拶がてら同行したのだった。

「新しい魔石も無事に届きましたし、これでコンロの納品も再開できます」

そう呟きながらアリシアはたくさん並べられた魔石を眺める。

魔石にはつつすらとアヴィーラ家の紋章が認められる。

術式の都合か、実際の紋章と比べるとややシンプルになっている。だが、誰が見てもアヴィーラ家のものと分かる。

魔石は、術式をアヴィーラ家の紋章の形にするため、加工の手間が増えてしまった。

それは即ち原価が上がってしまったということだ。

だが、売価には転嫁することがないよう幸助から釘を刺されていた。

だから価格は据え置きだ。

ではなぜ原価が上がったのにも拘らず魔石をプレゼントするのか。それは、再生品のめどが立ったからだ。

ニーナの話では、魔石の術式を加工するよりも、使用済みの魔石に魔力を充填する方が遥かに楽しい。

回収を促進して全体の原価を下げていこうという算段だ。

魔道コンロを新魔石へ対応させるための部品交換もしなければならぬ。

王都での代理店を募集する話も進行中だ。

「さて、やることはたくさん。頑張らなきゃ」

両手を胸の前でぐっと握ると、アリシアは再び仕事に戻る。

幕間：避暑地が我が家にやって来た！（後書き）

活動報告に「かいぜん！」書籍版のキャラクターデザインを掲載  
しています。

ぜひご覧ください！

魔石回収は、感想欄でいただいたHALさんのアイディアを参考に  
させて頂きました。

ありがとうございます！

番外編：出版記念SS「食欲の秋」

秋がやってきた。

朝晩の風は心地よくなり、過ごしやすさも増している。

ここはアヴィーラ伯爵領にある、パスタレストラン。  
幸助は今、テーブルに頬杖をつきながら秋についての想いを巡らせている。

（秋といえば、読書の秋。

うん。読書は大好きだ。

普段読んでたのはほとんどビジネス書だけど、秋の夜長には小説も読んでたっけ。

でも、残念ながらこの世界には本が少ないんだよなあ。

王都ならもしかしたら図書館くらいあるかもしれないけど、今のところこの世界で読書の秋は満喫できそうにないか。

ならスポーツの秋？

ぶぶっ。

絶対ないや。

ダイエツトだって志半ばで折れたんだから。

却下、却下。

それなら芸術の秋か。

画材屋さんなら、たいぶ前にサラと行ったことがあるからそこで道具を調達して、真っ白なキャンバスに絶世の美女を……。

って、これも違うな。

だいたい僕は芸術なんて嗜むたしなタイプじゃないよ。



用具を揃えただけで満足して何も描かないに一票。  
それに万が一、描いたとしてもしょ〇こお姉さんの描くスプーに  
なるはずだ。

……あ、ネタが古かったか。僕も歳を取ったなあ。

となると、やっぱり僕の秋にはこれしかないのかあ。

人間には絶対に必要なもの。

全ての人を幸せにする力を持つもの。

貴族をも魅了するバラエティーの豊かさ。

そして何より、僕の行動力の原点……)

「食欲の秋、到来だ！」

「何言ってるんだ、お前？」

厨房からトマトバジルパスタの皿を持って来たアロルドが幸助へ  
突っ込みを入れる。

「あ、聞こえちゃいました？」

「ああ？ 聞こえたもなんも、そんな大声で言えば聞こえるに決ま  
ってるだろ」

そう言いながらアロルドは大盛りのトマトバジルパスタを幸助の  
前へ置く。

その隣にはスープも添えられる。干し貝の入った海鮮スープだ。

ここは小麦文化圏。

だから収穫祭は夏に行われる。

だから食欲の秋などという感覚などない。

だが幸助は生粋の日本人。

ここは異国、いや、異世界と分かっているにも、涼しくなるにつれて秋の味覚が恋しくなる。

幸助は芋、栗、かぼちゃよりも脂の乗ったサンマ派だ。

生のサンマを一分間だけ酢でしめたものがたまらない。

スツキリとした日本酒にもよく合う。

サラリーマン時代に先輩から受けた教育の賜物だ。

「で、食欲の秋つつうのは何だ？」

「えつとですね、涼しくなると夏バテも収まって食欲が増えますよね？ それに、おいしい果実や木の実もいっぱい収穫できるから、食べられるものが増えてワクワクしませんか？」

「まあ、確かにそうかもしれないが、トマトや小麦は夏がイチバンだから俺にはピンとこない」

「そ、そうですね。ま、僕の故郷ではそうだったんで……」

そこへサラがパスタを二皿手にテーブルへやって来た。

自分たちの賄<sup>まかな</sup>いだ。

アロルドが幸助の正面へ。サラが隣へ座ると遅めのランチタイムが始まった。

「コースケさんの故郷では何を食べてたの？」

「そうだなあ。やっぱり魚かな。秋の脂が乗った魚はおいしくてね」

「そっか。海辺の村って言ったもんね」

「そうそう。魚が恋しいなあ」

海辺の街に行ってから、かなり時は経過している。

新鮮な魚介類は久しく食べていない幸助。

懐かしく思い出しつつ、干し貝のスープを口にする。

「他にはどんなのを食べてたの？」

「うーん、そうだなあ。キノコとか……」

ここで幸助は考え込む。

日本で最後の秋を過ごしてから二年が経過している。印象の強かった魚以外、すぐに思い出せない。

（何があつたつけなあ。秋の味覚、秋の味覚……。あ、そうだ。そういえば先輩は秋になると発売される新作モンブランを楽しみにしてたつけ。別にモンブランなんて年中あるんだから秋に拘らなくてもいいのにな）

幸助には女性である先輩社員の気持ちは理解できなかったようである。

「秋の味覚を使ったスイーツもいろいろあつたよ」

「スイーツ？」

「うん。栗やカボチャを使ったケーキとか、他にもいろいろ」

「へえ、私食べてみたい！」

サラが期待のままざしでアロルドへ視線を送る。

幸助も何か思いついたようで、サラに続き、アロルドを見ると口を開く。

「アロルドさん。いいこと思いつきました！」

「な、何だ。二人して」

「いいことって何？ コースケさん」

「前に新年会をやってから皆で集まることになかったですよ。だ

から、久しぶりにパーティーをしませんか？ しかも前とは違って、スイーツたっぷりのパーティーを」

スイーツという言葉にサラが反応する。

アロルドの店では、スイーツはメニュー入りしていない。

だから、サラもなかなか食べる機会がないのだ。

「楽しそうだよ！ 私、やってみたい！」

「そんなこと言ったって、結局料理を作るのは俺だぞ」

「私も手伝うからさ。ね、お父さん。やってみようよ」

「アロルドさん、僕も知ってる限りのアイデアは出しますから。

生クリームと果実や木の実、それにパンを組み合わせればいろいろできるはずですよ」

「できるはずって。お前のアイデアはいつも大雑把すぎなんだ！」

そんなこんなで秋のとある休日に、スイーツパーティーが開催されることとなった。

あつという間に時間は経過。

食欲の秋特別企画、スイーツパーティーの日がやって来た。

テーブルには色とりどりのスイーツが並んでいる。

オーソドックスなショートケーキ。

ベリー系を混ぜたのか赤みを帯びたケーキ。

シンプルなチーズケーキ。

フルーツたっぷりのタルトのようなもの。

栗をふんだんに使ったモンブラン。  
そして陶器のカップに入れられたプリンなどなど。

それぞれが少しずつ小ぶりだ。  
種類はそれほど多くないが、それでもホテルのケーキバイキング  
のようである。

どれもアロルドを中心に、幸助とサラで考えたものだ。  
といっても、幸助はおぼろげな記憶を手繰り寄せただけなのだが。

予定のランチタイムになると、ぞくぞくと人が集まってくる。  
集まったメンバーは、ルティアにパロ親子。魔道具店のニーナと  
靴屋のココミミ親子だ。

領主令嬢のアンナも招待したが忙しいようで、来てくれるものの  
時間には遅れるとのことであった。  
皆が集まったことを確認すると、幸助は窓を背に声を上げる。

「皆さん、『アロルドの Pasta 亭』特別企画、スイーツバイキング  
にお集まりいただきありがとうございます」

「うわぁ、おいしそうだね」

「ケーキなの!」

「おいしそうだね」

「どれがおいしいかな?」

「フツッ、この目をどんなに待ちわびたことか」

幸助が仕切ろうとするが、誰も話を聞いていない。  
視線はテーブルの上に並んだ数々のスイーツに釘付けである。

「みなさん!」

幸助が声を張り上げると、ようやく視線が幸助へ集まる。

「えっと、全員揃いましたので始めたいと思います」

「はやくたべた〜い！」

「たべたいの！」

このまま挨拶などしていたら反乱が起きそうな雰囲気だ。危険を感じた幸助は、慌てて開会宣言をする。

「あ、はい。では皆さん揃いましたので始めましょう」

「……いただきまーす!!!」

皆が思いおもいのスイーツを小皿へ取る。

パロとニーナは食べ慣れたショートケーキを一つずつ。

ココとミミは父親であるアラノからピンク色のケーキを取ってもらっている。

そしてルティアが手にする小皿からは、今にもケーキが零れ落ちそうになっている。盛りすぎだ。

その様子を見ながら幸助とサラはモンブランを一つずつ。

「おいしいの！」

「フツ。この味との再会を待っていたよ」

「砕いたナッツが入ってるの!? こんな味、初めてね」

「……………」

感想を述べたり無言のままだったり、反応は様々だ。だが皆、一様に幸せそうな顔をしている。その様子を眺めつつ、いつかスイーツ専門店を開いてみたいなど独りごちる幸助。

「コースケさん」

「うん？ サラ、どうしたの？」

「これ、私がひとり考えて作ったんだ」

そう言いながら手にした皿を幸助へ見せるサラ。

そこには異彩を放つケーキのようなものが一つ載せられている。紫と赤色でおどろおどろしい物体だ。

「えっ、えっと……。これは何かな？」

「三種のベリーケーキだよ」

ハロウィンにはお誂え向きかもしれないが、この場にはそぐわない。  
い。

幸助は本能で危険を感じる。

そこへやって来たアロルドはやれやれという様子で口を開く。

「俺は出すなつつつたんだけどな……」

「いいじゃん、お父さん。コースケさん、見た目は悪いけど味はいから。食べてみてよ！」

満面の笑みを湛えながら小首をかしげるサラ。

手にした皿をぐつと幸助へ押し出す。

堪らずそれを受け取る幸助。

心拍数が上昇する。

ケーキを見ただけにも拘わらず。

「で……では、いただきます」

基本的にサラの料理も父親譲りでおいしいものが多い。だが、まだ腕が未熟だけにばらつきはある。特に、サラ発案の創作料理になるとその傾向が顕著だ。

幸助はその物体をフォークで小さく切り分けると、恐るおそる口へ運ぶ。

「!？」

口に入れた途端、酸っぱいベリー系の爽やかさが口に広がる。

幸助のことを考えてか、アロルドが作るケーキよりも甘さ控えめで好みの味だった。

見た目とは違う洗練された味に、幸助の顔がほころぶ。

「うん。おいしいよ！ 僕の好みの甘さだね」

「でしょ！」

「でも……」

「でも？」

「料理は見た目も大事だから、今度はそっちもうまくいくといいね」  
「はい」

幸助がサラから与えられた物体、いや、三種のベリーケーキを食べ終えた時、店の外に馬車が停まる音がした。

ギィ。

程なくして店のドアが開くと、陽光が店内に差し込む。



現れたのは、清楚な服に身を包んだ女性。  
最後の招待客、領主令嬢のアンナだ。  
ピシツとした黒服に身を包んだ執事も一緒である。

「お、お待たせいたしました。わたくしのケーキは残っていますか？」

貴族令嬢らしからぬその振る舞いに、執事は軽くため息をつく。  
だが、この店では毎度のことだ。

日々、気が張りつめる仕事をこなしているため、執事もこの場だけは大目に見るようになっている。

「あ、アンナさん。いらつしゃいませ！」

「ごきげんよう。サラさん」

迎え入れたサラに声を返すが顔は向いていない。

ケーキコーナーへ一直線である。

その様子を見た女性陣は、ライバル到来とばかり席を立つと再び自分のケーキの確保へ走る。

第二라운드의ゴングは鳴らされた。

番外編：出版記念SS「食欲の秋」（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

いよいよ今週末「かいぜん！」1巻の発売となります。  
よろしく願います。

## 1 孤独なオーナー

「もう、どうしても誰も分かってくれないの!!」

ここはマドリー王国の王都にあるレストラン。  
誰もいなくなった店内に、女性の悲痛な声が響いた。

厚みのあるテーブル。工芸品のような椅子。そして壁に掛けられた数々の絵画。

それらがこの店の格式を物語っている。

女性の名はカレン。

このレストランのオーナーだ。

夜の営業が終了し反省会を開き、従業員が帰ったところでカレンのイライラは最高潮に達した。

「言うことは聞いてくれないし、すぐに楽しようとすし。何で決められたことができないの！ 何で？ どうして？」

カレンの問いに答える者はいない。

テーブルが二十はあるかという広い店内は、静寂に包まれたまままだ。

カレンは力なく客席の一つに腰かけると、再び愚痴をこぼす。

「もう、みんなバカばっか！ バカバカバカ……… バカ」

そう言うとカレンは、はあと大きなため息をつく。

そして揺れるランプの灯を眺めながら、今までのことを思い返す。

おいしいと王都でも評判だったこの店をカレンが継いだのは今から五年前。

カレンが二十歳の時だ。

まだ経営の経験もなかったのに、店を継ぐことになったのは理由がある。

それまで店を経営していたのはカレンの祖父であった。

料理の腕はなかったものの、その人柄で有能な料理人や客からも慕われていた。

オーナーでありながら給仕長も務め、一代にして「名店」と言われるまでに育て上げた立役者である。

しかし、寄る年波には勝てなかった。

足腰を患い出勤もままならなくなったため、一線を退くことになった。

本来であればカレンの父が店を継ぐのがこの国の慣例だ。

だが、父は同じ場所に留まるのは性に合わないと、世界中を放浪しつつ行商人をしている。

今、どこにいるのかも分からない。

だから必然的に三姉妹の長女であるカレンがその大役を担うことになったのだ。

カレンは祖父からアドバイスをもらいつつ、張り切って店の経営に取り組んだ。

だが、経験のないカレンは、祖父のようにうまく立ち振る舞うことができなかった。

そして客は、今までとの違いを敏感に感じ取っていた。それが「売上」という数字に少しずつ反映されてきたのだ。

このままではいけない。

焦ったカレンは新しいことにも取り組んだ。

地方で流行っている料理があるという噂を聞けば、すぐに飛んでその味を調査し自分の店にも導入した。

酒商からとびきりのワインが入荷したと聞けば、迷わず仕入れた。何でも経験とばかり、給仕だけでなく厨房に立ってもみた。

その他にも従業員の待遇を見直したりと、その取り組みは多岐に渡る。

それが原因で、祖父と喧嘩したことも何度もあった。

だが、カレンは自分は正しい。きっと良い店になると信じ、取り組みを推し進めた。

一年が経った頃、ようやく右肩下がりがだった業績が横ばいに近づいた。

これでようやく安心できる。そう思った時、店に激震が走った。

祖父と共に歩み店の成長を支えてきた料理長が、競合店に引き抜かれてしまったのだ。

それでもカレンは何とかなると思っていた。

むしろカレンの新しい方針に反対ばかりする古い考えの人が一人いなくなり、人件費も浮いてラッキーくらいの考えでいた。

それに料理人は何人もいる。

料理長一人がいなくても調理は出来るからだ。

しかし、現実には甘くなかった。

それからというもの、売上の減少は加速してしまったのだ。

カレンの店は格式の高い高級レストランだ。  
当然グルメな客が多い。

味の微妙な変化を感じ取った客は、次に来てくれることはなかった。

それでも、一日の来店客がゼロになるという日はなかった。

祖父が築いた信頼関係がまだ残っていた客もいたからだ。

「若いのに頑張っているね」と応援してくれる客もいる。

昨日は珍しく団体の宴会があったため、それなりの売上があった。  
カレンの友人が主催する宴会だ。

何でも、店で企画したイベントが成功したらしい。

そんなめでたい宴会に自分の店を選んでもくれたことは嬉しかった。

しかし今日。

恐れていた日がとうとう訪れてしまった。

それは、売上がゼロという屈辱的な日となってしまったことだ。

今まで売上が落ちつつも前向きに頑張ってきたカレンだが、その  
脳裏に初めて「廃業」の文字がかすめた。

「はあ。あたしがやってきたことは間違いだったの？」

自分は正しいと信じ、様々なことに取り組んできた五年。

辛くとも店を守るためにはやむを得ないと、苦渋し決断したりス  
トラ。

プライベートの時間を犠牲にしても必死にやってきた。

店の定休日は自己研さんの時間に費やした。

だから休みなんて取れた記憶がない。

それくらい頑張ってきた。

その結果がこれだ。

祖父が経営に口出ししなくなっしてから久しい。

もう諦められたのかもしれない。

従業員は視点や価値観が違いすぎて話が合わない。

それどころか、やるとミーティングで決めたこともやってくれない。

友人とは久しく遊べていない。

せいぜい来店してくれた時に二言三言交わすくらいだ。

孤独だ。

孤独でしかたない。

その思いがカレンの心を締め付ける。

「こんなはずじゃなかったのに……」

悔しさと寂しさから、不意に涙が零れてきた。

いつも気丈にふるまってきたカレン。

つい弱音が口から出てしまった。

袖で涙を拭い立ち上がると、店内のランプを消して回り厨房から裏口へ抜ける。

途中、使われることのなかった食材が放つ悪臭に顔をしかめる。

季節は初夏。

食材の劣化が激しい季節だ。

食べられることなく捨てられる量も増えてきた。

来客人数に波があるため仕入量の調整も難しい。

「もう、どうしていいのか分からないよ……」

裏口を施錠すると、店に背を向けトボトボと家路につく。  
その背中から漂うのは寂しさだけだ。  
力なく揺れているカレン自慢の大きな尻尾からも哀愁が漂っている。

王都の魔道具店で冷却庫の体験会を開催した数日後。

幸助とサラは、アルフレッド・アヴィーラ伯爵が王都に構える屋敷に来ている。

魔道コンロの事故対応に関するお礼をしたいと、ランチに招待されたからだ。

市役所の役割も兼ねている領主の館と比べると建物の規模は小さなものだが、それでも幸助には縁遠い規模の屋敷だ。

高価そうな調度品に、ふかふかの絨毯が敷かれた応接室。  
まるで社長室のようだと感じる幸助。

その隣で落ち着きなさそうにしているのはサラだ。

令嬢のアンナとは幾度となく会っているが、領主と会うのは初めてとなる。

「それにしてもすごい部屋だなあ」

「そうだねコースケさん。普通はこんなところ来れないからね。私がここにいるなんて今でも信じられないよ」

「緊張してる？」

「もちろん！」

「僕も初対面の時は緊張したなあ」



そう言いながら幸助はアルフレッドと初めて対面したときのことを思い出す。

アンナに招待されて初めて行った領主の館。

思いがけずアンナと一緒にやって来た領主アルフレッド。

慌てて名刺入れを取り出そうとしたのは懐かしい思い出だ。

それから数分間、他愛もない会話をしていると応接室のドアが開いた。

現れたのはアルフレッドとアンナだ。

「こんにちは。ご無沙汰しております」

「ここここ、こんにちは！」

立ち上がり挨拶をする幸助。

それに続くサラ。

互いにあいさつを交わすと、ソファアへ腰かける。

手際よくメイドがお茶を配膳する。

夏にぴったりなく冷えたお茶だ。

「コースケ、我が領地での魔道コンロ普及に留まらず、王都での危機まで救ってもらい、感謝している」

「とんでもありません。できることをしたまでですから」

「相変わらず謙虚だね。それでも感謝してるよ。あのまま事故の対策ができていなかったら、振出しに戻る、いや、最悪は魔道具事業そのものを諦めなければならなかったからね」

使って怪我をする道具は、たとえ便利でも使いたくない。

事故が広がれば、アルフレッドの言う通りになっていた可能性も

ある。

意義のある仕事ができたと納得する幸助。

「ささやかだけど、これは私からのお礼だよ」

そう言つとアルフレッドは懐から小袋を取り出し、テーブルへ置く。

袋の中身が重たそうにジャリツと音を立てた。

中身は金貨だろうと推測する幸助。

すぐにでも受け取りたい衝動に駆られる。

だが、今回の報酬はニーナからもらえる約束だ。

お礼といつても食事会だけだろうと考えていた幸助は、その小袋を押し返す。

「こ、これはいただけません」

「遠慮はしなくてもいいんだよ」

「で、ですが、今回の仕事についてはニーナさんから報酬をいただけることになってますし……」

「それはそれ。これは僕からの気持ちだから受け取っておいてよ」

そう言われては受け取るしかない。

小躍りしたい気分を押しさえつつ、幸助は落ち着いた口調で「ありがとうございます」と言つと小袋を手取る。

ずっしりと重い。

十中八九金貨だなと判断する幸助。

それが十枚は入っている。

数ヶ月遊んで暮らせる額だ。

幸助が小袋をカバンにしまうと、令嬢のアンナが口を開く。

「サラさんも、ありがとうございます。魔道具店のアリシアさんのお話では、サラさんが冷却庫の売り方を考えてくださったと伺っております」

「は、はい！　ありがとうございます！！」

厳密には幸助の指導のもと一緒に考えたものだが、店へのプレゼンや準備はサラ主導で行った。

体験イベント以来、冷却庫の予約も順調に重なっている。

これから更に暑くなる季節だ。

量産体制が整うのが待ち遠しい。

「紋章の件もよく考えついたものだよ」

「貴族様の紋章を使うのは失礼にあたるかなと悩んだのですが、快諾してくださりありがとうございます」

「もちろん。それに事故の対応から紋章の使用まで、コースケの働きは国王陛下も大注目だったよ」

アルフレッドが今、王都に滞在しているのは、領主会議のためだ。マドリー王国では、定期的に国中の主要な領主が一堂に会し、領地運営についての会議を執り行っている。もちろん国王であるマドリー十三世も参加している。

突然アルフレッドの口から飛び出した「国王」という言葉に幸助は固まる。

国王といえばもちろん国のトップである。

自分の活動がそこまで届いていたとは想像だにしていなかったのだ。

「うん？　どうしたの？」

「……国王陛下……ですか？」

「そつだよ。魔道具事業は最初から陛下に注目していただいていたからね」

「は……はあ」

「我が領地でのコンロの普及から今日までのこと、全て陛下はご存知だよ」

「そつなんですか」

「国の主要産業としての成長を期待されてるんだ」

そつ言つとアルフレッドは胸を張る。

当初は成り行きを心配されていた魔道具事業。

事業停止直前まで追い込まれていた時期もあった。

だが、今では事業は順調そのもの。

だから領主会議でも鼻が高いのだ。

町おこしのために始めた事業というのはアルフレッドから聞いていた幸助。

だが、まさかそれほどの規模で行われていたとは思っていてもいなかった。

改めて自分のしていることに責任を感じる。

「責任重大ですね」

「もちろん。これからもお世話になりたいから、よろしく頼むね」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

そつ言いながら頭を下げる幸助。

魔道具事業は幸助にとつても愛着があるし、関わりも深い。

もちろん今後もずっと関わっていききたい事業の筆頭だ。

「それに、コースケさん。今年のマドリー褒章にコースケさんが推薦されてるのですよ」

そう言つとアンナはにこりと微笑む。  
幸助はというと、間の抜けた表情を浮かべている。  
マドリー褒章と言われてもピンと来ない。  
だが、その価値を十分に理解しているサラが声を上げる。

「すごいよ！ コースケさん！！」  
「えっと、サラ。マドリー褒章って何？」  
「えっ、知らないの？ 国王陛下から表彰してもらえるんだよ」  
「はい。サラさんの仰る通りです。国王陛下が直々に、その年の功  
労者に対し褒章を授けられるのです」

アンナの説明を聞き、啞然とする幸助。

「そ、そこまでですか……」  
「もちろん。陛下の中では、お隣フレン王国からの経済攻撃をはね  
退けたと評判だからね」

「……」  
「偽魔石が流通すると困るところだったんだよ。事故だけじゃなくて  
経済的にも」

「……」  
「ちなみに私とニーナも一緒に候補に挙がってるんだ。毎年何十人  
も受章されるから気張らなくてもいいよ」  
「は、はい。ありがとうございます」

言葉とは裏腹に、浮かない顔をする幸助。  
受章する可能性があるということは素直に嬉しいことである。  
だが、強烈に引っかかることがあった。

それは、意図せずフレン王国を敵に回した可能性があることだ。

この世界で生きていくと決めた幸助。

だが、心のどこかで日本に帰る可能性があるのではと思っていた。時が経てば召喚だけではなく送還魔法も見出されるかもしれない。だがそれもこれも、幸助を召喚したフレン王国の魔法研究者がいてこそだ。

フレン王国と対立してしまっただけでは、たとえ送還魔法が見つかったとしても、日本へ還してもらえない可能性は限りなく低くなるだろう。

だが、まだ敵に回したとは限らない。

たったこれだけのことで敵に回したただなんて考えすぎだと幸助は自分に言い聞かせる。

そもそも、送還魔法なんて見つからない可能性もある。

それに受章だって、可能性があるだけで決まったわけではない。少しのことを大げさにしているだけに違いはない。

様々なことが幸助の頭を駆け巡る。

幸助が混乱していると、使用人の一人が近づき、アルフレッドへ声をかける。

「伯爵。お食事の用意ができました」

「そうか。では、場所を移して食事会にしよう。今日は飛び切りの食材があるからね」

もやもやした気分を抱えたまま、幸助は使用人に促されその場を後にする。

## 1 孤独なオーナー（後書き）

お読みくださりありがとうございます。

みなさんの応援のおかげで本日、無事「かいぜん！」2巻の発売日を迎えることができました。

## 2・異世界で生きる目的

領主アルフレッドとの食事が終わると、幸助とサラは馬車で魔道具店へ向かう。

冷却庫の予約状況やその後の進捗を確かめるためだ。

「コースケさん、料理、すっごくおいしかったね！」

「うん。やっぱり貴族様は違うよね。またあの味が楽しめるとは思わなかったよ」

「普段食べられないもんね」

二人をもてなした料理は、海鮮料理のフルコースだった。

王都はアヴィーラ伯爵領と同じく内陸部に位置するため、保存加工されていない海鮮料理の希少価値が高い。

普段食べられないものを提供するのが、この国の最上級のもてなしのようだ。

だが令嬢アナナの言葉では、高性能な冷却庫が出来たため、運搬に氷魔法を使える者の手を借りなくてもよくなった。

屋敷での冷凍保存もできる。

だから以前よりも手軽になったとのことだ。

「いずれ冷却庫を活用して、海の幸を販売する商人が出てくるかもしれないね」

「でもここまで運ぶのに魔石をいっぱい使うから、高くなりそうだよね」

「だね。貴族とかお金持ち向けになるだろうね。僕たちには縁のないことだよ」



「それもそうだね」

幸助のカバンの中には、アルフレッドから受け取った金貨十枚が入っている。

やはり報酬は銀貨でなく金貨だった。

今まで関わった仕事で相応の報酬は得ている幸助。

一般市民と比べたら十二分に稼いでいる。

だが、元はしがないサラリーマン。

食事も高級レストランより赤提灯の方が落ち着くタイプだ。

「ねえ、コースケさん」

「うん、何？」

「褒章が受けられるかもしれないってのは嬉しくなかったの？」

「えっ……」

突然話題が変わり、戸惑う幸助。

領主アルフレッドとの会話では、一度に様々な情報をもたらされ混乱していた。

特にフレン王国を意図せず敵に回してしまった可能性があることは大きかった。

だが、それをサラへ話す訳にはいかない。

この世界に召喚されたことは、諸条件と引き換えに内密にすることをになっている。

それについてさっき幸助の中でも褒章の件については折り合いを付けた。

大きな流れに乗せられているのだから、それに身を任せるしかないと決めたのだ。

「そりや嬉しいに決まってるよ」

「でも難しそうな顔をしてたよ」

「そう？ まだ受章できるって決まってるからね。決まったらばつと喜べるのかも」

「ほんとに？」

「ほんとに」

「そっか。ならいいんだけど……」

気まずい空気が流れたところで馬車が停まった。

魔道具店に着いたようだ。

ドアを開けた御者に促され、二人は馬車を降りる。

魔道具店へ入ると、店内には数名の客とその接客をしている従業員の姿があった。

それぞれの客のテーブルには汗をかいたグラスが置かれている。イベントの開催日のような大掛かりな仕掛けはしていないが、冷たい飲み物のサービスは今でも続けている。

「コースケさんにサラさん。こんにちは」

店の奥から透き通るような声が聞こえてきた。

姿を現したのはアリシアだ。

紺髪にブルーの制服が今日もよく似合っている。

「こんにちは、アリシアさん」

「こんにちは！」

「お待ちしております。どうぞ、こちらへお掛けください」

アリシアに促され、幸助とサラは空いてる席に着く。

「お店、順調そうですね」

「体験会の翌日以降も、こうして毎日お客さんが来てくださるので  
す」

笑顔でアリシアはそう返事した。

事故が起きた時とは比ぶべくもない笑顔だ。

この笑顔のためなら、また大変な仕事も頑張れると感じる幸助。

「それは良かったです。それで、これからのことですが」

それから三人は今後の予定などを話す。

量産品のことや紋章の入った魔石が話題の中心だ。

そして情報交換も十分に行い幸助が切り上げようとした時、アリ  
シアが真剣な表情になり幸助へ視線を送る。

「コースケさん。全く別の相談をよろしいでしょうか？」

「はい。構いませんよ」

「冷却庫の体験会をした後に皆さんで行ったレストランのこと、覚  
えてらっしゃいますか？」

「もちろん」

打ち上げをしたのはつい先日のことだ。

幸助はその時のことを思い返す。

店の格式は高かったが、残念ながら味の印象は残っていない。

次に行くことはないなと感じていた店だ。

「レストランのオーナー、カレンさんは私の友人なのですが……」

それからアリシアは、カレンから聞いた店の状況を幸助へ説明す

る。

若くして祖父から店を継いだこと。

身を粉にして働いているのに業績は下がる一方ということなどだ。

「 といった具合で、とても困っている様子でした。魔道具店の調子がよさそうだからと相談してくださったのですが、私ではどうしたらよいのか分からず……。コースケさん、力になっていただけないでしょうか? 」

アリシアからの相談とは、改善案件の紹介であった。

本来であれば久しぶりの紹介に喜ぶべき状況だが、何故か心が湧き上がらない幸助。

この話を請けるべきか一瞬悩む。

しかし、魔道具店の仕事が落ち着いた今、幸助は特にすることがない。

そろそろアヴィーラ伯爵領へ帰った方がいいとは感じてはいたが、それは話を聞いてから決めてもよい。

そう考えた幸助は、アリシアへ返事をする。

「分かりました。いちど話を聞いてきますね」

「ありがとうございます！ コースケさんに相談するということは伝えてありますので、どうぞよろしくお願いいたします」

二人は魔道具店を後にすると、早速問題のレストランへ向かう。

「サラ、あの店どうだった? 」

「何だかちぐはぐだったよね」

「そうそう。そういえばそうだったね」

高級レストランにも拘わらず、庶民の味の代表格である串焼きもあつたことを思い出す幸助。

価格帯も幅広く、高いものは一皿で大銀貨一枚以上のものもあつた。

日本でいえば肉じゃがと数万円の霜降りステーキが同じメニューに並んでいるようなものだ。

「また行きたいとは思わなかったなあ」

「だよねえ……」

サラも幸助と同じ感想を抱いていたようだ。

もつとも、二人ともアロルドの味が基準だ。

「おいしい」の基準が王都民とは違う可能性もある。

二人の味覚だけで判断してはいけない。

「もし流行ってない原因が味だったら困ったなあ」

「えっ、どうして？」

「味の改善は僕の領域じゃないからね」

「お父さんの新メニューを作ったりしたのに」

「僕の食べたい料理をリクエストしただけだからね。味を作ったのはアロルドさんだよ」

幸助が今まで改善してきた店は、味や商品、技術力が高いというのが大前提だった。

商品の提案はしたことがあるものの、開発などには関わっていない。

だがアラノの靴屋のように、改善活動の中で店の強みが見つかる

こともある。

魔道具店メンバーとの打ち上げで食べたものは、比較的安いメニューばかりだった。

高額品は価格相応に美味しいのかもしれないと幸助は考える。

「ま、話を聞いてみないと何とも言えないから、考えるのはそれからしよ」

「うん！」

それから歩くこと約二十分。

二人は目的の店へ到着した。

時刻はもうすぐで夕方。

夜の営業が始まる前だ。

幸助はドアを開けると店へ入る。

ここに来るのは二度目だ。

入り組んだ構造になっているが、迷うことなく奥へ進む二人。

待合室のようになっていいる空間を抜けるとバーカウンターがあり、その先に客席が広がっている。

幸助は、カウンターの奥で作業をしている女性へ声をかける。

「あの、すみません」

「あつ、いらっしやいませ！ 営業はあと一時間ほど先となりますが……」

「えっと、食事ではなくてですね、アリシアさんの紹介で来た幸助といますけど、カレンさんはお見えでしょうか？」

「はい。少々お待ちください」

そう言い残すと女性は店の奥へと姿を消す。

こんな立派な店のオーナーはどんな人だろうと考えながら待つこ

と少々。

先ほど声をかけた女性に連れられ、別の女性が店の奥からやって来た。

「おまたせ。あたしがカレンだよ」

幸助は現れた女性の姿を窺う。

黒を基調としたタイトスカートタイプのウエイトレス服に蝶ネクタイ。

オレンジ色のロングヘアに、ツンと立った耳。

パロと同じく獣人のようだ。

（おっ、犬耳ちゃんだ。ん？ でも、ちょっと違うぞ）

獣人自体は既に何人も目にしてきた幸助。

だからそれだけであれば、もう何も感じることはない。

だが、今まで会ってきた獣人とは決定的に違うことがあった。

女性の背後には、チラチラと見え隠れするフサフサのものがある。そう。尻尾だ。

カレンは大きく立派な尻尾を持っていた。

それは狐獣人の特徴でもある。

長さは床に届きそうなくらいだ。

否が応でも幸助の視線はそこに吸い込まれる。

「ど……どうした？」

「あっ、いや、すみません。ちょっとぼうつとしてました」

人は初対面の印象が大切だ。

「人は見た目が九割」なんて言う人もいる。

幸助のこの行動は減点だ。

尻尾を見ていたことを悟られまいと笑顔で自己紹介をする。

「こんにちは、アリシアさんから紹介していただいた幸助です」

「サラです！」

「開店前の忙しい時間に来ちゃいましたけど、大丈夫ですか？ 忙しければまた後日にしますが……」

「スタッフもいるし、あたしが店にいない日も多いから平気だよ。それに残念ながら、お客さんなんてほとんど来てくれないしね」

自虐的なことを言いつつも笑顔を作るカレン。

その表情からは店が傾いているなど微塵も感じられない。

「では、少しだけお話をさせて頂いてもよろしいですか？」

「もちろん。コースケのこと待ってたからね。こっちに来て！」

そう言つとカレンはくるっと回れ右をする。

床に届きそうなほどの長さのある尻尾が、フワツと浮き上がる。

正面からでは気づかなかつたが、尻尾の直径が太いところではウエストほどもあり、その先端は白くなっていた。

初めて出会うその姿に興味を隠し切れない幸助。

奥まった場所にある個室へ通されるまで、その視線は尻尾に釘付けだった。

「従業員たちに聞かれたくない話だからね」

そう言いつつ通されたのは、十人以上は会食ができる大きなテーブルが置かれた部屋だ。



そのテーブルの端の席にカレンと向かい合って腰かけると、幸助は始める。

「早速ですけど……アリシアさんから伺いましたが、お店、大変な状況なんですよってね」

「そうなんだ。売上はずっと下がるばかりでね。何をやっても効果なし」

「いろいろ取り組んではきたんですよ。どんなことをされてきたんですか？」

「地方の名物料理を取り入れたり手軽な価格のメニューを入れてみたり。あとは腕のいい料理人を雇ったりスタッフの研修もしたし、客引きに集客を頼んだりもしたよ」

幸助の想像以上にカレンは努力していた。

今まで携わった店では技術や商品ばかりで営業面が手つかずという店が多かったが、カレンの店はそうではなかった。

「すごくバランス良く経営に取り組んできたんですね。僕は不器用でそんな行動できませんからすごいと思います」

「そ………そうか………」

幸助の言葉に恥ずかしそうに斜め下に視線をやるカレン。

冒険者ランディと同様、褒められるのは慣れていないようだ。

だが、現状がこうである以上、その努力の方向が違っていたのかもしれないと考える幸助。

「でも、そんなに頑張ったのに状況は良くならなかったんですね」

「そう。新しいことに取り組みつて従業員とのミーティングで決めても、それが実行されないことがしょっちゅうだし。実行されてもお客さんの反応がなかったりです」

「そうですか……」

「あ、そうだ。そういえばコースケも一度来てくれたんでしょ。どうだった、ウチの店？」

「えっと……」

正直に伝えてよいものか、ぼかした方がいいのか回答に悩む幸助。少し間が空くと、幸助の答えを待たずカレンが苦笑しながら続ける。

「いいんだよ。その表情だけで何となく分かったから。他のお客さんだってそうだしね」

そう言うときカレンは小さなため息をつく。

元気いっぱいだった表情に初めて影が差す。

「先代が経営されてた頃はとうだったんですか？」

「それはもう毎日賑やかだったよ。じいちゃんはね、お客さんの顔と名前をほとんど覚えてたんだ。それだけじゃなくて食べ物好き嫌いも覚えててさ。凄いでしょ」

カレンの話に黙って頷く幸助。

ホテルのドアパーソンにも常連の顔と名前をすべて覚えている人がいたなと思いつく。

とても幸助にはできない芸当だ。

「じいちゃんが足腰悪くしてさ、あたしが店を継いだんだ。みんなあたしもじいちゃんと同じように切り盛りしてくれるって期待されたんだ。でも、あたしはあたし。そんなことはできなかったし、店にいないじいちゃんにあれこれ指示されるのもイヤでたまらなかつたんだ。何だか決められた道をただ進むだけって感じがしてね。だ

から……」

「自分のやり方で新しい道を切り開こうとしたんですね」

「分かってくれるか？」

「もちろん。カレンさんは頑張ってきたと思いますよ」

幸助の言葉に、カレンの表情が少しだけ明るくなる。

血がつながっているとはいえ、先代とカレンとはまったく別の人格を持った人間だ。

コピーロボットのよう同じことはできるはずもない。

「ですが、自分で道を切り開いていくのは大変でしたよね。頼りにしていた先代の右腕とか、他の従業員もたくさん入れ替わっちゃったんじゃないですか？」

幸助の言葉に驚きの表情を浮かべるカレン。

そしてすぐに俯くと、力なくつぶやく。

「な……何でそんなことまで分かるんだよお」

「カレンさんと同じく、商売を継いで苦労した人を見てきましたからね。今の状況は、先代の商売を継いだ人が陥りやすい状況なんです」

幸助はサラリーマン時代、経営者が親から子の代へ替わる事業継承そのものの取り組みはしたことがなかった。

だが、事業継承後ある程度時間が経過し、救いの手を求めてきた経営者には何人も会ってきたし、改善もしてきた。

だから二代目、三代目が陥りやすいパターンはよく知っている。

「お店を継いでから今までのこと、詳しく教えて頂いてもよろしいですか？」

幸助に促され、カレンは今までのことを説明する。

店を継いでからすぐに、じわじわと売上が下がり始めたこと。

一年くらい経った頃、料理長が別の店に引き抜かれたこと。

それからというもの、客だけでなく従業員の流出も止まらなかったこと。

先代が経営している頃から今も勤めているのは、たった二人であること。

そして今までに行った取り組みの数々……。

「 という訳なんだ。もう、何のためにやってるのか分からなくなってきたやつだよ……。こんな店でも、何とかなるのかな……。 」

胸の前に回した自分の尻尾を抱きかかえながら、そう弱々しく言うカレン。語尾がかすれて聞き取れないくらいだ。

その話を聞いた幸助は悩み込む。

（これは難しそうだぞ……。継いで五年でこの状況ってことは古くからの常連はほとんどいなさそうだし、恐らく客離れの原因はあれだろうからな。腰を据えて時間をかけないと改善できそうにないぞ）

難しそうな案件という判断をした幸助。

どうしようか悩んでいると、サラが幸助へ話しかける。

「 コースケさん、何とかならないのかなあ 」

「 うーん……。 」

腕を組み悩み込む幸助。

いつもであれば即決で引き受けるところだが、何か引っかかりそれができない。

下を向き黙ること十数秒。

沈黙に耐えかねたカレンが声を上げる。

「頼む！　今まで私のすべてををつぎ込んでやってきたんだ。もし廃業しないといけなくなったら、何のためにやって来たか分からなくなっちゃうよ。コースケが忙しい人ってのは知ってる。でも、コースケと出会ったこのチャンスを逃したら………。このチャンスを逃したら本当にダメかもしれないんだ……」

懇願ともいえる言葉を発するとカレンは俯く。

状況はかなり逼迫しているようだ。

それを見かねたサラもカレンに続く。

「そうだよコースケさん。困った人の力になるのが私たちの仕事でしょー！」

「困った人の力になる」。

サラの言葉が幸助の頭にガツンと響く。

（そうだった！　僕は困った経営者の力になりたいからこの仕事をするって決めたのに、難しそうだからって逃げてちゃダメだったよ。商売を投げ出した人ならまだしも、カレンさんは頑張ってるじゃないか。そうだ。これはカレンさんのためだけでなく僕のためにもやるべきだ！）

領主の屋敷での出来事が引っかかり、消極的になってたのかもしれない。

将来のことなど神のみぞ知る。

だから今できることに全力で取り組みればいいのだ。

自分がこの世界で生きる目的を再確認した幸助の目に、いつもの自信が戻ってきた。

「カレンさん」

幸助の言葉で顔を上げるカレン。

二人の視線が交差すると、いつものセリフを高らかに宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

### 3・繁盛店になるために

幸助の宣言を聞きパツと笑顔が咲くサラ。  
対してカレンは、きよとんとした表情を浮かべている。

幸助は貴族からの依頼もこなしていると聞いていたカレン。  
忙しいに決まっている。だから請けてもらえる確率はゼロに近い  
と思っていたのだ。

実際の幸助は、魔道具店の案件も落ち着き暇人になる寸前だった  
のだが。

「い……いいのか？」

「もちろんです、カレンさん」

「お客さん、一人も来ない日もあるんだよ。それでも手遅れ……で  
はないってこと？」

相当なテコ入れが必要だと幸助は感じている。

だが、経営者に改善したいという意味がある以上、何らかの手段  
があるはずだ。

「今、カレンさんが置かれている状況は厳しいものです」

「うん……」

「ですが、カレンさんの想いはよく分かりました。僕もその想いと  
今までの努力を無駄にたくありません。無駄な努力なんて絶対に  
ないんです。今までの努力はきつとこれからの役に立ちます。だか  
ら、一緒に頑張りましょう！」

無駄な努力などない。

結果がどうであれ、全ての経験は次に活かせるものだ。  
本人が諦めさえしなければ。  
幸助はそう信じている。

幸助自身、子どもの頃の家業の手伝い、学生時代のアルバイト、そして徹夜続きのサラリーマン時代。これらがあったからこそ今の仕事ができているのだ。

「あ……ありがとう………」

カレンはホツとした表情を浮かべる。

自分の気持ちを理解してくれる人が誰もいない環境で、突き進んできた五年。

もうダメかもしれないと諦めかけた時、初めて自分の気持ちに共感してくれる人に出会えた。

暖かいものが心の中に満たされていくのを感じるカレン。  
小さな声でポロツと言葉を漏らす。

「何だか嬉しいなあ」

「どうしました？」

「あ、いや。何でもない。ただの独り言だよ」

「そうですか。では、早速ですが具体的な話に」

「あっ、ごめん。ちょっと待ってて」

幸助の言葉を遮ると、もう開店の時間だからと言葉を残しカレンは個室から外へ出て行った。

ドアが閉まると、サラは幸助へ笑顔を向ける。

「やっぱりコースケさんはこうでなくちゃ」



「ありがとう、サラ。やっぱり僕、ちょっとおかしかつたのかも」  
「うーん。何で今日のコースケさんはいつもと違うんだろう」  
「そろそろアロルドさんの味が恋しくなったな……って」  
「嘘っばいなあ。何か隠し事をしてるんじゃない？」

そう言つとサラは真実を見抜くべく、キリツとしたその碧い瞳で幸助を捉える。

「隠し事って？」

「えつとねえ、実は……」

「実は？」

「フレン王国から追われる身だったりして」

声を低くし、そう言つサラ。

フレン王国という言葉で一瞬ヒヤツとした幸助だが、サラの予想が外れたことでホツとする。

「あはは、それはないよ」

「そっか。そうだよね、よかった。なら、おいしいお菓子を隠してるとか？」

そう言つと今度は悪戯っばい表情をする。

その姿にドキツとする幸助。

サラはこの秋で十六歳になる。

顔も仕草も出会った頃と比べ、大人っばさを増してきた。

「し、してないよ」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

昼間と似たようなやり取りを交わす二人。

じーっと幸助の目を見つつ「ほんとに？」と繰り返しながら顔を近づけるサラ。

堪らず幸助が視線を逸らそうとした時、お茶を手にしたカレンが戻ってきた。

「お待ちせつ……て、あれ。お邪魔だったかな？」

「いえいえ、全然！」

サラは慌てて幸助から離れると、高速でブンブンと手を振り全力で否定する。

その顔は真つ赤だ。

「え、えつと……お店の営業は大丈夫でしたか？」

「忙しくなったら声をかけてもらうようにしたから大丈夫だよ」

「そうですか。では早速始めましょう」

カレンの店はレストランだ。

レストランに限らずではあるが、繁盛店になるには商品力が高いことが大前提である。

しかし残念なことに、幸助が見聞きした範囲では商品力は高いと感じられなかった。

まずはそれを解決しなければならない。

サラがパタパタと手で顔を仰いでいるのを横目に、カレンが座るのを待つと幸助は始める。

「まずメニューについて確認させてください」

「うん、いいよ」

「メニューを工夫してるという話は伺いました。それで質問なんです、新しいメニューは何を基準に決めてきましたか？」

「今は国中の美味しいものを揃えるって決めてやってるんだ。ちなみに三カ月前にはパスタを二十種類揃えて、その前は色んな魔物の肉を取り揃えてもみたよ」

そう即答するカレン。

この言葉で幸助はメニューのちぐはぐさの原因を把握する。

品揃えの軸はあったものの、その軸がずれていた。

そしてその軸はコロコロ変わってもいた。

「カレンさんの店は高級レストランですよね」

「うん、そうだよ」

「それなのに、屋台でも食べられるような串焼きもメニューに入ってたました」

「いや、そうでもないんだ。あれはブルゴ地方独特の味付けがされてて、王都で食べられるのはウチだけなんだ。かなり美味しいよ」

自信を持ってカレンはそう答えた。

やはり努力はしているものの、その方向がずれているように感じる幸助。

「確かにおいしいのかもありません。ですが、店の格式にはふさわしくないような気がします。他にも屋台でも売ってそうな料理もありましたし」

「そうかもしれないが、今までのメニューが受け入れられなくなっただからね。あれこれ工夫してる最中なんだ。これでも多少は今までと違うお客さんも来てくれるようになったし」

「その工夫の結果、今があるってことですね」

「うっ、ま、それは違くないが……」

幸助のストレートな言葉に、尻尾の力が抜けるカレン。

背中ではピンとしていた尻尾が、だらんと床へ垂れる。

「ではカレンさん。今、常連のお客さんはどのくらいいますか？」

「あまり把握してないが……」

そう言うつと客の顔を思い出しつつ指を折り始めるカレン。

両手の指がすべて折れる前に、その動きが止まってしまった。

想像以上に厳しい数字を自分で確認し、苦笑しながらカレンは続ける。

「常連つて言えるお客さんは……かなり減っちゃったみたいだよ」

「では今来てくれるお客さんの多くが、初めて来店するお客さんつてことですか？」

「そうなるのかな。ま、その人数もお察しの通りだけどね」

カレンの店にはリピーターがごく少数しかおらず、新規顧客で何とか回している状況だった。

何度も繰り返し来店してくれる顧客であるリピーターの存在は大切だ。

リピーターが増えなければ、常に新規客を追い続けなければならなくなる。

それではいずれ経営は行き詰まる。

なぜなら、新規顧客を獲得するには既存客に再来店してもらつよりも多くのコストがかかるからだ。七倍のコストがかかると言う専門家もいる。

もっともこれはメールやDMを打つことができる日本での話なので、ここ異世界でそのまま通用する話ではない。

だが、新規客獲得のコストが高いことに変わりはない。

たとえばチラシを撒くなりして客が来店してくれたとする。チラシに一万円をかけて来店が一組だった場合、一回の食事でのコストは回収できないだろう。

その客が次に来店してくれなければチラシは赤字だ。

その反面、「おいしかったからまた来たよ」と言っただけで来たならば、その客の集客にかかったコストはゼロといえる。

だからこそ、リピーターが増えるための工夫をしなければならぬ。

そのために、まずは店の方向性をしっかりと決めなければならぬと判断した幸助。

リピーターの重要性をカレンへ説明すると、問題の本質へ切り込む。

「カレンさん、常連さんの存在が大切ってこと、分かっていただけでした？」

「うん。痛いほど理解できたよ」

「それでカレンさんがこれだけの工夫してるにも拘らず、常連さんが増えないのは何でだと思います？」

「はは。それが分かってたらこんな状況になってないよ」

そう即答するカレン。

普段の幸助であればここから少しずつ質問をして、相手から正解の言葉を引き出す。

だがカレンはあれこれ挑戦をして工夫を凝らしてその果てに、どうしよもなくなり幸助を頼っている状況だ。

だからそれも酷だと判断し、そのまま答えを説明する。

「それはですね」

「それは……？」

「メニューと空間の一貫性がないからです」

「一貫性？」

きよとんとした表情でそう答えたカレン。

サラもピンときていないようだ。ハテナマークを浮かべている。

「はい。この空間が居心地のいい人とそうでない人がいるんです。

串焼きをよく食べて、酒場の喧騒が好きな人にとっては、この空間は居心地があまり良くないんです。逆に普段から高品質なものに触れている人にとっては、居心地の良い空間のはずです」

そう言うとき幸助は室内を見渡す。

壁に掲げられた絵画に、高そうな骨董品の数々。

なんでも鑑 団に部屋ごと鑑定してもらったらどれだけの金額になるのだろうか、余計なことを考える。

「それを踏まえて、どうしたらいいと思いますか？」

「うーん、どちらかというと酒場向けのメニューを増やしてるからな……。店を酒場っぽく改装するか」

「それはそれで多少は効果があるかもしれませんが、ですが、お店の改装にはお金がかかります。それにこの店の立地は富裕な方が多く住んでる地域です」

「なら、やっぱりメニューを考え直すしかないってことか……」

そう言うときカレンは小さなため息をつく。

無理もない。メニューについては今までさんざん工夫してきた。それにも拘わらず、結果が出なかったのだから。

「その通りです。味、空間、接客。これらが統一されてこそ、『次

にまた来たい』と思ってももらえる店になるんです」

空間を構成する要素には、内装以外にも照明の明るさや香り、BGMなども含まれる。

BGMに関しては選曲だけでなく音量も大切な要素となる、奥の深い世界だ。

「なるほど、そういうことなのか……。専門家から言われるとそんな気がしてきたよ。でも、メニューなんてできそうなことはやり尽くしたよ。今いる料理人は当てにならないし、もうアイデアも湧かないし……」

「そこなんですよね、問題は……」

そう言うとうーんと唸りながら腕を組む幸助。

「どうしたの、コースケさん？」

「僕には高級店のメニューなんて考えられないからどうしようかなって思ってたさ」

「それならお父さんに相談してみたらどうかかな？」

「アロルドさんに？」

アロルドの店は市民街にある。

価格はやや高めのものもあるが高級店ではない。

それが最適な策なのか幸助は一瞬悩む。

だが、貴族の子女が来店するようにもなったアロルドの店ならば、高級レストランにふさわしい味は既に出せているのかもしれない。それに修行中、ローマリアン帝国では宮廷料理人にならないかと誘いを受けたと聞いたこともある。

アロルドなら何とかしてくれるかもしれない。

幸助はそう思い直す。

「うん。それがいいかもね。カレンさん、アヴィーラ伯爵領に『アロルドの Pasta 亭』って Pasta レストランがあるんです」

「あつ、それ聞いたことあるよ！ カルボナーラって変わった Pasta がある店だよな？」

アロルドの店の名は王都まで伝わっていたようだ。

思いがけずもたらされた事実にはサラの顔がパツと明るくなる。

「知ってるんですね。その店、私のお父さんの店なんです！」

「へえ、すごいじゃないか！ レストラン関係者の間ではおいしい店って有名だよ。名前を聞いたのはつい最近だから、まだあたしは食べに行けてないんだけどね」

「その店主アロルドさんのところへ、厨房の方を修行に出すことは可能ですか？ 貴族の令嬢さんもお忍びで食べに来てくるくらいの味なんですよ。きっと王都でも通用するはずですよ」

アロルドが受け入れると言ってくれなければ成り立たない話ではある。

だがきつとアロルドなら受け入れてくれるだろうという根拠のない自信を持つ幸助。

「その提案は嬉しいが、残念なことに厨房にはもう二人しかいないんだ。だから一人でも抜けるのはキツイかな。こんなんでもたまには忙しくなることもあるからね」

「そうですね……」

さすがにアロルドに店を空けてもらってまで王都へ来てもらうことはできない。



いい手はないものかと幸助が考えていると、何かに気付いたようにカレンが口を開く。

「あ、でも待つてよ。店に来た時にコースケが声をかけた女の子いたでしょ。もともと厨房にいたけど今はウエイトレスをしてもらってるんだ。調理の仕事が減ったけど首を切るのが忍びなくなってるね。その子、セリカって言うんだけどちょっと聞いてみるよ」

そう言うときカレンは待つてねと言い残し部屋を出る。

隣町とはいえ片道一週間の場所だ。

修業も含めれば相当な期間王都を離れなければならない。

本人の承諾を得るのは大変だろう。幸助がそう思っていたところ、一分と経たずしてカレンが戻ってきた。

「行くの、大丈夫だって！」

「えっ、そうなんですか！？ 即決ですね」

「店のためになるならって言うてくれたよ」

「そうと決まれば早速今後の予定を決めちゃいましょう。カレンさん、何ヶ月以内に黒字化を達成したいという目標はありますか？」

幸助の質問は、言い換えれば廃業まであと何カ月かの猶予があるかどうかということだ。

この回答次第で幸助達の行動は大きく変わる。

「実はね、今すぐにも黒字化しないとまずい状況なんだ。先代がため込んだこの調度品や骨董品の数々が無かったら、もう店は畳んでたところだよ」

「えっ！？ そこまでの状況だったんですか……」

カレンの店は想像よりも逼迫している状況だった。

調度品だつて数に限りがある。

それに何より、コツコツと増やしていったらう祖父が悲しむはずだ。

メニュー以外にもやるべきことはたくさんある。

一刻も早く動かねばと危機感を感じた幸助は、サラへ提案をする。

「サラ。今回は二手に分かれよう。サラとセリカさんだけでアロルドさんのところに行つてもらえないかな？」

「えつ、コースケさんは一緒に帰らないの？」

「最初はそう思つてただけど、状況も逼迫してるしメニュー以外のことでも取り組まないといけないことがあるんだ。サラなら状況を伝えることもできるしアロルドさんの説得もできるでしょ。だから任せてもいいかな？」

本当は幸助と一緒にアヴィーラ伯爵領へ帰りたかつたサラ。

だが、我儘ばかりも言つてられない。

それに何より幸助の足手まといにはなりたくない。

だから笑顔で幸助の言葉に応える。

「そつか……。うん。分かつたよ！」

「助かるよサラ。頼りになるから嬉しいよ」

「えへへ。ありがと！」

その後、細かな条件などを詰めると軽い食事を取り、二人は店を後にする。

#### 4・活躍する魔道具

「コースケさん、行ってきます！」

「頼んだよ、サラ。アロルドさんにもよろしく」

「うん！」

カレンの店を訪れてから三日後。

サラとセリカは魔道具店の荷馬車に便乗し、アヴィーラ伯爵領へ向かった。

片道一週間の旅路は、これが一番安心だと幸助がアリシアへ手配したものだ。

それからの幸助は、形の揃った紙を調達したり酒商との打ち合わせをしたりと、毎日を忙しく過ごしていた。

日が傾くと幸助は日課となったカレンのレストランへ、夕食を食べに行く。

いつものバーカウンターへ腰かけると、顔なじみとなったウェイトレスが幸助へ声をかける。

「コースケさん、本日もお疲れ様です。例のお飲み物、飲み頃となりましたがいかがでしょう？」

「えっ、もうできたんですか！？ もちろんそれをお願いします！」

「かしこまりました。今日のメイン料理は、メニューにはない特別な料理もご提供できます。よろしければいかがですか？ 料理長の特製です」

味見しましたがおいしかったですよ、とウェイトレスは笑顔で続

ける。

おいしいという言葉は敏感に反応する。

「へえ、どんな料理ですか？」

「フィオツポのクエンカ煮です」

「えっ？」

「フィオツポの肉をクエンカ風に煮たものです」

「……………」

まったく聞いたことのない単語に固まる幸助。

幸助に食べ物の好き嫌いはない。

メニュー構成はちぐはぐだが、それぞれ単品で見るとそれなりの味のものが多かった。

一瞬悩むが、好奇心が幸助の背中を押す。

人生何事もチャレンジだ。

「では、それをください。どんな料理か楽しみですよ」

「かしこまりました」

ウェイトレスが奥へオーダーを通しに行くと、幸助は広い店内を見渡す。

まだ時間が早いため、幸助以外に来店客はいない。

ここ数日間の来店客数は、一組から三組程度だ。

日によりばらつきが大きい。

毎日こうしてカレンの店に通っているのには二つの目的がある。

来店客の動向を見ることが表向き目的。

従業員達とコミュニケーションを取り、カレンの口から聞くことのできない実態を調べるのが裏の目的だ。

雑多なメニューの中でもおいしかった料理を褒めたり、気を使いながら雑談をすること数日間。

メニューに載っていない料理を作ってもらえるくらいに関係になると、従業員たちの本音が少しずつ露わになってきた。

目新しいことをどんどん取り入れコロコロと変わるカレンの方針。それに振り回される従業員たち。

しかしどれだけ行動しても売上アップという成果にはつながらなかった。

当然のごとく給料は下がり続ける。

新しい取り組みはもはや従業員に取って面倒以外の何物でもなかったのだ。

だから幸助の登場に「また余計な仕事が増えるのか」という空気が流れたようだ。

カレンの取り得は、判断の速さや行動の身軽さだ。

アロルドの味を取り入れることも即決した。

その時は、良いと思ったことはすぐに決められると好感を持った幸助だったが、それが悪い方向に働いてしまっていたことに気付く。

だが、希望も見えてきた。

先代の頃より勤めている現料理長から、何とかして店を立て直してほしいと懇願されたのだ。

カレンは料理人は当てにならないと言っていたが、店のことを真剣に考えている従業員もいたことに幸助は安堵した。

もちろんモチベーションの下がりきった従業員もいる。

自分たちの仕事がオーナーからも客からも評価されないのだから仕方ない。

こればかりは今後の改善活動を経て、成功体験を積んでもらうしかない。

我が道を行くカレンにモチベーションの下がった従業員たち。

メニュー以外の問題も山積みだ。

どうしたら良いものかと幸助が悩んでいると、目の前にそつとグラスが置かれる。

「お待たせいたしました。アイスエールです」

思考の世界から帰ってきた幸助は、目の前に置かれたグラスへ視線を落とす。

うつすらと汗をかいた、透明ですらつとしたお洒落なグラス。

少し濁った黄金色の液体に蓋をするように乗っている、きめ細かな泡。

泡とオレンジの液体の比率は七対三。黄金比率になっている。どこからどう見ても生ビールだ。

「これ、本当に楽しみにしてたんです！ 入れ方も完璧ですね」

「ほんとですか？ ありがとうございます！」

嬉しそうな顔を浮かべるウエイトレス。

幸助から「完璧」と評価されたのが嬉しかったようだ。

といつても幸助がチェックしたのは泡と液体の比率だけなのだが、小さなことでも認めることは大切だ。

「では……いただきます」

待ちに待った瞬間がとうとうやって来た。

幸助はしっかりと冷えているグラスを手に取ると、ゴクゴクと喉

を鳴らしながら飲みたい気持ちを抑え、店の雰囲気に合わせてゆっくりと飲む。

炭酸を含んだ程よく苦く冷たいエールが、幸助の喉を刺激する。

「うん。やっぱり夏は冷えたエールに限る！」

記憶の片隅に薄らと残っている生ビールの記憶がよみがえる幸助。炭酸は弱いけど、それでも今までこの世界で飲んでいた生ぬるいエールとはけた違いの喉ごしだ。それに香りの豊かさはこちらの方が上回っている。

久しぶりの体験に幸助は目尻を下げる。

「事前に味見させて頂きましたが、冷やしたエールがこれほどおいしいものとは思いませんでした」

そう笑顔で答えるウェイトレス。

真夏の冷えたエールは異世界人も虜にしたようだ。

幸助がここで冷えたエールが飲めるようになったのには、ちょっとした経緯がある。

今回の改善で幸助が最初に手掛けたのは、魔道冷却庫の導入だ。理由は経費削減のためである。

店では波のある来客数に対応できるよう、常にある程度の在庫を持っていた。

メニューの範囲も幅広い。そのため、在庫の種類も多岐に渡る。しかし季節は夏。

すぐに食材が傷んでしまうのが大きな問題だった。肉などは一日で腐臭を発するものもある有様だ。

もちろんそうなたら客に出すこともできず廃棄となる。

だからこの廃棄によるロスは極力減らしたかった。  
赤字垂れ流しの場合、まずはそれを最小限にすることが原則だ。  
かといって在庫量を減らしてしまえば、メインの肉料理すら客に  
出せなくなる可能性もある。

そうなればさらに業績が下がってしまうのは目に見えている。  
そこで幸助は手始めに、王都へ入ってきたばかりの魔道冷却庫を  
導入することにしたのだ。

あくまでもキンキンに冷えたエールは副産物である。  
たまたま実験に協力してくれる酒商に出会っただけだ。  
そのために生産数の少ない冷却庫を無理して回してもらったり、  
泡を閉じ込めるための瓶を探すために奔走なんてしていない。  
経費削減の過程で生まれた副産物だ。

幸助がチーズをつまみにちびちびとエールを飲んでみると、先ほ  
どのウエイトレスの代わりにカレンがやって来た。  
右手をカウンターにつくと軽く吊り上がった目を幸助へ向け、小  
声で話しかける。

「悪いねえ、コースケ。高い魔道具まで世話になっちゃって……。  
本当に壺はいらないの？」  
「え……えっとですね、これも改善途中の経費ですから儲かったと  
きにちやんとお代は頂きますので」

今回も幸助は成果報酬で仕事を請けている。  
カレンの中では現金扱いとなっている骨董品をこつやって何度も  
勧められるのだが、その度に断ることを繰り返している。



「必要になったらいつでも言っただけ」

「はい。でも、できるだけ減らさないようにやっていますよ」

「分かってるって。冗談だよ」

そう言うとははと笑うカレン。

絶対に冗談などではないだろうと感じる幸助。

「おかげで他にはないドリンクメニューもできたしね」

「ですね。冷えたエールはもう僕の必須ドリンクになりますよ」

「ねえ……ちよつとだけいい？」

「何をですか？」

「何をつて……アイスエールだよ」

一口だけちよつと、と続けるとカレンは両手を顔の前で合わせる。

だが今は勤務中。

アルコールは飲めない。

勤務が終わるまでの我慢だ。

「カレンさん、今はまずいんじゃないですか？」

「やっぱり？」

幸助の前に置かれたグラスを羨ましそうに眺めるカレン。

理性と本能との戦いはかろうじて理性が勝ったようで、グラスから視線を外す。

「本当にカレンさんは好きなんです」

「もちろん！ 飲むことと食べることが好きだからこの商売、続け

てこれたつてのもあるくらいだしね。あたしからそれを取ったら何も残らないよ」

「あはは、カレンさんらしい言葉です」

ここ数日のやり取りで分かったカレンの性格。

それは食への執着心が幸助以上に強かったことだ。

それが国中の料理を探す原動力にもなっていた。

しかし、従業員を振り回す原因にもつながっていたりもする……。

「アイスエール、そのうちウチの名物になつたりしてね」

「最初は名物になつて客寄せの効果も出るかもしれませぬ。でも真似るのも簡単だからあまり期待しない方がいいですよ」

「ふうん、そんなものかなあ……」

その時、カレンは何かに気付いたようで幸助の向こうへ視線をずらす。

視線の先は店のエントランスだ。

「あつ、お客さんだ！」

幸助も振り返って見ると、三人の男女が店に入ってきたところだった。

本日初めての来店だ。

カレンは「ちょっとゴメンね」と言い残すと、接客へ向かう。

幸助は視線を前に戻しつつも、カレンの接客に耳を傾ける。

「ご来店ありがとうございます」

「珍しい食べ物食べられると聞いてきたんだけど、この店でいいのかな？」

「はい。そつでございませす。どうぞこちらへ」

接客慣れしていない人の如く、言動がぎこちないカレン。ここ数日の観察で、幸助はここにも問題があると感じている。関われば関わるほど、頭の痛くなる幸助であった。

同じ日、アヴィーラ伯爵領にて。

黒い外壁に小さな窓が四つ並んだお洒落な建物の前に、一台の馬車が停まった。

降りてきたのは、王都から帰ってきたサラと修行に来たセリカだ。

「ここだよ、お父さんの店。何だかちょっとだけ懐かしいなあ」

夜の営業が始まるにはまだ時間がある。営業を示す店名のプレートは裏返っている。

重厚なオークでできたドアを開けるサラ。ギィという音と共に店内に光が差し込む。

「ただいま！」

「サラ？ サラか！」

サラの元気な声が店内に響くと、猛烈な勢いで厨房からアロルドがかけ出してきた。

サラが王都へ出発したのは春。季節が一つ移り今は夏だ。久しぶりの帰宅に大きく目を開けたアロルドの鼻息は荒い。

「ただいま、お父さん！」

「遅かったじゃないか！ 何してたんだ」

「うん。いろいろお仕事が重なっちゃってね」

いろいろな仕事とは、もちろんアリシアの魔道具店とカレンのレストランのことだ。

魔道具店では偽魔石による事故で滞在期間が延びた。

それが落ち着いた時にカレンと出会い、目的の観光をほとんどすることなく帰ってきたのだ。

「悪い奴に捕まってなかっただろっな？」

「そんなことないよ。ずっとコースケさんと一緒だったし」

「そ……そうか」

サラはすれ違った数日を除き、幸助とずっと一緒にいた。

それは安心できることでもあるが、まだ心のどこかで納得できていないアロルドは複雑な表情をする。

「で、コースケはいないのか？ それに隣にいるのは誰だ？」

「もう、順番に説明するからまずは落ち着こう、お父さん」

「お……おっ」

愛娘に窘められ三人は客席の一つへ座る。

「まずね、コースケさんはまだ王都にいるよ」

「なんだ、あつちで仕事でも請けてるのか？」

「そんなとこ。でね、そのお仕事とも関係するんだけど、こちらの方が今日からお父さんの下で修業する料理人さん」

「は？ 修行？」

「初めまして。セリカと申します」

アロルドと向かい合っているセリカはその場で頭を下げる。状況が呑み込めていないアロルド。サラとセリカの顔を交互に見る。

「修行？ 何の話だ？」

「王都でいろいろあってね」

「何があつたんだ？」

「はいこれ。コースケさんからの手紙。詳しいことが書いてあるよ」  
アロルドはサラから封筒を受け取ると乱雑に封を開け、読み始める。

「『前略アロルド様』？ 何だこの変てこな書き出しは」

どうやら日本流の手紙の書き方は通用しなかったようだ。手紙にはカレンの店を手伝うようになった経緯などが綴られている。

しかし、その手紙を読み進めるにつれ、アロルドの手がプルプルと震えてくる。

「人の修業だけじゃなくメニューも考えろだと。何だアイツ、完全に丸投げじゃないか！ しまいには報酬は儲かった時払いでよろしくだと？」

「ほらほらお父さん。最後まで読んで」

「なんだ『アロルドさんの味は世界一ですから、僕も早く食べたいなあ。王都で待ってます』か……。調子のいい奴だな」

小さくため息をつき左右に首を振るアロルド。

手紙の中でも幸助の無茶振りは健在だった。

「ま、連れてきちまったもんは仕方ない。面倒見てやるよ」

「ありがとう！ お父さん！」

「よ、よろしくお願いいたしますっ」

そう言いながら頭を下げるセリカ。

これで無事に弟子入りは決定だ。

サラはホッと胸をなでおろす。

「腹減ってるだろう。パスタ作ってやるからテーブルで待っとけ」

「お父さんの料理、すっごくおいしいから楽しみにしててね」

「はい。楽しみですっ」

こうして王都とアヴィーラ伯爵領それぞれの地で動き出した改善への道。

だが、猶予はそれほど残されていない。

幸助たちと取り決めたりニューアルオープンまであと二ヶ月だ。

## 5・顧客データベース

翌日の昼過ぎ。

レストランの個室でテーブルを挟み、幸助はカレンと向かい合っている。

メニュー以外の対策について話し合うためだ。

「いいなあ、セリカは。噂の店の味を直に味わえて。カルボナーラってやつ、コースケは食べたことあるんだよね？」

「もちろんです」

食べたことがあるどころか、開発にも携わった幸助。

材料探しに何件もの酪農家を周ったのは懐かしい思い出だ。

「どんな味なの？」

「チーズと卵の味がねっとりまったり絡まって濃厚で、黒コショウがアクセントになってるんです。病みつきになりますよ」

「濃厚な味かあ……。どんな味だろう」

そうつぶやくと両手で頬杖をつきながら遠い目をするカレン。

次第に顔が緩んでいき、恍惚な表情へと変化していく。

口元が緩み、よだれを垂らしそうになりそうになったところで幸助が突っ込みを入れる。

「あ、あの……」

「おっと、まだ見ぬ味を妄想してたよ。」  
「ごめんごめん」

カレンは笑顔でよだれを拭く真似をする。

その仕草が妙に動物っぽく感じられるのは、カレンの容姿の影響が大きいはずだ。

「セリカさんの修行、うまくいくといいですね」

「うん。今度こそうまくいくように祈ってるよ」

「そういえば、料理ができるのに何でセリカさんは厨房からホールへ異動したんですか？」

カレンは厨房の仕事が少なくなったからウエイトレスにしたと言っていた。

厨房の仕事が減ったのならば、ホールの仕事だって連動して減っているはずである。

それにも拘わらずセリカはリストラ対象となっていない。何らかの理由があるはず。幸助はそう推察していた。

「セリカはね、ちっちゃな頃からウチの店に家族で食べに来てくれてたんだ。春の誕生日パーティーは必ず来てくれてね。で、いつの間にかこんなおいしい料理を作る人になりたいって憧れてくれて、勤めてくれるようになったんだ。だから仕事が無いからってクビにはしにくくてね」

ちよつとドジなところがあるんだけど頑張ってくれてるし、とカレンは続ける。

「へえ、そんな経緯があったんですか。憧れがきっかけで勤めてもらえるなんて素敵なお店だったんですね」

「はは。当時はね」

「またそんな店になれますよ。きつと！」

「だね！」



話の区切りがついたところで、幸助は冷えたお茶を一口飲む。今日のミーティングの目的は雑談ではなく、商売繁盛のためだ。幸助は真剣な表情になると、話を切り出す。

「では、今日の本題ですが……」

「うんうん。今日は何をするの？」

「常連さんの大切さは前回お話ししました」

「うん。覚えてるよ」

「では常連さんが増えるために、どんなことをすればよいと思えますか？」

「それはもうメニューを何とかするって取り組みをしてるでしょ」

「はい。ですが、メニューだけでは以前のような繁盛店になるのは難しいと思います」

「そうなのか？ なら何だろ……」

考え込むカレン。

味が良いにも拘らず繁盛店になれる店とそうでない店がある。

立地や宣伝は重要な要素だ。

だが、それ以外にも重要なことがある。

それさえあれば不利な立地や品ぞろえの悪さもカバーできる。

それだけの力を秘めたことが。

幸助は以前「味、空間、接客。これらが統一されてこそ、次にまた来たい」と思ってもらえる店になる」と言った。

高級感あふれる空間はそのままが良い。

そして味に関しては既に動いている。

だが、今の店には決定的に欠如していることがある。

「それは、接客です」

「接客？」

「はい。先代の接客力は凄かったとおっしゃってましたよね」  
「ああ……じいちゃんのねえ……」

静かになる室内。

祖父からはもう見放されたと言っていたカレン。

触れてほしくなかった話題のようだ。

グラスの中の氷がカランと音を立てる。

だが、ここを何とかせねば問題を解決することはできない。

幸助はお茶を一口飲むと説明を続ける。

「カレンさんは、先代のように接客することはできないとおっしゃってました」

「ああ、そうだよ」

「真似ができなかったのは仕方ありません。ですが、その先代の接客が最大の強みだったのは間違いありません」

「そう、それは分かる。でも真似できないものは仕方ないんだ」

だから料理で勝負してたんだ、とカレンは続ける。

カレンの祖父はたぐい稀なる能力を持っていた。

客の顔や名前、そして好き嫌いなどをほとんど覚えてしまうなど、普通の人のなせる業ではない。

「ですが、レストランとしてこれは強みですし、競合店の多い王都で競争に勝ち残るには絶対に必要なことです」

「それはそうだけど……。接客だってできることは工夫してるよ。

ま、それも効果がなかったから今があるんだけどね。ははっ」

乾いた笑いをするカレン。

幸助の言っていることはすべて自覚していることである。

だからこそ救いの手を求めたのだ。

「カレンさんのお店に来てくれるお客さんは、定期的に来てくれる人以外にも、年に一回だけという来店頻度のお客さんも多かったと思います。セリカさんのように」

黙って頷くカレン。

その様子を確認した幸助は話を続ける。

「その時に、『誕生日おめでとう』と従業員皆でお祝いしたとか、料理にちよつとした工夫を加えることをしてたんじゃないでしょうか？」

「よく知ってるね。そういえばそんなことしてたよ」

「誰だつて特別扱いされたら嬉しいものです。その嬉しい体験が『また来たい』という強い動機になります。またその接客ができる店を目指してみませんか？」

幸助の言うことは理解できるカレン。

だが、その表情はパツとしない。

「でもさ、コースケ。それができなくなったから今があるんだよ。

優秀な人は引く手数多だから雇うことなんてできないし、今更どうやって……」

そう言うと俯くカレン。

だが、幸助はその答えをちゃんと考えている。

サラリーマン時代の経験を基に。

「カレンさん、安心してください。先代のように特殊な能力がなくても誰でも再現できる方法があるんです」

「そうなのか!？」

パツと顔を上げ、大きく目を見開くカレン。  
カレンの動作はその一つひとつが大きい。

「それができるんだっいたらすごいことだよ!　でも……どうやって?」

カレンには祖父の真似はできなかった。

他の従業員も同じだ。

期待と不安の入り混じった眼差しで幸助からの言葉を待つ。

「それは、顧客データベースを作ることです」

「顧客データベース?　何だそりゃ?」

幸助はサラリーマン時代に駆使したソフトウェアの名前を口にした。

当然ながら、カレンが初めて耳にする言葉だ。

顧客データベースとは、自分の店の顧客または将来顧客になるであろうう人に関する情報を収集、整理し、いつでも引き出せるようにした情報の集まりのことだ。

収集する情報は業態や経営方針によって異なる。

徒に情報量が多くても役に立つ情報が無ければ何の意味もない。  
名簿をどう活かすか決まっていなかった場合は宝の持ち腐れになる。

サラリーマン時代に幸助が見てきた中でも、何となく他の店がポイントカードをやっているからやってみたという店もあった。

それでもやっているだけマシかもしれない。

そもそも名簿自体を作っていない店も多かった。  
無料の顧客データベースソフトが溢れている日本でもそのような状況だ。

それは管理する手間がかかるからである。

だが、顧客データベースは商売において大切なものだ。

江戸時代では、店が火事になったら真っ先に大福帳を持って逃げるか井戸に投げ込んでいたそうだ。

大福帳とは顧客名簿のこと。

火事で店や商品が無くなっても、これさえあればまた立て直すことができるという江戸商人の知恵である。

効果のある顧客データベースを構築するには、名簿をどう活用するか決めることが肝となる。それにより収集する項目が決まってくる。

カレンの場合であれば、接客に活かすため名前、家族、記念日、食べ物好き嫌いなどを収集する、ということになる。

もちろん途中から状況に合わせて増やしたり減らしたりと、バージョンアップを続けることも必要だ。

「そういう訳で、顧客データベースを作ればおじいさんがいなくても、店の接客レベルを底上げすることができるようになるんです」

「なるほどね。でもさ、名前と好みを記録するくらいなら知り合いの店でもやってるよ。だけど増えてくると探すのが大変で結局やめちゃったって言ったよ」

「そこは名簿の整理方法に問題があったんだと思います」

幸助は「見ててください」と言うと、カバンから一枚の紙を取り

出す。

紙には端に数字が書かれており、何本か罫線も引かれている。

「これは顧客シートです。この用紙一枚につき一人のお客さんについての情報を書きます」

「なるほど。ここに名前を書いてここに食事の好みなんかを書くってことだな。で、残りの欄には何を書くの？」

「あとは家族構成やよく一緒に来る友人などの名前。あと残りは来店履歴です。いつ来て何を食べてくれたってことです。それを棚に名前順に並べて整理します。そうすれば名簿の数が増えても、来店時にすぐに引き出すことができますよね」

「おお、確かに！」

来店履歴や何を食べたかまで記載するのは大変な作業だ。

紙だってそれなりの値段がする。

だが、ここは高級店で客単価も高い。

それくらいのコストをかけるだけの価値はあると幸助は判断した。

「それでここからポイントなんですが、何度も来てくれると来店履歴の欄がいっぱいになっちゃいます」

「それはどうするの？」

「今度はこの紙を使います」

そう言つと幸助は端に色が塗られた紙を取り出す。

「この紙を最初の紙に貼りつけてページを増やします。色が塗ってありますので、棚の中でも目立ちます。一目で大切なお客さんって分かりますよね」

「確かに！ よくそんなこと思いつくなあ」

「いろいろ苦労してきましたから……」

幸助がサラリーマン時代に勤めていた会社にはシステム部門があった。

「どうやってクライアントのデータベースを構築するかという議題で侃々諤々としたのは懐かしい思い出だ。」

「ところでコースケ。何で数字がついてるんだ？」

そう言いながらペラペラと紙をめくるカレン。

その数字は連番になっており、重複するものはない。

「これは顧客番号です」

「顧客番号？」

「今までの話を整理すると、以前のカレンさんのお店は記念日を大切に接客をしていたように感じました」

「そうだよ」

「もしこれからも記念日を大切にする……という方針になった場合に必要な工夫なんです」

「へえ。それはどんな工夫なの？」

ここまで幸助が説明しただけでも十分有効なデータベースとなり得る。

だが、それだけだと受け身の接客になってしまう。

名簿が見られるのは、その客が来店した時のみになってしまうだろう。

現状はその来店客が少ない状況。

だから幸助はそれだけでなく、攻めの経営ができるようなデータベースを構築しようとしているのだ。

「一ヶ月ごとに箱を作ります。えっと、今は七月ですので、七月に誕生日や何らかの記念日を迎える人の名前と顧客番号をカードに書き、そのカードを日付順に並べて箱にしまっておきます。そうすれば、今月は誰が記念日を迎えるのか、すぐに調べることができますよね。事前に分かっていたら好みの食材を切らさない注意もできますし、訪問などで『今年も来てね』という営業活動もできます。顧客番号は同じ名前の別人を取り違えないようにするための工夫です」「おー、すごいじゃないか！ そんなアイデア全然思いつかなかったよ」

今までできなくて避けていたことが急に現実味を帯びてきたことで興奮気味のカレン。

「では、顧客データベースを構築するという方針でいいですか？」「もちろん！ そうと決まったら早速準備しようよ！」

それから幸助とカレンは数時間にわたり顧客データベースについて話し合う。

どんな目的で名簿を集めるのか。

そのためにはどんな情報を収集し、どのように接客に活かすのか……などだ。

それもこれも初回の来店で「また来たい」と思ってもらわなければ意味がない。

それ以前に初回の来店をしてもらわなければならない。

セリカの修行の成果が待ち遠しい幸助であった。



ところ変わってここはアヴィーラ伯爵領。

仕込み中の厨房にアロルドの怒声が響き渡る。

「何度言ったら分かるんだ。そうじゃない！　こつだー！」

「ひゃっ、ごめんなさい！」

プルプルと子羊のように震えながらその場に立ち尽くすセリカ。  
客席からは女性二人が心配そうな面持ちでその様子を見守っている。

「サラちゃん。何だか厨房、大変そうね」

「うん……。三日前に修行が始まってからずっとこんな感じなんだ

……」

「へえ、大変そうね。でも何でまた」

「実はね」

それからサラは、王都での出来事を、ちょうどオリーブオイルの納品に来ていたルティアへ説明する。

主にセリカが修行に来ることになった経緯だ。

「そっか。王都でも切り盛りが大変な店はやっぱりあるんだ」

「うん、人は多いけどお店も多いからね。だから何とかしようとしてるんだけど……」

「もしかして、アロルドさんと相性が良くないんじゃない？」

「ルティアさんもそう思う？」

「ここではあとため息をつくサラ。」

修行を完遂してレシピをカレンのレストランへ持ち帰るとい任  
務を背負っている。

うまくいかなかったら自分の責任だ。

幸助の足を引つ張ることだけはしたくない。

焦ってはいるものの、アロルドとセリカとの相性で問題が発生するのは想定外だった。

「ま、こればかりは本人たち次第だから。サラちゃんは気楽に構えていればいいんじゃない？」

「うん……。そっか、そうだよね！　ありがとう、ルティアさん！」

これで心配事が無くなったわけではないが、心のスッキリしたサラは笑顔を浮かべる。

「ねえねえサラちゃん」

「なに、ルティアさん？」

「厨房も大変そうだけど、大丈夫？　コースケを王都に置いて」

もしかしたらそのカレンって人といい感じになってるかもよ、とルティアは続ける。

その瞬間、サラは大きく口を開け、その口を隠すように手を当てる。

「えっ!？」

「うふふ。冗談よ」

ぷーっと頬を膨らますサラ。

両手を腰に当てて怒ったぞアピールをする。

「ごめんごめん、久しぶりにサラちゃんの顔見たらお姉さん心配になっちゃって」

「もー。ルティアさんったらー」

「元気なさそうだったからさ。それじゃ、また来るね」  
「はい！　ありがとう、ルティアさん！」

ルティアを見送るとサラは再び視線を厨房へ向ける。  
様子は相変わらずのようだ。

雲行きが怪しくなってきたセリカの修業。

果たして笑顔で王都に帰ることはできるのだろうか。

## 6・リニューアルオープン

取り組みを開始してから一ヶ月が経過した。

季節は盛夏となり、日差しの凶暴さは最高潮に達している。

湿度は高くないので不快指数は東京より低い、それでも暑いものは暑い。

エアコンが恋しくなる幸助であった。

幸助の思い付きから始まった「アイスエール」は、順調に改良を重ねている。

酒商の工夫により瓶内で発酵させる時間もアップ。

よりしっかりとした泡と喉ごしを楽しめるようになった。

メニュー入りする日も間近だ。

接客の改善も順調に進んでいる。

方針が決まっただけからのカレンの動きは速かった。

もともと行動力は誰よりもある。

今回はそれがプラスに働いたかたちとなった。

数は少ないながらも今いる客の顧客データベースを構築したり、

他のレストランに客として行き、接客の研究を重ねている。

接客の方針は「記念日の演出」だ。

客が何らかの記念日を迎えているということが分かれば、プラスアルファのサービスをすることになっている。

誕生日であれば皿にソースで「おめでとう」のデコレーションをしたり、ちょっとした料理をサービスするといった具合だ。

費用はあまりかからないが客の印象には残る。

そんな接客を目指している。

「あとはメニューがどうなるかってとこだけですな」

営業前の店内で幸助はカレンにそう話しかける。

「だね！ セリカがどんな土産を持ってきてくれるか楽しみで仕方ないよ」

事あるごとに楽しみだ、楽しみだと繰り返してきたカレン。アロルド定番の味付けに高級レストラン向けの新メニュー。久しく味わっていない幸助もカレン同様、心待ちにしている。

「あと二週間くらいで帰ってきますから。僕たちはそれまでにできる準備をしましょう」

「だね！」

セリカが修行から戻ってきたら全メニューを見直し、その二週間後を目途にリニューアルオープンする予定となっている。

リニューアルオープンといっても、改装など大きなことはしない。メニューを変えることと、従業員のユニフォームを一新することが大きな変更点だ。

ユニフォームを変える理由は、従業員たちの気持ちを新たにするという効果が大きいためである。

「さて。先日お願いしていた件ですが、準備はできてます？」  
「もちろん！」

カレンはそう元気よく答えるが、すぐに視線が幸助から逸れる。

視線の先は店のエントランスだ。  
幸助は振り返ってその視線を追うと、二人の人影が入口から入って来るのが見えた。

「あれ……？」

姿を現したのはアロルドの店へ修行に行っていたセリカと付き添っていたサラだ。

予定よりもずいぶん帰りが早い。

幸助とカレンのもとへ近づく二人。

久しぶりに帰ってきたにも拘らず、晴れない表情をしている。

「お帰り」とカレンが声をかけようとすると、それを遮るようにセリカが声を上げる。

「恥ずかしながら、帰ってまいりましたっ！」

バツと頭を下げるセリカ。サラもそれに続く。

状況が呑み込めないカレンは二人を交互に見つつ口を開く。

「えっ、ちょっと話が見えないんだけど。詳しく聞かせてくれない？」

カレンに促され頭を上げるとセリカは声を絞り出す。

「使えない……出来の悪い従業員で、ごめんなさいっ」

全く意思の疎通ができていない。

そんなセリカの様子を見かねた幸助が口を開く。

「サラ、どういうこと?」

「あのね、コースケさん……。ダメだったんだ……」

「何がダメだったの。もう少し具体的に説明してくれないと分からないよ」

「セリカさん、頑張ったんだよ……。すっごく頑張ったの。でもね、お父さんに……。認めてもらえなかったの」

「えっ!? てことは修行は失敗だったってこと?」

黙って首を縦に振るサラ。

セリカの修業はアロルドとの相性が合わず、やり遂げることができなかった。

アロルド曰く「コイツは才能がない」とのことだ。

それでもサラは双方がうまくいくよう、二人の間を何度もとりもつなど努力をした。

しかし、どんどん生気を失っていくセリカの姿を見かねて「もう止めよう」と決めたのだった。

「ちょっと待って、なら新しいメニューも何も無しってこと?」カレンがサラへ訊く。

「は……。はい」

「そ、そんなあ」

力を失ったカレンは椅子へ崩れ落ちる。

それと同時に今までのことがグルグルと頭の中を駆け巡る。

今まで何をやってもうまくいかなかった店の経営。

でもいつかは繁盛店にしたい。その想いだけで頑張ってきた。

しかし店の業績は下がるばかり。

もうダメかと思いかけた時、藁にもすがる思いで友人に相談した

ら幸助という男を紹介してもらったことができた。

貴族様、それも伯爵様の仕事もこなしている男だ。

ウチみたいな店なんて相手にしてもらえない訳ない。

そう思いつつもダメで元々で頼んでみたら、経営改善を引き受けてくれることになった。

話してみると、やっぱり凄いと思えた。話す言葉どれをとっても感心することばかりだ。

食べることが好きということも共感できる。

まだ結果は数字に表れていないが、今度こそはいける気がしていた。いや、いけると確信していた。

それなのに、肝心な修行が失敗に終わってしまうなんて考えてもいなかった。

多くの客に愛される繁盛店。

思い描いていた青写真がガラガラと音を立てて崩れていく。

「はあ。また無駄な行動をしちゃったってことが……。……。何でかなあ。あとちよつとでいい感じになりそうだったのに……」

両手で頭を抱え込むカレン。その手はプルプルと震えている。

誰よりもセリカの帰りを楽しみに待ち、店の命運をかけていたカレンには耐えがたい事実だ。

（まずいぞ、この雰囲気。せっかくカレンさんだけじゃなく従業員皆がその気になってきたっていうのに逆戻りになりかねないぞ。どうすればいいんだ……）

こういう時こそプロジェクトリーダーとしての資質が問われる。

今までも想定外の出来事は何度も経験した幸助。



クライアントの担当者が改善プロジェクトを投げ出して、突然退職してしまったことだっただけである。

それと比べたらまだまだ何てことない。

幸助は沈んだ雰囲気を持ち破るよう、声を張り上げる。

「皆さん、まだ結果が決まったわけではありません！ この状況だからこそできることがあるはずですよ。これから何ができるか一緒に考えましょう！」

カレンは顔を上げると、幸助へ視線を送る。

その目からは力が失われている。

こんな表情は、初対面の日以来だ。

「できることって……何ができるんだ？」

「幸い、どこよりも先駆けて冷却庫の導入をしています。アイスエールもできました。集客の目玉になり得ます」

「それだけで大丈夫……なの？」

「もちろん料理のメニューも見直します。他の店の研究もしてきましたし、僕たちだけでもきつとできるはずですよ」

「でもどうやって……。もうあれこれ試した結果、今があるっていうのに……」

「……」

ここで無言になる幸助。

確かにカレンの言う通りだ。

今、この状況で考えても良い考えが出そうにない。

ここは一旦時間を置いて仕切りなおそう。

幸助がそう言おうとしたところ、別の男性の声が割り込んできた。

「あの……メニューのことなんですけど……」

カレンに向かっておずおずと発言したのは、それまで遠巻きに様子を見ていた料理長だ。

「何だ？」

「えっ……えつとですね。料理のメニュー、僕にらせていただけないかな……と思ひまして……」

「何でまた？」

「い、今までずっと仕事のかたわら、料理の研究をしてました。きつと店にふさわしい料理ができるはずです。僕の研究した料理、いちど食べていただけませんか？」

カレンは、ことあるごとに料理人は当てにならないと言っていた。だから幸助も今まで敢えて料理長を頼ろうとしていなかった。

だが料理長の作る「メニューにない料理」はおいしいものが多い。たつたことを思い出す。

カレンがそう言っているだけで、もしかしたら実力があるのかも。しれない。

幸助はそう思い直す。

「料理長さんの創作料理、おいしいのが多かったからぜひ食べてみたいです。ね、カレンさん」

「あ、ああ……」

「ありがとうございます！ では、早速用意してきます」

料理長はそう言い残すと調理場へ戻っていった。

幸助たちは入り口近くのカウンター席に掛けて、料理が出来上がるのを待つ。

カレンは納得できない様子で「レシピを持って帰ってきてても作っ

てくれないこともあったくせに」などとぼやいている。

待つこと二十分。

緊張した面持ちで皿を手にした料理長が戻ってきた。

幸助たちの前に皿を置くと、料理の説明をする。

「お待たせいたしました。エシャロン鶏のローストをカシスソースでお召し上がりください」

大きな皿の中央にちょこんと載っているスライスされた赤みがかった肉。

その周囲を彩るように黒いソースが添えられており、見た目にも美しい。

大きな皿に少しの料理など勿体ないと慣れなかった幸助だが、今ではその良さが分かってきた。

人生何事も経験である。

「見た目は悪くないね。味はどうかね」

そう言うとカレンは小さな肉を一切れフォークに取る。

肉の下にはマッシュポテトが敷かれていた。

それらも一緒に口へと運ばれる。

料理長がその様子を神妙な面持ちで窺っている。

「……………」

「……………」

「美味い」

肉を飲み込むと、カレンはそう言葉をこぼした。

幸助もフォークを手に取り、口の中へ放り込む。

「!?!」

甘酸っぱいソースと濃厚な肉の絶妙なバランス。

いつの間にか、さらりとしたマッシュポテトは口の中から消えていた。

大衆食堂であるアロルドの店とは違う味わいに幸助は声を上げる。

「おいしいですよ、これ!」

「あ、ありがとうございます! 王都で昔から親しまれている料理を自分なりにアレンジしたんです」

使ってる肉はメニューにある串焼き用の肉なんですよ、と料理長は続ける。

同じ肉でも大衆料理からこれだけ変化するとは驚きである。

755

「あなた、こんな料理もできたの!?!」

「はい。先代オーナーの時からコツコツと研究を重ねてました」

「あたしの見てない他の料理もできる?」

「もちろんです」

「それならそうと早く言ってよね!」

カレンの強烈な視線が料理長へ刺さる。

細身で気の弱そうな料理長は一瞬ひるむが、勇気を振り絞って発言する。

「ぼ、僕はもともとこういう料理が作りたかったんです。い……今まで提案しても聞いてもらえなかったから言えなかったけど、今なら大丈夫かな、と思いまして……」

カレンの視線は更に鋭くなる。  
ここでカレンが怒ってしまったのは余計な面倒事が増えてしまう。  
慌てて幸助はフォローに入る。

「カレンさん、よかったですね。身近にこんな素晴らしい料理を作  
ることができる方がいて」

「えっ……あつ？　そ、そうだな……」

「これなら本当に自分たちだけで何とかかなりそうですよ！」

「あ、ああ……」

幸助の言葉に空返事をするカレン。  
皆の視線がカレンへ注がれる。

店を継いでから五年。

今まで料理長に雑多な料理を作らせていたのはカレン自身だ。  
だが、料理長の意見を聞くことは全くしてこなかった。

店のオーナーは自分だ。だから自分が全てを決め、引っ張ってい  
かなければならない。

そう思い込み今まで必死にやって来た。

だが、その考え方が料理長の能力を殺していたのだ。

カレンは今までしてきた自分の過ちに気付く。

「そうか……そうだったのか」

今こそ従業員を信じ、頼るべき時だ。

自分の気持ちと折り合いをつけたカレンは、笑顔を浮かべて声を  
上げる。

「よし、そうと決まったら早速メニュー作りに取り掛かろう！」

「はい！」

日本であればヒグラシの鳴き声が聞こえてくるような時期。朝晩は幾分か涼しくなってきたが、それでもまだまだ夏。日中はうだるような暑さが続いている。

料理長を中心としたメニュー改善が始まってから三週間。いよいよリニューアルオープンの日がやって来た。

近隣の住宅には手分けしてチラシを配り、店頭の壁面にはメニュー表も貼り付けた。雑多で統一感のなかったメニューは、高級感のあるメニューに統一された。

あとは開店の時間を待つだけだ。

レストランのホールには、まっさらなユニフォームに身を包んだ従業員一同が集まっている。

カレンが正面に立つと、朝礼を始める。

「いよいよリニューアルオープンだよ。接客レベルは高くなった。メニューは皆で納得するまで改良を繰り返したし、顧客データベースも整備した」

従業員たちの顔を見渡すカレン。

当初と比べると、その目つきも活き活きとしている。

「できることはやった。あとは成功を信じて、力を尽すだけ。みんな、頑張ろう！」

「はい！」

従業員たちはそれぞれの持ち場に戻る。

ウェイトレスの一人が店内のランプをつけて回る。

薄暗かった客席が淡く照らし出される。

幸助とサラも忙しくなったら手伝う予定でいる。

サラはもちろんウェイトレスだ。

そのために三週間みっちりと高級店の接客を学んだ。

ちなみに幸助は皿洗いである。

「お客さん、来てくれないね」

開店時刻から一時間が経過した。

いつものように幸助はカウンターに腰かけて、客のふりをしてい

る。向かいには不安げな表情を浮かべたカレンが立っている。

「まだ時間が早いですからね、こんなものですよ」

「ならいいんだけど……」

更に時間は経過した。

結局、この日の来店客は三組だった。これではいつもと変わりない。

翌日以降に期待をしたのだが、次の日も、そのまた次の日も状況は変わらなかった。

リニューアルオープンから二週間が経過した。

アイスエールは多少の集客効果があった。  
だが残念なことに、来店客数は増えるどころか減ってしまった。

今までは雑多なメニューの中でも、王都では珍しい庶民的なメニューがよく売れていた。

それを廃止してしまったため、その料理目当てで来てくれた客を失ってしまったのだ。

もちろん、せっかく用意した顧客データベースは全く役に立っていない。

その客たちの食べたいものは無くなってしまったのだから。

そんなさなか、事件が起きた。

バタンツ！

開店準備真っ最中の店内に勢いよくドアが開く音が響く。

そこから尻尾を振り乱したカレンが駆け込んできた。

「大変だ！ アイスエールがあっちの店でも出されてたよ。しかも半額で！！」

「えっ！？」

あっちの店とは、向かいにある大型商業施設に入っているレスト



ランのことだ。

この界隈は競合店が多い。

その中でも向かいの大型商業施設は強力なライバルとなっている。大きな建物内に数多くの店舗が入っており、王都では人気のスポットとなっている。

「すぐに真似されるとは思っていたけど、ここまで早いなんて……」

料理はおいしい。ただ、料理長のアレンジは加わっているものの王都ではオーソドックスな料理のため、集客の目玉とはなりにくい。

記念日を大切にするといいっても、店に対して信頼がなければそんな大切な日に客は来てくれない。

頭を抱える幸助。

「コースケ、やっぱり手遅れだったんだよ」

「いや、何かまだ方法はあるはずです……」

「じゃあ、何ができるの！」

ダンツとテーブルを叩く音が静かな店内に響く。

従業員たちの視線が幸助とカレンへ注がれる。

「……」

「もういい……。もういいんだよ……。今までありがとう……。コースケ」

言葉を返すことができない幸助。

何か方法はあるはずとは言ったものの、何もアイディアは浮かんでこない。

できることはやったはずだ。

それなのに状況は全く好転しなかった。

この日初めて「失敗」という文字が幸助の頭をよぎる。

## 7・最後の1ヶ月

「コースケさん、何だか振出しに戻っちゃったみたいだね」  
「うん……」

宿に併設された食堂で幸助とサラは朝食をとっている。  
食欲はない。

だが、絶対に朝食は食べる主義の幸助は、むりやりパンを口に押し込む。

温かなお茶を飲み、ふうと一息つくとき幸助は昨日のことを思い返す。

悪い知らせがもたらされた後、カレンは「もう諦めて店を畳もう」と言った。

だが幸助は「あと1ヶ月だけ時間をください」と懇願した。

問答の末、一日の売上が金貨二枚以上になる日が来なければ、あと1ヶ月で店を閉めるということになった。

来店客数にして二十名程度だ。

それほど難しくなさそうな目標が、ひどく高く感じる幸助。  
本当に改善に失敗してしまうのではという不安が襲う。

この世界に来てから手がけたプロジェクトは失敗とは無縁だったが、サラリーマン時代には何回も失敗を経験したことがある。  
その時はかばってくれる先輩や会社という組織があった。

だが今は違う。

全責任は幸助のもとにある。

驕っていた部分があったのかもしれないと反省をする。

フォークにサラダを突き刺すと口へ運ぶ。

ドレッシングはオリーブオイルを使ったものだった。

ルティアのオリーブオイルと比べると、香りもあつたものではない。  
い。

アヴィーラ伯爵領の面々を懐かしむ幸助。

日本の家族や友人、同僚のことが気になって仕方なかった、召喚された直後のような気分だ。

「コースケさん、これからどうするの？」

「全く思いつかないや」

「でも、何とかしなきゃいけないよ？ それも一ヶ月以内に」

「それは分かっている。でも思いつかないものは仕方ないよ」

「うーん、困ったなあ」

腕を組み考え込むサラ。

幸助のこんな姿を見るのは初めてだ。

サラ自身、カレンの修業が失敗したことに責任を感じている。

だから何とかしたいという想いも強い。

「お父さんの味を持って帰れたら、こんなことにならなかつたかもしれないのに……」

「サラ、それは関係ないかな」

「なんで？」

「カレンさんの店は、年月をかけて庶民的なメニューが並んでる店ってイメージを作り出したんだよ。だからそもそも本格的な味は期待されてなかつたんじゃないかなって」

「そっか……」

一旦根付いたイメージはそうそう覆すことはできない。

幸助はそれを実感している。

「ねえ、コースケさん」

「うん？」

「記念日を大切にしているって方針は変えないんだよね」

「そのつもりだけど？」

「てことはさ、記念日を迎える人が来てくれないと何の意味もないよね」

黙って頷く幸助。

そのための新規客の集客にてこずっている現状、一番悩ましい課題だ。

「やっぱり最高のおもてなしができる料理が必要だよ」

「最高のおもてなしができる料理？」

「領主様の屋敷みたいに、新鮮なお魚の料理が出せるといいかなあ  
って」

「ああ、そのことね」

最高のもてなし。

それは内陸部ではなかなか食べることのできない、干したり塩漬  
けしていない鮮魚料理をふるまうことだ。

幸助は領主の屋敷でふるまわれた料理を思い出す。

それはそれは絶品であった。

「ほら、ずっと前に言ってたでしょ。そのうち冷却庫が増えてきた  
ら新鮮なお魚を運ぶ商売をする人が出てきそうって」

「そんなことも言ってたね。でも、それはおもてなしをする相手が  
いてこそでしょ」

「鮮魚料理が食べられるって認知されたら来てくれるんじゃない？」

「そうかなあ……」

「やるやらないは置いといて、お魚の料理が出せそうかどうか調べてみようよ」

しばらく悩む幸助。

どうしたものかと考えていると、先輩から言われた言葉が頭に再生される。

「頭が働かなかつたら体を働かせろ」という、ありがたいのかよく分からないアドバイスだ。

だが、今の幸助にはこれほどの確なアドバイスはない。

「うん、そうしよう。ここで腐っていても何にも進まないからね」

朝食を食べ終わると幸助とサラは、アヴィーラ・アルフレッド伯爵の屋敷を訪れる。

残念ながらアルフレッドも令嬢のアンナもいなかったが、使用人に鮮魚の調達先を教えてもらうことができた。

幸助が困っていたらできるだけ便宜を図ってやれと、領主から言われていたとのことだ。

それからすぐ鮮魚を取り扱っている商会を訪れる。

店番に紹介状を手渡し少し待っていると、奥からカール髭を生やした男性が高速で駆けつけてきた。

「おお、あなたがコースケ殿ですか！ お噂はかねがね」

そう言つと男性は幸助の手を両手で固く握りしめる。

「えっ、噂？」

「申し遅れました。わたくしはこの商会の主、ヨンチョスでございます。コースケ殿が冷却庫を開発してくださったおかげで、それはもう、鮮魚部門の利益がうなぎのぼりでして」

そう言うとヨンチョスは一部金色の前歯を光らし、商人らしい黒い笑みを湛える。

貴族との相性はとても良さそうだ。

「そ、そうですか……。冷却庫を開発したのは魔道具店の方々なんですけどね」

「はい。存じております。ですが！ コースケ殿がいなければ完成しなかったとも聞き及んでおります」

確かに熱交換効率重視の製品を提案したのは幸助だ。

王都での事故による危機を救ったのも幸助だ。

幸助が自覚している以上に、幸助がこの国にもたらした影響は大きい。

「それでご用件の鮮魚についてです……。当店、本来は新規のお取引はお断りしておりますが、他ならぬコースケ殿からのご依頼です。まだまだ入荷量が少なく、入ったら即完売するような状況ですがご希望の量を必ずや用意させていただきますましよう！ して、いかほどご入用でしょうか？」

揉み手で迫るヨンチョスの勢いに圧倒される幸助。

頬を引きつらせながら何とか答える。

「え……。えつとですね、今日は取引していただけるかの確認に来ただけですので、また量については相談させていただきます」

「承知いたしました！　またのご来店、心をよりお待ち申し上げます」

腰を九十度に折るヨンチヨスに見送られ、二人は商会を後にする。

「コースケさん、すごいね！　知らない人もコースケさんのこと知ってたよ」

「うん。びっくりだよ。でも……何だかトントンと話が進みすぎて怖いなあ……」

「えっ、そう？　今まで大変だったからきつとこれからはうまくいくんだよ」

「前向きだね、サラは」

「うん！」

その日の夕方。

幸助はカレンの店に行く。

鮮魚料理の取り扱いについて打診するためだ。

ドアを開け入り組んだエントランスを抜けると、せっせと開店準備をしているセリカの姿があった。

「セリカさん、こんにちは」

「あっ、コースケさん。こんにちはっ」

元気に返事をするセリカ。

昨日の今日なので土気が落ちてないか心配していたが、杞憂だった。

他の従業員もてきばきと働いている。



「カレンさんは見えますか？」

「今日はまだ来てないですね……」

気落ちしているのかも心配する幸助。

ただ、普段から店にいない日も多いため、また改めることに決める。

「ではまた明日来ますね」

「あつ、コースケさん」

「どうしました？」

「私たちのお店、無くなったりしませんよね？」

不安そうな表情でそう問いかけるセリカ。

今のところ改善の見込は立っていない。

だが、ここで間を置いては余計な心配をかけることになる。

幸助はカレンの問いに笑顔で答える。

「もちろん！ 大丈夫ですよ」

「お店が無くなってしまったら、父と母が悲しんでしまいます。だから、それだけはしたくないのです」

大丈夫と聞いて安心しました、とセリカは続ける。

幸助は「父と母」という言葉でカレンから聞いた話を思い出す。

「セリカさんって小さな頃からここにお客さんとして来てたんですよね」

「えっ、はい。そうです。父も母もこのファンだったのでよ」

「あ、過去形なんですね」

「はいっ。残念なのですが……」

苦笑しつつもセリ力は言葉を続ける。

「以前みたいに、行けば笑顔になれる店になつたらまた行きたいな  
って言ってくれてるんです。だから私、そんなお店になれるよう頑  
張ってるのです」

「それ、カレンさんには話したことあります？」

「はいっ。もちろん！ ですが……」

「業績にはつながらなかつたってことですね」

「その通りなのですっ。ですが私、諦めません。私もこのお店に楽  
しい思い出、いっっぱいありますから」

胸の前でぐつと両手の拳を握りしめるセリ力。

他の町に修行に行くという大きなことも、即決で受け入れていた。  
ここに一生懸命働く動機があつたのかと幸助は納得する。

「それにですね、父と母みたいに思ってる人、他にもいっぱいいる  
のです」

「えっ!？」

「他にもいっぱいいる」。幸助の脳内にセリ力の言葉がガツンと響  
く。

(もしかして僕、一番大切なことを忘れてたんじゃないか?)

改善の取り組みを始めてから二ヶ月。

メニューは高級レストランにふさわしいものとなった。

接客も完璧とは言えないにしても、しっかりと訓練はした。

だが、決定的なところが欠如していた。

それはこのサービスを待っている客のもとへ「変わったよ。だか

ら来てね」と知らせてなかったことだ。

幸助の頭の中で、抜けていたパズルのピースがカチリとはまる。

「セリカさん、ありがとうございます！　もしかしたらこれで本当に大丈夫かもしれません」

「そうなのですか？」

「はい。今度こそきつと笑顔が溢れるお店にできるはずですよ！」

数日後。

王都の住宅街には幸助とカレンの姿があった。

中心部から外れるように足を進める二人。

道は細くなり、レストランがある界隈よりも密集感を増している。

「なあ、本当に行くのか？」

「カレンさんも行くって決めたじゃないですか。もう引き返せませんよ」

「そうだけど……」

二人が向かっているのは、先代オーナーであるカレンの祖父の家だ。

カレンが生まれ育った実家でもある。

幸助はセリカとの会話から大きな気づきを得た。

それは先代の頃、常連だった客の中にはまだ店のことを忘れてない人もいたということだ。

それであれば、その客たちに声をかければいい。  
店は変わった、ということ。

だが、誰も当時の客のことを憶えている者はいなかった。  
たった一人、カレンの祖父を除いて。

そこで幸助は祖父へ聞きに行こうと渋るカレンを説得。

ようやく今日カレンが折れ、祖父の家へ行くこととなったのだ。

「ここだよ」

歩くこと約一時間。

王都では一般的なアパートのうちの棟を指差すカレン。

一代で大成した男の家だ。

貴族のような家を想像していた幸助は面食らう。

「ちょっと待っててね」

合鍵で鍵を開けるカレン。

ふう、と深呼吸すると家の中に入る。

待つこと数分、ドアが開きカレンが幸助を手招きする。

部屋の奥に行くと、白髪白耳の老人がロッキングチェアに腰かけていた。

使い込まれた渋い輝きを放つ杖が傍らに置かれている。

カレンの祖父に違いない。

「こんにちは。カレンさんのお店を手伝ってる幸助と申します」  
「で、何の用だって？」

首を横に向け幸助を一瞥すると、カレンへ視線を送る祖父。

皺の奥にある目が鋭く光る。

「じーちゃん。今、コースケと一緒に賑やかな店になれるよう頑張ってるんだ。あとちよっとでいい感じになりそうなんだよ。でも…それにはじいちゃんの協力が必要なんだ。なあ、じいちゃんの覚えてお客のこと、教えてくれないか？」

「何を今更」

カレンから目を逸らすと、祖父はゆらゆらと椅子を揺らす。

祖父の忠告を無視し続けた結果今がある。

この反応は致し方ない。

「店の経営で大切なこと、気づかせてもらってたんだよ」

一瞬カレンへ視線を向けるが、すぐにまた外す。

カレンは必死に言葉を続ける。

「おいしい料理を食べに来てくれたことはもちろん、お客はウチの店で友達や家族と過ごす時間を楽しみにしてくれてたつてことを。だからメニューも接客も一から見直したんだ。来てくれたお客が楽しんで、笑顔になって帰ってもらえるようにね……。それにまだ店のことを覚えてくれてる人もいるって知ってたんだ。そんな人たちを裏切ることとはしたくないんだよ……。あと、店は一人で回すものじゃないってことも、ようやく分かったよ。自分にできないことは人を頼る。ううん、自分一人にできることなんてたかが知れてるんだ。だからこそ、人を信じなきゃいけないことを……。今までの私とは違うんだ。じいちゃんの忠告を聞かなかったことも反省してる。じいちゃん、だから頼む、教えてくれないか！」

腰を直角に折り頭を下げるカレン。

「僕からもこの通り」と幸助も続く。

ここで断られたら道のりは更に険しくなる。

そのまま頭を下げ続ける二人。

キィ……キィ……と椅子の揺れる音だけが部屋に響く。

「……」

どのくらい頭を下げ続けただろうか。

鳴り続けていた椅子の音がピタリと止まった。

そしてその数秒後、祖父がゆっくりと口を開く。

「良い人たちに恵まれてよかったな、カレン。ワシも若い頃は周りに助けられっぱなしだったさ。事情は分かった。そういうことならいいだろう」

頭を上げる幸助とカレン。

「なら……教えてくれるのか？」

「ああ」

「ありがとう、じいちゃん！」

「ありがとうございます！」

それから幸助とカレンは数日間にわたり祖父のもとへ通う。

顧客の名前や家族構成、友人関係に始まり住んでいる場所や嗜好など。

祖父の口からは驚くほど膨大な情報が溢れだしてきた。

得られた情報は膨大だが、あらかじめデータベース用の用紙が用意されていたので、さほど混乱することもなく情報の整理をすることができた。

最終的に整理できた顧客の人数は、実に二千名近くに上った。

## 8・笑顔が溢れるレストラン

「久しぶりねえ、ここに来るのも」

「ああ、そうだな。以前と雰囲気は変わってなさそうなのでホッとするよ」

ある日の夕方。

カレンの店の前で、身なりのよい夫婦が足を止めた。

「でも大丈夫かしら。私たちの記念日がここで……」

「生まれ変わったって言ってたんだから信じてみようよ。これでダメだったらもう忘れればいいんだからさ」

「それもそうね」

迷いの吹っ切れた女性がドアを開ける。

この日初めての来店だ。

エントランスで待機していたカレンが客を迎える。

「いらっしゃいませ」

「先日声をかけていただいたアイナですけど早速来てみたよ。カレンちゃん、元気そうね」

「あ……ありがとうございます！」

カレンの記憶にはなかったが、この客の記憶にはカレンのことが残っていた。

耳にした客の名前をしっかりと焼きつけつつ、席へ案内する。

客が来店してくれた経緯はこうだ。



幸助達は顧客データベースの整備ができた後、すぐに営業活動を行った。

大量の名簿の中でも、当時の来店頻度が高く家の場所が判明している人をピックアップ。

そこへ従業員が手分けして訪問をした。

残念なことに既に引越していたり、亡くなっている人もいた。それでも、多くの人へ声をかけることができた。名簿の、いや、祖父の記憶の正確性には驚かされるばかりだ。

営業活動を行う際「店に来てください。なぜなら」と動機づけするため、海鮮料理も用意することができた。

しかし、レシピを開発する時間の余裕はなかった。

そのため幸助が領主のコックに頼み込み、屋敷のレシピを教えてもらったのだ。

すべての準備が完了したのは、幸助とカレンが約束をした期限の一週間前。

それから既に六日が経過している。

少しずつ売上は増えているが、まだ目標は達成していない。

今日中に、一日の売上が金貨二枚を超えなければならぬ状況だ。

「えっと、アイナさんの名簿は……あつたあつた」

大量の名簿の中から該当の名簿を取り出すカレン。

そこに書かれている内容に目を通す。

奥さんは肉の生焼けが苦手で旦那さんは逆にレアが好み。

そしてなんと今日この日が二十五回目の結婚記念日であった。

もらった注文は、肉と魚の両方が楽しめるコース料理だ。

オーダー内容と併せて必要事項をキッチンへ伝達する。

時間は少し経過し、店内にはパラパラと客の姿が見られるようになった。

最初に来店した二人のテーブルは前菜、スープを経ていよいよメインの一つ、魚料理を提供するタイミングとなった。

「お待たせいたしました。本日のお魚料理、シーバーのマガラ風を白ワインソースでどうぞ。お取り分けいたします」

領主の館で幸助が食べたのと同じ、アクアパツア風の料理だ。焼き色のついた魚の半身に貝とトマトが散りばめられた、王都では珍しい料理に二人の視線は釘付けた。

カレンが小皿に取り分けると、二人へ配膳する。それらをおいしそうに、あっという間に平らげる。

「王都でこんなお魚料理が食べられるなんて幸せね」  
「時代は変わったものだなあ」

感慨深く感想をこぼす。

海鮮料理は気に入ってもらえたようだ。

口直しの後は肉料理だ。  
提供された肉に男性がナイフを入れる。

「あれ、僕の肉、レアだけど大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。私のはしっかりと火が通ってるわ」

「いつの間に焼き加減を伝えてたんだ」

「いいえ、聞かれなかったから言っていないわ」

「へえ、よく覚えていてくれたな……」

おいしい時間はあっという間に過ぎ、最後のデザートがやって来た。皿がテーブルに置かれた瞬間。女性は目を見開く。

「まあ、素敵！」

デザートそのものはよくある果実を調理したものだ。

だが、皿にはソースで「結婚二十五周年、おめでとございます」と書かれている。

同時に、手の空いている従業員たちが「おめでとございます」の声をかける。

祖父の情報が無ければできない業だ。

程なくして、すべてのメニューを食べ終わると二人は帰り支度をする。

「今日はここに来て良かったわ」

「とてもおいしかったよ」

「ありがとうございます」

カレンや他のウェイトレスたちに見送られ、夫婦は笑顔で帰る。接客テーマである「記念日の演出」はうまくいったようだ。

この様子ならきつと繰り返し来店してくれるであろう。

カレンがあわただしくしている間にも続々と来店は続いていた。サラと幸助も応援に入ることになる。

「この皿の量なら目標達成いけるんじゃないか」

厨房で額に汗を浮かべ、必死に皿を洗いながら幸助は手ごたえを感じてる。

蛇口を捻れば水が出る訳ではないので重労働だ。

開店から四時間。

あつという間に閉店時間はやってきた。

最後の客を見送ると、カレンの周りに幸助達が集まる。

「今日は賑わいましたね、カレンさん」

「すごかったよ、コースケ！　こんなに忙しい日はどれくらいぶりだろう」

「早く売上、数えてみましょう」

「だね！」

テーブルに大銀貨や銀貨を積み重ねていくカレン。

一二三とその数を数えていくと、次第にんまりとした表情へと変化していく。

「計算できたよ」

「どうでした……？」

皆の視線がカレンに注がれる。

静まり返る店内。

ゴクリと唾を飲み込む幸助。

「大銀貨十八枚……」

目標は金貨二枚分だ。

大銀貨の場合二十枚が必要である。

「それに銀貨が……二十五枚！ 目標、達成だよ！」

ワーツと従業員たちから歓声が湧きおこる。

その表情は様々だ。

充実した表情を浮かべる者。満面の笑みを湛える者。

料理長に至っては涙ぐんでいる。

カレンに目を向けると、必死に何かをこらえているようだ。

幸助も久々の充実感に満たされている。

隣を向くと、サラも同じ気持ちのようだ。

二人とも一時は失敗を覚悟した。

修行の失敗にリニユーアルオープンの失敗。

今までになく困難な道のりであった。

道のりが困難であったからこそ、その喜びも大きい。

幸助はサラと視線を合わせると、パチンとハイタッチをする。

こうしてカレンの店の改善は、成功裏に終了することとなった。

一週間後。

カレンの店のドアには「本日貸し切り」のプレートが掲げられている。

「では、売上目標達成を祝して乾杯」  
「かんぱーい！」

冷えたエールをゴクゴクと一気に飲み干す幸助。  
営業中は気を遣ってゆっくり飲んでいたが、今夜は関係ない。  
身内だけで行く打ち上げの場なのだから。

「ぶっはあ！ やっぱりこの一杯のために僕は働いてるんだよ！」

結局、初めて売上目標を達成してから連日、その記録を更新し続けた。

名簿はあるが住所が分からなかった客も、噂を聞いてきてくれるようになった。

まだ満席には程遠いが、今までのことを考えれば大成功である。

「うれしかったのです！」

「僕もです。こんなに喜んでもらえるなんて……感無量です」

晴れやかな表情のセリカと、腕を目に当てる料理長。

二人は誰よりも長くこの店にいる。

良い時も悪い時も経験した。  
感動もひとしおだ。

「料理長、涙もろいの」  
「う……うるさいやい」

テーブルの上にはオードブルがたくさん並んでいる。

それぞれの料理に舌鼓を打つ従業員たち。

幸助は従業員それぞれにねぎらいの言葉をかける。

一通り幸助が回ったことを確認すると、グラスを手にしたサラがやって来る。

「やっぱりコースケさんはすごいね！」

「サラもよく頑張ったよ」

「ありがとう！」

「海鮮料理でお客さんに喜んでもらったのもサラのおかげだしね」

「じゃあ、乾杯しよ、コースケさん」

二人で小さく乾杯をし、エールを飲む幸助。

そんな様子を見ていたカレンが口を挟む。

「相変わらず仲いいねえ。で、お二人さんはいつ結婚するの？」

ぶーーー！！

盛大にエールを噴き出す幸助。

一部が鼻に入りゴホゴホとむせる。

サラはサラで顔を真っ赤にし、呆然と立ち尽くしている。

「カカカカカカレンさん、何を突然！？」

「そ、そうですよカレンさん……。私たちまだそんな話全然」

「何だ。まだ婚約もしてないのか。結婚式にはぜひ呼んでくれよな」

わははっと笑うとカレンはバンツと幸助の背中を叩き、料理をつきに行く。

二人きりになった幸助とサラ。

一瞬間を見合わずが、恥ずかしそうに顔を逸らす。

どうしたらよいか分からず、幸助はごまかすように目の前の料理

に手を伸ばす。

「ほら、サラ。これおいしいよ」

「う、うん……。ほんとだ！」

その後も「これもおいしいね」などと仲良く料理をつつく幸助とサラ。

他の従業員たちもワイワイと楽しそうに過ごしている。

今まで何をやっても認めてもらえなかった従業員たち。

それが幸助から、カレンから。そして何より客から認められたというのは大きかった。

初めての大きな達成感に包まれている。

テーブルの上のオードブルがあらかた皆の胃に収まった頃。酔っぱらったカレンが再び幸助に絡んでくる。

「なあ、コースケえ」

「ど、どうしました？」

「あたしってさー、この仕事向いてないよねー」

「えっ、突然どうしたんですか？」

「だってさー。接客は下手だし料理もできないんだよ。あたしなんて、いなくても良くないかい？」

相当飲んでいる様子だ。

普段は極端なほど行動派のカレンの思考が、後ろ向きになっている。



「カレンさんができなくても、セリカさんのように接客ができる人もいるし、料理長のように素晴らしい料理ができる人もいるじゃないですか」

「シヨック！ どーせ、どーせ、あたしなんて店にいる価値ないってことだ」

大げさに首を左右に振るカレン。

励ますつもりが追い打ちをかけてしまった。

今度はしっかりと言葉を選んでから発言する。

「カレンさん、仕事は適材適所ですよ」

「てきざい、てきしょ……？」

「はい。料理が得意な人が厨房に立ち、接客が得意な人がホールに立つ。レストランの仕事は他にもいっぱいありますよね。カレンさんはカレンさんが輝くポジションで頑張ったらいいんですよ」

「あたしが輝くポジションねえ」

今回の改善を経て、顧客データベースの整備も重要な仕事のひとつとなった。

食材や酒の調達も、料理の出来を左右する重要な仕事だ。

他にも経理やマネジメントなど、やるべき仕事は多い。

遠い目をしていたカレンは、パツと笑顔になると続ける。

「はは。よくわかんないけど考えてみるー」

「そうそう。カレンさんは元気でなくっちゃ」

「よし、コースケ。まだまだ飲むぞー！」

ワインボトルを手にとると、幸助のグラスへ並々と注ぐ。

賑やかな宴会は、夜遅くまで続く。

数日後。

店の前には幸助や従業員たちと向かい合い、大きな背囊はいのうを背負うカレンの姿があった。

「セリカ、店のこと任せたよ！」

「はいっ！」

「料理長、ウチの店一番のベテランとしてこれからも頼りにしてるよ」

「ありがとうございます。腕のなる食材、楽しみにしてますね」

従業員たちそれぞれに声をかけたカレンは、最後に幸助と向かい合う。

「カレンさん。やっぱり旅に出るんですね」

「接客はダメ。料理もダメ。これがあたしの一番活きる場所なんだ」

今までも珍しい料理を探す旅に出ていたカレン。

悩んだ末、店は頼りがいのあるスタッフに任せ、自分は食材探しや他の裏方仕事に徹することに決めたのだった。

行商をしている父親譲りの性格は変えることができなかったようだ。

「コースケ、ほんとに世話になった。感謝してもしきれないくらいだよ」

「いえ、僕ができることをしたまでですから。それよりも珍しい食材を見つけても、メニューに入れるときは皆さんとよく相談するん

ですよ」

「分かってるって！ それじゃ、みんな。あとはよろしくね！」

大きく手を振ると背を向け歩き出すカレン。

きっとカレンは王都の誰もが見たことのない、おいしい食材を見つけてくるのであろう。

店から笑顔を絶やさないうちに。

## 8 ・笑顔が溢れるレストラン（後書き）

8章はこれでおしまいです。

お読みいただき、ありがとうございました。  
次の9章で完結の予定です。

それでは、良い年をお迎えください。

## 1・謎の少女

夜の訪れが日に日に早くなる季節の、とある日の夕方。

黒い外壁に小さな窓が四枚はめられたお洒落な店の前に、乗合馬車が停まった。

「懐かしいなあ」

「コースケさんはすつごく久しぶりだもんね！」

馬車から降りてきたのは幸助とサラだ。

二人は久しぶりにアヴィーラ伯爵領へ帰ってきた。

サラは王都のレストランに勤めるセリカの修行で一度帰ってきたが、幸助は同行していなかった。

王都へ発ったのは春。

実に季節は二つも巡っている。

当初は魔道具店の販売を手伝いがてら観光をするという予定であった。

それが、偽魔石の事故や廃業寸前のレストランオーナーと出会ったことで状況は一変。

苦しく忙しい毎日をごすこととなったのだ。

ようやく帰ってこれた。

幸助は感慨深く『アロルドの Pasta 亭』と書かれたプレートを眺める。

ギィ。

懐かしい音と共にドアが開く。

薄暗い店内には既にランプが灯されていた。  
所狭しと並んだテーブルが淡く照らし出されている。

「アロルドさん、お久しぶりです」

「ただいま！ お父さん」

「おう！ 帰ってきたか」

厨房にいたアロルドが二人を出迎える。

以前のような感極まった様子はない。

娘が長期間外出することにも慣れてきたようだ。

「で、その後はどうだったんだ」

「王都のレストランはうまくいきました」

「ちゃんとお店の人たちだけでメニューの問題も解決できたしね」

「そうか……。それは良かった」

「逆に修行がうまくいかなかったから、店の皆で解決できたってのもありますしね。……うん？」

ここで幸助は厨房わきに置かれている紙に気付く。

材料や調理法などが書かれている。どうやらレシピのようだ。

「アロルドさん、これ新作のレシピですか？」そう言いながらレシピを手に取る幸助。

「あつ、お前には関係ない！」

慌てて乱雑に紙を取り上げると、ぐちゃぐちゃに丸めてポケットにしまう。

レシピは料理人の命だ。

その扱いにサラは「えっ」と声を漏らす。

「それはボツになったやつだ」

「そ、そうですか。ならいいんですが……」

実は、アロルドはセリカの修業がうまくいかなかったことを気にかけていた。

このままではサラだけでなく幸助も困るだろう。

そう思い、せめてレシピだけでも送ろうと考えていたのだ。

残念ながらそのレシピが日の目を見ることはなくなってしまった。

「おし、お前ら腹減っただろう。何か作ってやるから待ってる」

その後、幸助は久々のアロルドの味に舌鼓を打つ。

トマトバジルパスタに、ハンバーグもしっかりと食べた。

さて、住み慣れた宿に戻ろう。幸助がそう思った時、アロルドが小皿を持って来る。

「アロルドさん。これ、何ですか？」

「試してみる。新作の菓子だ」

皿の上には濃いクリーム色でサイコロ状のものが何個も載っていた。

幸助はそれを一つつまむと口に放り込む。

柔らかく甘い味わいが口に広がる。

それは、生キャラメルそのものだった。

「うん、おいしいですね！ 久しぶりに生キャラメル食べましたよ」

「何だ、またお前は知ってたのか」

幸助を驚かしてやろうと考えていたアロルドは肩を落とす。

「い、いえ。僕ではレシピも知らないし作れなかったですから。すごいですよ、アロルドさん！ 日々進化してますね」

「お父さん、おいしいよ！」

「そ、そうか……」

ポリポリと頬をかくアロルド。

いつもの雰囲気に戻ってきたことでホッとする幸助。

やはりここが落ち着く場所なのだと再確認する。

翌朝、しっかりと寝た幸助は宿で遅めの朝食を済ますと、メインストリートを西へ向かう。

小麦屋を営むルティアの店へ行くためだ。

「何だか活気が増えた気がするな」

歩きながら町の様子を観察する幸助。

王都へ発つ前よりも、賑わいが増したように感じる。

特に馬車の数は確実に増えている。

今までであればパラパラと見かける程度だったのが、列をなして石畳を駆け抜けている馬車まである。

「お久しぶりです、ルティアさん」

宿からルティアの店までは徒歩五分程度だ。



あつという間に到着した。

「あら、コースケ。久しぶりね」

「ようやく王都から帰って来ました」

「どうだった、レストラン？ サラちゃんから大変だって話は聞いたんだけど」

修行に帰っていたサラから、王都の様子は聞いていたルティア。それにアロルドの店で修行している様子を目にしていて。順調そうな様子ではなかったことを気にかけていた。

「はい。何とか無事に終わることができました」

「ふふ。やっぱりコースケは何でもできちゃうのね」

そう言いながら、しっとりした紫の髪をかき上げるルティア。まだ秋口だ。

薄手のルティアを相手に目のやりどころに困る幸助。もう少し下へ視線をずらしたいのをぐっところらせる。

「えっと、ルティアさんの商売は順調ですか？」

「コースケのおかげで順調そのものよ」

相変わらずルティアの店は、オリブオイル不足が続いている。

親戚が生産するほとんどをこの店でさばっている状況だ。

それに、魔道コンロの普及率も右肩上がりで上昇中。

消耗品である魔石からの収益もバカにならない。

「それは良かったです。何だか王都に行く前よりも町に活気が溢れてる感じがしますしね」

「周りの町や村から人が集まってるみたいよ。ほら、コースケが魔

道具の普及、頑張ったでしょ。だから仕事がたくさんあるみたいな  
の」

「へえ、それはすごいですね！」

「それはすごいつて他人事みたいな言い方ねえ」

魔道具が国中に広がるにつれ、アヴィーラ伯爵領は「魔道具のメ  
ツカ」というイメージが急速に広がっている。

最先端の町ならば仕事もあるはず。

その期待感から、国内から多くの労働者が流れ込んでいる。

実際に仕事も多い。

大規模な魔道具工場も稼働している。

出稼ぎ労働者が住まう住宅も宿屋も供給不足の状況だ。

アヴィーラ伯爵領では今、良い循環が起きている。

冒険者は魔石の採掘に。

鍛冶屋は魔道具のパーツ作成に。

出稼ぎ労働者は魔道具の組立や金属の採掘、精錬に勤しんでいる。  
それを引き起こしたのは他ならぬ幸助だ。

「それにね、住宅街の端のさびれた場所に新しい市場もできたの知  
ってる？」

「新しい市場、ですか？」

「そうなの。揃えられないものは無いくらい商品が充実してるの」

あたしはまだ一回しか行ってないけどね、とルティアは続ける。  
人も増え、新しい市場もできた。

これは幸助に行かない理由はない。

「ルティアさん、いい情報をありがとうございます。早速行ってみ

ます！」

「あら、もう行っちゃうの？ 早すぎない？」

「あ、えつとですね……」

その後、小一時間ルティアと雑談をすると、幸助は店を後にする。ルティアに教えられた通り、新しい市場行きの馬車に乗る。公営の乗合馬車でなく、市場の運営者が提供しているのだそう。

「へえ、アウトレットモールみたいだな」

着いた場所はアヴィーラ伯爵領の南西側。

魔物除けのため町を囲う外壁のすぐそばだ。

もともと何もなかった場所に、木造の真新しい店が数えきれないくらい並んでいる。

町の至る所をつなぐシャトルバスならぬシャトル馬車もある。

建物のスタイルは違うが、王都にあるカレンの店の向かいにあった商業施設のようだと感じる幸助。

「ほらあなた、こんな滑らかな真つ白の手袋が買えたわ。貴族様になつた気分よ」

楽しそうな客の声が幸助の耳に届く。

人の数も店の数も多い。評判も上々のようだ。

「さて、どこから行こうかな」

モール内を目的もなくぶらつく幸助。

レストランやテイクアウトの屋台を始め、服屋、食品店、金物屋など、本当に生活に必要なものは何でも揃いそうな勢いだ。それだけでなく、冒険者向けの装備を売る店まであった。

「あ、こんな店もあるんだ」

そんな中、幸助はある店の前で足を止める。

看板には「魔法屋」と書かれている。添えられたイラストは杖とローブの絵だ。

武器屋はホルガーの店で深く関わった。

だが魔法にふれることは、まったくなかったことを思い出す。召喚直後に適性がないと言われてはいたものの、興味をひかれた幸助は魔法屋に入る。

真新しい店に入ると、木の香りが幸助を包む。

間口は狭く奥行きが長い、ウナギの寝床のような店だ。

店員を横目に奥へ進む。

壁面には魔法使いの杖やローブなどが所狭しと並んでいる。

その価格はどれも金貨二桁。

魔法使いは希少なため、単価も相応に高くなっているようだ。

更に奥に進むと、お香のような別な香りも混ざってきた。

陳列されている商品は、装備から小物へと変わっていく。

魔石のようなものもあるが、幸助にはそれらが何の道具なのかは皆目検討がつかない。

「あつ、本だ」

店の一番奥には、棚一本分の本が並んでいた。

高いところに並んでいる本には柵がついており手に取れなかった

が、下の方は柵がない。

その中の一冊を手取る幸助。  
タイトルには「初級火魔法入門」と書かれていた。

幸助が手に取った本は、魔法書と言われているものだ。

新たな魔法を身に付けるには、魔法書を使うことが必須となる。  
もつとも、本人の適性もあるため、魔法書があってもほとんどの人が使えないのが現実だ。

「せっかくの異世界なのに魔法使えないのかなあ」

ペラペラとページをめくるが、それほどページ数は多くない。

それも抽象的なことばかり書かれており、イマイチ使い方が分からない。

そのため幸助は店員に声をかける。

「すみません、これってどう使うんですか？」

「それはね、魔法書に手をかざして最初のページに書かれている呪文を読み上げるの。そうすれば魔法書の魔力があなたに移る感覚があるはずよ。あとは次のページに書かれたことを練習して、発動できるように頑張るの」

もちろん魔法の適性がないとダメだけどね、と店員は続ける。

「これっていくらですか？」

「入門書は金貨一枚に大銀貨二枚よ」

男子の夢である魔法を放つことができるなら金貨一枚少々など安い。  
一度でいいからこの手から火をぶっ放してみたい。

そう思った幸助は、購入を決める。

「では、これ買って帰ります」

「はい、ありがとね！」

魔法屋を出ると、幸助は先ほど見つけた肉串の屋台へ向かう。

小腹がすいたためだ。

何の肉があるのかなと楽しみに想像しつつ歩いていると、果物屋の前で緑色のポンチョを纏った少女が目にとまる。

フードには耳がついている。

カエル変装グッズのようだ。

背格好は小学生中学年くらいだろうか。

キョロキョロ辺りを窺っている。

(あの子、怪しいぞ)

幸助がそう思った矢先、少女はリンゴらしき果物を懐へ入れると、そのまま走ってモールの外へ向かう。

案の定、万引を働いた。

万引は窃盗だ。

店へ与えるダメージも小さくない。

仮にポテチ一袋を万引きされた場合、同じものを四袋は売らなければ損失は取り返せないのだ。

正義感から追いかける幸助。

小学生くらいならすぐに追いつくだろうと高をくくっていたが、距離は縮まらない。

あつという間にモールの外へ出て、更には魔物除けの外壁の隙間から外へ出て行ってしまった。

「えっ！？ 外に行くの危ないんじゃない……」

幸助も腹を引っ込め狭い隙間から外へ出る。

追いかけること数分。

少女は、穀倉地帯に場違いのごとく生い茂っている小さな森の中に消えていった。

## 2・独りっきりの店番

万引きを働いた少女を追い森の中に入ると、空気が一変した。辺りは暗くなり、濃密な植物の匂いが幸助の鼻を刺激する。

茂みからはカサカサと音がする。

少しだけ心細くなる幸助。

勇気半分興味半分で湿った土を踏みしめ前に進むと、一軒の建物が見えてきた。

「こんな場所に何でこんな建物が……？」

日本であれば神社の本殿でもありそうなその場所にあつた建物は、その構えからすると店舗のようだ。

外壁は汚れ、ツタが絡みついている。

永らくメンテナンスされてないようだ。

入り口のドアには店名のプレート掲げるための金具がついている。

だが、肝心なプレートは朽ち落ちたのか取り外したのか、見当たらない。

恐るおそるドアに手をかけると、一瞬体の中に何か走る感覚が幸助を襲う。

(何か変な雰囲気だぞ……)

ギイイイツと不気味な音を立てながら開くドア。

鍵はかかっていたいなかった。

そのまま足を踏み入れる幸助。



(うわっ、ホコリ臭いなあ)

店内の匂いに思わずせき込む幸助。

ドアがバタンと閉まる。

落ち着いて店内を見渡すと、狭い通路の両脇にはびっしりと本が並んでいた。

神田の古書店のようだ。

背表紙には何か文字が書かれているが、幸助には読めなかった。

(本屋？ でも何でこんなところに)

棚から一冊を手に取りペラペラとページをめくってみるが、やはり本文も読めない。

奥へ歩き進むと、店の造りとしては定番のカウンターがあった。やはり店で間違いないようだ。

カウンターの奥には、先ほどの少女がかぶっていたカエルフードがかかっている。

ここに少女がいるのは間違いない。

幸助がそう確信した時、後ろから、ヒタ、ヒタと足音が近づいて来るのに気づく。

「だ、誰じゃお主は。どうやって入ってきた！」

「!?!?!」

ゆっくりと振り返ると、そこには少女の姿があった。

前がきれいに切りそろえられた、まるで日本人形のようなサラサラで真っ黒な髪に、クリツとした深緑の目。

背格好からして先ほどの少女に間違いない。

「えっ、どうやって入って来たも何も、入り口から普通に……」

「選ばれしものしか入ってこれない結界が張ってあるというのに」と、幸助に聞こえないくらいの小声でブツブツ言う少女。

「ところでここってお店かな？」

「ここは魔法書店じゃ。見て分からねぬのか」

ということとは、ここにある本はすべて魔法書ということだ。

幸助が先ほど買ったモール内の店と比べると、品揃えは桁違いである。

「お嬢ちゃんはここの子なのかな？」

「ここの子も何も、ここは妾めかけの店じゃ」

「へえ。店番を手伝ってるんだ」

この国では小さい子が店番に動員されることはままある。

大切な戦力になるからだ。

感心した幸助は「子さいのにえらいね」と言いながら少女の頭をポンポンする。

しかし、少女は反射的に幸助の手を払いのける。

「これっ、無礼者。何をするか！ 子どもとは失礼な！ 古いにしへより永

きに渡り受け継がれた伝統ある魔法書店をこの地に開いて二百余年お主の十倍は生きておるわ」

店構えからして古くからやってそうなのは間違いない。

魔法書店という業種柄、そのような設定も大切なんだろうと考える幸助。

「そっかそっか、ゴメンね。そんな由緒ある店とは知らなかったよ」「分かればいいんじゃない。それにしても今時の若いもんは妾めかけのことも

知らぬのか」

「うん。知らなかったなあ」

一介の店の娘など知る由もない幸助。

素直にそう答える。

そんな幸助の反応に、はあと大きな溜息をつく少女。

「妾の名はアレストリア・ピータンじゃ。聞いたことはないのか？」  
「ごめんね、聞いたことないなあ。僕は幸助だよ。あ、そうだ。魔法書といえば……」

そう言いながら先ほど購入したばかりの魔法書を取り出す幸助。  
表紙には「初級火魔法入門」と書かれている。

「これ、すぐその店で買ってきたんだけど同じものかな？」

「はあ。お主もか……」再び大きなため息をつくアレストリア。

「えっ、どうしたの？」

「粗製乱造された魔法書など使っても、良い魔法使いにはなれぬぞ  
それからも「最近の若いもんはなつとらん」とか「楽しんで覚えようとして」などとブツブツ続ける。

幸助が手にしたものはアレストリアの目からすると粗悪品のようだ。

金貨一枚以上を無駄にしたのかもしれない。

そんなことは露知らず購入した幸助はアレストリアに訊く。

「え、えつと……どういうことかな？」

「しかたない。どうせ暇じゃ。本物の魔法書について教えてやる」

それからアレストリアは幸助に本物の魔法書とはいかなるものか

を説明する。

言語は古代言語の方が体になじみやすいこと。

本に書かれている内容は安物と比べても大差ないこと。

一番大きな違いは、本に内包された魔力の質だそうだ。

アレストリアの説明は丁寧で分かりやすく、魔法素人の幸助にもよく理解でき、ストーンと胸に落ちるものであった。

「妾が講釈を垂れるなど貴重な機会ぞよ。有難く胸に刻むがよい」

「うん、ありがとう。すごく勉強になったよ」

「礼などいらぬ。とりあえず買ったものを試すがよい。妾の言わんとすることが分かるであろう」

幸助はアレストリアにお礼を言うと、店を後にする。

（何だかんだでちゃんと勉強してるみたいだったなあ。小さいのにちゃんと話に筋が通ってたし、英才教育でも受けてるのかな）

そんな感想を抱きつつ、店に背を向け歩き出す。

久しぶりに全く知らない知識が入った充足感に満たされる幸助。

薄暗い森を抜けると、再び外壁の隙間からシヨッピングモールに戻り、そのまま宿へ帰る。

「さてと、試してみるか」

宿へ帰るとテーブルの上に魔法書を開き、店員に言われた通り両手をかざす。

そして最初のページに書かれている呪文を一気に読み上げた。

緊張しながら魔法書の発動を待つ幸助。

「……………」

しかし何も起こらない。

一字一句間違えずに唱えたにもかかわらず。

店員の説明では、魔力が体に移る感覚があると言っていた。

幸助のやり方が悪いのか魔法書が悪いのかは分からない。

いずれにしても、実験は失敗だ。

魔法書を閉じると、幸助はベッドへ身を投げる。

「アレストリアちゃんの言う通り粗悪品だったのかな。金貨一枚、勿体なかったなあ……………」

翌日。

昨日のことが気になった幸助は、再び魔法書店を訪れる。

森を抜け店に入ると、魔法書を開き何かの作業しているアレストリアの姿があった。

「何じゃ、お主。また来たのか」

「アレストリアちゃんこんにちは。またいろいろ話がしたくてね」

「アレストリア……………ちゃん？」

普通は様とか殿じゃろうとブツブツ呟くアレストリア。

その反応で、友達もいなのかと心配をする幸助。

他に人の気配はない。

いつも一人で店番をしているようだ。

開いていた魔法書をパタンと閉じると、アレストリアは立ち上がる。

「それにしてもお主、変わった奴じゃのう」

「えっ、そうかなあ？」

「まあ良い。して、今日は何をしに来たのじゃ」

「えっと、昨日言ってた粗製乱造されたっていう魔法書んだけど……」

それから幸助は、魔法書が発動しなかったことを説明する。競合店であろう店の商品の相談をするのも失礼かなと思ったが、暇と言っていたのでそこはお構いなしである。

「ほら見る。だから粗悪品と言ったじゃろっ」

「でも、金貨一枚以上もしたのに……」

「そんなはした金、勉強代と思って諦めるがよい」

「でもそれでも魔法を身に付けられる人はいるんでしょ？」

「もちろん。じゃが、その可能性もあれでは低くなってしまう」

せっかくの才能を潰しかねん、と続けるアレストリア。

「そっか。ありがとね。いろいろ教えてくれて」

お礼にここの魔法書を買って帰ろうかと思いきやカウンターへ視線を移すと、幸助の目にあるものが入る。

食べ終えたリンゴの芯だ。

ここで幸助は、大事なことを忘れていたことに気付く。

「あ、思い出した!」

「なんじゃ突然声を上げて」

「昨日、果物屋さんで見ちゃったからね」

「な、なにを見たのじゃ」

「果物、お店から盗ったでしょ」

「ギク……」

「怒らないから話してごらん。何でそんなことしたの？」

「お主には関係のないことじゃ!」

「関係ないことないよ。じゃあ、僕もここにある魔法書を一冊、お金を払わずに持って帰ってもいいのかな？」

「そ……それは……」

俯くアレストリア。

自分がしたことが理解できたようだ。

たかが果物一つ。されど果物一つ。万引きは立派な犯罪だ。

意を決したのか、アレストリアは顔を上げるとゆっくりと口を開く。

「閑古鳥が鳴きっぱなしなのじゃ……」

「えっ?」

「だから、妾の店は暇なのじゃよ」

「果物を買うお金がないくらいに……?」

「そうじゃ」

そう言つと寂しげな表情を浮かべるアレストリア。

はつきり言つて立地は良くない。

町の最果て、しかも外壁の外だ。

ここに客が来ないことは致し方ないであろう。

「じゃが、腹は減るし……」そう言つと自分の腹をさするアレストリア。

「そっか。よく話してくれたね」

幸助はアレストリアの頭をポンポンする。

昨日のように払いのけることはなく、その手を受け入れる。

「ちゃんと話してくれたから、これ、あげるよ」

そう言つと幸助は、アロルドからもらつたキャラメルを差し出す。それを手に取ると、しげしげと見るアレストリア。

「何じゃ、これは？」

「食べてごらん。甘くておいしいよ」

そう言つと幸助は別のキャラメルを手に取り、包装をはがすと自分の口へ放り込む。

その様子を見ておずおずと真似をするアレストリア。

口へ入れモゴモゴと動かすこと数秒。突然大きく目を見開く。

「なんじゃこれは!？」

「キャラメルっていうお菓子だよ」

無我夢中で口を動かすアレストリア。

あつという間に溶けて無くなると、名残惜しそうな目をする。無言で差し出す手に、幸助はもう一つキャラメルを差し出す。

「おいしかったでしょ」

「うむ。長生きはするものじゃな」



かなりご満悦の様子だ。

アレストリアは今までで一番いい表情をしている。

「そういえば、店番はずっと一人でやってるの？」

「そうじゃ」

「お父さんとお母さんは？」

「んなものどつくの昔に逝っておるわ」

「えっ、そうだったんだ……」

アレストリアがたった一人で店番をしている理由は両親が亡くなっていたからであった。

余計な質問をしてしまったことを悔やむ幸助。

「じゃが、両親が逝ったことと閑古鳥は関係ないぞ。十年前まではちゃんと来てくれる奴がいたんじゃ。昔の話じゃがな」

そう言つと遠い目をするアレストリア。

口から出てくる年数の桁がおかしい。

幸助は頭の中で十分の一に換算して話を聞く。

「そうなんだ。なら、お客さんが来なくなる理由があつたんだね」

「そうじゃ。お主が手にしておつた安直な魔法書。それが諸悪の根源じゃ。それが流れ込んでからというもの、皆は楽な方、楽な方へ行くようになってしまったんじゃ。常連も一人逝き、二人逝き……。いつの間にか妾の店の門をたたく者はおらんくなってしまったんじゃ」

アレストリアの店が大変な状況になつたきつかけは、競合の出現であった。

そもそも立地もおかしい。  
逆に今までよく潰れなかったなと感心する幸助。

「そっか。大変だったんだね」

「大変ではないぞ。暇なだけで」

「そのことを大変って言ったの。果物一つ買えなくなっちゃったんでしょ？」

「それはそうじゃが……」

「それに、一人でこんな場所で危険じゃない？」

「結界が守ってくれるから安心せい」

結界がどれほどのものかは知らない幸助。

本人がそう言うだから大丈夫なのだろうと考える。

それよりも気になったのは一人で店番をずっとしているということだ。

この世界では早くから仕事をする子どもは多い。

パロだって、まだあんなに小さいのにしっかりと店番をしている。

だが、パロにはホルガーという保護者がいる。

アレストリアは本当に独りぼっちだ。

（両親もいなくて頑張ってるもんな。魔法書ってよく分からないけど冒険者の武器みたいなものですよ。立地っていう極めて不利な環境はあるけど、何とかなるんじゃないか）

年数を除いて、アレストリアの話はすべて本当のことに感じられた。

万引きだって正直に認めた。

独り奮闘する少女の力にならねばという熱い気持ちが湧き上がる。

「ねえ、アレストリアちゃん」

「な、なんじゃ……。怖い顔をしておって」

幸助の鋭い視線に若干引き気味のアレストリア。

そのクリツとした緑色の目をしっかりと捉えると、幸助は力強く宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます!」

### 3・超高額商品

「何を言っておるのじゃ？」

きよとんとした表情を浮かべるアレストリア。

幸助の言葉が理解できていないのかもしれない。

そう思い、幸助は自分のことを説明する。

「あのね、アレストリアちゃん。僕は経営コンサルタントなんだ。

この魔法書店みたいにお客さんがいないお店にお客さんが来るようにするのが僕の仕事なの。本当はお金をもらってやる仕事なんだけど今回は要らないからさ。僕と一緒に食事には困らないくらいにお店を立て直してみない？」

「断る。余計なお世話じゃ」

即答するアレストリア。

「お客さんが来てくれないと……」

「そんなの待っておればいずれやって来るじゃろ」

「でも、今日売れないと明日のご飯に困るんでしょ？」

ここで言葉に詰まるアレストリア。

ずっと待ちに徹していた結果、現状がある。

今まで幸助が見てきたどの店よりも状況は悪い。

幸助はこの状況を見過ごすわけにはいかなかった。

「ね、僕にもお店を手伝わせてくれないかな？」

「……………」

「……」  
「ならば、どうやって流行らせるのじゃ？ 言うてみい」  
「魔法が必要なのは冒険者でしょ？ だから冒険者に売り込めばいいんじゃないかな？」

はあ、と大きなため息をつくアレストリア。  
どうやら期待外れのことを言ってしまったようだ。

「最近の冒険者はなつとらんと言ったじゃろ。奴ら、楽な方ばかり逃げおつてからに。お主は偉大な賢者ダンダイルを知っておるか？」

全然聞いたことのない名前が出てきた。  
幸助は首を横に振る。

「うちの魔法書でしっかりと基礎を学んだから歴史に名を遺したんじゃない。アイツもじゃ。宮廷魔法使いとして名を馳せた……」  
「……」

名前を思い出せないようだ。

長い沈黙が続いたため、幸助は別な話題を振る。

「えつと、お客さんはどのくらい来てくれるのが理想か教えてもらっていいかな？ 一週間に一回、それとも毎日かな？」

「そんな毎日来なくてもよいのじゃぞ」

「なら一カ月に一人くらい？」

「いや、一年に一人くらい買ってくれば御の字じゃ」

とんでもなく長い期間がアレストリアの口から飛び出した。  
それが嘘でないならば、相応の価格のはずだ。

「それって、相当値段が高いんじゃない……かな？」  
「もちろんじゃ。入門書が金貨百枚からじゃからの」

金貨百枚から。

マンシヨンのような価格設定に啞然とする幸助。

昨日幸助が買った競合店の実に百倍近くだ。

「えっと……それじゃあ、この前売れたのはいつ？」

「うむむ、よく覚えておらぬが十年位前じゃ。そやつは今ではどこの貴族のお抱え魔法使いになっておるぞ」

そう言つと両手を腰に当て、エッヘンと胸を張る。

「ここにある魔法書を使えば誰でもできるようになるの？」

「誰でもと保証はできぬ。とはいえ素質がゼロの奴はゼロのままじゃが、今まで見たことはない。一のヤツは五十くらいにはできるし百を持つてるヤツは万にしてやることができる」

(へえ、すごいなあ。でもこの来店頻度じゃ商売にはならないよな)

幸助がそう考えていたその時。

ぐるー。

アレストリアの腹の虫が盛大に騒ぎ出した。  
果物一つを盗むくらい追い込まれていた。  
ここ数日はろくに食べていないに違いない。  
幸助はそう心配する。

「アレストリアちゃん、お腹減ってるんだ」

「へ、減ってなどおらぬ……」

「まずは昨日の果物屋さんに謝りに行く。そうしたらおいしいご飯を食べさせてあげるからさ」

「そんなみつともないことはせぬ！」

「どつちがみつともないのかなあ。悪いことをする人。それとも悪いことをしたことをちゃんと謝れる人？」

「……」

「せっかくキャラメルを作った人のお店に連れてってあげようと思つたのに。お菓子だけじゃなくて料理もおいしいのになあ」

「わ……分かった。仕方ない。お主の顔に免じて行ってやろう」

「アレストリアちゃんのためだからね」

アレストリアは本意そうだが、いそいそと出かける支度をする。壁にかかったカエルフードのポンチョを取ると、頭からずぼつとかぶる。

「この子がリンゴを一個勝手に持ってっちゃいました。おいくらでした？」

モール内の果物屋へ行くと、幸助は小銭入れを取り出しつつ店主に事の顛末を伝える。

幸助は「ほらちゃんと頭を下げてください」と言うとアレストリアの頭をおさえる。

「えっ！？ 持ってってなんかいいはずですよ。お気になさらず……！」  
「いや、本人も認めてますし、ちゃんとお支払いますよ」

それでもお金を受け取ることを拒否する店主。

この反応で、この世界には盗まれる方に隙があるのが悪いという空気もあることを思い出す幸助。

埒が明かなかったので適当に銅貨を置いて店を後にする。

そしてそのまま乗合馬車で『アロルドの Pasta 亭』へ向かう。

食事だけならばモール内の食堂でもよかった。

だが、まだまだ謎の多いアレストリア。

アロルドの店に行きがてら、サラやアロルドに話を聞いてみようと考えたのだ。

「へえ、へえ。町はこんな風になっとったのじゃな！」

アレストリアは馬車の中から移り行く風景をを嬉しそうに見ている。

町の外れですつと店番をしていたため、新鮮な経験のようだ。

その様子をほほえましく見ている幸助。

カエルフードも妙に似合っている。

何だかんだで子どもらしいところもあるんだなあと感じる。

「ねえ、アレストリアちゃん」

「何じゃ？」

「アレストリアちゃんのこと、ケロちゃんって呼んでもいい？」

「け……ケロちゃん？ なんじゃその呼び方は」

「そのカエルフードが良く似合ってるからさ。可愛いあだ名でしょ」

「か、可愛いじゃと!?!」



顔を赤らめ斜め下を向きながらつぶやく。

「ま……まあよい。お主のみ……特別じゃぞ」  
「なら決定だね！」

程なくして、二人は『アロルドの Pasta 亭』へ到着した。  
昼の営業が終わる直前。

ちようど最後の客と入れ違いで二人は店に入る。

「あ、コースケさん！……と、えっ!？」

「サラ、ランチいいかな？」

「もちろん……だけど……」

「それなら、僕はワンプレートランチで、この子にはお子様ランチをよろしく」

注文を言うと幸助はお気に入りの席に腰かける。

アレストリアもキョロキョロ店内を見回した後、幸助の隣の席に腰かける。

一方、厨房へ注文を通しに行ったサラはアロルドとヒソヒソ話をする。

「ねえお父さん。もしかしてあの方って……」

「ああ。黒髪に緑の瞳。それに、宙を舞い、地を駆け、水をも制す自然界の覇者のフード。間違いなくアレストリア様だ。アイツ、何で一緒にいるんだ。それに何であんなに馴れ馴れしいんだ？」

「よく分からないけど、やっぱりすごいね。コースケさんって」

「おい、でもいいのか？ お子様ランチを出しちゃって」

「コースケさんのことだし何か意図があるんでしょ。そのまま出そうよ」

「だな。そうする」

客席でランチができるのを待つ幸助は、アレストリアに店のことを質問する。

「何でアヴィーラ伯爵領の、しかもあんな外れた場所に店を構えたの？」

「何でもへったくれもあるか。妾が先にこの土地に店を構えたのじや。その後、初代アヴィーラ家の当主が勝手に来て町を建てたのじや」

「そ、そうなんだ……」

盛大に話を盛られたと感じた幸助。

だが設定は大切にしてあげよう、そう心に決める。

「昔は繁盛してたの？」

「一年に一人は来てくれたぞ」

来店頻度が一年に一人というのは極端に少ない。

それでも単価が高いのでやっていくことはできそうだ。

「それで、来てくれる人はみんな何かの魔法書を買ってくれたのかな？」

「いや、買ってくれたのは三人に一人くらいじや。そうそう金貨百枚も払えんじやろ」

確かに金貨百枚を払える人は少ない。

せいぜい貴族か名を馳せた冒険者くらいだろう。

「でも、この町にランクの高い冒険者はいないよ」

「そんなもん昔からじや。だから世界中から妾の店に来てくれてい

たのじゃ」

「なるほど。本物の魔法書を求めてやって来てくれたってことだね」  
「物分かりがいいのう。そういうことじゃ。それが、それがあんな粗末な魔法書ごときに……」

あんなの魔法書なんかじゃないと悪態をつくアレストリア。  
だが、幸助としては品質はさておき商売としては、競合はうまくやっていると感じる。

そもそも古代語など読める人はいるのだろうか。  
身につけられる可能性は低いとしても、間違いなく庶民は分かりやすく現代語で書かれた安いものに手を伸ばすであろう。

「でもそれが便利だからみんなそっちに行っちゃたんだよね」  
「うむ。そう言われると反論できぬ……」

そうこうしているうちに、ランチが出来上がったようだ。  
ホカホカと湯気を立てたプレートを二枚手にしたサラがやって来た。

「お……お待たせいたしました。お子様ランチでございます」

アレストリアの前に、トマトバジルパスタとクマさんハンバーグの載ったお子様ランチプレートが置かれる。  
ハンバーグの上にはちゃんと旗が立っている。  
その様子に目を輝かせるアレストリア。

「なんと、今時の肉には旗が立っておるのか。見た目にもいいのお。たまには外へ出てみるもんじゃのう」

「はい、じゃあいただきますしよ。いただきます」

両手を合わせる幸助。

アレストリアは幸助には目もくれずフォークを手に取ると、ハンバーグにパスタ、それぞれを交互につつく。

「うんまつ！　こんなに美味しい飯を食うのは久方ぶりじゃ。褒めてつかわす。コースケ」

「ははあ、有難き幸せ」

何となく殿様ごつこのようで、そんな言葉に乗る幸助。

アレストリアもまんざらではない様子で「ようやく妾の威厳が通じたか」とご満悦の様子だ。

それから幸助は自分のランチを食べつつ、もきゅもきゅと頬張るその姿をほほえましく見守る。

「ほら、ちゃんとサラダも食べようね」

「生の野菜は苦手なのじゃあ」

「バランスよく食べないと大きくなれないよ。おいしいドレッシングがかかっているから。食べてごらん」

ドレッシングはルティアのオリーブオイルを使った一級品だ。

幸助に窘められ、渋々サラダへフォークを伸ばす。

「……うむ。生野菜にしてはうまいのう」

「でしょ。いいオリーブオイルを使っているからね」

それから程なくして、アレストリアはサラダも含めて完食した。腹をさすりながら満足げな表情を浮かべている。

「ふう、満腹じゃ。こんなに食ったのはいつ振りじゃろうか」

「えらい。ちゃんと残さず食べたね」と言いながら頭をポンポンする幸助。

アレストリアだけでなく幸助も満腹だ。

王都では心労が絶えなかったため、食が細ったのかもしれない。幸助は会計をするため、サラを手招きする。

「サラ、この子　ケロちゃんっていうんだけど、一人で魔法書店を営んでるって」

「えっ、ケロ……？　アレストリア様……ですよね？」

「そうじゃ。妾が魔法書を護る者、アレストリアじゃ」

幸助はまったく知らなかったが、町の住人であるサラは知っていた。

そのことで、魔法書店は町ではある程度認知されているんだなと判断する。

「何だ。サラは知ってたんだ」

「も、もちろんだよ。すごい魔法書をいっぱい管理してらっしゃるんだからね」

「サラと申すのか。そなたのハンバーグとやら、絶品であったぞ」

「はっ。お褒めに預かり恐縮です」

恭しくアレストリアに頭を下げるサラ。

「ほれ見る。これが妾に対する普通の態度じゃぞ」

（やっぱりサラは優しいな。相手にちゃんと話を合わせてあげるなんて。それはそうと、サラは魔法書店のこと知ってたみたいだし、商品の質は値段相応に高そうだぞ）

そんな感想を抱きつつ、幸助はアレストリアを店へ送り返す。途中、市場で当座の食品も買い込んだ。この費用は魔法書が一冊売れたら返してもらおうという約束だ。

ここはアヴィーラ伯爵領の領主の館。  
アンナに向かいピシツと黒服に身を包んだ執事が、今日の出来事を報告しているところだ。

「アンナ様。市井しせいでアレストリア様が目撃されたそうです」  
「まあ！ それは朗報ですわ」

アレストリアは屋敷の使用人を通じて、年に数回食料などをまとめて買いこんでいた。

しかしここ数ヶ月、まったく姿を現さなかったのだ。だからアンナを始め、屋敷の一同は心配をしていた。

当人の金が尽きたことなど知る由もないアンナは、安堵の表情を浮かべる。

「ですがアンナ様、気になる情報も一緒に入っております」  
「とおっしゃいますと……」

「黒髪の青年もアレストリア様と一緒に行動していたそうです」

片手を口に当て驚くアンナ。

黒髪の人はこの世界では珍しい。

アンナですら知っているのは二人だけだ。

アレストリアともう一人……。

「コースケさんに違いありませんわ！」

「はい。私もそう推察いたします」

「なぜ魔法書の番人とも言われる偉大なお方とコースケさんが……」

「私にも察しかねますが、ご本人に伺うのが最も早いかと」

「そうですね。早速手紙を認め<sup>したた</sup>ますわ」

#### 4・買いたい人はいるが……

アレストリアを店へ送ると、幸助は再びアロルドの店へ帰ってきた。

「サラ、魔法書ってどういうものなの？」

「魔法を覚えるために使う道具……ってイメージかな」

「どんな人が使うの？」

「うーん。文字が読める家庭だったら、十歳になるまでには一度試すんじゃないかなあ」

私も試してもらったしね、とサラは続ける。

サラの口ぶりからすると、幸助の想像よりも魔法書に触れたことがある人は多そうだ。

魔法が使える人は重宝される。

それなりに魔法が使えるようになれば、一家にとっては人生逆転も夢ではない。

そう思えば金貨一枚など安い投資だ。

「ケロちゃんのところの魔法書は、どんなイメージがある？」

「ケロちゃんって何、その言い方？」苦笑しながらサラはそう言う。

「アレストリアちゃんのあだ名だよ。カエルのフードをかぶってたでしょ。カエルはケロケロ鳴くからケロちゃん」

「自然界の覇者の鳴き声知ってるんだ。コースケさんって一体……」

「そう？ 故郷の田舎では毎年夏になると、それこそ大合唱だったけどなあ」

「そっか。そうなんだ」



カエルを見たことがないということが意外に感じる幸助。  
逆にここには人を襲う魔物がいる。

改めてここは異世界なんだなと感じるのであった。

「あ、それでね。アレストリア様の店にある魔法書は凄いいみみたいだよ。でも、敷居が高くなりすぎて、お貴族様でもそうそう手が出せないみたい。噂だと相当包んでも門前払いつて話だよ。だから今は魔法書の番人って言われてるんだ」

「そんなに敷居が高いんだ……」

最低ラインの入門書で金貨百枚と言っていた。

確かに敷居は極めて高い。

番人という言葉が妙にしっくりくるなと感じる幸助。

「それにね、教えを請おうとしても、選ばれた人しか店に入れないって噂だよ」

「そうなの？」

「えっ………てことは、コースケさんは入れたの？」

「うん。普通に」

平然と答える幸助の言葉に、サラは啞然とする。

「やっぱりコースケさんはすごいなあ。いつの間にかアレストリア様に認められてるんだから」

「そうかなあ。鍵もかかってなかったし、誰でも入れる感じだったけど」

幸助自身は、認めてもらうも何もただ普通に店に入っただけである。

選ばれたという感覚はない。

「でね、サラ。その魔法書なんだけど、値段を聞いたら入門書で金貨百枚なんだって」

「えっ、そんなにするんだ!？」

「すごい値段でしょ。それも全然読めない文字で、使うのも大変そうなんだ。しかもほら……」

そう言うと幸助はカバンから魔法書を取り出す。

昨日競合店から購入したものだ。

「これ。新しくできた市場には金貨一枚ちよつとで売ってたんだ」

「あっ、この本!」

サラは幸助から魔法書を受け取ると、懐かしそうに眺める。

「どうしたの？」

「私もこれで魔法の練習したなあ」

ペラペラとページをめくると、右手の人差し指を立て集中し始めた。

数秒後、指先にポツと小さな火が灯り、あっという間に霧散した。いつの日か見せてもらった、サラの精一杯の魔法だ。

「いいなあ。ちよつとでもサラは魔法ができて」

「コースケさんは使ってみた？」

「うん。試したけどダメだった。やっぱり魔法使いは狭き門って実感したよ」

これは、アレストリア曰く粗悪品で試した結果だ。

何回か試せばサラくらいはできるようになるのかもしれない。  
だがこれ以上、この粗悪品で試そうとは思っていない。

どうせなら頑張って金貨百枚を貯め、アレストリアから教えを請  
ったほうがよい。

それはここ二日のやり取りで強く感じている。  
残念ながら、そこまでの金は持っていないが、男の夢を叶えるた  
めならきつと貯金もできる……はずである。

「あ、それでね……」

幸助はサラへ魔法書店の現状を説明する。

自称ではあるが、もう十年もお客さんが来てないこと。

今日の食べるものにも困っていたということ。

魔法書についての知識はきわめて豊富なこと。

ただし魔法書の品質については自分では分からないことだ。

「そんな状況だったんだ……」

「そういう訳でお店を何とかしてあげたいと思ったんだけどね……」

「どうしたの？ コースケさん」

「実はケロちゃんからはお金がもらいにくくて。だからサラには手  
伝ってもらいたいんだけど、少ししかお小遣い渡せないんだ」

「それは仕方ないよ。私だってアレストリア様からお金をもらうこ  
となんてできないし。いいよ！ 私も興味あるから手伝いたいな！」  
「ほんと！？ ありがとう、サラ」

それぞれのお金がもらえない理由は違ったが、結論は一致した。

その後、幸助は久しぶりにレッドボアのステーキを堪能し、宿へ  
帰る。

宿では、たまたま酒場にいた冒険者ランディへも聞き取りを行う

ことができた。

やはり人も商品も一級品だが、最上級クラスの人しか売ってもらえないイメージがあり、誰も行くことはないとのことであった。

翌日。

幸助はサラを連れ、魔法書店にやって来た。

薄暗い森に入り、ドアの前に着いたところでサラが怖気つく。

「ねえコースケさん、本当にここ、入るの？」

「そうだよ。ここが店の入口だから」

「選ばれた人しかこの門をくぐることはできないって伝説だよ。しかも下手に無理して入ろうとすると魂を取られるって……」

不安そうな表情で幸助へ視線を送るサラ。

だが、幸助は初めからそんなことはないことを経験している。

「あはは。そんなのただの噂話でしょ。さ、行こっ」

「えっ!？」

幸助はドアを開けるとサラの手を引っ張り、スタスタと魔法書店に入る。

その後ろ。森の入り口には、そんな二人の様子を監視するように見ている女性の姿があった。

「入れちゃった」

「でしょ。何にもないって」

キヨロキヨロと店内を見回すサラ。

何事もなかったことで拍子抜けしている。

幸助は店の奥へ進みつつ、アレストリアを呼ぶ。

「ケロちゃん！ 今日も来たよ」

「何じゃ、騒々しいな」

今日も何やら魔法書を開いて作業をしていた。

迷惑そうな言葉を発したが、その表情は嬉しそうだ。

普段ずつと魔法書と向き合うだけの日々。

それがここ最近、人と話すという刺激的な毎日が続いている。

しかも、扱いがぞんざいだ。

それも含めてアレストリアにとっては新鮮な体験だった。

「魔法書売るための方法を考えに来たよ」

「そなたも来たのか」

「はい、アレストリア様。私はハンバーグだけでなく、コースケさんの手伝いもしてるんです。よろしくお願いいたします」

そう言つとサラは頭を下げる。

アレストリアは「うむ」とだけ言つと、幸助へ視線を送る。

「して、今日は持っておるのか？ アレは」

「アレって何？」

「アレと言つたらアレじゃ。柔らかくて甘い菓子のことじゃ」

「あつ、キャラメルね。持ってきたよ」

「はよう出さぬか。次はいつ食べられるのかと心待ちにしておった

のじゃぞ」

「はいはい。分かったよ」

幸助はカバンからキャラメルを数個取り出すと、アレストリアに手渡す。

それを幸せそうな、とろけそうな表情で食べるアレストリア。

そんな様子をサラは複雑な表情で見ている。

偉大なる魔法書の番人というイメージと、目の前の状況とのギャップが激しいためだ。

「ふう。落ち着いた。して、どうやって魔法書売るんじゃ？」

「まず、商品についてなんだけど、やっぱり金貨百枚は高すぎだと思っただ」

「んなことはない！魔法書に魔力を注いでメンテナンスするだけでも骨が折れるというのに」

「さっき本を開いてやってたこと？」

「そうじゃ」

「それがこの棚全部の魔法書に必要なの？」

「そうじゃ」

いつも来るたびに見かけた作業は、魔力を注入している作業だった。

幸助はぐるっと棚を見回す。

店内には数百、いや数千冊は魔法書があるかもしれない。

確かにそれだけでも大変そうである。

「では、競合店みたいに初心者向けの魔法書を、現代語で編纂<sup>へんさん</sup>するっていうのはどうか？」

金貨一枚程度とはいかないにしても、ホルガーの武器屋のように初心者向けの商品を用意することで問題が解決できる可能性はある。幸助はその可能性を探る。

「そんなはしたない真似はできん。この世に文明ができし頃より紡がれし英知を冒流ぼうりゅうすることになる」

「そ、そつか……」

「そなたが持つておったエセ魔法書。あれはフレン王国で編集されたものじゃ。あの国は何でもアリじゃ。元はといえば妾が指導してやったというのに」

恩を仇で返しよって、とブツブツ文句を言うアレストリア。

またもや出てきたフレン王国の名前。

商売に関しては相当ガツガツしているお国柄だ。

幸助の助けを必要としている商人たちの邪魔ばかりされている。フレン王国への心証がいつそう悪くなる幸助。

文句の一つでも言おうとした時、突然、アレストリアの表情がピクリ動いた。

「どうしたの？ ケロちゃん」

「……いや、何でもない」

「そう？ 何でも気づいたことがあつたら教えてね」

気を取り直して次の質問をしよう。

幸助がそう思った時、サラが恐るおそるアレストリアに提案する。

「では……ですね……。貴族様とか大商人みたいにお金を持ってそつなところに売りに行くというのはいかがですか？」

「妾がこの店を空けることはできぬ。誰がこの店を、この魔法書を守るのじゃ」

魔法書はメンテナンスは欠かせないという話は先ほど聞いたばかりだ。

確かに、アレストリア以外にできる人はいなさそうである。

「ではケロちゃんではなく、僕たちが魔法書を持って売りに行くっていうのはどうかな？」

「お主らでこの魔法書を読みこなし、指導することができるのか？」  
「うーん、それは難しいなあ……」

「そもそもこの店の中でなければ、ろくに指導もできぬ」

魔法書を使ってもらうには指導も必要なようだ。

幸助が買った店ではそんなこと何も言われなかった。

確かに、古代語を読むところから始めなければならぬ。  
買うだけでなく使うハードルも高い商品だった。

「アレストリア様。それならば、魔法を覚えたいって人をここに連れて来るのはいかがでしょうか？」

「この店の中まで連れて来られたならば、指導してやることはできる。外じゃダメだぞ。集中できぬから。それに指導は最低でも五日はかかるからな」

「でも……ここに入れるのは選ばれた人だけなんですよね？」

「そうじゃ」

そう即答するアレストリア。

結果があるならば、誰かを連れてきても無駄足になる可能性がある。

「結界ねえ……。それを何とかすることはできないのかなあ」

「先祖代々伝わっておるもので、妾にはどうしようもないんじゃない……」



…」

選ばれた人しか入れないということが引つかかる幸助。そもそも商売なのに何で自分の首を絞めることをしているのか。本当は結界など存在しないのではないか。不完全燃焼のまま、二人は店を後にする。

時間は少し戻り、幸助とサラが店でミーティングをしていた頃。店の外では幸助達を監視していた女性がドアの前に来ていた。年の頃は三十歳そこそこで、薄汚れた白衣を着ている。ニーナとは違い、メガネはしていない。

「あんな坊主と小娘が入れるということは……。フッフッフ。どうやら結界の効果が切れたようだ。今度こそ秘伝の魔法書を奪ってやる。王国の筆頭魔法研究者という立場を取り返すにはこれしか…これしかないんだ」

女性の目的は、魔法書を奪うことだった。

ここ数ヶ月、チャンスを狙いずっと監視をしていたのだ。

無人のタイミングを狙わず、行動を起こした。

正常な判断はできなくなっているようだ。

薄気味悪い笑みを浮かべながらドアノブに手をかけた瞬間。

バアアアアアン！！！！

まるで落雷のような音が響き、閃光がほとばしる。

立ち込めた煙が散っていくと、そこには真っ黒になった女性が呆然と立ち尽くしていた。

「また失敗……。てことは、あの坊主と小娘は……。本物の魔法使い！？ まずい、振り返ちにあうぞ……！」

ブルブルつと身震いすると、女性は大急ぎでその場から走り去った。

幸助とサラは店から出ると、焦げたような匂いに気付く。

だが、辺りを見回しても特に変わったことはない。  
気にせずその場を後にする。

「コースケさん、お店のことどう思う？」

「うーん。今回は別な意味で難しそうだよなあ」

「だよねえ。アレストリア様が特殊すぎるから、今までのことは通用しなさそうだもんね」

サラは偉大な魔法書の番人と仕事をすることが特殊だと感じている。

一方幸助は、扱う商品が高額すぎて販売そのものが難しいと感じている。

いずれにしても問題解決が難しそうなことに変わりはない。

「サラ、そもそも魔法を使えるようになりたいって人はいっぱいいるんだよな」

「そうだよ。人生の大逆転も夢じゃないからね」

「それなのに門前払いしてるなんて勿体ないよなあ」

「きつとアレストリア様のことだから、何か理由があるんじゃない？」

「そうかなあ……」

帰りの馬車で、どのように状況を改善すればよいのか検討する幸助とサラ。

今までのマーケティング知識が全く通用しそうにない。

金額的には不動産に近い商品だ。

だが、教育という性格的には大学四年間の学費と仕送りに近い。当然ながら「大学」という商品を買ったことなど幸助にはない。

「いちど経営資源を整理してみようか」

「経営資源？」

「お店が持っている強みみたいなこと。たとえばアロルドさんの店の場合、人通りの多い通りに面した立地、アロルドさんの料理の腕、生クリームや良質なオリーブオイルを仕入れられることがそれに当たるかな。仮にその状態で経営に困っていたら、その経営資源を組み合わせることで今までは違う新商品のヒントとか集客方法が生まれる可能性があるんだ」

「うーん……」

他にも経営資源は、従業員や協力会社などの人的資源や資金力なども挙げられる。

サラリーマン時代には、競合店では仕入れられない強みのある商品を積極的にアピールすることで、改善に成功したこともあった。だが、サラの様子はパツとしない。

「でも、結界があつたら集客しても無意味だよ？」

「うっ……そこなんだよなあ……」

たとえ集客したとしても今度は結界が立ちほだかる。

そもそも結界など存在しているのか。  
最低限幸助とサラは入ることができた。

存在するとしたら何故魔道具店には自分の首を絞めるようなものを設置しているのか。

結局、宿に帰るまでに解決策は浮かばなかった。

「コースケさんお帰りなさい。お手紙を預かっていますよ」  
「ありがとうございます」

宿に着くと、受付で鍵と合わせて一通の手紙を受け取る。

封筒にはアヴィーラ家の封蝋が施されていた。

領主アルフレッドかアンナからの手紙に違いない。

「何の用だろう」

部屋に入ると幸助は早速封を開ける。

封を開けると、差出にはアンナだった。

ふわりと柑橘系のいい香りが漂う。

「お話ししたいことがあります。つきましてはいついつに……か。よし、ちょうどいいタイミングだ。ついでにケロちゃんのこと相談してみよっと」

## 5・巻き込まれる幸助

数日後。

アンナから招待された幸助は、領主の館へと向かう。もちろん、迎えの上質な馬車付きである。

領主の執務室に通されると、そこには領主アルフレッドと令嬢のアンナが幸助を待っていた。

「領主様、アンナさん、お久しぶりです」

「久しぶりだね、コースケ」

「コースケさん、お元気そうで何よりです」

二人と会うのは王都の屋敷以来である。

アルフレッドの卓上には以前と変わらず多くの書類が積みまわっている。

相変わらず忙しいようだ。

挨拶を済ませ幸助は、二人の向かいに腰かける。

「本日ご足労頂いたのは、他でもないアレストリア様のことです」

そう切り出したのはアンナだ。

グレーの髪に清楚なドレス。

気品漂うたたずまいは今日も変わらない。

「ケロちゃんがどうかしましたか？」

「け……ケロちゃんとは一体……」

「えっと、彼女の愛称のことです。ここ最近本名で呼んでなかった

のでつい。それで、アレストリアちゃんがどうかしましたか？」

それでも「ちゃん」付けて呼ぶ幸助に苦笑を浮かべるアンナ。

「コースケさんは、アレストリア様のことをご存知ないのですか？」

「魔法書店の店番をしてる子ですよ。 たまたま店に行くまでは全然知りませんでした」

「そ……そうですか……。ならば仕方ありません。アレストリア様はですね、この世のすべての知識が詰まったといっても過言ではない魔法書の番人にして、国からは名誉貴族の称号も授けられているお方なのですよ」

「えっ!?!」

そういえば貴族しか持つことのできない姓を持っていたことを思い出す幸助。

姓そのものは思い出せなかったが。

それにしてもアンナがそこまで言うほどの人とはと、驚きを隠し切れない幸助。

今までに聞いたアレストリアの話が急速に現実味を帯びてくる。

「では、彼女が店を開いてから二百年以上というのも本当のことですか？」

「ええ。まだ我が領地が小さな町だった百五十年前には、既にあの場所に住まわれていたと記録があります」

アレストリアの言葉が真実ならば二百歳以上。

客観的な情報でも、百五十歳以上ということになる。

いずれにしても人間の寿命を超越している。

しかも見た目は完全に小学生だ。  
ここは異世界。獣人もいた。  
何か特殊な種族なのかもしれない。  
幸助はそう納得することにする。

「そんな大切な人を独りぼつちにせず、国で保護するべきなのではないでしょうか？ 国の財産でもあると思うんですが……」

幸助のもつともな質問に、アルフレッドが口を開く。

「もちろん国でできることはしてるよ。でもここ最近のアレストリア様の動静が伝わってこず、心配していたんだ。結界で誰も店に入れないし、店の外でお見掛けすることも皆無だったからね」

（えっ！？ 今、領主様も「様」ってつけて呼んでたぞ。いったいどのくらいのレベルの人なんだ……）

完全に子ども扱いした言葉遣い。  
ことあるごとに頭をポンポンしていた。  
万引きした果物店では、頭を押して無理やりお辞儀をさせた。  
終いには「ケロちゃん」というあだ名をつけて呼んでいる。

アレストリアは虚言癖などなく、本物の偉い人だった。  
今まで散々してきた不敬を思い出し青ざめる幸助。

「どうされました、コースケさん？」

「え……い、いや、何でもないです」

今更しでかしたことを取り繕う訳にもいかない。  
それにアレストリアに嫌なそぶりはなかった。

きつと問題ないはずと自分に言い聞かせる。

「それですね、屋敷の者一同で心配していたところ、コースケさんと一緒にいらっしやるという情報もたらされたのです」

「そういうことでしたか」

「アレストリア様はどのような様子でしたか？」

「お腹を空かしていましたよ」

偉いだの凄いだの話した後にはギャップのある言葉だが、これは事実だ。

万引きをしなければならぬくらいに。

「やはりそうでしたか……」

「とおっしゃいますと？」

「本来であれば数ヶ月に一度、屋敷の使用人を通じて食料などの買い込みをされているのです。それがここ最近はずっと音沙汰無しで……」

「そうだったんですね……」

それから、幸助は今までの経緯を説明する。

たまたま店を見つけたこと。

そこにはお腹を空かせたアレストリアがいたこと。

アロルドの店でランチをご馳走したこと。

魔法書が売れていないことがそもそもの原因だったこと。

それを手伝えることになったことなどだ。

本人の名誉のため、万引きをしたところだけは伏せてある。

「食品も買い込みましたから、しばらくは大丈夫だと思いますよ」

「そんなことまでしていただいたのですね……。コースケさんには感謝してもしきれないくらいです」



アンナは幸助へ頭を下げる。  
困った商売人を見かけたら力になる。  
いや、困った商売人を見ると黙っていられなくなる。  
そんな幸助のポリシーが、よい形に働いた。

「あとは魔法書が売れるようになれば言うことなしなんですが……」  
「それならお父さま。あの方にご連絡をしてみてもいいかがしょう  
か？」

「そうだね。それがいいかも」

顔を見合わずアンナとアルフレッド。  
話についていけず二人の顔を交互に見る幸助。

「あの方……とは？」

「王都のグランベル財務卿が、何としてもご息女に魔法を習わせ  
たいとおっしゃっていたんだ。財務卿にはご息女が一人しかいらっ  
しやらないから何としてでもってね」

「そうなんです……」

よく分からない貴族の名前が出てきた。

しかも財務卿だ。

日本なら財務省の大臣クラスの人だろうか。

イマイチ感覚の分からない幸助。

いずれにしても偉い人に変わりはない。

「アレストリア様にはいちど門前払いを食らったみたいなんだ」

「結界に阻まれたってことですか」

「そういうことになるね」

「でも何で僕とサラは結界を何事もなく通過できたんでしょう……」

「そこが解決できないと、私も財務卿へ声をかけることはできないなあ」

無言になる三人。

だが、幸助はそれでも大きな進捗を感じている。

魔法書が欲しい、そして買えるという見込客がいることが判明したのだから。

その来店に至るまでの障壁　今回の場合は結界を何とかすれば購入という目標は達成できる。

「えっと、では実験をしてきます。どういう条件ならば結界を通過できるかってことを」

「それは、いつくらいまでにできるかな？」

納期を決めることは仕事においても重要だ。

だが無理にギリギリの日数を提示するのもよくない。

幸助は余裕のある日数を答える。

「では、十日以内には必ず」

「承知した。楽しみに待ってるよ」

うまくいったら私の株も上がるしね、とアルフレッドは続ける。

温和なアルフレッドだが、やはりこの人も貴族なんだと感じる

幸助。

「そうそう、コースケ。別件で一つ頼み事があるんだけどいいかな？」

「はい。どんなことでしょうか？」

「マドリー王国の市民権を受け取ってはくれないだろうか」

「市民権……ですか？」

アルフレッドは国王から幸助をしつかり取り込むように言われている。

まずは市民権を与えることで外堀を埋めようとしているのだ。

「もう生活の基盤も我が国、わが領地にあるではないか」

「はい。ここ二年はずっとこの地でお世話になっています」

「フレン王国に身よりはあるのか？」

「いえ……それは……」

「身寄りがなければフレン王国の市民権など捨てても構わないだろう」

「それはそうですが……」

アルフレッドの口ぶりからすると、二重国籍は認められないようだ。

幸助が気になっているのはただ一つ。

これを受け入れることが、幸助を召喚したフレン王国との関係性にどう響くかだ。

市民権を得ることは大きなことだと知っている。

アルフレッドは今後のことを見据えて、幸助に提案してくれてるに違いない。

ここで断れば長期的に見て損失が大きいだろう。

返事を先延ばしできる雰囲気でもない。

一方、幸助のフレン王国への想いは悪化する一方だ。

いつも商売の邪魔をしてくる。

唯一、送還魔法の期待感だけでつながっているようなものだ。

この先、極めて低そうだが日本へ帰れる可能性を取るか。

それともこの世界での生きやすさを取るか。  
両方を天秤にかけ、幸助は大いに悩みこむ。

「市民権がこっちに変わってもフレン王国には今まで通りいくことができるし、どうかな？」

この言葉が決め手となった。

フレン王国に行くことができるならば、幸助を召喚した魔法研究者に会える可能性もあるだろう。

それにここ二年、送還魔法を探す努力もしてこなかった。

もしかしたら心のどこかで完全にあきらめていたのかもしれない。  
幸助は意を決し、口を開く。

「では……拝受させていただきます」

「よく決めてくれた、コースケ」

「コースケさん、ありがとうございます。これですます一緒に仕事がいやしくなりますわ」

それからしばらく雑談をする三人。

時間になり、幸助が帰ろうとしたところ、アルフレッドに呼び止められる。

「コースケ。今後他の貴族から魔法書店のことを聞かれたら何も答えず、必ず私を通すように言っただよ」

「それはどうしてですか？」

「魔法を身に付けられると困る貴族もいるからね」。アルフレッドは低い声でそう言った。

数日後。

幸助とサラは再びアレストリアの店を訪れる。

結界の実験をするためだ。

ドアを開け店内に入ると、すぐ近くの棚の前にアレストリアがいた。

今日も魔法書に魔力を注ぐ作業をしている。

「えっと、ケロちゃ……じゃなくて、あ、アレストリア様」

「何じゃ、その他人行儀な言いくさは」

眉間にしわを寄せるアレストリア。

彼女がどのような人か分かった今、これまでと同じ対応などできない。

それに、最初からアレストリアの言葉を信じていれば違う改善策も見いだせたはずだ。

幸助は強い自責の念に駆られている。

「今までさんざん失礼なことを……」

「お主からそのような言葉遣いをされると違和感がある。今まで通りにするがよい」

幸助の言葉にかぶせるようにアレストリアがそう言った。

「えっ！？　で……では、そうさせていただきます……。ケロ……  
ちゃん」

「そうじゃ。それで良い」

アレストリアの機嫌は一気に良くなった。  
幸助もようやく一息つくことができた。

「して、今日は何用じゃ？」

「サラと結界について調べに来ました。結界さえ何とかなれば買ってくれる人がいそうでしたので」

アレストリアは首をかしげると幸助の後ろに視線を送る。  
しかしそこには誰もいない。  
閉じられたドアがあるだけだ。

「お主しかいないように見えるが？」  
「えっ!？」

振り返るがサラはいなかった。  
ついさつき、店の前までは一緒にいたにもかかわらず。

サラは結界にやられてしまったのか。  
心臓の鼓動が高鳴る。

「サラ！」

慌ててドアを開ける。

そこにはサラが何事もなかったかのように立っていた。  
ホッと胸をなでおろす幸助。

「あ、コースケさん」

「さ、サラ……よかったあ、無事で」

「コースケさん、私、入れなかったよ……」

「どうということ？」

「何かね、ドアに見えない壁があるみたいなの。ほら」

サラは幸助とアレストリアの見ている前で玄関をくぐろうとするが、ガラスの壁にぶつかっているように阻まれた。表情からすると痛くはないようだ。

それでも必死に店内に入ろうとするサラ。パントマイムのようだ。

「これが、結界……？」

「そうじゃ。言い伝えによると結界はな、魔法を悪用することがなきよう祖先が工夫した結果生まれたのじゃ。魔法を悪用しようとするやつには天罰が下り、魔法を得るだけの能力がない者には壁となる。じゃが……」

前はサラの手を取って店内に入ったことを思い出した幸助。

サラの手を取り引つ張ると、今度はすっと抵抗なくサラは店内に入ってきた。

「お主には関係なかったようじゃな」

「不思議ですね……」

「細かいことは気にするな。その結界も完ぺきではないということじゃ。お主も人を連れてくるときはしっかりと見極めるがよい」

アルフレッドへ実験の結果を報告した一カ月後。

グランベル財務卿の令嬢がやって来る日程が確定したとの連絡が入った。

しかし幸助の気分は日に日に重くなる一方だった。

翌日は遂にグランベル財務卿の娘を魔法書店へ連れて行く日となった。

「はぁ……」

夜の営業前の『アロルドの Pasta 亭』で幸助は大きなため息をつく。

テンションは最底辺まで落ちている。  
向かいに座っているサラが心配そうにしている。

「ねえコースケさんどうしたの？」

「もしかして僕、政治の道具になってるんじゃないかなあって」

アレストリアからは、連れてくる人を見極めろと言われた。

だが、貴族から連れて行けと言われては幸助に選択の余地はない。実際、連れていくことが決定した。

結界に阻まれたらどうしよう。

そればかりが幸助の頭をよぎる。

自分だけならまだしも、領主アルフレッドの顔に泥を塗る事態にもなりかねない。

絶対に失敗は許されないのだ。

今まさにこの町から逃げ出したい気分を襲われている。

軽はずみで店を改善するなどと言ったことが悔やまれる。

「心配事の九割は実際に起きないってコースケさん大分前に言っただでしょ。だから大丈夫だよ」

「そうなんだけど心配なものは心配だよ……」

「うーん、困ったなあ」



悩む幸助に自分がしてあげられることは何か考えるサラ。  
何か閃いたようで、パチンと手をたたく。

「そうだ！ おいしいご飯作ってあげるから、一緒に食べよ！」

お父さんに煮込み料理を覚えてもらったんだ、とサラは続ける。

「うん、そうしょ。ありがとう、サラ」

この状況下、サラは幸助にかかるプレッシャーを必死に和らげようと努力してくれている。

幸助の中でサラの存在は日増しに大きくなる。

## 6・幸助の決意

気持ちよく晴れた秋のある日。

魔法書店の前は、物々しい雰囲気にも包まれていた。

数台の装飾が施された馬車に、二十名は超える人々。  
馬上の騎士に黒服の男女。

その中心には、ドレスに身を纏った少女がいた。

財務卿の令嬢だ。

時おり馬がブルルつと鼻を鳴らす音が聞こえる。

アルフレッドの後ろにも数名の騎士が待機している。

その向かいには、ひととき豪華な服に身を包んだ横に幅の広い男性がいた。

グランベル財務卿だ。

わざわざ多忙な公務を置いてまで、この場所に来ている。  
相当の気合の入れようだ。

その中でどちらの集団にもつかず、ポツンと一人で浮いている男がいる。

もちろん幸助だ。

「ああ……とうとうこの日が来ちゃったよ」

幸助は店の入り口付近で行ったり来たりしている。

涼しげな秋にもかかわらず、手は脂汗でびっしょりだ。

サラと結界の実験を行ってから今日に至るまで、それなりに時間

があつた。

幸助が人を連れて行けば結界を通ることができる。  
その仮説が確信に変わるまで実験を繰り返そうとした。

だがアルフレッドから、あるお達しがあつた。

これ以上、幸助が魔法書店に入れることを知られることがないようにと。

これには幸助も反論したが、政治的な事柄が大きく関わるようだと認めてもらえなかつた。だから、これまでに実験ができたのはアナだけとなつた。

幸い、アナもサラと同様、結界を抜けることができた。

いずれにしても失敗はアルフレッド自身の責任だから、気にするなどのことだつた。

アナもできたことで、アルフレッドは自信を持つたようだ。

数分後。

財務卿がアルフレッドから離れると、愛娘へと足を進める。

準備が整つたようだ。

途中、幸助へ鋭い視線を向ける。

言葉は言わなかつたが、途方もないプレッシャーを感じる幸助。

「娘に何かあつてみる。一族根絶やしにしてくれる」とでも言われている気分だ。

令嬢が侍従に連れられ幸助のもとへやって来た。

目のクリツとした可愛らしい子だ。

年の頃はパロより少し上くらいだろうか。

聞いた話では、一族の盛衰はこの小さな女の子にかかっているそ

うだ。

どのような事情が知らないが、貴族の世界も大変である。

「さ、行きましょう」

幸助はズボンで念入りに手汗を拭くと、令嬢に手を差し出す。

柔らかく雪のように白い手が幸助の手を掴む。

皆の視線が幸助の背に突き刺さるのを感じる。

緊張は最高潮だ。

ゴクリと唾を飲み込むと、ドアへ手をかける。

ガチャリ。

ドアが開いた。

これはいつものことだ。

問題はここからである。

幸助は一步踏み出す。

令嬢も半歩後ろからついてくる。

手を握られた感覚はまだ続いている。

そしてもう一步。

足を進めると、店の中へ入った。

幸助の体は完全に店内だ。

恐るおそる振り返ってみる。

令嬢はそこにいた。

成功だ。

その場にへたり込みそうになるのをこらえる幸助。

まだ仕事は終わりではない。

そのまま奥に進むと、アレストリアの姿を見つける。

「来たか」

「はい」

「小娘。ここに座るがよい」

令嬢はきゅつと握り続けていた幸助の手を離すと、言われた通りアレストリアの指定した椅子に座る。

「これからそなたに基礎魔法を伝授する。使いこなせるかどうかはそなた次第じゃ。魔法の習得は決して楽ではない。早くて五日。長ければひと月、もしかしたら永遠に身につかんかもしれん。それに習得するのと使いこなすのはまったく別じゃ。ここで習得できたその日から、毎日の鍛錬を欠かすんじゃない」

真剣な眼差しでアレストリアの話に耳を傾ける令嬢。

自分の置かれている立場はよく理解している。

「最後に忠告をする。魔法はそなたにきわめて大きな力をもたらすことになるかもしれん。その力、世のため人のために使うのじゃぞ」

令嬢は首を縦に振る。

アレストリアはその表情を凝視する。

店内は緊張感をはらんだ静寂に包まれる。

「……………」

そうすること約一分。納得がいったのか、アレストリアは幸助へ視線を送る。

「ここに連れてきたからには大丈夫じゃ。あとは妾に任せろ。お主は外すがよい」

「よろしくおねがいします」

アレストリアに頭を下げると幸助は店の外へ出る。

その瞬間、待機していた人たちから一斉に幸助へ視線が注がれる。それに負けじと幸助は声を張る。

「お嬢様は無事、魔法の習得に入られました！」

それから令嬢は、日中は店内で魔法の指導を受け、夜は領主の館で過ごすという生活を続けた。

幸助は毎日朝晩、店の内外への送迎役をこなした。

魔法の習得が完了したのは十日後だ。

令嬢は無事、初級魔法を習得することができた。

これで幸助の一世一代の大仕事は、無事完了だ。それに伴いアレストリアはこの先数年、食うに困ることはなくなつた。

令嬢による魔法習得のバタバタが落ち着いたら、とある日の午後。幸助は一人で魔法書店を訪れている。

アレストリアにしか聞けない相談事をするためだ。

「ケロちゃん、ひとつ聞いてもいい？」  
「何じゃ？ 何でも聞いてみるがよい」

モゴモゴとキャラメルを口に含みながらアレストリアは返事をした。

もちろんキャラメルは幸助からのお土産だ。  
アレストリアには依存性を發揮している。

「フレン王国の筆頭魔法研究者って知ってる？」

うむむと言いながら斜め上を見るアレストリア。  
イマイチピンと来ていないようである。

「二年くらい前にはいたはずなんだけど、三十代くらいの女性で不健康そうな顔をして……」

「ああ！ それならクビになったと聞き及んでおる。何でも禁書庫に勝手に入って、かの国の貴重な魔法書に好き勝手したらしいからの」

「えっ!？」

「それがどうかしたのか？」

「いや、隣の国の魔法事情はどうなってるのかなと思って……」

想定外の言葉がアレストリアの口から飛び出してきた。

幸助が日本に還してもらったための頼みの綱は、とうの昔に切れていた。

ほとんど期待はしていなかった。

それにサラと出会いアロルドの店を改善したときに、この世界で生きていくと決意した。

だが、心の中でわずかな可能性にかけていたのも事実だ。

日本に帰ることができないのではないかと……。

研究者という立場で王城にいらなければならない、送還魔法など研究できないだろう。

他の研究者に召喚の話をすることもできない。  
もたらされた事実には幸助は呆然とする。

「……………」

「何を黙っておる。ほれっ、いつもの」

「……………えっ、何のこと？」

「ほれ、有益な情報だったのじゃろ。いつものように、妾の頭をポンポンせぬか」

そう言いながら頭を差し出すアレストリア。

幸助はその頭を気もそぞろにポンポンする。

それでもアレストリアはご満悦の様子だ。

「では次の質問です」

「なんじゃ、怖い顔をしておって……………」

「召喚魔法やその逆の送還魔法は聞いたことがありますか？」

「そんなのは聞いたことないのう。似たようなので時を操る魔法と  
いうのは遙か昔にあったと聞き及んでおるが」

「そう、ですか……………」

アレストリアでも召喚魔法を知らなかった。

となればもう幸助が日本に帰れる可能性はゼロと言ってもよい。

(よし。腹をくくるか……………)

幸助は強い意志を固める。



もう日本に帰る望みは捨てるということ。

この世界で生きていくしかないならば、次に取る行動はただ一つ。それは、サラへ自分の想いを伝えることだ。

幸助はサラのことをずっと意識し続けていた。アロルドの店を改善し終えた頃からずっとだ。

それでも、できるだけその気持ちが大きくならないようにしていた。

日本に帰ることで、召喚直後のような寂しい思いをするのは嫌だったからだ。

だが、もう抑える必要などない。

幸助は独り頷くと、アレストリアへ質問する。

「つかぬことを伺ってもよろしいでしょうか？」

「何じゃ、さっきからその変な態度は。今日のお主はおかしいぞ？」

「いろいろ思うところがありました……」

「して、何じゃ？」

「この国の女性の口説き方と申しますか、えっと……。付き合ってお互いが合意したらどう結婚に至るみたいなお話を……」

「はっ、付き合っつて何じゃ？ 意中の女でもおるんじやったらズバツと『俺と結婚しろ』くらい言ってみたらどうじゃ。他の言葉など要らぬ」

「そ、そうなんですな」

「お主もしかして……」

「はい、サラに想いを伝えようと思えます」

「そうか、そういうことか」

それならちよつと待っておれと言ひ残すと、アレストリアは店の奥に消えていった。

待つこと十分。ようやく戻ってきたアレストリアの手には石のようなものが握られていた。

「お主にこれやろう」

「これは……？」

「婚姻を申し込むとき、この魔力のこもった指輪を渡すと良からう。いずれお主を助けるときが来るはずじゃ」

「いや、こんな立派なもの、もらえないですよ」

反射的にそう答える幸助。

宝石は素人だが、どうみても高そうだ。

「ただでここまでしてもらったのじゃ。それにお主の立場を微妙なものにもしてしまった。それくらい安いもんじゃ。受け取ってはくれぬか？」

たった一人の友人でもあるし、と幸助から視線を逸らしつつアレストリアは続ける。

幸助はアレストリアの手元へ目を落とす。

小さな手のひらに載っていたのは、親指の先ほどもある真つ赤な石がはめられた指輪だった。

魔石よりも色が澄んでおり、輝きはけた違いだ。

ゴクリと生唾を飲みこむ幸助。

「……では、お言葉に甘えて」

アレストリアの手から指輪を受け取る。  
それはずっしりと重かった。

「国宝級じゃ。必ずやサラを射止めるのじゃぞ」  
「ありがとうございます」

幸助はカバンに入れていた手ぬぐいに包むと、指輪をそっとしま  
う。

「あともう一つ、お主に授けたいものがある」

「もう一つ僕に……？」

「この店の結界は、選ばれし者しか入れないと言っておったじゃろ」

そう言いながらアレストリアは、カウンターの奥からゴソゴソと  
何かを取り出した。

そしてそれを手にまた幸助の前へ戻ってきた。

どうやら魔法書のような。

「なぜお主は入れた？ なぜ他人まで呼び入れることができたと思  
う？」

確かに結界は存在した。

だがアレストリアは結界も完ぺきではないと言っていた。

だから幸助自身は、自分が店に入れる理由は結界のバグのような  
ものが原因だと思っていたのだ。

どうもその考えは違ってる雰囲気だ。

「それって……」

「そうじゃ。お主には類稀なる素質がある」

アレストリアは手にした魔法書を幸助へ差し出す。  
それは棚に並んでいる物と比べると、より分厚く、古めかしく、  
荘厳なものだった。

「……………」

「お主ならこの魔法書を授けるに十分じゃ。こんな時が来るとは思  
わなかった。長生きはするもんじゃの」

「でも……………」

「気にするな。これも礼の一つ、いや魔法書を護る者としての責務  
じゃ」

自分に魔法の素質がある。

しかも、本物の魔法書を与えてもらえる。

体が熱くなるのを感じる幸助。

「受け取るがよい」

「古代文字はどうやって読めば……………」

「その必要はない。見てみる」

アレストリアから魔法書を受け取ると、ペラペラとページをめく  
る幸助。

そこには何も書かれていなかった。白紙ばかりが続いていたのだ。

「究極の魔法書には文字などいらぬ。この能力、お主と大切な人を  
守るために使うがよい」

その直後。

アレストリアが聞いたことのない言語を唱えると、幸助の体はま  
ばゆいばかりの閃光に包まれた。

## 7・授章式にて

秋も深まったある日、幸助は領主の館を訪れる。  
アンナから呼び出しがあったためだ。

「コースケさん、おめでとうございます！ 褒章に選ばれることが決まりました」

「えっ、本当ですか!？」

「お父様とニーナさんも一緒です」

以前王都にいる時に、幸助が推薦されているという話は聞いた。  
王国の名を冠したマドリー褒章。これはこの年の功労者に、国王  
自らが褒章を授けるといふ名誉ある褒章だ。

幸助が推薦されたきっかけは魔道具の普及への貢献であった。  
平民へ与えることの是非で選考会は揉めたのだが、有力者の一人  
であるグランベル財務卿が後押ししたことが大きかった。

「何だか実感わきませんね……」

「それだけ我が領地、いや、王国に貢献してくださったのですよ、  
コースケさんは」

「ありがとうございます」

素直に礼を述べる幸助。

初めて受章の可能性を告げられた時は混乱したが、今は違つ。  
むしろ嬉しさすら感じられる。

この世界で生きていくと決めた。いや、決めざるを得なかった。

それに市民権もこの国に移した。  
だからフレン王国にどう思われようが関係ないのだ。

「授章式の後、パーティーもありますので是非パートナーもお連れくださいね」

「パートナー？」

「もちろん、サラさんのことですよ」

アンナはにこりとほほ笑む。

パートナーと言われ、複雑な気分になる幸助。

あれからまだ、サラへ自分の想いを伝えることができていない。

アレストリアから受け取った指輪は、いつも持ち歩くカバンに入  
ったままで。

さすがに手ぬぐいにくるんだままではなく、ちゃんとした箱に入  
れてあるが……。

あれよあれよという間に時間は経過し、授章式の日がやって来た。

残念ながらサラとの関係は、変わらずだ。

受章を我が事のように喜んでくれたサラ。

パーティーは一緒に参加してくれることになった。

「ふう、本当にここに来ることになるとはなあ」

幸助は今、王城に来ている。

通された大広間には、これから褒章を受け取る者が勢ぞろいしていた。

壁面には騎士がずらっと並んでいる。部屋は広いのに圧迫感を感じる幸助。

受章者は二十人くらいいる。

身なりからして、どうやら平民は幸助だけのようだ。

浮いている感が否めない。

それでも今までに着たことのない一張羅に身を包んでいる。貴族たちが煌びやかすぎるのだ。

幸助の立っている場所は、平民なので一番後ろ。

サウたち同伴者は別室で待機だ。

せめて誰か一人でも知り合いが隣にいてくれたら心強いのだが、残念ながらアルフレッドやニーナは前方にいる。

現在、既に前座が始まっている。

国王はこんなに素晴らしいとか、受賞者は昨年よりも四人増えたといった内容だ。

どこの世界でもこういった話だったらしい。

「続いて、受章者の紹介に参ります」

司会は受賞者の名前と功績を読み上げ始めた。

何とか侯爵の第五男、誰それが周辺三国計算大会で優勝したとか、誰それ男爵が農地生産を二割増にしたといった具合だ。

幸助にとっては「何でこの功績で？」という人も多く含まれていた。

きっと大人の事情でもあるのだろう。

もちろんアルフレッドとニーナは魔道具開発と普及の功績だ。最後に幸助の名前が呼ばれた。功績は、アルフレッドとニーナの功績を大きく補佐したという、回りくどい内容だった。魔法書のことには触れられていない。

「それでは、授章式に入ります」

(やばい、緊張してきたぞ)

幸助は頭の中で授章式の段取りを確認する。国王が来たら周りの真似をして跪く。決して頭を上げない。それだけを守ればよい。簡単だ。

ドドドドドーン！

打楽器のならされる音がした。静まる室内に司会の声が響く。

「国王陛下のお成り！」

いよいよだ。

周りに合わせ、幸助も跪く。視界には大理石の張られた床しか映っていない。壇上で何が起こっているのか分からない。衣擦れの音だけが聞こえてくる。その音が止むと、大広間は水を打ったようになる。



「諸君の働きに感謝し、褒章及び金一封を授ける」

再び衣擦れの音が聞こえ、その音が遠ざかる。  
国王の言葉はたったこれだけだった。

だが、不思議と心に響くものがあつた。  
これが王の威厳というものなのかと感じる幸助。

あつという間の終了だった。

会場にいる係員から現物を受け取ると、パーティー会場へ移動する。

「ふう、緊張したな」

パーティー会場へ入ると幸助は室内を見渡す。

外はもう暗くなっていたが、シャンデリアや壁面のランプが煌々と焚かれている室内はそれなりに明るい。

集う人は百人は下らない。

誰もが華やかな衣装に身を包んでいる。

まるで映画のワンシーンが飛び出してきたように感じる幸助。

正面には絶対に食べきれないだろうという量の料理が並んでいた。  
レッドボアらしき魔物の丸焼きもある。

水の街でランディと頬張った大きな海老もいた。  
いくつかの料理の前ではコックが待機している。

幸助の期待感が高まる。

「コースケさん！」

よだれを垂らしそうになったところ、聞き覚えのある声に呼び止められた。

幸助は声をした方へ振り返る。

「!!!」

そこにはワインレッドのドレスに身を包むサラの姿があった。つい先日、十六歳を迎えたばかりだ。

今日は、いつものポニーテールではなくアップにしている。今までになく、大人っぽさが引き立っている。

その姿に、幸助は息をのむ。

「どう？ アンナさんに見立ててもらったんだ」

そう言うとサラは裾を掴み、ちょこんとポーズを決める。完璧だ。

幸助の心拍数が高くなる。

「か、可愛いよ……サラ」

「ほんと？ ありがとう！」

二人で顔を赤くしていると、生演奏が始まった。

数組の男女が早速ダンスを始める。

そんなことはできない幸助とサラは、ひたすら料理に舌鼓を打つ。

周りは貴族ばかりだ。

頼りの綱のアルフレッドとニーナの周りには人が絶えない。魔道具の話でもしているのである。

そんな時、一人の男が幸助のもとへやってきた。

「そなたがコースケか」

「はい、そうです」

慌てて頭を下げる幸助。

ここにいるのは全員幸助より身分の高い人だ。

目の前の男が誰かは分からないが、失礼は許されない。

サラも幸助に続く。

「わたくしは東部バレン領を治めるサイモン・バレンという者だ。

そなた、魔法書のことをご存知かな？」

「魔法書……ですか？」

早速情報が漏れていた。

アルフレッドの言っていた言葉を思い出す。

「他の貴族から魔法書店のことを聞かれたら何も答えず、必ず私を通すように」という言葉だ。

だが、実際に対峙すると、そんなことは言えそうにない。

どうしよう。幸助が焦っていると感じ覚えのある人影が近づいてきた。

「おやおや、バレン伯爵。彼は一介の商人ですので伯爵には釣り合わないかと。どうぞ私と一緒にあちらへ」

アルフレッドだった。

バレン伯爵を連れて、立ち去ってくれた。

幸助はその機転に心の中で感謝する。

ふう、と胸をなでおろす幸助。

横を見るとサラも同じ心境のようだ。

「ねえ、サラ。外に行こうか」  
「そうだね。ちょっと居心地悪いしね」

二人はパーティー会場を抜け出し、すぐ側のバルコニーへ移動する。

外に出た瞬間、室内のざわめきが遠くなる。  
生演奏の軽快なワルツだけが耳に届く。

火照った顔に涼しい風が気持ちいい。

照明がないのでバルコニーは暗い。

部屋からこぼれるわずかな光と月明かりが二人を照らしている。

幸助はバルコニーの手すりに手をかけ遠くを眺める。

サラもその隣で幸助の真似をする。

かがり火にゆらめく町が広がる。

王都は大きい。

遠くまで良く見える。

無意識に魔道具店や、カレンのレストランがある場所を探す。

「何だかすごいとこに来ちゃったね」

「うん。私たち、ちょっと場違いな感じだったよね」

「料理はおいしかったけどなあ」

「素材が違うからね」

期待通り料理はどれも絶品だった。

新鮮な海鮮料理もあった。

きつとその運搬には冷却庫が活用されたのであろう。

「僕たちが関わったことが、こんなところにも影響してるなんてね」

「すごいよコースケさん。私コースケさんと出会っただけで、ずっとパスタレストランの娘で終わると思ってたもん」

その時、生演奏のBGMが軽快なワルツからゆったりとムードのある曲へ変わった。

「……………」

「どうしたの、コースケさん？」

雰囲気からしてサラへ想いを伝えるのは今しかない。

だが、その前に絶対に伝えておこう。伝えなければならない。そう決めていたことがある。

勇気を振り絞り、幸助は切り出す。

「サラ、大切な話してもいいかな」

「うん……もちろんだけど、どうしたの？」

改まった幸助の態度に、サラは心配そうな表情を浮かべる。

「信じてもらえないかもしれないけど、実は僕……この世界の人間じゃないんだ」

伝えなければならぬこと。それは自分が地球という異世界から召喚されたということだ。

これで拒絶されたらその時は諦めよう。そう思っている。

「えっ、意味が分からないよ!？」

「僕はフレン王国出身というのは嘘で、この国でも隣の国でもなく、遠い遠い、全く違う世界から連れてこられたんだ」

「どのくらい遠いの？」

「どうだろ、あの星くらいかな」

といいつつ適当に指差し、夜空を見上げる。

星座には詳しくないが、小学生の頃に習ったごく一部ははっきりと覚えている。

中央にきれいに並ぶ三ツ星のある星座。

まぎれもないオリオン座だ。

世界は違う。

それなのに星座は同じだった。

月だってそうだ。ウサギが餅つきをしている。

これは召喚された直後から気付いていたことだ。

宙は同じ。だが地球ではない。

並行世界なのかどうか、幸助の理解を超えている。

「うーん、よく分かんないなあ。コースケさん酔っぱらってる？」

「酔っぱらってなんかないよ。二年前、僕は地球っていう全く違う世界にいたんだ。ある日突然、召喚魔法でフレン王国に連れてこられて。だからサラ達の知らないこと、いろいろ知ってたでしょ。ハンバーグにカルボナーラ、魔道コンロや冷却庫だって、もともと僕の世界には当たり前にあった物なんだ。それにお店を改善する知識だってそうだよ」

幸助からもたらされた言葉に驚きを隠せないサラ。

信じてくれたかどうかは分からない。

無理もない。突然変なことを言いだしたのだから。

「……コースケさんの言ってることが本当だとして、いつかその世界に帰っちゃうの？」

幸助は首を横に振る。

「もう無理なんだ。ケロちゃんに聞いたら、僕をこの世界に召喚した人はもう追放されたんだって。送還魔法は見つかってないって言うってたし……。それにケロちゃんもそんな魔法知らないってさ。だから帰ることはできないんだ」

「なら家族にも、もう会えないの？」

「うん」

「お友達も？」

「……うん」

「そっか」

遠くを見るサラ。

その横顔を見つめる幸助。

何を感じているのか。

どう思っているのか。

幸助には分からない。

「ねえ、コースケさん」

「うん？」

「コースケさんは突然いなくなったりしないよね？」

「もちろん」

「コースケさんはコースケさんのままでいてくれるよね？」

「もちろん」

「……よかった。なら安心だ。大切な人と会えなくなるのは寂しいもんね」

幸助に視線を合わせ、笑顔になるサラ。

信じてくれてるのか否かは分からない。

だが、拒絶はされなかった。  
タイミングは今だ。幸助は懐へ手を伸ばす。

「サラ、これ……」

そう言うと幸助は用意していた指輪をサラへ見せる。  
魔力のこもった大きな石のついた指輪。  
暗い月明かりでもその輝きは健在だ。

向かい合う二人。

その状況に息をのむサラ。

幸助の顔と指輪を交互に見る。

「僕はこの世界で、いや、この国で生きていくって決めたんだけ。初めてトマトバジルパスタを食べたあの日から、僕の人生は大きく変わった。サラはいつも僕のことを応援してくれてた。それに困っている時、助けてくれたのはいつでもサラだった。食欲しか取柄がないような僕だけど、もうサラのいない人生は考えられない」

自然にあふれてきた言葉を言いきると、幸助は大きく息を吸う。

「サラ、僕と結婚してください！」

そう力強く言うと、指輪をサラへ差し出す。  
そのまま見つめ合う二人。

「……………」  
「……………」

ほんの少しの時間が永遠に感じられる。



口の中はカラカラだ。  
いつしか生演奏は別な曲に変わっていた。

その曲も佳境に差し掛かったその時。

サラの手がそっと幸助の手を包み、指輪を受け取る。

「はい……コースケさん！」

バルコニーに落ちる二人の月影が、ひとつに重なった。

## 8・エピソード

「 という訳で、僕とサラは結婚することになりました」

湧きおこる盛大な拍手。

テーブル席が六つしかない『アロルドの Pasta 亭』には、入りきらないほどの人が集まっている。

幸助とサラの結婚記念パーティーが開催されている。

貴族から平民まで。

老人から子どもまで。

その誰もが大なり小なり幸助から影響をもたらされている。

幸助とサラは皆の正面に立ち、結婚のあいさつを終えたところだ。今日のサラは真っ白なドレスである。

真っ赤な髪とのコントラストが美しい。

「うっうっうっう、サラあ」

大粒の涙を流しているのはアロルドだ。

いつか来るとは覚悟していた。

だが、心のどこかで来なければいいと思っていたのも事実だ。

めでたいことと寂しいことが同時に訪れ、複雑な心境のアロルドであった。

「アロルドさん、他の町に出る訳ではないですしお別れじゃないんですから……」

「お前、うっ……。サラを不幸にしたら承知しないからな」

「分かっていますって」

功績が認められた幸助は、褒章とは別に領主から立派な家を与えられた。

もともとは騎士の家だったそうで、部屋は十室もある大きな家だ。そこが二人の新居となる。

二年間お世話になった宿ともお別れだ。

幸い、これまでに魔法で身を守らないといけないような事態は起こっていない。

幸助自身、アレストリアの店で練習する時以外は使わないようにしている。

この能力がもとで争いごとにも狩りだされたらたまらない。

魔法の発動はできたとしても、運動音痴なのだから。

だから魔法のことは二人だけの秘密だ。

パーティーの主役、幸助とサラそれぞれの周りには人ばかりができています。

招待客が思い思いの言葉をかけている。

「おめでと、コースケ」

幸助のもとにやって来たのはルティアだ。

胸元がざっくりと開いたドレスを着ている。

「ありがとうございます。ルティアさんにもずっとお世話になりっぱなしで……」

「何言ってるの。コースケのおかげであたしもこうやって店を続けられてるんだから」

「おめでとなの!」

ルティアと話していると元気な声が飛び込んできた。  
声の主はパロだ。

その横には武器屋の店主でありパロの父、ホルガーもいた。

「ありがとう、パロ。ホルガーさんもありがとうでございます」  
「おう」

「パロ、アロルドさんがおいしい料理いっぱい作ってくれたから、いっぱい食べてね」  
「はいなの!」

ホルガーの武器店はその後、騎士団からも冒険者からも絶大な信頼を勝ち取っている。

結果、数名の鍛冶職人が勤める大所帯となっている。

「おめでとつございます。コースケさん」  
「フツ。この日が来るのが待ち遠しかったよ」  
「ありがとうつございます」

続いてやって来たのは、領主令嬢アンナと魔道具店のニーナだ。  
当初はこの店に貴族令嬢がいることに違和感があった。  
だが、この二人はもう常連だ。

完全に溶け込んでいる。

しかし今日は違う。

この町で一番偉い人、領主アルフレッドまで来ているのだ。

「領主様まで来ていただいて、何だか恐縮です」

「気にしないで。これからも深く世話になるんだからね。それにもうすぐ始まるよ、新しい魔道具ビジネスが……」

そう言つと、アルフレッドは幸助に耳打ちする。

それを聞いた幸助は目が点になる。

領主は幸助の背中をポンとたたくと、アンナのもとへ戻つていった。

「んもー、コースケちゃんったらあ。久しぶりに連絡くれたと思つたらびつくりよ」

体をくねらせながらそう言ったのは隣町の造船工房店主、ウィルゴだ。

「お久しぶりです、ウィルゴさん。その後、商売はいかがですか？」

「組合に帰つたから注文がもらえることはもちろん、無償で貸し出したでしょ？ 在庫の船。あれね領主様が一括で買い取ってくださいなの。だから安心して」

「へえ、すごいですね！ それを聞いて安心しました」

「じゃ、また後でね！」

幸助にウィンクすると、ウィルゴはサラのいる場所へと向かった。

「おめでと、コースケ君。めでたい席に呼んでくれてありがとう」

「めでたいの？」

「めでたいよ！」

「アラノさん、それに皆さんもありがとうございます」

靴屋であるアラノ一家も来てくれた。

ココとミミはそれぞれ水色とピンクでフリフリの可愛い衣装を着ている。

アラノの店は、あれからも競合店との棲み分けはうまくいっている。

今では噂を聞きつけて、遠方からもわざわざ来店してくれるようになったくらいだ。

「コースケさん、おめでとございます」

「コースケ、約束通り呼んでくれてありがとう」

続いて幸助の声をかけたのは王都の魔道具店店長アリシアと、レストランオーナーのカレンだ。

今日のために、王都からわざわざやって来てくれた。

二人とも従業員がそれなりにいるので、店長が長期間抜けても店は回る。

「わざわざありがとうございます、遠くから」

「全然気にしてないよ。こうやって二人で来ることもできたしね」

「はい。その通りです」

笑顔で顔を合わせるアリシアとカレン。  
久しぶりに友人と旅行を兼ねてのパーティー参加だ。  
二人の店は、幸助が関わってからそれほど時間は経過していない。  
今後の発展が期待されることだ。

アリシアとカレンが料理のあるテーブルへ向かうと、幸助の前からは人がいなくなった。

さて、自分も料理に手を伸ばそうと思った時、魔法書の番人アレ  
ストリアと視線が合った。

言葉は交わさない。

だが、視線を交わすだけでお互いの気持ちは通じる。

あの表情は、これからもキャラメルを持ってこいという顔だ。

幸助は黙って頷く。

「コースケさん、お疲れ様」

「サラもお疲れ様」

友人たちのお祝いの嵐から解放されたサラが近づいてきた。

幸助の横に立つと、その腕をとる。

お互い顔を見合わせると、サラは恥ずかしそうにはにかむ。

そんな姿がまた愛おしく感じる幸助。

「私たちこんなに多くの人たちのお店を改善してきたんだね」  
「だねえ。僕も信じられないくらいだよ」

感慨に浸る幸助とサラ。

ここにいる店主たちは、幸助と出会うことで人生まで大きく変化した。

店主だけでない。家族や従業員たちの人生も変わった。

それは、その店の商品を買う顧客たちすべてにも影響している。

それもこれも、幸助が今まで通ってきた過去があつてこそだ。

心の中でそのこと思い起す。

（職場の先輩には感謝だな。右も左も分からなかった僕を、自立できるまでに育ててくれたんだから……。でもやっぱり魚屋に生まれなければこの仕事をしてなかったんだし。人生ほんとにどうなるか分からないよなあ。ってことは両親には感謝しかないな。

親父、母さん。とうとうこの日を迎えることができました。この姿を見せられることができなかつたのは残念だけど、僕は幸せです。育ててくれてありがとう。生んでくれてありがとう。これからもこの世界で精いっぱい生きていきます。応援してください！）

幸助は集う人たちの笑顔を眺める。

カレンは念願のカルボナーラに舌鼓を打ち、アレストリアとパロはケーキでとろけている。

早くしないと自分たちの分がなくなりそうだ。

「サラ。僕たちも食べようか」

「うん！」

二人はフォークを手に取ると、料理の争奪戦へ参戦する。

こうして、幸助の異世界奮闘劇は一つの区切りを迎えることとな



った。

様々な店を改善してきた。

大きなことにも巻き込まれた。

これから先、もっと大きな案件に関わることは間違いない。

強い人脈を手にする事ができた。

使いきれないくらいのお金も手にしている。

そして一生を添い遂げたいと願う女性　サラとも結ばれた。

だが、これからも幸助のポリシーが変わることはないだろう。

それは困った商売人の力になりたいということ。

商売人の笑顔を取り戻すため。

きっとこれからも町のどこかで宣言する違いはない。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」

かいぜん！　～異世界コンサル奮闘記～

完

## 8・エビローグ（後書き）

とうとう完結しました。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

こんなに多くの方に読んでいただくことができ、感謝の念にたえません。

連載を始めたのは約一年前。

自分の専門分野である商売をテーマに、流行りの異世界物を書いたらどうなるのだろう。

連載を始めたのはそんな軽い気持ちからでした。

ですが、いざ書いてみると難しいものですね。

幸助の異世界で生きる目的が弱い。

キャラが思う通りに動いてくれなかった。

世界観の練り込みがあまりなかった。

そもそも異世界に行く必要があったのか。

などなど……。

反省点は多々あります。

それでも、これだけの方が読んでくださるといするのは力になりました。

初めてのポイント、コメント、ランキング入り、書籍化打診の知らせが入った時など、一喜一憂したことを昨日のことにように思い出しました。

当初はもっと続ける予定だったのですが、業種やキャラは違えどお店で取り組む改善手法など、それほど大差ないことばかりです。

原則は、集客して買ってもらう。その客に繰り返し来てもらう。これだけです。

同じ手法を物語で繰り返し使ってもマンネリ化しそうだったので、このあたりがやめ時かなと思った次第です。

本作の舞台は産業革命前夜です。

これからもどんどん新しい魔道具が出て、人の暮らしを豊かにしていくことでしょう。

それと同時にいろいろ失う人も出てくるのは間違いありません。魔道コンロのライバルとなった薪屋などように。

世界観としては未来の地球という設定になっています。

科学文明が衰退し、魔法文明が勃興したという設定です。

場所はスペイン辺り。

それに気づいた幸助が、ここから日本まで冒険の旅に出たりという別な話も思いつきましたが「改善」というテーマとかけ離れるのでそれは止めておきます……。

サイドストーリーなどを更新することはあるかもしれませんが、本編はこれにて完結とします。

本当にありがとうございました。

秦本幸弥

後日談・レミィのレストラン    イラストあり（前書き）

第8章 高級レストラン編のキャラ「カレン」は書籍版では「レミィ」となりました。

「久しぶりだなあ、ここに来るの」  
「うん！」

幸助とサラは馬車に揺られながら、ゆっくりと流れる景色を眺めている。

目の前に広がるのは大都市だ。  
二人は、新しい魔道具販売の手伝いのため、王都へやって来た。  
季節は春。柔らかな風が二人の頬をなでる。

「コースケさんの授章式以来だもんね。それに……」

視線を遠くにやると、一段高いところに建つ立派な王城が視界に入る。

幸助がサラへ想いを告げたバルコニーも、もちろん見える。

「思い出すよね、あの日のこと」  
「そ、そうだね……」

そう言いつつ頬を朱に染めるサラ。  
あれからまだ半年しか経過していない。これまで二人は仕事は控えめにし、新婚ホヤホヤの甘い生活を堪能していた。  
今回が久しぶりのまとまった仕事となる。

しばらくすると、馬車は王都の停留所へ到着した。  
ここからは徒歩の移動となる。

「さて。今日はもう時間が遅いから魔道具店は明日にして、レミイさんの店に食べに行こうか」

「うん、そうしょー!」

「楽しみだなあ。レミイさん、美味しい食材見つけてるかなあ」

幸助がレミイの店の改善を終えた直後、レミイは性に合うからと食材探しの旅に出た。

あれから半年が経過している。

もしかしたら新メニューの一つや二つは出来ているかもしれない。期待に胸を膨らませつつ、二人は大きな石造りの建物の間を縫うように通っている道を進む。

「コースケさん、レミイさんには会えるかなあ？」

「どうだろう。ずっと旅しそうな勢いだったから、お店にはいないんじゃないかなあ」

「そっか……残念だなあ」

そんな会話をしつつ歩くこと数十分。気品あるたたずまいの店が見えてきた。

ドアを開けエントランスに入ると、ウェイトレスが二人を迎える。

「いらっしやいませ……。あつ、コースケさん！ お久しぶりです」

声をかけてきたのはウェイトレスのひとり、セリカだ。

「セリカさん、お久しぶりです」

「お久しぶりです、サラさんもお元気そうですね」

「はい!」

「今日はお食事ですか？」

「はい。久しぶりにおいしい料理を食べに来ました」

「ありがとうございます。ではご案内いたします」

セリカに案内され、エントランスを抜け客席へと向かう二人。程なく目に飛び込んできたのは、ほとんどの客席が埋まっている賑やかな光景だ。

「賑わってますねえ」

「コースケさんにお世話になって以来、どんどんお客様が増え、ずっとこのような状況なのです」

東京で仕事をしていた頃は、コンサルタントがいなくなるとあっという間に元の状況に戻る店も見てきた。

だが、ここは違う。それを継続するだけでなく、発展させるのはレミイを始めスタッフたちの努力の賜物だ。想像以上の状況に幸助の頬はゆるくなる。

「順調なようでホッとしました。ところで……セリカさんのご両親は来てくれましたか？」

セリカの両親は「行けば笑顔になれる店になったらまた行きたいな」と言っていた。

セリカが幸助へ伝えた何気ないひと言が、改善への大きな足掛かりとなったのだ。

幸助の質問に、満面の笑みを湛えつつセリカは口を開く。

「もちろんです！ とってもとっても喜んでくれたのですよ」

「それを聞いて安心しました」

「はいっ！ ではこちらの席でしばらくお待ちください」

席につき改めて店内を見渡すと、皆、楽しそうな表情で料理に舌

鼓を打っている。

そのテーブルの間を縫うように、多くのウェイトレスが、料理を手に行ったり来たりしている。顔の分からない従業員もたくさんいる。景気が良くなってから雇われた従業員であろう。

「コースケ。久しぶり！」

しばらくサラと話をしていると、突然幸助を呼ぶ声があった。声の方向へ振り返る幸助。

そこにいたのはレストランのオーナー、レミイだ。

しっかりとウェイトレス服に身を包んでいる。

そして今日も手入れの行き届いた立派な尻尾が、ゆっくりと揺れている。

< i 1 8 9 6 2 3 — 1 4 6 9 2 >

「あれ？ レミイさん、見えたんですね」

「むう、久しぶりに会ったっていうのに、開口一番それ？ つれないなあ」

寂しげな表情で視線を斜め下へ落とすレミイ。

「もう、コースケさん、失礼だよ！」

「あ、いや。旅に出てて会えないものだと思いますので…  
…つい」

慌てて取り繕う幸助。

続けてフォローの言葉を入れようとすると、レミイの顔がパツと明るくなり幸助へ視線を送る。



「あはは、全然気にしてないよ。今日はね、ウエイトレスが三人も休んじゃったから久しぶりに手伝ってるんだ」

「そ、そうだったんですね。レミイさんに会えてよかったです」

「あはは、あたしもだよ。それよりもどうなの？ 新婚生活は」

いたずらっぽい目でそう訊くレミイ。

新婚相手には定番の質問だ。

「あつ、えつととですね……ぼちぼちとやっていますよ」

「ぼちぼちって何よ。もっと具体的に」

「具体的に……」

返答に困る幸助。

サラは隣で顔を赤くしている。答えは期待できないようだ。

そんな二人にお構いなしとばかりにレミイは続ける。

「えつとなんて言うんだっけ……。そうそう、サラのことモフったりしてるの？ あたしの尻尾みたいに」

「えつ！？」

以前、幸助だけが王都に残りサラがアロルドの店へ帰った時、レミイの尻尾をモフらせてもらったことがある。それはサラには内緒にしていた。

レミイからの爆弾発言に固まる幸助。

「も、モフるって……毎日仲良くしてますよ。ね、サラ」

「う、うん！」

サラにモフる物などついていない。

それにサラはモフるなどという言葉は知らないだろうと、とりあ

えずごまかす幸助。

「ふうん、仲が良かったのは良いことだ。ところでコースケ」

「つ、次は何ですか？」

「冗談はこれくらいにして、相談があるんだけど。ちょっとだけいいかな？」

「もちろん」

話題がそれたことで胸をなでおろす幸助。

幸いサラからの追及も来ていない。

「顧客データベースを作ってるでしょ。それがさ、増えすぎて探すのも管理するのも大変になってきちゃったんだ。どうしたら良いかなあって悩んでるの」

レミイの相談とは、顧客データベースのことだった。

確かにこの客の入り方からすると、名簿の数もうなぎ登りというのは想像に難くない。

コンピュータの無いこの世界、情報量が増えると管理も大変だ。

「そういうことですか……。えっとですね、レミイさん。情報にも鮮度があるんです」

「せんど……？」

「コースケさん、鮮度って食材の？」

小首をかしげるレミイに、不思議そうな表情を浮かべるサラ

食材でもないのに鮮度があるという言葉にピンと来てないようだ。

「はい。鮮度です。一回だけ来店してくれてその後、一定期間来てないお客さんは、今後来てくれる可能性は少ないですし、営業をか

けるにしても効率が悪くなってしまいます。その名簿は鮮度が落ちるといえます。だからその名簿は箱に入れて倉庫に片づけてもいいと思いますよ」

幸助の提案は、古い名簿の整理だ。

もちろん現状が満席に近い状況だからこそ、できることでもある。そうでない場合は、古い名簿も活用して来店促進を必死に行うか、根本的な戦略を変えなければならない。

「む、そういう割り切り方もあるんだね。コースケに聞いて良かったよ。早速そうしてみる」

「また何でも聞いてくださいね」

「うん！」

そう返事をする、レミイは手にしていたメニューを広げ、幸助とサラの間へ置く。

「さて、今日は何を食べたい？ オススメは新作の肉料理なんだけど……」

「お、新作あるんですね。もちろんそれを食べてみたいです」

「私も食べてみたいです！」

「さすがだね。そうこなくっちゃ！」

新作を中心にお任せコースでオーダーをすると、レミイは席を後にする。

その後姿には、大きく立派な尻尾が揺れている。

「……ねえ、コースケさん」

「うん、なに？」

「モフるって何？」

「あ、いや、その……。新しい料理、楽しみだね」  
「もー、ごまかさないの」

やはりサラは覚えていた。

先ほどの話が自然に逸れたが、今回はごまかしきれそうにない。  
観念した幸助は、恐る恐る口を開く。

「えっとね、レミイさんの尻尾、触らせてもらったことがあるんだ」  
「え！？」

大きく目を見開くサラ。

対して幸助は、やっぱりごまかせばよかったと後悔する。  
しかし、次に続くサラの言葉に幸助は拍子抜けする。

「いいなあ。私も今度触らせてもらおうかなあ」

サラもレミイの尻尾には興味があったようだ。

幸助の心配は杞憂であった。

「お待たせいたしました。アイスエールです」

タイミングよく、ウェイトレスが二杯のエールを持って来た。

ずっと二人の前にグラスを置くと「ごゆっくり」と声をかけ、立ち去る。

「では、乾杯」

「かんぱーい」

軽くグラスを合わせると、口もとで傾ける幸助。

長旅で乾いた幸助の喉に冷たいエールが染み渡る。

「うん。やっぱり高級店のエールは違うなあ」

エールに限らずではあるが、醸造家により味は大きく変わる。アロルドの店で扱ってるエールとは違う豊かな香りに、幸助は目尻を下げる。

「このエール、すっごくおいしくなったね！」

「うん。これは料理にも期待だぞ」

それから幸助とサラは、提供される絶品メニューの数々に、至福の時間を過ごすのだった。

後日談・レミィのレストラン      イラストあり（後書き）

幸助がレミィの尻尾をモフる至福のシーンは、書籍版3巻にイラストとともに掲載。お楽しみに！

久しぶりに王都を訪れた幸助とサラ。

レミイの店でおいしい食事を堪能した翌日、ポカポカする春の陽気の中を魔道具店へ向かう。

「コースケさん。レミイさんの尻尾、モッフモフだったね！」

「でしょ。病みつきになるよね、あの柔らかさ」

「うん！ 今度会ったらまたお願いしてみよっかなあ」

サラはそう言いながら恍惚の表情を浮かべる。

レミイの尻尾を相当気に入ったようだ。

「また明日から食材探しの旅に出るって言ってたから、次はいつになるか分からないけどね」

「うーん、残念……」

サラはがっくりと肩を落とす。

昨日からことあるごとに「またモフりたい」などと言っているが、しばらくはお預けだ。

「それで今日の仕事なんだけどさ、サラは何かアイディア浮かんだ？」

王都訪問の目的はモフることではなく、新しい魔道具を販売するためだ。

幸助の質問に、サラは黙って首を横に振る。

「コースケさんは？」  
「それが全然見当つかないんだよなあ」  
「コースケさんでも思いつかないんだ」  
「うん……。ま、皆で知恵を出し合ったらいいアイディアも出るかもしれないよ」  
「そうだね！」

そんな会話をしつつ歩くこと数十分。幸助とサラは魔道具店へ到着した。

店に入ると、既に数名の客が店内にいた。

魔道コンロや冷却庫はもちろん、今やコンロ並みの売れ筋となった温冷ポットなどの品定めをしている。

「いらつしゃいませ、コースケさん！ お待ちしておりました」

二人にそう声をかけたのは、青を基調とした制服に身を包んだアリシアだ。

< i 1 9 1 2 4 4 — 1 4 6 9 2 >

「お久しぶりです、アリシアさん」

「サラさんも、お久しぶりです」

「こんにちは！」

「その後、調子はどうですか？」

「はい。事故の影響はもうありませんし、絶好調です」

事故直後も、少量ではあるが偽魔石が出回ることがあった。

それらも、領主の紋章入りのものが普及するにつれ消えていった。それに代理店の展開も順調に進んでいる。

その繁盛具合は、飛ぶ鳥を落とす勢いだ。



「それを聞いてホツとしました」

「はい！ それもこれもコースケさんのおかげです。どうぞこちらへ」

アリシアに案内されテーブルに着くと、従業員がよく冷えたお茶を持って来た。

これから熱くなる季節、このサービスは冷却庫のアップールに欠かせない。

幸助はグイツとお茶を一気飲みし、ふうと一息つくと口を開く。

「では本題ですが、例の魔道具、もう届いてますか？」

「はい。大量に届いております」

そう言いつつアリシアは、用意していた箱から魔道具を取り出す。それは、円盤形で中央が盛り上がった金属質のものだ。

外周には真つ赤な魔石が囲うように嵌められている。

その姿はまるで小さなUFOのようだ。

外見から用途は見当もつかない。

「私たちには販売方法がまったく思いつきませんでした。ですからコースケさんの到着、とても待ち遠しかったのです」

そう言いつつ、期待のまなざしで幸助を見つめるアリシア。

幸助は今までも多くの問題を解決してきた。

だからこそ期待値はきわめて高い。

だが、今のところアイディアは浮かんでいない。

アリシアの期待を裏切るようで申し訳なさそうに、幸助は口を開く。

「えっと、実はですね……残念ながら僕も全く思いつかなかつたんです……」

「ではサラさんが考えてくださったのですね」

サラも申し訳なさそうに「いいえ」と答えると、アリシアの顔は急に青くなる。

「それでは、この魔道具はまったく売れないということですか!？」

「今のままでは……」

「えええええ!？」

頬に両手を当てムンクの叫びのようになったアリシアは、数秒の硬直の後、力なくテーブルへ突っ伏す。

「え、えっと……アリシアさん。だからこそ皆で一緒に考えようと思ってお店に来たんです」

「そうですよ、アリシアさん」

テーブルの上に鎮座する魔道具。元はといえばニーナの暴走の末に製品化された物である。

相変わらず需要は完全無視。

だが思いついてしまったものは仕方ない。

業績が絶好調の今、魔道具店にはニーナの暴走を止められる者はいないのだ。

もちろん熱操作を主軸に据えた、実用的な商品を開発している魔道具職人もいる。それにモーターの代わりになる回転運動をする魔道具も、実用化目前だ。

だからこそニーナは、伸びやかにフリーダムな商品開発をされているのだ。

そのしわ寄せは、こうやって現場に来ているのだから……。

テーブルに突っ伏し十数秒。ようやく再起動したアリシアが幸助へ視線を送ると口を開く。

「では……どのようにすれば良いのでしょうか……？」

「まずは、この魔道具を欲しくて欲しくて仕方ない！　と思ってみましょう。そこに突破口が見えてくるかもしれません。僕はこの魔道具が欲しくて仕方ないんだ。一年間の生活費に当たる金貨二十枚を払ってまでして……」

「……………」

沈黙すること約一分。

「どう、サラ。欲しくなった？」

「ぜんっぜん」

そう力強く答えるサラ。

それを聞いたアリシアは、うんうんと何度も頷く。

サラ同様に欲しいとは思えなかったようだ。

皆の冷めた視線が残念な魔道具に注がれる。

「困ったなあ。こんなの何に使うんだろう」

そう言いながら幸助は、魔道具に備えられた赤いスイッチを押す。程なくすると中央部がほんのり暖かくなるが、それだけだ。

コンロのように熱くはならないし、暖房としても使えない。

他にも青、緑、茶、白といったスイッチがあるが、どれも役に立つ動作をしない。

しかも白いスイッチに至っては、十秒ほど光つたらすべての魔石が魔力切れを起こす。

照明の代用にもならない。

「確かに技術はすごいと思うのですが……魔道具は便利でなければと思うのは私だけでしょうか」

「アリシアさんのおっしゃる通り、僕もそう思います。いくら全属性が発動されるといっても、これではどうしようもないですよね……」

生活が全く便利にならない魔道具。

それでも製品化されたのは、卓上サイズで全属性の魔法を組み込むことに成功したからだ。

今まで形になった魔道具は、熱と風の操作だけであった。

それが一気に全属性の術式化に成功したというのは、技術的には大きな進歩である。

幸助の頭の中に「フフフフツ」と不敵な笑みを浮かべるニーナの顔がよぎる。

ちなみに先ほどの光は、治癒魔法が発動した際に現れる光である。だが残念ながら傷を癒すほどの出力はない。

研究としては大きな成功であるが、これを製品化するなど勇み足にもほどがある。

「それにしても領主様はよく製品化の許可、出しましたよね」

「はい。伯爵は大絶賛されたそうですよ」

「ああ……そういえばかなりの魔道具オタクでしたね」

唯一ニーナの暴走を止めることのできる領主は、ニーナ寄りの人間だったことを思い出す幸助。

例え幸助が反対しようと、これでは製品化は不可避である。だが、需要完全無視の魔道具を送り込まれたアリシア達は、たまったものではない。

王都だからといって、ポンポンと高額品が売れる訳でもない。売れそうもない商品を送り込まれ、売れと言われるアリシアの心労は想像に難くない。

それから話し合うこと数時間。

三人の表情には疲労感が漂ってきた。

しかしまだ具体的な販売プランは出ていない。

「はあ。どれだけ考えても結局のところ、全属性つてのが唯一の訴求ポイントか……」

「はい、どうやらそのようですね」

「もう、こうなったら『全属性の魔法を手中に』って触れ込みで、魔道具好きの貴族様に売ってみたらどうでしょう?」

そう投げやりに言う幸助。

「コンロや冷却庫は、便利になるという『体験』を買ってもらっているというのは、以前お話ししましたよね」

「はい。ですから今も定期的に体験会を開催しております」

「今回はそれは完全に無視します。だって、便利になんかならないんですから」

「え、ええ……」

幸助の物言いに引きつった表情を浮かべるアリシア。

だが、これは事実だ。

完全に二ーナの道楽の商品なのだから。

「ですが、全属性が手中に収められるという世界初の要素はあります。それを訴求するんです。仮にこれで売れなかったとしても、二ーナさんにはもう一度魔道コンロが売れなかった頃のことを引き合いいに出して、諦めてもらいますよ。技術だけでは売れないってことを」

「そう言って頂けると心強いです。では早速貴族家とつながりの深い商會に話をしてみます！」

方針が決まれば、アリシアの動きは速い。

その後、全属性の魔法が手中に収められるという魔道具の特徴は、すべてを手にしたという欲張りな貴族から熱狂的に支持されることになった。

だがそんな人はごく一部で、製造されたほとんどが不良在庫として埃をかぶったことは言うまでもない。

「アロルドさん。例のアレ、在庫ありますか？」  
「おう。もちろんあるぞ」

王都での用事を済ませた幸助は、ほとんど寄り道をせず自宅のあ  
るアヴィーラ伯爵領に戻った。

その翌日アロルドの Pasta 亭に寄ると、いつもの物を受け取る。

「助かります。もう、一カ月もご無沙汰だから何言われるのかヒヤ  
ヒヤしてますよ」

「ま、それだけ気に入ってくれるつつうことは、俺としては嬉しい  
がな」

「これのおかげで距離が縮まったってのもありますし、アロルドさ  
んには感謝ですよ」

「お、おう」

幸助のお世辞にアロルドはポリポリと頬をかく。

幸助は受け取った物をカバンにしまうと、慌ただしく店を後にす  
る。

目的地は、外壁のすぐ外にある小さな森だ。

「うわあ、また緑が濃くなってよ。相変わらずすごい場所だよな  
あ」

季節は初夏。

森に入ると、濃い緑の香りが幸助の鼻をつく。

森の面積こそ狭いが、そこに林立している木々は皆、風格が漂っ

ている。

日本であればパワースポットと呼ばれていたのかもしれない。

足元は湿っており、岩にはびっしりと苔がこびりついている。

時々聞こえる虫や鳥の鳴き声が若干の不気味さを醸し出しているが、幸助は慣れたものだ。

ぐんぐん奥へ進むと、建物が見えてきた。

アレストリアの魔法書店だ。

店といっても、その立地と特殊な商品の性格ゆえ来店客はほとんどいない。

半年ほど前に幸助が手伝い財務卿の令嬢へ売って以来、新たな客はいない。

だが、その一冊の価格は日本円にしておよそ一千万円。アレストリアなら十年間は生活していける。

次を売り急ぐ必要はない。

「久しぶりでケロちゃん怒ってないといいけど」

幸助は古めかしいドアを開けると魔法書店へ入る。

相変わらず結界は幸助を拒む気配はない。

薄暗い店内を奥へ進むと、アレストリアはいつも通り魔法書のメンテナンスをしていた。

「ケロちゃん、久しぶり！」

その声でアレストリアは手にしていた魔法書をパタンと閉じ、幸助へ視線を送る。



「何が久しぶりじゃ。これほどまでに妾を待たすとは、お主も大物になったのう」

不機嫌そうな表情でそう言うと、両手を幸助に差し出すアレストリア。

「これでも急いで帰って来たんだけどなあ……」

幸助は苦笑しつつもカバンからキャラメルを取り出し、アレストリアに手渡す。

これくらい自分で買いに行けばいいのにと言ったこともあるのだが、基本的に引きこもり体質のアレストリア。幸助が連れ出さない限り外に出ることはほとんどない。

それに、これがあれば店に幸助を呼ぶ口実にもなる。

アレストリアは受け取ったキャラメルの包装をはがしパクリと口に放り込むと、頬に手を当てうつとりとした表情を浮かべる。もう先ほどまでの不機嫌さは微塵も感じられない。

「恋い焦がれておったのじゃぞ。この味」

それからモゴモゴと口を動かし続けること十数秒。

キャラメルは溶けて無くなったようで、二つ目を口に入れる。

「ねえ、ケロちゃん」

「何じゃ？」

口の中でキャラメルを転がしながらアレストリアは返事をした。幸助はキャラメルを渡しに来ただけではない。

ここへ来たのには、ちゃんとした目的がある。

「そろそろ中級魔法をやってみたいんだけど、どう思う？」

「うむ……」

考えるそぶりをしつつも、口の動きは止めない。

キャラメルが溶けて無くなったところで、アレストリアは幸助の質問に答える。

「少し早い気もするがお主ならよかるう。ついて来い」

そう言い歩き出すアレストリアに続き、幸助も店の奥に進む。

床を踏むごとにギイ、ギイ、と鳴く暗く不気味な廊下を抜けると、体育館のような広い空間に出た。

ここは魔法書を使い魔法を身につけた者が訓練をするための空間だ。

壁や天井は多少の攻撃を受けてもビクともしない、耐魔法性がある。

幸助は今までのトレーニングで、全属性の初級魔法が発動できるようになっている。

それらは皆、実用に耐えられるレベルだ。

つい先日多くの人たちの頭を悩ませた、残念な魔道具とは違う。

その中でも幸助が得意なのは熱操作の魔法だ。

魔道具でなじみが深いからかもしれない。

火を出したり氷を生み出すことができる、何かと便利な魔法である。

「よし。まずは初級の火魔法を出してみよ」

「はい」

幸助は人差し指を天井へ向けて立て、指先に神経を集中させる。イメージは松明の火だ。

もう何百回とやっているの、その発動は慣れたものだ。

意識を集中して一秒と経たず、指先数十センチの空間にソフトボール大の火球が現れる。

「よかるう。して、自由に動かせるようになったか？」  
「もちろん」

幸助は指を左右へと振る。

その動きに合わせ、火球も左右へ動く。手品シヨウのようだ。

最後に手首をクンと前へ捻ると、火球は壁にある的めがけて一直線に飛び、ど真ん中にぶつかり散った。

「悪くない。他の形状はどうじゃ？」

「はい。この通り」

そう言つと幸助は、指先に次々と矢の形や小さな円盤状の火を成形し、的へ向けて飛ばす。

ここまでくると、かなり魔法使いっぽい。

これができるようになった時は、相当興奮したことを覚えている。

「うむ。中々の腕になったのう」

「ありがとうございます。でも、これだけだとまだ心配で……」

幸助が今使った魔法は、基礎的なものだ。

人に襲われたときの牽制にはなるが、攻撃力はそれほどない。

立场上、誰かに狙われる可能性がないともいえない幸助。これだ

けでは心もとない。

「そうじゃな。では、中級魔法の指導をする」

「お願いします」

「とは言つても、初級と中級の違いは注ぐ魔力量の違いだけじゃ」

「それは前聞きましたけど、どうやって魔力量を増やすんですか……？」

「そんなもん、魔法書によりお主の体内で既に解放されておる。自身の内なる声に耳を傾けてみる」

「うーん……」

抽象的なことを言われ悩みこむ幸助。

一時間ほどあれこれ試してみるのだが、中級魔法は一向に発動される気配がない。

それでも魔力は消耗しているようで、疲労ばかりが積み重なる。

「はあ、うまくいきませんね……」

「鈍いのう。だからイメージが大事だと前から言っておるじゃろ。

何か今までに見たことはないのか。他人の中級魔法なり魔法でなくとも大きな火炎を」

他人の魔法など見たことはない。だが、大きな火炎なら見たことがある。生ではなく映像の中でだが。

「そつだ。火炎放射をイメージしてみよ！」

幸助は手のひらを的へ向け、火炎放射器のイメージをする。

動画で見たのは消防車の放水とガチンコで対決するものだ。どちらが勝ったかは覚えていない。

火が緩やかな弧を描いて前に伸びていくイメージをしつつ、手先

に意識を集中する。  
すると、今までにない熱いものが全身から右手に集まってくるのを感じる。

その瞬間。

「ゴー！！」という音を立て、竜のような火炎が的へ向かって伸びていく。

そのサイズは火炎放射器の比ではない。

「うわっ！」

幸助がその声を上げると、炎の竜は的に届く前に霧散した。

「自分の魔法に怖気づいてどうする。このへっぴこめが」

「……こ……これが中級魔法!？」

「そうじゃ」

「初級と違いすぎませんか？」

「そんなこと言ったら上級は腰を抜かすぞ。この空間など余裕で炎で埋め尽くされるくらいじゃからな」

「そんなに……」

幸助が魔法を習得する目的はあくまでも護身だ。

それならば、覚えるのは中級まで十分だと思っただけの幸助であった。

それからしばらく練習をすると、中級魔法もうまくコントロールできるようになってきた。

手のひらから火炎放射をしたかと思えば、今度は直径一メートルはあるうかという火球を生成する。それより小さな火球の生成もできるようになった。魔力量をうまく調整できるようになった証だ。

「やはりお主、センスは良いのう。短時間でここまで制御できるよ  
うになるとは」

「ありがとうございます。でも中級はさすがに体にきまずね……」

発動する魔法の規模に応じて、体内の魔力もまた多く消費される。  
長時間の運動とは違う疲労感に襲われ、その場に座り込む幸助。

「ふう、疲れたな……」

「軟弱者めが。先の小娘など休みなくぶっ通しで修練に励んでおっ  
たぞ」

小娘とは、幸助が魔法書購入の手伝いをした財務卿の令嬢のこと  
だ。

「彼女は時間も限られてたからね。もうお昼の時間、過ぎてるんじ  
ゃないかな。お腹もペコペコだよ」

幸助がそう言った瞬間。  
ぐう。

幸助の言葉に呼応するように、アレストリアの腹の虫が鳴った。

「ケロちゃんもお腹空いてるんじゃない」

「へ、減ってなどおらぬ」

「何か食べたい物ある？」

再びぐうと腹が鳴くと、アレストリアは観念したように腹をさす  
る。

普段アレストリアは、ため込んだ食料を自分で調理している。  
すぐ近くに市場ができてからは気軽に行ける飲食店が増えたのだ

が、外食は一切しない。

唯一の例外は、幸助と一緒にいる時だけだ。

「そうじゃなあ……久しぶりにアレが食べてみたいのう」

「あれって？」

「ほれ、アレじゃ。そなたと初めて食べた、旗の立っておる柔らかな肉じゃ」

「ああ、ハンバーグのことね」

「そうじゃ。それじゃ！ 早速行くぞ」

訓練場を後にし店舗へ戻ると、アレストリアはお出かけ用のカエルフードのポンチョをかぶる。

< i 1 9 2 8 9 9 — 1 4 6 9 2 >

その後、アロルドの店でアレストリアは久しぶりのハンバーグ（くまさん）に舌鼓を打つのだった。

アレストリアを魔法書店に送り届けると、幸助は何件かの野暮用をこなし、夕方、自宅に帰る。

「ただいま」

「お帰りなさい、コースケさん！」

パタパタと幸助のもとへ駆け寄るサラ。その手には一通の手紙が握られていた。

「コースケさん。はい、これ。領主様からの手紙だよ」  
「領主様から？」

アンナから手紙が届くことはよくあるが、領主からは初めてだ。封筒を見ると、アヴィーラ家の封蝋が施されており、その横にはアルフレッドのサインも書かれていた。

領主からで間違いない。

幸助は多少の不安を感じつつ、封を開け手紙を読む。

その様子を神妙な面持ちで見守るサラ。

「……何て書いてあるの？」

「仕事の依頼だったよ。よかった、難しい話じゃなくて」

「どんなお仕事？」

「二週間後に財務卿の令嬢が中級魔法に挑戦するんだって」

「またアレストリア様の店に送迎するってことだね」

「そういうこと」

中級の魔法書ならば、その価格は数倍に跳ね上がる。

うまくいけば、幸助が生きている間は魔法書店は安泰となる。

悪い話ではない。

「さて、そろそろ晩御飯の用意をしよっかな。今日はコースケさんの好きなステーキだよ。お父さんに特別いいお肉をもらんだ！」  
「えっ、ほんとに!？」

昼はアレストリアを連れてアロルドの店に行ったが、幸助が食べたいのはトマトバジルパスタ単品だ。

サラの作る普段の食事は淡泊なものが多い。肉の塊を食べるのは久しぶりとなる。



「楽しみにしててね！」  
「うん！」

その後幸助は、愛妻の料理を堪能。  
食後はリビングで恒例となったおしゃべりタイムを過ごす。

「そういえば今日もお店を手伝ってほしいって人がウチに来たよ」  
「どんな人？」

「親から店を継いだんだけど、面倒くさいから自分は何もせずにお金が入るようにしたいって」

「……そりゃダメだね」  
「私もそう思う」

今の屋敷に引っ越しをしてからというものの、幸助の噂を聞きつけた人がよく来るようになった。

だがその多くが、幸助任せにして楽をしようという人ばかりだったため、今では知人の紹介しか受け付けていない。それに、忙しくて新しい仕事を請ける余裕もない。

「あとね薬師さんも来たよ。新しく店を出したいんだって」  
「へえ、珍しいね」

「うん。家で少しだけ調査してご近所さんに渡してただけど、それが好評みたいで店を出したらって言われたみたいなの」

今まで傾きかけた店の改善ばかりで、新規出店は携わっていない。それに領内にはまともな薬店がない。  
少しだけ興味を持つ幸助。

「そうなんだ。今までにないタイプの話だね」  
「うん。私もちよつと気になって。コースケさんいないからまた来てねって言うておいたよ」  
「そっか。ありがと」

サラは空になった幸助のカップにポットからお茶を注ぐ。  
このポットは保温効果のある魔道具だ。

「ねえ、コースケさん」

「なに？」

「私たち、一緒になってもう半年も経つんだね」

「あつという間だよ」

「結婚パーティーのこと覚えてる？」

「もちろん」

「お父さん、大泣きだったよね」

「うんうん、よく覚えてるよ。アロルドさんでも涙流すことがあるんだって」

「あはは。そりゃ人間だもの」

「だね」

「でもよかった。コースケさんが私を選んでくれて」

「僕だって。サラがいなかったら野垂死んでたかもしれないんだし  
さ」

「コースケさんだったら私が居なくてもきつとうまくやってたよ」

「そうかなあ」

「そっだよ」

それから話題は尽きない。

今日起きた出来事や日本での話などに花を咲かす。

どれくらい経っただろうか。

幸助はカップに少しだけ残ったお茶を飲み干すと、ふつと一息つく。

「さて、そろそろ寝ようか。明日も早いし」

「うん。そうだね」

二人は揃って寝室へ向かう。

リビングに掛けられた結婚記念パーティーを描いてもらった絵が、そんな二人の後姿を見送っている。

<i11929000 | 14692 >

後日談・アレストリアの魔法書店

イラストあり（後書き）

## 1 行列のできる商売商談所（前書き）

新章です。

久しぶりに書いてみました。

作風ちよつと変わったかもしれません。

末尾にお知らせがあります。

### <主要キャラ紹介>

幸助<sup>コスケ</sup>：主人公。冴えないコンサル。

サラ：パスタ屋の娘。前章で幸助と結婚。

アロルド：パスタ屋を経営。サラの父。料理チート。

## 1・行列のできる商売商談所

「ヒッヒッヒッヒ……」

大きな杓子を手にした赤髪ポニーテールの小柄な女性が、ポコポコと深緑色の泡を立てている鍋をゆっくりとかき混ぜている。作られているのは毒か呪術用の供え物か。はた目には分からない。

女性は味見もせずに次々と素材　これも靈力の宿ったなにかであるうか　を投入。

一瞬にして鍋の中の色は不快感を、いや、妖しさを増す。

「最後に隠し味にお父さん特製のコレを入れて……ヒッヒッ……」

隠し味ということは、なにかの料理であろうか。しかし、女性が味見をしている様子は一切ない。

味なんてお構いなしとばかり、女性が最後の素材である赤色の液体を鍋へ投入した瞬間

「へっくしゅん！」

まっただこうまけ  
松田幸助は、三十畳くらいはあるだろう広いリビングに響き渡る盛大なくしゃみをする、鼻をすすする。

柔らかいティッシュがないため、何度も拭いた鼻の下は真っ赤だ。

そう、幸助は数年ぶりに本格的な風邪をひいてしまったのだ。も

う一週間もこの状態が続いている。この世界に来てから初めてのこ  
とだ。

三年前、幸助は日本のコンサルティング会社で残業中、不意に異  
世界へ召喚されてしまった。

右も左も分からない状況で匂いにつられて入ったパスタレストラ  
ン。ここで、運命を変えることになるサラやアロルドと出会った。

潰れかけだったそのレストランを、持ち前のコンサルティング知  
識で経営改善に成功。それから幸助は日本に帰る方法を模索しつづ  
も、この世界で経営に困っていた店の経営を次々と改善。その名は  
国王にまで届くことになった。

結局、日本に帰る手段はないことが判明したことで、幸助はこの  
世界で生きていくことを決意。コンサルティングの助手でもあり想  
い人でもあったサラと結婚することになった。

それから約一年が経過している。

「サラさんや」

「ヒツヒツピ。なんじゃの？ コースケさんや」

「なんで薬を煎じる時、そうなるの？」

「え、えつとね……こうした方がよく効く薬になるかなあって思っ  
て」

幸助の言葉でスイッチが切り替わったサラは、はにかみながらそ  
う答えた。

「そ、そうなんだ……」

「はい。どうぞ、コースケさん」

サラは幸助へ愛情たっぷりのカップを差し出した。そこからは、湯気ではない瘴気のようなものが立ち上っている。そして少し遅れて届いた異様な臭気に、幸助は思わず顔をそむける。

「これ、本当に効くの？」

「お母さんに聞いたから大丈夫だよ！」

満面の笑みでそう答えるサラ。

しかし、目の奥が笑ってないように感じるのは気のせいだろうか。

「でも……薬草を煎じただけなのに、なんでこんな色してるの？」

幸助は、薬草茶といえば緑や茶色といった、日本でもおなじみのお茶のような液体をイメージしていた。実際に、昨日まではそうだった薬草茶が出されていた。

しかし今日、サラから差し出されたカップの中を見てみれば、どす黒い原油のような液体で満たされていた。

粘り気もあるようで、カップを揺らしてもプルンと揺れるだけで、非常に飲みにくそうでもある。

「薬草だけだと苦いでしょ？ だからお父さんのトマトバジルソースも混ぜてみたの。他にもいろいろね」

「ほら、コースケさん。早く飲んで、早く元気になりましょうね」

「……………」

サラは、カップを持つ幸助の手に自分の手を添えると、無理やり口へと流し込む。



「!?!」

その瞬間襲われる刺激に幸助は顔をしかめるも、ここで抵抗したところで辛い時間が長くなるだけだ。だから一気にその液体を飲み込む。

「う、うええ……み、水……」

良薬は口に苦しとはまさにこのことである。いや、苦いだけなく得も言われぬ複雑味が、幸助の精神力を削いでいく。

しかし、サラが効くと言っているのだ。きっとこれで安静にしていれば良くなるに違いない。

幸助は二杯の水を飲み干すと、ようやく一息つく。

「はあ、病院があつたらなあ」

カプセルに入ったよく効く薬を処方してもらえるのに。

「病院つてなに？」

「ケガとか僕みたいな病気を治してくれる場所のこと」

「風邪も治してくれる治療院みたいなところだね」

「そうそう」

この世界にも治療院はある。治療術師が魔術を使って、有料で治療する場所だ。

しかし、それで直せるのはケガのみ。病気を治すことはできない。

だから風邪を引いた場合は、こつやつて自前で薬草を煎じるか、薬店で薬を買うことになる。

コンコンコン。

幸助がもう一杯、水を飲もうとしたところ、ドアのノッカーがたたかれる音がした。

「誰だろう？」

「コンサルティングの依頼だったら断っておいて。僕、もうダメ…」

「うん。分かった」

そう言ったサラは、玄関へと向かっていった。

幸助の名は、領内の商売人に知らない人はいないくらいの勢いで広まっている。結果、そのうわさを聞きつけて、幸助の家のドアをたたく人が定期的にやってくるようになった。

客が向こうからやってきてくれる。それはそれで営業する手間が省けるというメリットがある。しかし、もったいないことにその多くの依頼を幸助は断っている。

それは、あまりにも自分勝手な依頼が多かったからだ。

先日もこのようなことがあった。

「父ちゃんの店が大変なんだ。なんとかしてくれよ！」

食品品店を営んでいるという人の息子からの依頼だった。日本人だったらまだ中学校に通っているくらいの子頃だろうか。鬼気迫るその表情からは、深刻な様相を窺うことができた。

そんな少年が一人で来るのだ。父親は病気で倒れてしまったのだ

るうか。幸助は心配して質問する。

「それで、お父さんはどうしてるんですか？」

「仕事が面倒くさいって朝から酒飲んで昼には寝てる。だから売上がどんどん下がっちゃってるんだ」

「……」

「それで、コースケってやつに頼めば、働かなくても売上が増えるって父ちゃんが言ってたからここに来た」

朝から酒をあおるようになってしまった理由はなんだったのか。

もしかしたら、やんごとなき事情があるのかもしれない。

それでも、たとえそんな事情だったとしても

「本人にやる気がない場合は、なにをしたって無駄です。お父さんに、ご自身でここに来るように伝えてください」

「……ちえっ、つまんないの。俺も店番手伝わなくてよくなると思っただのにな」

少年は態度を翻し、それからも「ケチ」だの「守銭奴」などと悪態をつけて帰っていった。

商売において楽しんで儲かる方法などない。今まで改善してきた店も相応の努力をした結果、業績改善という果実を得ることができたのだ。やる気がなければ始まらない。

少年の父が本当に経営改善をしたいと願っているのなら、幸助のもとにやってくるはずだ。幸助はそう考えていた。

しかし、少年の父親が来ることはなかった。

店の名前も聞いてないから、潰れたかどうかも分からない。

一事が万事ではないが、こういった相談が、実に多かった。だから今日も、幸助はサラへ「コンサルティングの依頼だったら断っておいて」と言ったのだ。

玄関で来客の対応していたサラは、すぐに戻ってきた。

「サラ、誰だった？」

「またメデイスさん」

「あー」

薬店を営むメデイスは、これまでも何度かやって来たことがある。用件は、事業に出資しないかという話だった。

領内にはメデイスの店を含めて薬店が五軒ある。メデイスは空白地に自分の店を増やしたいとのことだった。出資さえしてくれるだけで助言も手伝いも無用。それだけで新店舗での利益の一分を幸助に還元する。出資金から計算すると、計算上の利回りは実に二十パーセントという美味しい話だった。

実はこれ。非常に怪しい出資詐欺のようなものだ。

それは領内での薬店の評判はすこぶる悪いからだ。並んでいる商品や価格はどこの店も同じ。しかも薬としての効果は極めて薄い。

曰く、まったく効果のない雑草を混ぜているから。

曰く、薬店同士が結託して不当に価格を釣り上げているから、なのだ。

だから似た店を出店するということが、無謀なこととは思えなかった。こうやってサラも自分で薬を煎じるくらいだから、その効果たるや推して知るべしである。

きつと、経営が苦しくなった。だからお金だけ幸助から引つ張り出そうと努力しているだけなのだろう。

「今日も一応断っておいたけど、また来そうな雰囲気」

「分かった。今度は僕がしっかりと断るようにはしておくよ」

「それまでに早く風邪、直さないとね。まだお薬、いっっぱいあるから……イヒッ」

「うっ……そうだね……」

一刻も早くこの風邪を治そう。

そう気合を入れる幸助であった。

## 2・謎の薬

「ねえ、コースケさん」

外出から帰ってきたサラが、あやしい笑顔を浮かべながら近づいてきた。

ここ最近、サラがこんな顔をするのは新しい薬を調合、いや、創作した時の顔だ。幸助は反射的に警戒する。

「ど、どうしたのかな」

例の滋味深いサラお手製の薬は、二日間かけて飲みきった。根性で。

しかし残念なことに、幸助の症状はそれほど改善しなかった。相変わらず鼻の下は真っ赤なままだし、熱も下がっていない。

だから今度はどんなものを投与されるのか。幸助の警戒はマックスにまで振り切れている。

「あのね、効きそうな薬を見つけてきたんだ」

どうやらサラお手製ではなく、外部で購入したものらしい。幸助は警戒のレベルを少しだけ下げる。しかしそれと同時に、今度は別な心配が頭をよぎる。

「市販の薬って、効かないのばかりじゃないの？」

「うん。私もそう思ってただけだね。これ、薬店じゃなくて市場にいた人から買ってきたんだ。なんとなくだけ……効きそうに見えるの」

「そっか……」

薬店でもない場所で買って来た薬。それはそれで怪しい。しかし「ほら」と言ったサラの手の上に置かれているのは、よく見るタイプの黒に近い深緑の丸薬だった。見た目は全く普通の薬と一緒に

「これ……」

幸助はその薬に違和感を感じた。

「どうしたの？」

「魔力を感じる」

魔法書店であるアレストリアの店の経営改善をした後。幸助は類稀なる魔法の素質があると認められ、アレストリアから秘伝の魔法書を授かった。今も修行中の身ではあるものの、幸助はある程度、魔力を感じ取ることができるようになっている。

そんな幸助の目には、薬の周りに緑色のモヤつとしたものが纏わりついているのが見えた。それでいて不快感は全く感じない、手にするだけですごく安心できる。そんな類の魔力だった。

「お薬って、みんな魔力を含んでるの？」

「いや、僕は初めて見る」

「なら、飲むのやめようよ。買ったの市場のちゃんとした店からじゃなくて、隅に立ってた人からだし。これ以上コースケさんの体調、悪くなったら」

そう言ったサラの言葉を遮り、幸助は口を開く。

「ありがとう、サラ。でも大丈夫そんな気がする」

今までどんな薬でも駄目だったのだ。自然治癒に任せていたらいつ治るのかも分からない。それにこの薬は大丈夫だと本能が告げている。だから幸助は水を受け取ると、その薬を飲み下す。

翌朝。

今までの症状が嘘だったかのように、幸助は全快していた。

「よかったあ。コースケさん、元気になって！」

「ありがとう、サラ。それにしてもこの薬、ほんと凄いなあ」

幸助は残った丸薬を手に取りながら、感慨深く言葉を漏らした。ここまで劇的に回復できたのは、間違いなくこの薬のおかげだ。鼻の通りもよくなったし、喉もいたくない。熱によりぼーっとしていた頭も、今日はスッキリ爽快だ。

「もう、お母さんとか友達から教えてもらった薬の煎じ方もやり尽くしちゃってたし……。ずっと。ずっと心配してたんだから……」

そんな言葉をつぶやいたサラを、幸助は見る。その蒼い瞳はうつすらと潤んでいた。

「サラ、ありがとう」

回復したのは、サラが必死になって薬を探してきてくれたおかげだ。幸助はサラの頬に手を添えると、雫になった涙を親指でそっと拭く。



幸助の風邪をなんとかしてあげたい。そんなサラの想いは強かった。だからこそこの薬を引き寄せることができたのだろう。幸助はサラをそつと抱き寄せると、頭をポンポンとする。

「えへへ……」

二人は久しぶりに、ゆったりとした朝のひと時を過ごすのだった。とはいえ残念ながら、その甘い時間を長く取ることはいできない。

「さて、と」

体調がよくなったらやることは一つ。それは、たまりにたまった仕事を片付けることだ。幸助は全国に勢力を拡大しつつある魔道具店の顧問のほか、多くの店の手伝いをしている。一週間以上にわたる風邪のせいで、その仕事に大きな遅れが出ていた。

その遅れを取り戻さなければならぬ。しかしその前に幸助にはどうしてもしたいことがあった。それは、まともな食事をとることだ。

「元気になったことだし、お昼は久しぶりにアロルドさんの店で食べようか？」

「病み上がりに大丈夫？」

「うん。この調子だったら大丈夫だよ。それに頑張ってくれたサラにも、ちよつとは楽しんでもらいたいしね」

朝食は念のため胃に優しいスープだけにしていた。ここ最近ずっと食べてきたものだ。消化のよさそうな具材がクタクタになるまで煮込まれており、それはそれで美味しい。

サラはずっと幸助の看病をしてくれていた。治療方法探しに奔走してくれた。そんなサラの疲労は相当なものだろう。サラも父アロルドに似て、料理にはこだわりを持つようになってきた。このままだときつと張り切って料理をするだろう。そうなたらまたしても負担をかけてしまう。だからこそその外食だ。

「そっか。ならそうしょ！ お父さんも心配してたしね」

午前のひと仕事を終えると、幸助とサラは昼食のため、家を出る。久しぶりに行くアロルドの Pasta 亭は、通りから見ても繁盛しているのが一目で分かった。

以前のように意識の高いお洒落な店構えではなく、窓が大きくとられているため、中がよく見える。ランチには少し早い時間にもかかわらず、客席は満席だ。

ランチメニューは、トマトバジルパスタを始め、カルボナーラやペペロンチーノなど、幸助が食べたかったメニューは一通り揃っている。幸助があまり関わらなくなっただけからは、アロルドが知恵を絞って細かな改善を続けている。その結果がこれだ。

「お、コースケ。もう体調は大丈夫なのか？」

二人の来店に気づいたアロルドが、カウンター越しに厨房から声をかける。

「はい。サラがいい薬を見つけてくれたおかげで、無事、よくなり

ました」

「そりゃ良かった。で、今日は飯食いに来たのか？」

「もちろんです。トマトバジルパスタとレッドボアのステーキをセツトで」

幸助はランチメニューの中でも一番ガッツリしたものを選択する。一週間以上食べられなかったため、どうしても食べたかったものだ。

「ちょ、お前。病み上がりになんかそんなもん食うのか？」

「もう完治して絶好調ですから、問題ないですよ」

「お父さん、私はカルボナーラね！」

「お、おう……」

そう伝えると二人はちょうど今、空いたばかりの席へ座る。場所は店の一番奥。実はこの席、以前は存在しなかった場所だ。増え続ける来店客に対応するため、半年前に裏庭だった部分へ増築したのだ。

比例して増えた注文量に対応するため、今では見習いは三人もいる。味が評判のため、こうした見習い希望者も少なくないという。

「はい。サラはカルボナーラでよかったよね。で、コースケ君のはこれ」

サラの母であるミレーヌが、大きなお盆を手に料理を運んできた。鉄板の上には、手のひらサイズで厚さが二センチはあるだろう厚切りの肉塊が鎮座していた。ランチセットで出すサイズではない。どうやらアロルドは快気祝いがてら、肉を増量してくれたようだ。

別の皿には、サラダとトマトバジルパスタもある。それにコンソ

メ風のスープも以前と変わらずある。すべてを合わせると相当なボリュームだ。

「コースケさん。その量、大丈夫」

「う、うん。きつと大丈夫……だと思う」

幸助は少しだけ弱気になりつつも、未だにジュウジュウと音を立てているステーキを切り分けると、たっぷりのソースを絡め口へ放り込む。

硬めの表面を破り噛み締めれば、中からあふれんばかりの旨味汁がほとばしる。熱にうなされていた時、夢にまで見た味だ。

「ほえ、ほえあよ！」

「飲み込んでからしゃべろうね」

幸助はしっかりとその甘くもパンチのある肉の旨味を噛み締め、ごくりと飲み込む。

「これ、これだよ！」

それから幸助の手は止まらない。サラダにトマトバジルパスタ。それは相変わらずの絶品具合であった。

「よかった。本当に良くなって」

サラはそんな幸助の姿をニコニコしながら見つつ、自分のランチを食べるのだった。

「うう、満腹だ……」

やはり、病み上がりにはセットメニュー、しかもオマケつきは重すぎたようだ。幸助は、家に帰ってからも続く満腹感と戦っていた。

「はい、コースケさん、どうぞ」

「これは？」

「お腹に優しい薬草茶だよ」

カップの中には茶色いお茶が入っていた。一口飲んでみれば、それは麦茶のような味わいだった。きっと胃にも優しいのだろう。

「ありがとう、サラ」

満腹感と温かいお茶、それに午後の陽気が作用し、幸助を眠気が襲う。しかし、ここで昼寝する訳はいかない。幸助は仕事をする英気を養うために、食事に行ったのだ。

「さて、仕事しないとな」

そう言った時だった。

コンコンコンと、玄関がノックされる音が聞こえてきた。

「誰かなあ？」

「僕、見てくるよ」

小窓から外を覗いてみれば、若い女性の姿がそこにはあった。ドアを開けると、女性の全身があらわになる。

肩まで伸びたまつすぐに濃紺の髪。そして軽く吊り上がった目に、吸い込まれそうになる深緑の瞳。年の頃はサラと同じく十七歳くらいだろうか。しかし、年頃の女の子らしいお洒落はしておらず、飾り気のないくたびれた白い服を着ている。

「どんなご用でしょうか？」

「あなたがコースケ？」

「そうですか……」

「お姉ちゃんの店を……私たちの店をなんとかしてほしいの！」

用件は、経営改善の依頼だった。状況次第では、いつもの通り断ろう。幸助はそう考えつつ女性へ質問する。

「どんなお店を営んでるんですか？」

そんな幸助の質問に、女性はこう答えた。

「薬屋よ」

### 3・領民の薬店離れが深刻です（前書き）

ビジネス×ラノベな新作「個人商店の利益を上げるIT活用術」好評発売中です。  
詳しくはこのページ下部にて！

### 3・領民の薬店離れが深刻です

「どんなお店を営んでるんですか？」

「薬屋よ」

突然幸助の家へ訪れた若い女性は、自らを薬屋と言った。業種で人を判断してはいけないことは重々承知の上だが、それでも幸助は残念な気分にならざるを得なかった。

「薬屋、ですか……」

この街の薬屋は信頼できない。頼りがいのある薬屋が一店舗でもあれば、サラは東奔西走する必要はなかったのだ。例の薬が当たり前のように売っていれば、幸助は長期間苦しむこともなく、風邪はすぐに治った可能性が高かったのだ。

たとえこの女性が薬屋ではなかったとしても、幸助は今抱えている仕事だけで十二分な収入がある。そしてそれら仕事は極めて忙しい。よほどのことがない限り仕事を受ける時間的余裕はない。

「薬屋だと、なにかダメなことでもあるの……？」

大いにある。サラが言うにはこの街にある五店舗の薬は、価格も品質も横並びだと言っていた。これは目の前にいる女性の店だけの問題ではなく、業界全体の問題だ。

店が信頼できないこと、それに、幸助の家によく訪れている男の件もある。例の甘い投資話を持ち掛けている男だ。もしその関



係者であれば、すぐにでもお引き取り願おう。そう考え幸助は質問する。

「もしかして、メデイスさんの娘さんとか従業員だったりしますか？」

「えっ？　なんで私があんな使えない薬師の関係者にならなきゃいけないのよ」

女性はそう即答した。様子からして、関係者ではなさそうだ。

「ちょっと気になって聞いただけです」

「ねえお願い！　お姉ちゃんの作る薬は、メデイスとかその辺のダメ薬師が作る薬とは違うの！　話だけでも聞いてよ！」

女性の真剣さに、幸助はどうしたものかと悩む。性格上、こうして真剣に依頼されると、どうしても断りにくくなるのだ。そして話を聞いてしまったらもう最後。高い確率で依頼を受けてしまうことになる。しかし、多忙な現状がそれを許さない。

仕事を請けたはいいが、時間が取れずに改善に失敗でもしてしまったものなら、申し開きができなくなる。コンサルティングは、一歩間違えば相手の人生を壊してしまう可能性だってある。そういう面でも、無責任に請けることはできなかった。

「うーん、そうですね……………ん？」

幸助が考えていたところ背後に人の気配を感じる。

「サラ」

振り返ってみれば、そこにはサラがいた。なかなか戻ってこない幸助を心配したのだろう。そんなサラは幸助へ一瞬視線を向け、それから幸助越しに女性の姿を見ると

「あつ！ あなたは！！」

目を大きく開き、その声を上げた。

「どうしたの、サラ？」

「コースケさん。こないだの薬、この方から買ったの」「えっ！？」

幸助は再び振り返ると、玄関前にいる女性の姿を見る。女性もサラのことを覚えていたようで、その蒼い瞳をパチクリとさせていた。

そうと分かれば話は違う。この女性がいなければ、幸助は死ぬことはなかったにしても、今もベッドの中で伏せていなければならなかった可能性が高い。恩人と言っても過言ではない。

「彼女　サラが買った薬、実は僕が飲んだんです」

幸助は女性へ向きなおすと、そう言った。女性は食いつくように幸助へ一歩近づくと、幸助の目をじつと見る。

「……それで、どうだったの？」

「見ての通り、嘘みたいに体調が回復しました」「なら！」

幸助は右手で家の奥へ招くポーズをとる。

「ぜひ、お話を聞かせてください」

「さすが街で噂のコースケ、すごい家に住んでるねえ」

客間に通された、アリスと名乗った女性は思わずそう声を漏らした。

「頂き物なんですけどね。僕たちにはもったいないくらいですよ。ほとんどの部屋を使わずに持て余してるくらいですから」

「羨ましいなあ。一度でいいからこんな家、住んでみたいな」

そんな話をしているとサラが普通の紅茶を淹れて、やって来た。それぞれの前にカップを置くと、幸助の隣へ腰かける。

「それで、お店はどんな状況なんですか？」

紅茶を一口飲み、ふう、と一息つくと、アリスは話を始める。

「コースケもこの街での薬店のイメージ、知ってるでしょ？」

「サラから聞いた範囲では、『薬店の薬は効かない』。そんなイメージが蔓延（じまん）っているってところですよ」

「そうそう。それで間違いないよ」

「でも、どうしてそんなことに？ あと、アリスさんから買った薬は、すごく効きましたよ？ こんな薬なら誰もが買ってくれるんじゃないですか？」

矢継ぎ早に繰り返された幸助からの質問に苦笑するアリス。一般的な薬店のイメージと、目の前にいるアリスが扱う薬との乖離が激

しいのだから、気になることはたくさんある。

「え、えっとね。そもそも問題は薬店組合にあるの」

商業ギルドには、それぞれ業種により数多くの下部組織が存在している。薬店組合もその一つだ。以前幸助が経営改善に関わった、ウイルゴが加盟した造船組合も同様となる。

ウイルゴの店の場合、組合に加盟することで様々な恩恵に与ることができ、業績が改善した。薬店組合はどういった場所なのであるうか。

「あそこはね、『共存共栄』を謳<sup>うた</sup>ってるの」

共存共栄。言葉だけを聞けば、とてもいい標榜だ。

「でもね、それは同時に抜け駆けは許さないってことを意味してるの。うちの薬は他とは違ったでしょ」

「ならアリスさんの店は領内にある五店舗とは」

「違う店よ。組合に加盟してないから材料の入手もしくいし、薬店の看板を掲げることも禁止されてるの。それに他の店があだから、みんなの薬離れが進んじゃってるんだよ。だからお姉ちゃんの作る薬はすごいのに、買ってくれる人は身近な人しかいないって訳」  
「なるほどね……」

ようやく合点がいった。効果はすごいのに、街で有名になっていない理由はそんなところにあった。組合に加盟せず細々とやっているからこそ、知る人ぞ知る状況だったという訳だ。

「あと、お姉ちゃんにもちよつと問題があるんだけど……それは会

「つてからでないと説明が難しい、かな……」  
「そうですか」

姉が薬を作っているということは、立派な職人だ。鍛冶屋のホルガ 同様に無口だったり、魔道具店のニーナのようにマッドな可能性もある。いずれにしても、あれだけの薬が作れるのだから、多少の癖はあってもおかしくない。

「ねえ、請けてくれるよね？ もし、請けてくれるなら、こ、これ……お姉ちゃんが……」

アリスはポケットから、小さな紙に包まれたなにかを取り出した。

「これは？」  
「いいから受け取って」

包みからも緑色の魔力が染み出しているのが分かる。以前同様、魔力入りの薬ということは間違いなさそうだ。

「これ、どんな薬ですか？」  
「み、見たらわかるでしょ」

そう言つと下を向くアリス。心なしかその頬はピンクに色づいている。

しかし、包みを開けてみても赤紫っぽい丸薬があるだけで、どんな薬かまでは分からなかった。

「いや、薬は素人なので……」  
「もう……。これはレッドボアの肝臓と地竜のアレを煮詰めて七種の薬草を混ぜた薬よ！」

アリスの態度は「これだけ言えば分かるでしょ」と言わんばかりだった。しかし残念なことに幸助は異世界人。分からないものは分からない。横を見てみれば、サラは黙って首を左右に振る。幸助同様、知らないようだ。だから幸助は改めて聞き直す。

「これ、どんな薬ですか？」

「だから、せい」……………

消えるような音量でそう言ったアリス。残念ながらその声は幸助へ届かなかった。

「もう少し大きな声でいいですか？」

「だ、だから……………」

「だから？」

アリスはグツとこぶしを握ると幸助を睨むように見て、こう言った。

「精力増強剤って言うてるでしょ！ 何度言わせるの！！！」

ほんのりピンク色に染まっていた顔が、一瞬で茹でダコのようになった。隣を見てみれば、サラも似たような状況に陥っていた。一瞬だけ幸助と目を合わせると、すぐに下を向いてしまった。

「……………」

「……………」

気まずい空気が部屋に流れる。

女性に言わせるような言葉ではなかった。しかも大声で。

いや、薬屋で普段から触れているから平気なのか？ いやとても  
そうには見えない。

いずれにしても、この空気はまずい。

「え、えつと……。それでも今までは経営できてたんですよね？  
なにか悪くなる決定的なきっかけがあつたんですか？」

精力剤のことは棚上げ、いや、机の片隅に追いやり、幸助はあか  
らさまに話題をそらす作戦に出た。

「あ、うん……」

事情はこうだった。アリスの店は領内南部にあるスラム街の近く。  
その日の暮らして精いっぱいな人が多い場所に構えていた。そんな  
エリアの人たちだから、薬代までなかなか金が回らない。しかし姉  
は、困っている人を見ると見捨てることができず、ついつい薬を捨  
て値で売ってしまうことも多いそうだ。

先の話の通り、定価で購入してくれるのは一部の知り合いのみ。  
集客をしようにも組合が原因で、大々的に宣伝することもできない。

それでもやっつけていけたのは、王都に出ている両親からの仕送りが  
あつたからだそう。しかし諸事情で仕送りが途絶えてしまった。こ  
れが経営が行き詰った原因ということだ。いや、仕送りで生活して  
いたのだから、そもそも経営は成り立っていなかったともいえる。

今回の依頼は、ここ最近のバカげた依頼とは質が違つ。しかし、  
どうやったら改善することができるのだろうか。

できることなら貧しい人への対応はそのままにしつつ、店が繁盛

する方法を模索した方がいいのだろうか。いや、貧困層の救済は領主の仕事ではないだろうか。それなら組合を攻略した方がいいのだろうか。様々な考えが幸助の頭をめぐる……。

「それで、どうなの……？」

アリスが不安げな表情で幸助の様子を見守っている。

改善への道筋は今のところまったく見えない。それに請けるとしたら、時間のやりくりだって工夫が必要だ。もしかしたら難しい案件になるかもしれない。

それでも、アリスの店が扱う薬の性能はこの身で体感している。

こんな良薬が埋もれてしまうのは、国にとっても大きな損失だ。だからこの仕事は請けるべき仕事だ。幸助はそう考えた。

「アリスさん」

「なに？」

グッとこぶしを握った幸助は、アリスに向かって宣言する。

「あなたのお店、僕が流行らせてみせます！」



#### 4・聖女イリス(前書き)

ツイッター始めました。

@yukiyahatamoto

よろしければフォローしてください。

#### 4・聖女イリス

アリスの店の経営を改善すると宣言した幸助。気持ちはすぐにも改善に向けて動きたいばかりだったが、病気明けで仕事が溜まっていたためすぐに動くことはできなかった。

それでも、その仕事を通して薬店界隈の情報は積極的に集めていた。領主令嬢であるアンナに話を聞いた時のことだ。

「コースケさん、もうお体はよろしいのですか？」

領主の館にて。質素だけれど、仕立てが良く品のあるワンピースに身を包んだアンナがそう尋ねた。

「はい。おかげさまでもうバッチリです」

「よかったです。お元氣になられて」

そう言っただけアンナは、白い可憐な花のような笑顔を浮かべる。「ありがとうございます」と返した幸助は、思わず鼻の下を伸ばしそうになる。幸助の反応はさておき、この笑顔は人を癒す力を持っている。だからこそアンナは、領民からも絶大な支持を受けているのだ。

「ところでアンナさん……」

「どうされました？」

「アンナさんや領主様は風邪をひいた時、どうやって治療しています？」

「皆さんと同じく、薬を飲んでます」

「その薬って、よく効きますか？」

「もちろん薬ですから、その時の体の状況によっては効くときと効かないときはありますが……？」

なぜここで聞くのか、と不思議そうな表情をしているアンナに、幸助は自分が体験した経緯を説明する。市販の薬が効かなかったことから、恐ろしい効果を発揮した薬に出合ったことまでだ。

「ですので、市場にはちゃんと効く薬があるのかなあと考えています」

幸助の話を聞くと合点がいったのか、アンナは「そういうことでしたか」と言うと、更に言葉を続ける。

「もしかしたら今回は、コースケさんに合う薬がなかなか見つからなかったのかもしれませんが。最後に飲んだ薬が効いたとのことですが、ちょうど体に合うものが見つかったのか、既に回復すべきタイミングに来ていたのだと思います」

「そうですね……」

確かにアンナの言葉にも一理ある。あれだけ多くの薬を試したのだ。どれかが遅効性のものだった可能性だってある。ただ、それを考えた上でもアリスの薬は違っていたと幸助は感じている。

「ちなみに薬はどうやって選んでますか？」

「屋敷には常に薬が置いてありますので、薬の知識がある執事などが症状に合わせて選んでくれます。ただ、どうしても症状が分からないという時は、薬師さんに来ていただくこともあります」

「ちなみにその薬師さんって」

「メデイスさんです。お父様からは領内でいちばんの腕利きだ

と伺っておりますので」

ここでも登場したメデイスという名前に、幸助の眉はピクリと動く。メデイスといえば懲りもせず何度も幸助へ甘い出資話を持ち込んでいた。メデイスはなにを企んでいるのか、今のところ分からない。

今まで幸助が集めた情報によると、メデイスの店も含めて領内の薬店の品質は横並びだ。しかも低いランクでの横並びだ。それならば領主に納める薬のみ高品質にしているのだろうか。そして領主は領内の薬事情を知っているのだろうか。

領主は重度の魔道具オタクにつき、政務が疎かになることが多々ある。以前も、騎士の武器の調達に関してひと悶着があった。領内の薬事情についても似たような状況に陥っていないだろうか。そう思った幸助であった。

そして今日。幸助は魔道具店で仕事をしている。

残念ながら魔道具店を統括する立場であるニーナからは、薬に関する情報は引き出すことはできなかった。というのも、ニーナは普段から徹夜どころか三徹が当たり前という生活をしている。それで不健康になり易いのかと思いきや、それとは無縁の鋼の体を持っているらしい。

確かにニーナが伏せているところを見たことがない。ときおりハイになり「フハハハハハ！」と雄たけびを上げていることはあるが……。

「よし、終わった!」

新しい魔道具のデザイン、いや、落書きを終えたところで幸助は羽ペンを置く。

今日は、馬がいなくても動く馬車　自動車の設計図を書いていた。日本で見せたら笑われるレベルのお絵描きのようなものだが、幸助はただ記憶を掘り起こすだけだからこれでいい。製品化にあたっては、ニーナがちゃんと考えて本物の設計をしてくれる。

「さて、と。キリも付きましたので、ニーナさん、僕はこれで失礼しますね」

「フフツ、今日は早すぎないかい？」

「すみません……ちょっと別な仕事ができちゃったんですよ」

つれないねえとニーナは冗談めかして言った。魔道具店に来るのは病気が明けて初めてだ。だから幸助のアイデアを心待ちにしていたニーナとしては、まだまだ物足りなかったようだ。とはいえ、幸助は遅れをしっかりと取り戻していた。だからニーナは強く引き留めることはなかった。

「はい、これが今日の図面です」

「確かに受け取ったよ。それならまた次回ね。フフツ、コースケのアイデアがあればこの先三日、いや、十日は……フフツフフフハハ!」

どうやら新たな情報に出会うことができ、脳内にアドレナリンが放出され始めたようだ。そんな怪しげな笑いを零すニーナに見送られ、幸助は魔道具店を後にする。

「よし。これでようやく時間が作れたぞ」

時刻はまだ昼過ぎだ。日本の秋と似たカラツとした過ごしやすい空気の中、幸助はひとり呟いた。そして新しい依頼者であるアリスの店へ向かう。メインストリートを南へ走る辻馬車を降りると、そこからわき道に入りさらに歩く。

「こんなところに店、あるのかなあ」

魔道具店を出てから一時間以上が経過した。店が近づくにつれ、街の景色にも変化が出てくる。石造りの建物が整然と並んでいた通り沿いとは違い、幸助の目の前には今、雑多という言葉が似合う街並みが広がっている。

石造りの三階建ての建物の上に、更に四階、五階部分が木造で増築されていたり、道路へはみ出すようにゴチャゴチャと物が溢れていたりとといった具合だ。そしてときおり散らばっている生ごみや、それに群がる猫や黒いカラスのような鳥。お世辞にも「良い街」とはいいがたい雰囲気醸し出している。

「分かんないなあ……」

幸助はそんな慣れない土地で、迷子になってしまった。あるのは家ばかりで、店舗らしき建物がまったく見つからないからだ。仕方なしに幸助は、家の外で洗い物をしていた人に声をかける。

「あ、あの……」

「あん？ なんだい」

しゃがんだまま顔を上げた、浅黒いおばちゃんの視線はきつかった。

「え、えっと……このあたりにアリスさんの店があると聞いたんですけど」

「あんだ、どこの者だい？ 小綺麗にしちゃってからに」

完全に怪しまれているようだ。

「いちど市場でアリスさんから薬を買ったんですが、店はこのあたりにあるって聞きました……」

「なんだい。客かい。聖女さんの店なら三軒隣のそこだよ」

「聖女……さん？」

「ああ、もちろん本物の聖女様じゃないよ？ でも本物よりよっぽどウチらには聖女っぽいからね」

教会関係者にも聞かれたらまずいとばかり、声を潜めてそう言った女性。幸助は結婚するまで全くと言っていいほど宗教と関わってこなかったが、この国にもそれなりに宗教は根付いている。

「あそこはイリスちゃんとアリスちゃんの二人でやっとなる。んでよく効く薬を作ってる聖女さんがアリス……いや、イリスか？ あれ、どちらだったかの？ まあ、いい。とにかく店はそこだよ」

わっはっはと盛大に笑うおばちゃんに礼を告げると、幸助は指定された三軒隣のドアをたたく。見たところここも店ではなく、どこからどう見てもただの家のように見える。

「すみません！」

少し間をおいてドアが開く。出てきたのは見覚えのある顔、アリスだった。

「あ、コースケ！ 来てくれたんだね」

「お待たせしました。ようやく時間ができましたので」

「忙しいの知ってたから、いいつてこと。さ、狭いけど入って！」

アリスに促され、幸助は店に入る。その瞬間、言葉では表せないようなおいが幸助の鼻をつく。草のような、腐った魚のような、それでいて時おり花のような香りも感じる。きつと薬の原材料なのだろう。実に様々な匂いが混ざり合っている。

「お姉ちゃん！ コースケさん、来てくれたよ！」

そんな玄関を入ってすぐの空間は、店ではなく小ぢんまりとしたダイニングになっていた。幸助はその椅子の一つにかける。

近所の人から聖女と呼ばれる女性、イリス。果たしてどんな人なのだろうか。あれだけの薬が作れる人なのだから、聖女という別称もおかしくはない。幸助は久しぶりにワクワク感を覚える。それから程なく。

「あら、あなたがコースケ？」

幸助は程なく現れた女性へ視線を送る。濃紺の髪に、吸い込まれそうな深緑の瞳。アリスと実によく似ている。ただ、アリスが少しだけ吊り上がって気の強そうな目をしているのに対し、イリスは軽く垂れたおっとりとした目をしている。

「イリスさん、ですか？」



「うふふ、正解。わたしがイリスよ」

そう言って幸助の正面にかけるイリス。

「で、どうだったのかしら？ お薬の効き目」

イリスは世間話はしないタイプのようだ。幸助は素直に感じたままのことを答える。

「それはもう、ばつちりでしたよ」

「うふふ……でしょ。で、どんな気持ちだった？」

「気持ちですか？ そうですね……」

幸助は当日のことを思い出す。夜まで高熱が続いており、翌朝にはすつきりと全快していた。

「えっと、夜はずっと熱かったんですが、朝には元気になってましたよ」

「あら？ 夜が熱いのはあたりまえだけど、朝まで元気だなんて、やっぱり新婚さんはいいわねえ」

わざとらしく口に手を当てて、「驚いた」という表情を作るイリス。それに対して、ポカンとした表情を浮かべているのは幸助だ。イリスの隣でイリスはふるふると震えている。どうも話がかみ合っていない気がする。

「えっと、なんのこと、話してますか？」

「なにいつてるのよ。もちろん精力増強剤のことに決まってるじゃない」

やはり会話はずれていた。

「もう、お姉ちゃんったら、会って早々に聞いてるの！」

アリスは幸助と初めて会った日のように、顔を真っ赤にして俯いた。

「……………」

これは大変な仕事になりそうだ。  
幸助は本能でそう感じるのだった。

## 5・急患（前書き）

前回までのあらすじ

領内の薬店は粗悪品ばかりを売っている。

よく効く薬を売っているイリスとアリス姉妹の店は閑古鳥。  
薬師のイリス（姉）は個性的。

## 5・急患

幸助は、アリスの姉であり薬師のイリスを目の前にして、頭を抱える。

以前アリスは言っていた。「お姉ちゃんにもちよつと問題があるんだけど……」と。その時幸助は、職人特有の寡黙さや頑固さについてのことを言っているのだと思っていた。そういつたことなら過去にも武器屋のホルガ や魔道具店の二ーナの店を改善してきたから、癖のある職人への対応は全然問題ない。

しかし、その考えは間違いだと判明した。

アリスが言っていたことは、このことだったのだ。対面早々に幸助の夫婦生活に踏み込むことのできる、この強い個性のことを。もしかして……イリスは天然なのだろうか。

いや、そう決めつけるのは早すぎる。絶対的に自信のある薬だからこそ効果を確かめたい。その職人魂から飛び出した言葉という可能性だつてある。はたまた開発途中の薬で、幸助が実験台になった可能性もなきにしもあらずだ。それなら尚更、効果を確かめたいに違いない。

幸助は正面に座っているイリスへ視線を向ける。

うつとりとした目、血色の良い頬、そしてうつすらと浮かんでいる笑み。サイズの合わないブカブカの服からは白磁のような白い右肩がこぼれている。そしてその下へ……吸い込まれそうになった視線を無理やり顔へと戻す。

「もう、コースケつたら焦らさないで。地竜の生殖器なんて材料、滅多に手に入らないんだから。早くおしえて。ね？」

契約金代わりに手渡された薬は、貴重なものだったようだ。そして、とんでもない材料が含まれていた。そしてイリスはやはり効果について知りたくて仕方ないようだ。

しかし幸助は、その返答に困る。理由は様々だが、とにかく困っているのだ。

そんな幸助の困惑をよそに、イリスは両手を胸の前で合わせながら幸助の言葉を待っている。その姿からは、経営に困っている焦りなどはまるで感じられない。だからこそアリスが幸助の門をたたいたのだらう。

そんなアリスと幸助は約束をした。店を流行らせてみせると。

今まで幸助が改善してきた店と同様、イリスの作る薬にも商品力はある。イリスが作った薬で幸助の風邪が治ったのは事実だ。それ以外の薬でも効果は確かめられた。

それにアリスという販売スタッフもいる。経営改善できる要素はしっかりと揃っているのだ。だから幸助はあからさまに話題をそらし、本題へと切り込むことにする。

「え、えつと……イリスさん。僕の個人的な感想は別な機会にして……。お店の方なんですけど、イリスさんの作る薬で生計を立てられるようにしたいんですよね？」

イリスは「つまんない」という表情をしつつも、返事をする。

「そうよ？ コースケも感じてくれたこの薬、売れるわよね？ 売れないって言われてもわたし、薬作ること以外、なんにもできないから」

「はい……間違いなく売れると思います。ですが……………」

「なあに？」

イリスはしつとりとした瞳で幸助を見つめる。

「今のところ二人が食べていけるようになれるかは、分かりません」

「あー、残念」

全然残念ではなさそうな表情をしながら、イリスはそう言った。

「ですからそれを可能にするため、今からいろいろお話を聞かせてください」

それから幸助は二人へ現状の聞き取りを行った。それは、原材料の価格から現在の売価、そしてイリスの製造可能な量、過去の販売実績、薬の種類や効果効能など多岐に渡る。

そこで判明したこと。それは、組合に入っていないが故の仕入れ価格の高さと、売上の少なさだ。近所での販売は、購入者層の収入に合わせて安くせざるを得ず、まったく利益が出ていない。現在得ている利益のほとんどは、サラが購入したようにアリスの足による移動販売で稼いでいた。それも雀の涙だ。

その反面、やはりイリスは薬の知識が突き抜けていた。どの薬草のどんな成分がこういった症状に効くなどという事例は、辞書のように溢れてきた。まだ若いのにそんな知識をどこで身に付けたのか

と聞けば、先祖代々伝わっているとこのことだった。

合わせて薬に含まれる魔力のことについても聞いてみたのだが、それについては本人は全く把握していなかった。「コースケの気のせいじゃない？」とはアリスの言葉だ。

「ありがとうございます。現状はおおよそ把握できました」「それで……何とかかなりそうなの、コースケ？」

かぶりつくようにアリスがそう尋ねた。

「なにはともあれ、材料を高く買って安く売っている状況をなんとかしないとけません。だから色々問題はあっても、まずは薬師組合に相談するのがいいんじゃないでしょうか」

「ダメだよ！ そんなの！」

すかさず言葉をつっ込んだのはアリスだ。

「隣町にウイルゴさんっていう造船工房があったんですが、そこは組合に加盟することで窮状を脱出しましたよ」

「そうかもしれないが……アイツらは儲けることしか考えてない。客のことなんて二の次なんだよ。コースケもそれは理解してるでしょ？」

確かに、技術や経営者を守るためという建前のもと、この世界のギルドは発展を拒絶している節もある。ウイルゴのように出る杭は打たれるし、イリスのように足並みを崩しそうな人間には門扉を開いてくれない。

「でも、そうすれば市場に出店することもできます。この場所では

適正な価格で買ってくれるお客さん、集められないですよ」

「それでもダメ！ 絶対に。ギルドなんかに加盟したら、効かない薬しか売っちゃダメになるんだよ」

アリスは頑として譲らなかつた。仕方なく幸助は、姉であるイリスへ視線を切り替える。

「イリスさんはどう思いますか？」

「わたしはねえ……………」

首を傾げて宙を眺めながらじっと考え込むイリス。  
なにを考えているのだろうか。

「コースケの感想が聞きたいな。精力増強剤の」

「……………」

振り出しに戻さんばかりのイリスの言葉に幸助は固まる。

「あ、あれだよ。コースケ。お姉ちゃんは、組合になんて頼らなくても、薬師を続けながら毎日のご飯に不自由しなかつたらそれでいいって言ってるんだよ。ね、お姉ちゃん！」

「あら。そんなこと言ったかし」

「言ってた、言ってた！」

アリスがイリスの言葉を遮るように大きな声を上げる。

「……………」

再び幸助は頭を抱える。そして心の中で大きなため息をつく。なんでこの仕事を請けてしまったのだろうか。



一応幸助は、ここに来るまでにいくつかプランを考えていた。組合へ加入し、表通りに店を出す。これは費用が必要になるから開店費用は出世払いで幸助が持つつもりでいた。組合に加盟する以上、品質は横並びにしなければならぬだろう。それなら簡単ではないかもしれないが、組合員すべての店の品質を上げるという手もある。全体的に品質が上がれば薬店の地位も上がるだろうし、領民のためにもなる。

他のプランとしては、イリスはメーカーとして専念し、既存の薬店や行商人へ卸すというのも考えた。これなら立地の不利はさほど問題にならない。

しかし今の状況だと、これらの案はすべて没になりそうだ。アリスは頑固だし、イリスはそもそも話にならない。

もうこなったら手っ取り早く、領主へ売りつけてこの仕事は終わりにしてしまった方がいいのではないか。精力増強剤なんて、貴族連中には受けそうな商品だ。彼らは後継者を生む義務があるため、遊びたいという「ウォンツ」だけではなく、必要性に駆られて購入する「ニーズ」もある。しかも、領内の薬店にはそんな類の商品は置いていない。これこそライバルのいないブルーオーシャンな商品だ。

今日はもう切り上げていちど領主に相談して仕切り直そう。  
幸助が思ったその時

ガンガン！

玄関のドアが激しく叩かれる音が小さな部屋に響いた。玄関から

いちばん近くにいたイリスがドアを開けると、そこには小学低学年くらいの小さな男の子が立っていた。

「あらあら、慌ててしまつて。どうしたのかしら？」

走つて来たのだろう。少年は胸に手を当てて息を整えている。

「うちの母ちゃんが！ 母ちゃんが……」

「お母さんがどうされたのかしら？」

「いきなり倒れたんだ！ 苦しいつて言ってるの……！」

その瞬間、おっとりしたイリスの表情が一変。鋭い目つきに変わった。

「お母さんが大変なのね。それは急がなきゃ」

「こつち来て！」

そう言うつや否や、男の子は勢いよく外へと駆けだした。

イリスはポカンとする幸助を横目に、玄関横につるされていたポーチを手にとると、男の子の後を追いついて外へと出て行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n0020co/>

---

かいぜん！ ～異世界コンサル奮闘記～

2017年12月4日09時23分発行